
正道の系譜

ぎやぎやす子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正道の系譜

【Nコード】

N2369BA

【作者名】

ぎやぎやす子

【あらすじ】

実の両親を知らない秋月直樹の紆余曲折半生。

裏世界に入るまで・入って後、恋愛や友情、家族、師弟関係等いろいろ…。

各所に暴力描写が入ります。

フィクションでもノンフィクションでもどちらでもお好みで。

某所で連載していたものを加筆・修正したものです。

正道の系譜

この少年は、この地に引越してきて今日で5日目。
5日前までは東京で暮らしていたが、両親の仕事の都合でこの関西に移り住むことになった。

14歳のこの少年は、身長がすでに180センチほどある。
ちんちくりんの詰襟の学生服を一番上のホックまで留めて、眼鏡を掛ける、ぴっちり横分けのヘアスタイル。
元々の明るい髪は、父の命令で黒く染められている。
日本人離れた、彫の深いその顔立ち。

彼の名前は、秋月直樹。

直樹は東京在住の頃、とても偏差値の高い中学に通っていた。
この度関西に移り住むことになり、多少学校のランクが落ちたような気がしていたが、彼にはさほど問題はない。
強いて言うならば、この賑やかな街が肌に合わないかもしれない。
5日目でそれくらいの判断をする程度。
要するに、完璧なほどにスクエアなステップを踏みしめる直樹には、学校のランクなどそれほど問題ではないということだ。

その日家に帰ると、リビングには珍しく父親がいた。

「ただいま帰りました。お父さん」

「…うむ」

直樹は幼い頃からこの父が「ああ」「うむ」、経営論、教育論以外の言葉を口にしていてところを見たことがない。

この家での直樹の立場。

「お父さん」と呼んだこの父は、実の父親ではない。
同じく母も。

直樹は3歳の頃、この家に貰われてきた。

父親が経営する不動産・建築関係の会社、これを継ぐべくこの家に
やってきたのだ。

義理の父、義理の母というものが本来、養子に対してどのような教
育をするのか直樹は知らない。

しかし彼らを『本当の父と母』、そのように思い、父の跡を継ぐべ
く、両親の財力をフルに活用した教育方針・教育理念の元この家で
過ごしている。

この日は珍しく、父も一緒に夕食の席に着いた。

「直樹、今度の学校はどうだ」

そう問う父に対し、

「何の問題もありません」

そう答える直樹。

父の事情は分かっている。

父の会社は今回、この関西に足場を固めるべく進出した。

部下に任せるのではなく、自らがこの進出に関わるということがど
れだけの社運を賭けてのものなのか。

それを考えれば、賑やかさが合わない、言葉が合わない、学校のラ
ンクが少し落ちた、などということは直樹にとっては本当に、何の
問題もないことなのだ。

母も直樹に言う。

「何か不満があるなら、前の学校に戻ってもいいのよ」

「いえ、大丈夫です。お母さん」

母とする会話はいつもこのようなもので、後付けされるようなものばかり。

それも直樹にとっては、何の問題もない。

お手伝いさんが食事の用意を済ませ、3人で食事をしていると玄関からバタバタと音がした。

「バタンツ！」と勢いよくドアを開けて入ってきたのは、ドロだらけの弟の慶也。

直樹の3つ年下の弟だ。

慶也は、直樹がこの家に来た翌年に生まれた、両親にとっては本当の息子。

彼は関西に来てすぐにリトルリーグに入り、毎日毎日野球の練習に明け暮れている。

勉強の方はというとそれほど悪くはないのだが、父の設けている高さには到底追いつけない位置にいた。

食堂に入ってきた慶也は父を見ると、ハツとして俯いた。

「今日も父はいないものと思っ込んでいたのだから。」

「慶也！お前はいつまでそんな下らんことをやっとなるんだ！？そんな時間があるなら、塾にでも行きなさい。」

「野球みたいなものが、将来身を結ぶと思っっているのか？」

「私の息子がクスでは面目が立たんだぞ！？」

「こっぴつた言葉も、直樹は聞き慣れている。」

しょんぼりと俯いた慶也に母が駆け寄り、
「さ、ごはんがあるから着替えてきなさい」

その遣り取りを横目に、直樹はさっさと食事を済ませ、
「それではお父さん、勉強がありますので失礼します」
「…うむ」

そうして、直樹は2階の自分の部屋へと入っていくのだ。

自室に入ると、直樹にはまずやることがある。

学習机の鍵の掛けられた引き出しを開けて取り出したのは、1冊のノート。

その表紙に書かれているのは、

『正道の系譜』

……僕は本当の両親や祖父、祖母を知らない。
だけど、僕にも間違いなく親はいた。

そこから受け継がれているものが、必ずあるはず。

そう思い、書き始めたこのノート。

日々あったことなどを、書き連ねている。

『お父さん』『お母さん』

この家はとても裕福です。

きつとこれも、お2人から継承された運なんでしょう。

まだ見ぬお2人のため、僕は一步一步駆け上がります。

見ていてください。

そしておじい様、おばあ様にも、見事に成し遂げる僕の成功を自慢してください。
僕はやってみせます。

切欠 1

直樹は知っていると云う。

この世の中はフルイのようになってい、と。

このフルイは下に落ちてはいけないもの。
残ってナンボのもの。

一歩外に出れば、上下左右へとフルイにかけられる。

細すぎれば落ちてしまう。

太りすぎれば潰される。

必ず枠の中に残り、行く末は枠になってみせる、と。

その日も直樹はいつものように、夜中の1時までずっと勉強をしていた。

睡眠時間も大事だと信じている直樹は、必ず6時間は眠るようにしている。

朝7時に起きる彼にとっては、ギリギリの時間。

時計を見、そろそろ寝ようかとベッドに入り掛けたが、その前に水を一杯飲もうと自室を出て台所に向かう。

その途中、父母の寝室から聞こえてきた、声。

「……いいですか、あなた。慶也が本当の息子なんですよ？あの子にはもつと頑張ってもらわなきゃいけないじゃないですか。」

今はのびのびと野球をやらせていますけど、後々はもっと頑張らせます。

だからあの子にも、もっと目を向けてやってください」

「…分かってているが…どうしても要領の良い直樹にばかり目が行ってしまっんだ。

慶也に頑張ってもらわないといかんのは、私も分かっている」

「……………」

直樹がこの会話を耳にしたのは、これが初めてではない。

そして、その度に思う。

……僕が一番、分かっています。

今の慶也は直樹にとってダークホースでしかないが、少しの違いで一番のライバルになる。

……競争だろ。

分かっているよ。

しかし直樹にとって、慶也は本当に可愛い弟でもあるのだ。

直樹はそつとその場を離れ、台所には向かわずに自室へと引き返した。

……何の問題もない。

僕が、頑張り続ければいい。

音を立てないようにドアを閉め、布団に潜り込んで息を潜め、……

そして思い出す。

そういえば前にアレを聞いたときも、なかなか寝付けなかったなあ……。

その夜、直樹は最後に3時過ぎを指した時計を見て、眠りに就いた。

この街に移り住み、もう一月が経とうとしている。

一月もあれば慣れるだろうと思っていた街。

しかしその風に、直樹はまだ吹き晒されたまま。

転校先のこの学校は、さすがに進学校。

授業中は水を打ったような静けさで、教師の声と鉛筆を走らせる音のみが耳に入ってくる。

しかしあの、休憩時間の賑やかさ。

みんなの声のデカさ。

登下校の騒ぎっぷり。

これに、直樹はいまだについて行けずにいるのだ。

ギャーギャーギャーギャーとデカイ声で……

そんなことを思いながら登校している直樹の横を、5〜6人の集団が追い越し、駆け抜けて行く。

「オイッ！何やっとんねん！！早よう来い！」

俺らより教室に入るのが遅かったら、ケツキックやぞ！！」

振り返ると、すぐ後ろから何人分ものカバンを持たされた同じ学校の生徒が、ヒイヒイ言いながら走って来た。それを見て直樹は眉を顰める。

何だ、イジメか？

この学校にもやっぱりあるのか。

…みんな、ヒマでいいね。

こんな時間のロスに付き合わされないようにしないと。こっちで暮らすのも2〜3年の辛抱だろうから。

直樹は標的になっているその彼が、自分のクラスメイトであることも知らない。

他人には全くと言っていいほど興味がないのだ。

と、その時。

直樹の背をバンツ！と叩いて追い越していく人がいた。

「!?!」

驚いて顔を見ると、同じクラスの女子。

名前は、久保紀子。

「秋月くん、おはよう!」

彼女は昨日行われた席替えで、直樹の前の席になった子。

「あ、おはよう……」

そう答えながら、何かと自分に話しかけてくる彼女を直樹は密かに

苦手と思い、要注意人物だと自分のリストに載せている。

教室に入ると、直樹は自分の机の上にカバンが置かれていることに気付いた。

「あー、ゴメン。今どけるね」

そのカバンは紀子のもの。

彼女はまた笑顔で直樹に話しかけてきた。

「ねえねえ秋月くん。『ひょうきん族』 見てる？」

テレビを全く見ない直樹は、紀子が何を言っているのかサツパリ分らない。

…ひょうきん族？

何だ？ 暴走族の一種か？

そんなことを考えている。

「アレ？ひよつとして見てないん？私なんか早々にドリフからひょうきん族に乗り換えたんやでえ。」

ブラックデビルがさんまやない時から、高田純次の時から見てねんで！」

「?????」

直樹は彼女の言葉がサツパリ理解できない。

「…………えつと…………今、人と悪魔と魚が出てきたことは分かった。マンガかな？」

そう聞き返す直樹。

「え〜〜〜〜ツ!! マンガとちゃうよ!

土曜の8時からやってんねんで! 見てみなよ。

マンガって!」

ちよつと考え、紀子は続けて、

「秋月くん、マンガとか見るの?」

「……マンガを見る?」

本屋で置いてあるのを見たことはあるよ」

直樹はこの地方の『見る』『読む』の意味がイマイチつかめていない。

紀子はそんな直樹に、

「あ、そうや!」

と言って、カバンをガサゴソし始めた。

「さっき返ってきたから、コレ貸したげるよ」

直樹の机に置かれたのは『ナイン』というマンガ本。

「コレ全5巻やねん。マンガとか読まへんのやったら、手頃な冊数やろ。」

結構面白いから読んでみて」

「……………」

されるがままの直樹。

え …… そんな時間ねえよ…。

そう思いつつ、言い返せない。

世間はやはり、広い。

そう思った。

切欠 2

直樹はマンガを手に取り、表紙から裏表紙へぐるりと眺めてみた。

マンガなんて、子供の頃に隠れて読んだ『ドラえもん』以来だ……。

そのマンガはどうかやら野球マンガのよう。

直樹は帰り道、本屋で参考書を買ったついでに、『野球入門編』という本も買って見た。

何しろ野球のルールなんて全く知らないのだ。

家に帰ると早速部屋に閉じこもり『野球入門編』を素早く読み、ルールを頭に入れる。

それから、紀子に借りたマンガを読んでみる。

「……………」

そのマンガは、中学まで陸上・柔道のエキスパートだった2人が、高校で野球部に入り、甲子園を目指すという話だった。

最初はナナメ読みくらいにしよう、そう思っていた直樹。

しかし自分でも信じられないくらいに、のめり込む。

ほぼ初めて読むマンガに、夢中になってしまう。

あつと言う間に、一気に5冊全部を読み切ってしまった。

切なくもあるその青春ストーリーに、直樹は今までにない感動を覚えた。

その日の勉強は、終始何となくフワフワとした気分。

直樹はそれを早めに切り上げ、もう一度マンガを全て読んでから、

その日眠りに就いた。

次の日、直樹は朝一番にそのマンガを紀子に返した。

「あ、これ、ありがとう」

「早ッ！ もう読み終わってたん？ 急がんでいいのに。どうやった？ 感想は」

え！ と思う直樹。

「感想文、書いた方がいいの？」

その返事を聞いて、笑い転げる紀子。

何か間違えた、と気付いた直樹は、
くそー……人と接するのには、僕にはちょっと限界があるな……
などと思っている。

「感想文なんかいらさないよ。面白かった？」

「うん、面白かった」

いつになく、大きめの弾んだ声で返事をする。

「私、マンガいっぱい持つてるから、面白いの貸したげるよ」

「あ、ありがとう」

本当にありがたいと思っているが、あまり貸してもらって時間を取られるのも堪らないあと、冷静に思う直樹もいる。

と、その時、紀子はイキナリ立ち上がり、

「秋月くん、ちょっと立ってみて」

直樹は言われるまま、立ち上がった。

紀子はそんな直樹の正面にピタツとくっつくように立ち、自分の頭頂部に手を当てて、

「ねえ秋月くん、身長何センチあるの？」

「えつと……、こないだ測ったときは確か、180だったかな」

「えー！　そんだけ身長あるんやったら、バレー部に入りなよ！」

私の家ってね、その通りの商店街にあるスポーツ用品店やってんねんよ。

親が何か運動せなアカン言うてね。私、バレー部なんやわ。

秋月くんもやりなよ」

直樹はこういう意見に対しては、いつでも意見を持ち合わせている。僕には、娯楽に費やす時間などない。

そう答えようとすると、紀子が続けて言った。

「今日は土曜日だから、2時から体育館で練習してるから。」

一回見においで。

そんだけ身長があつたら、何かやらなアカンよ」

「いや、いや、僕は……」

と言い掛けた時、がらりとドアが開き、担任が教室に入ってきた。

「……………」

断りきれなかった直樹。

自分の席の前に座る紀子をじーっと見ながら、

この子は一体何のためにこんな進学校へ通ってるんだ？

成績の方もさぞかし……

巻き込まれちゃダメだ。

そんなことを考えていると、担任の教師が皆を見回しながら大声を張り上げた。

「こないだの実力テストの結果を配るぞー」

自分が何番なのか、今どの辺りにいるのがちゃんと確認せえよー」

それは直樹が待っていた瞬間。

前の学校では常に1番だった直樹。

この学校での自分がどんなものなのか、早く知りたい。

配られたその用紙には、学年全員の点数のみが表になって高い順に並べられていた。

右上には自分の名前と点数。

生徒たちはこの自分の点数と、表の点数を見比べ、自分の順位を知る。

直樹はまず、表の1番上を見してみる。

そして自分の点数と見比べてみる。

直樹は学年で1番だ。

それを確認した直樹はホツとした。

それから冷静に、2番の点数を見してみる。

しかしその点数を見て、直樹はギョツとした。

自分とたったの5点差で、2番についている人間がいるのだ。

……嘘だろ。

あのテスト、結構難しかったぞ!?

くっそー!どこのどいつだ!?

この学校、侮れねえ。

そんな直樹の耳に、前から同じように「くっそー!」と言う声が聞こえてきた。

その声の持ち主である紀子がバツと振り返り、

「ねえ秋月くん、何番?」

直樹はまだ動揺しつつ、一番だったからまあいいか、と紀子に自分の用紙を見せる。

すると、紀子から信じられない言葉が。

「あ!私を抜いたの秋月くんやね!くっそー!ずっと1番やったのに!!!」

次は負けへんよ!」

そう言っつて紀子はニコツと笑った。

「……………」

……………何言っつてんだ、この子。

そう思いながら、紀子の用紙を奪い取りその点数を見てみると。

「!?!」

『成績の方もさぞかし……………』

つい先ほどそう思った彼女が、自分と5点差で2位につけている。

驚いた直樹は思わずガタツと席を立ち上がり、紀子の顔を凝視してしまっつた。

机上での勝機に危機を感じる前に、

マンガ本をやたらと所有し、クラブ活動までしているこの子が、僕と5点差……………!?!

直樹の心臓はドキドキしている。

直樹はこのドキドキが、自分の戦々恐々とした心境だと思い込んでいるのだ。

そして彼はこの時初めて、紀子が振り返るたびに髪からイイ匂いがすることに気が付いた。

この日は土曜日。

学校の授業は午前中のみ。

直樹の土曜日の昼は本来なら勉強漬け。そしてそうしなければならぬのが直樹のルール。

しかし、この日は昼食を済ませると急いで本屋に駆け込む。

そして購入したのは『バレーボール入門編』

直樹は店を出るとすぐに包装を破り、その場でバレーのルールを頭に入れる。

自分自身、今何をしているのか分かっておらず、そしてそのことに気付いてもない。

気の向くままに身を任せている、それだけ。

その足で向かった先は、紀子に言われた学校の体育館だ。

中からは大きな声やボールの音がひっきりなしに聞こえてくる。

入口からそつと覗いてみるとそこではバスケット部、バレー部、卓球部が練習しているのが見えた。

バレー部の方を見渡し、集団の中に紀子を見つけた直樹はその場に

立ち尽くし、ただただ紀子のことを見つめている。

今話しかけたら、怒られるよな……

そう思い、タイミングを見計らっている。

1時間ほど経った頃、バレー部員たちが休憩に入った。

今だ！と思い、紀子の元へ駆け寄ろうとした直樹は、しかしその視界に入ってきた光景に足を止める。

紀子が男子バレー部員と仲良く談笑しているのが目に入ったから。

「……………」

ここで、直樹はようやくいつもの自分を取り戻した。

……………アレ？

僕は一体何をしているんだろう。

何をしようとしてんだ？

そしておもむろに向きを変え、体育館を後にする。

……………チクシヨウ。

一体何時間ソーンしたんだ！？

クソッ！

やっぱり世間は、やたらと広い！

そう考えつつ、モヤモヤとする自分の心境を振り払うように家へと帰る。

遅ればせながらやってきた、本来の土曜の午後。
机に向かい、己を取り戻したと信じ切っている直樹は、自分が何故
今、不貞腐れているのか分からないまま。

パキン

ポキッ

シャーペンの芯が、やけに折れる。

何でこんなにイライラしてるんだよ？

あー、もう！

教科を変えれば多少気分も変わるだろうと本棚に手を伸ばした時、
背後からノックの音がした。

「はい」

直後部屋の中へ飛び込んできたのは、弟の慶也。

「兄さん！コレ見て、コレ見て！！」

慶也がバツと広げて見せたのは、背番号が付いた野球のユニフォーム。
△。

大きく「5」と書かれた、ユニフォーム。

「兄さん！入ってすぐにレギュラー番号もらっちゃったよ！スゴイ
でしょ！！」

喜び、飛び跳ねるように喋る慶也に、直樹は笑顔で答える。

「おー！スゴイじゃんか！」

そして頭の中を駆け巡らせる。
先日、野球入門の本を読んだばかりだ。

5番ってことは、

- 1、ピッチャー
- 2、キャッチャー
- 3、ファースト

……

「サードだ！サードだろう！？」

そう言った直樹に、慶也は大喜びで

「そう！サード！！」
そう叫ぶ。

「スゲエな。入ってそんなに経ってないのに、もうレギュラーって
頑張ったな！」

すると飛び跳ねるのを止めた慶也は、肩を落として俯いた。

「……でもね、入って間もない僕がレギュラー取っちゃって、前の
レギュラーの高橋くん、怒ってるんじゃないのかな…。
嫌われたらヤダな……」

それに対し、直樹は即座に返事をする。

「いいか、慶也。そんな気持ちでいるのなら、自分からレギュラー
を外してくれって言いなさい。」

野球っていうのは9人でやるスポーツだろう。チームプレーが一番
大事なんだよ。（『野球入門編』で得た知識）

その高橋くんだって、次はきつと慶也より上に行くよう頑張ってく

るんだよ。

慶也がそんなことを考えていたら、必死で競争した高橋くんにも失礼だろう？

胸を張って、堂々と試合に臨みなさい。

今の慶也にできることは、高橋くんを気遣うことじゃない。全力でチームのためにプレーすることだろ？」

直樹の言葉に、慶也はこくと頷いた。

「うん、分かった。

レギュラーになったご褒美に、お母さんがグローブも買ってくれて言っただ。

僕、頑張るよ」

「うん、それが一番だ」

慶也はにこっと笑うと、そのまま部屋を飛び出して行った。

「……………」

今まで慶也に対して、何度かこういうことを言ったことのある直樹。この後、必ず鬱になる。

……………協調性。

それを問われたとき、僕なんかより慶也の方が断然高いレベルで生きている。

僕が言っていることは、全て本で得た知識。

父は直樹に諭すように教え込む。

友など必要ない、と。

…友など、必要ない、と。

しかし直樹は思うのだ。

友人というのは、一生の宝でもあると言いますよ。

……お父さん。

「……………」

こうやって、いつも1時間は頭を抱え込んだまま。

やがてハッと気付いて時計を見ると、すでに時刻は8時前。その針を見て直樹は思い出した。

……そういえば、久保さんが8時からテレビ見ろって言ってたな。

直樹は悩むのを止めて立ち上がり、そっと階下へと降りていく。父がいないことを確認し、リビングに行くと、慶也がすでにテレビの真ん前を陣取っていた。

「アレ？兄さんテレビ見るの？」

「あー、イヤー、ちよつとー……うーん……ちよつとね……………」

要領を得ない答えを返した直樹に、慶也は、

「兄さんも一緒にコレ見ようよ。めちゃくちゃ面白いよ」

テレビの画面を見ると、番組のタイトルが出ている。

『オレたちひょうきん族』

あ、コレだ。

直樹はソファに座り、慶也と一緒にその番組を見始めた。
そしてまず、思ったこと。

……暴走族の一種じゃねーんだな……

直樹の目に飛び込んでくるもの。

大人たちが大勢集まり、馬鹿のフリをしながら水浸しになったり、
粉まみれになったりしている。
そんな様。

初めて見るそうだった番組に度肝を抜かれながら、知らず知らずの
うちに腹を抱えて笑っている。

やっぱり世間は
やたらと

広い！

直樹の持つ軸はへし折れないまま、何かに困われていつているよう
にも見えた。

切欠 3

世の中は自分の思っているものと、何かが違うような気がする。直樹はそんなことを考え始めた。

マンガで読んだあの、ボールを投げて打って走る野球というものを、慶也は仲間と一緒にやってるんだよな。ひよっとして今の僕でも両手を広げて歩いているだけで、向こうから何か引つかかってくるんじゃないか？

楽しいこと。
面白いこと。

アレやコレやと考えながら登校する直樹の背を、今日もバンツ！と叩き、

「秋月くん、おはよう！今日も大きいね！」

そう言いながら駆け抜けていく、紀子。

先日まで要注意人物だった彼女は、今は直樹の注目の的だ。

ちゃんと遊んで、勉強もして、僕とたったの5点差…。

一度、勉強の仕方を聞いてみようかな。

教室に向かいながらそう考え、先日のバレー部の見学を思い出す。

何だか分からないけど、イライラしたな…

何だよ。

朝から起伏に忙しい直樹。

教室に入り、席に着くと、今日は自分から紀子に話しかけてみた。

「あのね、僕テレビ見たよ。『オレたちひょうきん族』」

「あ、ほんま。面白かったやろ？」

「うん、びっくりした」

こんな他愛のない会話をした経験など、今までなかった。

紀子の仕草一つひとつに直樹もつられ、頭を上下させている。朝からとても、忙しい。

この日も何事もなく、直樹は全授業を受け、帰宅の途についた。

しばらく道を行くと、先の公園から数人が直樹のことをじっと見つめている。

それに気付かず前しか見ていない直樹に、その中の1人が、

「ちょっとー、秋月くん」

直樹が顔を向けると、そこには5〜6人の集団＋荷物をたくさん持たされている1人。

「ちょっとコッチへおいでやー」

その言葉を聞いた直樹は、しかし自分は彼たちに用はない、そう判断し、さっさとそこから立ち去ろうとした。

が、

「オイッ！ちょっと待てエ言うとんねん！！」

少し荒くなつた声に、直樹は足を止めて振り返った。

「不動産 建設の御曹司さん。

用事がある言うとんねん」

そう言った彼らに、直樹はピクリと反応して歩み寄る。

「……何？」

この状況がどういうものなのか、これまで人と接してきていない直樹にはイマイチよく掴めていない。

そんな直樹に、リーダー格のような男子が言った。

「あんな、秋月くん。こないだの実力テスト、1番やったんやってな。

スゴイねえ。

僕は君が来るまで、学年でずっと2番やったんよ。

久保には勝てへんのやけどなー」

紀子の名前が出て、ニコツとする直樹。

その男子は続けて、

「何言うてるか分からへん？また2番になりたいなー言うてるんや君、どうしたらいいか分かるやるー？」

しかし、あまり意味が分からない直樹は思った通りを口にする。

「じゃあお互い頑張ろうよ。また3ヵ月後にテストがあるじゃん。今度も負けないよ」

それを聞いた相手の彼は、明らかにイラッとした顔で叫んだ。

「誰がそんなこと言うてんねん！オマエ、アホか！！」

ワザと点数落とせ言うてんのや！！」

「え？そんなことできないよ」

直樹が即答すると、その彼はフツと鼻で笑った。

「昨夜、君のお父さんがウチに来てたよ？」

それを聞き、顔つきの変わった直樹。

すると取り巻きが、

「井本くんのお父さんはね、

市の

長なんやで？地元の名士
いうヤツや」

…コイツの名前、井本っていうのか。

直樹はその時、紀子以外の同級生の名前を初めて覚えた。
2人目だ。

「そうそう。僕のお父さんと銀行に勤めている叔父さんに、君のお父さんが頭を下げて来てたんや。昨夜ね。

今度計画中のシヨツピングモールの話、デパートの話。

あの仕事が君のお父さんの仕事にならないと、困るんちゃうかなー
？」

直樹を見上げながら鼻でモノを言う彼に対し、直樹は完全にスイツ
チが入る。

「……ねえ、ソレって談合だよね」

それを聞いた井本は、

「だんごう？」

すると周りの取り巻きたちが

「だんごうって何だ？」

とヒソヒソと話し始めた。

「君さあ、そんなこと大きな声で、こんな所で話しちゃって平気なの？
ソレって犯罪だよ。

ウチの父を攻撃したら、間違いなく君のお父さんと叔父さんも捕ま
つちゃうよ？」

取り巻きの1人がカバンから辞書を取り出し、『談合』を調べている。

「ここには『相談する』としか書いてないぞ!？」
密かな声。

それを聞いた直樹、『さすがは中学生……』などと思っている。

「知らないのならいいよ。家に帰ってお父さんに言ってみな。今、君が僕に言ったことを。」

相談に乗ってくれると思うよ?。」

そして直樹は、カバンを背負わされている彼をチラリと見た。

「それと君さ。何でこんなことやってんの? アルバイト? 時給いくら?」

イジメられてやってるんだったら、今の君は相当なカスだよ。

僕は君のことを、とっても白い目で見てるから。

移るとやだから、僕に話しかけないでね。」

そう言い残し、直樹はその場からさっさと立ち去った。

直樹は心の中で拳を作る。

負けてたまるか!!

蹴落とされてたまるか!!

思春期の直樹。

それと同時に、紀子のが頭を過ぎる。

彼女の顔を思い浮かべ、口角を少し上げながら何となく両手を広げ

て家に帰った。

接触

直樹は今日もいつもと同じ時間に登校し、いつものように上履きに履き替えた。

その瞬間、何だか足元が冷たいような気がしたが、考え事をしていた直樹は気に留めることはない。

教室に入り席に着いても、彼はまだ考え事を続けたまま。

「おはよう、秋月くん」

その声にパチツと反応し、考え事を止める。

「おはよう」

ここまで来ても、直樹はまだ紀子の存在が自分にとってどんなものなのか、よく分かっていない。

ただ、彼女と喋ることは楽しい時間であり、そして学業以外に学校に来る意味の一つ。

それくらいのことには、気付き始めている。

紀子と話していると、

……大波・小波。

心地良いそよ風が、直樹の心を攫うように撫でて行く。

「ねえ、秋月くん。何でこないだ体育館来なんだん？」

「…行ったよ」

うん。

確かに行った。

「でもやっぱり、僕は運動はちょっと……」

あの時、何故途中で帰ったのか。
その理由を紀子にどう説明していいのか分からない。

直樹は紀子と遣り取りをしながら、カバンから教科書やノートを取り出し、机の中にしまい始めた。

しかし机の中に手を突っ込んだ瞬間、何だか手が濡れたような感覚。

……あれ？

するとその時、紀子が、

「あっ!!」

その声にびっくりして彼女を見ると、

「秋月くん、上履きが真っ黒やん！何コレ！？墨汁ちやうの!?!」
え!?!と慌てた直樹が机の中から手を出すと、その勢いで指先から何かピンツ！と撥ねた。

あれ!?!

紀子を見ると、彼女の制服と顔に、黒い斑点。

どうなっているのか分からない直樹は、机の中を覗きこむ。
と、その中は墨汁でヒタヒタに浸かっていた。

……え？

そしてもう一度紀子の顔を見ると、顔に黒い跡。

……墨汁。

机の中に突っ込んだ直樹の手も、真っ黒になっている。

「あ！ごめんなさい！」

直樹は叫んで、ポケットの中から取り出したハンカチで紀子の顔を拭き始めた。

しかし慌てたせいで、直樹はその墨汁の付いた手で紀子の腕を掴んでしまい、彼女の制服は真っ黒になってしまう。

呆気にとられる紀子。

パニックになっている直樹。

そこで、直樹はハッと思い出す。

昨日の帰り道に起こった出来事を。

あいつらだ……！！

「久保さん、ごめんなさい。制服は弁償するし、後でちゃんと謝るから。」

ちよっごめんね」

直樹はそう言いおき、教室を飛び出した。

上履きをぐじゅぐじゅ言わせながら、廊下に足跡を残しながら走って行く。

そして同じ学年の教室を一つひとつ覗き込みながら、昨日の帰り道に会った井本を探す。

が、どの教室にも彼はいない。

くそー！

まだ登校してねえのか！？

そう考えながらハンカチを濡らして教室に戻ると、紀子は女子に囲まれ、大変なことになっていた。

直樹は彼女の元へ濡れたハンカチを持って駆け寄り、
「本当にごめんなさい。制服とか全部弁償するから。ごめんなさい」
謝る直樹に紀子は、
「いいよ、いいよ」
と、笑顔で言ってくれる。

思わずニヤけてしまいそうな直樹。
しかし、ここは真面目に行かないと、と持ち直す。

紀子は自分が墨汁まみれにも関わらず席を立つと、
「秋月くん、とにかくその手エちゃんと洗って、その上履きと靴下
脱ぎなよ」

そう言って雑巾を2枚、直樹の上履きの下に敷いた。

「こつすれば汚れんやろ？」

そして水場まで、直樹について来てくれる。

水場に着くと紀子は、

「秋月くん、まず手洗いなよ」

言いながら、直樹の上履きと靴下を脱がせた。

「うわー、爪の中まで真っ黒になってるやん」

墨汁が広がって真っ黒な顔の紀子は、しかし自分のことよりも先に
直樹の世話をしてくれるのだ。

「習字の授業なんかあったっけ？」

私もあの墨汁のキャップ、ちゃんと締めてなくてカバンの中真っ黒
にしたことあるわあ。ハハハハッ！」

直樹のズボンの裾を捲り上げ、足を石鹸で洗ってくれる紀子。

「……………」

……幼少の頃から、自分の世話をしてくれたのは、お手伝いの土井
さんだった。

仕事として自分の世話をしてくれていた土井さんとはまた違うこの状況を、直樹は考え込むようにじっと見つめている。

そして天啓のように、心にひらめくもの。

『どうやら僕は、久保さんが大好きらしい』

そう理解した直樹の顔は、たちまち真っ赤になる。

「……………あ、自分でするからいいよ」

そう言う直樹に、紀子は、

「いいから、いいから」

続けて、汚れた直樹の足を洗ってくれた。

……………あぁ……………あぁ……………墨汁よ、ありがとう……………！

……………って、

違うよ！！

井本……………ツ！！

が、

「……………」

足元では変わらず紀子がぱしゃぱしゃと静かな音を立てながら、直樹の足を洗ってくれている。

その頬には直樹の指から飛んだ黒い墨汁の跡。

「……………」

『今度は僕が拭いてあげるよ』

とは、恥ずかしくて言えない直樹。

「久保さん、ここにも付いてるよ」

「ここにも付いてるよ」

と、2人で墨汁を落とし合っている。

「先生に言うて、上履き貸してもらおうか」

気遣うような紀子の言葉に、しかしそこで直樹のいつものスイッチが入った。

「いや、結構。これくらいのごときは自分で打破しないと。今日はそのまま裸足で過ごす。」

その前に、僕はやることがあるから。

久保さん、本当にごめんね。制服は弁償するから。

本当にごめんなさい」

直樹はそう言うて、教室に向かって駆け出した。

教室ではすでにホームルームが始まっており、担任が教壇に立っていた。

「おい、秋月。お前、裸足で何やっとなのや？」

それに対し、直樹は応える。

「あの、久保さんはもう登校してるんですが、僕のせいで少し遅れます」

そして視線を流した直樹の目に、飛び込んできたもの。

……井本。

「ああッ！！」

叫ぶ直樹を、井本はポカンとした顔で見つめている。

「先生、ちょっとすみません。彼と話があります」

直樹はそう言っつて、井本の正面に立った。
ガリガリの細身だが、身長が180もある直樹が目の前に立つとそれなりの迫力で相手は怯むのだ。

井本は少したじろぎながら、

「な、何や!？」

そんな彼を直樹は真つ直ぐに見下ろし、口を開いた。

「君、同じクラスだったのか。」

井本くん、よくもやってくれたね。久保さんにまで迷惑掛けて」

まず紀子のことを主張した直樹は少し冷静になり、自分の姿を改めて見てみる。

……この学生服は、つい先日買い換えたもの。

それが、墨汁まみれ。

こういうことがあった場合、直樹はお手伝いの土井さんに裏から手を回して報告する必要がある。

直樹の家庭では、とても大変なことなのだ。

制服を買い換えるということよりも、何故墨汁まみれになったのか。それを説明するのが大変なのだ。

直樹は井本の机をバンツ!と叩き、

「君、僕と競争するんじゃないかなかったのか?こんなことしてたら、一生僕には勝てないよ?」

安心してよ。仕返しなんか考えてないから。時間の無駄だからね」
それだけ言っつて、直樹は自分の席に着いた。

その様子をじつと見ていた担任は状況が飲み込めず、

「ま、まあ何かよう分からんが、仲良うせえ」

そんなことを言っつている。

そこへがらりとドアが開いて、紀子が戻ってきた。

「遅れてすみません」

「あー、秋月から聞いた。何やよう分からんが、早う席に着け」
席に戻った紀子は、直樹を振り返って首を傾げた。

「大変なことになったねえ。制服はもう1枚あるから、気にせんでいいよ」

そしてニコツと笑う。

直樹もエヘツと笑い返す。

直樹は、紀子という波に吞まれっぱなしなのだ。

この日、学校から家への報告が一番怖い直樹は、この墨汁事件を何とか遣り過ごすことに成功した。

……とんでもない1日だった。

腹が立つわ、嬉しいわ……

何なんだ、コレ。

そう思いつつ、いつもの道を下校していた直樹は、昨日の公園の前を通りがかったところで、10人ほどの集団が固まってこちらを見ていることに気付いた。

その中に、井本の顔が見える。

昨日と違い、今日の直樹は自分からその集団に駆け寄って行った。

「また僕に何か用かい？」

すると井本は直樹に詰め寄り、いきなり突き飛ばすと、

「…秋月くん。君は僕らの中で過ごすっていうルールを、イマイチ

分かってないみたいやな」

「……………」

直樹は冷静に、集団の人数を数える。

「君が何を言いたいのかわからないけれど、あんな下らないことに時間を費やしている君が可哀想でしようがないよ。」

教科書が全部ダメになっちゃったじゃないか。どうしてくれるんだって言いたいのは、こっちの方だよ」

直樹は『人と揉める』ということがどういことなのか分かっていない。

この人数相手にもメゲはしないのだ。

「僕は何もしてへんって言うてるやる!!」

叫ぶと同時に、井本くんは直樹にタックルを仕掛け、直樹の体をその場に引き倒した。

ザザザッ!!

間髪入れず10人ほどの彼たちが一斉に直樹を取り囲み、殴る蹴るの暴行を加え始める。

ドカッ!

ドカッ!

ドゴッ!

倒れ込んだと同時に眼鏡が外れてしまった直樹。眼鏡なしでは何も見えない。

暴行なんかより、眼鏡を探すことに必死になる。

というより、何より今自分がどういう状況に置かれているのか、理解できていない。

自分が暴力を振るわれるなど、これまで一度も考えたことがないのだ。

「……………」

地面に這わせた掌が、眼鏡に届く。
急いで掛けてみると、彼らの足の隙間から見える、カバンをたくさん背負わされている、彼。

……………マズイ。

直樹はようやく状況を理解する。

おどおどとした彼の姿を見ながら、
今度は僕が、ああなるのか……………。
そんなことを考える。

そして次に考えること。

これ、怪我になったら、お父さんとお母さんに何て言い訳すればいいんだ！？

今日は一体、何て日なんだ！！

暴力の痛みなどよりも心配事がある直樹は、されるがまま。

しかししばらくの暴行の後、それらの手足がピタッと止まった。
それから、遠くの方から聞こえてくる声。

「おー！ いっぱいおるやんけ！ 中のヤツらがこんだけおったら、
誰ぞ一人付き合ってくれるやろ、パクウ」

「そっかー？コイツらが俺らなんか相手にしてくれるとは思わへんねんけどな」

すると直樹を取り囲んでいる1人が小声で言った。

「ヤバイで。 中のヤツらや！」

次の瞬間、彼らは蜘蛛の子を散らすようにその場から走り去って行く。

「おーい！待てエヤ！ちやうつて！絡みに来たんちやうつて！！」
その声とは反対側に遠ざかって行く、たくさんの足音。

やがて、目を閉じたまま体を丸めた直樹の元に、違う足音がだんだんと近づいてきた。

「おーい、タケシ。 1人残ってんぞー」

声の持ち主は横たわったままの直樹を引き起こし、地面に座らせてくれた。

そこでやっと目を開けた直樹の目前にいたのは、とうもろこしを乗つけたような頭をした1人と、派手な金髪をオールバックにした1人。

とうもろこしの方には眉毛がない。

袴のような学生ズボンに、普通のものよりボタンの多い学生服。

そんな2人が直樹をじっと見ていた。

直樹はハッと我に返り、

…ひよ、ひようきん…！

いや、暴走族だ！！

それは、直樹とは対極線上で生きてきた人との、初めての出会い。

衝撃 1

「お前、イジメられっ子なんか？」

眉毛のないとうもろこし頭の方が、直樹にそう話しかけてきた。直樹はその言葉を聞いて、ハッと我に返る。

イジメられっ子に見えてんのか!?

…マズイ!!

こういうパターンの打破の仕方……
分からない。

直樹はその場で、大きな声で

「くそッ！」

と叫ぶ。

すると今度は金髪のオールバックの方が、

「お前、中やんなあ？何年生？」

「……2年生」

一言言っただけで直樹は立ち上がり、その場から立ち去ろうと一歩を踏み出した。

しかし、

「おう！ちよつと待てエヤ。

アイツら追い払ってやったんやから、俺らに何かあってもエエんと
ちやうん？」

その言葉に直樹は振り返る。

お礼のことだろうと口を開き、

「あ、どうもありが……」

そこまで言いかけたところで、とうもろこし頭がそれを制した。

「イヤ！あ、ちゃう！ちょっと待てエ！！礼なんか言わんでエエ！」
「……………」

……この暴走族は何を言っているんだ？

直樹には他に考えたいことがあるというのに。

しかし、もちろんそんなことには構わないとうもろこしは、

「お前、中つてことは頭エエよな？ほんで2年いうたら俺らと同級やねん。ちょっと頼みたいことがあるねんけど。
お好み奢るから、ちょっとついてきてくれんか？」

直樹はボーツとしながらその言葉を聞いていたが、

……お好みで何かを奢ってくれる？

その一言に反応する。

「え！それって何でもいってこと！？」

あのさ、ウチの学校のセーラー服がいるんですよ！セーラー服が欲しいんです！！」

「……………」

「……………」

……しばらくの沈黙。

やがて、とうもろこしが隣を向いて金髪にこそつと話しかけた。

「……………おい、パクウ。コイツ、ヤバインちゃうんか？ヘンタイやぞ？ほんまに頭エエんか？コレ。ほんで、何か標準語喋ってるし」

「あのなあタケシ。お前、何回言ったら分かるんや？コイツが喋ってるのはな、標準語やない。関東語いうんや。

標準語いうのはな、アナウンサーがニュース喋ってる時に使ってるのが標準語いうんや。

前も言っただやろ。ドアホ！」

「どつちでもエエやんけ！」

「良くない！1回言うたら覚えろ」

何やらケンカを始める2人。

直樹は早く先ほどの自分に対する暴力を自身の中で完結させたいのだが、取り合えずはそれを置き、2人の遣り取りが終わるのを待っている。

何しろこの2人はセーラー服を買ってくれるかもしれないのだから。

やがてひとしきり言い合った彼らは、直樹に視線を戻して言った。

「セーラー服は高いからよう買わんけど、お好みじゃアカンのか」

「だから！セーラー服！！」

……噛みあわない両者。

すると金髪が口を開いた。

「何や、もうメンドイ。結果、俺らはお前を助けてやったんや。エ

エから黙ってついて来い」

「……………」

彼の言うように、助けてもらったのは事実だな。

そう思った直樹は、黙って彼らについて行くことにした。

どこへ行くつもりなのか、歩き出した2人の後をついて行きながら、カーブミラーや窓ガラスを覗き込む直樹。

自分の顔に傷がないか心配なのだ。

そんな直樹にとってもろこしが、

「しかしお前、コツチ来て間アないみたいやな。この辺のモンは俺らのことを見たら、ビビッて逃げてまうんやけどな。

なあ、パクウ？俺、コイツ気に入ったで。

背エもデカイし、ケンカやらせたら実はめっちゃ強いんちゃうか？」

ここで、直樹はまず2人に聞かなければならないことがあったことに気付いた。

「ところで、暴走族の君たちが、僕に何の用ですか？」

すると、その台詞を聞いたとうもろこしは目を剥き、

「んだッ、誰が暴走族や！？いつ俺らが『自分は暴走族です』言っ
た！？勝手に所属させんなや！全く！！」

「????」

……噛み合わない彼ら。

ワケの分からない直樹を連れ、2人はやがて細い通りにある小さな店へ入った。

その店の中には、大きな鉄板がたくさん並んでいる。

そして、とても香ばしい匂い。

うわー……

何だ、このイイ匂い。

そういえばお腹空いたな……

セーラー服よりも先に、食べ物を奢ってもらおうかなあ。

直樹は『お好み焼き』というものを知らない。

直樹がぐるりと見回した視線の先。

客らしき人が、大きな鉄板の上で何か丸いものを焼いている。

あ、分かった！

パンケーキだ。

パンケーキをご馳走してもらえるんだ。

直樹の家はお小遣いというものがなく、必要なものを買うときだけお金を渡されるシステムになっている。趣味も何もない彼はお金など必要ないため、持ち歩かない。もちろん下校の際に買い食いなどをしたことも、一度もない。

2人が座った席に、遅れて直樹も腰を下ろす。

「おばちゃん！いつものヤツ、3つ！」

そう言っつてとうもろこしは、近くにある冷蔵庫の中から勝手にジュースを取り出すと、直樹にも1本手渡した。

……この人、自分の家のように動いてるな。

この人の家なのか？

でもさつき『おばちゃん』って言ったよな……。

コレ、勝手に飲んじゃっていいのか？いくらなんだ？

初めての経験に戸惑う直樹。

さつき袋叩きにされたことも合わせ、知らないこの2人についてきた自分自身に翻弄されている。

「なあお前、コツチに引つ越してきてまだ間がないんか？」

「はい。えっと……一月くらいですかね」

「お前、中2やる？俺らと同級やから敬語なんか使わんでエエんやで？」

ふーん…そういうものなのか…。

直樹は着実に学習している。

その時、金髪が直樹の肩をぽんと叩き、

「何かゴメンな。急にこんなことになってな。ところでお前、名前何ていうの？」

俺はパク。パク・ヨンジ。日本名もあんねんけどな、今は名乗ってないねん」

「……秋月直樹」

「直樹、な。覚えた。」

お前、イジメられっ子なんか？」

その問いに、ポケットとしていた直樹は我に返る。

「何で！そう見えた！？僕はイジメられっ子なんかじゃない！」

直樹が少し大きめの声で言い返すと、その声にビックリしたパクは、

「お、おう……。イヤ、お前さっきイジメられてんのか言ったら、何も言わなかったから……。」

えらいツツコミ遅いな」

そんな会話をしていると、やがて3人の前に銀の器に入ったモノが運ばれてきた。

2人はそれを、スプーンのようなものでかき混ぜ始める。

直樹も見よう見真似で、同じようにぐちゃぐちゃとかき混ぜる。

よく見るとその中にはエビやキャベツなどが入っており、直樹が想像するものとは様相が違っていた。

パンケーキにいろんなものが入ってる。

何なんだ、コレ……？

直樹の目の前で、2人は器を傾け、それを鉄板の上に広げた。

直樹も急いで同じ作業をする。

ジュウツと小さくいい音がした。

これから一体何が出来上がるのか、直樹は気になってしょうがない。

直樹が鉄板の上を見つめていると、またとうもろこしが話しかけて

きた。

「あんな、実はな、お願いがあんねん」

「その前にお前、名前くらい言えや」

パクの声に、とうもろこしは、

「あ、そうか。俺、岡崎タケシ。転校してきて知らんやろうけどな、この辺じゃ俺ら2人で……、

何か自己紹介するのって恥ずかしいな……」

それに対し、パクはすぐに、

「それやったら、いらんことは言わんでエエ」

タケシは持っていたカバンの中から小学校の問題集を取り出し、何やら恥ずかしそうに直樹を見た。

「なあ秋月。お前、あの学校に行ってるってことは、メツチャ頭工
工んやろ？」

俺に勉強の教え方を教えてくれへんか？」

直樹には、タケシの言っている意味が分からない。

「教え方を教えろって、どういう意味？」

直樹は鉄板で焼かれているモノをチラチラ見ながら、そう返す。

「イヤ、理由は聞かんしてほしいねん。俺が勉強を人に教えたいんや」

「うーん……」

悩んでいるフリをする直樹。

話は半分ほどしか聞いていない。

今は鉄板の上の変型パンケーキに夢中で、それどころではないのだ。
本当は一瞬たりとも目を離したくはない。

「……要するに僕に勉強を教えてくれってこと？」

するとタケシはすぐに言い換える。

「教え方を教えてくれ言うとんや」

そこでパクが再び口を挟んだ。

「イヤ直樹、お前の言うてる通りでエエ。コイツはな、大分アホやからな、どう説明していいか分からへんのや。」

おいタケシ、もう少し上手いこと説明せんかい。

今、直樹が言うたようにお前が理解せんなら、人に教えることなんかできへんやろ」

「あ、なるほどな」

パクの言い分を聞いて、タケシは納得したようだった。

しかしそんな会話などに構わず、

「ねえ、コレ、焦げたつぽいニオイがしてくるよ?」

鉄板の上を監視していた直樹が報告する。

「あ、ほんまやな」

そう言つて、2人は大きめのスプーンのようなもので、それをくるツと引つ繰り返した。

「お前もやってみい」

食べるものを自分で作っている。

そんなことは生まれて初めての直樹は、同じように引つ繰り返そうとしたが、

ぐちゃッ!

直樹の引つ繰り返したものは半分に折れ、千切れてしまった。

「いや、まだ修正は効くでー」

そう言つてタケシは直樹のお好み焼きをぎゅっぎゅっと押し始める。

「ほんまは押したらアカンのやけどな」

見事に丸くなつたお好み焼きを見て、直樹は

「君、スゴいねえ。料理とかするんだね」

感心する直樹に、タケシはまた先ほどの話を始めた。

「なあ、頼むわ。帰る時、1時間でエエんや。俺に付き合ってくれんか？」

そこで直樹はようやく考え始める。

……うーん……1時間か……

1時間か……

そんな時間、ないんだけどな。

そして過去を辿り、先日慶也にした説教を思い出した。

……協調性

お父さんは、友など必要ないと言う。

でもこれを機会に、友ではないところから協調性を学べるんじゃないか？

人の道というのは、大体決まっている。

僕の信念は、これくらいじゃ揺るがない。

たった1時間だ。

直樹はそんなことを考え、しばらく悩んでみた。

衝撃 2

やがて直樹がふと横を見ると、パクは焼き上がったその変形パンケーキに、何かをかけ始めた。

あ、ソースだ。

これはソース。

明らかに、パンケーキとはモノが違う。

先ほどの悩みをスツ飛ばす、最近気が散りやすい直樹。

パクは焼き上がったものを皿に載せることなく、そのままダイレクタに食べ始める。

それを見て行儀が悪いと思う直樹は、しかし思い直すのだ。

でもこういう世界があることを、僕も知ってるよ。

素手で食べた方がおいしいものだってあるんだ。

知ってる、知ってる。

「ねえ、食べていい？」

尋ねた直樹に、タケシは、

「おう、食べて食べて。俺の奢りやで」

その返事に、直樹は同じようにソースをかける。

これは薬味だな。

そう確認しながら青のりをかけ、パクと同じように鉄板の上に置かれたままのソレを1口食べてみた。

瞬間、直樹は度肝を抜かれる。

おいしい……！！

何だ、これは！？

僕はこんなおいしいものに、今まで出合っただけでなかったのか！！
土井さんは何でこれを避けて僕をここまで大きくしたんだ！？

大袈裟な直樹。

しかし直樹にとっては大変なニュースなのだ。

「なあ、どうや？勉強教えてくれるか？」

タケシのその問いは耳には入ってきているのだが、直樹はそれこそ
それどころじゃない。

未知との遭遇・お好み焼きに無我夢中。

するとその時、店の入口がガラツと開き、同時に大きな声がした。

「あーやっぱりおった！！」

その声に3人は振り返る。

そこには、自分たちと同じ中学生くらいの男子が1人。

タケシと同じように、とうもろこしみたいな頭をしている。

「おーい！マイティー！ここや！やっぱりここにおった！！」

そう叫んで飛び出していく、その男子。

その様子を見て、パクとタケシは立ち上がる。

同時に、パクが言った。

「直樹、バタバタしてごめんな。俺な、お前んトコの学校におるボ
ンボンとか、嫌いやったんやけどな。」

お前、俺ら見てもビビらへんし、俺もお前気に入ったで。

さっきのタケシの話、OKでエエか？

明日つからお前んトコの学校の校門のトコで待つとるから、よろしく頼むな。

ちよつと俺ら、用事できてん。行かなアカンわ。

アイツらにお前の顔、覚えられたらかなわんからな、お前は裏口から逃げてくれるか」

「おいパクウ！早うせエ！！秋月、明日頼むで！！」
タケシが急かし、去ろうとする2人。

直樹は何が起こったのか分からない。

「いや、まだ食べ終わってないよ。途中だよ」

その台詞を聞いたタケシ、

「分かった！お前、天然ボケやる！さっきの状況見て何も分からんのか！

工工から早う裏口から逃げエ！そんなモン、いつでも奢つたる！」

「え！明日も！？」

「あゝゝゝ、もう！明日も！だから早う逃げろ！！」

「うん、ありがとう」

直樹のその返事を聞いた2人は、店を飛び出して行く。

ただ直樹は、こんなおいしいものを残していくのは忍びない。自分の分だけでも、と黙々と食べ続けている。

そしてふと、窓から見える光景に気付いた。

少し離れた空き地でパクとタケシ、2人が大勢の学生に囲まれている。

ん？何が始まるんだ？？

直樹の視線の先で、数人がパクとタケシに掴みかかった。

……何だよ、人のことをイジメられっ子呼ばわりして、イジメられてるのは自分たちじゃないか。

直樹は好み焼きを頬張りながら、その光景をじーっと見つめている。

しかし四角い窓の向こう、多勢に無勢の状況の中、バツバツと人を殴り倒していくのはパクとタケシ2人の方。

え！？どうなっただ！？

次々と大勢いた人数を減らしていく2人。

殴り飛ばされた人たちは、地ベタに転がって悶絶している。

それを見、直樹は今日の自分の姿を思い出した。

「……………」

急いで好み焼きの最後の一口を口に入れ、2人が言ったように裏口へ向かい、店のおばちゃんに声を掛ける。

「えっと、これ、奢りって言われてるんですけど。僕、今お金持っていないんですけど……」

するとおばちゃんは笑って、

「あー、エエよエエよ。タケシのツケでな。

アンタ、良い学校行ってんねんから、あんなゴンタクレと付き合ったらアカンで、ほんま。

裏口あそこやから、早よ逃げな。

全く、あんなしてケンカしてるのなんか、いつものことなんや。

アンタみたいな頭のエエ子があんなんとツルんだからアカンのやで？分かった？」

それに対し、直樹は『はい』とは答えない。

「ありがとう」

そう言っつて裏口から駆け出す。

……難関に立ち向かうには、いろんな方法がある。
一つじゃない。

あの2人がやっていることも、選択肢の一つ。
僕の知らない道は、まだたくさんある。

直樹は全速力で家へと向かう。

それは決して、逃げているのではない。

早く家に帰って、今日あったことをまとめてしまいたいから。

直樹は自分の部屋で、いつもの『正道の系譜』に記している。
今日の出来事を。

集団で暴行を受けたことに対する打開策は、まだ見つかっていない。
殴られた傷は目立つものがこめかみ部分の一つだけだったので、両
面テープで髪の毛と肌を貼り付け、何とか誤魔化すことができた。

……えっと、

彼の名前が、岡崎タケシ。

もう1人が、パク・ヨンジ。

…あ、彼って外国人なんだ。

そういえば、もう一つ名前があるって言ってたな。

あ、なるほど。在日の人か。

へえ…初めて会ったなあ。

『日本について』の話なんかしてくれるかな。どうだろ…僕は結構右だからなあ。意見が違っていて言い合いになっちゃうかな……。

そんなことを考えながら、『集団暴行に対する打開策』が見つからないので、ワザと迷宮に入り込む。

今日の墨汁事件のせいで手元に教科書がないから、宿題をすることもできない。

明日には用意しておく、先生が言っていた。

何となく勉強をやる気のない直樹。

先ほど食べた変型パンケーキの姿を思い浮かべ、また早く食べたいかななどと思っている。

そこで彼は、ハッと気付いた。

あの2人が言っていたのは『お好み』で何かを奢ってくれるんじゃないかと、『お好み』を奢ってくれてることだったんだ。

あの食べ物『お好み』って言うんだ。

そう思った直樹は、そのまま自室を出て慶也の部屋へと向かう。

ノックをして中に入ると、慶也も机に向かい、宿題をしている最中だった。

「ああ、兄さん。何？」

「いや、別に…」

言いながらも、直樹には慶也に何点か確かめたいことがあった。

しかし質問という形にして問いかけると、自分の思う兄の威厳というものに触れるような気がして、慶也に対する問い方を考えている。

棚の上においてあるグローブを取り上げ、手を差し込んでパンパン！と叩いてみる。

それから、どこかで見たことのあるポーズを試してみた。

しばらくそんなことを続け、それからやっと慶也に話しかけた。

「……慶也さあ、お前、お好みって知ってるか？」

『知らねーだろ。うめエんだぞ』

この返事を用意していた直樹に対し、

「えー、お好み？お好み焼きでしょ？知ってるよ」

慶也は宿題を進めながら、こつちを振り向きもせずに返事をした。

直樹といえば、

え！？

『焼き』！？

『お好み焼き』！？

この時、彼は初めて『お好み』の本名を知る。

直樹の驚愕にも気付かず、慶也は続けて言う。

「こつちに来てもう何回も食べたよ？」

ほら、こないだ話したじゃん。あれから高橋くんと仲良くってさ。

高橋くん家ってお好み焼き屋なんだよね。

何度も遊びに行ったから、何度かご馳走になったんだ。

おいしいよね、お好み焼き。もんじゃとは一味違うよ。僕はお好み焼き派かな」

「……………」

直樹はただただ沈黙を守る。

こう来た時にはこう返す、その想定をしていなかった直樹は、先ほどの決め事を破り、慶也に質問することにした。

「……あのさ、慶也。高橋くんとは友達なのか？こっちに来て、友達できたのか？」

慶也は相変わらず振り返ることもせず、

「うん。もう何人もいるよ。」

こないだも高橋くん家で人生ゲームやってさ。

暗くなっちゃって、帰ったらお母さんに怒られちゃった」

「じ、人生ゲーム！？何だソレ！？」

『人生ゲーム』

その名前を聞いて、とつても重く受け止めている直樹。

「ああ、スゴロクだよ、スゴロク。スゴロクをグレードアップした感じ。」

結婚したり、子供ができたり、お金を稼いでいくゲームなんだ。面白いよ。

お母さんに言っつて、僕も買ってもらおうかなあ」

双六で結婚で子供でお金儲け！？

何だ！？

何だソレ！！

「……………」

直樹はもう何にも言わずにグローブを手から外し、無言のまま棚に戻し、押し黙ったまま慶也の部屋を出る。

パタン。

ドアを閉めたと同時に、何となくグローブを嵌めていた手を匂ってみた。

臭エ！ 何だコレ！！

部屋に戻り、ドアに鍵を掛けてベッドに横になり、天井を見上げて小さな溜息。

グローブを手に着けると、こんなニオイがするののか。

……無知は罪なんだぞ？

その日、直樹はそのまま眠ってしまった。

衝撃 3

翌朝、直樹は登校しながら悩んでいる。

…昨日みたいに、集団で来られたらどうしよう。

タクシとパクのように殴るなんて犯罪だ。僕にはできない。
というより、僕では勝てない。

うーん……

そして校内に入った頃、一つ気付いた。

今日は紀子が追い抜いて行かない。

何か寂しいなあ…。

いつもはいろんなことのシミュレーションを終わってから眠りに就く
直樹。

昨日はいろんなことがありすぎて、何の準備もできていない。

直樹はそれだけで落ち込んでしまう。

階段をぼちぼちと登り、教室を目の前にした廊下に差し掛かった時、

「秋月くん！」

入口のドアから顔を出した紀子が直樹を呼んだ。

直樹は落ち込みから一瞬にして持ち直し、紀子に駆け寄る。

「え、何？何？」

紀子は神妙な顔で、

「ちょっとこっちに来て」

そう言っつて、直樹を理科室へと連れて行った。

「……………」
「……………」

紀子は喋らない。

直樹も口を開けない。

ヤベー……………」

きっとあの学生服のことを、ご両親に怒られたんだ。
僕だって言えなかったもんな…

今日の直樹は、元のちんちくりんの学生服姿。

「……………」
「……………」

俯き加減の紀子の後を、完全に俯いた直樹がとぼとぼとついて行く。
そして2人で理科室に入ったとき、まず直樹が謝ろうと、

「ごめん……………」

そう言いかけたところで、紀子が口を挟んだ。

「秋月くんね、ひよっとしてイジメられてる？」

その台詞に直樹は、

久保さんにまでそう言われた……………」

と、更に落ち込む。

「あのね、今日私、バレエ部の関係で、朝早くに来たんやんか。
ほしたらね、見てしもうたんよ」

言いながら、彼女はカバンの中から何かを取り出し、机の上に広げ
た。

それは直樹の体操服。

何故か刃物で切られたように、ギタギタのボロボロ。

それを見た瞬間、直樹は『井本！！！！』と心の中で叫ぶ。

「教室に戻ろうと思ってね。覗いたら、菅井くんが秋月くんの机をゴソゴソやってるから、隠れて見てたんやんか。

ほしたら、その場でカッターでね、……ごめんね、何もよう言わなんだ。

私、ちゃんと証人になるから、先生に言おうよ」

その言葉を最後まで聞いた直樹、駆け出したい気持ちを抑えながら、「久保さん、ありがとう。でも事情があつて先生には言えないんだ」

……父親の顔が、頭を過ぎる。

これは、僕1人で何とかしなきゃいけないんだ。そうだ、何とかしなきゃいけないんだ。

「久保さんにはいろいろ迷惑掛けちゃったね。本当にごめんなさい。そしてもう一つ、お願い。今回のことは黙っておいて。絶対に先生に言わないで。」

そしてもう一つ付け足すと、僕は断じてイジメられてなんかない！
……くっそー！井本め……！

井も……井本???

……アレ?……菅井?

久保さん、今、何て言った?誰がやったって?」

「え?井本くんじゃないよ。菅井くんがやってた」

「……菅井って誰だ?」

直樹はまだクラスメイトの名前を、紀子と井本しか覚えていないのだ。

「えー、ちょっとー。まだクラスメイトの名前、覚えてへんの！？
しゃあないね。秋月くん、冷たすぎるで、ソレ」
そう言われ、またシユンとなる直樹。

教室に戻る紀子の後を、スゴスゴとついて行く。

教室の入口まで来ると紀子は、

「秋月くん、あの人が菅井くん。

絶対ケンカしたらダメやで？」

紀子が指差した先にいたのは、直樹が『イジメられっ子』と表していた、例のカバン持ちだった。

「!？」

近頃の直樹は、見るもの見るものに衝撃を受けやすい。
今回ももれなく驚愕してしまう。

直樹は教室に入ると、ビリビリの体操服を手に、菅井くんの正面に
立った。

「ねえ君。コレ、君がやったの？」

ビクツとする菅井。

「……イヤ、僕じゃないよ」

その反応に、ここでは言いにくいだろうと思った直樹は、彼を廊下
に連れ出した。

足元に視線を落とした菅井に、直樹が問う。

「そんな返事はどうだっていいんだよ。ねえコレ、どういふこと？」

井本くんに命令されたの？」

言い寄る直樹に、菅井は語気を強めて

「僕じゃないって!」

「だから、そんなのはいって言うてるじゃん。分かった。じゃあこれは警察に持って行って、指紋を調べてもらおう。君もついて来てよ。この体操服に君の指紋、君の手にこの体操服の繊維が付いてたら、間違いないからさ。器物破損って言うてね、これは立派な犯罪なんだよ」

「……………」

やがて俯いた菅井は腹を決めたのか、ぼそぼそと喋り始めた。

「…………ごめん。僕がやった…………。」

昨日の件で、イジメが僕から秋月くんに行けばいいと思って、やっとしてもうた…………ごめんなさい」

それに対し、直樹は尋ねる。

「じゃあこれは、君が単独でやったことなの？」

「…………うん。」

昨日墨汁やったら、秋月くんがうまいこと井本くと揉めてくれたから、このままうまいこと行くかなあと思った…………」

直樹は体操服をぎゅっと握り締めたまま、俯いている。

すると近くにいた紀子が、菅井に向かって口を開いた。

「でもそれってどうなん？イジメられっ子からイジメっ子に鞍替えするってこと？」

菅井くんは、

「……………」

「久保さん、ちょっと待って！」

紀子を制し、突然教室の中へ駆け込んだ。

向かったのは、井本のところ。

そして今度は、井本の正面に仁王立ち。

今朝も、朝から直樹にビクリさせられた井本は、座っていた椅子から落ちそうなほどに体を仰け反らせる。

「な、何や!？」

そう言つて直樹を睨みつけるが、そんな彼に直樹は言った。

「井本くん、ごめんなさい。」

昨日の墨汁は君がやったんじゃないか。僕が決め付けただけだった。

ちゃんと確認もせずに決め付けて、本当にごめんなさい。

謝るくらいじゃ許してくれないかな……」

そう言つたと同時に井本の両肩をワシツと掴み、さらにキツ!と睨む。

これでは許してほしいのか何なんだか分からないが、直樹はそんなことには気づかない。

相当引き気味の井本、

「イヤ……分かつたんやつたら、もう別にエエよ……」

直樹の迫力に負け、そう返事をした。

よし、許してもらつた。

それを確認した直樹は、また菅井の元へ駆け出して行く。

そして今度は菅井の肩にバンツ!と手を置き、目を輝かせて言った。

「菅井くん!君、スゲエな!!」

僕、昨夜イジメに対する打開策を少しだけ考えたんだけど、見つからなかつたんだよ。

君、よくこんな方法を思いついたね!君、天才だよ!!」

言いながら、バンバン!と菅井くんの背中を勢い良く叩く直樹。

「久保さんはああ言つたけどさ、僕は君の方法、間違っているとは思わない。」

僕の前の学校にもイジメはあつた。

きつと世の中、競争なんだよ。

よし、今度は僕が考えなきゃいけない番なんだね!

君が見つけたように、きっと何か良い方法があるはずだよ！
君はスゴイ！スゴイよ！！」

直樹の言葉に、口を開けたままの菅井と紀子。
やがて紀子は笑い出す。

「アハハハハッ！！秋月くん、私はスゴイのはアンタやと思うよ！
秋月くんはさ、イジメられっ子で終わらんと思うわ！

ほんま、笑わせてくれる！！」

ひとしきり笑った後、紀子は付け足した。

「秋月くん、アンタ純度100%、混じりツ気ナシの天然ボケやね
！」

それに対し、

「イヤ……アハハハハハ！」
と返す直樹。

『天然ボケ』の意味が分からず、褒められたと思っているのだ。

直樹はその場で決める。

世の中、学ぶことが多すぎる。

1人じゃ手に負えねえ。

僕も友達を作るぞ！

まずはタケシとパクだ！

……天然ボケの直樹、そこで強く、そう誓った。

社交性
協調性

これらを学ぶ。

まず、慶也に追いつかないと。

この日の直樹は授業に集中できず、窓から校門の方ばかりを見ている。

迎えに来るって言ってたよな。
放課後だよな。

そんな事ばかり考えている。

ボーツとしたまま帰りのホームルームを終えた直樹は、終わると同時に教室を飛び出した。

早く早くと階段を駆け降りながら、しかしハッと気付く。

…何だか僕、えらくガッツいてるな。

もう少し、仰け反った感じで対応した方がいいな。

そう考え、走るのを止めて歩いて校門に向かった。

校門を出たところで周りを見渡すが、あの2人はいない。

……あれ？

確かに迎えに行くって言ったよな。

聞き間違いか？

迎えに来たって言ったのかな？

そんなことを考えていると、いつもの井本グループがそこを通りがかった。

「ねえ井本くん。昨日帰りに会った2人いるじゃん」

それを聞いてビクツとする井本。

「あの2人ってどこの中学にいるの？何中学？」

すると井本は顔を引き攣らせながら返事をした。

「……秋月くん、昨日は悪かったよ。まさか君が　中のヤツらとツレてるなんて思わなんだ。

だから勘弁してや」

勘弁って何だよ？

直樹がふと後ろを見ると、菅井がいつものようにたくさんのカバンを持って立っている。

「ねえ井本くん、イジメられっ子は僕に交代だろ？何で菅井くんがこんなことやってんだ？自分で持ちなよ。

僕はこの後用事があるからさ、持ってあげられないけど」

……ド天然な直樹。

次のカバン持ちは自分だと、外れたところで張り切っている。

直樹のその言葉を聞いた井本は、

「あーもう！分かった！もう止めるよ！」

そう言いながら、菅井からカバンを取り上げた。

他の連中も次々と、それぞれのカバンを菅井から奪うようにして、さっさと帰って行く。

どうしたんだ？　急に。

直樹には彼らの行動がよく分からない。

その時、1人残った菅井が直樹に駆け寄り、

「ほんまにごめんね！ありがとう！！」

そう言つて、彼は井本とは違う方向に走つて行つてしまった。
「?????」

よく分からないけど、最近他人からよく褒められるなあ。
そう思つたが、思考はすぐ次に移る。

井本から聞き出した、あの2人の学校。

中学校……

うーん

……知るワケないな。

そう思つた直樹は、今度は職員室へと向かう。

ドアから覗くと、担任の教師が座っているのが見えた。

「失礼します。先生、今からちょっと 中学校に行きたいんですが、道を教えてもらえますか?」

驚いたのは担任。

「え!? 中!? お前、アソコに何の用事や!？」

「あの学校に2人、トモダチがいます」

鼻息荒くそう答えた直樹。

……確信は持てないけど、まあ、トモダチだよな。

担任は机の上に置いてあつた地図を広げて指でなぞりながら、直樹に言つた。

「……秋月、お前な、こつち来たばかりやから分かつてへんのか
もしれんけど……まあ全員が全員じゃないんやけどな、この学校の
ヤツらは評判悪いぞー」。

友達は選ばなアカンで。

俺らなんか、この学校に転勤になるってのは、左遷って意味やからな。

……ほら、ココや。この地図見て分かるか？」

地図上では、それほど離れているようには見えないその学校。

直樹がいつも行く本屋の近くにある。

「あ、ここなら分かります。ありがとうございます。」

ところで先生、さっきの話ですが、友達を選べって言われましたけど、友達を選ぶって誰が選んで決めることなんですか？」

天然の直樹、他意など全くない。

しかしその問いにギクリとした担任は、

「……あー、いやー、……ま、まあそうやな。お前の言う通りや。」

スマンスマン。ただ俺は、巻き込まれて悪さするなよっていうことが言いたかったんや」

直樹にとってその答えはQに対するAではなかったが、今はとにかく急いでいる。

ここでゆっくりと論じている時間などない。

「分かりました。ありがとうございます」

それだけ言っただけで早々に切り上げ、直樹はその足でタケシとパクのいる中に向かった。

衝撃 4

直樹はバスに乗り、目的地を目指す。

バス停で降りて周りを見渡すといつもの本屋、そしてタケシとパクの学校は視界に入る場所にあった。

直樹はそこへ走り出す。

到着したその学校を見て、直樹はまず驚いた。

塀には赤や黒のスプレーで落書きがされている。

校舎の窓には、ガラスの代わりにダンボールが張られている。

それは直樹が初めて見るタイプの校舎。

……何か、ゴミだらけで汚え学校だなあ

そんなことを思いながら、直樹は堂々と校庭へと足を踏み入れた。

そこで1人の男子生徒を見つけ、話しかけてみる。

「あの、すみません。この学校のタケシとパクに会いたいんですけど、どこにいるか知りませんか？」

僕、2人のトモダチなんだ」

それを聞いた彼は、

「し、知りません！」

と、慌てて逃げ去って行く。

……何だ？

噂では、コッチの人は道を聞くと親切に教えてくれるっていうことだったけど。

随分冷たいな……。

直樹は更に周りを見渡してみる。
すると、今度はタケシと同じような頭をしたグループが、こちらに向かって歩いて来た。

あ！2人と同じ、暴走族の人たちだ！
彼たちなら知っているはず！

そう思い、直樹はそのグループに駆け寄って行く。

「あの、すみません」

直樹が声を掛けると、中の1人が目を吊り上げて睨みつけてきた。

「何じゃワレエツ！？お前、その制服ドコ中や！？高校生か？ウチに何の用事や！？」

そんな威嚇をされても、直樹はへっちゃらだ。

「この学校に、パクとタケシがいるはずなんですけど」
その言葉に、グループ全員が少したじろいだ。

「あ、あの2人に何の用事やねん！？」
直樹は胸を張って答える。

「トモダチだから、会いに来たんです」
「！！？」

それを聞いた彼らの態度は、次の瞬間急変した。

「え、えつとねー、アソコに体育館があるやんかー。あの裏におると思うよ？」

さっき 中のヤツらと裏へ回って行ったから、まだおると思う。
こっち側からピーツと行ったら、近いよ？」

……何だ。

コッチの人たちは、暴走族の人たちの方が親切じゃないか。

「ありがとう！」

笑顔で言い残し、直樹は体育館の裏に全速力で駆けていく。教えてもらった近道から裏手に回ると、果たして2人はそこにいた。パクとタケシ。

それと対峙するように、違う制服を着た2人が立っている。何やら険悪なムードなのは直樹にも察しがついたが、そんなことは直樹には関係ない。

誰に聞かせたいんだという程の大きな声で、

「おい！パクウー！タケシー！僕から来たよー！！」
振り返った2人に、直樹は駆け寄る。

タケシはそれどころじゃないようで一瞬視線を寄こしただけだったが、パクは直樹を見て驚いたように叫んだ。

「ハアツ！？直樹か！？お前、何でこんなトコにおんねん！？」

「2人が遅いからだよ。遅刻っていうのは一番ダメなんだよ？社会じゃ通用しないんだよ？」

「あ、ああ、ゴメンゴメン。すぐ行こう思ったんやけど、ホラ、お客が来とんねん」

そう言つて、パクは他校の生徒を指差す。

そこで相手の1人が怒鳴った。

「おいお前ら！今日は2対2の約束やったやないか！キタナイやんけ！！」

しかしパクは構わずに直樹に向かい、

「直樹、お前、ようこの学校へ堂々として来れたなあ。しかも1人で。」

お前はヒョロツヒョロのくせに、変に根性があるみたいやな。俺は昨日から、お前のその辺を見切つとつたよ。

ところで何や、そのちんちくりんの制服は」

他校の生徒と対峙しながらも、何やらパクは余裕の態度。

相手の男子生徒に親指を向け、直樹にニヤリと笑い掛けた。

「なあ直樹。アイツおるやん。中のマイティーって言うねん。何でマイティーって言うか、分かるか？」

「マイティーって、昨日誰かが言ってたよね？名前じゃないの？ミドルネーム？」

「あ、いや、そんなややこしいモンとちゃうで？」

コイツな、苗字が鈴木で、下の名前がな、漢字で『私』『茶』って書いて、『しいちゃ』って言うんよ。

『私』に、お茶の『茶』で、『マイティー』ってあだ名付けられとんねん。笑えるやろ？」

それを聞いた直樹、頭の中でまとめ始める。

『私』！？

お茶の『茶』！？

それでマイ・ティー！？

マイティー…！！

「ブフ　　ッ！！

ア~~~~ハハハハッ！ヒヤ~~~~！！ギヤーツハハハハハハッ
！！

それ、よく考えたね！」

ダジャレに大爆笑の直樹。

マイティーを指差しながら、大笑いしている。

「お、お前ら~~~~！！」

「な？　笑けるやろ？」

「ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤ~~~~ッ！！アハハハハハッ！！ヒイ
~~~~ッ！！」

「……………」  
「……………」

やがて、

「……………おい直樹、笑いすぎや。その辺で止めときや」

直樹の大爆笑に引き気味のパクが窘める。

そこでようやくタケシが口を開いた。

「…おい、何や、緊張感ないな！」

秋月、もう顔知られてしもつたなあ。しょうがないわ。あっちで座つて見とつてくれ。すぐに済ますから」

それを聞いたパク、

「タケシ、この後もつと大事な用事あるなあ、そういえば。直樹待たせてもアカンしな、今日は止めとこーや。

おい、マイティー！今日は止めといた方がエエんちゃうかー？」  
するとマイティーが叫んだ。

「そがいなヒョウロク玉が加わったところで関係ないわ！今日こそ決めたるさかいな！早よせんかい！！」

「おいおい…ヒョウロク玉って誰のことや？」

コイツが無駄に背エ高いと思うたら大間違いやぞ？コイツはな、俺らの秘密兵器や」

パクは直樹を指差し、続けて言う。

「コイツはこないだ、道端で見つけたアンドレ・ザ・ジャイアント（プロレスラー）のケツを蹴り上げて、『アイタ〜！』言わせたほどの男や。

このちんちくりんの学生服とペトリした髪型…これはついさっきまで滝に打たれとつたんや。

ほいで、このメガネはな…これはまー、コイツが目が悪いんじや。知らんぞー？アンドレに思わず日本語で『アイタ〜！』言わせたんやからなあ」

それに対しマイティーは即座に言い返す。

「う、嘘吐け!!」

「嘘やと思うんなら試してみい。エエか、アンドレが『アイタ〜』  
!』言うたんや。」

蹴り飛ばした後、コイツの靴の先にはアンドレのババが付いた  
んやからな!」

話は聞いているが、彼らが何を言っているのかサツパリ分からない  
直樹。

取り合えず、パクがマイティーに自分のことを説明してくれている  
という意識しかない。

ポカンとした顔で、2人の遣り取りを見つめている。

するとマイティー、

「チツ!!何か萎えてしもつたな…。今日は止めとく。また来るか  
らな!」

そう言って停めてあったスクーターに2人で跨り、あっという間に  
走り去って行った。

納得がいかないのはタケシ。

「おい!ちよい待てエ!!逃げんな!!俺はやる気マンマンやぞ  
ー!!!オーイ!!!」

パクはそんなタケシに、

「まーまー、せつかく直樹が来てくれたんやから、今日はエエやな  
いか。」

今は取り合えず勉強の方が大事やないか」

「……まあ、そやな」

そこまでの遣り取りを見学し、直樹は口を開いた。

「ねえ、パクウとタケシはいつもこんなことしてんの?

いつもやってるんだとしたら、相当なバカだよね?暴力って犯罪な  
んだよ?

でもスゴイよねえ。人を殴りつけて、それで問題が解決するんなら、それもまた一つ。

スゴイと思うよ、君たち！」

それを聞いて、タケシは微妙な顔で隣を見遣る。

「……なあパクウ。コイツ今、俺らのことを褒めたんか？けなしたんか？ドツチや？」

「……よう分からん」

直樹はそんな2人の肩をグツと掴んで、

「何言ってるんだよ！僕たち3人、トモダチだろう！！」

直樹の言葉を聞いた2人はしばらく沈黙していた。

が、やがてタケシが、

「お前、気色の悪いこと言うな！」

彼はそう言って、カバンを拾い歩き出す。

そうして、5歩ほど歩いたところで直樹を振り返った。

「じゃあ秋月、ちょっとお願いやわ。今からやったらパクウの家へ行こう。」

なあ秋月、パクウの家行ったら焼肉食えるぞ」

……ヤキニク

また知らないものの名前が飛び出した。

「何でウチが、銭にもならんお前らに焼肉食わせなアカンねん。アホか。」

でもまあエエわ。じゃあウチへ行こうか」

そう返して、パクも歩き出す。

2人が歩いていく方向へ、直樹もとことこついて行く。

……何だ。お好み焼きじゃないのか。

そう思いつつ、

また新しい出会いが……

その予感に胸をときめかせる。

途中2人は自転車置き場へ寄り、それぞれ自転車に乗って直樹の元へやってきた。

パクが直樹に向かって自転車の後ろを指差し、

「よし直樹、後ろへ乗れ。ちょっと遠いからな、チャリで行くぞ」

直樹は言われるがまま、パクの自転車の後ろに跨る。

「あー、腹減った!!」

そう叫びながら、タケシは先々行ってしまつ。

直樹は自転車の後ろで、初めての感覚に戸惑い、そしてハッと気付いた。

「あ、ダメだパクウ！僕、降りて歩くよ」

「ハア？何でや？遠い言うたやんけ」

「自転車の2人乗りはダメなんだよ？」

降りしてくれという直樹に、パクは笑いながら返す。

「ハハハハッ！心配すんな。俺はな、大型自転車免許持つとんねん。捕まりやせんよ」

「嘘だ！自転車に免許証なんかないよ」

するとパクはひとしきり面白そうに笑って、自転車のスピードを上げた。

「あんな直樹。お前、そんなに型にハマッとしてオモロイか？」

俺らはな、こういうのがアホやっていうのも承知や。

お前の場合、理屈が邪魔してどもならんか？

聞いたことないか？『考えるんじゃない。感じるんだ』っちゅーて



ね

「……………」

アホは承知。

考えるな。感じる。

自分では考えたことのない、思いつきもしなかったその言葉。

直樹はその余韻に浸りながら、耳のすぐ傍で風の音を聞いている。

自転車は直樹を乗せたまま、どんどん走って行く。

やがて、目の前に少し急な下り坂が見えてきた。

「あんなー、俺の肩、ガーツ握ってもエエから、そこへ立ってみい」

「そこってドコ？」

「お前の座つとるソコへよ。立ってみ？」

直樹は言われた通り、走っている自転車の後部に恐る恐る立ち上がってみる。

……………うわ！怖い！！

膝がガクガク震える。

直樹はパクの肩を力いっぱい握り締めた。

「直樹、怖いんやろー？」

冷やかすように言うパクに、素直に、

「うん、怖い！」

そう答える直樹。

パクが言う。

「お前、さっき俺らに『トモダチやる』言つたよなあ？」

今、お前の目線の高さは、普通にチャリを立ちこぎした位置とよけ

エ変わらん。

せやのに怖いのは、チャリの運転を俺がしとるからや。

直樹。人とツれるってこういうことやで？」

「……………」

パクの言っていることは、今の直樹にはちょっと難しい。

「ほんでなー、ビビッて怖いから思いつきし握つとるこの肩。これもまたツれるつちゅーこつちや」

パクの言葉を聞いている直樹、これはまた家へ帰ってまとめる必要があるな、と考えている。

「パクウは何だか頭が良さそうだね。言っていることが教師みたいじゃない」

「ひゃひゃひゃひゃひゃーッ！誰が教師やねん！あんなモンと一緒にすんな。

こんなモン、全部受け売りや！

兄貴に言われたんよ。…………まあ、あんまり気にすな」  
「ふーん」

2人乗りの自転車は、坂道を長く真っ直ぐに下って行く。随分先に行く、タケシを追いかけながら。

坂を下ると、今度は上り坂。

直樹は自転車を降り、走ってパクを追いかける。

タケシは遙か先に行ってしまったって、既に姿が見えない。

知らない道。

直樹は何だか楽しく、ドキドキしている。

上り坂が終わると直樹は再びパクの後ろへ乗り、しばらく走った。

「俺ン家、ココやで」  
パクが自転車を止めた場所は、何やら先日見たお好み焼き屋のよう  
な小さなお店だった。

…またイイ匂いがする。  
うーん……こないだとは違つぞ。  
でもイイ匂いだ……。

「店から入ったら怒られるからな。コツチや、コツチ」  
パクについて店の裏手に回ると、そこは民家。

これがパクウの家か……。

「早よ来いや！」  
先に着いていたタケシがそう言いながら、縁側からズカズカと家の  
中へ上がり込んで行く。  
「何しよんねん、早よ上がれや」  
パクも直樹に声を掛ける。

直樹と言えば、縁側から上がり込む2人を見て、  
これが玄関！？  
驚きつつも2人に倣って靴を脱ぎ、2階へと上がって行く。

部屋に入ると、タケシは早速カバンから小学校の問題集を取り出し  
て机の上に広げ始めた。

「秋月、頼むで。分かりやすう教えてや」  
「う、うん……」

これまで友達などいなかった直樹。  
同じ世代の子の部屋を見る・部屋に入るなど初めてのことに。

キヨロキヨロと落ち着かない。

僕の部屋とは違って、随分いろんなものがあるなあ。

そう思いながら、直樹はタケシの問題集を手に取りページを捲った。

「まずタケシの実力を知らなきゃいけないからさ。今から僕がを付ける問題、解いてみてよ。

じゃあ今日は算数をやるよ」

直樹は算数の問題集に を付けていく。

20個ほど付けて、

「タケシがこの問題を全て正解できたら、タケシはこの問題集を全部理解できてることになるからね。

あとは、教えなきゃなんないんでしょ？口頭でどう説明できるか、

何でこの答えになるのか、後で僕が聞くよ。

やってみて」

直樹の言葉を聞いた2人は、

「おお〜！」

と感心した声を上げる。

パクはうんうん、と頷きながら、

「やっぱりエライもんやな。今日びの話、俺はコイツより勉強はできるんやけど、教え方教える言われてもワケが分からんでなあ。

ほいで一週間張り込んで、ようやくお前が引つかかったんよ。

なるほど、そういう風に教えりゃエエんやな」

「よっしゃー！やるぞー！」

タケシはそう言って問題を解き始めた。

その間、時間を持て余した直樹は、また辺りをキヨロキヨロし始める。

そんな直樹に向かって、パクはずっと気になっていたのか、口を開

いた。

「直樹、お前今日何でそんなちんくりんな学生服着とんねん。座ったらソレ、ほぼ半袖半ズボンやないか。しかもソレ、どこの制服やねん」

直樹はこれまでの経緯を、全てパクに話して聞かせた。

それを聞いたパクは大笑いする。

「お前はじゃあ何や、そのイジメられとったヤツから、イジメの行為をバトンタッチされたいうワケやな!？」

「そう! そうなんだよ。放課後はさあ、これからしばらく2人と会うだろ? だからカバン持ちはできないんだよね。朝はできるとしてもさあ……」

とにかく直樹はやる気なのだ。

その時、2人の会話をじつと聞いていたタケシが口を開いた。

「……お前……お前、ホンマのアホやな。ソレ、マジメに言うてるんやったら、アタマに何か湧いとるぞ?」

そんなモン、無視してまえ。というか、そんなヤツ、ボテくり回したれ!

これやからボンボンは、陰湿でかなわん!」

パクも言う。

「まあ、でもイジメの解決策って難しいよな。

よっしゃ、エエ考えがある。アイツら俺らとこないだ会つとるやないか。」

『僕のことをイジメたらあの2人が出てくるぞ』言うたれ。それでイジメられんよ」

「そうや、言うたれ言うたれ!!」

同調するタケシに、直樹は言い返す。

「何だよソレ。何で2人と友達って言うだけで、イジメられなくなるのさ?」

「……え? そりゃー……何かお前相手にしよつたら一から十まで説

明せにやアカンから、コツチが恥ずかしなるわ！」  
するとパクが立ち上がり

「よっしや直樹。口で説明するのは難しいからな。お前にイイもん  
あげるわ。」

虎の威を借る何ちゃらかんちゃらく言うやないか」  
そう言つて部屋を出て行くパク。

やがて戻つて来た彼は、手に持っていたものを直樹の目の前でバツ  
と広げて見せた。

それは、直樹の学校の学生服。

「これでもお前にはちよつと小っちゃいかもしれんけどな。俺の兄貴がお前と同じ中学やってん。これ着てみ？」

「え！くれるの!？」

「おう、お下がりがやけどな」

その遣り取りを見ていたタケシが、心配そうに声を掛ける。

「……おいパクウ、ソレあげてエエんか？」

「おう、エエねん」

直樹は早速、その学生服を試着してみた。

少しウエストがきつくて小さいような気がするが、ちんちくりんの学生服よりは断然マシだ。

「うわ〜！助かったよ！お父さんにさ、学生服買ってって言えなくてさ。どうしようかと思ってたんだ。

……しかしこのズボン、何でこんなにブカブカなんだ？上着も肩幅の割りには何だかすごく短いな。

何だか普通のと違うね」

「ハハツ！それが虎の威を借るつちゅーヤツよ。虎の皮被ったキリンいうことにしとけ。

明日ソレで学校行ったら、すぐ分かるって」

「ほんとかよ。スゲー……」

ついでにさ、女子用の制服はない？」

「……お前、ちよいちよいソレ言うな。……ないわ！」

そんな会話をしていると、下からトントントンと階段を上ってくる足音が聞こえてきた。

いきなりガラッとドアが開くと、お盆を持ったおばさんが顔を覗か

せる。

「ありゃッ!? タケシ! お前何やっとなや!? 勉強やっとなか!?  
こりゃ〜明日は雨通り越して、鉄砲の弾降ってくるな」

「おいコラ、ババアッ! 勝手に入ってくんな!」  
パクの怒声に直樹は驚く。

ババア!?

誰だこの人!?

「そやで〜オカン。俺、勉強してんねん。スゴイやる?」

オカン!?

誰だこの人!?

そのおばさんは直樹にぴたりと視線を当てた。

「何か知らん子おるな。アンタ、ドコの子や?」

「…あ、こんには。秋月と言います」

直樹の態度におばさんは目を見開いて、

「まあ! こんな行儀工工子もおるんかいな!!」

お腹空いたやろ? これ食べ」

言いながらおばさんがガシャン! とテーブルの上に置いたお盆の上には、井に入ったごはんを皿に盛られた、直樹にとっては何か分からないモノ。

それを見たタケシは叫ぶ。

「あ! オカン、てっちゃんしかないやん! 肉は!?!」

「何でお前らに商売モン食わせなアカンねん! 1円にもならん。ソレ食うとったらエエねん!」



「エエから早よ出てけー!!」

パクの声におばさんは一言、

「悪さすんなよー!」

そう言っつて部屋を出て行つた。

それを見送つて、直樹はパクに尋ねる。

「ねえ、さっきのおばさん誰?」

「あー、ありゃウチのオバハンや。お前風で言えば、お母さんよ」

お母さん!?

直樹は驚愕する。

「な!!お母さんに何て口の利き方するんだよ!?!」

すると、その言い分に驚いたパク、

「……………あ、ああ、ゴメンゴメン。これからお前の前では気をつけるわ」

向かいでは、相変わらず問題を必死で解いているタケシ。

直樹は先ほどパクのお母さんが持ってきてくれたお盆の上のものが、  
気になってしょうがない。

じつと無言で凝視している。

……………僕はね、もうびっくりしないぞ。

これもきつと、おいしいものなんだよ。

下に敷かれているのは……………キャベツだな。

上に乗ってるのは……………

……………食べてから当てよう。

そんな、一点凝視の直樹に気付かざるを得なかったパクが口を開い

た。

「何やお前、腹減ってんのか。じゃあ冷えたらアカンから、先に食うてしまおうや」

「うん、そうしよう！」

直樹は元気に即答する。

しかし直樹はすぐには手を出さない。

2人がどうやって食べるのかをじっと見つめている。

彼らはキャベツと、よく分からないその物体と一緒にごはんの上のせ、一気に掻き込んだ。

よし、そうやって食べればいいんだな？

確認した直樹も、同じように食してみる。

先日のお好み焼きは、目からウロコだった直樹。  
今回も目からウロコだ。

な、何だ、コレは……！？

マ……マ……

マズイ……！！！！

何だ、このゴムみたいなモノは！？

ガツガツがつついていてる2人をチラチラ見ながら、  
このゴムみたいなもの、一体いつ飲み込めばいいんだよ！？

そんなことを考えながら、しかしさすがの直樹もここで『マズイ』  
とは言えない。

2人にバレないようにキャベツだけを取り、2人と同じようにごはん

を掻き込む。

ただ一つ、分かったこと。

白いお米は箸で、丼で、こんな風に掻き込むとまた違う味がおいしい。

……だけど、このゴムはマズイ。

直樹のお腹は、ほぼ白いごはんまで満たされた。

この『てっちゃん』ってヤツ、これはさすがに慶也には自慢できねーな……。

そう考えている直樹の横で

「できた！」

とタケシは全ての問題を解き終えた。

「うん、どれどれ？」

タケシの解いた問題を見ると、なかなかのもの。

20問中19問が正解している。

「秋月よう、お前、俺がどんだけアホや思うとるか知らんけど、俺は小学校の時、成績はまあまあやったんや。

これくらいできいでか！」

ふんぞり返っているタケシの態度を、直樹は見えない。

「……タケシさ、何でココができてるのに、コッチは間違ってるのさ？おかしいだろ。」

算数・数学は一つのミスで全部がガタガタになっちゃうんだよ。合ってるこっちが偶然なのか、間違ってるココを理解できてないのか、今から言ってもらおうからね」

「……………」

急変する直樹の態度。

ここは直樹のフィールドだ。

「だから！さっき言ったじゃん！コッチができるのに、何でコッチの簡単なのができないのさ！？コッチを応用するんだよ！忘れるんならちゃんとメモを取りなよ！！」

スパルタ直樹。

暴走族相手でも容赦はしない。

「ぐ…ッ！コッチから頼んでるだけに、コイツの態度にムカつくこともできんわ！」

ブツブツ言いつつも、大人しく直樹に従うタケシ。

そうして1時間ほど勉強した頃、隣で静かにしていたパクが口を開いた。

「おい直樹。お前の家、門限あるんちゃうか？遅うなったら親父さんとかに怒られるんちゃうん？」

その問いに、直樹は余裕で答える。

「お父さんは今日から長野県に出張なんだ。一週間はいいんだよ。だから平気」

懸命に問題を解いているタケシの隣で、2人は会話を始める。

「お前、さっき俺らのこと、トモダチやろー言うたやん。

同じ学校にツレとかおらんのか。俺らみたいなんとツレる必要ないんちゃうん？」

「イヤ、ダメだよ。彼らは勉強での競争相手なんだ。

きつと僕と一緒に知識が偏ってるハズ。だからあまり意味がないんだよ。

君たちみたいな暴走族じゃないと、新しい知識は得られない」

「…お前、それもちよいちよい言っな。俺ら、暴走族には入ってへんぞ？」

ヤンキー・不良と暴走族が一緒になつとんやな。……まあエエけど

な。

せやけど、俺らとツレるいうたら、お前の良心が耐えられるかな。

おい直樹、今から来い！言ったら来なアカンのやぞ？できるんか？」

その時、直樹の脳裏に過ぎったのは、慶也の顔。

「できる！」

そう答えるのと同時に、タケシが問題を終えた。

「よし！大体分かったぞ！これで俺も説明できるわ！今日はこんなくらいにしとこうか」

タケシの声にパクは立ち上がり、

「よっしゃ。ほなら今日はもうアガリやな。俺も見たいテレビあるし。」

直樹、明日もお願いできるか？」

「うん、いいよ」

辺りはもう暗い。

パクに見送られ、直樹はタケシの自転車の後ろに乗り、先ほど通った道に戻って行く。

「ねえタケシ、君は人生ゲーム持ってる？」

「え、イヤ持ってたへん」

「パクウは持ってる？」

「イヤ、知らんで」

パクと一緒にいるときは違い、あまり喋ってくれないタケシ。すぐに沈黙が落ちる。

「僕は明日も平気だからね。勉強教えられるよ」

「うん、スマンな」

すぐに会話が途切れてしまう。

やがて、

「……………なあ、秋月」

タケシが話し始めた。

「俺はな、正直お前が友達やろ言っただの、信用できんでおるよ。

まあ、昨日も言っただように、お前のことは気に入ったけどな。でもまだ日が浅い。

…パクウがお前にあげたその学生服も、どうも理解できへんねん」

直樹は、パクウからもらった学生服を着たままの格好で帰っている。タケシは少しの間沈黙し、再び口を開いた。

「……………その制服な、アイツの死んだ兄貴のヤツなんや。

交通事故で死んだんよ」

「え！？形見の品なの！？」

「ま、そんな大袈裟なモンちゃうやろうけど」

直樹は少し考え、そして、

「……………分かった。僕、コレ大事に着るよ。そして卒業したらパクウに返すよ、コレ」

それを聞いたタケシ、立ちこぎをしてスピードを上げる。

「おおー？今からすぐ返しに行くって言わなんだな！

パクウが簡単にあげたとは思わへんねん。

すぐには返さへんのやな？それやったらエエわ！

もう墨汁まみれにすんなよ？」

タケシはそう言って、すごいスピードで走り出す。

「お前、道分からんやろうから、バス停まで乗せてったるわ」

直樹は道は覚えていたが、歩くのが大変そうだったので甘えることにした。

途中、タケシはある家を指差し、

「アレ、俺ン家やで」  
そう説明してくれる。

やがて2人を乗せた自転車は、直樹がいつも行く本屋の前のバス停に着いた。

別れ際、

「明日は俺から行くからよ、また頼むわ」

そう言って去って行くこうとするタケシに、直樹は尋ねる。

「……ねえ、亡くなったパクウのお兄さんって、本当に血の繋がったお兄さんだよな」

何故このタイミングでこの質問なのか、直樹にも分からない。

「ええ？そうやるフツウ」

その返事に、俯いてしまう直樹。

「……………」

「それとな秋月。お前、そのな、自分のこと『僕』って言うの止めるや。俺らとツルむ言うんやったら『俺』もしくは『ワシ』って言うてくれ。こしよばゆつてしよーがない」

直樹は顔を上げ、

「うん、分かった。そうするよ」

そう答えると、タケシは、

「ほしたらな」

手を振って自転車で走って行った。

その後姿に手を振り返す直樹。

……人に手を振るなんて、物心ついてから初めてだろ。  
悪くねえや。

そんなことを思いながら、直樹はバスには乗らずに歩き始める。

少し考え事をしたかった。

しばらく歩くと、父親の経営する会社の看板が目に入った。

『建設』

かなりの広範囲で工事されている、その場所。

こないだお父さんが言っていたデパートが、ここにできるんだな…。

シートで覆われたビルを見上げ、再び目を戻すと、先の方にベンツが停まっていることに気付いた。

ナンバーを見ると、父親のもの。

その車に、まさに今乗り込もうとしているのは、直樹の父。

あれ？

まだ長野に行つてなかったのかな。

そう考えた直樹、駆け寄って父親の元に近づこうと思ったが、今まで外で両親に会ったことのない彼は果たしてそれが可なのか不可なのかも考えてしまう。

…あ、ダメだよ。

こんなトコでウロウロしてたら、怒られちゃう。

そう思い、直樹はスツと身を隠す。

父は仕事とは思えない、ラフな格好をしていた。すると、その車にもう1人、乗り込む人が。

……女性。



次の瞬間その彼女が発した言葉は、直樹の耳にはつきりと聞こえてきた。

「グアムかあ……。本当に、久しぶり……………」

その言葉を残し、車はエンジン音を響かせて発進した。

直樹はベンツの後ろ姿を、瞬きもせずに見送る。

「……………」

……………お父さん。

何をやっているんですか？

グアム

……………愛人ですか？

新聞、経営に関する本などにはよく目を通す直樹。

『外に出れば敵だらけの男。愛人の1人や2人……………』

そういう文字を、目にしたことがある。

……………やっぱり、愛人なのか。

つらつらとそんなことを考えながら、歩き出した。

そこへ、ちょうど自宅方面へと向かうバスが通りがかり、直樹は歩くのを止めてそのバスに乗り込む。

今日はお小遣いをもらっというて、良かったよ。

そう考え、先ほどまでの思考を止めようとするが、おさまらない。

お母さん

慶也

僕

……いや、俺。

少なくともこの3人は、あなたを信じていますよ、……お父さん。  
要素を加味した上で、俺はほざいているんですか。  
何だか悔しいですよ。

……お父さん。

やがて、バスは直樹の家の近所で止まった。  
降りると同時に、直樹は走って自宅へと向かう。

「ただいま」

言いながら玄関のドアを開けると、そこには丁度母親が立っていた。  
「あら？直樹さん、今日は随分遅いですね。何してたの？」

『そんなことより、お母さん！』

……とは、言えない。

「学校の行事があつたんです。しばらく遅いかもしれません」

「あら、そう。夕飯があるから食べてください」

そう言つて、奥へ行つてしまふ母。

「……………」

今日、この制服をもらったこと。

別に報告しようとも思つてなかつたよ。

まあ、やっぱり気付かないよね、……そりゃ。

このズボン、ダボダボでスースーするなあ。

……皆が信じていますよ。  
お父さん。

お腹が一杯の直樹はこの日、夕食を摂らずに自室へと入って行った。

## 変化 1

栄光と表するものは、人それぞれでしょう。

それは、程良く遠いほど良い。

遠すぎると、人は諦めてしまっただ。

だけど、遠すぎるものは他よりもずっと良い筈。

毎日毎日塵を重ね、見上げるものを作れば、遙か彼方向ここの地平線もちよつと近くに見える筈。

半人前の俺がまず手に入れるべきものは、一丁前なのか、一人前なのか。

一定不変のこの俺を、一旦終了させるべきだろう。

雨後の筍のごとく、めくるめく現れる近日を目の前に、このタイミングを俺は見計らっていたのではないか。

寡聞の俺と謙遜で表してきた俺は、本当の世間知らず。

ヴィヴァルディを聞きながら摂る朝食は俺の常識であって、多分からは漏れるのだろうか。

可普及ではなく、バランスを取りながらゆっくり歩く。

今。

たった今。

今日の俺は混濁していて、色では表せない。

ある程度混成できれば、罵声であれ、一丁前と表されるんだろう。

次の日から、直樹はパクにもらったダボダボのズボンに短ランで学校に通い始めた。

登校前、慶也だけが

「何だよ、その学生服。スゴイの持ってんじゃん」

と触れたのみで、母は直樹の学生服の変化に気付かない。

直樹には、これが変型学生服であるという意識はない。

ただ友達からプレゼントされたそれを、どこかで自慢したい気分だったのだ。

その学生服で登校すると、何故かみんなの冷ややかな視線。それに気付く直樹。

何でだろう？

みんなと違うからかな？

そう思いながらも何となく、異質を放っている自分にゾクゾクする感覚も覚えていく。

学校に来て、この学生服に唯一触れてくれたのは、やはり紀子だった。

「なにになに？秋月くん、その学生服！ヤンキーみたいやんか」

「え？ヤンキー？えっと、これはね、友達から譲り受けたんだ」

「この学校の生徒で、そんな学生服持つとる人おるんやねえ」

「うっん、違うよ。中の生徒で、お兄さんがこの学校に来てた

んだ。そのお兄さんの制服をもらったんだよ」

「へえ！じゃあ今度は汚さんようにせなね。アハハハハ！」

そして、直樹は思い出す。

「久保さん、俺だけ制服新しいのになっちゃってごめんね。絶対お小遣い貯めて、こないだ汚しちゃったの弁償するからね」

「ああ、だからいいって！ほら、もう一枚持ってたんだから。」

でもアレだね、秋月くん背エ高いから、そういうのも似合うやん。

良かったねえ！」

直樹は笑顔で受け答えしている。

こぼれそうな『ムフフフフ』という声を抑えるのに必死だ。

やっぱり、久保さんだけは褒めてくれた。

さすが、俺の大好きな人だよ！！

と、そんなことを考えている。

しかしその時突然、直樹の頭に昨夜の父親の顔が現れた。

「……………」

楽しいと思った瞬間、何故か嫌だったことが頭の中でフラッシュバックする。

それは、直樹の癖。

……お父さんは、この学生服に気付くんだろうか。

気付いたとしても、何も言わないかな……。

無意味と思っていた、人付き合い。

必要と感じた、人付き合い。

後者に賛同するようになり、直樹は何気ないこと・皆が普通に蓄え

ていったことを、駆け足で吸収していく。

数日後、6時間目の授業が半分ほど終わったところで、直樹が何となく校門の方を見ると、そこにはパクとタケシが立っていた。

アレ？

随分早いな。

直樹はソワソワしながら授業が終わるのを待ち、帰りのホールムルムが終わるとすぐに校門まで走って行く。

「随分早いじゃない。どうしたのさ？」

「……………」

何やら神妙な面持ちの2人。

タケシが直樹の肩を掴んで言った。

「……………おい、秋月。今日お前、何時まで大丈夫や？8時くらいまでOKか？」

一週間ほど出張だと言っていた父。

あれから10日ほど経っているが、家にはまだ帰って来ていない。

……………あの時見た、これまで一度も見ることがないような父の笑顔を思い出す。

それを打ち消すように、直樹は答えた。

「大丈夫だよ。何かあるの？」

するとタケシはよし！と大きく頷き、

「後で発表する。今日も頼むで」

そして3人はいつものようにパクの家へと向かい、勉強を始めた。

やがて、時計の針が7時前を指した頃。

パクとタケシは顔を見合わせ、

「……………よし。そろそろ行くぞ」

そう言っただち上がる。

「どこへ行くのさ？」

すると、タケシがまたまた神妙な面持ちで答えた。

その目はららんと血走っている。

「今からするのは完全な犯罪や。そら分かっどる。だけど欲には勝てん！」

エエからついて来い！」

犯罪と聞きながらも、

そんなワケない。

何が起こるんだ！？

ワクワクしながら、黙ってついて行く直樹。

3人が進むのは道なき道。

もちろん直樹はそんな探検など初めて。

藪の中を通り抜け、塀を乗り越えて辿り着いたのは、ある敷地の中だった。

少し先を進んでいたタケシが後ろを振り返り、ヒソヒソと直樹に話しかけてくる。

「おい秋月。お前、まさか彼女なんかおらんよな!？」

「や、彼女なんかいないよ。今、とても大好きな人はいるんだけどさ……」

素直な直樹。



「そっか。彼女はおらんのやな？な！？」  
しつこいタケシ。

彼は続けて言った。

「よし。今からお前と俺は同志や！童貞同志とも言うっ！」

「童貞！？もちろんそうだよ」

……素直な直樹。

「そっか。」

実はな、この建物はある会社の女子寮なんや。

ほんでな、秋月。コレ見てみい！」

タケシが指差した先には、壁にガムテープで貼られたダンボール紙。彼がそれをパリッと捲ると、そこには穴。

「この先にはな、風呂場があるんや。

お前、ダイレクトに女の裸なんか見たことないやろ？」

俺はな、お前のためを思って、この1ヶ月間、コツコツコツコツここへ穴を開けたんや」

「1ヶ月って、1ヶ月前は俺たち、まだ会ってないじゃないか」  
それに対し、タケシは、

「そんなツツコミはいつでもエエ！！俺ら、同志やろっが！！」

直樹は当然、思春期真っ只中。

紀子に興味を持った辺りから、悶々とするものは抱いている。

……でもこれって犯罪だろ？

タケシが言うように、完全に犯罪だ。

直樹の中で、激しい葛藤が巡り、回り、巡り巡る。

そんな直樹に、タケシはパクを指差すと、

「秋月、エエか。ここにもう1人、オマケのようにくっついて来て

るコイツおるやる。コイツにはな、彼女がおる」

それを聞いた直樹は大声で、

「ええッ!? パクウって彼女いるの!?!」

「シッ、シッ、シ　　ッ!! アホウ! 声デカインじゃッ!!」

……そうや。このパクウいう輩は、俺らの敵や!

そうや。よう考えたらパクウ、何でお前まで来とんや!? お前には  
必要ないやる!」

責められながら、パクは何か言いたそうに2人を見ている。

それに気付かず、チラリと時計に目をやったタケシは目をぎらりと  
光らせた。

「入浴時間は7時からやからな。ぼちぼち入ってくるで。

今日の昼に完成したからまだ覗きはしてないんや。

…… エエか、秋月。ビツクリしてでかい声出すなよ?」

さっきまでめくるめく葛藤していた直樹、それすらすでに忘れたの  
か、

「うん」

と素直に返事をする。

ここでようやくパクが口を開いた。

「……あのう」

「何や!? お前は必要ない、もう帰れ!!!」

するとパクが小さな声で、

「カツコ悪うて、よう言わへんかったんやけど……あの女には3日  
でフラれてしもつたんや。

だから俺には今、女なんかおらへん」

「……」

黙　　ってパクを見つめる、タケシと直樹。

やがてタケシ、

「……その3日でお前は、俺らが飛び越えてないカベを飛び越えた

んか、どうなんや」

「ナニ一つ飛び越えてません。ガッツリ童貞です」  
その答えに、タケシは2人の首を掴み寄せ、がっちりスクラムを組む。

「よし！俺ら3人同盟や！パクウ、よう正直に言った！何も恥ずかしくない！ちよっぴり背伸びしただけなんやな？そうなんやな？！」  
完全に意気投合する3人。

「よし、ここからは一言も喋るな」  
タケシのその命令に従い、静かな、かつ緊張感漂う時間が流れ始める。

何分ほど経ったのか。

その穴からざわざわと声が聞こえてきた。

来た！！

声には出さない号令。

タケシが本当に小さな声で、直樹に言う。

「よっしゃー！まず隊長！お前から行け！」

いつの間にか隊長になっている直樹。

その穴から、そっと中を覗いてみた。

「「「.....」」」

しかしそこは真っ白い世界。  
よく見えない。

アレ？

何も見えない.....

アレ???

直樹は自分のメガネが湯気で曇っていることに気づかない。  
「何も見えないよ?」

そんな直樹の後ろでやきもきしている2人。

報告する直樹の頭をパシパシと叩きつつ、パクは

「早よせエ!早よせエ!」

その時、完全にイラ立ったタケシが、直樹を引っ張り起こし、

「もうエエ!代われ!!」

そう言つて、そのまま突き飛ばした。

その勢いで、直樹は建物を囲っていた垣根に、

バキバキバキバキバキ

ツ!!!

思いつきり、突っ込む。

「「「!!!!」」」

同時に、3人は一切の動きを止めた。

取り合えず、呼吸するのも止めてみる3人。

「「「.....」」」

何の声もしない。

誰も来ない。

その確認をして、タケシが一喝した。

「大きな音出すな!」

「何言つてんだよ！タケシが突き飛ばしたんだろ！」

「ウツサイ！！お前が鈍臭いことしとるからじゃ！！」

2人の遣り取りを尻目に、1人でちゃっかり穴を覗き込んでいるパク。

「あー！パクウ！次は俺やぞ！」

「やゝ…何や、コレ。あんまよう見えへん。人影は見えるんやけどなあ」

押しのけ合いをしている3人は、そのせいで後ろからガサツと音がしたことに気付かない。

よく見えもしないその穴に夢中だ。

その時突然、野太い声が辺りに響き渡った。

「コラアアツ！！ワレら、何しさらしとんじゃ　　ツ！！？」

「！！？」

バツと振り返ると、そこには大人2人が立っている。

次の瞬間、声を出すこともなく、垣根に飛び込むタケシとパクが、直樹は逃げ遅れる。

ザザザザツ！！

大人たちは即座に直樹に飛びかかり、しっかりと押さえ込んだ瞬間、直樹は自分の中でいんなモノが崩壊していく音を聞く。

「あー！待って！置いてかないで！！」

直樹が叫ぶと、パクとタケシはすぐさま垣根の中からこちらに飛び出してきた。

押さえ込まれている直樹の目の前で、2人はその大人たちの顔面に蹴りを入れる。

ドゴツ！！

後ろに転がりコケたのは、1人。

押さえ込んでいるのが1人になり、何とか立ち上がった直樹が後ろを振り返ると、今度はパクが2人に押さえつけられている。

そして大人1人の背中に飛び乗っている、タケシ。

パクは押さえつけられながら、直樹に向かって叫んだ。

「直樹！お前は早よ逃げろ！早う！早う逃げエー！！」

その言葉を聞いた直樹は、先ほど頭の中で崩れ落ちたナニかを、すぐに組み立て直し、

直後、

「アア ツ！！！！」

叫びながら、大人2人に思いっきり体当たり！

ドカンッ！！

その全力タツクルで尻餅をついた2人は、顔を押しさえながら、

「このクソガキら~~~~ツ！！」

「早よ警察呼べエー！！」

3人はその隙に垣根を抜け、猛ダツシュでその場から逃げる。

3人とも全速力だ。

「このクソガキ~~~~ツ！！警察や！早よ警察呼べー！！」  
背後で罵声が轟く。

そんな言葉を投げかけられたのは、もちろん初めての直樹。

ふと、鉄格子の中で膝を抱えている自分が頭に浮かび、何だか笑えてきた。

「クククツ！アーツハツハツハツハ！！」

それに合わせて、パクも笑い出す。

「アハハハツ！ヒヤーツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤ！！」

そんな2人を見てタケシは、

「お前ら、ナニ笑るとんねん！！ナニが面白いんじゃ！？収穫ゼロやないか！まったく！」

俺はこの同盟から抜けさせてもらおう！！」

「アハハハツ！何やタケシ！お前1人、マジやな！」

何や、それはロンリー童貞になるいうことか？勝手にやっつけ！！」

直樹は笑いながら走り続ける。

とにかく、楽しい！

とにかく、楽しい！！

これで何回目だ？

世間って、

やたらと、

広い！！！！

## 変化 2

この日は日曜。

昼食を済ませた直樹は部屋で、退屈だなあと伸びをする。

これまでの自分なら、退屈だなあと考えている時間はなかったはず。

今日はタケシともパクとも会う約束をしていない。

紀子にも会えない。

それを退屈と表している。

ベッドの上でゴロゴロしていると、1階から「ただいまー!」という慶也の声が聞こえてきた。

その声に、退屈な直樹は下に下りて行く。

慶也は風呂場で、ドロだらけの野球のユニフォームを脱いでいた。

「今日は野球だったのか」

「うん、今日は試合だったんだ。今日僕ね、4 - 3だよ。4打点。スゴイでしょ!」

ユニフォームを脱ぎながら答える慶也。

4 - 3、4打点の意味が、直樹には分からない。

「う、うん、スゲーじゃん」

と一応答えてみる。

「スパイクのヒモが切れちゃってさ。予備がないから買いに行かないきゃ。」

あ! そういえばお母さんの言った新しいグローブもまだ買ってもらってない!

お母さん! お母さん! ー! ー!

そんな慶也を見ながら、直樹は一つひらめいた。



……久保さん家って、確かスポーツ用品店だ。

直樹は慶也に寄って行き、

「なあ慶也。だったら今から買いに行こうぜ。俺がグローブ買うの、付き合ってやるよ」

すると慶也、

「え〜、何で？いいよ、一人で行くから。今日は、今から見たいテレビもあるしさ」

「何だよソレ！テレビなんかいつでも見れるじゃん！

なあなあ〜、頼むよ慶也。俺も一緒に連れてってくれよ〜！」

スルツと立場が入れ替わるこの兄弟。

「…もう、しょうがないな。じゃあごはん食べたらね」

そう言って、慶也はリビングの方に向かっていく。

よし！確か、あの通りだよな…。

買い物に行くんだ。文句はないよな……うん、うん。

紀子に会えるかも、とソワソワし始める直樹。

よし、俺も参考書を買おう。

そう考え、

「参考書を買いたいのでお金頂いていいですか、お母さん」  
そうして母からお金を受け取る。

慶也も母親にしがみ付き、グローブのおねだりをしている。

その様子を見ながら、直樹は一旦2階に上がり、ベッドに横になった。

そうしながら、慶也の食事が終わるのを待っている。

しばらくすると下から、

「行って来ます！」  
という声。

びっくりした直樹、窓から大きく突っ込んだ。

「おおいッ!!」

慌てて階段を駆け降り、外に飛び出す。

「何だよ慶也!!先に行くんじゃないよ!置いてかないでくれよ!!  
まったく!どういっつもりだよ!？」

マジギレの直樹に慶也は引き気味で、

「…あ、ごめん、冗談、冗談だよ」

「まったく!そんな冗談、ドコで覚えて来るんだよ!」

直樹は必死だ。

2人は自転車に乗り、直樹は慶也の前を走りながら、以前紀子から説明を受けた商店街に向かう。

「えー、兄さん、そんな遠くまで行かなくても、近くにあるよ?」

「うるさいッ!黙ってついて来い!!」

……さつき置いて行かれそうになったことにキレているのか、計画を潰されることがコワイのか。

直樹は熱い。

商店街に着き、一軒一軒店を確認しながら、直樹たちはゆっくり進んで行く。

その内、ショーケースの中に野球のバットやサッカーボールが展示されている店を見つけた。

看板を見ると、

『久保スポーツ』

ここだ!!

直樹は慶也に説明することなくさっさと自転車を止め、慌てて店内へと入って行く。

それに、急いでついて行く慶也。

「ハイ、いらつしゃーい」

その声とともに中から出てきたのは、おじさん。

きつと久保さんのお父さんだ！

背筋をピンと伸ばし、

「こんにちは！」

と見事な90度の挨拶で返す直樹。

「ほら！慶也も挨拶して！」

言われた慶也も、直樹と同じような挨拶をする。

「こんにちは」

「エライ行儀の工工兄ちゃんらやな。今日は何の用事？」

…アレ？何の用事だっけ？？と悩む直樹の隣から、慶也が素早く答えた。

「硬式のグローブを買いに来たんだ。あと、スパイクのヒモ。いいのある？」

おいおい慶也！敬語使えよ！！

そんなことを考える直樹を放っておいて、

「それならこつちや」

と、2人は店の奥へと行ってしまった。

1人になった直樹は商品を手に取りながら、店の奥ばかりを見ている。

久保さんが出てこないかな……と。

やがて、表へ戻って来たおじさんが直樹に話しかけてきた。

「お兄ちゃんの方は何の用事や 何かいるん？」

ビツクリした直樹、咄嗟に、

「はい、参考書を買いに」

「ハア？」

その返事に戸惑いながら何と答えようか逡巡していると、慶也が2つのグローブを手に戻って来た。

「どっちがいいかなあ？青のが欲しいんだけど、この茶色の方がしっくりくるんだよな」

そんなことを言われても、直樹にはよく分からない。

「だったら両方買っちゃえばいいじゃん」

すると慶也が驚いたように、

「何言つてんだよ！1個1万円くらいすんだよ！？そんなにお金もらつてないよ！」

「え！？こんな臭いモノが1万円もすんの！？」

失礼な直樹。

おじさんにジロツと睨まれる。

2つを見比べ、交互に手に嵌めて迷っている慶也が、おじさんに尋ねた。

「ねえおじさん。このグローブ、ちょっと使ってみてもいい？」

それに対し、おじさんは快く、

「ああ、エエよ。じゃあちよつと待って」

そう応えようと、

「おーい！おーい！紀子ー！？」

店の奥へと入って行きながら、大きな声で叫んだ。

…え！え！？紀子！？

ドキドキと胸を高鳴らせる直樹。

紀子って、久保さんだよな！？な！？

するとすぐに、

「はい！」

返事をしながら出てきたのは、やはり紀子。

「ワシ、ちょっと店見とかなアカンから、お前ちょっとこの子とキヤッチボールしたってくれ。

グローブ決めかねとんねん」

「ああ、エエよ」

直樹の前に現れたのは、今まで直樹が見たことのない私服の紀子。

「……ああ……！やっぱり正解だ……！！  
来て良かった！！」

などと思っている直樹の前で、

「よし、じゃあ私とキヤッチボールしてみようか」

そうして外に出て行ってしまふ、紀子と慶也。

「……………」

存在していることにも気付いてもらえない、直樹。

仕方なくひよこひよこ後をついて行く。

店の隣の駐車場でキヤッチボールを始めた2人を、直樹は何故かひっそりと隠れるようにして見つめている。

何度かキヤッチボールを繰り返してから、やがて慶也は

「よし！僕、こっちの青い方にする！」

それに対し、紀子が笑顔で言った。

「ソレ内野手用やから、内野守る機会が多いんやったらソツチの方がエエよ、やっぱり」

「うん！お姉ちゃん、ありがとう！」

そんな遣り取りをしながら、2人は店の方へ戻ってくる。

そうして看板を通り過ぎようとしたところで、紀子はようやくその前に亡霊のように突っ立っている直樹に気付いた。

「わぁッ！ビックリした！秋月くん！？何してんの！？」

気付いてもらえなかったことに落ち込んでいる直樹。

「……………ああ、……………彼、俺の弟です……………」

沈みきつてそう答える。

「へえ！弟くんは野球やってんねや！秋月くんもせつかく身長あるんやから、何かやった方がエエで？」

そして慶也の腕を握りながら、

「ホラ、弟くんなんかまだ小っちゃいのに、腕力チカチヤん」

そう言つて、今度は直樹の腕も握り、

「ホラ、身長差こんなにあるのに、腕の太さあんまり変わらへんで

やっぱり秋月くんも、ちよつと鍛えた方がエエんちゃう？」

「……………」

ズブズブと、更に沈んでいく直樹。

紀子は言うだけ言つて、再び店の奥へと消えて行った。

……………はあ……………あ……………

安息日だからって言つて、溜息が絶えないなんて、どんな日だよ……………。

帰り道、直樹の後ろを走りながら、慶也は揚々としている。

「帰ったら早速ワックスかけなきゃ！兄さん、ありがとうね。普通のお店では新品のグローブを、あんなにして使わせてくれないんだ

よ。いいお店だったね！」

足取り軽い慶也に比べ、直樹の踏み締めるペダルはひたすら重い。

「ああ！そう！！良かったんじゃないの!?!」

「?????」

帰りも不機嫌な直樹。

その自転車のカゴには参考書ではなく、鉄アレイが2個積まれていた。

直樹は就寝前に、紀子の店で購入したその鉄アレイで1時間筋力トレーニングをすることを決めた。

寝るのを遅くするのではなく、勉強時間を1時間削ってのトレーニング。

他の誰かに言われたのならまだしも、紀子にああ言われた自分が許せない。

直樹が初めて持った、異性へのプライド。

次の朝、目を覚ました直樹が食卓に向かうと、そこには父の姿があった。

昨夜遅く帰宅したようだ。

「おはようございます、お父さん」

「……うむ」

いつもの会話。

違うのは、直樹が抱いている父への違和感のみ。

ただ、違和感を覚えたのは直樹だけではなかった。

父は直樹の姿を見て、目を見開く。

「直樹！お前、何だ、その制服は！何て格好をしとるんだ！？ちよつとそこへ立ってみなさい！」

驚いた直樹はその言葉に即座に反応し、立ち上がる。

「お前、その制服はどうしたんだ！？何でそんなダボダボのズボンを穿いとる！？」

そして隣の母に目を遣り、

「お前が買ってやったのか！？」

それには直樹が答えた。

「いえ、お父さん。これは僕がもらったものです。

以前買っていたいただいた制服は、手違いで墨汁をこぼしてしまつてダメにしてしまつたので」

「もらっただと！？誰にだ！！」

すごい剣幕の父に、直樹は落ち着いて受け答える。

「はい、友人からいただきました。別の中学に通っている人たちですが、お兄さんが僕と一緒に学校に通っていたらしくて、お下がりをいただきました」

「友人だと！？しかもそんな不良みたいな学生服を拾ってきおつて！！」

何でお前はそんなゴミと付き合つとるんだ！！」

父は続けて母を責め始めた。

「私は忙しいんだ！何故お前は、こいつらの面倒をちゃんと見ていない！！？」

直樹がゴミに感化されていったら、どうするつもりだ！？」

激昂する父の顔を見ながら、直樹はふと思い出す。

…あの時一緒にいた女性に見せていた、父の笑顔を。

今まで一度も見なかったことのない、父の顔。

あれ以来、自分の中でモヤモヤしていたものが父に対する怒りであることに、この時直樹は初めて気付いた。



「……お父さん、彼らはゴミではありません。こんな僕に情を抱いてくれ、無条件でこの制服を僕に譲ってくれたんです。今すぐ、さっき言ったことを撤回してもらえませんか」

この日、直樹は初めて父に反抗した。

じっと睨みつけるような姿勢を取っている直樹に、父は逆上する。

「直樹！お前は以前、私が言ったことを忘れたのか！最下層の草や虫に習うことはない！これが全てだ！

私はお前にライオンになれと言った筈だ！お前はあれを理解できていなかったのか！

いいか、直樹。一時の雑音に惑わされるな。お前はライオンになるんだろう！！」

怒りがおさまっていないのは、直樹も同じだ。

「お父さん、僕たちは草食動物でも、肉食動物でもありません。人間です。

彼らの言っていることは雑音なんかじゃありません。ちゃんとした響きです。

僕のお腹の中には、いろいろなものが残っています。

お父さんの言っていることというのは、間違っていますか？何かから逃げているんじゃないやありませんか？

それは何ですか？

生きるために逃げているんですか。逃げるために生きているんですか。

教えてください」

全身を震わせながら、そこまで直樹の言葉を聞いていた父は、

「とにかく、私は許さん！！」

そう言い残し、自室へと戻って行った。

「……………」  
「……………」

呆気にとられている母。

俯いてしまっている慶也。

そんな彼を見て、

「……………慶也、ごめんな」

一言声を掛け、直樹も学校へと向かった。

登校中、直樹は考える。

最近の俺は、気が散っているのか。

……………いや、違う。

覚えなきやいけないことが、たくさんあるだけなんだ。

お父さんは間違っている。

俺は泥棒したわけじゃない。

何も盗ってない。

その日の授業が終わると、直樹はタケシとパクの迎えを待ち、一緒にパクの家へと向かった。

いつものように。

そして一緒に勉強をする。

それは直樹にとっての楽しい時間。

しかし直樹は今日1日、今この時間も、まだ言い足りない父への発言を繰り返しシミュレーションしていた。

まだ、2人をゴミと言ったあの言葉を撤回してもらっていない。

帰宅した直樹は、机に向かいながら父の帰りを待っているが、いつもの時間になっても、父は帰って来ない。

……何だ。今日は残業か。  
じゃあまた朝に話そう。

そう考え、床に就いた。

次の朝、直樹はいつものように目覚め、着替えようとクローゼットを開けた。

しかしすぐに気付く。

パクから譲ってもらった、あの学生服がないのだ。

あれ？

不思議に思って部屋を見回すと、机の上に学生服が畳まれて置いてある。

……あれ、寝ぼけたかな。

直樹はその学生服に袖を通して、……そして違和感。  
ズボンにいつものダボダボ感がない。

「!？」

制服は直樹が寝ている間に、新しいものに変わっていた。  
直樹はそこでハッと気付く。

走って階段を降り、リビングのドアをバンツと開けると、そこには母がいた。

「お母さん！お父さんはどこですか！」

「お父さんなら今日はもう出勤しましたよ？どうしたんですか、直樹さん」

その言葉を聞いた直樹、今度はキッチンにいるお手伝いの土井さんに駆け寄る。

「土井さん！何かお父さんに頼まれたんじゃないやありませんか！？僕の学生服がないんです！知りませんか！」

土井さんの両肩を掴み、すごい剣幕で捲くし立てる。

そんな直樹に、土井さんは言い難そうに口を開いた。

「……申し訳ございません、直樹さん。お父様に申し付けられまして……」

そう言いながら、玄関の方をチラチラ見ている。

「……………」

直樹は裸足のまま玄関を飛び出し、ゴミ置き場へと走った。全速力で。

そこで見つけたのは、紙の包み。

バリバリバリッ！！

急いで破り開けると、中にはパクからもらった学生服が押し込まれている。

「……」

それを抱きしめ、直樹は吼えた。

「ちくしょう……！！」

その言葉は、父に対するもの。

直樹は学生服を持って部屋へと戻り、それに着替えた。

……俺はもう、これから朝食を食べずに登校する。  
お父さんとは、しばらく顔を合わせない！

その日の夜から、直樹は学生服を抱いて眠るようになった。  
それが今の直樹にできる、唯一の抵抗。  
今の直樹は、父から逃げることしかできないのだ。

## 成長 1

直樹が『楽しい』と表する日々は続く。

これまでの人生、

『楽しい』

『嫌なこと』

…そんな風に考えたことなどなかったのに。

今日から3連休だというのに、その初日に外は雨。

これまでの直樹にとって、休日の雨など眺めることも考えることもなかった。

しかし今の直樹は、自分の部屋から眺める雨が少しばかり憂鬱。数ヶ月前まで『ここにいるのも2〜3年だ』、これを辛抱だとしていた直樹が、今はこの地の休日の雨を憂鬱に思うのだ。

直樹は自室に籠り、本を読んでいる。

片方で本を持ち、もう片方には鉄アレイ。

暇さえあれば、自分の腕にグツと力を入れてみる。

太くなつたんじゃないの？

スゴイんじゃないの？

そんなことを考えている。

とその時、階下で電話が鳴った。

電話などには出たことのない直樹は、それを無視する。しかしいつまで経っても、誰も出ない。

あれ？

不思議に思って、階段の上から1階を覗き込む。  
やがて電話は切れてしまった。

土井さんはいないのかなあ？

すると、また電話が鳴り始めた。

直樹は駆け足で階段を降り、受話器を取る。

「はい、もしもし。秋月です」

「……あ、あの、すみません。直樹くん、いますか？」

これまでの人生で、直樹個人に電話がかかってきたなんてことはなかった。

直樹は驚く。

「直樹は僕だ！誰だ!?!」

そう答えると、受話器の向こうの声が少し柔らいた。

「おー、直樹か。良かった。お前んトコのオトンやオカンが出たら何か怖そうだから、切ろう思ってたんや。

俺や。パクや」

直樹は先日、パクに自宅の電話番号を教えたことを思い出した。

「おー、何だよ！パクウかよ！俺はまた強盗か何かかと思つたよ！なにになに？俺に電話なんかしてきてさ！1時間くらいなら話してもいいぜ」

初めての自分への電話にテンション上がり気味の直樹。

「……………。イヤ、そがいに話さんでも構へん。お前なあ、明後日何か用事あるか？」

今のこんな直樹に用事などない。

「何もないよ」

『実はな、ウチの店の客がプロレスのチケットくれてん。3枚あんなんよ。お前も行くか?』

そのパクの言葉に、直樹は歓声に近い声を上げる。

「プロレスだって!? ホントかよ!? 俺さ、プロレスなら知ってんだよ!!!」

直樹がまだ幼い頃、唯一見ていたテレビアニメ。

それは夕方放送されていた『タイガーマスク』

直樹は親の居ぬ間を見計らい、そのアニメを夢中で見ていたものだ。

「パクウ! アレだろ! タイガーマスクだろ!?! 虎の穴から来たヤツらのあのプロレスだろ!!!」

その大声にビックリしたパクは、

『お、おう。そうやで。タイガーマスクや。新日やで。猪木も来るで』

「え? 猪木??」

不思議そうな直樹の声を聞いてパクは言った。

『虎の穴まで知ってって猪木知らんなんて、お前ワケ分からんな。』

まー、とにかく明後日5時に 会館の時計前で待ち合わせや。

入場料はいらんけど、メシ食う金くらい持って来いよ?』

「うん、分かった!」

直樹がそう答えると、パクはそのまま電話を切ってしまった。

ツー、ツー、ツー……

「あれ? パクウ? もしもしー? もしもしー?」

仕方なく受話器を置いた直樹。



まだ5分も話してねえぞ？  
パクウは気が早いなあ……。

直樹は再び2階へと上がって行く。

でも、タイガーマスクはマンガだからなあ。  
実際にはいないんだろうなあ。

そんなことをつらつらと考えていると、直樹は今の退屈さが堪らなくなってしまうた。

よし！今からパクウん家に遊びに行こう！

直樹は机の引き出しを開け、参考書などを買ったときのお釣りをかき集める。

もう外は寒いだろうなあ。

そう思い、ジャンパーを羽織って下に降り、リビングを覗くと母の姿があった。

あれ？いたんだ。

「お母さん。ちょっと図書館まで行ってきます。少し遅くなるかも  
しれません」

「……………」

ヘッドホンを付けている。

音楽を聴いているのだろう。母からの返事はない。  
直樹は構わず、外へ出た。

空を見上げると、霧雨。

傘の持参を少し迷い、ふと明後日の約束のことを思った直樹は、傘を差してバス停まで歩いて行く。

休日に予定があるって、なかなかいいもんだな。

風が吹くともう冷たい季節。

先ほどまで憂鬱だった雨も、あつと言う間に楽しさの一つになる。

直樹はバスに乗り込み、窓から外の景色を眺めた。

過ぎ行く家々。

通り過ぎる人。車。犬に猫。

飛んでいくビニール袋。

雨。

途中一度バスを乗り換え、直樹は再び傘を差してパクの家へ向かって歩く。

パクの家へ着くと、まずはお母さんに挨拶をしようと店を覗いた。

「こんにちは」

仕込みをしていたパクのお母さんは直樹を見て、

「あら、秋月くん。いらっしやい！一人で来たんかいな」

「はい」

「あの子、今家におらんで。またタケシとどっか行つとるんとちゃうかー？帰ってくるまで上がって待つといてエエで」

パクが留守だと聞いてがっかりする直樹。

「…あ、そうですか。じゃあ、また来ます」

店の扉を閉めて向かいの道路を見ると、先ほどまでと違い、雨が強く打ち付けている。

「……………」

また憂鬱になってしまった直樹、とぼとぼと歩きながら、今日はもう家に帰ろうかなあ……  
そういえば、お母さんに図書館に行くって言ったな。  
最近の俺は、お母さんによく嘘を吐くな……  
この辺はちゃんと元に戻さないと。

そうやって考え事をしながら歩いていると、いつの間にかバス停を過ぎていた。

あれ？

ここ、どこだ？

周りをキョロキョロ見回すと、それは以前見たことのある景色。

……あれ。

ここ、どこだっけ？

もう一度辺りをぐるりと見渡すと、直樹の視線の先に一軒の家がある。

……あ、そっだ！

道路沿いの、土手になっているその先にある建物は、以前タケシと自転車で2人乗りをしたときに彼が教えてくれた自宅。

あれって、タケシン家だよな。

直樹はパクの家には何度も行っているが、これまで一度もタケシの家には行ったことがない。

前に一度、タケシの家に遊びに行こうと提案したとき、

「ウチには何もなければアカン」  
そう断られたことがあった。

ひよっとして2人はタケシの家にいるかもしれない。  
直樹は土手を登るようにして、タケシの家へと向かう。

やがて土手に上った直樹の目前に広がったのは、敷地内というよりも、広い場所にぼつんと建っているように見える、家。周りには草がぼうぼうに生えている。

真つ黒の木造の家は、お世辞にも大きいとは言えない。

表札も掛かっていない玄関の引き戸を、直樹はノックしてみた。  
ガチャン、ガチャン、ガチャン！

「こんにちはー！タケシくんいますかー？」

……返事はない。

引き戸に手を掛けてみると、鍵はかかっておらず、直樹はそれをガラガラと開けて、

「こんにちはー」

もう一度声を掛ける。

すると奥から足音が聞こえてきて、

「はい」

出てきたのは、パジヤマ姿の女の子。

「あの、岡崎くんのお宅ですか？」

そう尋ねた直樹に、その女の子が応えた。

「うん。…あ！お兄ちゃんの友達や！ウチへ初めて遊びに来た！

お兄ちゃん、出掛けてて今おらへんねん」

その子は小学生くらいの女の子。

どうやらタケシの妹のようだ。

「1人でお留守番？風邪引いてるみたいだけど、留守番なんてえら

いね」

「私、風邪なんて引いてないよ。心臓が病気やから、いつもこうやって寝てんねん」

その言葉を聞き、直樹はこれまで読んだ本の記憶を辿る。

狭心症

心房中隔欠損症

心臓弁膜症

……

何にしても大変じゃないか！

「……あ、ごめんね。お兄ちゃんいないんだったら、また来るよ。

僕はいいからさ、寝てて」

女の子は直樹の言葉を聞き、

「お兄ちゃん、もうすぐ帰って来るかもしらへんから、待ってたらいいやんか」

「……………」

人の家に勝手に上がり込んで、待たせてもらう。

今の直樹には抵抗はないけれど、少し遠慮してしまう。

……でも今日は寒いし、2人で居た方が部屋はあったかいかもしれないな。

誰かが帰ってくるまで、一緒に待ってあげようか…

そう考え、直樹は言った。

「それじゃ、お邪魔します」

女の子は嬉しそうに直樹を部屋まで通してくれる。

そこはとにかく小さな家。  
台所と茶の間、この2部屋しかない。  
床を踏むと、きしみて沈んでいく感覚。

「……………ねえ、お父さんとお母さんは？」

「お母さんはお仕事。お父さんはね、私が小さいときにいなくなつたから、知らへんの」

「……………」

直樹はここで考える。

今まで自分は、タケシとパクに対して友達だという感情を持ち合わせていた。

でもこれは、一方的なものだったんじゃないか。

……………考えてみたら、俺はタケシのことを何も知らない。

女の子は押入れの中から座布団を1枚出して、

「どござ」

と直樹に差し出してくれた。

茶の間には布団が一組敷いてあり、ちゃぶ台が一つ、そしてテレビと箆笥。

外で強い風が吹くたびにピューツという音が鳴り、どこからか冷たいすきま風が入ってくる。

「俺のことはいいからさ、君は布団に入ってたよ。冷えちゃダメだよ」

すると女の子は直樹の言ったとおり布団に入り、うつ伏せて何かを書き始めた。

直樹がそつとそれを覗き込むと、それは漢字のドリル。

「ああ、宿題やってんだね」

「私、学校行けてへんから宿題なんかないねん。」

これはねえ、最近お兄ちゃんが勉強見てくれるから、帰るまでにや  
つてるんよ」

「学校に行つてないって、どういうこと？」

「発作が起こつたらアカンから、学校から来んといてって言われて  
ん」

「……………」

直樹は次の言葉が見つからない。

タケシが何故自分に、勉強の教え方を教えろと言ったのか。

何故、と聞いたとき、

「まあ、それはエエやないか」

そんな返事が返ってきて、それ以降何も聞こうしなかった自分。  
どこか目指す高校でもあるんだろうと、そうやって自己完結させ、  
タケシのこのことに関する興味をそれ以上にしていなかった。

…………… タケシは、この子に勉強させてあげたかったんだ。

「…………… ねえ、病院には行つてるの？」

「ウチなあ、貧乏やからなあ、病院には行かれへんねん。お母さん  
がお薬だけもらつてくる」

「……………」

また、直樹は次の言葉が見つからない。

「…………… 勉強、何か分からないトコない？俺さ、学校ではまあまあ成  
績良い方なんだよ。分からないトコあつたら見れるよ？」

「えー、ほんまに？じゃあねえ、えつとねえ、お兄ちゃんの説明だ  
つたら分からへんトコがあつたんや。」

算数なんやけどな」

「うん、いいよ。どれどれ？俺が見るよ」

この2人の空間で直樹ができることはこれしかなかった。

他に何も考えないようにするために、直樹は目の前のドリルと彼女の表情のみに集中している。

「名前は何ていうんだい？」

「美奈子」

「何歳？」

「9歳」

会話といえば他愛の無いもので精一杯。

するとその途中で、美奈子が大きな咳をし始めた。

ゴホッ！ゴホッゴホッ！！

ゲホゲホゲホッ！！

えずきを交えながらの重い咳。

ゴホッゴホッゴホッ！！

咳はなかなか止まらず、しばらく続く。

直樹は周りを見回してティッシュを探すが、見当たらない。

急いでポケットからハンカチを取り出し、美奈子の口元へと持って行った。

ゲホゲホゲホッ！

ゴホゴホッ！

しばらくしてやっと咳が治まったとき、直樹はそのハンカチを見て思わず引いてしまった。



……血が付いている。

と、吐血!?

「ねえ！口の中、切ったんじゃないよね!？」

その問いに、美奈子はあつさりと返事をした。

「こんなのいつもやねん。薬飲んだら治まるから平気なんや」

そう言っただけで起き上がり、筆筒の引出しを開けてごそごそし始める。

「ちょっと待って！君、ごはん何時に食べた!？」

「11時半」

時計を見ると、3時を過ぎている。

「ちょっと待ってよ。3時間以上経ってるから、もう胃の中に何も  
ない状態だよ」

直樹は台所へ行き、冷蔵庫を開けてみた。

しかし、中には何も入っていない。

「いいかい、まだ飲んじゃダメだよ。薬はちょっと待ってて。俺、  
何か買ってくるから。」

これは食べちゃいけないって物ない？お医者さんから何か言われて  
ない？」

「生卵とカニとかエビとか、アカンて言われてる」

……そっか、甲殻類アレルギーか。

「10分だけ待ってて。そのスーパーで何か買ってくるから」

直樹は外に出、傘も差さずにスーパーへと走る。

そして牛乳・はちみつ・ロールケーキを買って、急いでタケシの家  
に戻った。

直樹が風邪を引いたとき、いつも土井さんが作ってくれるはちみつ  
入りのホットミルク。

自分で作ったことなどないが、この時の直樹に『俺が作れるのか?』

という自問自答はない。

……血が出てるってことは喉のどこかが悪いか、  
もしかすると胃潰瘍なのか……？

直樹は家に入ると、生まれて初めて台所に立った。

鍋で牛乳を沸かし、その中にはちみつを溶かし込んでいく。

ロールケーキを包丁でカットして、ホットミルクと一緒に美奈子の元へと運んだ。

「安物のケーキだけど、食べないよりいいからさ。」

牛乳で胃に膜を張ってから、薬を飲む方がいいんだよ」

ロールケーキを目の前に、美奈子は大喜びだ。

「ありがとう！あゝ！この牛乳めちやくちやおいしい！何で!？」

「はちみつを入れてるだけだよ。お母さんに作ってもらいなよ」

ロールケーキを2切れ食べ、牛乳を飲んだ美奈子は、薬を飲んでまた布団の中に入った。

「薬を飲んだ後はちゃんと睡眠をとった方がいいんだ。俺がちゃんと留守番してるからさ、寝ちゃいなよ」

「うん」

嬉しそうに返事をした美奈子は、すぐに寝入ってしまった。

……おい、タケシ。

一体どうなってんだよ。

俺にお好み焼きを奢ってる場合か？

冷蔵庫の中が空っぽじゃないか。

何のための冷蔵庫なんだよ。

直樹はタケシの家の現実を見ながら、イライラしている。

自分の日常を紐解き、思い返すが、直樹の中にこういう光景は一秒

たりとも映っていない。

「……………」

寒い家。

吹きこんでくる隙間風。

冷たい畳の感触。

そして、青白い頬をした9歳の少女。

逃げ出したい気持ちを抑えながら、直樹はただ時間が経つのを待っていた。

しばらくすると玄関からガサゴソと物音がして、ガラス戸に人影が立つのが見えた。

ガラガラという音と共に入ってきたのは、ずぶ濡れになった女性。タケシのお母さんのようだ。

138

突然の家族の登場に慌てた直樹から出たのは、言い訳がましい言葉。

「あ、いや、違うんです。えっと、僕はタケシくんの友達で、えっと……………」

「あら、珍しいね。タケシが友達連れてくるなんて。

あれ？でもあの子、おらんやんか」

「あ、はい。帰るのを待たせてもらってました」

「ふーん……………」

言いながらこちらに背を向け、タオルでわしゃわしゃと髪を拭いているタケシのお母さんに、

「あの、妹さんが咳き込んだじゃったんで、薬を飲む前にホットミルクとロールケーキをあげちゃったんですけど、大丈夫だったですかね？」

直樹の言葉に彼女は振り返り、

「ああ、そう。何か悪かったねえ」

そして置いてあった牛乳をラッパ飲みしながら、直樹に言った。

「タケシやったら、町のゲームセンターでタム口ってんちゃうか？待ってるより行った方が早いと思うで」

「あ、そうですか。じゃあ今から行ってみます。」

お邪魔しました」

直樹は腰を上げ、玄関に向かう。

最後にもう一度挨拶しようと振り返ると、タケシのお母さんは直樹が美奈子のために買ってきたロールケーキに、包丁を入れることなくそのまま齧り付いていた。

それを見て何も言わずに視線を元に戻し、外に出る直樹。

静かに玄関のドアを閉めると、雨の中を走り出す。

……何か、分からない。

何故だか、分からない。

だけど、何だか湿っぽい。

バス停に着いたところで、傘をタケシの家に忘れてきたことに気づいたが、もう取りには戻らない。

……タケシか、美奈子ちゃんが使ってくれればいいな。

そう思い、雨に濡れながらバスが来るのを待った。

すっかりこの街に慣れた直樹。

町のゲーセンと言われれば、すぐにどの辺りか分かる。

直樹はバスに乗り、タケシがいるであろうゲーセンに向かう。

……マズイなあ。

街に出るときは、制服着用が校則で決まってるんだけどなあ。

何となく先ほどのことを思い出したくないと思い、かき消そうとする直樹は別のことに頭を寄せる。

直樹はこれまでの人生、ゲーセンなどに入ったことはない。

おぼろげな印象として、そこは不良の溜まり場だという認識でいる。学校の関係者に見つかりませんように。

そう思いながら、外からでも十分騒がしいゲーセンの中に入って行く。

中は非常にタバコ臭い。

そしてとにかくうるさい。

……よく好き好んでこんな所へ来るよな。

絶対馴染めないよ。

そんなことを考えつつ、直樹はきよろきよろとタケシの姿を探す。

まず、タケシの学校の制服を探そう。

そう思った直樹だが、みんな私服姿で分からない。

…髪型がタケシみたいな奴に、片っ端から聞いて行こうか。

直樹はゲーセンの中を1周、2周……ぐるぐるうろろし続ける。

と、トイレの看板の前に、見たことのある顔がちらりと見えた。

周りの騒音でよく聞こえないが、誰かに向かって怒鳴りつけているような様子だ。

直樹はじっと、そちらを見る。

そこには3人の男子がこちらに背を向けて立っていた。

その中の2人の横顔に、何だか見覚えがあるような気がする……。

……アレ？

アレ、誰だったかな……。

うーん……

思い出せない。

直樹は彼らに近づき、後ろから声を掛けようと口を開きかけた。

しかしその直後、3人の隙間から見えるその向こうに、1人へたり込んでいる人に気づく。

覗き込むと、それはタケシ。

……あ！！

直樹は3人を掻き分け、タケシに近づいた。

「タケシ！ 探したぞ！！」

話し掛けた直樹に、タケシは、

「へへッ！へへッ！へへへへへへッ！へへッ！へへへへへへッ！

……おう、秋月やないかい。お前何や？何でこんなトコにおるんや」  
タケシの目は何だか虚ろで、様子がおかしい。

「何だ？この3人にやられたのか？怪我したのか？大丈夫か、タケシ」

両肩を掴んで揺さぶる直樹にタケシは無抵抗で、首がガクンガクンと前後に揺れる。

見たところ、タケシの体に流血している様子はない。

## 成長 2

直樹は立ち上がり、後ろを振り返った。

タケシを取り囲んでいた3人の顔を、もう一度よく見てみる。

すると、

「あ！お前、マイティーだ！マイティーだろ！？」

指を差しながらそう叫んだ直樹の顔を見て、相手も気づいたようだった。

「…ああ、お前、こないだの」

直樹はマイティーの言葉に耳を貸さない。

「3対1なんて卑怯だろ！卑怯だろ、マイティー！！」  
言いながら、やる気でメガネを外す直樹。

……しかし、

アレ、やっぱり何も見えない……

そう気づき、再びメガネを掛け直す。

「自慢じゃないけど、俺はケンカなんて馬鹿馬鹿しいと思ってるし、やったこともない。」

ただどこれで3対2になったぞ！

このまま警察に行くか？！ケンカするか、謝るか、どれか選べ！！」  
最近鉄アレイで鍛えている直樹は、少し自信を持ってしまっている。  
選択肢が一つ多い。

するとその言葉を聞いたマイティー、呆れながら溜息交じりに直樹に返した。

「ワレなあ、どういうつもりか知らへんけど、ツレなんやったらもつとコイツのこと見張っとけ！」

そしてマイティーが直樹に向かって突き出した手の中には、ビニール袋。

「何だ、ソレは。お前たちのような卑怯者に罵倒される覚えはない！！」

直樹が叫ぶと、マイティーの隣にいた仲間の一人が口を挟んだ。

「お前、ちよつとソコ、足元見てみい」

指差された方向を見ると、そこには茶色い小さなビンが転がっている。

直樹にはこれが何なのか、分からない。

マイティーはそんな直樹に近づき、持っていたビニール袋を直樹に差し出した。

「あのな、俺はな、こういうのが大嫌いなんや。ここでラリツとるコイツがどうなるうが知ったこつちゃないがな。俺は見つけたら張つ倒すんじゃ！」

「タケシが何か悪いことをしたのか？」

「アンパンやつとつたんじゃ、コイツ。便所に隠れてよう！」

「アンパン？アンパン食べて何が悪い！！俺を煙に巻こうとしてるな！？」

直樹の言葉は、3人を短い沈黙に陥れる。

「……誰がパンの話しとんじゃ！シンナーじゃ、シンナー！！コレ見てみい！！」

マイティーが広げたビニール袋には、透明な液体が入っていた。それに顔を近付けて覗き込むと、接着剤のようなきついニオイ。

直樹はシンナーを吸うという行為がどういう事かは知っていた。新聞で読んだことがあったから。

そしてその後どういいう症状が出るか、それも勉強済み。



マイティーはそのビニール袋の口をぎゅっと結び、ごみ箱の中へズボツ！と投げ捨てる。

それから直樹に向かって言った。

「お前相手にしとっいたら何や、ムカつきが無くなってまっわ。後はもうお前に任すわ」

「……………」

……怒りで体が震える直樹。

耳まで赤くなるのが分かる。

「マイティー、ありがとう！」

ゲーセンを出て行くマイティーの後ろ姿に一言叫び、直樹はタケシを振り返る。

地べたに横たわったまま、ヘラヘラ笑っているタケシ。

……我慢ができなかった。

「馬鹿野郎！！」

怒鳴りながら、横たわるタケシに飛びつき馬乗りになる。

そしてタケシの横っ面に向かって、直樹は大きく手を振り上げた。

ビタンンッ！！

ビタン！ビタン！

何度も何度も殴りつけて、

「タケシィッ！お前一体何やってんだよ！？」

……初めて人を殴る、感触。

気持が悪い。

「妹さあ！一人だけ置いて、お前一体何やってんだよ！！」

バシンッ！

ビタンッ！

何度も何度も引っ叩く。

泣けてくるのを抑えながら、何度も何度も。

「……イタイイタイ……イタイイタイ」

引っ叩かれながらもヘラヘラしているタケシを見て、直樹は思い出す。

シンナーを吸った後、しばらくこの状態が続くことを。

取りあえず、何か食べさせた方がいいだろう。

そう考え、タケシの腕を肩に抱き、立ち上がりさせてゲーセンを出た。外に出てタクシーを拾おうとする直樹は、雨に打たれながらパクのことばかりを考える。

パクに助けてもらいたい。

ヘラヘラと笑いながら、

「さむい〜、さむい〜……寒いぞ、秋月。……傘や……かさ」

一人でブツブツ言っているタケシに向かい、

「うるせー馬鹿！！傘ならお前の妹にやったよ！！」

タクシーで向かおうとしているのは、パクの家。

直樹はこの怒りがどういふ種類のものなのか、どっちを向いているのか分からない。

タケシに向いているのならば、このままタケシを放って帰ればいい。

何でこんなにムカついてるんだ!?

ザンザンと降って来る雨に濡れながら、直樹はタケシを抱え込み、タクシーが来るのを待っている。

やがて来たタクシーに乗り込み、2人はパクの家へと向かった。

何とかタケシのことを隠してしまいたい直樹は、パクが留守だろうが関係ない。

タクシーで乗り付け、ズカズカとパクの部屋に上がり込んでいく。部屋の扉をガラツと開けると、パクは帰って来ていた。

「うわッ!!何やねん、ビックリした〜!」

「おいパクウ!一体コイツ、どうなってるんだよ!?!」

叫んで、パクのベッドの上にタケシを突き飛ばす直樹。

ドサッ!

ゴロンッ!

勢いに任せて、タケシはベッドに寝転がる。

「……何やコイツ。コレ、ラリツとるんか」

まだヘラヘラしているタケシを見て、パクはすぐに理解した。

「あー、ビシヨビシヨやんけ!先に服脱がせるや。直樹、お前もソレ脱げエ!」

パクに慌てる様子はない。

直樹はゆっくりと座りながら、

「……なあパクウ。タケシっていつもシンナーなんか吸ってるのか?タバコ吸ってるのは知ってたけどさ」

「おっかしいなあ。コイツ、シンナーなんかやってへんのやけどな」

それを聞き、直樹は今回のことは初犯だと自分に言い聞かせる。そうして、先ほどまでの出来事をパクに話した。

直樹の話聞いたパクは、

「ハハッ！お前、タケシの家行ったんやな……。」

マイティーはああ見えて、エエ奴やからなあ」

「そんな感じに見えたよ。」

俺はマイティーは2人の敵だと思ってた」

「まー、敵っちゃー敵やけど……ただのケンカ相手やな。」

……そっかー……シンナーか」

「「……………」」

しばらくの沈黙の後、パクが口を開いた。

「なあ直樹。コイツの家、酷かったやる。もう床抜けるくらいのボ

口家や。…………なあ」

「そう。それと病気の妹がいた」

「…………あんなあ、一つお願いがあんねん。」

多分な、コイツ、家へ帰ったら美奈子からお前の話聞くやろう。せやけどな、お前からコイツの家行ったんやでって、言わんといたってくれ。

コイツから話し出すまで、お前からは一言も言わんといたってくれ」  
「…………ソレって何だよ」

その時、ベッドに横たわっていたタケシがいきなり、

「ウア　　ッ！！」

大声を上げて、暴れ出した。

「ウルツサイのう！よっしゃ！ちよっと待つとれ」

言い置いて、部屋を飛び出すパク。

そしてすぐに戻ってきた彼の手には、瓶ビールが握られていた。

「直樹、よう見とけよ。コイツは滅法酒に弱い。ちよつと飲むだけですぐに寝てしまいよんねや」

パクは、口の開いたそのビールを無理やりタケシにラツパ飲みさせる。

「ちよ、ちよつとパクウー！シンナー吸った後っていうのは、気分が高揚してて睡眠なんかとらねーよ！」

それに急性アルコール中毒になったらどうすんだよ！」

「ハハハッ！マジメやな。そんなモノ、お前の中でボンヤリさせとけ。死にゃあせんわ」

タケシは喉が渴いていたのか、そのビールをあつという間に飲み干し、すぐにベッドに横になる。

もう、さっきのような奇声は出さない。

その様子を見て、パクは直樹に向き直った。

「えつと、何の話やったかな。……あ、せやな、コイツのプライドの話や。」

お前には分からんかもしらんけど、一応俺らにもプライドっちゅーのがあんねん。

コイツはこう見えて、自分がアホで貧乏なんを恥じとる。

更に言つとやな、俺らはな、悪さばかりしてるけど、カツアゲとかな、窃盗とか、そういうことはせえへんのや。

ホンマはな、コイツに関しちやカツアゲも泥棒も悪さのついでにしたいハズやねん。

でも、せえへんのや。俺らはな」

「パクウん家も貧乏なのか？」

「イヤー！ウチは親父はガラス工場の一応社長やしな。オカンはあやつて店やつとるし、普通ちやうか。まー、お前んトコよりは貧乏やけどな。」

……どうや、直樹。俺らに合わせるの、しんどいんちやうか？大体が真逆やからな」

「そんなことねーよ」

直樹は返事をしながら、タケシの家の光景を思い出す。  
そしてもう一度、感じてみる。

「……な、パクウ。パクウの日本名、何ていうんだよ？なあ、何でソツチの名前を名乗ってんだ？教えてくれよ」

「ああ、もう一個の名前か。大林健や。」

何でソツチの名前を名乗つとるかっちゅーて、……うん、ソッコーで聞かしたら、親父が可哀想やからや。

何が聞きたい？俺は日本人や」

「じゃあどっちかっていうと、右か？」

直樹の台詞に、パクは面白そうに口の端を上げる。

「ほっほー…：ようやく喋りよったな。直樹は勉強やつとるから、その辺気になつとるやろう思うとったわ。

右や！

せやけどな、直樹。タケシはな、そんなこと関係ないねん。というより知らんのや。何回も言うけど、コイツは大分アホやからな。

ほんで高校へも行かれへん。頭ナイ金ナイ、でな」

「タケシのことはタケシから聞くよ！

パクウ！お前はどうかんだよ！？まだ隠し事があるのか！？」

「……そんなモン、あるよ。そんな中には別に隠してへんこともある。お前にだつてあるやろ。」

そんなモンや。そんなモンやねん」

直樹は覚えている。

初めて父と母に会った日のことを。

『今日からこの人がお父さんとお母さんだよ』  
そう紹介された日のことを。

パクは続けて言う。

「何か今イチ分かってへんみたいやな。お前を黙らすには説得が必要みたいや。

えつとなー、そうやなー……。

例えばな、市販されてる本がここにあるとしよう。コレをパーツと読んどる。

そしたらな、読みよる途中で誤字脱字に気づくんや。

俺はここで、人間は2種類に分かれると思うとる。

直樹、お前は頭が工工。ソコで何の躊躇もなあ自分を信じて『何やこの本。字間違つとるやん』って思うやろ。

でもな、2種類おる内の2種類目の人は、『アレ？コレ間違つとるんちゃうん？でもなー、コレ普通に売られとる本やんなあ。本がこう書いてるってことは俺が間違えて覚えとつたんやなあ』ってなつてな。今まで正しかった知識を間違つたものにすり替えるんや。コイツがドツチか分かるやろ？

『タケシのことはタケシに聞くよ！』言われても、コイツは意固地に黙り込むだけなんや。な？

俺らは働き出すまでに、さっき言った頭の工工方に向かって行けば工工思うとる」

パクの説明を聞き、直樹は感嘆の声を上げる。

「パクウはスゲエな！今のはスゲエ分かりやすかつたよ！

うん、分かった。俺は、もっと2人のことを知らなきゃいけないと思つたんだ。でも違うんだな」

「そんなモン、誤魔化しとけ！あんまりマジメに考えるな！」

パクの言葉を聞いているのかいないのか、直樹の思考は間髪入れずに次へ飛ぶ。

「なあパクウ、2人はホントにケンカが強いのか？」

「自分で言うのも何やけど、…まあな」  
「ケンカって面白いか？」  
「おう。血が騒いでしゃーない」  
「今度俺にケンカ教えてくれよ」  
「何や、そら。さつきマイティー、シバいたつたら良かったんや」  
「いや、それはダメでしょう。マイティーはいい奴だよ」  
「……せやな。アイツはエエ奴やわ」

今日はタケシをここに泊めるという話を聞き、直樹は安心して帰途に就いた。

タクシーでお金を全て使ってしまった、バスに乗れない直樹。雨が上がった冷たい、暗い道を歩いて帰る。

明日は何もねーけど、明後日は俺、プロレスだよ。  
2人と一緒に。

そう思ったら、先ほどまでの喧騒が少し遠ざかった気がした。

三連休最後の日。

直樹は約束の時間より1時間も早く、待ち合わせ場所に到着した。

『メシくらい食って帰ろう』  
パクのその言葉があったので、直樹はまた母親に嘘を吐き、お金をもらって来ている。

………すみません、お母さん。



勉強はちゃんします。

直樹はその場所でポーツと2人を待っている。

それから15分も経った頃、直樹は前の道路を歩いている2人を見つけた。

「おーい！」

声を掛けると2人は直樹の方を振り返り、こちらへ走ってきた。

「アレ？ひよつとしてお前、もう来てたん？めっちゃ早いやんけ！開場までにまだ1時間以上あるぞ。」

時間あるから茶店にでも行こう言うてたとこやねん」

そう言うパクの隣で、気まずそうにしているタケシ。

それに気づいた直樹は、

「……なあパクウ。俺の判断でこれはタケシに言ってもいいって思ってたんだよ。いいよな？」

なあタケシ。俺に何か言うことないか？」

俯き加減のタケシは、直樹の声に顔を上げた。

「……あ、ああ……ワリかった。この前はありがとう。助かったわ」

そのタケシの言葉に直樹は、

「そうじゃねーよ！お礼なんかいらねえよ！もう二度とやんねーんだな！？」

「おう、二度とやらん。こないだはな、アレをたまたま便所で拾うたんや。もうやらん」

「……よし。じゃあ俺も一緒に茶店に行くよ」

それからもう、タケシの、直樹の、いつものタイミング。

昨日、直樹がコミュニケーションしたものは少し展開が違っていたが、二度とやらないのであればそれはもうどうでもいいこと。

3人は並んで歩き始める。

その時、気になっていたのだろう。パクが直樹に言った。

「ところで直樹、お前何や、そのカツコ。ちゃんと私服持って来て

んねやるな？」

……そう。

今日の直樹の格好は、全身登校ルック。

「はあ？何言ってるんだよ。持ってねえよ。休日でも街に出るときは制服って、お前らの学校でも決まってるだろ？」

「お前、ソレ言うんやったらな、保護者ナシで夜の町ブラついたってエエんか？ウロついとるのに制服着とったら余計マズイやるが。しかもお前、今日のプロレス、多分テレビ中継あるぞ？映ったたらどないすんねん。」

お前がそのまま制服である方が、問題山積みやと思うけどな」

「……ッ」

問題点を考慮し、ショックを受けている直樹。

パクの言う通りだ。

……ヤベーよ。どうしよう。

もう帰ってる時間なんかねえよ。

泣きそうな心境だ。

「直樹、お前晩メシ代言うて、いくら貰ってきたんや？晩メシは俺が奢ったるとして、服買えるだけないか？」

直樹は自分の財布をポケットから取り出しながらも、今日持っている金額が果たして服を買える金額なのか分からない。その財布の中には、3万円ほど入っている。

それを見せると、パクは素っ頓狂な声で、

「ハアッ！？お前、小遣いいうて3万も貰えるんか！？」

「イヤ、違うよ。コレは辞書買って言うて、嘔吐いちゃったんだよ……」

直樹の言い分など聞いていないパクは、隣のタケシに向かって言う。  
「エエか、タケシ。コイツにタカるなよ？コイツはやっぱり俺らが  
見たことないくらいポンボンや！」

辞書買う言うだけで3万もくれよんのか……。  
ま、それだけありや服なんざ余裕で買えるで。  
よし！茶店はナシじゃ！服買いに行くぞ！」

そうして3人が向かったのは、パク行きつけのお店。

直樹はソコで、2人にされるがままに服を見立ててもらおう。

ダボダボのズボン

タートルネックの赤い長袖シャツ

Vネックのベージュのカーディガン

直樹は見る見る間に、見事なヤンキーに生まれ変わっていく……。

「おー！何だか2人と同じような格好になったな！」

そう言っただけで喜ぶ無邪気な直樹に、追い討ちをかけるパク。

「よっしゃ！ついでや！この近くに俺がいつも行ってる散髪屋がある。」

髪型も変えるで！カットせず髪型まで作ってもらおうや！」

「うん」

直樹は素直に、されるがまま。

やがて直樹は散髪屋から、見事なリーゼントヘアになって出てきた。  
その格好は、直樹がいつも掛けている心持ち分厚いレンズのメガネ  
まで、彼をイカつく見せている。

「……ヤバイな。こんな前から歩いてきたら、勝てる気がせえへんぞ。」

おいパクウ、エエんか、こんなにしてもうて。相当イカついぞ、コレ」

「エエやないか。今日は遊びに来たんや。なあ、直樹」  
「うん！」

鼻から大きく息を吐き出し、ご満悦の直樹。

少し自分の体が大きくなったような、そんな気すらしている。

3人で会場に向かいながら、カーブミラーに映る自分を見てみた。  
少し立ち止まり、その姿をマジマジと見て、……何故か父の顔を思い出す。

「……ウルセエ。関係ねーだろ」

小声でそう呟き、直樹は2人の元に駆け寄った。

子供の頃に憧れた、あの虎の穴の人たちがやっていたプロレスを見るんだ。

楽しいに決まってるんだろ！

……ですよね？

『お父さん』

『お母さん』

医者言うことは聞かないくせに、病院にはしょっちゅう現れる。

そんな人には、俺はなりたくないんです。

人の言葉は香気と捉える。

交歓しながら、前へ進む。

彼も高校へは行きたい筈なんだ。

以前の状態を据え置きながらではなく、両方を思い、進む。

文武両道と言えはいいのかな。

彼の状態を眇めるようなことはしない。

彼の悩みは俺なんかより、数等上にあるんです。

暗雲を彷徨い、暗雲に乗り上げ、上空には更に暗雲がある。

……忘れておきたいことばかりでしょう。

自分がどれだけ煌々とした光の中、

走るでもなく、

迷うでもなく、

しゃがみ込むでもなく、

これまで来れたのかを知りました。

精気を養うべくタケシを救いたいのではなく、私情としてそうしたい。

枢要は何処にあるんだ。

核が分裂できれば、俺も見ることくらいはできるだろう。

……おい、

頭を下げるなんて、容易いぞ。

垂り穂の如く礼をとり、思うんだ。

成功したい、と。

それは、走る作業。

これを助走とし、惰力を生かし、

そのまま飛べ！

やってみせるよ。  
君の胆力を信じて。

と、俺は思うんだ。

その会場はまるでお祭りのよう。  
ガヤガヤではなく、皆が叫んでいる声。  
大声。

2人との会話も、顔を寄せ合わないと成り立たない。  
そんな騒ぎの中に、直樹は身を置いている。

「おい、パクウ！アレ、タイガーマスクじゃねーのか！？」  
直樹の声に、パクはその方向を見遣る。

「おー、そうや。タイガーマスクや！」

「何でいるんだよ！？アレってマンガだったろ！？スゲエ！実際にいるのかよ！！」

目の前でバク転や空中回転を繰り返しているそのタイガーマスクに、直樹は見惚れている。

マンガと一緒にだ！

虎の穴からの使者だ！

その大喧騒の中に直樹は没頭し、客観的な視線は持てなくなっている。

その時、タケシが直樹の肩をグイッと引っ張って叫んだ。

「おい秋月！次はアンドレが来るからな！2階へ行くぞ！」

「何で2階に行くんだよ？」

「これをぶつけてやんねん！」

タケシがそう言っつて、大事そうに持っていた巾着袋を見せる。中には卵。

「何だよ、そんなのぶついたら怒られるだろ！」

「チツ！ノリが悪いなー！パクウ、来い！」

「俺は行かん」

パクの返事を聞き、タケシはそのまま人を掻き分け掻き分け、どこかへ行ってしまった。

そうこうしていると、会場には今まで直樹が見たことのないような大きな人が姿を現した。

「この人がアンドレ!?」

「そうや。一応猪木を困らす悪モンやねん」

「スゲエツ!!」

感心している直樹の前を、その巨人は悠々と通り過ぎて行く。そのモジャモジャの頭、……後頭部を見ると、卵の殻が付いている。

「……おいパクウ、アレ、タケシがやったんじゃないのか？」

「へハツ!!せやるな!!」

タケシの行為とアンドレの間抜けな後頭部に、2人で大爆笑する。

その後の会場は静まることなく、強烈な熱気に包まれた。

「イーノーキ！イーノーキ！イーノーキ！」

直樹は猪木が誰なのかも知らず、皆と同じように右腕を上げながら猪木コールを連呼している。

……そのひとときは、いろんなことを忘れるには、最高の時間。

全試合が終わり、3人は会場を出た。

出口を出たところに売店のようなものがあるのに気付いた直樹は、

先々と歩いている2人を気にしつつ寄り道をしてみる。

そこにはいろんなものが並んでいた。

中でも一際直樹の目を引くもの。

キラキラと輝く、それはタイガーマスクのマスク。

ちらりと値札を見て、一度驚く直樹。

……でも、グローブだって1万円くらいするだろ？

俺だって、いいよな？

……いいだろ？

そう自分に言い聞かせ、辞書を買おうと言って貰ったあの3万円からそのマスクを購入する。

完全に調子に乗っている自分を知りながら、冷静ではられない。

下らないモノ買ったよ。

そう思わないようにする。

そしてその場でマスクを被り、2人を驚かそうと追いかけた。



直樹はそのマスクを被って、2人の隣に立った。  
驚いたタケシが、

「ううわッ！何や！？お前ソレ買ったんか！？」

……「エエなー……」

「いいだろう！でも目が見えねえ……」

そんな直樹にパクが、

「直樹、お前なあ、そんな無駄遣いしよってエエんか。ソレ高かったやろ。母ちゃんに何て言うんや」

「いいんだよ！俺、今までおもちやなんか買ったことねーもん。」

でもコレ、耳が上に付いているからメガネかけられなくて不便だな」

タケシはそれを聞き、ポケットをゴソゴソして何か紐のようなものを取り出した。

そしてその紐を、直樹のメガネの両方のつるに縛りつけ、輪を作る。

「これでイけるんちゃうか」

そう言つて、タケシはタイガーマスクを被った状態の直樹の頭の上から、スポツとそのメガネをかぶせた。

「「ギャハハハハッ！！」」

大笑いしている2人を見て、にわかには想像できる今の自分を思い、直樹も一緒に笑い出す。

「ギャーハハハハッ！！」

楽しい！！

ひとしきり笑うと、涙を拭いながらパクが

「よし、もう買つてもうたモン仕方ない。メシ食って帰ろつや」

人混みをすり抜けながら、3人は歩いて行く。

その内、さっきまでの興奮が冷めやらぬ直樹とタケシがいきなり走り出した。

道路には昨日までの雨で、そこら中に水溜りができている。直樹は走りながら、思いつきりその水溜りを踏みつけた。

バシャンッ！！

直後、

「冷たッ！」

その声に、相手を見ることもなく直樹はすぐに謝った。

「あ、ごめんなさい！」

するとその相手はドスの効いた声で、

「ごめんなさいちゃうやるワレ！コレ濡れてしもったやないか！どないしてくれるんじゃ！？」

そこで直樹はようやく、相手がどういう人なのかを確認した。

タケシやパクと同じような格好をした3人。

ガタイからして高校生か。

「本当にごめんなさい」

「せやからごめんなさいちゃうやる？！クリーニング出さなきゃコレ、どうもならへんぞ！？」

人混みの中での遣り取り。

直樹は早くタケシとパクと一緒に食事に行きたくて、ソワソワしている。

この人の言っていること。

……正論だ。

クリーニング代だよな？

そう思い、直樹はポケットから財布を取り出した。

この状況に恐怖しているわけではないが、楽しい時間を少しでも削られること

その方が直樹にとっては重要なのだ。

財布をモゾモゾしている横を、その時突然の風がブワツ！と通り過ぎて行った。

次の瞬間、ゴーンツ！という音。

直樹にお金を要求していた彼は、道路脇の標識にぶつかって尻餅をつく。

直樹がハツと顔を上げたときには、すでにその状況。

……タケシだ。

「おー、ゴラ！一発じゃ足らへんか！？ドコ見てモノ言つとんじやワレー！」

尻餅をついたその高校生に、何度も何度も蹴りを入れるタケシ。堪らず倒れ込んでしまった高校生の頭を踏みつけ、更にぐりぐりと水溜りの中へ顔を蹴り込む。

「おいコラ！！何がクリーニング代じゃ！！立派な舌が付いとるやないか！ソレでペロペロやっつけ！！」

そこまで見て、直樹はハツと我に返った。

悪いのは自分だ、と。

「タケシ、やめろ！！」

叫んで、タケシを後ろから羽交い絞めにするが、タケシは直樹を見ることがなくその腕を大きく振り払った。

ドンツ！！

尻餅をついた直樹、今度はパクに縋りつく。

「パクウ！！何とかしろよ！無茶苦茶じゃないか！！」

言いながら見上げたパクの顔は、いつもの冷静な彼ではなかった。目尻が釣り上がったように見える、その形相。

……プロレス観戦の後、血が踊っていたのは直樹とタケシだけではない。

パクももれなく、だったのだ……。

「直樹。ちょうど3対3やぞ。お前はどつする。」

「フハハハハッ!!」

「そう言い残し、高校生2人に飛びかかるパク。」

「……ッ!」

人混みの中、自分の踏んだ水溜りによって大惨事が繰り広げられているのを、直樹は呆けて見つめていた。

ここ何日かの直樹。

父と一緒に車に乗り込んだ、あの女の顔を忘れることができない。

……家に帰りたくない。

そう考える日々を送りながら、いつの間にかそれに慣れ始めていた。その慣れてしまった日々を、数時間でも削除できる。

今回の夜遊びは、直樹にとって特別なものだったのだ。

「やーめーろー!!ごーはーん!ごーはーん!!」

自分でも何を言っているのか分からない。

ただ大きな声を張り上げている直樹。

この状況に、被っているタイガーマスクを脱ぐのも忘れるほどだ。

タケシの方に目を遣る。

タケシに蹴り続けられている高校生はされるがまま、道路に横たわっている。

パクの方に目を遣る。

……とその時、高校生の一人がポケットから何か取り出したのを、直樹は見逃さなかった。

しかし次の瞬間までの時間はなかった。

「あッ!!」

短いパクの叫び声。

尻餅をついて後転する。

そして、……

「……………」  
目を見開いて一部始終を見ていた直樹は、呆然としながら慌てるでもなくパクに歩み寄り、確認する。

体を丸め、倒れているパク。

ズボンの裾からは夥しい量の血液。

白い靴下は片方だけ、真っ赤に染まっている。

「……………」  
直樹はゆっくりと顔を上げ、その高校生を見上げた。

先ほどポケットから取り出したもの。

それが握られている、右手。

……ナイフだな。

あのナイフに血は付いてないけど、

あのナイフで切ったんだな。

やがて道路にまで血が流れ出した頃、周りに集まっていた人たちが騒ぎ始めた。

しかし直樹に、その騒ぎは聞こえない。

ただ、もう一人いた高校生が血まみれのパクを見て、慌てて逃げ出したことのみを確認する。

直樹の頭の中では、キ ……ンという音が鳴っている。

「……………」  
直樹は立ち上がり、ナイフを持った高校生に近寄った。

そして利き腕の拳をギュッと握り締め、その彼目掛けて振り上げる。

ガンツ！！

側頭部に命中させた、その拳。

その高校生は、道端にパタツと倒れ込む。

力いっぱい殴りつけた覚えはない。

ただ、大きく振りかぶっただけ。

先日、タケシを殴りつけた時の気持ち悪い感覚は覚えない。  
ただ、痛いだけだ。

この人が知らない人だからか…？

そう思い、まずはその横たわった高校生に跨る。

俺が、ちょっと悪かったただけだよな…？

そう思い、馬乗りになる。

あの女、どこに住んでんだ

膝でその高校生の両腕を押さえつけた。

お父さん

出張は……？

右拳を顔面目掛けて振り下ろす。

ガッツ！

急がないとパクが出血多量になって……

今度は左手を振り下ろす。

ゴッツ！

しかし、右腕のようにつまぐ狙ったところに届かない。

埃を踏んだかのように、あっちこっちに思考を飛ばしながら、

右・右

右左

左・左・左

右右右

右

左左左

右・右・左

顔面目掛けて拳を振り下ろす。

何度も何度も。

……シューベルトの交響曲第3番が聞こえるなあ。

このリズムだな。

気持ち悪くない。

痛いだけだ。

いつの間にか2対2になったこのケンカは、タケシ・パク・直樹の  
圧勝。

パクを気にしながら馬乗り状態の直樹。  
笛の音が鳴り響いたことに気づかない。

パクは必死で傷口を手で押さえつけながら、人が刷けていくのを見ている。

パクを傷つけたこの人の罪は、まだ癒えてないのかもしれない。  
あと何発必要だろう…？

そう思い、振り上げた腕を、どこからともなく現れた手が引つ掴む。  
直樹が見上げたそこに立っていたのは、警察官。

「……まだ足りないんだよッ!!」

胸の内で絶叫してグツと力を込めるが、その掴まれた腕は振り下ろすことができない。

「お前ら、何やっとなんじゃ　　ッ!？」

その怒号に、一瞬間が止まった気がした。

もう一度、頭の中でキ　　…ンという音。

直樹はようやく確認する。

……あ。

警察官だ。

直樹はタケシとパクを振り返る。

2人とも自分と同じように、それぞれ腕を後ろに取られ、捕まっていた。

その顔は観念しているかのよう。



……逮捕なのか？

そう思う直樹を、警察官はパトカーに押し込んだ。  
生まれて初めて乗るパトカー。

乗り心地は悪くない。

そんなことを考えながら直樹は頭の中で、倒し、転がり落ちてしま  
ったものを組み立て直す。

結果、

両親への思い…… 4分の1

学校へのこと…… 4分の1

俺の責任で2人が…… 半分

項垂れる思いで、前を走るタケシとパクを乗せたパトカーの様子を  
伺う。

パクは背筋を伸ばして座り、タケシは警察官と何やら言い合いをし  
ているようだった。

……ビン、としているように見えた。

よし、俺も堂々としていよう。

いつものように、直樹は背筋を伸ばす。

そんな直樹に、隣の警察官が話し掛けてきた。

「おい兄ちゃん。エエ加減ソレ外して、おっちゃんに素顔見せてく  
れや」

ハツと気づく直樹。

タイガーマスクを被っていたことをすっかり忘れていた。

急いで後頭部の紐を外し、マスクを外し、

「すみません！」

そしてまた、猫背に戻ってしまふ。

「……………」

俯いた直樹は、膝に置いた自分の手に意識を向けた。ここに来て、じんじんと更に痛みを増した両手。

今まで味わったことのない痛み。

直樹は拳を見つめながら、先ほどの情景を思い出し、考える。

明らかに、虚無感はなかった。

ただどあの時、空っぽだった。

暴力なんて最低だと思っていた自分が、パクの傷を見て何の躊躇もなく、それを遂行する。

いや、

……………した。

俺は誰かに自慢したいのかもしれない。

痛む両手の比較をし、右手の方が痛い、左手でぎゅっと握り締める。

やがてパトカーは警察署に到着した。

入口ではタケシが大きな声で、

「イッタイのう！放せや！おいコラ、クソポリ！！」

そのタケシを横目に、パクは

「めっちゃ足が痛いんですわぁ。これは先に治療でしょう」

平然として、タケシの後について中に入って行く。

右手に握っていたタイガーマスクをポケットの中に押し込み、直樹も2人の後を追うように警察署の中に入る。

そして連行された3人が、まず警察官に言われたこと。

「おいお前ら、これは別に逮捕とちゃうからな。補導や。こっちも仕事やからのう。優しゅうしたるから、正直に答えや！」

3人は長椅子に並んで座り、警察官の話聞く。

直樹は未成年の自分に喜んでいた。

それからずっと、パクの足の傷が気になっている。

「あの、すいません。足、切られてるんです。先に病院に連れてってくれませんか」

それを聞いたパクは、

「イヤイヤ、もう血は止まっとんねん。俺もビツクリしてもうて大袈裟にしてもうたけど、傷はそんなに深かないねん。

それより直樹、お前ゴツツイヤンけ。マスク被つとるからタイガーマスクか！めっちゃビツクリしたでー？」

すると後ろに立っていた警察官が、私語をするなとばかりに2人の頭をバシンツ！と引つ叩いた。

頭など殴られたことのない直樹はムカツとしたが、自分の今の状況を思い出して押し黙る。

「お前らどこの学校や。学生証持ってないんか」

その問いに、直樹は慌ててポケットから学生証を取り出す。しかし2人は

「そんなモン、持ってへんわ！」

そんな2人のリアクションに、再び慌てる直樹。

……ついていけない。

2人と同じようにしようとしたが、今の直樹にとって一体どちらが馬鹿なのか分からない。

仕方なく、取り出してしまった学生証を警察官に渡す。

直樹のソレをじーっと見つめ、しばらく黙る警察官。

「……キミはアレか。 中学校か」

「はい」

「お前ら2人は!？」

「誰が言うつかツ!!ポケット!!死ね!!」

そう答えたタケシをじっと見て、その警察官はタケシの胸倉を引っ掴み、引き寄せた。

「ワレ、この辺でその野ヅラは 中やろ!!」

あの傷口見たら刃物飛び出しとるみたいやからな。お前ら刑事課に回してもエエんやぞ!？」  
そしてその警察官はタケシの横っ面に思いっきり、バシーンツ!と張り手を食らわす。

ガタンツ!!

吹っ飛ぶタケシ。

それを見て、直樹は少しではない恐怖感を感じている。  
やがて、2人の目の前に用紙が置かれた。

「この空欄に名前・住所、書いてあるのを全部書け」

2秒ほど静止していた直樹の横で、パクがそれに書き始める。  
それに倣い、直樹も同じようにペンを走らせる。

タケシは1人、違う部屋に連れて行かれながら、

「秋月!ワリかったな!巻き込んで!」

それを聞いて、直樹は手の震えを止める。

全てを書き終えた後、その書類を持って部屋を出て行く警察官。  
硬直した時間が流れた。

直樹は目の前の壁に掛けられた時計を眺めつつ、こんな秒針の動きが遅く感じる、そんな体験をしたことがない。

1.....2.....3.....

4.....5.....

まだ5秒しか経たない。

そんなことを思っている。

30分後、部屋の扉が開き、先ほどの警察官が入ってきた。

「秋月くん、ルールやからな。一応ご両親には電話した。

何や、キミは　　グループ社長の息子さんか。早う言うてくれんと!

キミはもう帰ってエエぞ。お父さんが今、迎えに来よるわ」

「……！」  
当然のようにさらりと言われたその『お父さんが今、迎えに来よるわ』という言葉。

タケシとパクが自分を許してくれるのであれば、次に来る恐れというのはそこしかない。

八方塞がりの直樹、『しばらくここに残してください』とも言えず、小さく頷く。

「おい大林。お前は帰られへんぞ。電話してもお前んトコ、誰も出よらんやないか！

一体どないな育て方されよんのや。おーコラ！」  
固まっている直樹の横で、パクのした対応。

それは直樹にとって、随分と大人のもののように見えた。

「イヤイヤ、今、親は仕事で忙しい時間やから。  
ねえお巡りさん。鼻肩・差別はアカンでしょー。俺も帰らせてくれないませんかー？」

ホラ、俺って被害者でしょ。ナニもしてませんよー？」

その遣り取りを、固まり、俯いたまま耳でのみ処理している直樹。  
今は自分のことで手一杯だ。

やがて直樹は俯いたまま、パクに話しかけた。

「……パクウ、ほんとにごめんな」

「え？何を謝つとんねん。謝るな。」

ハハッ！まさかお前が人ドツくとは思わなんだよ。ほんまにビックリしたわ。

メシは食いに行けなんだけど、今日はまあ面白かったなあ？」

そう言つて、パクは直樹の肩をぽんぽんと叩いた。

「……………」

……いや、違うんだ。

俺はさっき、キミは帰っていいって言われたとき、少し安心したんだ。

俺だけは帰してくれ、そういう風に思っていたのかもしれない。

ああ見えて、さっきのは誠心誠意の謝罪なんだよ……。

直樹はそう思いながら、パクの顔が見れないでいる。

それからどのくらいの間時間が経ったのか。

いきなりその部屋のドアが勢い良く開いた。

バンツ！

振り返ると、そこに立っているのは父。

きつと怒鳴られる！

そう思い、僅かに首を竦める直樹。

しかし父は怒鳴らなかつた。

父は直樹を一瞥することなくスツと横切り、正面にいた警察官の元へと歩いて行った。

そうして握手をしながら、2人で話し始める。

「いや、まさか秋月社長のご子息とは知らんで……知ってたらすぐに戻ってもらってたんですけどねえ」

直樹が何度も見たことのある光景。

父はこの後、必ず

「イヤイヤイヤ！とんでもない！」

……こう答える。

中の中のド真ん中。

普通中の普通。

その遣り取りを済ませた父は、今度は直樹の正面に立った。

俯いている直樹の耳に、間違いなく「チツ！」という舌打ちの音。

……顔を、上げられない。

すると隣でパクが立ち上がり、父に向かって言った。

「こんばんは」

まず挨拶しながら頭を下げ、続ける。

「あおう、今回は僕らが無茶苦茶してしもつてから、こんなことになつてしもつて……」。

直樹くん巻き込んでしもつて、ほんまにすいませんでした。ごめんなさい」

俯いている直樹にも見えるほどの、深いお辞儀。

パクは直樹を庇い、そして直樹よりもまず先に謝ってくれた。

泣きそうになるくらいの感動を覚えている直樹だが、彼は泣かない。自分が覚えている限り、泣いたことなど一度もない直樹は、泣くという行為がどういうものなのか分かっていないのだ。

だから、ただその光景をじっと全身で見つめている。

深々と頭を下げたパクを、父が見ているのかどうかは分からない。が、直樹の耳に入ってきたのは、再びの「チッ！」という舌打ちの音だった。

疑いようもない、父のもの。

しかし今の直樹は間違いなく後列に立ち、人影からものを言う状態。そういう存在であると自戒してしまい、それに対して意見を述べることができない。

「帰るぞ」

低く言われた言葉に、父の後をすくすくことついて行く。

……帰りたくない。

また両手がじんじんし始めた。

足も怪我してんじゃねえか？

歩きにくくてしょうがねえ。

タケシとパクを思い、  
『やっぱり俺も、2人が帰れるまで一緒にいます』  
そう、言えばいい。

言え！

言え！！

「……………」

父の背中は目の前にある。  
聞こえないはずはない。

言え！！

それはまるで、これまで何百回と練習したかのように躓くことなく、  
頭の中で何度も何度も繰り返される。

しかし、そんな直樹の口から出た言葉は、

「……………パクウ、ごめんよ。先に帰るね」

後ろを振り返りそう言った直樹に、パクもこちらを見て手を振った。

出た言葉が、あれかよ！！

そう思ったが、……………言ってしまった。

直樹は父の後をついて行き、車に乗り込む。

「……………」

「……………」

一言も喋らない父の態度に、こっちの方が楽かもしれないと、そう  
感じ始めている。



でもひょっとしたら、怒鳴りつけられた方が楽なのか？  
そんなことを考えてみるが、答えが出るはずもない。  
車はどんどん家へと向かって走る。

……明日は学校。

タケシとパクはいつものように、迎えに来てくれるのだろうか。  
苛立ちのみで何も言おうとしない父親をまず置いておいて、2人の  
ことを考える直樹。

この時、父は怒鳴りつけもしなかった。  
そのことに、直樹はもっと重きを置くべきだったのかもしれない  
。

## 罰 1

次の日。

直樹はいつものように学校で授業を受けているが、集中できずにいる。

昨日思ったこと、考えたこと。

全て、自分の中で自問自答したこと。

それを2人が知る由もないことは分かっている。

教師の声を微かに耳にしながら、昨日の自分を思い、やり直したいと考えている。

巻き戻ってやり直したい、と。

今日の帰り、2人は待っていてくれるのだろうか。

それもまた心配だ。

更にこの日に限ってタイミングが悪いのか、紀子とも会話できていない。

……昨日のアレなんて、天文学的確率じゃねえのか？

たまたま前の日まで雨が降っていて、

たまたまあの時間、あの道を通りがかって、

たまたま水溜りを踏んで、

たまたまそれが人にかかって……

悔やんでも悔やみきれないことも、分かっている。

昨夜は怖くて、パクの家で電話することもできなかった。

長い長い6時間目までが、長く長く過ぎていく。

やっと最後の授業が終わり、帰りのホームルームが終わると、直樹は教室を飛び出した。

今週、掃除当番の直樹。

忘れていたことにしよう

そう自分に言い聞かせ、ダッシュする。

校門を出て周りを見渡すと、通行人はいるがああ2人はいなかった。

…大きなため息がひとつ。

それと同時に泣きそうになる。

しかし直樹は泣かない。

…我が事ながら、今の溜息デカかったな。

頑張れば、飛んで家へ帰れるんじゃないのか？

そんなことを考え、自分を煙に巻き、直樹はとぼとぼと家路を辿り始める。

やっぱり昨日の俺は、どう見たって俺が悪いよな…。

プロレスは楽しかった。

チンタラやってないで、キビキビ動けば良かった。

…この制服は、やっぱり俺から返しに行かないとマズイよな……。

直樹はこれまで、特に人嫌いというわけではなかった。

今回、そんなものは必要ないと、叱りを受けた気持ちがあった。

それは洗脳のように、直樹の中に浸透していたのだ。

社交性云々。

人とのわだかまり。

関係。

そういったものを学ばず、たったの14年ほど生きてきた。

しかしこの時感じた虚無感は、それら全てを振り払う。  
ここ最近ずっと、何となく、特別でもなく、放課後を共に過ごした  
2人がいないことに、ただ寂しいと感じる。

とぼとぼと歩く直樹。

俯き加減ながら、毎日と変わらぬこの道を家へと向かう。

途中小さな下り坂に差し掛かったとき、坂の向こうから声が聞こえ  
てきた。

「おいコラッ！上り坂くらい降りて歩け！乗っけて上がるの無理や  
ろーがッ！！」

「足が痛いんやからしゃーないやろ！せめて抜糸が済むまで俺のこ  
と可愛がれ！！！」

最近よく聞く声。

直樹は早歩きで歩を進める。

そして見えたのは、タケシとパクの2人。  
坂の途中で何やら揉めている。

視線の先で、2人はすぐに直樹に気づき、

「おー！」

と声を掛けてきた。

……いつもと変わらない。

さっきまで俺が考えていたことは、この2人には恐るるに足りない  
ことなのかもしれない。

よし、また巻き込まれてみよう。

直樹は笑顔で2人に駆け寄る。

恐るるに足りないのであれば、もう謝るのは止そう。  
そう思った。

「パクウ、足大丈夫か？」

「それがやな、大した事ない思うてたら10針も縫うハメになつてん。」

お前こそ大丈夫やったか？お前んトコのおっちゃん、想像してたままやったよ。めっちゃ怖いやんけ。

それよりコイツの顔、見たってくれ」

パクはそう言つてタケシを指差した。

タケシの顔は半分が1.3倍増に膨れ上がっている。

「プツッ！えらく腫れてるじゃないか」

「くそー！あのポリ！いつかやり返したる！！」

3人は昨日のことについての話を、何となくこの辺で止めておいた。再び歩き始めながら、パクが口を開く。

「今日もまた今からウチやなー。」

俺、足こんなんやからチャリ乗られへんねん。タケシ、お前はチャリで先に行け。俺と直樹はバスで行く。

頼むでー、直樹。実は俺、1人でバスによう乗らんねん」

「え？足が痛いのか？」

「ちやうよ。乗ったことないから乗り方分からへんねん」

「嘘だろ！どんな弱点だよ！」

タケシは先に自転車でパクの家へと向かい、直樹とパクはバス停まで歩いて行く。

「今日はお前、えらい学校出てくるの早かったな。前から思うてんけど、何でお前の学校、俺らの学校より終わるの30分も遅いんや？」

「6時間目が終わった後に、いろいろ模試とかの説明があるんだよ」  
「へ〜」

他愛のない会話。

でもそれで、それが良かった。

クリアしなければいけないことを、紙にくるんで置いてあるような気がする。

でも今はこれでいい。

直樹は笑顔でパクと話しながら、つらつらと考える。

できればこの2人と同じ高校へ。  
できれば久保さんも。

……お、余裕が出てきた。

でも、同じ高校は無理なのかな。  
タケシだってこうやって毎日勉強やってれば、絶対どっかの高校に  
入れるようになるさ。

お金のこと？

何とかなるさ。

その辺は曖昧に考えるしかねえな。

俺が決めて、俺が進んでんだ。

正道で間違いない。

系譜として記されるに、違いない。

……このリズム。

シヨパンの雨だれ。

螺旋もあれば、山も谷もある。

直線もある。

直樹は過ごすのはこんな日々。

毎日毎日、飽きもしない愛すべき日々。

やがて春になり、彼らはもれなく中学3年生になる。

確実に、以前よりも楽しい毎日。

3年のクラス替えでは、また紀子と同じクラスになった。

それだけでも良いのだが、放課後には楽しみがある。

直樹はあの件以降、父とあまり顔を合わせていないことを気にも留めていない。

……最近、何だかこの制服が小さくなった気がする。

直樹は自分の部屋の柱に背を張り付かせるようにして立ち、頭頂部に手を置いて柱に傷を付ける。

その傷をメジャーで測ってみると、約186センチ。

また5センチくらい伸びてるよ…。

でも最近鍛えてるからな。

筋肉も付いてきた。

貫禄が付いてきたに違いない。

15歳の直樹が、何故貫禄などに拘っているか。

この日は直樹にとって、特別な日なのだ。

大人たちに、自分をお披露目する日。

子供の頃から行われてきた行事。

父の会社が建てたデパートの完成披露パーティーが今日、あるのだ。

直樹は放課後、遊び回っているが、決して成績を下げてはいない。

一度紀子に校内1位を奪われたが、次の試験では抜き返した。

いくら紀子でも、こればかりは譲れない。

直樹は間違いなく、あの件以降も勉強に重点を置いて生きてきた。

自分が自分で在る限り、決して折れることのない城壁であると感じていた。

それはまた、父も同じ。  
そう、信じていたのだ。

これまで何度かあったそのパーティーには父と直樹、いつも2人で出掛ける。

母と弟の慶也は常に留守番。

何度も何度もあった、直樹が揺るがないで済む行事。

前日にタケシとパクには、明日は会えないと断りを入れている。

この日、直樹は授業を終えるとまっすぐに家へと帰った。

いつもの我が家の庭を見て何か違和感を感じたが、そのまま気にも留めずに自室へと向かう。

呼ばれるまで待っていよう。

今回に限り、父とは何の打ち合わせもしていないが、今日パーティーがあることは間違いない。

恒例の行事を信じて止まない直樹は、部屋で声が掛かるのを待っている。

本を読んで時間を潰しながらふと時計を見ると、時刻は19時半。

……今回はえらく遅い時間から始まるんだな。

その時、内線のインターフォンが鳴った。

あ、時間かな。

受話器を取ると、相手は土井さん。

『直樹さん、夕飯の支度ができましたよ』

「いや、土井さん。今日は俺、夕飯はいらないよ。外で済ますんだから」



『え？今からお出掛けですか？』

「出掛けるよ。お父さん、何も言っただけじゃなかった？お父さんは？」

『お父様は今日、直樹さんが帰られる前に、慶也さんとパーティーにお出掛けになりましたよ』

「！！！！」

直樹の膝は俄かに笑い出す。

「……………は……………ッ」

何度も何度もシミュレーションしていた、その中の最悪の事態。

決して折れることのない、城壁

……………

考えるより先に動き出す直樹。

引き出しの中のお金を掻き集めてポケットに押し込み、家を飛び出す。

…………… 帰宅した時に感じた、庭の違和感。

お父さんの車がなかったんだ。

だから、広く感じたんだ。

…………… しまった。

誰にも何も言わずに出てきちゃった。

そつえば俺、相当お腹が空いてるなあ……………。

そんな、後で考えればいいようなことばかりを考える。

直樹が向かったのは当然パーティー会場だが、現実から逃げたい頭と体が、右と左を向いている。

警察沙汰を起こしたから、今回は俺ではなく慶也なのか？

まずそう考えなければならぬ直樹は、しかしまず自分の空腹の心配をするのだ。

通りに出てタクシーを拾い、会場に向かう。  
車内で半分目を閉じ、ダラリと座りながら、直樹はようやく順を追って考え始めた。

……俺はやっぱり、間違えたのか。  
だとしたら、どの辺りから？

知っていたような、知らなかったような、そんな気がするよ。

楽しさにかまけて、何かを怠ったわけじゃない。

ちゃんとやっていたぞ。

誰かが何かをチクツたのか？

……浅ましい。

クズだ！

誰のせいでもねえよ！！

直樹の膝が笑う感覚は、やがて怒りへと変わっていく。

俺へのものか。

……それもそうだよ。

お父さんへのものか。

……着くまでに考えよう。

慶也へのものか。

……あいつはいい奴だ。

慶也はいつの日か知らないけれど、ドロップアウトをしていた。  
用心しながらも、80%がそうという考えで頭を占めていた。

コースに戻っても、ワックスを敷き詰めてやる。  
そう思っていた。

しかし慶也はまだ、直樹の立つコースの中に残っていたのだ。  
ダークホースと評するには軽々しすぎた。

……でも慶也はイイ奴だ。

直樹は手のひらに爪の痕が残るほどに力み、震えている。  
ほんの数分前まで最悪と表していた今回の出来事に、怒と哀を感じながら。

やがてタクシーはパーティー会場に到着した。  
お金を払い、直樹は慌ててタクシーを降りる。  
何も考えず、ただ我武者羅に入口へと走る。

大きなガラス張りのドア。  
煌びやかなシャンデリア。  
そこを潜るべき人間。

これまでそんなものに威圧されたことはない。感懐を覚えたことも、  
怖れを抱いたことも、悲しみも悔しさも……ただの一度すら。

……あの向こう側で、  
あの向こう側に行ければ、俺だって自慢できるんだ！！

俺は捨て子だ。  
だけど、いい気になれるんだ！！

恐れず奮い立ち突っ走る直樹の行く手を、入口に立っていたガード  
マンが邪魔する。

羽交い絞めにされながら、直樹は大声で怒鳴り散らした。

「おい離せ！誰に手エ上げてんだ！俺は社長の息子だぞ！」

「証明するものがないと通せません！」

そう言つて腕を離さないガードマンに、直樹は続けて喚く。

「どこのガードマンか知らないけどクビだ、クビ！！名前言ってみろ！お父さんに言つてやるぞ！」

最悪だ！！！！

カスだ！カス！！！！

今の俺は！カスから零れ落ちたカスだ！！

右を向いている思考に対し、左を向いている直樹の体力。

怒号を轟かせながら、ガードマン3人を相手に大暴れしている。

「俺は秋月直樹なんだよッ！！」

とても悲しみながら、そう叫んだ。

直樹は蚊帳の外に放り出され、パーティーに参加できないどころか、会場の中にすら入れてもらえない。

隙あらば……

もうそんなことは考えていない。

しかしその場所にドンと腰を据えて、直樹はまだそこに居る。

……お父さんと慶也の前で、どんな顔をしているのか分からない。ただ、会えば分かる。

俺が今、どんな顔をしているのか。

直樹はその場で、ただ2人が出てくるのを待っている。

どのくらい経つたのか。

時計を持っていない直樹は、それが分からない。  
ガヤガヤと中から声が聞こえ始めてきた。  
人混みの声。

会場の前にはたくさんタクシーが停まり始めている。  
今の直樹はとても冷静だ。

……そう言えば、パーティーにお母さんが呼ばれているのも見たことがないな。

ついでと言っては何だが、そんなことも考えている。

次々とタクシーに乗り込む人たち。

目を眇めて、その顔を一人ひとり確認する。

やがて残り少なくなった招待客の中に、見覚えのある顔を見つけた。

……さあ、俺は一体、どんな顔をするんだ？

駐車場にある段差に腰を掛けていた直樹は、その場にすくっと立ち上がる。

「……アレ？ 兄さん」

声を掛けてきたのは、慶也の方だった。

……俺は一体、どんな顔をする？

「兄さん、来てたのかよ。中に入ったら良かったやん」

「あ、ああ」

わざと低い声で答えてみた。

慶也は無邪気に微笑みながら、

「何かさあ、ごっつい退屈やったー。何を話してるんかよく分からないし。」

でも僕ももう6年生やから、今回はお父さん、僕を連れて来てくれ  
たんやろうねえ。

「ただ、もういいや。退屈すぎる」

「……………」

今回のことが直樹にとってどういう意味なのか、どういう事なのか  
知らないでいる慶也を、直樹は愛おしく思う。

……よし、こんな顔でいよう。

「ところで慶也さあ、お父さんは？」

「まだ中にいるよ。せつかく来たんだから会って行けば？」

「兄さん、これ見てよ」

慶也はポケットから1万円札を取り出して、直樹に見せた。

「タクシーに乗って先に帰ってなさいって、1万円もくれた。

お父さんからお金もらったの初めてや。

「退屈やったけど、これだけでも良かったんかなー？」

僕、コレお小遣いに取っておいて、走って帰ろう思ってたんだけど、  
兄さんも帰るならタクシーで帰るよ」

直樹はこの場で、父に合わせる顔がある。

「いや、俺はお父さんと帰るよ。」

でも遅いから、ちゃんとタクシーで帰った方がいいぞ」

今、何時か知らない直樹。

夜も遅いなどと、どこかで聞いたような言葉で慶也に余裕を見せる。

この顔で行こう。

そう決めていたから。

「そうだね。あ、まだタクシーいるやん。  
もったいないけど、じゃあタクシーで帰るよ、先帰ってるね」  
「うん、そうしなよ」

直樹の返事を聞いて、慶也はタクシーに乗り込み、家へと帰って行った。

一抹の不安というよりは、どこかで慶也に罵声を浴びせる自分を想像していた。

今回の出来事、そうでもなかったような気がしてくる……。

どこかで自分に言い聞かせたい。

慶也の言う通りなのかもしれない。

ただ単に、慶也の順番だったのかもしれない……と。

……白々しくねえか、俺。

でも、そうだとすればとても便利だ。

ガードマンもいなくなった頃、直樹は再び会場へと向かった。

出口は皆、必ずここを通るはず。

まだ父の姿を見ていない。

まだ帰っていない。

深呼吸をすることで落ち着こうとしたが、意味がない。

この鼓動はとっても嬉しくない。

父に会わせる顔。

それを決めた直樹。

今話さないと、意味がない。

そう思う直樹。

父を探しながら会場の中に入ると、レストラン関係者だろう、大勢の人たちが食器類などの後片付けをしていた。

その中を、首を伸ばしてキョロキョロしながら歩き回る直樹。いくら探しても姿は見えない。

もう父はいないようだ。

直樹は作業している人に、

「あの、すみません。社長の息子なのですが、父がどこに行ったか知りませんか？」

「えーっと……」

返事をしながら、その人もキョロキョロと辺りを見回す。

「…あ、そうや。パーティーの前に控え室にコーヒー持って行ったな…。」

そこ出て真っ直ぐ行って、右曲がったところに控え室があるよ。そこにおるんちゃうかなあ？」

「ありがとうございます」

直樹は一言言って、駆け出した。

言われた通り通路を走り、父の控え室であろう部屋に向かう。着いたその部屋のドアには、父の名前の張り紙がされていた。

コンコン

ドアをノックするが、返事がない。

どの顔で行くかというのと、この顔しかない。

そう決めていた直樹。

ある程度の覚悟、腹は決まっている。

そつとノブに手を掛け、ドアをカチャリと開いた。

しかし中は真っ暗。

誰もいない。



諦めて引き返そうとした時、窓の外から車のエンジン音が聞こえてきた。

聞き慣れた音だ。

直樹はその暗い部屋に駆け込み、机とソファを踏みつけ飛び越え、窓を開け放つ。

そこには今まさに駐車場から出ようとしている父の車があった。

直樹は慌ててその窓から外へ飛び出す。

植木の中に落ちてしまった直樹はすごい勢いで地面に打ち付けられたが、痛みは感じない。

障害物を飛び越えながら、その車に走り寄る。

そして徐行している車の前に、いきなり飛び出した。

キッ！！

車は急ブレーキの音をさせ、その場に止まる。

直樹の目にはヘッドライトが眩しくて、車内の様子は見えない。

お父さんには俺の姿が見えている。

そう信じ、しばらくその場に立ち止まる。

「……………」

……………車のドア、もしくは窓。

それが開き、父から自分に話しかけてくれると信じて、待っている。しかししばらく待ってもアイドリングの音が低く響くだけで、直樹のイメージしたその光景は見えてこない。

それどころか、父は車をバックし始めた。

直樹は慌てる。

運転席に近寄り、窓を小さく何度も何度もノックする。

前を向いたまま、こちらを見ない父親。

まさか、このまま俺を無視して走り出そうとしないよな……？

そう思う直樹の目に、飛び込んできたもの。

父の隣。

助手席にもう一人、人が乗っていた。

直樹が見間違うはずはない。

それは、あの時見た、女　　。

## 罰 2

直樹は思わず両手を広げ、窓をバンツ！と叩いた。  
そこでようやく父はドアを開け、降りてくる。

慶也に見せた余裕の顔を振舞おう。

こういう時のための、とっておきの音楽が俺にはあるんだ。  
そう思っていた直樹だが、一瞬でそれは覆され、とっておきの音楽  
は蒸気のように消えていく。

「………… お父さん、まず聞きたいことがあります。

今回何故、僕ではなく慶也を？ たまたまですか？」

「……………」

父は相変わらず背筋を伸ばし、ピンとした姿勢で立っているが、こ  
ちらを見ない。

「僕は今、2人しかいないと思って話しています。 答えてはくれな  
いんですか」

「……………」

黙ったままの父。

…ヤケになったつもりはなかった。

しかし、思わず言ってしまった。

「その隣に乗っている人は誰ですか？ お母さんは知っているんです  
か？」

どうしてこんな遅い時間に、慶也を一人でタクシーなんかで帰した  
んですか？

その隣にいる人が原因ですか？」

そこまでを聞いて、父はスーツのポケットから財布を取り出し、そ  
れを開いた。

そうして取り出したお金を、黙ったまま直樹の胸に押し付ける。父の手と直樹の胸に挟まれているのは、5千円札。しかし直樹は姿勢を変えない。受け取るうとはしない。

『これで帰りなさい』なのか。

『黙っている』なのか。

直樹の中に浮かぶ選択肢は、その2つしかなかった。

「……………」

「……………」

何秒ほどそのままだったのか。

やがて父は直樹に当てていた手を離れた。

ハラリと落ちていく5千円札。

父は一度も直樹と目を合わせることなく、再び車へと乗り込む。

エンジン音を響かせ、直樹の横をすり抜けたベンツの後ろ姿はみるみるうちに小さく、あっという間に視界から消えていく。

父と、あの女性を乗せて。

「くそ

ッ! !」

地面に落ちた5千円札を踏みつけてやるうと思っただが、思いとどまる。

直樹はそれを拾い上げ、パツパツとはたいてポケットの中にしまい込んだ。

暗闇の中、車の去って行った方向を遠く見つめながら、直樹は考える。

……………この場合。

慶也が1万で、直樹は5千。  
そこも重要ではあったが、それは5番目6番目。

この5千円を拾い上げたのは、俺だ。  
誰だってそうなんだぞ。

皆、この地球に重力でへばりついてるんだ。  
皆、忘れていいのか、知らねえのか。

……あなただって、その一点にすぎないんですよ。

お母さんはこのことを知ってるのだろうか。

ひよつとして、慶也も知ってるんじゃないのか。

……お父さんに、女がいることを。

知らないのは、俺だけなのか？

このまま、あの家で長い年月を過ごす。

そんな俺をイメージしてみよう。

ひよつとして、俺に対する俺のこの評価は、俺だけのものではないか？

……3対1

これが俺の知らないところで組まれた、本当の勝負なのか？

勝負ではないとするならば、こうなった今、

俺は、完全な、蛇足。

きつと、幼い頃から父の屏風に描かれている俺の絵には、口がないのだろう。

蛇足ならば、まだいいのかもしれない。

……ひよつとすると、眉毛から上も描かれていないのかもしれない。

悔しくて悔しくて、しょうがなかった。

しかし今の直樹には何もできない。

先ほど拾い上げ、せっかく埃を払い落とした5千円札をポケットの中で強く握り締める。

父 母 慶也 俺

今となつては、この順序で評するのが妥当なんだろう。土井さんはこの家には住んでないから、少し違う。

……できれば顔を合わせたくないんだ。でも、俺には術がない。

エネルギーがここで補充し、休みをとり、この家で英気を養つ。

この家にお金があつても、それは俺のものじゃない。そんなことは、ずっと幼い頃から知っている。

逃げ出したいと表するには、あまりにもおこがましい、……小者。

もしこの世にカスという物体があるのであれば、俺はその物体の一片にしかすぎない。

カスという実。

皮が付いているとするならば、その皮が不要なものならば、俺はきつとそのカスの実の皮なんだろう。

……一応、頑張るぞ。

もうすぐ受験だからな。

受験に成功しなければ、この家にいる価値がないのは、元からのこと。

『お父さん』

『お母さん』

知っていますよ。

昔からと、これからも、ずっと

この日、学校では何枚かの束になったプリントが配られた。  
それは5月にある修学旅行の資料。

3泊4日で行く、関東地方への旅行。

スケジュールを見てみると、2日目の昼から夕方までは浅草での自由時間だった。

「ねえ、久保さん」

1学期は直樹の隣に紀子の席がある。

「ええ？なに？」

…その笑顔を見て、

昨夜のことは忘れよう。

いや、忘れるんじゃない、

いったん置いておこう。

直樹はそう思う。

「この自由時間があるやん。浅草ってねえ、俺の庭なんやで  
今日から少しずつ、関西弁を覚えていこう。

「えー、そうなん？雷門のあるトコやろ？」

「そう。俺、この辺に住んでたんだ」

……嘘だ。

直樹は浅草に行ったことなど、一度もない。

捨てるものが何もなくなった気がした。  
そんな直樹は軽快に、紀子の気を引くべく饒舌に話しかける。

「良かったら案内するよ」

「えー、ほんま！？助かるわ。楽しみやねえ！」

とつてもいい返事をもらった。

一気に修学旅行が楽しみになった。

修学旅行が終わったら、次は何を楽しみに……

そんなことを考えたいが、それを押し潰す。

……修学旅行が楽しみだ。

放課後は、いつものようにタケシとパクに会う。

タケシの勉強も大事だが、今日の直樹には一つやりたいことがあった。

「なあパクウ。パクウみたいな髪型にはどうやってすればいいんだ？」

こないだの床屋さんでは任せつきりで、よく覚えれなかったん」

「え？こんな髪型にしたいんかいな。」

お前、ほんでもお父ちゃんに怒られるんちゃうか？」

「……いいんや」

「何か変な関西弁使ってるし……」

やりたいんやったら教えるけど」

「だったら俺みたいにせえや！コレ、パーマやってるから簡単にできるぞ？」

そう言ったタケシの頭をチラリと見て、直樹は

「とうもろこし頭はイヤやわあ」

即答する。

その言葉に落ち込むタケシを放っておいて、パクは言った。



「じゃあ今日はまず散髪屋やな。またこないだの店、行くつや」

3人はちょうど来たバスに乗り込んだ。

先日行った店に入ると、幸い客はいない。

「あんなあ、おっちゃん。こいつ、リーゼントにしたいんやって。

簡単にできる方法あるかな？」

パクの言葉を聞き、店の主人が答える。

「それならアイパーがエエやろ。髪洗うても、乾かしたらその形になるからな。

あとはポマード付けてコームで馴染ませれば、簡単に出来上がるよ」

「直樹、それでエエか？」

パクの問いに、直樹は返事をする。

「うん、いいよ」

……どうでもいいよ。

本当は。

「前髪切つてもうたら、オッサンみたいになるからな。前髪は長めにしてアイパーかけるぞ」

店の主人の作業はどんどん進んでいく。

「今日はさあ、お金結構あるから、2人も切ってもらえよ」  
そう言う直樹。

いろんな部分で、やけっぱちが顔を覗かせる。

やがて、散髪を終えた3人は店を出た。

「しかし直樹、お前そうやってるとほんまにイカついな」。

エエんか、ほんまに。怒られへんか？」

今日のパクはいつもより、えらく常識人に見える。

しつこいな!!

そう思った。

「……今日はな、悪いんやけど俺、このまま帰るわ。  
ごめんな、タケシ」  
「お…おう」

いつもと様子の違う直樹に、2人は戸惑っている。

しかしそんな彼らに気づかない直樹は、先々とバスに乗り込み、次の目的地へと向かった。

この地に引越してきてから通っている、メガネ屋だ。

そしてメガネ屋から出てきた直樹は、あの黒縁の分厚いメガネを外していた。

コンタクトに変えたのだ。

何だかスースーするなあ。

直樹の癖だった、人差し指でメガネの真ん中をクイツと上げる仕草。スースーする違和感から、メガネもないのに眉間の辺りをクイツと押してしまう。

まあ、そのうち慣れるやろ。

気兼ねがなくなったわけではないが、これがこの日の直樹。  
お腹が空いたので、あの家へと帰った。

……俺は、父のあの浮気に対して、嫌悪感を抱いたのか。  
男がそういうことをする。

それは何となく知っていた。

特に財を持つ者は、余裕でそういうことをする。

それを、知っていたはずなんだ。

なのに今回の一件、何故俺はこんなに腹を立てた？  
逆鱗の境界線を、土足で踏みつけられた感覚。

……きつと、他にある。

『きつと』が、確信に変わった気がする。  
……順番、だ。

こうなった今、家族の中の順位というもの。  
俺は土井さんの後なのかもしれない。

あの女が我々の段差・格差・順番に、したり顔でランクインするこ  
とに対しての、嫌悪感だったのではないか。  
きつと、ではなく、確信めいたもの。  
ということは、俺自身もやはりよっぽどの奴なのか。  
それとも、これは極めて極普通のことなのか。

あの日から、直樹は父とは会話を交わしていない。  
家の中にいると、3回ほど目が合った。

忘れない。  
3回だ。

2週間後に控えている修学旅行がとても楽しみで、頭の中で旅行の  
シミュレーションをした後、必ず考えてしまうこと。  
その後は、一体何が楽しみになるんだろう……。

高校受験？

頑張っても、いいんだよな……？

その日、直樹は登校前に母に言った。

「お母さん、塾に通いたいんですが、いいですか？」

「ええ？でも直樹さんは塾なんか行かなくても平気でしょ？」

「流石に、受験まであと1年と思うと少し不安があるんです」

直樹はそう言っつて、自分のことを試してみる。

……不安を感じている。

自分の受験を、頑張ってもいいんだよね…？

そんな思いで、直樹は自分の立場を試している。

「いいですよ。いつから行くの？月謝がいるわよね。

これをお持ちなさい」

そう言っつて母が財布から出した金額は5万。

「……………」

……随分と、小者に見えた。

この人はきつとあの女の存在を知らない。

何て暢気なんだ。

名前を『秋月ノンキ』に変えた方がいいよ。もしくは、ズッコケ。目の前にバナナの皮を置いてやったら、真っ先に転ぶタイプだ。

……今、『この人』って思っっちゃったな。

でも、いいや。

直樹はお金を受け取り、

「ありがとうございます。頑張ります」

いつもの調子でそう言っつて、外へ出た。

家を出た直樹、しめしめとは思わない。  
先ほど母に話したこと、あれは嘘。  
だが、このお金は本当に要るのだ。  
直樹の目的は他にある。

放課後、タケシとパクに会い、直樹はまたいつもより早い時間に2人と別れた。

直樹が向かったのは、以前から気になっていた場所。

我流のトレーニングに限界を感じてたんだよな…。

見上げた先にあるのは、ボクシングジム。

直樹は何の躊躇もなく入口をノックして、中へと入っていく。

中は異様な雰囲気に入れ、ミット打ちやその他いろんな音で、声を出しても響かない状態。

直樹は、そうやって汗を流している人たちの間をすり抜け、ズカズカと奥へ進む。

そして1人の男性を捕まえ、話しかけた。

「あの、すみません。この辺にプロレスのジムってありますか？」

「は？」

「プロレスのジムです」

「プ…プロレス？ここ、ボクシングジムですけど……」

「そんなこと、あなたに言われなくても知ってます。」

同じスポーツジムなら、プロレスジムも知ってるかなと思って聞いてるんです」

直樹に問われたその男性の顔は、明らかに『何やコイツ』

「……ちよつと待っててね」

男性は奥に入っけていき、年配の男性と話をしている。

直樹はそこで漸く、周りの風景を眺めてみた。

そして、思う。

あっちでもこっちでも、鍛えればいい。  
……勝てる人間になろう。

グツと拳を握り、自分の上腕二頭筋を見つめる。  
これじゃ、今は勝てないんだ。

……勝てる人間になろう。

その時、その年配の男性が近づいてきた。

「おいおいおい兄ちゃん！この辺にプロレス団体なんて聞いたこと  
ないぞ？」

「何や、プロレスラーになるんか？」

喧騒に埋もれることのない、その声。

近くにいた生徒が、彼のことを『会長』と呼んでいる。

このジムの一番偉い人だ。

直樹はそう判断した。

「兄ちゃん、身長ナンボあるんや？」

「185です」

「体重は？」

「えっと…確か65kgです」

「ウエルターか…。日本人でウエルターってどうやるな。兄ちゃん、  
腕ちよつとピツと伸ばしてみ」

直樹は言われるまま、腕を前に伸ばす。

「メチャメチャ長いな！！兄ちゃん、プロレスなんか止めて、ボク  
シングやれ。ここへ通え！」

直樹は、できればプロレスとだけ思っていただけで、特に拘りはなかつ  
た。

何でも良かったのだ。

今思う強みというものを拵え、蓄えることができるのであれば。

「はあ、別にいいですよ」

「よっしゃー！決まりや！ワシらとチャンピオン目指そうやないか  
！！」

…チャンピオン？

この人、頭大丈夫か？

俺はそんなもの、目指さない。

会長は直樹が15歳ということを知り、契約書とは別の用紙を用意した。

それは保護者が記入するもの。

月々2万5千円。

直樹はお金を稼がないが、その用紙に関しても、2万5千円に関しても、余裕だった。

手に持っていた5万円を一度に支払い、2ヶ月分の月謝にしたのだ。家に帰ると母がいるにも関わらず、直樹は両親の寝室に入り、印鑑を取り出し、用紙に捺印した。筆跡を少し変え、必要事項をサラサラと埋めていく。

まだまだまだまだ、これからだぞ。

こんなことに手が震える必要はない。

お母さんを論破するなんて、容易いんだろつ。

お父さん相手だと最悪、……アレもコレも必要だろつ。

世間はやたらと広いんだから。

次の日から、直樹はこれまでの時間を清算しようとして巻き返しをはかる。

無知で罪な俺。  
ボンボンな俺。

慶也が野球を使い、心身を鍛えるのを見て見ぬフリをしてきた俺。  
阿呆な俺。

その日、直樹は帰りがけに紀子に声を掛けた。

「久保さん、今日クラブは？」

「今日は休み」

「じゃあ途中まで一緒に帰ろう」

「ええッ！？どうしたん！？」

「……………どうもせんよ」

「どうもせんって……………その髪型からして、どうもせんワケないやん。  
何かあった？帰るのはエエんやけど」

何かあったに決まってるだろ。

感情に任せてそう言おうかとも思った。

だけど、これはただの八つ当たり。

今日は途中まで久保さんと帰って、その後パクウの家に行こう。

……………何かあったに、決まってるんだろ……………

直樹はバス停まで、紀子を送って行くことにした。

その間話したのは、勉強のこと、修学旅行のこと、紀子のバレーのこと。

この時ばかりは、直樹のイライラは制御できている。

ただ、やけっぱちになっていることに関しては、自分でも驚いていた。



その気になれば、何だってできるんじゃないか。いや、違った。

何でもできるんじゃないか。

ネイティブな関西弁。

これも、きつとできるよ。

自慢やないけど、俺は頭がいいはずなんや。

考え事を変えながら、紀子と2人で歩いている。楽しかった。

認めよう

喪失したんだ

あれから2週間。

このボクシングジムは2万5千円さえ支払っておけば、休みである水曜日以外、いつ行っても構わない。

直樹は毎日のように通い、汗を流している。会長に自分の視力が悪いことを知られ、それじゃあ大成できないと教えられた。

別にボクシングで大成なんてしなくていい。

筋肉を付けて、体を大きくしたい。

そう言うと、日本人でウェルター以上の階級なんてあり得ないと教えられた。

階級なんかどうでもいい。  
あり得なくて構わない。

毎日毎日サンドバッグを叩き、縄跳びをし、ロードワークをこなし、それに励んでいる。

体を動かすということがこんなに良いものだとは、知らなかった。  
とにかく気持ちがいい。

疲れて帰ると、遅くまで起きていられない。

寝る時間が1時間早くなった。

ジムにいる時間と合わせて3〜4時間、勉強の時間を削った。

サンドバッグを打つ手を止めると、考え事をしてしまう。

……今頃久保さんは、東京だろうな。

直樹は修学旅行に行かず、この町にいた。

何となく…何となくやが、分かってたような気がするんや。  
気づかないようにしておったんだろう。

確かに、小学校の修学旅行には行かなかった。

俺もお父さんと一緒に、意味がないと思ったからだ。

今回は意味を見出し、行く理由があったんや。  
意味もあった。

お母さんにはちゃんと、「修学旅行は行きますから」  
そう伝えた。

小学校の修学旅行に行っていないから。

その流れで今回も、なのか。

父の意見の元、俺の希望が剥奪されたのか。

……聞かないから、分からへん。  
後者だと、信じてしまう。

最近ジムを終え、帰って一人で食べる夕食が、たまらなく美味しいんや。

後者だと信じ、認めよう。

……喪失したんや。

全ては1から始まる。

……俺はそう思う。

幻想から始まるもの。

……それもまた1。

思想から始まるもの。

……それもまた、1。

俺がゼロなら諦めよう。

でも、まだ生きています。

それらを網羅するのなら、以前考えた『勝てる人間』の前に、『闘える人間』にならなきゃいけない。

……いや、ならなアカン。

ここまでシミュレーションできた。

直樹はシューズを履き替え、ロードワークを始める。

手が動いていないために、シミュレーションが止められない。

これからはある程度、好きに生きよう。

……ん？

好きに……？

俺はこれまでも、好きに生きてきたな。

好きで、ああ生きていたな。

父親の、何たらかんたら、ああやって、こつやって、そつやって、こつ。

あれは俺にとって、拘束具でも何でもなかった。

直樹は決まったコースを走りながら、思う。

……負担でもなかった。

汗が滴り落ちる。

血液が循環していることを知る。

疲れてはいるが、脳は足を前へ前へと命令する。

これまでの俺に関して、その点において考えたとき、感情は360度円を描いて、戻ってきた。

……ありがとうと、言つべきなんだろう。

お父さんには。

でも、まだ言わねえ。

……まだ、言わへん。

……そろそろスイッチを切り替えなアカンな。

こつなると、何もかもを楽しまないと損をする。

直樹は街中を走りながら大声で、  
「ンガ　　ッ！！！！」  
と、吼えてみる。

今ので、デカ目のスイッチが入っただろう。  
こりゃ、なかなか戻って来ねえぞ。

帰ったら、もう一度久保さんに謝ろう。  
約束破っちゃったからな。

……久保さんに会いたいなあ  
久保さんに会いたいなあ  
久保さんに会いたいなあ

4歩進む間に、紀子のことを思う。

…お、いい感じで調子に乗れてきたぞ。  
その調子！

今回嵌め込んだスイッチ。  
これもきつと、大事なモンだ。  
いや、大事なモンや。

直樹はいつものコースを走りながら、そんな風に思っている。  
そしてまたコースを戻り、ジムへと帰る。

修学旅行に行けなかった。  
その大きな落胆から、抜けようとしていた。

## 告白 1

紀子からもらった修学旅行のお土産は、直径5センチほどの丸いキーホルダー。

それには金色の文字で『四角形』と書かれている。

直樹は「ありがとう」と言ったと同時に考える。

この人は俺を笑わせようとしているのか。

丸の中に『四角形』

それともマジで、俺が喜ぶと思ってこれをくれたのか。

……分からない。

でも自分のことを覚えて、お土産まで買ってきてくれたことに、素直に喜びを感じた。

「浅草を案内するって言ったのに、ごめんね。ほんまにごめん」  
それに対しての紀子の返事は

「エエよ、エエよ。しょうがないよ」  
という笑顔。

最近俺は、よく『ありがとう』と『ごめん』を口にする。

その日の帰り、直樹はタケシとパクにそのキーホルダーを見せた。  
大笑いしている2人。

パクは笑いながら、

「一体どがいなセンスの土産や！オモロすぎるやるソレ。何の目的のキーホルダーや！」

「だろー？笑えるやるー！」

そう答えて、直樹も一緒に笑う。

笑われてしまったけれど、これは俺にとって大事なものだから大事にしよう。  
そう思い、常日頃から持ち歩いている財布に、そのキーホルダーを付けた。

もうすぐ夏休みが始まる。

直樹はいつもと違う感覚に陥っている。

これまで覚えたことのない感覚。

受験を控えた最後の長い休みである、だからいつもと違うのは当然のことだが、それとはまた違う感覚だ。

一体こんな長い休みの期間、どうやって過ごせばいいんだ。  
そんな風に考えた。

紀子に夏休みの予定を聞いてみると、バレーの最後の大会があるということと、田舎のおばあちゃんの家に行くということ。

タケシとパクにも同じ質問をしてみると、

「別にどうもせんよ。毎日グダグダするだけ」

そんな答えが返ってきた。

……夏休みって、退屈なものなのかもしれないな。

それに気づいた気がする。

最近じゃ、周りの皆のことが何となく気になるんだ。

3年生になり、今直樹はクラス全員一人ひとりの名前を覚えていた。  
この学校へ来て1年。

ようやくその気になったのだ。

皆は一体どうやって過ごすんだ？

勉強はもちろんだろ。

その他は？

きつと皆、退屈だろう。

違うのか？

……心配せんでエエ。

俺も一緒やで。

『皆と一緒』

これが少しばかり自分に安堵をもたらすということを知り、文字通りほっとする。

夏休みは根を詰めて勉強する。

そう思い込んでいた自分。

これも、皆一緒だと思っていた自分。

……そこに安心感はなかったな。

そんなことを考えていると、ふと関東に住んでいた頃のことを思い出した。

離れてたった1年ほどだが、懐かしいと思った。

よし、2週間だけまたあそこに申し込もう。

俺も暇だしな。

……いや、暇やからな。

休みに入ると、直樹は単身関東に向かった。

小学校時代からずっと参加していた勉強合宿、それに参加するために。



ホテル暮らしをしながら、そのセミナーに通うのだ。  
今回の参加には、いろんな目的があった。

あいつらは、今の俺を見てどういう風に思っんやろ。  
それも1つ。

俺は勉強で、あいつらに遅れをとったのかな。  
それも1つ。

そこに行くと、あの頃のメンバーとほとんど変わらない面子が揃っ  
ていた。

参加者たちの、自分に向けられる目。

『こいつ、何だよ』  
一目で分かる。

どうだ。

俺、結構変わったやろ。

そう言ってやりたいが我慢する。

君たちと違って、いろんなことを覚えてきたんだ。  
厚みが増したはずだよ。

いつもとは違う姿勢。

少しふんぞり返ったように、直樹は席に座っている。

そこに近づいてきたのは、以前の学校の同級生だった男子。

「ねえ、秋月くんだろ？ どうしちゃったんだよ。随分風貌が変わっ  
ちやってさあ。向こうに行ってから何かあったのかい？」

こないだの全国模試、どうだった？ 僕はさ、都で6番だったよ。ま  
あまあかな。

木村っていただろ、 中の。あいつはノイローゼになっちゃって  
さ。ハイ、一人脱落してカンジだよ。

あとは 中の……」

「……………」

直樹は黙ったまま、彼をじーっと見つめている。

……こいつ、こんなにヤな奴だったか？

知らなかった。

とてつもなく鬱陶しい。

でも以前は俺も、こういった会話に平気で参加していた。

それを知りながらも、

こいつ、こんな奴だったか？

そう感じた、一部始終。

……刮目するんだ。

変わったのは俺だ。

彼の言っていることがしょうもないと感じている俺。

何かを変更した俺が、間違いなく生きている。

変わらず話を続けている彼は、

「まったく、イイ気味だよな。そう思わないかい？アーツハハハハ

ハ……」

「……………」

……とつても、耳障りやな。

直樹はその彼の顔を、いきなりバツと握ってやる。

「ムぎゅッ！」

「……しょーもない話しとるのう。ところでお前、名前何やったっけ？」

「……………」

直樹に顔を握られながら、体が震え始める彼。

ニヤけてしまう直樹。

そのうち彼はそそくさと、その場を去って行ってしまった。

路線を変更して正解だったと思う。

あんな話は楽しくない。

今の俺は、以前のような焦りがないんやから。

以前から知っている顔が、1ミリもズレることなくズラッと列をなしているように見えた。

この場において、異端なのは俺。

つまる・つまらないの以前に、人種が変わってしまったんだな。

自分を思い、いろんなことで今楽しんでいる自分は、ここに顔を並べている皆よりも勝っているんじゃないか。

……勝っている？

こういう考えはまだ抜け切れてねえな。

ここで過ごす時間は直樹にとって、また落ち着きを取り戻すために良き場所だったのかもしれない。

1週間で過ぎた頃、直樹が注目せざるを得ない同級生がこのセミナーに途中参加してきた。

直樹はこのセミナー内で行われるテストで、いつも2位だった。

それはいつも変わらず直樹の上を行き、1位を取る彼がいたから。

堀井。

この名前だけは忘れない。

彼はずっと陸上をやっており、1000m走、幅跳びでいつもすごい記録を出していた。

その上、顔立ちも端正。

直樹は彼を凝視するたびに、いつも歯が痛くなっていたものだ。

見つめるたびに歯を食いしばっていたからだろう。

こいつにだけは会いたくなかったな。  
こいつを見てみると、それまで考えたことのなかった、自分に対し  
てのコンプレックスが滲み出てくる。

運動で勝てない俺が、勉強でも勝てなかった。

その彼に、また会ってしまった……。

「……アレ？秋月くんだよ。どうしたんだよ。随分雰囲気変わったね」

その言葉に、直樹はムカツとする。

コンプレックスの本体に、コンプレックスのコートを羽織らせたよ  
うな気持ち。

お前に分かるか！！

まったく、人のことを『あいつはノイローゼでリタイアした』なん  
て言わない辺り、やっぱり余裕だな。

あと残り1週間。

俺も間違いない、大人の対応をしてやる。

直樹は以前の自分と寸分変わらず、堀井の一挙手一投足に釘付けだ。  
それに気付き、

……アレ？

俺、何かおかしくないか？

人のことなんか気にならねえ。

そう思ってたのに。

俺は以前から、人のことをたっぷり気にしてたんだな。  
忘れていた。

物まねでも何でも、構わない。  
人を巻き込みながら、人の言葉・行動、そういったものに起伏を乱している。

そんな俺は、取って付けたものではなかったんだ。

良かったような気がする。

こいつに対する、この嫉妬。

……俺は人間だったな。

そんなことを考えていると、どんどんいろんなことが気になり始めた。

過去の記憶を捲りながら、自分はデンと構えていようと思った。しかしそれをすぐに覆し、言ってしまう。

「堀井くん。前回の全国模試、どうだった？何番やった？」

……言ってしまった。

「あー、ダメダメ。ダメだよ、全然ダメ。いろいろ忙しくてさ。前みたいに勉強ばっかやってないんだよね。」

えーっと……全国で、えー……230番台」

「ええッ！？何でそんなに順位落としてんだよ！？悪くても20番台にいただろ！？」

「ま、いろいろ忙しくてさ」

この、中学3年生ごときが見せている余裕と笑み。憎たらしくもありながら、大人に見えてしまった。

……忙しいって何だよ。

じゃ、じゃあ俺だって忙しい！

直樹はそう思う。

以前と同じように、負けていられないのだ。

その日の講義を終えると、直樹は真つ直ぐホテルへと戻った。食事を終えた後は、予習・復讐と大変なはずなのだが、退屈だなあなどと考えている。

ゴロゴロしているのも何なので、パクに電話を試みることにした。

『おい直樹。お前、いつまでソツチにおんねん。明後日、花火大会あんねんぞ？早よ帰って来い』

「花火大会？何だソレ。優勝を決めたりすんのか？」

『……トーナメント方式のモンではありません！』

お前、ほんまに花火大会も知らんのか？勉強も大事やと思うけど、明後日いつペン帰って来いや。遊ぼうや』

そんな会話を10分ほどして、電話を切る。

帰って来いって言われてもなあ。

途中で抜けるってのは心外だ。

……花火の大会って一体何なんだよ？

直樹は再びホテルを出て、本屋へと向かう。

花火大会について、調べるためだ。

数分後、ある本を閉じながら、直樹はなるほど、と思った。

恋人同士で行くんだな。

場所取りなんかして。

花見みたいなもんだな。

理解したで〜。

だけど、恋人同士で行くんだろ？

パクウは何で俺を誘うんだ？

……

……深く考えんところ。

選択する本を間違ったのか。  
直樹は花火大会について一部誤解をしているが、ソレがある箇所  
で拍車を掛けることになる。

次の日の朝、直樹はまたいつものようにセミナーに向かっていた。  
道路の前方に見つけたのは、堀井の姿。

直樹は、彼が何故あんなに順位を落としたのか、知りたくて仕方な  
かった。

全国模試。

見上げるばかりだった彼が、知らない間に自分よりも下にいる。  
彼に何があつたのか、知りたくて仕方がなかつたのだ。

そんなことを考えていると、前を歩く堀井に駆け寄る人がいた。  
堀井と腕を組むようにして歩く、女子。

「!?!?」

……衝撃だった。

直樹は何も考えずに堀井に駆け寄る。

イチヤイチャとくつついて歩いている2人の間を裂くように割り込  
む直樹。

空気を読む術など、彼は知らない。

「堀井くん!!」

大きめの声で話しかけた直樹に、堀井は少し驚いたように振り返っ  
た。

「その人、誰なんだ!?もしかして、彼女なんか?君ら付き合っ  
てるのか!??」

なあ、ひよつとして君が成績落としたのは、この子と付き合ってるからなのか！？

どうなんだよ？俺に分かるように説明しろよ！」

それを聞いた堀井は、少しムツとした表情で足を止めた。

「失礼な奴だな！そんなんじゃねえよ。

もし彼女と付き合ってるので成績落としたんだったら、ソレはソレで構わないし」

失敬な言葉を投げかけた直樹、堀井の言葉は途中から聞いていない。

……シヨックだった。

全てにおいて自分より上だと、そう認めていた彼。

俺は彼を抜いてやった。

その余韻に浸ったのは、一晩だけのこと。

堀井に彼女がいる。

また彼は、俺にとって強靱な壁になった……！！

直樹はその後、一言も発することなく方向を変え、ホテルへと戻った。

そして歩きながら、思う。

堀井の彼女……

久保さんの方が美人だ。

更に言うと、性格も久保さんの方が絶対良い。

……あの子の性格は知らないけど。

何キツカケのどういふ思考がフル回転したのか、自分でもよく分からない。

が、直樹はセミナーを途中で止め、帰ることに決めた。

紀子に会うために。



論点をズラすなよ。

別に勝った負けたの話はしてへん。

奴に彼女がいたとか、そんなことは関係ない。

ただ、俺だってああやって女子と歩いて構わないんだな。

……知っていたけど、もう一度認めよう。

堀井くん、君はやっぱりデカかった……!!

もう二度と君と会わないことを、俺は願うよ。

直樹は帰り支度をしながら、紀子のことばかりを考えていた。

一人でする妄想・シミュレーションの中に、久保さんが出てくるって俺、苦手なんだよな。

何か知らんけど、……泣けてくる。

久保さんのことを考えると、俺のいろんな部分が浮き彫りになるんや。

親に見捨てられかけてる俺って、どう?

弟に抜かれてしまうたって思ってる俺って、どう?

タケシとパクウの真似ばかりしている俺って、どう?

テストの成績で久保さんに負けたくないって思ってる俺って、どう?

捨て子な俺って、……どう?

大人になってしまえばどうってことないだろうという体験。  
現状。

現在の多感であろう俺には、身に沁みすぎる。

俺って、恥ずかしい奴だろ？  
そう言って笑えばいいのか。  
真顔で言えればいいのか。

我が身が重過ぎるような気がする。  
だから、久保さんを思うと泣けてきてしまっただ。

明日は花火大会。

恋人のための大会。

何をしたいのか分からへんけど、俺はセミナーを途中で止めて、新幹線に乗るぞ。

そうして直樹は、今の地元へと帰って行った。

数時間の後、自宅に着いた直樹、

「あら、もうセミナーは終わったの？」

という母の声に、

「はい、終わりました」  
と答えた。

荷物を部屋に置き、すぐにパクに電話をかけたが誰も出ない。

この場合、どうすればいいんだ？

直樹は何も考えず、手が遊ぶまま電話帳をパラパラと捲る。

久保さんのお父さんの名前は分からない。

だけど、あそこは商売をしている。

商業ページで名前を探すと、紀子の家の電話番号はすぐに見つかった。

た。

直樹は何の迷いもなく、その番号に電話を掛けてみる。ただボタンから指が離れたと同時に、これまで味わったことのない緊張感が直樹を襲う。

ドクドクドクドクする。

それにしても、暑いな……。

雨でも降ってくれりゃ、ちょっとは涼しゅうなるんちゃうか？

……いや、雨が降るとマズイ。

花火大会が中止になる。

受話器の向こうのコール音を聞きながら、その場で足踏みをして緊張感を誤魔化そうとしている。

『はい、久保スポーツです』

明らかに紀子とは違う、女性の声。

「あ、あの、す、すみません、秋月と申しますけれども、紀子さんご在宅になられますでしょうか？」

『あー、ちよつと待ってね。紀子〜！』

電話番号探しからここまで、意外と簡単だった。

緊張感を抑えるための足踏みが止まらない。

滴り出る汗を拭いながら、紀子が電話に出るのを待つ。

『もしもし、秋月くん？どないしたん？』

久しぶりの紀子の声に緊張感が吹っ飛ぶが、自分の中で突っ走っている鼓動の速さは止まらない。

「あ、久保さん？あのね、明日何してる？」

『え？明日？何で？』

……早速嫌がられたか……

「明日、花火大会があるでしょ。一緒に……行かへんかなーと思っ

て……」

……急にこんなこと言われても、困るよな……

『花火大会？え〜私、人混み苦手なんやあ』

「ええッ！？ヤな理由が人混み！？人混みなんかどつてことねえよ

！いーじゃん、行こう！人混みが嫌なら、俺がずっと肩車してやる

よ！」

『ハア！？何じゃソレ！ハハハハハッ！』

「……………」

『……………』

それからしばらく沈黙が続いた。

この間、直樹は念じ続ける。

OKと言ってくれ！

OKしてくれ！！

頼むからOKしてくれ！！

やがて、紀子の返事は

『んー…………分かった、じゃあ行くよ』

その答えに、直樹は脱皮したような感覚を覚えた。

生まれ変わった…………！！

最近自分が行動を起こすと、その見返りに嫌なことばかりが起こつていた。

そんな気がしていた。

俺は一石投じてやったんだ。

その俺のド真ん中に、命中したんだ。

「今、とっても幸せです……！！！」

『はあ？』

紀子の声に、直樹は知らない間に今の心境を口にしてしまっていることに気づく。

慌てて誤魔化しながら、待ち合わせ場所と時間を決めた。

紀子の指示した場所がどこなのかよく分からなかったが、行けば分かる。

直樹らしからぬ安易な思考は、浮き足立っているせい。

電話を切った直樹、ここに来て重大なことに思い当たった。

そうだ、デートなんかしたことがねえ！

どうやったらいいのかわからへん！

どうすればいいんだ！？

そんな本、どこにも売ってねえぞ！？

ソワソワウロウロ落ち着かない。

直樹は、やはりパクに聞くしかない。

そう決める。

どうかどうか、間違っていないように！

そう思いながら、もう一度パクの家で電話をする。

頼むから出てくれ！

『はい、もしもし？』

出た！

しかもパクウの声！

「おいパクウ！俺だ、直樹だよ。」

相談がある！パクウにしか聞けないことやねん！」

『お、おう、何や？』

「あのな、告白ってどうやりゃいいんだ！？俺、全然分かんねーんだよ」

『告白？何の？』

直樹はここで少し我に返る。

アレ？

何だか恥ずかしいぞ……

「……あ、いやあ、例えば、例えばやなあ。女の人に告白する場合、何て言えばいいの？どうやって言うん？」

『えー…そんなの分からへんぞ。』

例えばお前がする場合と、俺がする場合はまた違うやろしな。十人十色ちやうん？

て、直樹、今お前どこにおんねん』

「いやー、家だよ。帰って来てん」

『あ、そうか。じゃあ明日大丈夫やな？6時にいつものトコで待ち合わせやぞ。』

俺、ちよつと用事あるから、ほなな』

「あ　　ッー！ちよつと待って！違うッー！！」

バツッ！

ッー・ッー・ッー……

「……………」

電話が切れてしまった。

もう一度かけてみるが、誰も出ない。

おいおいおいおい、どうなってんだよ！？

収穫ゼロな上に、約束までされちゃったじゃないか！

……アカン。

久保さんにもう一度電話する勇気がない……。

直樹らしからぬ行動。

完全に浮き足立っていた。

## 告白 2

約束してしまったものはしょうがない。  
破るのは心外だ。

久保さんの待ち合わせは19時。

まずパクウたちと会って、その後抜け出せばいいだろう。

告白に関しては…自分で考えるしかないな。

えーっと……

『俺、久保さんのこと、大好きやねん！』

……これじゃ伝わんねえか。

『俺な、受験頑張つて良い高校・良い大学出るよ』

……『あ、そう』って言われそうだな。

う~~~~ん……

声に出し、形にしながらシミュレーションしてみる。

少し大きめのこの独り言は、心拍数の速さに焦っているから。

ソワソワソワソワして、太腿の内側がムズムズする。

早いとこ明日になってくれ。

そう思う反面、

明日俺死んじやうかもしれへん。

そう考える自分。

玉碎覚悟なんて考えは、これまでの自分の頭には1ミリも存在しなかった。

全てにおいてシミュレーションを済ませ、準備を済ませ、骨組みから設計していく。

計画・準備・行動。



それらをクリアして、完成していた自分。  
これまでの自分。

だけど今回は、違うんだよな。

……しかし暑いなー。

これは一体誰のせいなんだよ？

直樹は早く明日になりますようにと思いつつベッドに潜り込む。

しかしなかなか眠れない。

乗り物疲れもあるはずなのに。

仕方なく父と顔を合わせないような時間に食事を済ませ、風呂に入り、明日の用意をすることにした。

制服もNGらしいし。

決め込んだりして『おいおいアンタ、マジやなー』なんてこと言われたら、立ち直れない。

明日はラフな格好にしよう。

クローゼットとタンスを開けて、物色する。

それから予備として買っていたコンタクトを取り出し、

明日は新品のこれで行こう。

そんなことばかりを考えている。

明日のシミュレーションが必要なことは重々分かっているのだが、  
覚束ない。

『俺と付き合ってください』

そう言った後の紀子の返事が、またNOになった。

恐ろしくてそれ以上踏み込めない。

「~~~~~」  
「……ッ」

…そんな、妄想シミュレーション…。

直樹は結局この日は朝まで一睡もできなかった。

眠くて堪らないのに、眠れない。

読書をしてみたり、問題集を解いてみたり、そんなことを繰り返している。

だけど、眠れない。

気がつけば、時計は午前10時を指していた。

……一体どうなってんだよ。

眠れねえじゃねーか。

睡眠は大事だぞ？

この後一体何が控えていると思ってるんだ！！

いい加減にしる。

無駄な時間を過ごし…

…いや、無駄な時間じゃない。そんなの俺が認めない。

この眠れない時間も必要不可欠。

数時間後に、あれも必要だったんだと思えるはずだ。

しかしまあ、俺がこんなに気が小さくて軟弱だったなんて、知らなかったな。

玉砕を覚悟するなんて、生まれて初めてだぞ。

ただ、好転して久保さんと付き合えるなんてことになったら…

……毎晩電話で話そう。

いらぬ、余計なことばかりかもしれないけれど、話したいことがたくさんあるんや。

きっと楽しいと思うよ？

……俺が。

覚悟を決めたこの日、直樹は午前11時を回ったところでよつやく寝付くことができた。

次に目が覚めた瞬間、直樹は文字通り飛び起きた。

「ッ!？」

セットしていなかった目覚まし時計、時刻は午後6時20分を指している。

パクとの約束の時間には完全に遅刻だ。

これまで遅刻などしたことのない直樹は、血の気が引いてしまう。

しかしそんな直樹が向かった先は、何故か風呂場だった。

シャワーを浴びているのだ。

落ち着け〜！落ち着け〜！

いや、落ち着いたらダメだ。

急げ〜！急げ〜！

急いで風呂を出、髪形を整えて準備をする。

寝坊なんて言語道断だ！

しかも夜の待ち合わせに！

直樹は新しいコンタクトを嵌め、家を飛び出した。

予定では4時前に家を出るはずだったのに、計画は始めから狂っぱなしだ。

紀子との待ち合わせは 町の 像の前。

この場所が分らない。

調べてから行くはずだったのに、それも不可能になってしまった。

ちんたらバスに乗っている暇はない。  
直樹はタクシーに飛び乗る。

そして、まず向かったのは花屋。  
かすみ草とバラの花束を購入して、またタクシーに乗り込む。

最低でも、久保さんとの待ち合わせには間に合わないと。  
この花、喜んでくれるかな……。

焦る気持ちとは裏腹に、口元から笑みが零れてしまう。

タクシーの運転手に、

「すいません、町の像前って分かりますか？」

そう尋ねると、

「何じゃ、ソレ」  
という返事。

町までは行くから、後は自分で探せと言われてしまった。

それならばと、直樹が向かったのはパクたちの待つ場所。

2人に 像がどこか聞こうと思ったのだ。

…また内腿のムズムズが始まった。

焦るな！焦るな！…！

自分に言い聞かせる。

やがて目的地に着きタクシーを降りると、そこにはタケシとパクがいた。

「おーい！ごめんよ！遅刻してもうて。あのね、」

しかし2人は直樹の言葉を最後まで聞かない。

「お前、どういことや！？どんだけ遅刻しとんねん！暑い中よう

！大概にせえよ！！」

「あー、ごめん」

タケシはキレ気味でこっちに歩いてくる。

その時、パクが直樹の持つている花束に気づいた。

「お前、何やその花。…：そつえば、お前昨日…」

そこでパクの目線が変わる。

「あ、」

直樹もつられるように振り返る。

そこには5人ほどの団体。

…マイティーだ。

「おいおい大林、岡崎。お前らコンビやったんちゃうんか。いつの間にとりオになったんや」

「へッ！何言うとんねん。お前の方こそ、いつもゾロゾロ下っ端連れやがって」

直樹はヤバイと思った。

コイツら、ケンカを始めるつもりだ。

「おい、やめろ！そんなことやってる場合じゃねーんだよ！」

そこでマイティーの顔を見た直樹、以前のことを思い出す。

マイティーにちゃんとお礼を言ってなかったな。

「あのさ、マイティー、この前は…：どうもありがとう。ほんとに助かったよ」

「……………」

うまく思い出せないような表情をしているマイティー。

そこに、マイティーの手下であろう1人が叫びながら駆け寄って来た。

「おいマイティー！アイツら見つけた！10人くらいおるぞ！川の

向こうにおる！」

それを聞いたマイティーは体勢を変え、

「よし、分かった」

それからタケシに向かって言った。

「おい岡崎、大林も。…お前の名前知らんな。お前も。暇しとるんちやうか？」

今からな、 高のヤツら相手にいつちよかましたらなアカンねん。10人おるってや。お前らどうする？」

ハツとする直樹。

タケシとパクの顔を見ると、すでに2人はニヤケ顔。

3人は同時に返事をする。

「行く！」

「行かねえ！」

「行く！」

それと同時に、全員が走り出した。

「おいパクウ！」

直樹の声にパクは振り返り、

「直樹！お前は来んでエエ！告白があんねんろ？頑張つて来いや！コツチはコツチで頑張るから！！」

そう叫んでパクは直樹に背を向け、走って行く。

…さすがパクウだよ。

全部話さなくても、分かってくれる。

そう。

今日は大事な日なんだ。

遅刻のことも怒らなかつたしな……。

…って、違うんだよ！！

道が分かんねーんだよッ！！

「おいパクウー！違っつて！  
ツ！！」  
像の場所、教えて

かすみ草とバラの花束を握り締めて、約10人の不良たちの後を追いかける直樹。

何でこんな暑い日に、こんなに走んなきゃいけないんだ。  
せっかくシャワーまで浴びてきたのに！

ジイイーツ！

ジイイーツ！

賑やかない、セミの声。

「うるせーよセミ！！邪魔すんな！！」

八つ当たりもしたくなる直樹、皆に追いつけることなく、ひたすら走って後を追いかける。

だが以前のように、息切れがして走れなくなるということはない。  
道を聞きたいのと、

「ケンカなんかやめろ」

それを言うために、必死で追いかける。

「おい！お前ら！！ケンカなんかやめろ！！そんなことしたってつまんねーぞ！？」

しかし前を走る彼たちに、直樹の声は届かない。  
あっという間に川を越えてしまい、先頭では早速睨み合いが始まっている。

相手は体格からして、正に高校生。

10人ほどがこちらに睨みを利かせていた。

見晴らしが良いにも関わらず、人気がないこの場所。

警察が駆けつけるなんて、ありえへんな、これじゃ……。  
そう思い、目の前にいるタケシに話しかけた。

「おいタケシ。やめろや。ケンカなんて下らんぞ？」

おいマイティー！2人を巻き込むんじゃねーよ！お前らだけで勝手にやってる！こっちは忙しいんだよ！

なあタケシ、帰ろうぜ」

マイティーたちは、すでに高校生たちと何やら言い合いを始めていた。

直樹の声にタケシは振り返り、

「アレ、秋月。ついて来たんかいな。お前はエエよ、来んで。ケガするからな」

「……………」

はつきり言うと、ムカツ！

そしてカチーン！と来た。

ボクシングを始めたのは、ケンカに強くなるためじゃない。

ただ、いろんな意味で闘える人間に。

そこを乗り越えて、勝てる人間に。

そう願ひ、始めたこと。

でも、どこかで自分の腕を試してみたい、そう思う自分もいた。

今聞いたタケシの言葉に対して、直樹は考える。

俺のことを馬鹿にしてんのか？

タケシ、今なら俺、お前にも勝てるんじゃないかと思ってるぞ。  
そんなことを思ってしまう。

直樹は本当に、2人を止めるつもりでこの場所に来た。



しかし間が空きすぎた。

乱闘が始まってしまったのだ。

パクはすでに、その輪の中。

「タケシ、ほんとにするのか？」

「おう！面白そうやんけ！」

……止まりそうにない。

「もう！勝手にしろ！俺は知らないからな！」

またケガするに決まってるじゃないか！

…頼むから、大ケガだけはしないでくれよ…。

直樹は乱闘に背中を向け、紀子の待つ場所へ向かおうとした。

この段階で、もう完全に遅刻なのだ。

そして、そう。全くもって、油断していた。

歩き出そうとした直樹、いきなり服の襟ごと首根っこを掴まれ、強い力で後ろにグイッと引つ張られる。

ドンッ！

直樹はそのまま尻餅をついて倒れ込んだ。

間髪入れずに、腹の上に跨るように誰かが乗り上げてくる。

「ワレエ、ナニ大事そうに花みたいなモン持つとるんじゃ!？」

呆気にとられている直樹の腹に座ったその彼は、そう直樹に浴びせかけると、振りかぶった拳を直樹の顔面に振り下ろした。

ガッツ！

初めての感覚

これまで、こんな風に顔を思いつきり殴られた事などない。頬骨あたりを強打された直樹、メチャクチャ痛い。

そしてその瞬間、左目のコンタクトが外れてしまった。

激痛と、視界の悪さ。

現実のこととは思えていない直樹。

直樹を押さえつけている彼は、全く何もお構いなしに何発も何発もパンチを繰り出した。

俺が下らないと思っっている行為の中でも、更に底辺に行くケンカなんてもの。

こんなことやってる場合じゃねえんだよな。

もっと大事なことがあるんだよ。

……俺の意志、

もう諦めてしもつたんか？

殴られながら、抵抗すらできないでいる直樹。

その直樹に馬乗りになっている高校生に飛び掛ったのは、タケシだった。

「何すんじゃワレエツ！！何シバイてくれとんねん！！コイツ、花持つとるのが見えへんのかあッ！！」

タケシは彼に怒声を浴びせながら、何発も何発も蹴りを見舞う。

「おい秋月！早よ行けって言うてるやる！！パクウからちよつと聞いてん！」

今度はタケシが彼に馬乗りになって、パンチを繰り出し、続けて言う。

「メツチャ大事な用事やるソレ！お前が行く前に、ちよつと顔見て冷やかしたろー言うとつたんや！

ごめんなあ、こんなことになって。っていつか、謝るくらいなら最初っからすんなつちゅーねんな！

…くそう！お前にそんな女がおつたとはな！！」

直樹は尻餅の状態で、タケシの行為を見ている。

「……タケシイ、…ごめんよ」

「ええ？ナニ謝つとんねん！？エエから早よ行けよ！」

そう言い終わると同時に、タケシはその高校生に上体を引っ繰り返され、立場が逆転。

今度は殴られ始める。

「喋ってばっかしてから、エライ余裕やのう！！」

体格の差は歴然。

直樹の目の前で、タケシが何度も何度も殴られ続けている。

……謝らんでいいよって、

そういう意味のごめんじゃないよ。

さっき、俺がお前に思った非礼を詫びたんだよ。

……俺の柔らかい意志、

何とか持つてくれよ！

直樹はバラの花束を持ったまま、その拳を大きく振り下ろし、高校生を殴りつけた。

「ワン・ツー・スリーツ！」

ジャブ・ジャブ・ストレートツ！」

俺だつてなあ！何万回も練習してんだよツ！」

ナメてもらったら、困る！！」

形勢逆転。

というよりは、タケシと2人がかりでその高校生を痛めつける。

直樹はバラの花びらを散らしながら、あのボクシングジムで習ったパンチの打ち方そのものを、相手に繰り出す。

パクの方も心配だ。

ちらと目を遣ると、パクがうつ伏せになり蹲っている。それを見下ろす、パクの相手。

パクウ……負けちゃうのか？

他に視界を広げると、マイティー一味も何人かが地べたに寝転がり、「痛い、痛い！」と暴れている。

……俺の柔らかい意志、

逃げるなよ。

ここで逃げたら、タケシとパクウに二度と会わせる顔がねえぞ。

……久保さんに会わせる顔はあるかなあ。

自分たちの形勢を確認し、ボーツとしてしまう直樹。

また高校生に殴りつけられ、地面に膝をついてしまう。

同時に、後頭部に思いっきりの回し蹴りが襲った。

ボクンツ！

……パクウは？

タケシは？

2人のことが気になってしょうがない。

この間だけは、痛い箇所も忘れている。

右肩がうまく動かない。

殴ったので肩がおかしくなったんだな……。

バラが茎だけになってるじゃないか。

攻撃で肩壊すなんて、まだまだだな。

死んだフリなら裏切りにはならないだろ？

キーンという耳鳴りを聞きながら、直樹はその場に倒れ込む。気を失ったわけではないが、体がうまく動かない。

まだ粘っているタケシを見ながら、

何やってんだ、俺。

頑張っただろ、俺。

今、何時だろう？

この後、遅れてでも絶対行かなきゃダメだぞ、俺。

砂が唇にくつつくのも気にせず、直樹は横たわっていた。

これ以上の攻撃は堪らないと、死んだフリをすることにする。

そこへ、直樹の肩をくいツと引つ張る人がいた。

……パクだ。

「おい直樹。お前、何で来たんや。こんなコトしてる場合ちゃうやろ。途中まで気付かへんかったわ」

冷静なパクの声を聞き、この場がもうすでに焼け野原になったことを確信した。

おさまったんだな。

そう思い、体をくるっと引つ繰り返した。

……そこら中が痛い。

「……なあパクウ、これって負けてしもうたってことか？」

「せやなあ。向こうはササーッと帰ってしもうたわ」

少し、悔しい。

「また仕返しするの？」

「どうやるうな」。またソコに寝転がってるアホマイティーと偶然会って、アイツらとまた偶然会ったら始めるんちゃうか」

喋っている間に、パクの顔はどんどん腫れ上がってくる。

「勝つまでやるわけじゃねーんだな」

「へへッ！どつかで勝ち負けの線決めとかんとお前、殺してしまつたら笑えんやないか。」

今回は俺らの負けや。なあ、マイティー？」

気がつくくと、マイティー一味もこちらに近づいてきていた。

「おー、そやな。アイツら高校の柔道部やねん。勝たれへんもんなー」

そう言つて、皆が笑っている。

「あーあーあー！直樹！お前、花メチャクチャやないか！茎しか残つてへんやん！」

…あ、そうや、タケシ。お前、直樹に何か渡すモンあるんやろ？忘れとつたやんけ」

「あー、せやつた！」

パクの言葉に、タケシはポケットをゴソゴソしながら近づいてきた。そうして取り出したのは、裸の状態のネックレス。

「あんな、さっきも言つたけど、コイツからちよつと話は聞いとんねん。」

お前、今から女のトコ行くんやろ？

このネックレスな、前に俺が告白する前にフラれた女にあげよう思つて、バイト代と、パクウにちよつと出してもろつて買ったモンなんや。

効き目があるか分からへんけど、俺しばらく使う予定ないから、お前にやるよ」

そう言つて、タケシはそのネックレスを直樹の手のひらにチャラン、と落とした。

「箱はドコ行つてもうたか分からへんねん。使えるんやつたら使いや」

「……ッ」

ぐつと来るのを抑えようとする直樹。

「……俺、パクウにも詳しいことは何も言つてへんやんか。何で……」  
「まあ、今日かどうかは分からへんかったけどな、渡しとこう思つててん、一応な」  
もう一度、ぐつと来るのを抑え込んだ。

俺、もらつてばっかだな。

いつもいつも……。

「……ありがとう」

そう言う直樹の心境は何となく、夢見心地。  
殴り倒されたのも初めてなら、自分が何かしようとしたとき、人にこんなに手を差し伸べてもらったのも初めて。

その時、直樹たちの遣り取りを見ていたマイティーが、声を掛けてきた。

「お前、ひよつとして彼女おんのん？何や、何の話やねん。」

もし俺のせいでエライことになったんやったら、めっちゃ謝らなアカンやんけ！どういうことや！？」

「おいマイティー、お前、氣イ早いんじゃ！直樹は今から彼女が出来に行くんや。」

ま、お前が邪魔したことには変わりないけどな」

ここでようやく直樹は思い出す。

行かなきゃいけない、と。

「そつだよ、パクウ！俺、こんなことしてる場合じゃないんだ！

ここまで着いて来たのも、パクウに

像の場所を聞こうと思

つたんだよ！7時までに行かなきゃ！」

するとマイティー一味の1人が、

「7時つてお前、もう過ぎとるで、15分も」

慌てて立ち上がるパク、

「お前、遅刻やんけ！！女性待たすなんて最低や！！こういう時は、ここぞとばかりに紳士ぶらなアカンもんや！  
早よ立てエ！！」

像やったらすぐソコや！ここ真っ直ぐ行って、あそこに信号見えたあるやる？アレ左に曲がって真っ直ぐ行ったらすぐや。

一人で行けるな？俺らみたいなんが着いてったら、結果は目に見えたある。走れ！！」

「わ、分かった！！」

短く返事をして、直樹は立ち上がる。

片手に散ってしまった花束を握り、片手にネックレスを掴んで。

片足を引き摺り、直樹のものとは思えない腫れ上がった顔をブラ下げ、急いで向かう。

紀子の待つ方向へ。



## 告白 3

直樹はずるずると足を引き摺りながら考える。

形容し難いこの感情。

楽しかった。

痛かった。

無駄な時間だった。

手のひらのネックレスの感覚を思い出し、良かったんだと答えを出す。

以前とは違う、俺。

タケシもパクウもマイティーもその他も、皆イイ奴だ。

無駄なんて一つもない。

片方失くしたコンタクトだって、必然だろう。

こんなに腫れ上がっちゃってんだ。

着いたままだったら大変だろ？

パクに言われた通り、信号を左に曲がり、真っ直ぐ進む。

その先に、目的の銅像があった。

紀子が言っていたように、こっちに足を向けている銅像。

これで間違いない。

そこへ近づき辺りを見回すが、紀子の姿は見えない。

「……………」

…そうだよな。

随分遅刻した。

そりゃ、帰っちゃうよな。

ここは待ち合わせによく使われる場所なのか、たくさんの人が出た。茎だけの花束を持って顔を腫らし、流血している直樹を、皆が遠慮のない視線で見つめている。

こんな格好で目立っちゃってる俺に会わなくて正解だよ、久保さん。

直樹は人混みの中、立ち尽くす。

待っていても、いないものは、いない。

そろそろ帰ろうかと決めた頃、

「秋月くん！」

と、声がした。

間違いなく、紀子の声。

ハツとして周りを見渡すが、暗くなり始めたのも助け、人混みの中に紀子を見つけることができない。

キョロキョロする直樹に、後方からカラッコロツと駆け足の音が聞こえてきた。

振り返ると、そこにはいつもと全然違う雰囲気の子。

……着物着てる。

その姿を、直樹はポケットと見つめている。

「……………」

ジイイイーツ

ジイイイーツ

賑やかないセミの声。

…悪かったなあ、セミ。

さっきはあんなこと思って。

お前たちの声は、最高に夏場を演出してくれている…!!

紀子の姿を見ながら、セミの声を聞く直樹。

紀子は待っていてくれたのだ。

「ちょっとー、めっちゃ遅いやん。っていうか、ナニその顔!どしたん?」

その声に、直樹は現実に戻る。

そうだった。

こんな顔だった。

「…ごめんよ。ヤボ用ができちゃったんだ。それで遅くなっちゃった。」

ケガしてこんな顔になっちゃうし。最高だよな。…ごめんよ」

…最近俺は、よく人に謝る。

紀子の顔が目の前まで迫り、

「うわー、ちょっとメチャクチャ腫れてるやん。ちょっとあっちに移動しよ」

足を引き摺る直樹に気が付き、紀子は肩を貸してくれた。

そのまま水場まで行くと、紀子はハンカチを濡らして直樹の顔に付いた血の塊などを拭き落とし始める。

「腫れてるトコってね、実は冷やしたりすると治りが遅うなんねんよ。せやけど痛いもんねえ。ちょっと冷やしといた方がイイわ」

言いながら、濡れたハンカチを目にあてがってくれ。

「ありがとう。ごめんね、ハンカチ汚しちゃうね」

……俺は最近、お礼もよく言う。

人と関われば関わるほど、お礼と謝罪を繰り返す。

人は間違えながら、人の世話になる。

お礼も謝罪も、以前のペースを考えたら一生分しちまったくらいじゃないのか？

こうやって考えると、人と接しながらお礼を言えない奴ってのは最低なんだろうな。

「私ね、お兄ちゃんがあるんだよ。お兄ちゃんもよう悪さして、ケンカして帰って来よったから、ケガの対処の仕方とかよう知ってんねん。

他に痛いところある？」

「ありがとう。でも平気だよ」

またまたまた、涙が出そうだ。

誤魔化さなきゃ。

「久保さん、その着物、普段着てねーだろ。俺と会うからわざわざ着て来てくれたのかい？」

「ええ?!……ちよつと秋月くん!人の心境、言わずにおりたいことをハッキリ口にせんといてくれる!？」

ちなみにコレは着物じゃなく、浴衣です!」

「……………」

それから、照れたような沈黙がしばらく続いた。

やがて、紀子が口を開く。

「肩車、無理やりされへんように浴衣着て来たんやで？アツハハハッ！」

……秋月くんね、花火大会って実質、花火上がってるんは1時間ないんやで。知ってた？今から行く？」

俺は久保さんとお話できるなら、花火の大会なんてどうでもいい。そう思った。

「そうだよな、久保さん人混み苦手だもんね。ここでお話ししようよ。まだ時間いいでしょ？」

何だか……泣きそうだ。

「俺、ジュースか何か買って来るからさ、待っててよ。」

久保さんが居れるギリギリまで夜更かししようよ。ちゃんと送るか  
らさ」

そう言っただけで立ち上がった直樹を、紀子が制する。

「イヤ、足引き摺ってる人に行かされへんよ。私が買ってくるから、ちよっと待ってて。」

たこ焼きも食べるやる？アソコに店があったんや。

ちよっと待っててね」

紀子は駆け足でその場を離れていく。

カラコロと響く下駄の音。

見慣れない、浴衣姿。

……久保さんは、俺の遅刻に対して何もなかったかのように、怒らない。

逆だったら、俺にあの態度が取れるかな。  
久保さんもまた、やさしい。

……とうとう、辿り着いてしまった。  
もう、我慢できない。

直樹は、ぼろぼろ零れ落ちる涙を堪えることができなかった。

「……………」

いつ以来か、覚えていない。

泣いたことなんか、あっただろうか。

……記憶にない。

止め方が、分かんねえ……。

拭っても拭っても拭っても、次々と零れ落ちる涙を不思議に思い、  
恥ずかしいと思い、必死に止めようとするが止まらない。

この暗さに乗じていれば、バレない、……かな。

何度も何度も、腕でゴシゴシ擦りながら、涙を拭う。

肩を揺らすほどに泣けて泣けて、涙が止まらない。

たくさんの方が行き交う中、他の人たちは一切視界にも入れず、  
ただ自分の世界を作っている。

泣いているのは恥ずかしい。

そう思いながらも、止められない。

しばらくすると、再び下駄の音を鳴らしながら紀子が戻ってきた。

「……………」

少しの間何も言わず、直樹の正面に立っていた紀子。

「……………冷めへんうちに食べようか」

そう言つて、直樹の隣に腰を掛けた。

「まだどつか痛いん？あ、別に子供扱いして言つとるんちゃうで？私、将来医者になりたいんや。」

ジャンルはねえ、何でもエエかな。医者にさえなれたら。

ほら、冷めるから食べようや」

紀子は買ってきたたこ焼きの上紙を剥がして、直樹に渡してくれた。

……確実にバレてるんだ。

今、俺が泣いてること。

久保さんは、咎めない。

直樹は泣きながら話し出した。

「……じ、実はさ……お、俺ッ、久保さんにわ、渡そうと思って買ったんだけど、ヒッ……メ、メチャクチャになったんだ……ヒック！」  
花束は、何本かのかすみ草しか残っていない。

「……ッ、も、もう、ゴミになっちゃった……ッ」

紀子は直樹の手からぼろぼろの花束をそつと受け取り、

「ありがとう」

そう言つてはにかむように笑った。

「そ、それとさ……っこれも、久保さんにプレゼント。うっく……ッ  
と、友達が、協力してくれたんだ……ッ」

直樹は左手に握ったままだった、すっかり温まってしまったネックレスを紀子に渡す。

「えー、スゴイやん！エエの？こんなんもらつて。こんなの着けたことないよ！

私、厚かましいから、くれる言つものすぐもらつよ？ありがとう」

この場所で、2回目の紀子の『ありがとう』

久保さんは、俺を否定しない。

そして、そこで踏み込んだ俺を、追い出さない。さっき言った『ありがとう』が、返ってくる。

「く、久保さん、ツク、さ、…さっきの、医者になるっていうのは、く、久保さんの夢かい…ツ？」

「うん、そうやで。夢やし、絶対現実にしよう思ってる」

「ス、スゲー…スゲーよな。もう夢を持ってんだ。きつとなれるよ…ッ」

涙が止まらないまま、こんな会話。

上等な言葉を書き並べながら、自分には夢なんかなかったことを知る。

机上空論であれ、俺はこうあるべきなんだ、こうならなきゃいけないだ、具体的な形でただ、そう思っていただけ。それを、知る。

「…………く、久保さん、…………うつく…………ッ  
建設                      グループ  
つていう、ふ、不動産を扱ってる会社、知ってるかい？」

「うん、知ってるよ。こないだ    町にデパート建てたよね。有名なんか」

「お、俺は、ヒィック…………あの会社の、トップにいる人間の、息子です。…………ちよ、長男です」

これまで、同年代の人間にこの自己紹介をすると、必ず返ってきた言葉。

スゴイじゃん。

金持ちなんだね。

そして、その度に思っていた言葉。



俺が金持ちなわけじゃない。

だが今回、紀子相手だと勝手が違う。

紀子は、そんなことは言わない。

「長男っていうのはさ、……う、ウチの商売を継ぐもんだろ？お、お、俺もずっとそう思ってた……っ」

一体何を言おうとしてる？

涙が止まらない。

止め方が分からない。

そのついでのもりか？

「で、でも、俺ね、ふ、不合格になっちゃった。ツヒ……！もう、もう、合格したんだって、油断してたのかもしれない。

お、お父さんはもう、お、俺の前を歩きながら、後ろにいる俺を、き、気にして振り返ることは、ないみたいなんだ、う、う、……ッ  
ク！

きつと、きつと、失敗作だって、お、思ってるよ……」

あまりにも脈絡がないな。

言ってることが。

説明しなきゃ。

「久保さん、お、俺ね、生まれて間もないとき、で、電 社の前に、捨てられてたんだ。ヒッ……ッつつく

……電 社の前に、捨てられながら、お、俺を拾ったのは、郵便  
配達員……っ

わ、ワケ分かんないでしょ。……フック……ッ  
しかもさ、……うつくッ……お、俺、捨てられたこと、覚えてねえ  
んだよ。

こ、こんな大事なことを、わ、わす、忘れちゃってんだ……ッ」

「……」

紀子は黙ったまま、ただ直樹の話を聞いている。

「そんな、大事なこと忘れてるのにさ、さ、……ッ3歳のとき、今の両親が、俺を引き取りに、来てくれたときのことは、は、ハッキリ覚えてんだよ……ッ。

ふッ……お、お父さんは、俺、俺に『厳選した結果だ。今度は私がお前を拾ってやる』って、言ったんだ……ひ・うーッく……ッ  
で、でもさ、こっから覚えてないんだよ。うれ、うれしくて喜んだのか、どうか……

施設の居心地は、わる、悪くなかったんだけど、お、俺にお父さんと、お、お母さんができたこと、それに対して俺は喜んだのか、どうなのか……お、覚えてないんだよ……ッ

大事なことは、全部、忘れちゃってる……ッヒック……ううッ」

もう、止まらない。

「5歳くらいにはさ、お、お父さんが、大きな会社を経営してることを理解して、ウチはけ、結構なお金持ちだっただけを知って……お、お、俺、俺は結構幸運だっただけ、思ったんだ。

その頃には、……ッもう、家庭教師が付いてたから、毎日毎日、ッ日記を書いてたよ。

ハ……ック……

面白いこと、楽しいこと、……そ、そういうことがあった覚えもないのにさッ……。

ま、毎日毎日、日記を書いてたよ。

字を書けるってことが、ひ、ひろ、拾ってくれたお父さんに、恩返

しできることだって、……そ、そう思ってた……ッ  
まず、第一歩だって……」  
「……………」

まだ説明は、終わっていない。

「く、久保さん、こないだ会ったじゃん、お、俺の弟に。あいつは、俺が拾われて、すぐに生まれたんだ……ッ  
りよ、りよ、両親からしたら、予定がなかったから、俺をひ、拾ったんだろうけど。け、けい、慶也は生まれたんだ。  
ひ、ひ、…っ

……ッあの頃はそれほど、気にもしてなかったけど、大きくなるにつれて弟が……ック！最大のライバルだって、すぐに知ったよ。

ヒック！ウウ……ッ

い、椅子は、1個しかないって。

……蹴落とそうとは思わなかったけど、あ、あ、あいつはいい奴だから。

で、でもさ、久保さん……勝ってるって思ってたのに、15歳にして、早々に追い越されちゃったよ。ヒ・ヒ・ヒ……ッ！  
い、1+1がさ、2なら簡単だろ？

2-1が1なら、簡単でしょ？

そ、そういう風には、できてなかったよ……ッ

い、今、今となつては、俺の、俺の、椅子なんか、最初からなかったような気がする……ッ」

久保さんにこれ話して、何がしたい？

……こんなはずじゃなかった。

その時、それまで黙っていた紀子が口を開いた。

「ふーん……それで？秋月くんは家を追い出されそう、とか？」

「……いや、ま、まだそれはないと思っつよ……ッ」  
「ふーん……で？どうしたいん？」

どうしたい？

そこまで考えてなかった。

どうすればいい、ってことだよな。

「お、俺、頑張ろうと思っつよ」  
直樹はそう答える。

それに対し、紀子は

「よし！じゃあソレで行こうや」  
そう答えるのみ。

そして紀子は首元にネックレスを着け始めた。

「ちよつと、コレ高いモンちゃうん？中学生がこんなモン着けとつてかめへんのん？」

ちゅーか、似合っつてる？」

まだ泣き止まない直樹、紀子の『よし！じゃあソレで行こうや』

その答えを乗せながら、答える。

「……うん、うん。すごく、似合っつよ……ッ。

そ、それは、きつとき、久保さんが着けるために、つ、つく、作られたもんなんだよ。

それくらい、……っ似合っつてる」

「アーハハハハハッ！泣きながらようそんなこと言っつねえ！関東人はキザで困るわあ」

紀子はしばらく黙った後、口を開いた。

「……秋月くん、泣きながらでエエから聞いてえな。

私ら、あんな進学校におつて、勉強に關してはいつも競争やんか。

私ね、それだけじゃイヤでバレーやってたんよ。

だつて、つまらんやん。あの人こないだ何位やっつた、この人は何

位に落ちた〜って、話しよんの。

そんな中でね、私ら2人、いつも1位2位やん。

これってね、しのぎの削り合いから生まれた戦友やと思わへん？

私ら、ウマが合うと思うよ？

秋月くんね、こんなこと言うてる私のこと、好き？

「はい、そんなことを言おうが言うまいが、……僕は、久保さんが好きです。前から」

「ほんまあ。きつともっと話したら、もっと気が合うと思うよ、私ら」

俺も、もつともつと喋りたいと思ってた。

ずっと、そう思ってた。

「こんなエエもんもろうてな、こつなったら私ら、付き合うしかないんちゃうん？」

どう思う？秋月直樹くん？」

もつともつと、泣けてくる。

「はい……！僕も、そう思います……！！」

何故か敬語の直樹。

……もつともつと、泣けてくる。

俺の生い立ちについて、深く聞こうとしなかった久保さん。

追及されても、もう話すことはないんだけど。

聞かれたらきつと、答えはあつたんだよな。

でも、彼女は聞かない。

「よしー！」

そう言つて、紀子は立ち上がる。

「ここまで話が落ち着いたら、ケガしてる秋月くん、こんなにして外におらす必要ないよね。」

帰ろうや、一緒に。…あ、でもたこ焼きだけ食べて行こうか」

2人は並んで、たこ焼きを頬張った。

結構長く話したんだな。

そう思う。

たこ焼きが冷めてしまっている。

久保さんはバレーの大会では一回戦で負けて、これからは受験に専念するだけ。

結構時間あるよ。

そう言つた。

俺も、友達と遊んでるだけ。

だから、いつでも時間あるよ。

そう返した。

堀井キツカケで今回の行動に移った直樹。

でも、彼のことは思い出さない。

紀子と手を繋いで、暗い道を帰る。

その頃になつて、直樹はやっと泣き止むことができた。

誰の許可もいらず、手を繋いだり、2人で話したりできるんだよな？  
これからまた、笑うことが増えるんだろうな。

そんなことを考える。

花火は見えないが、遠くからドーン……ドーン……！という音が何

回も聞こえてくる。

それを背に2人は手を繋ぎ、歩いて一緒に帰った。

## 理由 1

夏休みというのが、こんなに楽しいものだとは知らなかった。

紀子さんとは結構なペースで会ったし、毎日のように話をした。勉強も、もちろんしましたよ。

でも休みが終わることに、かなりの怒りを覚えている。

2人は『紀子』『直樹くん』と呼び合おうと決めた。

男はね、デンとしてちよつとくらいエラそうなのがエエんよ。

そう言う紀子だが、直樹には勇気がなく、決めた呼び名とは違う形で、『紀子さん』と呼んでいる。

263

### 四季といえば衣替え。

そういう認識しかなかったですよ、俺は。

涼しくなると外に出掛けやすい。

知っていましたが、気づいていなかったような気がします。

俺は今後、潜行しながら生き長らえるものばかりだと思っていました。

そう、涼しくなると外に出やすい。



千古不易のこの俺と表していた以前、腹案しても意味がなく、独習し誤るところだったんでしよう。

この世界には、少なくとも俺にとっての先生が3人いた。

不協和音も自腹で練り合わせ、

そうですね、端的に言つと、これでいいんだということですよ。

もっと涼しくなれば、紅葉を楽しむ紅葉狩りなるものがあるらしい。紀子さんを誘つて一緒に行きたいと思う。

料理が得意つて言つてたから、お弁当なんか作ってくれたりするんだろうか。

俺はお好み焼きがエエなあ。

でも秋を越えればすぐに受験や。

俺たちは同じ高校に進もう、そうやって決めたんやから遊んでる暇はないのかもしれない。

冬も春も夏も秋も、また来るんやから。

次に取つておくかもしれないなあ……。

タケシとパク、そして紀子。

どちらも大事な直樹はクソ真面目に決めていた。

月・水・金・日は紀子と会う。

火・木・土はタケシとパクに会う。

そして相変わらず、夜はボクシングジムに通う。

生真面目にそう決めていた。

その日は土曜日。  
相変わらず続いているタケシとの勉強会の後、パクの家で下らないことを話している3人。

タケシが言った。

「あ、ヤバイ！明日、甲子園最終戦やないか！ヤバイぞパクウ！すっかり忘れとつた！」

「アイタク！そうやったなあ！ヤベエ！！」

2人は大の阪神タイガースファン。

そのことは直樹も知っていた。

パクが言う。

「俺、あのダフ屋のオヤジに電話してみるわ。券残ってるかもしれないし」

2人の会話をポカンとして聞いている直樹に、タケシが、

「おい秋月、お前も行くこや。……ハッ！！まさかお前！東京出身ということ、巨人ファンちゃうやろな！？」

それを聞いた直樹は答える。

「巨人のファンなんかじゃねーよ。ていうか、巨人て誰やねん」

「そうか。そしたら明日、一緒に行くこ。甲子園で最後の阪神戦やねん。阪神側で応援するぞ！」

「……ハンシンセン？おいタケシ、お前ナニ言ってるんだよ？」

そこにパクが割って入った。

「タケシ、ちよつと待てエ。お前もエ工加減慣れる。

多分コイツは最初の段階から話踏み外しとるぞ。巨人のことは誰か個人のことやと思ってるし、阪神戦は何かの線のことやと思ってるぞ」

……まったくもって、パクの言う通りだった。

「あんな、直樹。プロ野球の話や。」

明日、甲子園球場で阪神タイガースと読売ジャイアンツが野球の試合をするから、それを応援に行くこ言うてんねん。分かった？」

「おーおーおー！野球の話か。分かった。理解した。……だけどなあ、俺、日曜はなあ……」

するとタケシが直樹に飛び掛るようにして肩を掴み、ブンブンと揺さぶった。

「お前は変わってしもつたのう！女ができたらそう言うか！……どの口が言うとなんねん！？」

小さい時そんな子やなかったやないか！大きくなったらその口がそんな事言うんか！！」

……お前は俺の小さい頃なんか知らへんやろ。

そう思ったけれど、直樹は口にするのを止めておく。

「まーまー、タケシ。直樹な、たまにはエエんちゃうか？男同士の付き合いやんけ。明日は野球にしようや。」

3人で買ったチケットがちよつと安うなんねん。な？」

うーん、と悩む直樹。

まあ、言ってることは分からないでもない。

「たまのことやんけ。紀ちゃんも許してくれるよ」

お前が紀ちゃんって言うな。

そう思いながら、これ以上紀子の話になるのは困ってしまうような気がした。

「じゃあ、分かった。明日は野球に行こう。応援すればエエんやろ？タイガースを」

「よっしゃ！そんなアカン！！」

そう言うのと、パクは部屋を出て行った。

もうすっかりその気のタケシは、パクの部屋の家捜しを始める。

「確か、この辺にメガホン置いてあった……。3人で行くってことは、最低6本いるからなー。確かあつてんけどなー……」

そうこうしていると、パクが戻って来て、

「……ヤバイなー。おいタケシ、お前いくら持つとる？」

「俺、今月バイト出るまで500円しかないで」

「お前、500円しかないクセに一番張り切つとるやんけ！500円でナニができるつちゅーんや！」

ま、そう言う俺も2000円しかないんやけどな…。

3枚で1万円言いやがったから、アホボケカス言うたら8000円まで下がりよったんやけど、…くそー、あのダフ屋！」

そこまで言ったパク、直樹の方をチラツと見た。

同じく、タケシも直樹の方に向き直る。

「……あんなあ、直樹さん。こういう時の直樹さんいうんちゃうやけどな。直樹さん、今ナンボ持ってます？」

頭の中で、机の引き出しに入っているお金を数えてみる直樹。

「……確か、1万円はあるハズやで」

「あんな、直樹さん。もちろん俺は2000円出す。コイツはバイト代が入ったら、ちゃんと直樹さんにお金を返す。」

だから、明日ちよつと多めに出しといてくれませんか…？」

「ああ、いいよ、全然。全然構わない。8000円いるんだろ？だつたらタケシの分は俺が出すよ」

「よっしゃー！ありがとう！！」

大喜びする2人は見ていて楽しかった。

何で他人がやつてる野球に、ここまで執着できるのか。

不思議に思ったが、ここまで熱中できる野球というものに、少し興味を持った直樹だ。

「じゃあ俺、もう一回ダフ屋に電話するから。3枚キープするから。」

明日、現地で受け取るってことにするからな」

3人は明日の待ち合わせ場所と時間を、その場で決めた。

明日は紀子さんと遊ぶハズだったのになあ…。

そんなことを考えながら、その日の夜、直樹は紀子の家に電話をした。

毎日大体決まった時間に電話するので、必ず彼女が出てくれる。

『あ、もしもし〜？私』

というあの声は、かなりホッとする。

毎晩聞いていても飽きない。

「あんねえ、紀子さん」

直樹は明日のことを切り出そうとした。

が、そこへ割り込む紀子。

『あ、ちよつと待った！テーマ決めてしもつたら長なるから、忘れんうちに先に言っわ。』

あのね、ウチのお客さんにね、動物園のチケットもらったんよ』

……動物園？

行ったことない。

『それがな、2枚あんねんちゃんか。直樹くんよう、コレ明日行つてしまわへん？』

ただ朝イチで行かんと…多分電車で2〜3時間かかると思うねん。

他県やからねえ、コレ』

「他県？泊まりで行くっていつんか？月曜日、学校やぞ？」

『……ちよつとアンタ、何イヤラシイこと言つてんねん。』

日帰りです！朝1番の電車で行つて、昼から夕方まで十分遊べると思っんやわ。

それで、夜コツチに帰ってくる、と』

直樹は考える。

…イヤラシイ？

おこがましいってこと？

浅ましいってこと???

何かは分からないけど、イヤラシイことを言ってしまったみたいだ。

そうやって少し悩んで、気づく。  
その、明日の件で電話したことを。

「え、紀子さん、ソレ、明日やないとダメなの？」

『せやけど丸一日かけて遊びに行くってなったら、もうこの日曜しかないんちゃう？』

来週火曜日から、あの申し込んだセミナー始まるんやで？勉強漬けになるやんか。

明日がラストチャンスや思うんやけど』

直樹はまた考える。

何かに迷ったとき、それを天秤にかけて判断する。しかもその対象が人である。

なんてことは、これまでしたことがない。というより、俺にそんな技術はない。

そう思っていた。

しかし、今回はタケシ・パク、そして紀子。

双方の重量に重きを置き、今考えている。

……野球なんていつでもやってるよな。

そう思う直樹は野球のオフシーズン、最終戦の意味を分かっている。

だったら、動物園の方が大事なんちゃう？

何やったら、野球は平日だってやってるし。間違いなく。……テレビで見た。

やっぱり、野球よりパンダだと思うで？

俺は。

「……ねえ、紀子さん。その動物園ね、パンダはおるん？」

『え？パンダ？確かおるんちゃうかなあ？  
イヤ、おったよ。実はね、私、何年か前に一回行ってんねん。でっ  
かあて有名な所よ？』

ワールド　　って、知らん？

直樹くん、シャチ知ってる？シャチで有名なんやで』

「シャ…シャチだつて！？海のギャングがいるのかい！？アザラシ  
なんかを丸呑みにする、あの海のギャングが！？」

『そらそうよ』

この段階で、天秤にかけられていたタケシとパクは重量で負け、ど  
こか見えないところにフツ飛んで行ってしまった。

「紀子さん、ちょっとだけ待つといて。5分後に電話するから！  
そう言つて、いったん電話を切る。  
テンションが上がってしまった。

……パンダ

シャチ

パンダ

シャチ

パンダがシャチに……

……イヤ、それは違う。

それはかわいいそうだ。

違う違う。

こりゃあ、動物園しかないよな。

パクウに電話せんと。

野球はいつだつてやってんだから。

すぐさまパクの家で電話をする直樹。

『は…いい、もしもし？大林です』

電話に出たのは、いつものようにパクのお母さん。

「あ、こんばんは、秋月ですけど」

『あー、秋月くんかいな。こんばんは。』

アレ、健と一緒にじゃないん？健に用事やったらまだ帰って来てへんで』

「あ、そうですか。じゃあちよつと伝言お願いしたいんですけど、いいですか？

健くんは、明日用事ができて行けなくなっただって言うといってもらえますか？」

『あー、分かった分かった。言っとくわ。』

しかし秋月くん、喋り方が丁寧で立派やわあ』

直樹は、パクのお母さんがここから話が長いことを知っていた。

半ば強引に電話を切ることにする。

「じゃあすいませんけど、よろしくお願いします」

そうして電話を切り、再び紀子へ電話して、動物園行きのOKを出した。

待ち合わせは、駅に朝6時。

パンダやシャチもそうだが、そんな朝早くから待ち合わせをし、電車に乗って他県に出掛けるなんて初めての経験。

ワクワクしすぎて、遠足病とも言えるような体温の上がり方を覚える直樹。

この日は紀子との電話も早々に切り上げ、早く寝ることにした。

……でっかい動物園。

トラ

ライオン

アライグマ……

図鑑持ってるから、知っとなねん。



パンダ

シヤチ

鳥

パンダ vs シヤチ……

眠りに入りながら、いろんなことを妄想している。

翌朝、直樹は5時前に家を出た。

あまり眠れなかった。

だけど、寝坊もしなかった。

駅に着いたのは5時15分。

まだ早い。

だが、直樹はすでに紀子と何度か待ち合わせをした経験があるので知っている。

待っている時間も、なかなかオツなもんだ。

15分ほど遅れて、紀子も到着した。

昨夜の電話のあと、直樹と同じようにすぐに寝て、4時前に起きてお弁当を作ってくれたとのこと。

誰かにそんなことをしてもらった経験、記憶などは持ち合わせていない。

遠足のとき、運動会のとき、重箱に詰められた立派なお弁当。

でもそれは、母が早起きをして作ったものではなかった。

業者に注文して作らせたお弁当。

あれが美味しいのもちろんだが、

……だが、一味違うのだ。

朝、抜け出すように家を出てきた直樹。

早く起きたけれど、お弁当に時間を取られてしまった紀子。

2人は朝食を摂っていない。

時刻表を見ると、目的地まで約3時間ある。

2人は電車に乗り込むと、そのお弁当を目的地に着くまでの間に食べってしまった。

「お昼ごはんにしようと思って作ったのにねえ」

そう言いながら笑う、15歳2人。

紀子さんの作ってくれたお弁当は、さつき思った逆の意味で、二味は違ったな…。

とても美味しかった。

電車を降りるとバスを乗り継ぎ、動物園に向かう。

今日は日曜日のため、人は多め。

2人は人混みにお構いなしに、手を繋いで駆け足で園内に入っていく。

「ねえ紀子さん、まずはシャチやろ。そんで次はパンダ。俺はそう思うで」

「イヤ、ちよつと待って。シャチのショーってのは時間が決まったあるんや。時刻見てうまいこと回らんと全部見られへんぞ？」

「ちゅーか、私はまずトラとライオンやと思うで。」

シャチは時間を見てから。パンダは気が落ち着いたところで見んとアంత、分かってないな」

言っている意味は分からないが、言葉に説得力のある紀子。

直樹は「ハイ」とだけ返事をして、紀子に従うことにした。

ここに来て、動物園なんてものは生まれて初めてだということを出す直樹。

動物がいれば、紀子さんもいる……。  
ここは一つ、紀子さんに任せよう。

まずトラ・ライオンを見るべく、サファリカーなるものに乗る。

その車は結構車高のあるバスのような形で、車内にはもちろん、車の上にも乗ることができる。

「せっかく来たんやからねえ、肌で感じんと。あの剥き出しの2階へ座るで、私は。」

さあ直樹くん、アンタはどうするんや?」

「俺も2階!当然です!」

バスが走り出した。

天気が良いので寒くはない。

下を見下ろすとシマウマ、サイ、そういった図鑑でしか見たことのない動物たちがたくさんいる。

直樹は両手を使い、双眼鏡のようなポーズをとって覗き込んだ。

「紀子さん!こうやって覗いてみ?余分な風景を除いたら、まるでアフリカや!」

「こうやって覗くべきや!」

「うーん、なるほど。視界の利点と盲点をつくわけやね?」

2人並んで同じポーズで周りを見渡している。

トラ・ライオンのコーナーに入った頃、紀子のテンションが急に上がった。

真下にいるライオンを見ながら、紀子が言う。

「直樹くん、知ってるか?ライオンってのはね、オスは何もせえへんのよ。エサ取るのとか、全部メスがすんねんで」

「へー、そうなんや。あ、俺ライオンがエサ食べてるトコ、見てみ

たいなあ。お食事タイムはないんかなあ？」

「直樹くん、ちよつと手エ伸ばしてみ？触れそうやん」

「あ、ほんまやね」

ライオンに向かつて手を伸ばそうとする直樹。

「食事タイムが見たいんやろ？ちよつどエエやん」

「へあああッー!!」

直樹は急いで手を引つ込める。

大爆笑の紀子。

……こ、この人、コエエエ……!!

テンション上がりっぱなしの2人だ。

次に行ったのは大きなプールのある観覧席。

この動物園では、シャチのことをオルカと呼んでいた。  
とにかく見事な大きさ。

見事なショー。

見事な水しぶき。

「なあ紀子さん、シャチって触つたらどんな感じなんだろうね。

アイツらサメやないから、ザラザラやないハズやねん。長靴みたいな感じなんかなあ？」

今日家帰つたら、長靴触ってみよ」

「それより私は、上に乗ってるあのお姉さんが気になってしょうがないよ。

…ねえ、直樹くん。あの人、何代目お姉さんやと思う？」

「……………」

……紀子さんは、少し怖い人なんじゃないだろうか……？

「冗談やんか！冗談!!!アハハハハッ!!!」

笑いながら、直樹の背中をバンバン叩く紀子。

「アハハハハ……」

一緒に笑ってはいるが、このまま突き落とされるんじゃないかと、ふと思う……。

楽しい時間はあっという間に過ぎて行く。

目的だったシャチ、その他の変わった動物たち。

全て見て回った。

ついでに、設置されていたジェットコースターというものにも乗ってみた。

でも、アレはねえな……。

思わず紀子さんのお弁当を、また紀子さんのお弁当箱に戻しちゃうところでしたよ……。

それともう一つ。  
パンダ。

今まで写真と絵でしか見たことのなかった、パンダ。

可愛いのが取り柄だと思っていた彼・彼女たちは、近づいてみるととんでもない腕力で竹を割り、もっと近くで見るととても鋭い目つきをしていたのです。

何だったら、ガラス越しではあったけれど、近づきすぎた俺の顔目掛けて、飛び掛かってきました。

……パンダ。

きれいな白と黒のツートンカラーだと思っていた彼・彼女たちは、何故か立ち上がるとお尻だけがグレーで汚かった。

パンダだけは、すっかり俺の期待を裏切ってくれた。

「パンダ、めっちゃ可愛かったねえ！連れて帰りたかったわあ！！」  
そう言った紀子さんと少し口論になりましたが、ほぼ全てにおいて満点だった。

楽しくて仕方がなく、帰りたくありませんでしたが、紀子さんの「  
両親を心配させるわけにはいきません。  
明日も学校だし。」

夜9時前と、少し遅くなったが、2人は無事に地元に戻り、家へと帰った。

家に到着した直樹、両親が留守にしていたのを良いことに、慶也をつかまえ熱弁する。

「あのなあ慶也！シャチがな、こうやって、ザバーン！って飛んでな、上空にぶら下げてるこういう玉にさ、頭突き食らわすんだよ！  
そんでまた、ザバーン！って水に落ちてな。」

パンダはな、……「ありゃあ色に誤魔化されてる！所詮クマだよ。見た目に騙されんなっちゅーことやな」

片手を長靴に突っ込み、それを触りながら熱く語っている。  
とにかく、今日あった楽しかったことを話したかったのだ。

慶也はそんな直樹の話を、目を見張って「うん、うん」と、こちらも熱心に聞いている。

この日、直樹は一度もタケシとパクのことを思い出さなかった。

## 理由 2

次の日。

休憩時間になるたびに、直樹と紀子は昨日のことを話している。

余韻冷めやらぬ、そんな感じで動物についての知識を2人で話している。

この日は月曜日。

紀子と一緒に下校し、図書館に寄って勉強、そこで紀子と別れ、ボクシングジムに行ってから家へと帰る。

夜の勉強をする前に、少し紀子と電話で話をした。

また昨日の話だ。

いつもと変わらぬ月曜日。

直樹は覚えていた、というよりは思い出していた。

タケシとパクのことを。

スッポかしてしもうたからなあ…。

明日は2人で会って、一応謝らなアカンよな。

大ごとでもなく、流すようにそう考えた。

火曜日。

授業を終えた直樹は、いつものペースでいつもの待ち合わせ場所に向かった。

しかし、そこに2人の姿はない。

アレ？遅刻かよ…。

マズイなあ。今日からセミナー行かなきゃいけないのに。全く、あの2人は…。

あくまで自分側の思考の直樹。

もう一つの待ち合わせ場所に行ってみることにする。

しかし、ここにも2人はいない。

公衆電話でパクの家電話してみたが、まだ帰っていないとのこと。

…だんだん心配になってきた。

また警察の厄介にでもなつてんじゃないのか？

アカンぞ、警察沙汰は。

そう思い、直樹は2人の学校に行ってみることにした。

バスに乗りながら、ドキドキしている。

待ち合わせ場所にいないなんて、絶対警察に捕まってるんだ。

しかし、バスに乗って流れる景色の中に見つけた、見慣れた2人の背中。

バスは2人を追い越していく。

追い抜き際に2人の顔を見ると、やはりタケシとパク。

慌てて停車ボタンを押し、次のバス停で降りて2人の方へ逆戻りした。

「おい！タケシ！パクウ！」

俯き加減に歩いていた2人は顔を上げ、そして立ち止まった。

直樹を見つけたパクは、いつものように、

「おい、直樹」

2人に駆け寄ると、直樹はまず謝る。

「おとといは、ほんまにごめんな」



「…お前な、ごめんなーじゃないぞ、お前。どんだけ待ったと思うとんねん。事故にでも遭ったんか思ったやんけ」

いつもと変わらない様子のパクに対し、タケシが小さく呟く。  
「ピンピンしとるやんけ。…ケツ!」

タケシの様子が少し気になったが、直樹もいつものように話しかけた。

「そつちこそ、今日は待ち合わせ場所におらへんし、また警察にでも捕まったか思ったやん」

「…」

……沈黙が流れる。

「…せやけどな、直樹。お前、おとこのアレはないんちゃうか？  
何しとつて来なんだんや」

そう聞かれて少しギクツとしたが、直樹は正直に答えた。  
紀子と動物園に行ったことを。

「それならそれでよう、電話くらいして来いよ。コツチはずっと待  
ってるやないか」

「え、でも俺、お前ン家のお母さんに電話したで？伝言お願いしま  
す言つたんやけどな」

「ハア？ウチのババア信用すんなや」

そしてまた、いつもにはない少し重い空気が流れる。

「ま、次の日曜日、今度こそ野球に行こうで。チケツト代は俺が  
人分出すから。な？」

直樹の言葉に、タケシがズイツと前に出てきた。

「お前なあ、人の話聞いとんか、ちゃんと！ポケヅラかましとんの  
もエエ加減にせえよ!？こないだのが最終戦や言つたやろ。もうや  
つてへんわ!」

直樹はここで、初めて最終戦の意味を理解する。

「ああ、そうかあ……そういうことだったのか。タケシ、ごめんな

あんなに楽しみにしてたのにな」

そこでパクが間に入った。

「まあ、な、タケシ。直樹、謝つとるやないか。これ以上どないせえつちゅーんじゃ？これでおあいこや。貸し借りなし。」

なあ直樹。謝る以外、何もできへんわな」

するとタケシはそう言うパクを強く突き飛ばし、直樹に向かった声を荒げた。

「俺は別になあ！阪神戦行けなんだのどうこう言う тоннちやうねん！」

コイツ、裏切ったくせにしゃあしゃあいつもの顔して現われやがったから、ソレにム力ついとんじゃッ！！」

黙って、自分の失敗を反省しつつ聞いていた直樹だが、少しムツとしました。

「だけどな、タケシ。さつきも言ったけど、俺は野球は年間通してずっとやってるって思ってたんや。だから今週も行けるって思ってたんや。」

お詫びに2人の分のチケットも俺が出そう、そう思ってたんや」

「だから、そんなこと言うてんちやう言うてるやろ！！」

タケシは怒鳴り、直樹の胸倉をグツと掴む。

その親指が鎖骨の間にグリツと入り、痛い。

少しイラツとしてしまった。

「……何だ？タケシ。俺がお前ら放っぽって、彼女と遊びに行ったのが面白くねえのか？」

それを聞いたタケシ、今度は直樹の掴んだ襟をグイツと引き寄せた。

「だから、そんなん言うてんちやう言うてるやろ！？お前、俺にケンカ売ってんのか！？」

タケシは直樹の顔に唾を飛ばしながら、大声で叫び散らす。

直樹も冷静さを欠いていた。

売り言葉に、買い言葉。

本当に、心にもない部分だった。  
ただ売られたから、買ってしまったのだ。

「別にケンカなんか売ってねえよ。何を張り切ってるのか知らんけど、そんな暇あつたら勉強しとつた方が工エンちゃんか、タケシ。まあ、今のままでも入れる高校はあるやろうけど、今のままやつたら高が知れてると思うで。もっと頑張つた方が工エンちゃんか」  
「前に言つたよな？俺は高校へは行かん言つとんねん！いらんお世話じゃッ！！」

ますます激しくなるタケシの大声。

「だからそれが頭が足りないって言ってるんだよ！高校も出ねえでお前、何すんだ！？今日び、どこ行つても学歴社会やぞ！？」

俺は別にお前をナメてねえ。けどな、お前が世の中ナメてんのは事実じゃねえのか！？」

高校行かずに働くつて、お前あのまま、あの家にこれからもずっと  
…ッ！」

ここで、直樹は我に返る。

…買いすぎて、いらぬことまで言ってしまった。

タケシの形相が更に変わり、胸倉を掴んだ状態で拳が飛んでくる。

ヒュッ！

「ッ！！」

避ける直樹。

しかし急なことだったので鼻を掠めてしまった。

生温かいものが口にまで下がってくる。

……どこかで、俺たちは友達だから、コイツは俺を殴らない。  
そう安心し、高を括っていた。

もう一発飛んでくる拳。

今度はスツと上体を反らし、完全にかわす。そのまま直樹はタケシをドンツと突き飛ばし、胸倉から手を剥がした。

そして、パンチを繰り出す。

フツ！！

パチンツ！！

小気味良い、バネが弾む音がした。

直樹のパンチは見事にタケシの左頬にヒットし、彼は後ろへ引つ繰り返る。

何万回も練習した、このストレート。

直樹はそれを、タケシで試してしまったのだ。思わず手が出た、なんて言い訳はできない。

俺は今、タケシを黙らそうとして、落ち着いて、横っ面を目掛けて、殴りつけた。

たかが練習生ではあるが、ボクシングジムに通っている者のパンチは違う。

「……ッ」

面食らったタケシ、尻餅をついた状態から起き上がろうとするが、膝が笑い、うまく立ち上がることができない。脳が揺れてしまっている。

「フレエツ！！ゴラアツ！！」

無理やり立ち上がり、襲いかかるうとするタケシ。

「……ッ！」

ビクツとしてしまった。

自分には向けられることはないと思っていたあの形相が今、自分に向けられている。

黙らせるどころか、火を点けてしまった。

しかし、その思いとは裏腹に身構える直樹。

その時、それまで黙っていたパクが間にスツと入ってきた。

「よっしゃー！一発ずつ！これであおいこや！なあ直樹！なあタケシ！」

パクはすごい形相のタケシを、正面から抱くようにして動きを止めようとする。

「落ち着け、タケシ。ツレ同士でマジゲンカは厳禁や」

言いながら、パクは振り向き、こちらを見ながら言った。

「なあ直樹？」

パクの目もつり上がっている。

それを見て、冷静になれた。

「……あ、ああ。そうだよな」

まだ直樹に突つかかろうとするタケシの背中をバンバンと叩きながら、パクが続ける。

「これ以上になったらホンマにアウトになるんじゃ。まだまだ熱いんやったら、俺がお前を冷ますぞ。」

ちよつと落ち着け、タケシ「

「……ッ」

それを聞いて、タケシも振り上げていた拳を下ろす。

「よっしゃ。涼しゅうなった。1回ずつごめん言つて、終わりにしようか。それが一番エエやろ」

「何で俺が謝らなアカンのじゃッ!？」

そう答えるタケシ。

こちら、とこちらを見たパクの目を見て、思わず俯いてしまふ直樹。  
「…そっか。ほんなら、こりゃ宿題うちゅーことで、今日はバラけようや。なあ？」  
ほしたらな、直樹」  
そう言つてパクはタケシを連れ、元来た道に戻つて行く。

その背中に向けて、

「おーい！パクウー！タケシ！！俺、今日からセミナーがあるんや！だからな、」

そこまで言つたところで、パクはこちらに背を向けたまま、手を挙げた。

「……………」

ストップという意味なのか。

OKという意味なのか。

分からない。

鼻血が垂れてくる。

いつも持ち歩いているのに、今日に限つてティッシュを持っていない。

直樹はカバンを開けてノートをちぎり、鼻に押し当てる。

鼻血つてどうやったら止まるんだ？

……………タケシなら知ってるよな。

そう、自分の心配を試してみる。

武器は、持つ人のことを選べない。

作る人のことを選べない。

板前さんや理容師さんは、普段から刃物を持ち歩いている。俺たちは、あの人たちのことを信用するしかない。

言い出したらキリがない。

普段俺が持ち歩いている鉛筆でだって、人は殺せるんだから。

直樹も、帰る道は2人が歩いて行った方向と同じ。

こんな気まずい思いはしたことがない。

今からでも駆け寄ってちゃんと謝ろう、ではなく、少し時間をズラして帰ろう。

直樹はそう思い、見えない背中を目で追いかける。

直樹はしばらくして、セミナーへと向かって歩き出した。

……俺はきつと、また今から紀子さんに泣きつくんだろう。  
甘え体質。

こんなものを俺が持ち合わせとったなんて、ビックリやで、ほんま。ノートの切れ端を鼻に押し当てたまま、そう考える。

セミナー会場に着くと、紀子は入口で直樹を待っていてくれた。

「ハアツ!? ちょっと! ひよっとしてまたケンカしたん!？」

あーあーあーあー! ノートなんかあてがうから、張り付いてしもうとるやん!

直樹くん、こんなにケガする子やったん? 意外やわあ」

知らない間に鼻血は止まっていた。

洗い場まで一緒に来てくれる紀子。

途中、鼻血の止め方を教わった。

血が垂れてくるから上を向いていたんだけど、それは本当はいけならしい。

目頭のちよつと下を、摘むようにして押さえる。

一つ、勉強になった。

「今回は何なん？ちよつと教えてくれる？」

こんなにケガされたんじゃ、心配でしょあないやんか」

その問いに対する答え、

……見つからない。

何故こうなったかを話すとすると、経緯まで話さなければならぬ。それだけは、言えない。

嘘を吐こうかと思っただけで、思いつかない。

「……転んでももうてな。手エつくの、忘れたんよ  
アホみたいな嘘。

これが精一杯だった。

「あ、そう」

言いながら、紀子は直樹の顔をきれいにしてくれる。

嘘吐いてるの丸出しなのに、それ以上言ってこない。

本当に、尊敬するよ。

紀子さん。

……申し訳ないんだけど、俺はまた帰り道に、君に泣きつくことになるよ。



2人は少し遅れて授業に参加した。直樹・紀子を含む、今日がセミナー初日の生徒たちは、まず5教科の小テストを受けさせられる。直樹は始終ボーっとしている。別に、鼻が痛かったわけではない。ボーッとされていて、テストの空欄が目立つ。直樹の席の列の一番後ろは紀子。テストが終わるたびにそれを集める役目の紀子は、直樹の答案が白だらけなのに気づいたようだった。

このテストの結果で、明後日からのクラスが振り分けられる。そう聞いていた2人は頑張ろうと、そう示し合わせていたのだ。なのに、空欄だらけの直樹の答案。

この日は3教科のテストのみで授業が終わり、2人は一緒に帰路に就いた。

「なあ直樹くん、何か食べてから帰ろうか。お腹空いてへん？」

「…え、ああ、うん。そうやね」

何とも覇気のない、直樹の返事。

「何か、今回は私からちゃんと聞かんと、吐いてくれそうにないねえ。」

だつて直樹くん、テスト中、頭から煙が出て、その煙がドクロの形になつとつたで？」

「ええッ!?マジで!？」

「ハハッ!つて笑うてくれんと。冗談やんか。」

でもね、そんな青白くい、消え行くような顔されとつたら、こつちまで辛あなるわ」

「……………」

………そっかあ。

迷惑掛けてしもつてんねんな。

「ま、ジュースでも買って、そこで話しようや」  
公園を指差して言う紀子。

「……俺は、ここに来る前から、俺はそうするだろうって思ったよ、紀子さん。」

でも今回は、泣きつき方が分からへんねん」

「うん、じゃあアソコに座って話してから帰ろうか」

「……ジュース、何がいい？俺が奢るからさ」

「フアントアレンジ」

直樹は自販機に駆け足で向かい、自分も紀子と同じものを買って彼女の元へと戻る。

そして嘘を吐かないようにして、紀子に経緯を話した。

「……実は、友達との約束を破っちゃって、2人をスツポかしちゃったんだ……」

「友達って、あの 中の人ら？」

「そう。2人おるんやけどね。1人が完全に怒ってしもつて……」

「ん ……何かハツキリせえへんのやね」

「俺が悪いのは分かってんだけど、そこまで悪かったか？つちゅーか……」

何かスツキリせえへんねん」

「ごめんじゃ済まへんの？」

「うーん……だから、そのごめんがなかなか言いにくいというか……」

「ふうん。……それで、あんな青い顔しておったんやね」

ここまで言って、直樹はまた悩みだし、黙ってしまふ。

「あのね、直樹くん。人の心の色ってどんなんか知ってる？」

「え？心の色？ピンク色？」

「それはアンタ、ハートマークのイメージのこと言うてんやろ。」

そうじゃなくて、んーっとねえ……よし、じゃあ今回は私のテーマ『人と生きるについて』話そうか。

どうする？直樹くん」

「うん、聞く」

「私だつてきつと、3年後5年後には考え方変わつてると思つんやけどね。」

じゃあ聞かせよう。

うーん……納得いかん部分があつても文句はなし。認めません。これは命令です！」

「ハイ」

「直樹くんね、人と揉めたことがないから、悩み方がよく分かつてへんと思つんやわ。手助けになればエエとしようか。」

さっきの話聞いただけやつたら、そらあ直樹くんが悪いよ。ほんで、理由を私に言えんってことは、何か私にも責任があるような気がしとるんやわ」

紀子さんは別に悪くない。

悪いのは、俺や。

「さっきの話やけどね、人の心の話。」

例えば悪い部分を黒と表して、良い部分を白と表そう。

こうした時、いい？人の心つてのは、ほとんどが黒なんや。

そして人は、少しの白い部分で生きて行つとるん」

……それを聞くと、おとといのこと。

あれはやっぱ俺が悪かったな。

タケシの言い分が理解できてきた。

「私はね、これまで直樹くんと一緒におった時、時間全部楽しかったからねえ。」

例えば私にも何か責任があるんやとしても、全く責任を感じません。つてのが、ホンマのところなんや。

ハイ、コレは白と黒、どっち？

正解は、黒！

大抵の人っていうのはね、『俺は・私は正しい』って思いながら、日々過ごしてるんよ。自覚がなくなっても、そうなんよ。

だって、そうやなかったら、人は人の間で何ができるん？そうじゃなかったら、人前とかに出れるん？

人前に出た時、自己主張するのもしないのも、その人の正義。発言をするんもしないんも、その人の正義。人の輪に入るんも入らんのも、そう。

結局、行動した段階で人はどうしたんか、どうされたんかが全てなんやわ。

人は迷って迷って、間違えるんや」

……パクのことを思い出した。

パクもよく難しい話をする。

「直樹くん、全てが多数決で決まるワケやないんか。

これまでね、失敗とか間違いを人のせいにしたこと、あるやろ？」

「それくらい俺にだってあるよ！馬鹿にすんなよ！」

考えながら聞いている直樹。

返事が少しおかしい気がするが、理解はしている。

「ハイ、黒！」

それは本当に相手が悪かった？

…でもね、その黒い部分で共鳴できるんが、人間なんやで？

例えば今、私がエラツそうにアンタにタシてるこの講釈。これが正しいとも限らへん。

たとえば直樹くんが間違えたとき、ソレはキミが間違ってるよって正してくれた人。でも、その正し方が正しいとも限らへん。

でもね、その時自分の心が動くかどうかは、全部自分で決めてることなんやで？

ほんでこの時、考えはどうあれ、自分を信じれないヤツはカスです。結局、人は自分で決めなアカンのやわ。

大体相談する段階になったときは、その相談相手に自分の都合のいい返事を求めてるモンやろ？

ハイ、この考え！

これは私の、黒！

…直樹くんね、今回その2人と揉めたこと、ソレをいろいろ加味して許してもらおうって思うか、許してあげようって思うか。

ソレは直樹くんが決めるんやわ。

人は迷って迷って、間違うんやから。

正解なんか、分からへんよ」

紀子の言葉がここで止まった。

後は自分で考えなければならぬ。

今、紀子が言ったこと。

初めてのことはばかりで、少し難しい。

頭の中で、練って行く。

「……紀子さん、俺な、お金にモノ言わせたワケやないんだけど、俺がお金を出すから勘弁してくれよ、みたいな言い分だった……」  
「あ、そう。だったら考えてみ？」

直樹の、頭を抱える仕草。

これは癖。

「だから言うてるやん。人は間違っんやっつて。こうなったらその2人信じて、イチかバチかに賭けるしかないんぢやう?」

紀子さんも一緒に来て。

そう言いそうになった。

でも、言うわけにはいかない。

俺は間違っていたと思う、正義。

「……紀子さん、俺もう一回、ちゃんと謝るわ」

それを聞くと、紀子はその場に立ち上がった。

そして両手と両足を広げ、

「よし!抱いてやるから飛び込んでおいで!!」

……はあ?

何だソレ。

どういう行動なんか分からないし、抱きつき方も分からないけど。

直樹は紀子を抱えるようにして、抱きついてみる。

……女子っていうのは、やわらかい。

そう思った。

紀子の肩まである髪の毛が、頬に触れてくすぐったい。

「もしな、イチかバチかでキミが罰受けなアカンようになったら、取り合えず私がおるし。」

そんな時はまた、話してくれたらいいよ」

……その瞬間、両腕が太くなったような気がした。  
足腰も、元に戻った。  
直樹はそのまま紀子を抱え上げる。

「紀子さん！あの2人な、めっちゃエエ奴やねん！今度絶対に紹介するわ！」

そしてその場でくるくる回り、紀子を振り回す。

「ハハハハッ！！直樹くんアタ、ちょっとデカすぎるんちゃう？抱いてあげるつもりが、抱き上げられてるし！」

これじゃあ介抱してるつもりが、介抱されてるみたいやんか！」

迷うことは、そんなになかったような気がする。

このまま2人に会わないワケがない。

何かで読んだ『友は一生の宝』という文。

俺はまだ死なないから、『一生の』なのかどうかは分かんない。  
ただ損得勘定なんか、いつの間にかしていなかったことを思い出したよ。

タケシ

パクウ

ヤな顔しても無駄やぞ。

俺は2人に会いに行きます。

次の日も直樹は頭を働かせている。

セミナーが本格的に始まるのは明日から。

今日はジムも休み。

タケシとパクに連絡するのは、ある程度頭を使ってタイミングを見

計らわないといけない。

また自分が間違えてこじらせてしまうのは、ナンセンスを通り越し、ほんまもんのダメなヤツになってしまう。

その日は紀子と図書館で話をするだけだったので、久しぶりに家に早く帰ってきた。

そして、これもまた久しぶりに父と顔を合わせる。チラと目が合ったが、お互い気にも留めなかった。

今の自分の髪型を見ても、もう言うことは何一つ持ち合わせてはいないのだろう。

玄関から父の声がある。

「慶也！早くしなさい！」

その声を聞いた慶也が、直樹の部屋に飛び込んできた。彼は直樹のものとはよく似た、余所行きの服を着ている。

俺は一応知っている。

今度はシヨッピングモールを造るんだろう。

それくらい俺だって知っている。

聞かされなくてもな。

着工前のパーティーだろう。

「なあ兄さん。僕、パーティーって退屈でイヤなんや。

何で僕なんだよ。兄さんも一緒に行こう！」

服まで着込んでいるのに、駄々をこねている慶也。

「俺は呼ばれてねえよ。早く行っておいで」

そう言ってニコツと笑ってみせた。

……慶也。

早く気づけ。



取って代わられた俺の立場に。

「……………」  
慶也は縋るように直樹の顔を見、そして渋々と部屋を出て行った。

……あいつには他意がない。

知っているからこそ、辛い部分もあった。

だけど今はそれほどには感じていない。

別にいいや、とは違う、何か。

きっと俺は、ゆっくりと後ろを振り返りながら、棄権しようとして  
いるんだろう。

……そんなことよりもだ。

タケシ・パクに対して次どのように接するか、その方が重要。

紀子さんの言ったイチかバチか。

正直に言くと、俺の中でそういう行動というのは、あり得ないんだ  
よな。

出来うる限り確率を上げ、挑む。

ポジティブ・シミュレーション

ネガティブ・シミュレーション

出来うる限り、ポジティブの方向へ道が拓けるよう、考えてみるべ  
きなんだ。

考えては止め、考えては間違え、それを繰り返すとどんどん時間は  
過ぎて行く。

昨日紀子にもらったアドバイスで揚々としていたが、5時間後には  
イチかバチかなんて、愚の骨頂というところに辿り着き……

また、頭を両手で掻き回しながら抱え込む、いつもの癖。

時計は深夜1時を回った。  
早く寝なきゃ、ではなく、紀子に電話したら怒られちゃうかなあと考える。

昨日をもう一度、振り返ってみよう。

そう思い、考え始めた中で一つ気づいた。

パクウはそれほど怒っていなかった……

パクウが何とかしてくれるぞ。

そう俺が思うのは、非礼の上塗りであり、これまた愚の骨頂。

直樹はその骨頂に立ったまま、この日食事もとらず、お風呂にも入らず寝てしまった。

次の朝起きてまずしたのは、自分を叱咤すること。

何で寝るんだよ！

でも時間は戻らない。

ついさっき思った『何で寝るんだよ！』の頃の俺にも、戻れない。

…今日は学校を休みたい。

昨日の今日で、まだ何一つ行動を起こしていない直樹。

何となく、紀子に会わせる顔がなかった。

登校の用意をしながら、昨夜お風呂に入っていないことを思い出す。  
が、そんなことよりも……

つらつらと考え事をしながら普段通りの時間に家を出て、学校に向かう。

しかし、いつもの時間になっても学校には着いていない。とぼとぼとぼとぼ、チンタラチンタラ歩いている。

やがて2人との待ち合わせ場所に差し掛かったとき、直樹は足を止め、その景色を見回してみた。寝不足ながら、目が覚める思い。

だーからー！

このまま2人と会わないワケ、ないだろう？  
紀子さんが言った、このままの俺の、このまま限りなく黒に近い俺のままでも、きっと2人は分かってくれる。

直樹は頭を巡らせる。

……よし。

このまま、タケシとパクウの学校へ行こう。

### 理由 3

歩先を変えようとした、その時。

直樹は背中をドンツ！と強い力で突き飛ばされた。

「!？」

つんのめるようになりながら振り返ると、そこにはパクの姿。

「…オイツス」

タケシの姿は、ない。

「……パクウ」

「…まー、何ちゅーか。こないだは悪かったな。ちよつとな、電話もしにくうてよう。」

お前、怒ってんちゃうかなーと思ってよ。顔見たら、ちつたあ話すことあるんかなー思うてな」

「……あのな、パクウ。何をどうやって考えたって、悪イのは俺なんだよ」

「まーまーまーまー。思い詰めたら戻りにくくなる。」

ただなあ、タケシがなあ……。アイツ、ほら、大分アホやから。反省はしとるんやけど、お前の前に顔出しにくうてなあ。

アイツの家、電話もないし……」

「……………」

「しかしアレやなあ。お前、絶対遅刻なんかさせえへんやろうから、俺ココで7時前から待ち伏せしてたんやで。」

直樹、お前今日、金持つとる？」

以前は登校の際、お金を持ち歩くなんてあり得なかった。

しかし人と接するとなると、何かとお金が必要。

そう理解した直樹、それ以降は必ずいくらか持って、外を出歩くよ

うになつていた。

「あんまりはないけどな、いくらかは持つてるよ」

「お前よう、今日学校へ行く?」

…パクウが俺の答えを待っている。

「行かん」

「よっしゃ。今日は2人でブラブラしようや。

俺、腹減ったんやって」

「そうやな」

そうして、2人は学校とは違う方向へと歩き出した。

学校をサボるなんて、背伸びを通り越して何かを飛び越える行為だ。

今の俺にとっては、そう。

だけど、今日はいいんだ。

ゲームセンターに行き、バッティングセンターに行き、ウロウロウ

ロウロ……。

2人で遊び回った。

楽しいのは楽しいが、タケシがないと物足りない。

アイツは破天荒だからな。

無茶してるのを見ると、それだけで面白い。

チラホラと下校する学生たちが見え始めた頃。

「お、もうそがいな時間か。

お前、塾行ってるんやったよな。塾……イヤ、セミナーいうんか。

大変やなあ、進学校行ってるヤツは」

パクの言葉に、直樹は一つ、思い出す。

「……なあパクウ。今回な、俺、パクウに関しては2回約束破つと

んねん。

野球スツポかしたのと、タケシの家庭のことを……」

2人は公園のブランコに、並んで座った。

「まあ、せやな。ああいうのは言わんといたって欲しかったんやけどな。」

まあ、ウチのババアが一番悪いんやけどな。

でもな、今日びのところ、タケシも謝りたい思いよんよ。

ただ何回も言うけど、アレは大分アホやからな。どんなにしてエエんか、分からへんのや。

お前から近づいてったら、また怒ったフリするかもしれへんしな」

「……………」

「……………」

2人とも、黙り込んでしまった。

直樹はその間、考える。

何か贈り物でもすれば……

あ、これじゃあまたお金にモノ言わせてる感じかな。

…プレゼント。

そういえば先日、慶也が友達の誕生日会に呼ばれていた。

プレゼントを買わなければならないと、母におねだりをしていた姿を思い出す。

「…なあ、タケシの誕生日っていつなん？」

「えー、アイツは5月やで」

5月……………」

「パクウは？」

「え？俺は8月。何やねん」

パクウの誕生日聞いても意味がねえな。  
うーん……

そこで直樹は思いつく。

「そつや！俺、この日曜、誕生日会するわ！俺ン家で。  
だからパクウ、タケシ連れて来てくれよ」

「ハア？誕生日会！？お前、この日曜、誕生日なん？」

「イヤ、違う」

「何じゃそりゃ！お前、誕生日っていつやねん」

「知らん！」

「ハア？」

思わず『知らん』と言ってしまった。

直樹は本当に、自分の誕生日を知らない。

ただ拾われた日、これを記念日として、10月8日。  
生年月日を記すときはこの日を記して、やり過ごしてきた。

自分の誕生日会。

我ながらナイスアイデアだと思い、直樹は話を続ける。

「一応、俺の誕生日は10月なんだけど、誕生日会なんかやってねえんだよ。

だから今週やったってエエねん。

パクウは、俺が謝りたいって言ってるって言って、タケシを連れて来てくれよ」

「うーん……でもその場合、普通に誕生日会って言った方がエエんちやうか？」

「そついうもんなのか？俺は提案しながら相談してんだよ、パクウ」

「うーん……でもなあ、俺、お前んトコのオヤジさん、苦手やねん。

タケシも間違いないく、苦手やからなあ」

「それなら平気だって。この金曜から来週水曜まで、お父さんは東

京の本社に行くんだよ。

「ご馳走用意するしさ」

「なるほどな。…よっしや、分かった。じゃあ引き摺ってでも連れてくか。祝い事やしな」

そう言つて立ち上がるパク。

「……実はな、こないだのこと、ホンマのところは俺も相当頭に来てとつてん」

パクはブランコに座つたままの直樹を振り返つて続けた。

「スッポかされたからとちゃうで？ 彼女は大事やからな。」

お前がタケシの家のこと、イジくつたのに対してな」

そうして直樹の顔にスイツと顔を近づけ、

「今日はホンマはな、お前の顔面に一発ブチ込んだるか思うとつたんや。」

せやけど、そがいにしてできへんわな。お前も悩んどつたんやもんな。

考えたら、最初俺らの都合にお前を巻き込んだんやつたもんな。

せやけど、貸し借りゼロとかよ、そうやって計算して付き合うんは止めよ。

その言い分の元、今回の誕生日会や」

それを聞き、直樹もブランコから降りる。

「ああ、分かった。だったら俺も今日は来てくれてありがとう、とは言わない」

「よっしや、ソレで行」。

そうやな、お前もう帰らなアカンな。そんなら俺も帰るわ。アホのタケシが勘繰るからな。

ほいじゃな」

そう言つて走つて行くパクの背中を、直樹はしばらく見つめていた。

やがて自分も帰ろうと歩き出した時、後ろから駆け足の音。

振り返ると、それはパク。



「悪い悪い直樹！考えたら俺、お前の家知らんやんけ！」

「ああ、そうだったよな」

「何か知らんけど、今日は俺もそれなりに緊張しとったみたいやな。らしゅうない、アカンアカン！アハハハハッ！」

自分の家はこのバス停を降りて、この通りを真っ直ぐ行けばすぐ分かる。

そう説明した。

「分かった。ほいじゃあな」

今度は公園のフェンスをひよいと飛び越え、帰って行くパク。

格好悪かった後に、格好つけてるんだな。

パクウのことも随分分かってきたよ。

あいつは随分とカツコつけど。

そう思い、ニヤニヤしてしまった。

直樹はセミナーが終わるとすぐに家に帰り、早速日曜のことを土井さんに相談してみる。

「まあ！直樹さん、お友達を家に連れて来るなんて初めてでしょう。

これは私、頑張らないとねえ」

「タケシはお肉が好きだからさ、必ずお肉は用意してね」

ああだこうだと思案しながら、やっぱり普通にするのが一番だろうと思う直樹。

土井さんに言われるまで気づかなかったこと。

友達を家に招待するのが初めてだということ。

…いろんなことにかこつけて、家に招待しちまったよ。

後はパクウがうまくやってくれる。

紀子さんも……

イヤ、紀子さんはまた今度だ。

誕生日会っていうのは名ばかりだからな。

直樹は思う。

拾われた記念日が、功を奏しそうです。

『お父さん』

『お母さん』

その日の夜、直樹は紀子に電話で話した。

今日の出来事を。

『相手がオトナで、ほんまに良かったねえ』

そう言われた。

「そつだよ。だから全部うまくいきそうなんや」

一応イベント事なので、あれ以降パクにも電話していない。

金・土の2日間、日曜を待ち遠しく思い、過ごしている。

仲直り云々、それらを飛び越え、家に友達を呼ぶ。

このビッグイベントはもうすでに直樹のものになっている。

ソワソワと楽しみで、寝つきの悪い2日間はとて心地良かった。

とても天気の良い日曜日。

この日は母もオペラ鑑賞のため、留守。

お誂え向き。

打ってつけの日曜日。

朝から料理の準備をしている土井さんの様子を見て、慶也がゴネ始める。

しょうがないので、仲間に入れてやることにした。

パクにはあの日、昼前には家に来てくれよと伝えてあった。

自分で言ったにも関わらず、昼前っていつだ？何時なんだ？と待ち遠しくて、楽しみで、落ち着かない。

そして10時過ぎ。

チャイムが鳴った。

玄関前で待ち構えていた直樹だが、あまり早くに出ると何となく自分だけがマジなようで気恥ずかしく、2秒ほど置いて返事をする。

「はい！」

そしてまた2秒ほど待って、ドアを開けた。

「オッス、来たで」

そう言ったパクの後ろに隠れるようにして、タケシが立っている。

俺が謝るのはもうちょっと後にしよう。

2人の格好を見て、そう思った。

2人とも気を遣ったのか、いつものように前髪を上げていない。

パクに関しては金髪のまま、7:3に分けている。

服装も、ドコのおじさんに借りてきたんだよというような、ワニの小さなマークの入ったニットシャツ、ジーンズにスニーカー。

まずは笑ってやることにした。

「おい、何やねん、2人とも。その格好！」

すると後ろからタケシが答えた。

「せやる！こんなんこつ恥ずかしくてしゃーないんやけど、コイツがよう、ちゃんとせなアカン！言うて」

「当たり前じゃ！郷に入れば郷に従え言うてな。俺らの素行で、後

で直樹が怒られるようなことがあつたらアカンやる！  
エエかタケシ、大人しゅうせえよ」  
家に入る前に説教されているタケシ。  
いつもの姿。

「そう言うパクウだつて金髪のままじゃねえか！」

「ハハハツ！イヤ、金がのうてな。染めに行けんかってん」

「まあ遠慮しないで上がってくれよ」

直樹は2人を招き入れる。

玄関には慶也も待ち構えていた。

直樹の友人というのがどういう人なのか、とても興味があつた様子。

タケシが慶也を見て、

「アレ。お前、弟か？弟がおるつて聞いとつたけど、全然似てへんな。

背もデカないし、兄貴と違つてちよつと野生つぽいニオイがするな

あ。なあパクウ？」

「お前、デカイ声出すな！思ったことすぐ口にすな！」

∴直樹はこの時、何となく思った。

パクウは勘がいい。

俺の家庭の事情について、気づいてるんじゃないかと。

別に言うほどのことじゃないんだけど、2人にはいつかちゃんと話そう。

後ろに立っていた慶也が、2人を見て挨拶をする。

「いらつしゃい。僕、慶也って言います。僕も参加させてもらつ」とにしたから、誕生日会。

ねえ兄さん、食事の用意までまだ随分かかるつて、土井さんが言うてたよ？

何かして遊ぼうや！

玄関で話してるのも何だからさ、2階に上がってもらおうよ

「ああ、そうだな」

こういう時、明るい慶也はいろんなことを弁えている。

ああしよう、こうしようが自然と出てくる。

……羨ましく思う。

靴を脱いだとき、パクが不意に気づいたように、声を上げた。

「あ、そうや！お父ちゃんおらん言つてたけど、お母ちゃんおるんやろ？まず挨拶せな。

タケシ、お前も来い」

「あ、お母さんもいねえんだよ」

「ええ！？そうなん？！ハアアア……こんなん言つたらアレやけど、ホツとした。

お前の両親に会つて、ほんまに緊張しとつてん」

そしてタケシの肩を叩き、

「コイツは一切、そんなこと考えてへんからなあ、ほんま」

そんなことを言われているタケシ。

キヨロキヨロと辺りを見回して、落ち着かない。

階段を上りながら、キヨロキヨロ……。

「……しかし、デツカイ家やなあコレ。メチャメチャ声が響くやん！」

そんな大したことねえよ。

そう言いそうになったが、止めた。

「ねえ兄さん、昨日僕、人生ゲーム買ってもらったんだよ。兄さんの友達が来るって言っからさ。一緒にできると思っ。お母さんに買ってもらったんだ」

「何！？人生ゲーム！？あの噂のヤツか！？慶也、早く言えよ！」  
テンションの在り処が少し変わる直樹。

「なあタケシ、パクウ。人生ゲームやるうぜ！やったことあるだろ、2人は」

するとパクが答えた。

「おー、やったことあるでー。何や、慶也の方は兄貴と違って、そういう遊びもやっとなるんやなあ。」

お前の兄貴はほんまにモノ知らんでな。いつもキリキリ舞させられるぞ。

こないだなんか、街中で遊びよって、腹減ったなーって店入ったらよう、『何となくフォルムと色がキレイ』言つて、お前の兄貴、マヨネーズ買いやがったからな！ソレ、どうするつもりやねんいう話やる！？」

「バツ！バラすんじゃねえよパクウー！」

「ハハツ！ まあエエやないか。人生ゲームやる？俺は強いでー」  
そうしてタケシの肩をポンと叩き、

「コイツは人生ゲームやったら必ず子供が4、5人生まれやがる。  
貧乏子沢山を地で行つとるヤツや」

「ウツサイ！貧乏言うな！」

こんな遣り取り。

今日はまだまだ、ここから始まるっていうのに、もう笑ってばかりいる。

俺のこの日は、功を奏している。

まずは慶也の部屋に入り、慶也の勧めるまま人生ゲームをやってみた。  
た。

直樹も一度やってみたかったものなので、これは何の障害もない。

ただ、直樹の頭に常にあるもの。

タケシにちゃんと謝らないと。

できたら2人の時がいいんだけどな……。

パクは隣で、いつになくはしゃいで盛り上げてくれている。  
…やっぱりパクは大人だ。

「よっしゃー俺、工仕事に就けた！

コレ、職業にプロ野球選手とかあったら工エのになあ。プロレスラ  
ーとかよう。

慶也、お前なかなかゼニ溜まらんやないか。

タケシ、お前何でそんなに子供ができるんや！？車2台分になつて  
まうぞ？」

はしゃぐパクにつられるように、タケシも間違いなくいつものタケ  
シに戻って行く。

タケシは妙に慶也との対話が上手だ。

慶也も『タケシさん、タケシさん』とタケシにえらく懐いているよ  
うに見える。

兄弟は妹で慣れてるんだろうな。

俺はこれまでタケシのように、慶也に接することはできてないもん  
な。

その時、部屋のインターフォンが鳴った。

『食事ができましたよ。少し早いですけど、どうぞ』

土井さんの声。

「よし、じゃ途中だけど下に降りて食事にしよつぜ」  
直樹が言うと、真っ先に部屋を出て行く慶也。

「おいタケシ、直樹。そーっと出るよ？今俺が一番リードしてるん  
やからな。金が飛んでしまわんように頼むで。

タケシ、その金チヨロまかすなよ？ちゃんと数えとるからな。その  
金は使えへんぞ、実際には！」

「分かっとるわ！」

パクがいてくれるお蔭で本当に、いつも通りの間で過ごせる。

1階に降りて、まず声を上げたのはタケシだ。

「うーわ！何やコレ！こんなメシ、見たことないんやけど！！」  
タケシのその声を聞き、パクも呟く。

「こりゃほんまにゴツイな…！」

テーブルの上にはいろんな料理が載っていた。

真ん中には塔になった、大きなチョコレートケーキ。

1人に1匹ずつの伊勢えびのカルパッチョ風。

サラダにさまざまなオードブル、フランスパン。

大皿に盛られたチャーハン、エビチリ。

その他、和・洋・中の色鮮やかな料理の数々。

奥では土井さんがステーキを焼いている。

「2人はソツチに座つてよ」

直樹と慶也が並び、向かい側にタケシとパクが座る。

「さあ、全部食べちゃう勢いで食ってくれよ、2人とも」

タケシは伊勢えびの甲羅をコンコンと叩きながら、

「コレ、殻もイけるんかなー…火イ通つてない感じやなー。

俺、こんなでつかいザリガニ、見たことないんやけど」

「アホッ！ザリガニとちゃうわ！ハサミがないやろが！

コレはお前……なあ、直樹。コレ、伊勢えびやんな？」

それには慶也が答える。

「そつだよ、伊勢えび。今朝届いてん」

「…伊勢えびなんて、言葉でしか聞いたことないなー。コレ、生で  
食えるんや…」

タケシがそつ、ぼそつと呟いた。

ここで直樹はようやく2人に気を遣う。



「まあ、見物はいいから、好きなように食べちゃってくれよ。2人とも、チャーハン食べるだろ？金華ハムが入ってて美味しいんだよ。」

取り分けるから、ガツガツ行ってや」

そう言つて、直樹は4人分を小皿に盛つて渡した。

一心不乱に食べ始めるタケシ。

隣で冷静に、タケシの様子を伺いながら食事を進めるパク。

そこに、土井さんが最後の1品のステーキを運んできた。

「皆さん、いらっしやいませ。直樹さんがいつもお世話になっていきます」

そう言つてお辞儀をする土井さんに、慌てて席を立つパク。

「あー、えっと、…こん、今回はお招きいただき、本当にありがとうございます」

そうして、横で食事を続けるタケシを叩き、

「おい！お前も挨拶しろ！」

しかし料理の凄さに周りが見えていないタケシは、

「こんにちは」とだけ挨拶する。

その様子に、パクが頭を抱え込む。

それらが全て、面白い。

「あらあらあら、そんなに畏まらなくていいんですよ？どんどん食べてくださいね」

そう言つて、一人ひとりにステーキを配る土井さん。

夢中なタケシに、気が気じゃないパク。

全ての料理をスプーンで食べているタケシに向かい、

「おいタケシ！」

小声だけれど、丸聞こえ。

「行儀良うせえ言つたやろお前！スプーンでばかり食べるな！」

「あ、そうか」

そう言つて、タケシは土井さんに声を掛けた。

「おばちゃん、ごめんやけど箸貸して」

「……ッ!」

パクはもう、タケシの首を絞めるしかない。

首根っこを引つ掴みながら、

「お前~~~~ッ!」

その時、慶也が声を上げた。

「あ、そっかあ。今日はお父さんもお母さんもいないし、いいねソレ。」

土井さん、僕もお箸」

直樹もここで思う。

そう、誰も見てねえんだ。

楽しくつて忘れてた。

そして立ち上がる。

「よし待ってるよ。俺が取ってくる。パクウも箸使うか?」

「ええ?」

隣のタケシの頭を平手でパシッ!と叩くパク。

「全く! コイツだけは!!」

…ごめんな、直樹。俺、一応マナーの本とか読んで来たんやけどな。つていうか、あの人お母さんじゃねえの?」

「あの人は土井さん。ウチで俺たちの面倒を見てくれてんだよ」

「ああ、お手伝いさんがおる言うてたな。ほんまにおんねんな。」

…そうか。じゃあもつとクダけてエエんやな」

そう言いながら、パクは首に着けていたナプキンをシュルツと外した。

「じゃあスイマセン。俺も箸、貸してください」

「よし、そうしよう」

慶也はタケシの様子を見て、それを真似するように顔を食器に近づけ、ガツガツと食べ始める。

「兄さん、コレすごいわぁ。すごい楽やよ」

「そうだな」

直樹も同じようにして食事を進める。

4人で、ほぼ完食した。

残ったのはケーキがほんの少しだけ。

「ハア……こりゃほんま、メツチャうまかったなあ。こらぁ一生忘れられんぞ」

そう言うタケシを、パクは無理やり土井さんの元へと連れて行き、2人でお礼を言っている。

その隣では、すっかりタケシに懐いている慶也が、タケシの袖をぐいぐい引つ張りながら、

「ねえ、タケシさん。キャッチボールしようよ！野球やったことある？」

「あるに決まってるやんけ！俺は三角ベースの名人やったんや」

「……ってことは、ないんだね？やったこと。僕が教えてあげるよ。外でさ、キャッチボールしよ！」

「よっしや、やるか！」

2人が外へ出て行き、直樹とパクもそれに続く。

キャッチボールを始めたタケシと慶也を見ながら、2人は玄関先に腰を掛けた。

「タケシって、年下扱うの上手だな」

「ええ？そうかな。そんな風に思ったことなかったわ」

タケシは慶也から放られるボールをグローブでキャッチし、そのまま右手に持ちかえることなく、ボールを返す。

それを見てパクが言った。

「おいタケシ！お前、阪神の選手がそうやってボール放ってるか？右手で投げるんやろが、ボールは！」

お前、ホンマのトコ三角ベースすらやったことないやろ！」

「あ、そっか。実はグローブ嵌めたのも初めてや！」  
大笑いしている慶也。

それを見ながら、パクと会話する。

「実はな、さつきからタケシに謝るタイミングを見計らってんねん、俺。

できたら2人のときに謝りたいし……」

「ああ、そっかー。そういえばそんな話もあったなあ」

「ええッ！？何だよソレ！パクウ！重要なことだぞ！？何忘れとんねん！こっちはさつきから必死で考えとるのに！」

「へハッ！マジメやなー、お前は。」

「エエこと教えたるか。アイツはな、500歩歩くたびに記憶が1個なくなっていくんや。」

「エエか、必ず500歩で1個や。」

「ようけ歩かせとったら忘れるんちゃうか」

「嘘つけ！そんな病気になるかよ！」

「へへへッ！そらあアイツも別に忘れてへんやろうけど、ここのまて来たらもうエエんちゃうかって言うとなねん。」

「アイツもいつも通りやんけ。」

「ほいで謝るにしても、お前が言うたみたいに2人つきりになる必要はないんちゃうか。」

「変な雰囲気になってまうやろ。」

「お前が悪かったって思うてるんやったら、今回はタケシに借り作つとつたらエエんちゃうか？」

「少し考える直樹、ハツとする。」

「パクウ、こないだ貸し借りアリ、貸し借りナシなんて考えなくていいって言ったじゃないか！」

それに対して、返すパク。

「だからー、全部マジメに考えんな言つとんねん。場合によりけりや。」

こんなにして遊んでるのに、そんなことばかり考えよつたらオモロないやろ。

あんな、『俺はタケシに借りがある』っていうのは、お前が思うとつたらエエことや。別に口に出さんでエエ。

口に出さなきゃお前がそんなこと考えとるなんて、誰も知らへんよ」「……じゃあ、俺は今回謝らない方がいいのか？」

「せやから、しゃつちよこばるな言つとんねん」

そう言つとパクは立ち上がり、

「よっしゃ！タケシ、今度は俺と交代や！」

そうしてタケシに投球のフォームを教えている。

紀子さんもそうだけど、パクウも難しい。

楽しいから、いいってことか？

……マジメ、か……。

直樹もスクツと立ち上がり、

「俺にもやらせてくれ」

3人に駆け寄つた。

4人は庭で三角ベースのようなモノを始めた。

直樹にとっては初めての野球。

バットにうまくボールが当たらない。

物理的に悩んでみる。

直径約10センチの球が、時速約30キロで飛んでくる。

それをこの細い細い棒で打ち返す。

これだけでも、奥が深い！

顔は笑っているが、そんなことを考えている。  
庭に響く笑い声。

…… 4人は、全く気がつかなかった。

大声で笑い飛ばす直樹。

…… 直樹はそれ以上に、気づいていなかった。

「……………」

パクが突然ボールを投げるのを止め、お辞儀をする。

何だ？

笑顔のまま、振り返る直樹。

…… そこにあつたのは、父の姿。

一瞬で顔が強張った。

流石の慶也も顔が引き攣っている。

直樹の知らないところで、何かを言われているのだろう。

まだ状況を掴めていないタケシの、

「よっしやー！ 続き来ーい！」

その声が背中で響く。

そして続いてパクの声。

「タケシ、こっちへ来い！」

タケシはバットを置き、パクに近づいた。

2人は並んで頭を下げながら、

「こんにちは。今日はお招きいただき、ありがとうございます」

そう言つて直樹の父に挨拶をした。  
……大人の対応。

普段俺は、あれくらいの挨拶は普通に  
する。ただ、それ以上の大人の対応

は、パクウだつて、あの警察署でお父さんに舌打ちをされたことくらい  
覚えてはいるはずなんだ。

2人の方に首をやり、凝視しながら父が口を開いた。

「これは一体、何の騒ぎだ」

説明しようとした直樹の間に、慶也が入る。

「今日は兄さんの誕生日パーティーだつたんだよ、お父さん。

この2人はね、兄さんのお友達で……」

「慶也、黙つていなさい。」

お前に言っているんだ、お前に」

父は2人から目を離すことなく、直樹に強く問う。

「今、慶也が言った通りです。僕が2人を招待しました」

唾を飲み込む父の喉仏が見えた。

この行動の後、父は何かを言う。

「誕生日パーティー……」

誰が用意した」

「土井さんをお願いして用意……」

父はいつも、何か言いたいときは最後まで話を聞いてくれない。  
割つて入る。

「そんなことは聞いていない。その食料は誰が用意したんだ。  
何で用意できたんだと聞いとる」

…父は以前からこうだったのか。  
今、この状況。

俺は攻撃をされているとしか思えない。  
一体この人は俺に何を言わせたいんだ。

「……………」

言葉を失い、直樹も黙り込んでしまった。

それを確認し、2人に歩み寄る父。

「まず右の君。君のお父さんとお母さんは、一体何の仕事をしているんだい？」

パクが答えた。

「あ、はい。母は家で焼肉屋をやっています。父はガラス関係の会社を……」

「君は？」

「ウチは……母ちゃんがスーパーでパート。父ちゃんは蒸発しておらん」

よくは見えなかったし、よくは聞こえなかった。  
しかし父の背中が揺れたように見えた。

「うちはね、そんな君らとは関係のないところで生きとるんだ。  
うちの者の時間を割かんでいただこうか」

重たくて重たくて、どうしようもない空気だった。

……………最悪だ。

ここまであった純粹なものを、全て有機的なもので固められた気分。



後ろから飛び掛ってやるうかと思った。  
でも、俺にはできない。  
勇気がない。

「……………」

「……………」

俯いてしまった2人。

やがてパクが顔を上げ、

「……………あ、そうですね。じゃあ僕ら、そろそろ帰りますんで。  
お邪魔しました」

そしてバットとグローブを拾おうとする。

それを見た父、

「触らなくて結構！」

そこまで出す必要のない大きさの声で、確実に恫喝した。  
パクはビクツとして、伸ばした手を引っ込める。

そして、もう一度父に、

「……………お邪魔しました」

そう言っただ庭を出て行こうと背を向けた。

玄関を開けながら父が言う。

「慶也、早く家に入りなさい。勉強はどうしたんだ。  
お前はまだ、私の望むレベルに達していないんだぞ。  
早く入りなさい！」

……………父は俺を素通りする。

さっきは名前すら呼ばれなかった。  
そう気づくが、そんなものは5%。

生まれて初めて、殺意を持った。

心臓を握り潰すような、この思い。  
誰のためでもない。  
タケシとパクの後姿に、そう思った。

慶也はもう半べそ状態。

しかし彼もまた、泣いて構わないという教育は受けてきていない。  
だから泣きはしないのだ。

黙って自分のグローブとバットを仕舞い始める。

直樹は家に背を向け、2人に駆け寄った。

「なあ！ちよつと！ねえ！ねえって！待ってくれよ！！」

足を止め、振り返る2人。

表情から、怒っている様子には見えなかった。

今一番怒っているのは、俺なのかもしれない。

俺が俺に対する怒り。

許せない。

この許せない俺、2人を呼び止めて掛ける言葉があるのか。

駆け寄りながら口を開こうとする直樹に、パクが笑顔で言った。

「直樹、何か悪かったな。この後お前、怒られるんちゃうか？」

……怒られすらしねえよ、俺なんか。

「やっぱり俺らみたいなんには、限界があるんかもしれないな。

大人から見たら、俺らみたいなんゴミやからな。

限界かもしれないな。

特に、お前んトコのおっちゃんからしたら、それ以下かもしれないな。  
もう、お前に迷惑掛けたらアカンような気がするわ」

「……………」

身に詰まされる思い。  
神経を耳に集中して、言葉を聞く。

ひよっとしたら、謝るタイミングは今なのか。それとも最悪のタイミングなのか。

そう考えていると、タケシと目が合った。

「タケシ、あのな、」

直樹のそれに被せるように、タケシが口を開く。

「秋月よう、俺な、分かっとなねん。こないだのヤツもよ、お前が心配してくれて、俺に言うてくれたんや。分かっとなねん。」

「ただどなあ、お前も一回ウチ来とるから知っとるやん。ウチ、めっちゃ貧乏やねん。」

高校行くとか行かんとかな、それ以前に俺が働いて稼がなヤバイんや。

分かってくれ。

ほんで、ありがとう。

お前のお蔭で妹がな……あ、コレはまあエエか  
「……………」

何か言わなきゃいけないが、言葉が出ない。

あくどい俺

卑怯な俺

弱い俺

2人はそのまま何も言わず歩き出し、行ってしまった。

直樹から掛ける言葉は何一つなく、直樹の正義は自分を悪だと信じ、そしてそれを止めようとはしなかった。

これが、3人の決別の時。

## 払暁 1

この、間の悪さ。

間違いない。

俺の持つて生まれたものなんだろう。

慶也は必死に俺に謝った。

水曜まで父がいないという情報は、慶也から得たもの。

水曜までの出張は、来週のこと。

当然ではあるが、俺が慶也を責めるなんてことはあり得ない。

ただ、一つ気になったこと。

慶也は一体、父のことをどう思っているのだろう。

どう感じているのだろう。

俺が、お前たちの空間から外されたこと。

そろそろ気づいたか？

生まれたことに嫌悪感など感じない。

それどころか、俺はその真逆に念頭を置き、生きるために必死なんだ。

俺を生んでくれたお母さんに、何度お礼を言っても感謝しきれない。

自分の意識の中、2万回までは覚えてたんだけどな。

お2人の血は俺の中で波を打ち、熱を持ち、今も生きています。

まだ見ぬお2人がどんな人たちなのか、俺は知らない。

だから、果たして俺は天才なのか、秀才なのか、凡人なのか、それ以下なのか、それ以下と評するのもおこがましいのか、

自分の中でまだ決めかねていますよ。

そのどれかの才能を持ち合わせているであろうこの俺は、  
努力で10、努力で20、努力で30……

100が完成だと、そこに旗を立て、進もうと思います。

いつか、その日が来たときのために、混濁したマーブル模様の俺であつたとしても、お会いして恥ずかしくない態勢でいるために。

お2人なら理解してくれますよね？

俺と一緒に、そこまで育ててくれた今の両親に、お礼を言ってくれますよね？

次の日から直樹は、何もなかったかのような顔を作り、日々を過ごした。

紀子さんに心配をかけてはいけない。

彼女が言った、イチかバチか。

俺はそのように動かなかつたんだ。

井の中の蛙であろうとなかろうと、彼女の言う通りにしなくって、このザマ。

でも彼女は、俺がイチかバチかに賭けたと思っっている。

その結果の、報告。

「ああ、大丈夫、大丈夫！紀子さんのお蔭やわ。

やっぱりね、分かってくれた。『許したるよ！』って

それを聞いた彼女は、

「ほんまに良かったね！」

と笑ってくれた。

手厳しい。

嘘を吐いた俺が悪いんだけど。

嘘は嫌いだと、今回知りました。

一度嘘を吐いてしまうと、少なくともあと2〜3回は嘘を吐かなければいけない状況になる。

今、大事さで言うと、俺より随分上の位置に存在する紀子さんに対して、この状況というのは……  
でも、本当のところは言えません。

だつてあれ以降……

『だつて』？

やはり、と言うべきか、パクから電話はありません。

『パクから電話がありません』と表する俺に、厚かましいと思う。

卑劣な俺

汚い俺

卑怯な俺

嘘吐きな俺

こうやっている中でも、時間は流れていくんだと実感しました。  
すっかり寒くなり、受験まであと少し。

セミナーの実力テストをあんな形で終えてしまった俺は、紀子さんとは別のクラスになっている。

これは逆に良かったのかもしれない。

とにかく勉強に集中できている。  
集中したあとに考え事をし、放心する。  
あの放心を除けば、ほぼ完璧なんじゃないか？

別れ際に「バイバイ」と言うのと、何も言わないのと、「さようなら」って言うのとじゃ、随分意味が違ってくるんだな。  
幼稚園の頃教わった「みなさんさようなら」

あれって結構重くねえか？

何も言わないのはもつと重い。

「バイバイ」は逆に挨拶なんだ。

「バイバイ」じゃなく「またな」でも良い。

溜息は連発しない。

だけど1日に50回はしてるな。

紀子さんの前でだけはやらないように……

昨夜は彼女と『ハリガネムシの存在意義』について話し合った。

今日もあれの続きを話そうか。

それとも先日議題になった『この世に人間がいるのに、何故サルがいるのか』

こっちを話そうか。

俺は今、四六時中彼女の声を聞いていたんです。

誰のためでもない。

俺のエゴであり、俺のために

セミナーで同じクラスの人たちと、少し話をするようになっていた。  
ほとんどの人間が、自分と同じ学校の生徒であることを知る。



以前から耳に慣れていたあの会話。

「 が1番、 が2番、 が10番……」

この会話は皆、人のことばかりを気にしているものだと気づく。別に構わないのだが、全く楽しくない。

中には学校で同じクラスの人もいる。

これまで、学校で紀子以外と話したことはなかったが、最近ではそこそこ話をする。

つまらないわけでもないのだが、誰かに話をするほど楽しいわけでもない。

……誰かにつて、誰だ？

俺はもう、ごめんなさい、許してくださいとさえ、言いにいけない……。

紀子に嘘を吐いている直樹は、その後も月・水・金・日を紀子と会う日と決めている。

冬休みまであと1週間となった頃、授業の合間の休憩時間に紀子が言った。

「なあ、早うあの友達って会わせてよ」

直樹はイラッとしてしまった。

また嘘を吐かなければならない。

口数を少なめにするために、短く応える。

「ああ、今度な」

そしてその話題に触れないよう、捲くし立てた。

「それよりもな、冬休み2人でどっか行こうや」

「え？どっかってドコよ？」

「どこでもエエよ」

「どこでもエエって言うても、冬休みってアンタ、缶詰にならなア

カンのちゃん？」

この頃にはもう、何となく目指すところが違っているような気がしていた。

一緒の高校に行こうって、決めていたのに。

「大丈夫やって、1日や2日。

そうや、またあの動物園に行こや。今度は泊まりがエエやん。近くにいっぱいホテルがあったやん」

「……ちよつとアンタ、何言つてんの？無理に決まってるやん。

私ら中学生やで。一泊してどっかへ行くなんで、聞いたことないわ。お父さんとお母さんに何て言つたらエエんよ」

「えー？そんなん言つたら俺だつて15歳やし。お父さんとお母さんもおるよ？」

「……………」

少し黙る紀子。

直樹の天然はごく稀に、紀子を黙らせる。

「……男と女は違うんやって。そんなん無理、あり得へん」

直樹は伸びをしながら、頭の後ろで腕を組む。

「ふーん……男と女じゃ違うんかー…」

何か汚エなー。逃げられた」

「別に逃げてへんわ！」

こんな会話。

以前からしていたような気がする。

だけど、何かが違うのだ。

コレってよう……あの2人がおらへんからや、絶対。

もし仮にあの2人がおつて、紀子さんが目の前から消えたとしても

……

ああ、きつとこの虚無感は襲うんやろなあ。

… 決定的に何かが足らへんのや。

……俺が悪いんやけど。

この日、家に帰った直樹は気づいた。

最近、父が家に帰って来ている気配がない。

仕事が忙しいのか、それともまたあの女か……。

そんなことばかりを考えてしまう。

毎日電話の前に立っていたが、パクの家には電話できない。

その内、そのために電話の前に立つこともしなくなっていた。

日課のシャドウボクシング。

3分10ラウンド。

最近、これを上半身裸でやっても恥ずかしくない程度の体になった。

そろそろこのシャドウボクシングを慶也に見せてやるのかな。

なんてことも考えるが、いつも見せずじまい。

意味がないからな。

もう、いろんな種の威厳を振りかざす必要はない。

何となく1階に降りてみると、リビングには母がいた。

いつものように、いつもの椅子に座り、ヘッドフォンで音楽を聴いている。

……シユバイツァーのオルガン。  
『トツカータとフーガ 二短調』  
漏れる音からそれを確認する。

何年も、母とちゃんと話をしていないような気がした。  
そう考えてみると、これまで母とちゃんと話をしたことなんかあつたか、とも思える。

直樹は母に近づき、話しかけてみた。

「お母さん」

目を閉じ、ヘッドフォンで音楽を聴いている母。

五感の2つを遮っている母は、応答しないと思っていた。

が、

母はスツとヘッドフォンを外し、

「何ですか、直樹さん」

と応えを返す。

ここで慌ててしまうのもどうかと思うが、少し泡食った。

「今日もお父さんは、また帰らないんですか？」

すると母は体勢を変えないまま、

「そうねえ、最近遅いわね、ずっと」

……今、分かった。

したことがあつたか、ではなく、俺はお母さんとロクに口なんか利いたことがない。

「……仕事で遅いんですかね？」

そう言ってみた。

「それはそうでしょう。お父さんは忙しいからね」  
「……………」

以前、暢気だと表した母。

この時、ただ単に落ち着き払っているようにも見えた。

父には聞けないこと。

……………今ここで聞いてみようか。

何故、たくさんいる中で、俺だったんですか？

顔を見ながらだと聞きにくいと思い、直樹は母の後ろに立ってみる。  
その背中を見て、驚いた。

……………俺がデカくなりすぎたのか。

お母さんはこんなに小さかったでしょうか。

もちろん、負ぶってもらったことなど一度もない筈。  
知っていたようで知らなかった、母の小ささ。

「……………お母さん、肩なんか凝りませんか？」

何と返事が返ってくるだろう。

そう思いながら聞いてみる。

「あら直樹さん、どうしたの？私の肩凝りなんか心配してくれるの？  
最近凝っちゃって凝っちゃって……………マッサージしてくださいさる？」  
やったことはないけれど、大体は分かる。

「もちろん、いいですよ」

そう言って、直樹は母の肩を揉み始めた。

何故俺を選んだのか。

あの女の存在。

……この母に話すなんてことは、あり得ないと思った。

「どうですか？気持ちいいですか？」

「直樹さん、上手ねえ。前に慶也さんにもやってもらったけれど、直樹さんの方が上手ですよ」

直樹は母に耳打ちをする。

「実は僕、最近鍛えてるんですよ」

「あら、そう。道理で。良い力加減」

このまま少し、母と話をしようと思う。

「お母さんは本を読んだり音楽を聴いたり、同じ体勢で居すぎるんですよ。だから肩が凝るんです」

「あら、そうなの？」

「だってお母さん、他に肩が凝る要素なんかないじゃないですか」

「うふふふ。そうよね、家事は全部、土井さんがやってくれてるんだもんね。」

直樹さんの言う通りよ。ふふふふ……」

「そうですね、お母さん。行儀が悪いと思うんなら、部屋でゴロゴロしながら聴いた方がいいですよ」

おそらく、初めて笑いながら話をした。

俺が覚えていないだけかもしれない。

覚えていないのなら、初めてだ。

お互い元気でいきましょうね。

直樹は何となく、そう思った。

2人と会わなくなつて、話さなくなつて、どれくらい経

った？

数えてねえから分からへん。

紀子さんが居るから平気だろう。

そう思っていたんだけど、俺はそれを許さない。

結局思い出す。

電話の前には立たなくなっただけど、まだまだまだまだ、かかってくるのを待っていたりする。

母と喋ったこと。

あれはタイミング。

何かを感じたけれど、それが不快なものなのか、常日頃から目にしていることなのか、理解しきれずにいる。

でも、良い時間だった。

次の朝、登校していると後ろから聞こえてくる、駆け足の音。

直樹ももう慣れたもの。

それが紀子のものだと、すぐ分かる。

笑顔で「おはよう！」と言う紀子に、こっちも笑顔で「おはよう」と返す。

よし、いつもと変わらない。

「あんなあ直樹くん。昨日の話やねんけどな、私あの動物園の近所に住んでる親戚のお姉ちゃんがおるんよ。」

ほんでな、26日泊めてくれるって言う тоннねん」

一瞬、何の話だと思ったが、思い出した。

「お父さんとお母さんにな、嘘を吐くことになってしまっけど、どうする？行く？」

それを聞いて、冷静ではいられなかった。

四六時中聞いていたいと思っっている、この声。

学校帰りに別れるとき、電話を切るときなどに味わっているもの。

その日はそれを、放棄できるんだ。

「え、じゃあ何か、紀子さん。26日はずっと一緒に居れて、27日に帰って来るってこと？」

「そう。そういうこと。ほんまは気が引けるんやけどねえ。お父さんとお母さんに嘘吐くの」

……嘘は気が引ける。

「そこまで決まっとるんやったら、何で26日なんだよ？休みに入ってすぐ行ったらエエやんか」

「それはアカン。24日はクリスマス・イブやから。親と過ごすんがウチのルールです」

……クリスマス。

「何言うとんねん、紀子さん。クリスマスって、君ん家ってアレ？キリスト教か？クリスマスに一体何すんだ？」

「え、ケーキとか食べるやん」

「ケーキ？」

ここで紀子は少し黙った。

きつとこの問いは、紀子さんに気を遣わせるものなんだろう。

そう思い、話を切り上げることにする。

「よし、分かった。OK、OK！じゃあ26日にしよう。タダで泊めてもらえるんかな？」

「当然よ」

別に2人つきりじゃなくてもいい。

とてもありがたい話だった。

「なあ紀子さん。俺たち、遠く離れた土地でお互い生まれてんに、



こうやって出会ってな、こうやって仲良うしてな。

これってスゴイと思わへん？奇跡やわ。

俺は紀子さんみたいに夢とかないんやけど。

何回も何回も言うてるけど、俺、紀子さん大事にせなアカンなあ」

「別に夢なんかなくなつて生きていきます。

せやけどなあ……全く、東京人はキザで困る」

「キザかあ。まあいいじゃん」

2人はそんな会話をしながら教室に向かう。

途中、直樹は先ほどからの紀子の少し重い咳が気になって尋ねた。

「なあ紀子さん、風邪か？」

「え、ああ、ちよつとね。のどが痛いんやわ」

以前なら「おいおい、冗談じゃねえ。移すんじゃねえぞ」と考えた。

「あつたかくして早く寝なきゃダメだよ。だから今日は道草止めよ？」

こんなことをスルツと言える、今の俺。

そして、これに他意はない。

「うん、分かつてるって。受験前に最後にもう1回、遊びに行かなアカンからね。」

……アレ？前もこんなこと言うてたね」

そうそう。

風邪なんかには邪魔されてたまるか。

待ち遠しい日が、もうすぐ来る。

早く寝なよと言った手前、この夜直樹は紀子の家に電話をするのを遠慮しておいた。

昨夜は『約150キロで飛んでくる約10センチのボールをバットで打ち返すのに最も効率の良いスイングの軌道について』の話の途中だった。

今晚は一人で図にして、きっとこれが正解だろうという案を出してみよう。

直樹は寝る前に、そんなことをしている。

次の日、学校に行ってみると、紀子の姿がない。

朝のホームルームで教師が言うには、風邪で休むとのこと。

嘘やろ……。

今、風邪なんか引いて、26日大丈夫なんやろな？

その後のセミナーにも、当然紀子の姿はない。

直樹は家に帰ると、真っ先に紀子の家に電話してみた。

しかし何度コールしても、誰も出ない。

こりゃ、重症みたいだな……。

26日、平気かな。

このソワソワは、もう抑えることができねえぞ。

その次の日。

この日も学校に紀子の姿はない。

まあ、風邪を引いたんなら、1日なんかじゃ治らんよなあ。

大丈夫なんやろな。

肺炎とか……えっと、何やったかな、アレとか、……病気……。

ほんまに風邪なんやろな？

……違う病気……

そこまで考えて、止めることにした。

その日の夜も、直樹は紀子の家に電話をしてみたが、誰も出なかつ

た。

22日。

2人で計画した旅行まで、あと4日。

でも直樹の中で、それはもうどうでも良かった。

もし明日、彼女が学校に来ていなかったら、帰りに家へ寄ってみよう。

紀子さんはお父さんとお母さんに、俺のこととか話してるのかな。行っても怒られへんやろな…？

でもそんなことより何より、心配になってきた。

直樹は眠る体勢に入ったまま、拭いきれない想像を繰り返す。

一度始めると、止め方が分からない。

もし彼女が休んでいる原因が風邪じゃなく、変な病気だったら…  
変な病気だったら、俺はどうすればいい？  
そんなことを考えるから、辛くなる。

…昔っからそうなんや。

俺には良い噂も悪い噂も、絶対に耳に入って来ない。

周りに人がいなかった俺が悪いんだろうけど。

絶対入って来おへんねんって。

今日紀子が登校していなかったら、お見舞いに行こうと決めていた日。

学校へ行くと、そこには紀子の姿があった。

とにかく、何よりも嬉しかった。

旅行の話はついで。  
体調が悪かったらナシにしようや。いつだって行けるんだから。  
そう言うつもりだった。

直樹は紀子に駆け寄り、彼女の顔を見た。

自分は笑顔で駆け寄ったつもりだったが、紀子の顔につられてサーツと血の気が引く思いがした。

彼女の、沈んだ顔。

「紀子さん、まだ調子良くないん？」

「……………」

「顔色良くないよ。休んだら良かったのに」

しかし直樹の言葉に紀子は返事もせず、姿勢を変えて前を向いてしまった。

……ハア！？

何だよ、ソレ！！

想定外の反応に、直樹は困惑と同時に怒りを覚える。

先ほどのようなとした旅行の話、聞かなくていいのか？  
そう思うのに、朝の彼女のあの態度が脳に焼き付いて、直樹は休憩時間も紀子に近づくことができなかつた。

他のクラスメイトとは話している紀子を見つめながら、  
こっちは心配してやったのに、とすら思っている。

放課後まで待とう。

どっちにしても、話はしなくっちゃいけねえんだから。  
紀子さんだってそうだろう？

しかしその日の授業が終わり、帰り支度をしている直樹の隣を紀子は無視するようにスツと通り過ぎて行く。

……嘘だろ。

まだ怒ってるんかいな。

直樹は慌てて教科書をカバンに詰め込み、紀子の後を追いかける。先々と歩いて行く紀子に向かって、

「ねえ！ちよつと待ってよ！待ってって！！何怒ってんだよ！？」

そこで紀子は立ち止まり、振り返った。

紀子はじーっと直樹を見つめながら、1つ深呼吸をし、

「…別に、怒ってないよ」

そう言って、いつもの笑顔を見せてくれる。

この時点で、朝のあの態度は直樹の中で帳消しになった。

直樹はいつもの調子で、

「じゃあセミナーの時間まで、あの店行って時間潰す？一旦帰る？」  
そして紀子と並んで歩こうとした。

いつものように。

しかし紀子はその場に立ち止まったまま。

直樹は不思議に思い、振り返る。  
すると、

「ごめん！今日はセミナーには行けへんのよ。

ほいでね……あのー、26日、アレ行かれへんようになった。ナシ  
ってことで。ごめんね」

そう言っつて、紀子はツカツカと歩き出す。

「……………」

……………この場の空気、事情。

そういつたものが一切把握できない。

ついついポカンとしてしまった。

「な……………やっぱり怒っとんちゃうん?!どうした?俺、何かした?」

あの時味わった不安がまた、直樹を襲う。

が、今回は事情が違うのだ。

泣きつきたい相手が、直樹に泣きつきたい思いをさせている。

立ち止まっている直樹から少し離れると、紀子は振り返った。

「ほんまにごめんね。今日は一人で帰って」

「……………」

朝覚えた、ほんの少しの怒り。

あんなものは帳消しなんです。

俺は事情の読めない名人。

自分の言動に責任を持ってない名人。

記憶力散漫の名人。

今日、家でいろいろ振り返ってみて、心当たりのある箇所を全て謝ろう。

この動悸。

もう失敗は許されない。

きつと、俺に何かが……

きつと、俺が何かをやってしまったんだ。

セミナーでの授業を終え、家へと帰る。

紀子が言っていた通り、やはり教室に彼女の姿はなかった。

電話の前に立ち、一度は我慢する。

まだ謝るべきことが思いつかない。

お風呂に入りながら、もう一度考える。

ここ数日あった出来事。

そのもつと前。

その、もつと前。

……パクウとタケシのこと、嘔吐してるのがバレたのかな。

それ以外に思いつかない。

お風呂を出てもう一度、電話の前に立ってみる。

イチかバチかに賭けてみよう。

俺はここで、彼女の言葉に甘えるぞ。

帰ってすぐにはできなかった電話を、イチかバチかで掛けてみた。ドキドキしながら、指先が完全に記憶している紀子の家の電話番号を押す。

コールされるたびに、心音が早くなるような気がした。

そこまで昂ぶってしまったが、昨日・一昨日と同じように、電話には誰も出ない。

ここで少しホツとするのが、俺の悪い癖。

先延ばしになっても、何も良いことなんか無い。

明日、とっ捕まえてでもちゃんと喋るぞ。

俺には君に、あの2人に教わって、刷り込まれたものがあるんだ。ここでホツとするのは、全然違うんだ。

そして、昨夜の母の姿を思い出す。

今日俺が思ったアレは、

タイミング的に……っていうのは嘘だろう。

誰に対しての嘘？

俺は、お母さんに泣きついたんだよ、きつと。

だって今もまた、昨夜のようにお母さんと話そうかな、なんて思っている。

何て都合のいい話なんだろう。



今日は絶対にしない。

そんなことをしていたらほら、

……自分の歩先を見失うぞ。

だから今夜は我慢して、明日紀子さんとちゃんと話そう。

そして何が何でも、許してもらおう。

俺の甘え体質は、もう取り返しのつかないところまで来ているんだから。

次の朝。

いつもとは違う朝。

足取りは重いが、勇気を持って前に出る。

そう念じながら登校した。

……強く逞しい右腕よりも、変化に対応する術を知る者。

俺は紀子さんと話し、またステップアップしてやる。

……緊張してきた。

だけど俺は怯えない。

これほどの決心が要った今回の出来事。

しかし学校に着いても、そこに紀子の姿はなかった。

……また、今日も休みなのか。

俺はもう、絶対にホツとしない。

このまま学校を抜け出し、彼女の家に向かおうか。

そんな特別なことを考えているこんな日に限って、クラスメイトた

ちは直樹に話しかけてくる。  
協調性というものを持ち始めたここ最近の直樹は、自分の意思とは裏腹にそれらを邪険にすることができない。

この日は終業式。

昼まで学校に居れば……

帰りに寄ればいい。

席に着いて考え事をし、俯いている直樹。

そこに担任が入ってきた。

顔を上げて教壇を見ると、教師の他に立っている人がもう一人。

……紀子だ。

「えつとなー、急遽決まったことで、今日報告することになってしまったんやけど、久保がな、転校することになった。3学期からは別の学校や。」

久保、何か皆に言うことあるか？」

……驚きすぎて、頭の中が真っ白になった。

涎が出てきた。

拭う気にもなれない。

教壇に立って挨拶をしている紀子の姿。

凝視しながらも、何を言っているのか全く聞こえて来ない。

……転校なら俺もした。

……ん？転校？

新幹線で、何時間だっけ？

向こうの学校の人たちとは、夏休みに一度会った。

会ったというより、俺が会いに行った形だ。

転校……？

……聞いてねえ。

理解を固めた直樹がまず取った行動は、勢い良く席を立つこと。

ガッツ！という音に反応し、紀子もこちらを見る。

一瞬目が合った。

しかし紀子はすぐに視線を元に戻し、何かを喋り続け、最後に頭を下げた。

そして自分の席に着く。

それに合わせ、直樹も座り込む。

「……………」

強く逞しい右腕？

……漠然としすぎやろ。

変化に対応する術？

……そんなのあるのか？

それを知る者？

……そんな奴おるんか？

重すぎる現実だった。

直樹は考え事すらできないでいた。

辛うじて呼吸をし、皆と列をなし、同じ行動を取っている。

そのレベル。

意識の向こうに置いてあったもの。

『人に迷惑を掛けてはいけません』

それをこっち側に持ってきた、直樹。

この日はずっと、紀子を避けるように行動していた。

下校時間。

教室を出たところで、直樹は女子たちが集まっているのを目にした。輪の中心にいるのは紀子。

また一瞬彼女と目が合ったが、今度は直樹から目を逸らす。

彼女たちの横を通り過ぎ、校舎を出てグラウンドを歩いて行く。とぼとぼと。

重心をふくらはぎの間に溜め込んだまま。

もうすぐ校門に差し掛かろうとしたところで、後方から駆け足の音。しかし直樹はそれに気づかない。

と、後ろからいきなり、勢いよく腕を組まれた。

驚くこともなくゆっくりと首を横に向け、視線をずらすとそれは紀子。

「……直樹くん、ごめんな」

……言葉が出ない。

「今日な、ウチの近くまで送ってくれるかな。歩いて帰ろうか」

……返事が思いつかない。

何も答えない直樹を見て、紀子は組んだ腕を離す。

そして直樹に並んで歩き始めた。

「……」

落ちる沈黙。

しばらくすると、紀子が口を開いた。

「……あー、やっぱり私、やることキチャナイなー。うん、キチャ

ナイー！」

……言ってる意味が分かんねえよ。

頭の中で処理できないことばかりだが、直樹もようやく口を開く。

「……ね、転校って、どこに行くのさ」

「それは言われへん」

頭に来た。

「何で言えねえんだよ!? 何だソレ! 自分勝手すぎねえか!？」

「女なんてのはそんなモンやで? 覚えとった方がエエよ」

「…ッ」

何じゃソレ!!

朝、誓った思いは何処へ?

とも思う。

話をしないと。

とも思う。

少し前を歩く紀子を見ながら、一択しかないこの状況の中、2人の姿がぼやけて見えて……

自分の力ではどうしようもないと、諦めていた。

沈黙の時間が、長く長く……

あっという間に、紀子の家の近くまで来てしまった。

裏口から家の中に入っていく紀子。

何の言葉も掛けられず、見送る直樹。

最後まで

一つだけ確認を

そう思っって声を上げる。

「ねえ、引っ越すって、いつ引っ越すのさ?」

扉を開けかけていた紀子は直樹を振り返り、

「明日」

とだけ答え、家の中に入ってしまった。

以前慶也のグローブを買いに立ち寄った、この店。  
紀子の家。

店の正面を見ると、先日とは明らかに様子が違っている。

看板は剥がされ、店中は真っ暗。

店の前のショーケースに飾られていたスポーツ用品は全て、なくなっている。

そして気づいた。

……店が、潰れたのか。

直樹は自分の家の方に足を向け、歩き出した。  
バス停で立ち止まり、そのままバスに乗る。

……店が潰れてしまったんやな。

彼女、悪くないやん。

俺、何であんな態度やったんや……。

#### 中古品。

ワンユーザー、ツーユーザーを経て売りに出されている商品なんて、俺の中ではあり得ない。

購入する価値もない。

だけど俺は、古本屋にはよく行くんだ。

あの何とも言えない匂いの中、いろんな本を読んでみる。

破れている箇所。

何か食べ物のシミが付いたようなページ。

中でも目を引くのは、濡れたようにヨレヨレになったところ。

俺はそのページを見逃さない。  
前後を読まず、文脈がどうであれ、そのページだけは読んでみるんだ。

これがもし涙の痕であるならば、前の持ち主は何を考えたのだろう。涎の跡であれば、何が退屈で寝てしまったのだろう。

バスを降りた直樹は、すぐそこにある自宅へと向かって歩く。

そんなことを考えながら古本屋で本を漁ると、面白いんだ。

俺の知らない誰かの、俺の知らない深いところ。

でも、これは何の勉強にもならない。

あくまで俺の想像であって、答えなんか聞きだせないんだから。片思いでしかない、コミュニケーションなんです。

俺はいつも、こうだ。

求めるばかりで、何も与えていない。

紀子さんに対し、彼女がどういう意図を持って俺に冷たくしたのか。考えようともしていなかった…。

家に入ると、すぐ横の廊下を珍しく母が掃除していた。

「あら直樹さん、お帰りなさい。今日は随分早いのねえ」

「何言ってるんですか。今日は終業式です」

「あ、そうでしたねえ。」

私、ドライフラワー落としちゃって、廊下を汚しちゃったのよ。直樹さん、ちりとり持ってくださいさる？」

「あ、いいですよ」

そう言っつて、散ってしまったドライフラワーの花弁を箒で集めている母の手伝いをする。

そしてそのまま2階に上がり、自室に閉じ籠った。

ベッドに横たわり、白い天井を見つめながら。

……俺がこの地にいるのも、あと3年くらいなんや。

どっちにしても大学は東京。

大学に行く頃にはもう随分大人やし、例えば彼女と同じ高校に入っつてて俺が転校するつてなつたとしても、大学でまた一緒になれる。

そんな時はもう大人やし、何とかできる。

……そう、想定してたんや。

せやけど、今回は違いすぎるやろ。

俺じゃなく、この地を出て行くのは彼女の方。

俺の中で、あの人しかおらんと思っつている彼女がいなくなる……。

胃がキリキリし始めた。

こんな感覚はもちろん今まで一度もない。

直樹は布団を被り、包まる。

早く時間が経つてしまえ！

そう思つ。

少し眠つていたような気もするが、実際はどうだったのか。



外を見ると、もうすっかり暗くなっていた。

こんなときでも腹は減る。

直樹が1階に降りると、もうすでに食事の用意はされていた。

そして、このタイミング。

テーブルを見ると、父の姿。

こちらをチラと見た父。

それに気づくということとは、俺も父を凝視しているということだ……。

直樹は自分の席に着き、食事を始めた。

慶也もいる。

母もいる。

父もいる。

俺もいる。

久しぶりの4人の食事。

以前は普通の光景だったが、最近はこういう形を取っていなかった。いつもなら自分から時間をずらす。

しかし今日の直樹は、その馬力すら奪われていた。

とても静かな時間。

慶也の方からする、食器とナイフが当たる音のみが耳に入ってくる。

「慶也」

父の声。

「野球は小学校までだぞ。分かっているな？」

その約束をしたから大目に見てやっていたんだぞ。分かっているな？」

父が喋りだしたところで、直樹は食事を止め、席を立つ。

そしてそのまま外に出た。

自転車に跨り、走り出す。  
立ち漕ぎで、全速力で自転車を走らせる。  
上着を着て来なかったので寒くて仕方がなかったが、そんなことは  
どうでも良かった。

さつき時計を見た。

19時20分。

直樹は自転車を走らせる。

母への甘え。

紀子さんへの甘え。

タケシへの甘え。

パクウへの甘え。

みんな、そうだったものでバランスを取りつつ生きてるんだろっな。  
やって良いことなのかもしれないな。

直樹は自転車の全速力を止めない。

先日した、母との会話。

父がその場にいるだけで散漫させられる。

母は俺の味方なのかもしれない。

もちろん慶也も。

それが、嘘か幻のように思えてくる。

……父の重圧にかかると。

そんなのはお前の思い過ぎだと、決定付けられた気がする。

この際だから言わせてもらつと、うちにはやはり俺の椅子はない。  
でも外に出ると、3人がいた。

タケシ

パクウ

2人は今、この町のどこかにいる。だけでもう、会いに行けない。

俺の存在自体が、2人を大きく傷つけた。

全速力の自転車が向かう場所は、もう決まっていた。

……紀子さん

君はまだ、この町にいる。

直樹は全速力で、紀子の家に向かっていく。

何度も見た、この商店街。

昼間通ったときは気づかなかったが、まだこんな時間なのにシャッターが閉まっている店が多すぎる。

営業している気配のない店がたくさんある。

……全然気づかなかった。

紀子さんの店もまた、この通りの景気の悪さに呑まれてしまったのか。

我々15歳の力のなさ。

親に従うしかない。

……思い知るよ。

彼女だって転校なんかしたくない筈だ。

俺と一緒に高校へ行く。

ずっとそう言っていたんだから。

直樹は紀子の家の真ん前に立った。

ここまで来たが、どうするか、そこまでは考えていなかった。

ただ、思った。  
俺はちゃんとした彼女の声を、聞いていない。

直樹は紀子の店の真向かいにある、シャッターの下りた店の前に座り込む。

正面の店は真っ暗だが、奥の方からは光が差ししている。  
紀子はまだ、この家にいる。

俺は何をするつもりだ？

彼女が出てくるのを待つのか。

1人で時間を潰すのは得意中の得意だった。  
でも、それは以前の話。

手慰みをしながらここにいる心境でもなく、眠気もない。  
少し寒いだけ。

直樹はひたすらその姿勢のまま、じっとして動かないでいる。  
やがて知らない間に、先ほど差していた光が消えていた。

もう寝たのかな。

今もしも彼女が外に出てきたら、俺は変態扱いされるんじゃないか。

そんなことも考えてみるが、それ以上に大事なこと。

……彼女の声。

考え事もなくなった。  
する内容がなくなった。

ひたすらひたすら直樹はその場を動かず、時間が経つのを待っている。

腰の痛みを覚え、横になつてみたり、また座つてみたり、空を見上げてみたり。

都会の夜には慣れている。

以前いた家と同じく、こつちも夜空が少し明るい。

星なんか一つも見えない。

……紀子さんは星に詳しくったな。

旅行に行ったとき、星座について教えてやると言われていた。

きつとあの辺りは星がよく見えるんだらう。

……そういえば旅行に行くんだつたな。

やがてライトによつて照らされたものではなく、空が明るくなり始めた。

夜明けだ。

牛乳配達員や新聞配達員が、あんな暗い時間から仕事をしていると初めて知つた。

一人、声を掛けてくれた新聞配達のおじさんがいたが、

「旅行に行くので待ち合わせです」

と嘘を吐いた。

迷子・家出だと思われて、ここから引き剥がされるのは俺の思うところではない。

そんなに長いとは感じなかった、この時間。

空に加え、道路も少し明るく見え始めた頃。

紀子の家の扉が開いた。

と同時に、家の前に止まるタクシーが1台。

直樹は立ち上がる。

腰が少し痛い。

家から出てきたのは3人。

お父さんは以前顔を見たことがあるから知っている。

お母さんを見るのは初めてだ。

その後ろ、家を最後に出てきたのは紀子だった。

兄がいると言っていたけれど、お兄さんらしき人の姿は見えない。

3人がそれぞれ、それほど大きくはないカバンを1つずつ持っている。

しかし、今からこの家を後にする光景であるということは、容易に想像できた。

タクシーに荷物を積み込む3人。

そこで、紀子がこちらに気づく。

「あ、」

紀子の声。

直樹はその姿を、ただじつと見つめている。

彼女はお母さんと何やら遣り取りをして、こちらに駆け寄ってきた。

「……もう、何やねん。あのままね、行ったるうと思ひよったんやんか、私。何で顔見せるん」

「当たり前だろ。何がどうでどうなってんのか、俺は何も聞いてねえよ」

「……………」

紀子の声。

紀子の姿。

「……………新幹線の時間があるからね、あんまりゆっくりできへんねん。あんな、」

そこまで言ったところで紀子の声は沈み始め、震え、絞り出すような音に変わる。

「店が、潰れてしまつてな。どうしようもないねん。この店、土地、売ることになつてんや。」

「しょうがないねん」

「ハア！？売れたんならまたこの辺で家を買えばいいじゃねえか！何で余所へ引つ越す必要があんだよ！？」

「知らんよ、そんなこと！他の場所に土地・家買つて、そんな簡単な等価交換あるん！？」

「ウチは直樹くんトコみたいにな……ッ」

紀子はその続きを言わなかった。

怒っているとも取れ、悲しんでいるとも取れ。

自分も悲しんでいるのだが、何の力も持ち合わせてはいない。

ただこの状況に、従うのみ。

紀子につられて泣きそうになるが、ぐっと堪える。

これで完全なお別れではない筈。

そう信じる。

「あんな、直樹くん。私ね、アンタにめっちゃ嫌われてから行つたらう思うてたんや。」

人と別れる時つてな、とことん悪者になつて嫌われてやつた方が工工と思わん？めっちゃ便利やんか、ソレ。お別れなんやし」

「急すぎるんだよ！俺が紀子さん、嫌うわけないじゃないか。何なんだよソレ！便利つて、フザけんよ！」

ここで、紀子はようやくいつもの笑顔を見せてくれた。

そして直樹の肩をポンポンと叩きながら、

「フザけてないんやつて。本気で言つてるんやつて」

紀子は続けて言う。

「私、直樹くんめっちゃめっちゃ好きやったで。何か、直樹くんに言わすばかりで、私一回も言っへんかったけど」

そういえば、聞いてなかった。

何故このタイミングで言うんだ。

一生のお別れじゃあるまいし。

向こうから「紀子！」というお母さんの声。

「あ、もう時間みたい。行かなアカンわ。

直樹くん、受験頑張つてな」

そう言つて、紀子は直樹から離れる。

「頑張つてなとちゃうやろ！お互い頑張ろつな、やる？」

向こうに着いたらさ、電話ちょうだい。絶対だぞ。俺、ちゃんとさ、自分でお金貯めて会いに行くから」

紀子はもう一度直樹を振り返り、笑顔を見せた。

そうして彼女はタクシーに乗り込み、行ってしまふ。

……もう、ここにいても何の意味もない。

ため息しか出てこない。

夢でも何でもないんです。

俺は寝ずにここにいたのだから……。

思えばいっぺんに友人ができ、彼女ができ、いっぺんにいなくなった。

これからも長い間、同じ時間を共有すると、  
……信じていた。



直樹は歩くのを止め、走り出す。

あの場に、あの光景に、自分を置いておきたくはなかった。  
全速力で走る。

途中、自転車を忘れていたことに気づいたが、あの自転車はいらない。  
い。

もう、いらない。

そう思い、走り続けた。

この商店街一帯は、2年後には立派なショッピングモールに姿を変  
える。

直樹の見た、シャッターの閉まったたくさんのお店。

あれらは全て、地上げの煽りを受け、閉店に追い込まれた店たち。

その大きな力のトップにいるのは、直樹の父だ。

通りに店を構えていた久保スポーツも、例外ではない。

スポーツ用品店に限って説明をするならば。

以前、直樹の父が建てた大きなデパートの中には、有名なスポーツ  
用品店が店舗を構えている。

まず直樹の父がしたこと。

商店街の、地上げに対抗する体力を奪うため、その通り周辺の学校・  
体育館・スポーツクラブなどの施設に圧力をかける。

そうして、そこから流れる用具の修理・仕入れ、そういった収入口  
を全て吸い上げた。

この商店街に何店かあるスポーツ用品店は営業の仕事全て取り上  
げられ、各施設は政治的な力も交えたその圧力に従うほかなく、こ  
れまで築いてきた付き合いを反古にする以外なかったのだ。

店舗販売でのみの商売しかできなくなった商店街の各店。

しかし、そのデパート内にあるスポーツ用品店は規模の大きさを利

用して商品を大量入荷し、安く販売するというシステムを取っていた。

結果、客足はほとんどそちらへ流れて行く。

店舗販売すらままならない状況に追い込まれた店は、どんどん閉店に追い込まれる。

久保スポーツも漏れなくその流れに属し、地上げに対抗する体力・術を奪われ、この事態に陥ったのだった。

全てを知り、理解していた紀子。

直樹がこの事実を知るのは、まだ先の話。

そして今後、紀子から直樹に電話がかかってくることは、二度とない。

全速力のまま家に帰った直樹。

大きく開いてしまった穴に埋めるものは、何一つ持ち合わせていない。

帰宅してすぐに電話の前に立ってみる。

夢でもなければ何かの間違いでもないことは、よく知っていた。

……… だけど

直樹は紀子の家に電話をしてみた。

ここ数日、コールはするけれど一度も通じることがなかった電話。

……… パツツという音がした。

「！！！」

誰か出た！！

「あ、もしもし！？」

勇んだ直樹の耳に入ってきたのは、聞いたことのない、一方的な声。

『おかけになった電話番号は、現在使われておりません………』

「……………」

……繋がない電話番号にかけたとき、こんな声がするなんて知らなかった。

「へへッ！」

笑えてしまう。

……このキーホルダー、俺が持ってもいいんだよね？

紀子さん。

急流 1 (前書き)

暴力描写があります。

## 急流 1

君の未来を七色と表するならば、三色くらいは僕の細腕で補うものだと思っていました。

約束したわけじゃないけれど、そう信じていました。

ここに記すほどの落ち着きを取り戻したわけでも、取り戻したつもりもない。

もう、かれこれ何冊目だ？

3歳からの付き合いである、僕の系譜。

自分に過失があったと思うと楽になり、また元の位置に降り立つ日  
昼夜。

我執したつもりがないところが過失なのでは。

そう問うてくれる人がいるわけでもなく、またぐるりと一周して降り立つ。

蔓のごとく張り付いてでも執着すべきだったのか。  
そこまで自分に自信がないのは、僕が一番知っている。

ストレスとは自覚症状がないものの積み重ね。  
だから蓄積するもの。

完全無欠というものがこの世に存在するのか。

彼は、俺の家は貧乏だと言った。

彼は、誰にだって少なからず背中と腹に傷があると言った。

もし僕がこれであれば……

一度も失敗しなかったということなんだ。

虚妄は罪とも思うが、そこに憂いがあれば、とも思う。

麒麟児という単語を口にしていてる人を、見たことがない。ただその単語に憧れた。自分はそう表されたいと。

才能とは持ち合わせているもの。  
努力でどうこうなるわけではなく、ギッコンバツタン。  
僕の身は思考・妄想よりも軽いと知り、ギッコンバツタンする。

その憧れの単語を、僕は彼女に託したんだ。  
彼女こそ、その人だと。  
憧れ、凝視し、好意を抱き、夢中になった。  
でもそんな彼女にも、自分で弱点と表するものが……

暗闇

一つの明かりもない場所

真っ暗闇

そこに身を置くと、過呼吸になり、眠れなくなるという話。

彼女は言っただけです。

これは内緒だと。

トラウマなんてのは、人にあだこうだ言うものではない。  
というより、これをトラウマと表していいのかわかからない。

過去に自分の身に何かあったのか。だから暗い場所が苦手なのか。  
覚えていないんだと言った。

これをトラウマと表するには早すぎる。  
そう言いながら、自分の弱点をこの僕に。

虎、馬の話だと思った。  
普通にその単語を用いて話をする彼女の前で、  
その単語を知らない。  
言えなかった、僕の愚。

辞書に書かれている内容を見て、知るところ。  
……幸せだと思った。

僕はそんなものを持ち合わせていない。  
僕にはそんなものはない。

完全無欠とは妄想であっていいんだと、知った。

3歳の頃、両親が仕事で僕は留守番。  
夜になり、自分の家に帰ろうとする土井さんの腕を引っ張った思い  
出。

4歳の時には、新幹線の乗り方を覚えた。  
思えばあの頃、時刻表などではなく、場所・色・形で覚えていた、  
新幹線の乗り方。  
父の呼び出しに応じるために覚えた、新幹線の乗り方。  
酔っ払った大人2人がケンカを始め、それに巻き込まれ、足の骨を  
折ったことがある。  
あの時、足の怪我よりも、乗るはずだった新幹線に乗れなかった不  
安・恐怖の方が大きかった。

初めて両親に会った時のこと。  
学校での班での集まり。  
流行りものの、俗物。

思い出せばキリがない。

それらを引き合いに出してみる。  
思い出すと、ゾツとはするが。

それらが全て、そのトラウマというものの要素であるのだとしたら、  
僕は今頃生きてはいないだろう。

これらを要素にするのは、大変厚かましい。

彼女が僕にそつと教えたというのは、大変厚かましいと表したことに理由があるんだろう。

そして、僕に過呼吸などの事実はない。

彼女はそつと、僕にだけ話してくれたんだ。

人に自分の弱点を言い回れる奴が羨ましいと言ったのだから。  
よっぽど味方がたくさんいるのか、相当のアホだろうと。

僕にそつと、教えてくれた。

あれは彼女の黒だったのか。

白だったのか。

混じり合った部分だったのか。

もしそんな風に暢気に生きられるのであれば、僕にも弱点があると  
表して生きたい。

僕の周りには人がいないから……

そのアホになれたらな。

……また人に迷惑を掛けてしまうのだろうか。

でも、そうやって生きてみようか。



僕のことを見ている人はもう、いないのだから……

もう俺は期待なんかせえへん。  
だから俺に期待させるな。

直樹はある学校の屋上にいた。  
何人かの他校の生徒を引き連れて。  
そうしてこの学校の生徒たちと、一方的な乱闘を繰り広げている。  
直樹の右手は、自分のものとも相手のものとも分らない血で、赤く染まっていた。

「オイオイ、何やねん。ホンマにお前がココで一番強いんか？そがいなこと言われるの、10年早いんちゃうか？」

直樹はそう言いながら、膝をついている相手の前髪を左手でワシッと掴み上げる。

「代表して俺が言うたるかー？」  
口からダラダラと血を流している彼は、直樹に哀願する。

「わ、悪かった！ホンマに悪かった！！か、勘弁してくれ！！」  
か細いその声を耳にした直樹はしかし、一つニヤリと笑みを浮かべ、次の行動に移るのだ。

「10年早エんだよッ！！」  
言うが早いかするが早いか、直樹は彼の前髪を掴んだまま、顔面に膝をめり込ませる。

グシャッ！！

首を力チ上げられ、吹っ飛ぶ彼。

直樹の左手にはたくさんの髪の毛が残っている。

「キツタねえから、こういうの勘弁してくれるかー」

そう言つて、顔面を押さえのた打ち回る彼に歩み寄つた。

苦しみ、暴れ回っている彼を気にすることもない直樹。

胸倉を掴んで、

ガシヤガシヤンツ!!

屋上のフェンスに押し付ける。

とてもよく晴れた涼しい日。

快晴

青空

……グシャツ!

フェンスがきしみを上げた。

彼の上半はフェンスの外へ、押し出される。

「ツギヤ ツ!!」

直樹に胸倉を押さえつけられた彼の叫び声が、青空に響き渡つた。

「なあ、お前の脳天の下に車がズラツと並んであるわ。

俺、噂で聞いたんやけどな、車のフロントガラスってな、事故したときに乗ってる人間に突き刺さりんように、粉々になるようにできとるって聞いてん。いっぺん試してみてエエか？」

「アアアアア ツ!!!!もう、勘弁してくれ!!!ごめん!

ごめん!!!ごめん!!!」

「謝らなつて。謝ってもらおうなんて思つてへんねん。こつから落ちて一発、お前のエエとこ見せてくれんかー？」

ここでプチツといくか、細川つてどれか、教えんかい。

ツレか何か知らんけど、楽になるぞ。ドツチ選んでもな」

「……ツ」

するとその彼はされるがままであった首を少し起こし、周りにいた同じ学校の生徒1人を指差した。

「チツ！」

直樹が胸倉から手を離すと同時に、彼はズルズルとその場に座り込む。

指差された生徒はその場から慌てて逃げようとするが、直樹と一緒に乗り込んだ他校の生徒が彼を取り押さえた。

「オイオイオイ、せつかくここまで来たんやからよう、逃げんといてや」

「……ヒツ！」

押さえつけられているその生徒は言葉も出ない。

震え上がっている。

そんな彼に直樹はニコツと笑い、いきなり

ズバーンツ！！

その彼に、首が吹っ飛ぶほどの張り手を一つお見舞いした。

1発だけで彼の口から滴り落ちる、血液。

それを確認した直樹はもう一つ、反対から同じような張り手を食らわす。

ズバンツ！

彼は、今度は反対側に張り飛ばされる。

「なぐんで最初っから名乗り出エへんのか？お前が正直に言うとなら、お前一人で済んだんやぞ？」

「すびばせん！すびばせん！！」

そう叫ぶ彼の両耳を掴みながら、直樹は言う。

「これなあ、ちょっと下へ向けて力入れたら、簡単にちぎれよんのか。知つとったか？耳つてのはな、骨で繋がってへんからな。」

どうするんや？ゼニ返すか、耳なくなつて男前になるか。俺、優しいやろー？オノレントコのボスにもちゃんと選択肢あげとるからなあ。

俺は別に、オノレの片耳1万5千円でも構わへんで」

以前の直樹とは思えない形相。  
その学校の生徒は誰一人、仲裁には入らない。

「分かった！返す！返す！！」

それを聞いた直樹は耳から手を離し、その彼から手を離すよう周りに指示を出した。

ポケットに手を突っ込み、ゴソゴソして彼が差し出したお金は2万円。

「おい、ちょっと待てエ。こっちは3万つて聞いとるぞ。1枚足らへんやないかい。使ったんか」

「イヤ！ちゃうねん！ちゃうねん！！」

そう言つてもう片方のポケットを探る。

そうして取り出したのは、ステッカー2枚。

「何や、こりや。ハア？」

「イヤ、ツレにな、暴走族やつとるヤツがおつて、1枚5千円で買わされたんや。だから1万はないねん」

直樹は指先でそのステッカーを取り上げた。

「ほならお前、俺をそのゾクントコに連れてけ。1枚5千円で買い取ってもらつわ」

「イヤ！勘弁してくれ！！そんなことしたら俺、後でどんな…ッ！」  
そこまで言つたところで、直樹の蹴りが顔面にめり込む。

ゴリッ！！

吹っ飛ぶ彼。

「アレもできへーん、コレもできへーん言つてお前、話が前へ進まへんやないか。オイ！オイッ！！」

直樹は倒れた彼の髪の毛を引つ掴み、振り回し、煽る。

その時後ろから

「おい、ちょっと待ってくれ！！」

声を上げたのは、先ほど相手にしていたこの学校のボスだ。

「ここに2万ある！せやからコレで勘弁してくれへんか！！」  
四つん這いになって2万を差し出す彼。

直樹は振り回す行為をやめ、彼に近づきその2万を受け取った。

「ほんならこのステッカー、2枚お買い上げやな。ほんで釣りの1万円や」

言いながら、ステッカーと1万円札をハラハラと落として一言、  
「拾わんかい」

直樹と、一緒に乗り込んできた仲間たちは、そうしてその学校を後にする。

「おいおい直樹！お前、やっぱりメチャクチャ強いやんけ！

お前がハツ倒したアイツ、強うてメチャクチャ有名なんやぞ？相手にならんやんけ！」

それを聞き、返す直樹。

「ハア？あんなモンが強いつてか。しょうもない。

もうちよい力入れとつたらあのボケ死んどつたぞ。余裕じゃ、こんなモン」

……期待して、期待されて、  
また期待する。

求めだすとキリがないので、願いは半分にした。

直樹17歳。

高校2年生。

次の日、登校すると1人の生徒が直樹を待っていた。

「秋月くん、どうやった？何とかなつた？」

校庭を歩きながら、校舎に向かう2人。

「おう、全然余裕や。ほら」

そう言っただけ直樹は財布から3万円取り出し、彼に渡す。

「ほんまにいつもゴメンね。ありがとう。秋月くんのおかげで、お金が返ってくるようになったわ」

「別にかめへんよ。俺はお前らと違って暇やからな」

「暇って、よう言うわ！そんな言いながら、テストでいつも必ず30番台には入ったあるやん！

俺なんか勉強しかやってへんのに、100番台にも入ったことないわ。

カツカゲで対抗する……ケンカする力も持ってへんし」

「そんな別持たんでエエんちゃう？」

そうして直樹は先々と教室の中へと入っていく。

昨日の大乱闘は、クラスメイトがカツカゲに遭って奪われたお金を、直樹が取り返しに行ったものだった。

この頃の直樹は、友を作ろうと一生懸命なのだ。

しかしこの学校には放課後、直樹と連れ歩き遊び回るような生徒はいない。

昨日一緒に乗り込んだ生徒たちは、全員他校の生徒。

以前直樹と揉めて、手籠めにされた者たち。

『どうせ俺は暇やからな』

これが最近の直樹の口癖だ。

頭の中で言葉にせずとも、いつもそう考えていた。

直樹はこの日、3日ぶりに家へと帰った。

玄関に入ってまず会ったのは、慶也。

「ちょっとー、兄さん！ドコ行っとなん？3日も帰らへんで」

慶也もかなり大きくなった。

中学2年生の彼は父の命令通り、野球を止めた。陽に焼けて真っ黒だった彼の肌は、今では青白くなっている。

「お前、こないだのテスト、どうやった？」

「あー、…32番だった。アカンわ、まだまだやわ。兄さんみたいにはならねへん」

「何言うとんねん。すぐソコに見えてるやん、俺なんか」

直樹は階段を上り、自室へと入る。

直樹が高校に進学すると同時に、父は単身赴任という形で東京本社に戻って行った。

直樹の思うところ。

父は、慶也が勉強を頑張り始めたこのタイミングで、学校を変えることはない判断したのだろう。

母、慶也、土井さん、直樹はこの地に残ることになった。

しかし父はそろそろ家族を東京へ呼び戻そうとしている。

世間への体裁を考えて。

父が自分の目の前からいなくなった。

そのお蔭かどうか、俺は自由に、望むようにやっている。

そんな俺は、何て小さいんだろうと思う。

……ビビリやがって。

ある程度の大学には行かないと、とも考え、大学に行かせてくれるんだよな？とも考える。

この折半された思考の中、備えがあればと、以前のようにとはいかないが勉強は続けていた。

その他。

俺はケンカをやったらどのくらい強いのか。そんなことにはそれほど興味はないのだが、暴れ回っていればその内、……

この身長と、見立ててもらったこの髪型は、あの頃から変わらない俺の目印。

もう、あの疎外感。

あれだけは勘弁してもらいたい。

頼むから俺の周りに誰か、人が居てくれ。

学校では中学時代とは違い、いつも直樹の後をついて回る者が何人もいる。

学校を出れば、他校の生徒たちを引き連れ、街中を練り歩いている直樹。

確実に違うのだ。

以前とは。

学校が終わると、自然と皆が集まる場所がある。

街の喫茶店。

そこで1〜2時間大勢でダベツてから、街中を練り歩く。賑やかなのが良いことで、もう静かなのは勘弁なのだ。

「おい直樹。こないだよ、高のヤツがな、メンチ切ってきたやつだからボッコにしたったわい。」

お前の名前出したらビビり上げとったわ」

「……………」



そんな言葉を耳にする、こんなことになるとは思っていなかったけれど、これは良い調子なのだ。

あの時から変わらない髪型とこの身長は、目印。  
更に名前が知れ渡ったとなれば……

そのうち、出会っだろう。

そんな目論見を持ちながら、もう2年になる。  
いまだに会えない。

静かなのは困るので、周りが賑やかなのは良いことなのだが、以前とは違う。

……前は、たったの3人だった。  
いろんな学校の生徒で、こうやってグループを作っている。  
いろんなヤツがいると知った。  
だけど違和感があり、何か違うのだ。

「俺、今日は先帰るわ」

そう言っつて、集団から抜け出す直樹。  
直樹はまだ、ボクシングジムにほぼ毎日通っていた。

しかしこのことは誰にも話していない。  
話しているのかどうかも分からない。  
プロテストを受けようと考えていたが、視力が原因で諦めることになった。

こんなことも、誰にも話していない。

今日は会長が何か用事があるとかで、早い時間にジムが閉まった。  
このジムの近くには、慶也が通っている塾がある。

あいつ、確か今日は塾だったな。

普段はこんなこと思わないが、ただ何となく、時間があつたのも手  
伝って直樹は考える。

迎えに行つて一緒に帰るか。

直樹は塾へと向かつて歩き始めた。

直樹はずっと、塾なんてモンは、という考えだった。

だが今、大好きだった野球もやめ、勉強を頑張っている慶也を少な  
からず応援している。

帰りにたこ焼きでも奢つてやろうか。そんなことも考える。

塾に近づき、建物を見上げると教室にはまだ明かりが点っていた。

どうやら早く着きすぎたようだ。

直樹は道路を挟んだ向かい側の駐車場に座り込み、慶也が出てくる  
のを待つことにする。

しばらくすると、ゾロゾロと生徒たちが出て来た。

それを見て直樹は立ち上がり、建物へと近づいて行く。  
と、彼らの集団の向こう側に、ある人の輪を見つけた。

街灯に照らされた、数人の男子生徒たち。

ゆっくりと近づくと直樹。

そして彼らの顔が判別できるほど近寄つたとき、その光景の真ん中  
にいるのが慶也だと気づいた。

5人の同級生らしき中学生が慶也を取り囲み、小突いている。

正面の彼が慶也を突き飛ばす。

よろめいた慶也を、今度は背後の彼が突き飛ばす。

「……………」

……知らない者ならば、無視もできる。  
そんなことは容易いが、しかしその真ん中にいるのは間違いなく慶也。

イジメに遭っている。  
そう思った。

彼らは何かを喋っているが、直樹には聞こえてこない。  
こんなとき、どうすればいいのかわからない。

俺は慶也の味方をして、あのガキたちを一網打尽にしたいのか。  
俺は強いぞ。

見て見ぬフリをして、このまま帰るか。  
何となく声を掛けてみるか。

……正解は？

足を止め、その光景をじっと見つめている直樹。  
思い、考えながら、時間が過ぎて行くのをただ待っている。

……やっぱりわからない。

そのうち慶也は1人にドンツと強く突き飛ばされ、尻餅をついた。  
それを見て、彼ら5人はゾロゾロと自転車に乗って帰って行く。  
たった一人残され、座り込んでいる慶也。

……どこまでもどこまでも、  
つくづくや。

……俺はなあ。

イラッとしたが、これは慶也のせいではない。  
見守っていて正解だった、とすら思っている。

……相変わらずのクズや。

そう思いながら、自分で二面性と表するようになった、次の態度。いかにも今通りがかりました、という態度。

「おい慶也、何しとんねん。道端に座り込んで」

……クズめ！！

「ああ、兄さん。どうしたん？こんなトコで」

「イヤ、遊んどってん。ほんでたまたまな。お前、今日塾やっての知ったからよう、寄ってみてん。」

俺、ちよつとゼニ持つてるけど、何か買い食いしてくか？」

……しゃあしゃあと！

慶也の態度はいつもと変わりなかった。

「ちよつと暗くて躓いてしもうてん」

普段通りの慶也の顔。

前から思っていたけど、こいつは本当にたくましい。

感じるところも、見るところも、俺とは全くちやうんやろう。格好が良いと思う。

今のがもし、逆の立場だったら。

……アホか。あり得るか。

直樹は慶也の汚れをパンパンと払ってやる。

俺がイジメなんかに遭うか。

あんなら5人、踏み潰したる。

「よっしゃ、ほんなら俺がいつも行くお好み焼き屋へ行こうか」

「おー、いいねえ。兄さんの奢りやる？」

「エエよ」

……俺は前とはちやうぞ。  
必死で必死で、  
変えたんや。

……どもならん。

何故父は、家族を置いて一人で東京へ帰ったのだろうか。  
少なくとも、慶也だけは連れて行くものと思っていた。  
女なんだろうな、と思う。

あと数ヶ月で自分たちもこの地を後にすることになるが、慶也の今  
回事。

そのあと数ヶ月、我慢すべきなのか。

あれは、俺にはイジメに見えた。

アイツがやり返すタイプではないのはもちろんだが、相談する相手  
がないとは思えない。

いつそ俺にでも言ってくれば……

中学生相手だろうと、やれることはある。

この際、あの父は関係ないことだろう。

こんな相談をあの父に持ちかけたところで、慶也にだって舌打ちで  
返事をするに決まっている。

直樹は、自分には関係ない、そう思えずにいた。

それと同時に、同じ頻度で、俺に期待するなとも思う。

次の日も、次の日も、どうしていいのかわからず、そのまた次の日もただ心配をしている。

直樹の学校の生徒はやはり以前と同じく、勉強を本業、糧として生きてきた人たちが多く、話はすれど込み入った話はしない。

そんな仲を保ちながら、直樹はこの学校での日々を過ごしていた。ある日の昼休み、自分の席に座り外の景色をポケットと眺めていると、背後から声を掛けられた。

「ねえ、秋月くん」

話しかけてきたのは菅井だ。

あの墨汁事件の彼。

彼は直樹と同じこの進学校に進み、また同じクラスになっていた。

その声に振り返る直樹。

「あんな、秋月くん。カツアゲされたお金とか、そんなん取り返して来てくれるってホンマなん？」

「誰がそんなこと言うとんや？」

「あ、イヤ…学校中だな、そういう噂になってるで」

「……………」

自分の中では正しいことをしているつもりだが、正しいやり方だとは思っていない。

更に言うと、目的を果たすためのキツカケ、手段だと思っている。

「何や、誰かに金奪られたんか。ドコの学校のヤツや？名前は？名前まで分らんか。ドコの学校や？」

黙ってしまう菅井。

「何やねん、お前。黙られたら分からへんやろ。取り返したるよ。制服見たら学校くらい分かるやろ？」

「……………えっと、…えー… 高校」

「ふーん。そうか。で、ナンボ奪られてん」

俯いた菅井は小さな声で応える。

「それがもう……覚えてへん」

「ハア？」

菅井から事情を聞くと、彼からお金を巻き上げているのは小学校のときの同級生。

彼らと菅井は違う中学校に進んだが、通行手形料とワケの分からないイチャモンを付けられ、毎月3万円ずつ巻き上げられているらしい。

それを聞いた直樹は驚愕する。

「おい、確か中学時分も同じ学校でイジメられとったよな。

何？ひよっとして小学校のときもソイツにイジメられとったん？」

「……………」

返事なく、菅井は肯くののみ。

……ある意味、感心してしまった。

「変な意味ちゃうで？変な意味ちゃうんやけど、お前の親父さん、仕事何やってんねん。

こんな学校へ来てるお前が、アルバイトしてるとは思えへんねんけど」

そこで、菅井は完全に黙り込んでしまった。

……多分コイツは、今まで俺が出会ったどの人間よりもマヌケや。

そう思う直樹だが、その方法が、それを防ぐための方法が見つからなかったその気持ちも分かる。

「よっしや、菅井。じゃあな、今日の帰り、俺に付き合えや。俺の仲間と一緒に取り返しに行ったるから。そん時詳しく話聞くな。放課後、一緒に行こうか」

「えー!?秋月くんの仲間!?……………僕、前に街で秋月くん見かけたこ

とあるんやけど、あの他校のヤンキーの人らやる？」

……ヤンキー？

仲間と評しながら、ヤンキー……

コイツから見たら、俺もやっぱりヤンキーなんかな。

「……ちよつと僕、怖いんやけど」

……こういうヤツはもし次に何か選択肢を与えても、無理と言う。

アレもコレも、できんと言う。

分かってる。

「よっしゃ、分かった。じゃあ俺一人で行ったるわ。

高校のヤツやったら、つい一週間くらい前にインネンつけて来たから張り倒してやったんや。

俺一人でも余裕やる。そんな代わり、ついて来てもらわなアカンで。どんなヤツか分からへんからな。

今日早速行こうや。放課後早めに抜け出すでー」

ようやく顔を上げる菅井。

「ほんま？取り返してくれる？」

「うん、エエよ」

すっかり関西弁も板についた直樹。

今の自分にとつては、こんな形でも構わなかった。

俺に期待するなと思いなから、期待されると喜んでしまい、そしてそれと等しく期待もしてしまふ。

そんなことを考えながら、俺はこんなに便利なヤツだったのかと思う。

都合が良すぎるんちゃう？俺。

直樹と菅井は放課後のホームルームを前に、学校を出た。

高校はここからそう遠くない。

自転車で向かう2人。



「なあ菅井、あの学校って 郵便局前のバス停の傍やったんなあ？」

「うん、そう」

「じゃあ15分くらいで着くな。ソイツがおるかどうか分からへんけど、見つけたらお前はすぐに逃げるんやぞ？足手纏いやからな、おってもろうても」

「うん、分かった」

交差点に差し掛かり、信号待ちをする、

横断歩道の向こう側で、同じく信号待ちをしている数人は2人が目指す 高校の生徒だ。

「おい菅井、アイツらとちやうか？」

直樹は彼らを指差しながら尋ねる。

しばらくじっと見つめ、

「あの中にはおらへんわ」

菅井がそう答えた直後、直樹の横で彼の自転車が大きく音を立て、倒れた。

ガシャンッ！

それと同時に菅井は道路に倒れこむ。

ハア！？

そう思った直樹。

瞬間、自分の自転車も強い力で横に倒されそうになった。

何や？！

直樹はサッと自転車から飛び降りる。

振り返ると、ソコには 高の制服を着た生徒が3人。

直樹の後ろに立った1人が大きな声で叫んだ。

「おーい！！コイツや！コイツが秋月や！！コッチから出向かんで

も、わざわざ自分から来よつたで!!」

それに反応したのが、横断歩道の向こうの生徒たち。

赤信号に構わず、こちらに向かつて駆けてくる。

「おいコラ、ワレか、秋月いうんは。こないだウチのツレ、エライ目に遭わせてくれたらしいのう」

言いながら、1人が直樹の胸倉を掴み寄せ、グツと押し上げた。

……えつと、えーつと……1、2、3、4、5、……7人か。

相手の人数を数える、冷静な直樹。

「おい、おい!お前!」

直樹はここで菅井の名前を呼ばないようにと気を遣う。

「こん中におるか?」

尻餅をついたままの菅井は声も出さず、ただ首を横に振って答えた。

「何や、おらんのかい。ほんならお前らには用事ないわ。早よ帰れ」

直樹の言葉に、彼らは頭に血を上らせ、

「お前、エエ根性しとるやんけ!!ちよつとこつちへ来いッ!」

菅井をスルツと通り抜け、移動を始める8人。

直樹は4人に引き摺られながら、振り返る。

「こりゃあまた明日やな。今日は帰った方がエエで。ちゅーか早よ帰れ」

急流 2 (前書き)

暴力描写があります。

## 急流 2

7人にされるがまま、直樹は近くの神社へ連行された。  
人気のないこの神社。

直樹を掴んでいた4人が手を離し、直樹はやっと解放される。  
同時に、改めて辺りを見回してみた。

全く、こんな神聖な場所で……

何や、あのイチヨウの木……でツカー……！

……人気はないみたいやな。

「おい秋月、お前一人でこんな所プラプラしやがって、どこまでナメとんや！今からお前んトコ行ってイテこましたろう思うとったんや。

こっちは7人おるで。どないするんや。

持つとる金全部置いて、明日10万持ってワシらんトコへ来るか、ここでボテ繰り回されるか、好きな方を選べ！」

「……………」

黙っている直樹。

ちらりと神社の入口を見ると、そこに菅井の姿が見えた。

「おいコラーツ！！帰れつちゅーとるやろ！！！」

直樹の叫び声を聞いて、彼はサツと走り去る。

それを確認し、直樹は7人に向かって口を開いた。

「どっちも選べへんなー。そこに答えはない。何で俺がお前らみたいなブスにゼニあげなアカンのや。

誰をボテ繰り回すって？俺は今、ちょうどエエ機会やと思うとるよ。いっぺん1人で多人数相手にしたい思うとったからなあ。

7人でエエんか？ブスをちょうどええハンサムにしたるよ」

顔を真つ赤に染めて震えている　高の生徒たち。

号令はなかった。

一斉に飛び掛る。

人気のない神社。

神主もいない。

そこでの大乱闘。

砂利を踏む音と、打撃音だけが何度も響く。

それは10分ほどだった。

最後にそこに立っていたのは、直樹1人だけ。

垂れてくる鼻血を拭いながら、直樹は一度、大きく鼻を啜る。

「しかしアレやなー。何回やってもケンカっちゅーのは止めどころがよう分からへん。

殺してもうたらオモロないやんけって習うとるからよう。

この辺で止めとくかー？なあ？」

腹を押さえ蹲っている者。

顔を手で覆ってジタバタしている者。

一応全員が、血まみれになっている。

「おいお前。ソレ、アバラ折れとるからな。内臓傷ついとったらアカンから、ちゃんと病院行けよ？」

お前もや。ソレ、鼻折れてもうとるからな。ちゃんと病院行かんとこの先ずーっとハンサムのままやぞ」

「ウ……………ッ……………」

とりあえず返事は返って来ない。

「フ……………」

直樹は大きくため息を吐く。

「ほんなら帰るわ」

……脇腹が痛い。

足首が痛い。

手首も痛い。

鼻も痛いし、目も痛い。

7人いうて、結構イケるもんやな。

……せやけど、あんな人気のない所で、あんまり意味ないな。

アイツらがその辺で触れ回ってくれるの待つか。

足首を痛め、うまく歩けない直樹。

ソーツと、ソーツと歩きながら、神社を出る。

そして呼んでみる。

「おい……おい……」

……静寂。

帰つとるんやな。

……うん、

それがいいよ。

誰の姿ももう、そこにはない。

交差点で倒れている自分の自転車を起こし、それに跨る。

明日もつかい、こつちへ来なアカンな。

その辺までちゃんと話詰めといたら良かったな。

直樹は痛い足でペダルを漕ぎ始める。

何処に行こうかなあと思う。  
どうせ俺、暇やし。

垂れてくる鼻血で、……思い出す。  
鼻の付け根を摘み、直樹は自転車で何処かへ帰る。

次の日の朝、直樹はいつもの時間に起きることができなかった。  
昨日殴られすぎたようで発熱し、目が覚めなかったのだ。  
慌てて学校へ来たが、授業はもう2時間目が終わっていた。

まあ、まずそんなことよりも。

直樹は菅井の元へ近づいた。

「おい菅井、昨日何かメンドイことになって悪かったな」

「え、あ、イヤ……」

ドカツと前の席に腰を掛け、

「今日はよ、邪魔入らへんようにルート変えて行こうや。」

うーん…：そつやなあ、お前授業サボらすワケにいかんから、どうしようか。

1人とお捕まえて呼び出すか。

せやけどな菅井、これまで奪られた金全部取り返すつちゅーのは、ちよつと難しいかもしれんぞ?」

俯いて直樹の話を聞いている菅井。

「まあせやけど、ナンボかは取り返したるわ。」

お前は昨日の要領でヤバなったら……」

そこへ、かぶせるように菅井が話し始めた。

「あのね、秋月くん。大学ドコ行くん?」

「え?…イヤ、まだ決めてへんけど」

「何か目的があるん?」

「目的?」

「こないだ僕ね、模試で秋月くん抜いたの、知つとる？」

「え？あー、イヤ、ごめん、知らん」

直樹は会話が成立していないことに、少し慌てる。

「僕ね、将来、絶対弁護士になるんや。ほんでね、ああいう連中がのさばれんような、そんな世の中にしたる。

僕は絶対、弁護士になんねん」

私、医者になりたいんや。

頭を過ぎった、あの言葉。

素直に、何の疑りもなく菅井の言葉が耳に入ってきた。

……俺は何もない。

目的も、

目の前にエサも、ぶら下がっていない。

「あ、そ、そうか。スゴいな。今からそんな目標あつて」

「……………」

沈黙が落ちた。

直樹は何となく、自分が居た堪れなくなつた。

何かを思い出したように席を立ち、

「ま、放課後ちよつとだけ付き合ってくれや。とっ捕まえて聞き出すにしてもよ、別人呼び出してしもうたらアカンからな。頼むで。校門で待つとるからな」

そして直樹は自分の席に戻る。

考えてみる。



医者

弁護士

目標について

……菅井の中で、ああいう連中の中に俺も入ってんのかな……。

授業が終わり、直樹はホームルームに出席せず早めに教室を出た。直樹がホームルームに出ないのはよくあること。

菅井を待たせてはいけない。

そう思い、この日も早めに教室を出る。

校門の前に立ち、菅井が出てくるのを待っていると、車のクラクシヨンの音がした。

顔を上げると、道路を挟んだ向こう側に白い車が止まっている。

その車に近づき、窓をコンコンと叩くと、中から顔を見せたのは女性。

「おい、学校へは来るなって言うてるやんけ」

運転している女性は、今の直樹の彼女だ。

「えー、何で。今日は休みやから迎えに来たったんやんか」

「だから学校へ向かえに來んでエエっちゅーとんねん。俺、今から用事あるし。意味ないって言うたやろ」

「そうなん？ほんならしゃあないね。今日もウチ、泊まるやろ？」

夕飯、またシチューでエエかなあ？昨夜の、まだいっぱい残ったあるねん」

「分かった分かった。分かったから早よ帰れや」

「給料出たら寿司でも連れてったるから」

「うん」

「じゃあ先帰ってるわ」

そう言っつて、彼女は去って行く。

直樹の彼女は社会人。  
直樹自身も失礼だとは思っている。  
だが、ただ何となく。  
週の何日か、ただ何となく彼女の家に居る。

……毎分ごとに、今のこの感情を謝りたいと。  
彼女に、そう思っていた。

そのうち、生徒たちが下校し始めた。

直樹は菅井を待っている。

10分……20分……30分……

えらい遅いな。

直樹は、校門を出ようとするクラスメイトの1人を捕まえて尋ねた。

「なあ、菅井知らん？見なんだ？」

「えー？知らんで。もう帰ったんちゃうん？」

おかしいな……。

直樹は教室に戻ってみる。

そこにはもう、誰もいない。

そしてまた、校門へ。

菅井の姿はやっぱりない。

……あ。

アイツ、逃げやがったな。

くっそー……

直樹は歩き始める。

しゃあないな。

一人で行くか。

せやけど、名前聞いてへんからどうしようもないな。

……全く、自分のことやる。

逃げんなよ、ほんま。

ブツブツと独り言。

……弁護士になる、か。

偉いよな。

邪魔したらアカンような気がしてきた。

明日、相手の名前だけ聞いとくか。

こんなんやったら、車で帰るときや良かったな。

直樹は今日も、家に帰るつもりはない。

しかし彼女にああ言った手前、すぐに彼女の部屋へ帰るのも気まずい。

よっしゃ、遊んでから帰るか。

そして仲間とタム口っている店へと足を向けた。

目標について。

……考えだしたらイライラするから考えるな。  
目標を持つのが夢やる？

……そんな上等なモノ、今の俺にはない。  
だから、考えるなって。

バカ話でもしに行こう。

アソコには、アイツらが居る。

店に入ると、いつものメンバーが直樹に声を掛ける。  
直樹はいつものようにレモンスカッシュを注文し、いつものように自分の席にドカッと座った。

「おいおい直樹、お前どうしたんや、その顔」

その声を掛けたのは正彦。

「イヤ、何でもないよ」

「ソレ、何でもないことないやろ。聞かせてくれや、武勇伝」  
正彦はいつも俺と話をするとき、何とも言えない顔でいる。

笑顔の口と目が、正比例していない感じ。

「イヤ、昨日な、高のヤツら張つ倒したつてん」

「ええ？お前にそんなに食らわすなんて、どんなヤツやねん」

「どんなヤツつて…？人おつたからなあ」

それを聞いて声を上げたのは、このグループの一人、木村。

「おいちよつと待てエ。秋月お前、ウチの高校のモンに手エ出したんかよ」

直樹は、木村が 高校の生徒だということをしつかり忘れていた。  
「せやけど、ウチの学校のモンにやなあ、先に手エ出して…。イヤ、ケンカ売ってきたんは向こうやで。」

…ん？ちよい待てエよ……ちやうわ、先にボッコにしたつたの、俺や。うーん……」

「そんななんどうでもエエねん。どんなヤツやってん」

「どんなヤツつて……そんなん覚えてへん」

「2年、1年にケガしたヤツおらんかつたぞ……つてことは3年か。  
おい秋月、お前無茶すんなよ」

無茶……

無茶？

……確かにしてるな。

「何やねん、アレお前んトコの学校の3年か。  
この時期に3年が暴れ回つとるって、お前の学校どうなつとんねん。  
高3にもなつて」  
進学・就職があるやる……。

直樹はここで、皆が黙っていることに気づいた。  
空気が悪い。

その中で、木村が直樹に返す。

「そんなんお前の学校の都合やんけ。3年になつても夕チ悪いヤツ  
は悪いねん。」

わー、どうしよう。俺、お前らとツレとるって知られたら狙われる  
やんけ！」

それを聞いた直樹は、思わず席を立った。

「おい待てエ、木村。何やねんソレ。お前は狙われたら…助けたる  
よ、俺が」

「エエ加減なこと言わんといてくれ。お前、ちやう学校やないか。  
とにかく俺は帰る。しばらく来おへんから」

そう言つと、木村は店から出て行ってしまった。

「……何やねん」

直樹はまた、ドカツと席に座り込む。

そして何となく周りを見回す。

と、いつもより人数が少ないような気がして、そして気づいた。

「なあおい、テツは？」

「今日はテツ、来てない」

皆は先ほどの空気を引き摺り、黙つたまま。

その中で一人、正彦が、

「テツはなあ、入院しとんねん」

「入院？何で？」

「ヤ、一昨日な、工業のヤツらにヤラれてな。全身バキバキで

よう、入院中や」

「どこの病院やねん」

「病院」

「ほんで、工業にやり返したんか？」

正彦はハハツと笑って答える。

「おいおい直樹、勘弁してくれよ。アソコに手エ出すヤツはおらんやろ。」

あんなモンお前、ヤザ予備軍が揃うとるんやぞ。

アイツらに手エ出したらアカンぞ、絶対。お前だって分かるとるやろ？」

「何やそら。ほんなら何かい、テツやられたままで黙っとけっちなーんかい」

再び、おいおいとでも言いたげな正彦の顔。

「まーまー直樹、落ち着け。7人相手にどうやってケンカしたんや。スゴイヤんけ。聞かせてくれや」

「ええ？どうやって……こうやって、こうやって……」

「イヤイヤ、動きはエエねん。どういう戦略で行ったんや。スゴイな」

「戦略って……」

今日はコイツのこのニヤケ顔が妙にイラつくな。

……何なんやコイツ。

俺の太鼓持ちか？

「なあ直樹、お前が強いのは分かったからよう。でもな、工業だけは……」

そこまで聞いたところで直樹は立ち上がり、正彦をドンツと突き飛ばした。

「何や、胸糞悪い。帰るわ」

直樹はそのまま、店を出る。

工業……アソコにはアイツはいねえ。

あんな偏差値の低い学校に、アイツがいるワケないからな。  
揉めても意味ないな……。  
もう時間がないっちゅーのに。

……エミコのところへ帰ろう。  
腹減ったし。

直樹は彼女の部屋へと足を向けた。

「おかえり」

彼女はそう言っただけで迎えてくれる。  
本当に本当に、嬉しいことなのだ。  
だけど、居た堪れなく思う。  
彼女が笑顔であればあるほど、辛くなる。

……俺は、この人を騙している。

この人は立派に自立しているのに、こんなクソガキに騙されている。

食事をしながら、直樹は彼女に合わせてニコニコしながら話を聞いている。

「ねえ直樹、アンタほんまに来月東京に帰るん？」

「うん、そういうことにはなってるね」

「直樹やったら、コッチで 大とか余裕なんちゃうん？コッチへ残りなよ」

俺なんか一人で生きて行けるわけがねえ。  
黙る直樹。

「ねえ、どうしてもアカンのん？エエやんか、この部屋で一緒に暮らしたら」

こういう話は初めてではないが、彼女はいつになく粘った。

直樹が黙ると、部屋にはスプーンが皿を叩く音しかなくなる。

これ以上この話を続けたら、キレてしまいそうや。そう考えている直樹に、エミコが口を開いた。

「直樹ねえ……私もう、2ヶ月生理来てへんのよ。これ妊娠やで」瞬間、直樹はピタリと手を止める。瞬きも忘れ、呼吸もしない。

そつと、彼女の顔を見た。

この間、間を作っではいけない。

……子ども？

俺にか？

間を作っちゃいけない。

彼女に失礼や。

俺に、子ども……？

……育てられるワケがない。

俺は手本を知らない。

きつと、お父さんのように……

アレはきつと間違いだ。

俺はきつと、間違う。

「……………」

「……………」

黙ったまま時間が経ってしまう。

少し笑顔のままの彼女を見つめながら、考える。



「……あ、あのね、あのな……えつと……」  
さっきした、イライラが忘れ去られた。

これって、俺にほんまの家族ができるってことか？  
それは……それは全然悪くない。  
俺だって頑張れば……

「あのね、」  
言い掛けたその時、エミコが直樹の思考に割って入った。

「とか言つて、冗談やんか、冗談！真顔にならんといてよ。間あ空  
いたら傷つくやん」

「……………」  
直樹は彼女の顔を見るのを止めた。  
そして俯く。

「……ほんまに、ほんまにただの冗談なん。子ども、おらへんのん」  
「おらへんよー」  
笑いながら続けるエミコ。

「高校生のお父さんじゃあマズイやん、今日び。こんなん言つたら、  
コツチへ残るかなあ思つてん」  
そこまで聞いて、直樹は立ち上がった。  
持っていたスプーンを思いっきり畳に投げつける。

それは勢い良く跳ね返り、テレビのブラウン管に当たって大きな音  
を立てた。

直樹は大きく息を吸い込み、  
「ワレエ、ナメとんか！！おいッ！！」

……疑ってしまった。

「冗談でもな！言つてエエのんと悪いのんがあるんちゃうんかいッ  
！！」

女性を殴りそうになった。

直樹は膝を付き、エミコの胸倉を掴んで前後に揺さぶりながら、「オイ！何とか言えや！！冗談やないぞ、ほんまに！そがいな冗談な！」

エミコは体を激しく揺さぶられながら、叫ぶ。

「ごめん！ごめん！ごめん！！」

しかし直樹には聞こえない。

「無責任にな、悪うない思ってもうたやないか！お前一体どういうつもり…ッ！！」

「……ッ！！」

そこで気づいた。

エミコが直樹に向けている、恐怖の目。

恐れ、慄き、怯えている目。

……冷静にはなれない。

だけでもう、ここには居られない。

俺は女性を殴りそうになった。

男だろうが、女だろうが……

……関係ある。

そのまま玄関に向かう直樹の後を、慌ててエミコが追ってくる。

「ごめん直樹！ほんまにごめん！悪い冗談やったね、ごめんね」

直樹は靴を履き、彼女を振り返った。

「……冗談やなかった方が、良かったかもしれん」

…高校なんか、辞めてしまってもいいと思った。

「エミコ、……イヤ、エミコさん。クソガキの俺を世話してくれてありがとう。」

俺、あともうちょっとでアンタのことを殴るとこやった。もうアン

夕の前にはおられへん。

ごめん。ありがとう。

……ごめん」

「……ッ」

直樹は静かに部屋を出て行く。

エミコももう、直樹を追いかけては来ない。

家に帰ればエエもんを。

俺は一体何やっとなねん。

次は、何探したらエエんや。

……どっかにあるやろう。

俺が行くトコくらい。

まだ7時にもなっていない。

アイツらのところには戻りにくい。

誤魔化したい。

誤魔化してしまいたい。

彼女の部屋、出て来なんたら良かった。

誤魔化したい……。

……そやな。

テツの見舞いに行こう。

直樹はタクシーを拾い、今の自分を誤魔化するため、テツが入院したという病院へ向かった。

途中、目に入ったケーキ屋で手土産を買って。

面会時間、間に合うよな。

受付で尋ねたテツの病室は、個室だった。  
ノックをして部屋に入る。

と同時に、直樹は目に入ってきたベッドの上のテツの姿に驚いた。  
全身包帯だらけ。

眠っているのかどうかもよく分からない。

直樹はベッドにそっと近づく。

すると、彼の方から声を掛けてきた。

「…アレ、秋月？」

「お、おう」

何とも小さい声。

口を開くのも辛そうだ。

「おいお前、コレどういうこっちゃ。えらい大袈裟なんちゃうん？」

「……………」

「あんな、来的时候にケーキ屋があったから買って来たんよ。イケるかコレ」

「……………」

「正彦から聞いたんやけどな、そんなに大袈裟に言うてへんかったんやけど…」

そこで言葉を切り、直樹はじっとテツの姿を見つめた。

沈黙が流れる。

彼はなかなか口を開かない。

やがて、

「……………あんなあ、死ぬ思うたわ。

頭蓋骨、アバラ、腕、足、……………9ヶ所骨折しとる。

車に轢かれたんか言われたわ」

「何でそこまでされなアカンねん」

「知るか、ンなこと！アイテテテッ！！」

「おい、無理すんなよ。喋らんでエエわ。俺、すぐ帰るし」  
「イヤ、ちよつと待てエ秋月。お前に言いたいことがある。」

工業のヤツらがな、お前の名前言うたってん。お前、アイツらに狙われてるんか」

工業に関しては身に覚えがない。

……ただ、俺が知らないだけかも。

返事ができない。

「秋月、その引き出し開けてくれるか」

そう言つて、テツは枕元にあるサイドテーブルに顔を向ける。

「おう」

直樹は立ち上がり、引き出しを開けてみた。

中にはゲームのソフトが入っている。

「お前、ソレやりたい言うとつたやろ？俺、お前にソレ貸したろう思つて……。」

ソレ、持って行きよつて、こんなことになった。

お前、俺らの知らんトコでムチャクチャしよんちゃうか？

何で俺がこんな、死ぬような目に遭わなアカンねん」

「いやテツ、ちよつと待つてくれ。俺は」

「せやから、もうエエつて！俺はあのグループ抜ける。もうこがいな目に遭うのはたくさんや」

テツは小さな、しかしはつきりとした声で続ける。

「そのカセットもな、早うお前に貸さなつて……弟がまだ遊びたいつちゅーのに無理やり持つて来たんや。」

お前怒らせたらアカン思つてな」

「おい！ちよつと待つてくれや。俺は別に」

しかし、テツは直樹の言い訳を最後まで聞こうとはしない。

「お前、変に怖いねん。我がのこと全然喋らへんし、暴れだしたら無茶するし。」

そのクセに、どエライ進学校行つとるし。得体が知れんのか。

みんな、そがいにして言つとるぞ」  
「……………」

何が何だか分からないうちに、そんなことになっていたのか。

……知らなかった。

ビビられていた。

いや、ビビらせていた。

何も喋っていないのに、ビビらせていた。

……何も喋らないのがいけないのか。

サイドテーブルに置かれた時計の秒針の音だけが、病室に響く。

沈黙の時間。

考えるには打って付けの、静かな時間。

……俺は、この場から消えるべきだろう。

直樹は片手にゲームソフトを握っていたが、それをまた引き出しに納めた。

……謝らへんぞ。

事実と違う。

「……………テツ、済まなんだな。俺のせいで。

顎イカレとつてもケーキくらい食べるやる。コレ、置いてくから

謝らへん。

「イヤ、いらん。持って帰ってくれ」

直樹はその言葉に八つ当たりをする。

「エエから食べエエや、これくらい！お前が食わんのやったら弟にや

れ!!」

そう吐き捨て、病室を出た。

落ち着かなければ。

そう思い、トイレに入って手を洗う。

何故手を洗っているのかは分からないけど…。

目の前の鏡で自分を覗き込む。

……俺はこんな顔しとっただけ?

メガネからコンタクトに変えとるからなあ。

確かに髪型は変わったな。

以前っていつや?

いつから変わった?

「……くそツ!!」

直樹はその鏡を思いっきり殴りつける。

何ヶ所か、這うようなヒビが入った。

「ハハツ……」

鏡……ガラス……たかが液体もどき風情を、ヒビ入るのが精一杯か。

弱い。

自覚せんと。

直樹は病院を出たが、どこに行ったらいいのか……

行くところ

行く場所がない。

しかし、家しかないな、とも思っている。

父のいないあの家は、何時だろうと、どのタイミングだろうと、行き来しやすいハズなのに。  
一人じゃ帰りにくい。

望めば望むほどに、同じ大きさかそれ以上のものが返って来ているような気がする。

ここまで俺は、俺のことが可愛いとは、知らなかったよ。

……退屈やなあ。

退屈？

皆に、それすら求めるなって言われそうやな。

最近とにかくイライラと、ムシヤクシヤとしやすくなった。  
これがまた、どこに向いているのやら。

直樹は顔を上げ、今から帰る場所を模索する。

……帰る場所はもう、一個しかねえだろ。  
そんなことは分かっている。

今日見たニヤケた顔。

引き攣った顔。

包帯だらけの顔。

あれらは全部、俺に向けられた顔……。

慶也を迎えに行ってみようか。

今のあの家の格差なら、俺は慶也にだって泣きついたって構わないだろう……。

考え事していると、もう時刻は8時前。



今日も慶也は塾のはず。

直樹は近くのバス停からバスに乗り込む。

今は自分のことで頭がいっぱいで、先日あの塾の前で繰り広げられていた光景を、思い出せずにいた。

やがて塾に程近いバス停で降りると、直樹は慶也の元へと歩いて向かう。

途中、見つけてしまった。

道端に座り込む、工業の生徒2人。

彼らは道路の端にしゃがみ込み、何やら楽しそうに談笑している。

その道はすれ違うには十分な幅がある。

しかし直樹はその2人の正面に立つと、

「スイマセン、お2人さん。通れんですわ。退けたってくださいませんかね」

直樹を見上げる 工業の2人。

「ハア？何やワレ」

「何やワレとちゃうねん。文句あるんやったらな、秋月直樹個人に言うて来てくれるか。」

今度は俺が、個人的にお前らを狙うとるんじゃ。その制服着とつたら無条件で襲うぞ」

まだまだ人通りの多い時間帯。

往来する人は皆、3人の半径2メートルを避けながら通って行く。

ちらちらと視線を送りながら。

「何じゃお前。先輩に言われとつてな。無碍にケンカは売らんのじゃ。アツチへ行け！」

それを聞いた直樹は2人を、肩を組むように抱きかかえた。

「お前らの意見なんか聞いてへん。ここには俺の自立がかかるとる。付き合えや」

直樹はその体勢のまま、2人を路地裏へと連れ込んだ。

全然本調子ではない。  
そこら中が痛いまま。

昨日も流したからだろう。

鼻を掠めただけなのに、とめどなく鼻血が流れ出す。

直樹は2人を相手にしながら、

大したことないやんけ

そう思う。

自分の拳が相手の顔面にめり込む。

この感覚。

もう慣れてしまった。

相手が知らないヤツなら……。

相手の腹にめり込む爪先。

……これは痛いんやねえ。

するのはエエが、されたくはない。

ごっつー痛いからな。

でも、慣れてしもうた。

正彦。

工業、全然大したことないぞ。

「アア　　ッ！！！！」

直樹は2人を相手にしながら叫んでみる。

こんなことに意味があるのか。

それは分からないが、ストレスみたいなのが散漫してくれば、  
そう考え、暴れるついでに叫んでみる。

やがて、その路地裏から先ほどの通りに出てきたのは直樹1人。

もう一回、念押しで言うといたぞ。

俺は秋月直樹や。

忘れやせんやろ。

これで今日は、遣り残したことはないような気がする。

### 急流 3

慶也の塾が見えてきた。

デパートの大時計を見上げると、もう9時を少し回っている。

塾の教室には明かりが点いているが、人の気配は感じられない。帰ってしまったか。

そう思いながら駐輪場の方へ顔を向けると、2人の人影。

直樹は慶也のことを聞いてみようと2人に近づき、暗がりの中話しかけた。

「あの〜、ちよつとごめんね。キミら何年生？」

その2人は女子。

ビックリしたように振り返る。

「え、3年生」

もう一人は、

「2年生」

2年生がいた。

慶也と同級生だ。

「あ、キミ2年生？慶也つて知ってる？彼、もう帰ったかな？」

それを聞いた彼女が返事をするまでには、少し間があった。

「……秋月くんの友達ですか？」

「え、う、うーん……そんなトコかな」

「あのね、」

言い掛けた彼女を、3年生の女子が

「ちよつと、止めときなよ」

そう言つて制する。

「イヤ、でもね、やっぱりアレはアカンよ。言つとかな」

その遣り取りを見て、直樹はようやく思い出した。

先日の光景

……

本当に、心底ハツとした。

俺は、俺がどんだけ可愛いんだ!?

「え、何!? 慶也に何かあった? 聞かせてくれる?」

尋ねた直樹に、彼女は一呼吸置いて話し出す。

「私、秋月くんはこの塾で同じクラスなんですけどね。

ちょっとイジメられてるっていうか……何か嫌事されてるっていうか……席が近くやから聞いてしまうってね。

鈴木くんっていうのが、秋月くんのお兄さんにカツアゲされたらしいんやわ」

「……………」

また、直樹の知らない、事実ではない出来事に翻弄されている者がいる……。

カツアゲなんか、したことがない。

膝に力が入らなくなる。

「それでね、イジメられてる感じなんですよ。

塾の先生に言おうかって思うてんけど、何か怖くて」

「それで? 慶也は? 今日もしジメられてた?!」

「今日なんか、終わったらすぐどこかへ連れてかれよった。ついさっきのことやけど」

「アイツは、慶也は学校でもイジメられてるの?」

「私、秋月くんとは学校が違うから。でもイジメなんかどんどんエスカレート……」

その時、離れたところから、

ガシャ                      ンッ!!

自転車が倒れたような音がした。

直樹はバツと振り返る。  
そちらから、人の気配。

「ありがとう！もう十分やわ。ありがとうね！」

直後、直樹は走り出す。

音のした方向へ、全力で走り出す。

まさか

まさか

俺が原因でアイツがイジメられているとは、万に一つも思わなかった！

路地裏を一つひとつ覗いて行く直樹。

走り続ける。

今日は一体、何て日なんやろう。

これまでもいるんなことがあったけど、こんな1日は見たことがない。

走りながら何ヶ所もの路地裏を覗き込む。

何度目かの行為のあと、漸く直樹は見つけた。

奥の方で慶也の声がする。

「取り消せって言ってるだろ！！兄さんがそんなことするハズないんや！！それは絶対絶対、間違ってる！！！」

「うるさいッ！変な大阪弁使いやがって！大体が気に食わんのじゃ、お前なこと！！！」

何のものとも分からない物音が聞こえてくる。

とにかく、慌てた。

直樹は路地裏に駆け込んで行く。  
走りながら確認した。  
ヤラれているのは間違いない、慶也！

直樹は今出る一番大きな声で、

「おいゴラ　　ッ！！何しとんじゃッ！！！」

こちらに向かって走ってくる直樹に気づいたそのグループ、何人かは慌てて自転車に跨り大慌てで逃げて行く。

全員を逃がすわけには行かない。

直樹は自転車に乗り遅れた一人の首を引っ掴み、そのまま壁に押し付け、叫んだ。

「俺が、その噂のコイツの兄貴や！俺にゼニ奪られたって！？アアッ！！？」

直樹に掴まれたその彼は、今にも泣きそうな顔でジタバタしている。  
「俺とちやう！俺とちやう！！福井くんが、福井くんが　　ッ

！！！」

必死で仲間を売る彼。

「何や、フクイクくんが俺から金、巻き上げられたんか」

彼は涙をポロポロと流しながら、懸命に頷く。

「そーか。ほんならたった今から、お前がフクイクんや」

「……ッ！！！」

彼は大きく口を開け、声も出ない。

「コイツが食ろうた分、そっくりそのままお前に返させてもらうので一括がエエか、分割がエエか、ドッチや！？」

その直樹の迫力に、慶也もしばらくただ呆然と見つめたまま。

しかし、そこでまず動いたのは彼、慶也だった。

「ダメだ兄さん！！それは絶対にアカン！！それじゃ意味がない！

「ハアッ!? お前、何言うтонねん! イジメなんてのはな! どっかで打破せんと永遠に消えんのじゃッ!!」  
原因が俺やつちゅーんやつたら、黙つとれるワケないやろ!!」  
「だから兄さん! ここで打破しようとしてるんやんか、僕! 殴られて殴つてってしてたら、終わらへんやろ!!」  
「…ッ」

直樹は慶也の言葉を聞き、力んだ腕を下ろした。  
それから、彼を掴んでいた手を離す。  
彼は大慌てで自転車に乗り、一目散に逃げて行く。

…慶也の言葉に、消化される思いがした。

「…慶也、俺のせいでごめんな」  
「イヤ、何言つてんだよ。これは僕の問題だよ。謝るなんておかしいよ。」  
「…って、兄さん! 何や、その顔! まさか兄さんまでイジメられてるんぢやうやろな!？」  
「…そんなワケないか」  
「いつもながら、ハキハキと物を言う。  
こんな状況で。」

…慶也。

「せやけどな、お前。俺のせいだ」  
「だから、兄さんのせいじゃないって。」  
「…うーん、でも今回のコレはドツチに転ぶかなあ? これで僕は小突かれなくて済むのか。」  
でも恐怖政治でそうなっても、意味がないんだよな。うーん……



見られちゃったからさ、言うけど、実はね、もう随分前から続いとんねん」

あっけらかんと、淡々とそう言う慶也。

「全く、兄さんがカツアゲなんかするワケないやんか。ねえ！全く、どんな言いがかりやねん！」

……自分を、試したくなかった。

「お前、そんなん言うてるけど、俺ほんまにカツアゲやってるかもしらんで？」

この状況で俯いているのは、直樹の方。

その直樹の言葉に、慶也はすぐさま返事をする。

「ハハッ！やるワケないやん！それに兄さんが自分のこと、か  
もよゝ？なんて言うハズないやん」

「……………」

2人は路地裏から出て、歩きながら話を続けた。

「僕ら、もうすぐこの街引っ越すやんか。それまでにね、ちゃんと誤解いときたかつたんや、実は。

兄さんだって、自分の知らんところで自分がいろいろ言われてる思うたら嫌やろ？」

言われたまんまにしてるのは僕だからさ。何とか説得しようとしてたんだよ」

コイツの方が随分と大人だ。

コイツの言っていることに、間違いなく裏はない。

何となく、何となくだが、ゆっくり話そうと思った。

示し合わせたわけではないが、バスにも乗らず、2人は歩きながら話をする。

「まあ、火のないところで煙は立たないって言うけど、兄さんがそんな格好してるからって、人のお金を巻き上げるなんて絶対せえへんわ。」

誤解誤解！絶対誤解！

ごめんね兄さん。言われるばかりで。僕に力がないから」

……謝るなよ。

どンドン、自分が虫けらに思えてくる。

今まで、慶也ともこんな時間は持ったことがなかった。

そして、このタイムミングしかない。

そう思った直樹。

自分の出生や、これまでの成長の経緯をここで慶也に話して聞かせた。

自分が拾われた子であること。

3歳まで施設で育ち、お父さんとお母さんに救い上げてもらったこと。

慶也と血の繋がらないこと。

それらを含めて、はっきりとした口調で話をした。

腹を決めて話したつもりでいた。

しかし、慶也の答えは直樹の思うところではなく、実に……。

慶也は言った。「そんなの知ってたよ」と。

そこには何の負もなかった。

「小学校の6年のときに、お父さんから全部聞いたよ。」

僕ねえ、頑張らなアカンって思ったんや。その話聞くまで、全然自覚がなかった。

面倒なこと、辛いことって、全部兄さんトコ行っとなんやね。

どんだけ我慢したんやろって、思ったわ。

僕も頑張らなつて、本気で思ったから、だから野球も止めれた。塾へも通えた。

お父さんって、あんな人やか。だから、今はこんな感じなんよ。だったらこうしよう思ったんが、まず僕が頑張るやる？ほんで僕がお父さんの会社の人間になつて、ほんで兄さんを呼び寄せるんよ。そらあ僕だつて頑張るけど、これまで積み上げてきたものが違うからね。兄さんの方が優秀なんやわ。

だから兄さんがね、トップに立つて、僕が兄さんの手助けをするんや。

絶対この方がエエと思うんや」

……説き伏せられている感じがした。

名案かどうか、そんなのは分からない。

だけど、これが本当の慶也の考えなんだろう。

言いたいことはあつたけれど、まずは認めようと思う。

「多分ね、兄さんが警察沙汰になつたヤツあつたやん。アレをお父さんがいまだに怒ってるんやわ。

そのうち誤解は解けるよ。

兄さんがやらなアカン、僕がやらなアカンっていうんじゃない、

2人でやつたらエエやん。

1回も間違えへん人なんか、おらへんやん。

2人でな、もつともつと力付けて、お父さん説き伏せようよ。ちやんと説得しよ。

ほんでそんな時にね、2人でお父さんのこと、許してあげようや」

この岐路の最中、慶也ばかりが喋っているような気がした。

慶也の声を辿りながら、直樹は考える。

俺がもし慶也と逆の立場なら『2人で許してあげようや』なんて言えるか？

俺だったらこう言っつ。

『お父さんを許してあげてね』って。

慶也は続ける。

「兄さんと僕が血が繋がっていろいろがいますが、そんなの関係ねえよ。」

だつてさ、僕の生まれる前の話だろ？僕は知らんもん。  
生まれたときからお父さんとお母さんと一緒に、兄さんもおつたもん。

僕の兄さんは、兄さんやるー。何回聞かれても、他に答えなんか持ち合わせてないで」

その言葉にも裏はないと信じられた。

……俺は、お前を疑うばかりだったのに。

「まあ兄さん、今そんな格好してるからね。いろんなトコで誤解されるんかもしれないね」

慶也は笑いながら、そう付け足した。

今日起こつたこと。

俺が良かれとも思わず、ただやってきたことは、一周して俺に返ってきただけなんだ。

久しぶりのこの感覚。

ちゃんと謝ろう。

素行を見直そう。

慶也は『あと約2ヶ月を我慢しよう』ではなく『あと2ヶ月でどうすればいいか』と考えていたんだ。

軽々しく言っわけではないが、俺は慶也を尊敬する。

ねっとりとした俺のこの陰湿な感覚は拭い去ることはできないが、真似ならできる。そう思う。

2人の会話は途中から笑い話へと姿を変える。夜道を並んで談笑しながら。

2人が向かうのは、同じ家だ。

甘い考えだとも思っているが、一つ一つ謝って回ろうか。

慶也の言葉、リアクションで随分楽になった。

俺は恐らく、多分、他の人たちと家族に求めるものが違うのだろう。慶也は「そんなの関係ねえよ」と言ったが、アレはあくまで慶也の意見であって、俺にはちゃんと関係あることなんや。

だけど、楽になった。

助かったよ。

小者で貧弱な俺は相変わらずコソコソするだろうが、それはそれでアリなような気がしてきたんだ。

次の朝、直樹はまずエミコのマンションへ行ってみた。

昨日の自分の態度を、謝るだけ謝ろう。

そう思いながら。

まずそんな確率はないが、また仲良くできれば…。

そんな曖昧な希望を思う。

学校には遅刻でも構わない。

彼女の部屋は、外からでも分かるほど静かだった。

ピンポン

……無反応。

仕事は11時からなので、まだ寝ているのかもしれない。そう思った直樹はポケットの中にあつた合鍵を差し込む。

これって、今の俺がやるともう犯罪になるんかなあ。

一瞬そんな考えが頭を過ぎるが、もう開けてしまったものはしょうがない。

謝りたいという衝動でソワソワしている自分を、早く押さえつけてしまいたいのだ。

ドアを開け、

「入りますよー」

と声を掛ける。

リビングに敷かれた布団は盛り上がっている。

予想通り彼女はまだ寝ていた。

直樹はしばらくその場に立ち尽くし、起きてこないかなと期待する。

昨日起こった、あの出来事。

あの、間。

あの、俺の出来の悪さ。

それらを考えると、今日話さないともう話す機会はないだろう。

だからといって、部屋に不法侵入した拳句、彼女を叩き起こすわけにはいかない。

また沸々と彼女に対する思いなど、どれだけ自分が悪者だったかを思い出す。

彼女はなかなか起きて来ない。

直樹は合鍵を返して帰ることにした。

そーっと布団の傍を忍び足で歩き、テーブルの上にキーを置く。  
その時、いきなり布団がガバツと捲り上がった。

ヤベエ！起こした！

何て言おう。

振り返る直樹。

そして、更に驚いた。

布団を捲り上げ、起き上がったのはエミコではなく、男。

「何じゃー！お前！？おいコラアツ！」

その声に、エミコも目を覚ます。

直樹がじっと見つめるのは、彼女の方だけ。

…道理で、布団の盛り上がり方が大きいと思った。

起きぬけに何が起こったのか分からないような顔をしている、彼女。  
立ち上がり、直樹の胸倉を掴みながら突っかかってくる、男。  
これはこれで、ベストな状況な気がした。

直樹は男に向き直り、自分の胸元を掴んだ彼の顔をじっと見つめる。  
その彼が喚いている言葉は聞いていない。

胸倉を引き寄せられた状態のまま、直樹は首を仰け反らせ、

「ちよつどエエと思うとるよ。良かった」

そう言つて、自分の頭を大きく振り下ろした。

メキッ！ともいうような音を立て、直樹の額は彼の顔面にめり込む。

「いつまで掴んどんじや、このボンクラ！！ワレには文句あるんじや！」

ま、この一発で気張つたるけどな」

そう吐き捨てる。

もうエミコの脅えた顔は見たくはない。

直樹は彼女を見ないようにしながら言った。

「合鍵、ここに置いてるから。ありがとう」  
そして粘ることなく、部屋を出る。

「…………イタタタツッ！」

その声と、ジタバタしている物音が耳に入ってくるが、エミコの声は一つも聞かなかった。

直樹は部屋を出て、今度は学校へと向かう。

…………しもた。

お礼は言うたけど、謝罪はせなんだ。

でももう二度と会わないから、エエか。

そう思い、

彼女はもう、二度と会ってはくれないのだから。  
そう結論付ける。

この日の学校での直樹は、妙に明るい。

菅井には「一応、一応な」と言いながら、例の 高の相手の名を  
聞き出した。

これはあくまで、一応。

菅井には迷惑を掛けられないから……。

この24時間は、人生の中で稀に見るものだった。  
いろいろありすぎた。

昼休み、いつものように直樹は屋上で昼食を済ませ、教室に戻った。  
教室に入ると、直樹の机の前に見知らぬ2人が立っている。



その2人の姿を見て、また心臓の走る鼓動音を味わい、少し脅えてしまう。

彼らの頭や腕には、包帯が巻かれていた。

いくら何でも、また更に…？

そう思いながら、直樹は自分の席に着く。

2人の視線は直樹の姿を外さない。

……やっぱり、俺に用事か。

「なあ、秋月ってキミやる？」

「え？…あー、ああ。ちゅーか、お前ら誰や？」

直樹は相変わらず、自分と話をする者以外の顔は覚えていない。

「俺らは3年の浜田と下村っていうもんやけど」

「先輩が何の用事やねん。ここ、2年のクラスやで」  
無然としながらそう答える。

……できれば、カツアゲされた金を取り返してきてくれ。  
と、言ってくれ。

「今朝なあ、秋月直樹って知ってるか言われて、知らん言ったらドツキ回された。」

俺ら2人の財布まで奪られてしもつたわ」

たくさんクラスのメイトがいる中、教室の空気がピーンと張り詰める。

「……どこの学校の生徒でした？」

「えっとー…あれは、工業やる。なあ？」

「そうや、工業や」

もう一人が大きめの声で直樹にそう言う。

「昨夜ウチの学校のモンが秋月直樹に襲われた、正直に言うて差し

出せ言われたぞ。

キミは一体、この学校に通いながら何をやってるんや？何で俺らがこんな目に遭わなアカンねん。

僕らはもうじき受験なんやぞ。キミとは違うんや。巻き込まんといてくれるか」

その先輩がそこまで言うと、クラスの誰かが声を上げた。

「ウツソやるー！俺らも襲われるんちゃうん!？」

それは直樹にも聞こえてくる。

また聞いた、この言葉。

……何で俺がこんな目に遭わなアカンねん。

言葉はなくとも、付随するもの。

……お前のせいだ。

直樹はガタツと音を立てながら席を立つ。

ビクツと驚く2人。

「先輩、どうもすみませんでした。僕のせいだ。

何とかしますんで、どうかアイツらに見つからんように家へ帰ってください。本当にすみません」

そう言つて、直樹は頭を下げる。

いったん身構えた2人だが、少しホツとしたような顔をして、

「イ、イヤ、そんな風に謝られたら何とも言えんのやけど。」

まあ、お金も2人合わせて8千円やったから、それくらいやったら別にエエんやけど」

そんな風に、直樹の詫びに返事をする。

しかし直樹は途中から聞いていない。

俺はもう、学校辞めて、ちゃんと働いて……

アイツらに話しても、工業には一緒に行ってくれへんわな。

……何とかせなアカンな。

墓穴を掘るって言うんか。

昨日今日で一体どがいになつとるんや。

俺の良き運は、もう燃え尽きたんかもしれん。

……何とかせなアカンな……。

直樹はずっとそんなことを考えながら、この日の授業を全て受け終えた。

アホになろうと思っていたが、こんなアホでマヌケになろうとは……。

あの時、人に迷惑掛けるかなあって考えてみただろう。

こんなのは安易に予想できたハズや。

マヌケが付いたらアカンやろ。

許してもらえないハズがないと思うけど、俺1人の中に閉じ込めておくにはあまりにも大きすぎる。

家に帰ろうと、とぼとぼと校庭を歩いている直樹。

溜息を吐いて校門を出たところで、呼び止められた。

「おい、秋月」

ギクツとして振り返る。

そこには正彦と、グループの一人である新田の2人が立っていた。

正彦は直樹に駆け寄り、肩を組む。

「昨日あんな感じやったからよう、迎えに来てん」

「……………」

正直なところ、かなり嬉しかった。

工業に狙われているなんていう事実、恐れることはない。

新田が言う。

「茶店行って、ゆつくりするか」  
そう言ってもらえるこの状況で、やはり怖いのはコイツらに迷惑を掛けること。

……やはり相談はできない。  
一人でやらないと。  
狙われるのは俺一人で十分やろう。

「…せやな。昨日、何か悪かったな。  
ハハッ！ちよつとイラついたってん。厚かましいこととしてしもうたわ」

3人は並んで歩き出す。

コイツらは皆、腕力を競い合いたくて、揉めてナンボだということ  
で集まった連中だと思っていた。  
だけど違っていたんや。

いつの間にか俺が核になり、恐怖政治で慄かせ、無言の号令を掛けていた。

…テツの言葉は身に沁みだ。

「せやけど、まあアレや。ちよつと柔らかい感じだよ、俺も行くことにするから」

「は？何やソレ」

別に、通じなくても良かった。  
自分の中で理解をしておけば。

3人で並んで歩く。

この時ばかりは本当に、とてもとても嬉しかったのだ。

いつもの喫茶店に近づくと、店の前にいつものメンバーが並んでい  
るのが目に入ってきた。

「アレ？ 何やアレ。何で皆、外におるん？」

直樹が尋ねると、正彦が答える。

「あー、まあ……。まあエエやないか。皆、お前待ったんよ」

「あ、そう」

いつもと違う雰囲気、出迎えられるように、招き入れられるように店の中に入る直樹。

いつもの席に座る。

皆も同じように店に入って来るが、何故か座ろうとしない。

「アレ、どうしたん？座らへんのん」

「……………」

返事も何もなく、皆が顔を見合わせるような仕草をする。

何が何やら、さっぱり分からない。

皆の様子がおかしいと思いだした頃、店のドアがキイツと音を立てて開き、ゾロゾロと人が入ってきた。

彼らの制服に目を遣ると、

……………工業。

「……………」

「ハハッ！お前か、秋月言うんは。

売った売った！ちよつと脅したつたら、すぐに皆でお前を売りよつたわい、このボンクラら！」

そう言った 工業の1人は、新田の髪の毛を掴み、クイツと引き寄せる。

「ビビリが揃うてイチビツとっても、どがいにもならんわな！

秋月、お前昨夜、ウチの1年ヤツてくれたらしいのう」

直樹はそこで、ようやく状況を掴んだ。

スツと立ち上がる。

いつものように冷静ではいられなかった。

コイツらが、一体何人いるのか分からない。

「……オイ、お前か。テツやツてくれたんは。ウチの学校のモンから今朝、金巻き上げたんもお前か」

「テツう？誰やソレ。金巻き上げた？知らんな。

それより何より、誰が喋ってエエ言ったんや？

黙ってついて来るか、ここで半殺しにされて簀巻きにされて連れて行かれるか、どうするんや」

直樹は正彦の顔を見てみる。

正彦はサッと目を逸らす。

多勢に無勢と言っけれど、一体何対何なんや。

お前らは一体ドツチ側なんや。

「フハツ！」

直樹は噴出してしまう。

直後、すかさず判断した。

逃げる！

直樹は振り返り、いつもの直樹の席の後ろにある窓の鍵を開ける。

それと同時に、そこから飛び出した！

一連のその動作が何秒間のことだったのか、その行動は素早かった。

窓から地面までは結構高さがあったが、躊躇はない。

飛び降りた瞬間、先日から痛む足首に響いたが、一切迷わない。

直樹はカバンも店に置いたまま、全速力で走り出す。

一体何人で来たのやら。

後ろを振り返ると、大勢の人間が追いかけてきた。

…その中に、正彦もいたような気がした。

前を向き直すと、前方にも 工業の生徒が。

完全包囲、いうヤツか。  
こんだけやってくれたら、悲しゅうもないで。

直樹はそのまま全速力で、前方の集団に突っ込んで行く。

ザッ！！

倒れこむ　工業の連中の中、直樹も転んでしまっ  
が、すぐに起き上がり、走り出す。

直樹は逃げるのを止めない。

細い入り組んだ路地裏を、ああだこうだと考えず、  
倒してしまった自転車に見向きもせず、

ぶつかったおばさんに詫びもせず、  
一心不乱に逃げてみる。

「ハー、ハー、ハー…ッ！」

やがて抜け出した場所は、直樹の来たことのない場所。

車1台分が通れるほどの土手。  
広がる河川敷。

直樹は息を切らしながら土手の斜面に座り込み、ここまで来れば安  
心だろうと高を括る。

「こっちは、ほぼ毎日、走り込んで、鍛えとんねん！ナメんなよ！」  
ハア

……ハア

ハア

……ハア

独り言を言ってしまう、このテンション。  
いっぱいいっぱいまで、振り返っている。  
これ以上力を入れると、軸より先が折れてしまいそうだ……。

やっぱり走らうっていうのはいい。  
何も考えんで済む。

しばらくして、直樹は草むらから立ち上がった。  
タクシーを拾って帰ろうと、辺りを見回してみる。  
遠くに鉄橋が見える。

国道だ。

直樹はまた、走り出す。

迷うことなんか、一つもない。  
もう俺が帰るところは、家しかない。  
走りながら、後ろから車が近づいてくることに気づき、直樹はスピードを落としながら少し左に寄った。

タクシーかな。

そう思って振り返ってみた。

違う。

白い車。

直樹は向き直り、国道を目指す。  
と、

次の瞬間

ドンッ……!!



鉄橋が、逆さまに見えた。

スロウ。

舞い上がる。

顔面が地面に辿り着くまで、少し時間がかかったような気がした。

ダンッ！！

直樹は咄嗟に手をつく。

受身を取ることもできない。

体は土手の斜面に思いつきり打ち付けられ、ズルズルと下へ下へと滑り落ちて行く。

顔に草が擦り付く。

青臭い匂い。

摩擦が止まると、目の前に靴。

折れ曲がった？足？

しかしそれは、靴のみ。

拾おうと、腕を伸ばそうとするが、体は思うように動かない。

何とか、どうにか体勢をひっくり返す。

土手に視線を上げると、車から降りてくるのは 工業の生徒。

……また、笑ってしまった。

コイツら、マジか。

車で轢きやがった。

「……ハハハッ！」

…もう、行かれん。

これまで一度だけ、足の骨を折ったことがあるが、どういふ感覚だったかは覚えていない。

この痛みは骨が折れてしまっているのか。

よく分からない。

体の痛みと反比例して、妙に頭ははっきりしとるもんやな。

工業の生徒が3人、直樹を見下ろしていた。

「逃げられるワケないやろ。目エ開いとるな。死んでへんな」

頭だけは、妙にはっきりしている。

落ちたところが柔らかくて、それが幸いしたのか、それとも不幸なのか。

俺はこの後、どうなる？

3人が直樹を抱え上げた。

体に力が入らない直樹はされるがまま。

そのまま直樹はトランクに押し込まれ、間もなく車は走り出す。

真っ暗な中、直樹は呼吸を整えることに集中し始めた。

急流 4 (前書き)

暴力描写があります。

## 急流 4

車は走り続ける。

とにかく、お尻辺りと左足首が痛い。

直樹は車に揺られながら思考を巡らす。

さっき見た、逆さまの鉄橋。

その向こうの夕日。

車に轢かれにやららんほどのことを、しでかしたか。

……やっぱりな。

つべこべ考えずに、やることをやれ。

そう考えた。

そのやることは、間違っているだろう。

そう、大体の予想は付けていた。

何もしないのは、俺がやってないだけだと、俺にはできないと、そう決定付けていたまで。

アホになるのも難しい。

天井が分からへんわ。

真っ暗な中、随分と時間が経ったような気がした。

何も見えないので、今が何時なのかも分からない。

トランクの中ってのは随分揺れるんだな…。

そんな感想。

これから自分がどんな目に遭うのか。

俺は完全に攫われたんだ。  
命を落とすかもしれないし、落とさないかもしれない。

直樹はトランクに寝そべった状態で、手を開いては閉じ、開いては閉じを繰り返す。

肩も動かしてみろ。

間違いなく、両方とも動く。

右ひざを曲げるようにして上げてみる。

これも間違いなく動く。

3本の手足、これだけあれば十分だろう。

メチャクチャ痛いので、頭に来た。

トランクが開くと同時に……

我ながら恐れ入るのは、こんな状態の中、俺が、俺に対する、俺の生への執着や。

俺はどこかで、死ぬなんてことは無縁と考えている。

死への思想がない俺は、生への執着が人一倍なんだろう。

いくら枯れてしまっても、こればかりは変わらないと見た。

だから、決めた。

トランクが開いたら飛び出して、そこにいるヤツを手当たり次第潰してやる。

そして逃げてやる。

俺は生きていて、

死にたくないんだ。

長い間走っていた車は、やがて止まった。

ブレーキの勢いで、トランクの中を転げまわった直樹、何かの角で頭をぶつけた。

…イラツとする。

バタンツ！

ドアを閉める音。

外で話し声が聞こえてきた。

声の種類を聞く限り、…4人はいる。

この間は7人相手に、結構余裕やったからなあ。

左足とケツの痛みを引いてみて、

…上等じゃ！！

カチャツと音がして、トランクが開く。

直樹はそれと同時に、外へ飛び出した！

「…ツ！？」

しかし、自分の取った行動は、想像したものとはあまりにも違うもの。

飛び出すつもりが、巻くれ落ちる。

「何じゃコイツ！！」

連中の声も無視し、直樹は自分の左足を見てみた。

道理で痛いワケや。

立たれんやんけ。

直樹の足首は内側に90度以下に曲がり込み、くるぶしが2つつあるような形になっている。

車に手を置き、一人で立ち上がる直樹。

周りを見回してみた。

どうやらここは街からかなり外れた、野球のグラウンド。

かなり広い敷地だ。

辺りは暗い。

小さな建物…トイレなのか、その街灯に照らされた人数を数えると、相手は全部で8人。

人数と力を確認しながら、この期に及んで考える。

……予想より大分多いな。

でも、行ける！

連中の中の一人が喋り始めた。

「逃げるからアカンのやぞ。お前、しかし丈夫にできとるな。足折れとるだけかいな」

その言葉に、直樹が答える。

「こりゃあケツも折れとるで。見てくれるか」

余裕を見せるが、満身創痍。

ただ自分の中で幸いだと思っているのは、恐怖心がないこと。

「ウチのボスがなあ、今から来るんじゃ。その足じゃ逃げられへんやろうが、一応縛らせてもらうで」

「アホか。どんな趣味しとんねん。言うこと聞いて縛られる思うか。

それ以上近づいてみい、潰すからな」

車に手をつけて、やっと立っている。

そんなヤツが言うセリフではないと、自分でも感心している。

……この後、自分はどうなるんだろうか。

直樹の目の前で、相手は車からロープを出して近づいてきた。

恐怖心はない。

だけど、余裕もない。

直樹は右拳をギュツと握り締め、大きな右ストレートを繰り出す。

彼はそのパンチを余裕でひよいと避けた。

勢い余った直樹の体は、そのまま地面に倒れこむ。

しかしすぐに立ち上がり、次の攻撃。

前を出す拳。

避ける彼。

左足が痛いのに、慣れてきた。

そう、自分に言い聞かせる。

直樹は左足を地面に着き、ファイティングポーズを取る。

8人いるうちの何人かが、それを見て身構えた。

そんな彼らを、ロープを持った彼が制する。

「お前、そんな状態でまだ粘ろうつちゅーんか。エエやる、俺が大  
人しゅうさせたる」

その言葉に、外野の何人かが反応した。

「オイ！何でや！フクロにしたつたらエエやないか！！」

「アホウ！無傷で連れて来い言われとるんやぞ！？」

大人しゅうせんから車で引つ掛けたつたが、これ以上ケガさせたら  
何言われるか分からへん！

まあ、せやけどコイツはコイツで言いたいことあるみたいやからな。

コッチは聞く耳ないし、大人しゅうさせなアカンやる」

言い終えると、彼はすごい勢いで直樹に突っ込んできた。

それほど速いとは思わなかったが、そのパンチはガチンツ！という  
音とともに直樹の顎を捉える。

かわせなかった。

すかさず、逆からも。

…気が付けば、直樹は尻餅をついていた。

たった2発。

たったそれだけで、もう立てない。

「くそツ！！」

広いグラウンドに、直樹の声が響き渡る。

あつと言つ間に後ろ手に縛られ、髪の毛を押さえつけられるように  
地面に座らされてしまつ。



「ウチのモンに手エ出したらどうなるか、知つといってもらわなアカ  
ンからな」

直樹に掛けられた言葉は、これが最後だった。

何かを考える余力はない。

そんな直樹の周りで、連中たちは談笑を始めた。

……随分待たされる。

何で待つてもないヤツを、こんなに待たされなきゃいけねんだ。

直樹は自分の左足を見つめながら、ただただ時間が流れるその空間  
を過ごしている。

やがて、遠くの方から車のライトが近づいてくるのが見えた。

全員が一斉に黙る。

直樹も顔を上げる。

やって来たのは2台の車。

中からは4人の影と、

「おい、いつまで寝とんねん。着いたぞ、起きろや」

そんな声が聞こえてきた。

「何で俺がこんなトコまで来なアカンねん！ほんま、今日は見たい  
テレビがあつたんやぞ！

何回も言うてるやないか！1年がどうこうとか、俺は知らん！」

「何言うとんねん！いつまでグズツとんじゃ！ナメられたら終わり  
やで、健！

バチツと締めとかんとナメられるんじゃ！」

…また更に4人がこちらに近づいてくる。

「まったくよう！面倒クサイなあ！お前から勝手にやっつけや！」

そう言つて、頭をグシャグシャと掻き毟りながら近づいてくる4人のうちの1人に、直樹は目を奪われた。

「……………」

頭を振つて、自分を押さえつける手を払いのける。

目を見開き、視線を外さないまま。

後ろ手に縛られた状態で、立ち上がった。

そこにいたのは、間違いなく……

やっとか。

会わせる顔がないから、こんな手段で通してきた。まさか、こんなタイミングとは。

「……………は！」

なあ、何と呼べばいい……………？

ニヤケそうになる。

それをグッと堪えながら、

恫喝するように、

全身の力を込め、

叫ぶ！

「お・おおばやしィィィィ

ッ！……」

その声に、彼はフツと顔を上げ、足を止めた。  
一瞬、ニツと笑ったように見えた。  
しかしその口は、すぐに真一文字に閉じられる。

後の3人は目に入らない。  
後の8人も気にならない。

彼は隣に立つ仲間に問うた。

「アイツか」

「おう、みたいやな。俺もよう知らんねん」  
更に近づいてくる彼。

随分と、背が伸びたな。

……パクウ。

「まあ何や、こんなに大勢でみつともない」  
連中は誰も口を開かない。

直樹が喉元で感じているのは、逸る鼓動。  
押し出した声は、ともすれば震えそうだった。

「……おい大林。俺はな、このまま将来は無頼漢になるか思いつつたで」

「無頼漢？ハハツ！お前、高校生の段階で何言つとんねん」  
やっぱりコイツは少し違う。

こんなことを言っても、そんな風に返ってくる。  
いい感じのレベル。

が、……とりあえず、今しなきゃいけないこと。

「おいお前ら、コイツにこんなことして、知らんぞー？」  
そうパクが喋り始めた。

「何て聞いているか知らんが、コイツの名前はな、狂国狂心丸。狂った国の狂った心の丸や」

パクの隣で、誰かが口を挟んだ。

「何や健、知り合いか!？」

「知り合いも何もお前、俺は中学のとき、1回コイツに殺されとる。まあ俺の場合、その後すぐに雷に打たれて生き返ったんやけどな。コイツはな、磔拷問受けとる母親から産み落とされたんや」  
パクのその演説を、黙って聞いている連中たち。

「コイツはアレやぞー？あのアンドレ・ザ・ジャイアントに『おい、スプライト買って来い』言うて、使いつ走りに使うようなヤツや。そんな時200円渡して『お前も好きなん買ったらエエ』言うてやんねん。」

ほしたらあのアンドレが『えー!?ほんまにエエん!?』言いながら、ちゃんとスプライト買って来やがる。

そんな男や。

おいコラ、早うそのロープ解かんかい。殺されるぞー？  
その声に、それまで直樹を押さえつけていた連中が、慌てて後ろ手のロープを解きだす。

……とりあえず、済ましとかなきゃいけないこと。

直樹の声はいつもより大きい。

「おいコラ!!今回のコレは、全部お前の命令か!?!」  
パクの反応を待つ。

彼はしばらく黙り、やがて、

「おう、そやな。まあそんなところや。」

アンドレの兄貴分をとっ捕まえるんやからな。人数は要るやろ」

嘔吐けッ！！

さつきゴネよつたやないか！

今度は直樹の方から、足を引き摺りながらパクに歩み寄った。

「ほんならお前は知つとるんやな！？こん中に、俺の先輩の金を巻き上げたヤツがおるんや！

そのカツアゲもお前の命令か、大林！！」

瞬間、パクの顔がクツと締まったように見えた。

パクが連中に向かって言う。

「おい、ツツちゃん！」

塊の中の一人がパクに近づいた。

「今回の話、ツツちゃんから出とるんよな？」

そう言つて、パクは彼に向かって手を差し出した。

「奪つた分、全部ここへ出しや」

パクは、直樹を疑わない。

「お、おい！ちょっと待つてくれや健くん！ゼニなんか奪つてへんつて！

何やねん、こんなヤツの言うこと信用するんか！？」

そこまで言い終えた彼に、パクは近づいた。

無言のまま。

そしてイキナリ、彼の腹部に膝蹴りを

ボクッ！！

すかさず背中に、肘打ち！

ドカッ！

もう一度膝蹴りを、

ドゴッ！！

「ウゲエッ！ウヘッ！ゲエエッ！！」

彼はその場に嘔吐して、倒れ込む。

無言のままの、パク。

そのまま直樹に向き直った。

「ほら、今度はお前や。ウチの1年ヤツてくれたそうじゃないか。どがいにすんねん」

「……………」

その状況を見ながら、直樹は思う、  
……………何も、考えられな  
い。

とにかく、長かった。

直樹はそして、テツのことを思い出す。  
詫びるわけにはいかない。

「それがどうしたんだ！？アアツ！？」

そう叫び、パクに詰め寄った。

パクもこちらへ詰め寄ってくる。

2人は額を引っ付け合いながら、押し合う。

「おい、随分背エ伸びたんちゃうか？」

パクはあの頃から、見た目が変わっていない。

背が伸びて、

…ん？少し後ろ髪が長くなったのか。

相変わらずの金髪のオールバック。

直樹は自分の額でパクの額を押さえつけながら、

「まあ背エ伸びた言うても、俺には勝たれへんけどな！」  
それを押し返しながら、パクが言う。

「おおい、虎の皮被つとるキリンに身長で勝つたらアカンやる！」

別に、せえの！とは言っていない。

パクが喋り終わったのを合図に、お互い大きく仰け反り、力を溜め、頭を振り下ろす！

ゴツンッ！！

重い音。

お互いがその痛みと勢いで体を後退させる。

「イダダダダッ！！」

2人で同じ感想を言い合う。

直樹は思う。

少し話そうか。

そして拳を握り、身構えた。

どうやらパクも同じ考えのようだ。

この感覚に陥ったのは、どれだけぶりだ？

まだ動いてないのに、リズムを刻む。

聞こえるのは、ドヴォルザークの『交響曲第9番 新世界より』

「おい健！一体どうなつとんや！お前何やつとんねん！！」

外野がうるさくって、黙れと思う。

「ウツサイ！！黙って見とれ！！」

パクウにはいつも、助けられる。

今のも、そうなんだ。

「ほんなら、俺から行くでエ！！」

パクの右拳が直樹の顔面を捉えた。

ボクッ！

痛い。

だけど我慢できる。

今度は直樹の右拳がパクの顔面を狙う。

バクッ！

「何じゃそら！全然痛くないぞ！」

それを聞いて微笑んでしまった。

パクの顔にも薄い笑みが浮かんでいる。

……… 忘れたいことがたくさんあるから、話すときに思い出してみよ。

間に合つて、良かった。

お前ら2人なら、話を聞いてくれるんやろ。

2人は、喋った後に1発、

喋った後に、1発。

それを繰り返す。

「なあ！タケシは、元気・かッ！」

ゴッソッ！

「おう！アイツ、印刷会社で、働いとる・でッ！」

バキッ！

パクウのパンチ、こんなに軽いはずがない。

足が折れとるのに、立ってられるからな。

もっと、思いつきりドツイてくれていいぞ。

俺にはできんけど……



……なあ、俺の弱点を知ってるか？

「タケシは社会人か！スゴイ、なッ！」  
ゴンッ！

「おう！立派にやつとる、でッ！」  
ドスンッ！

……俺の好物、話したっけ。

「妹さんはッ！」  
パチンッ！

「あんまり、話せんけど！取り合えず、元気みたいや、ぞー！」  
バンッ！

「ハア、ハア、ハア……ハア……ハア……ッ」

……俺は、パンツはトランクス派やぞ。

朝は、食事の後に歯磨きするぞ。

「2人とも、元気やったら、良かった・わッ！」  
ガツンッ！

パクの口から血が流れている。  
自分も。

口の中を舌でモゾモゾ探ってみた。

「ペッ！！」

…折れてもつたな。  
糸切り歯か。

「おう！元気元気！元気や！お前も元気そつやな！」

ドスンッ！！

パクの拳が直樹の胃の辺りにめり込んだ。  
そこで膝をつく直樹。

……なあパクウ。

タケシは俺のこと、覚えてるかな……。

膝をついて俯いた直樹、

「おいおい何や！もう終わりか！？」

パクのその言葉に、声を上げた。

「あ　　ッ！！しもた！パクウ！コンタクトが…ッ！！コンタクトが片方、落ちてしもうた！！！」

「ええッ！？何やて！？マズイやないか！！！」

2人は急いで地べたに張り付き、コンタクトレンズを探し始める。  
喋っているのは2人だけ。

周りを囲む連中には、2人の会話やこの状況がうまく飲み込めない。  
黙ったまま、ただ見ている。

「……おい直樹、こんなに暗かったら探すの無理ちゃうか」

「そっやな……」

2人は胡坐をかいて向かい合った。

「……パクウ、……ごめんな」

そう言った直樹。

当然、今回のことではない。

「イヤ、お前が謝るなよ。俺らも悪かったんや。

お前んとこのオヤジさん、俺らみたいなの嫌いなもの知ったのにな。  
な。

お前は悪ないんやから謝るなよ。

どっちかいうたら、その後ビビッてもうて連絡できんかった俺らの方が……なあ、せやろ？

俺の方こそ、ごめん」

2年ほど前の、あんなこと。

昨日のこのように、パクには通じた。

「なあパクウ、コレ見てくれよ」

右拳をパクの前に出す直樹。

「俺なあ、昨日……？一昨日？ドツイたったヤツの歯アに当たってな、穴開いてもうたんや」

「うわッ！エグッ！バンドエイドくらい貼っとけよ！」

……もう少し、話をさせてくれ。  
そう思う。

ここを目指しとったんやから。

詳しいことは、また今度にしよう。

この約2年。

わざと目立つような行動を取り、

髪型を変えず、

目印

旗を立てて、やってきた。

そう告げた直樹に、パクは言った。

「ほんまに、わざわざそんなことせんでも……。

お前は前から、変に人間臭いからなあ」

人間臭いと言ってもらった。

俺は特殊なんじゃないか。

頭がおかしいんじゃないか。

そんな風に思うことが何回もあった。

人間臭いんなら、それはとっても良いことだ。

何だかよく分からないが、まだまだ生きて行こう。

そして間に合って良かったと、もう一度直樹は思った。

## 再び 1

直樹はパクに、あれやこれやと質問攻めをしている。あれから3週間。

日曜日も含め、2人は毎日顔を合わせていた。

この間パクは二度、直樹の家に遊びに来た。

「親父は転勤で東京やから、おーらん！」

そう何度も言ったのに、2回ともパクは頭に黒いスプレーを振りかけ、ピチピチのカッターシャツと学生ズボンでやって来た。

パクにはやっぱり、笑わせられる。

直樹はずっと不思議に思っていたことを尋ねてみた。

「なあ、お前何であんなアホ高校行ったんや？もつとエエとこ行けたんちゃうん？」

「イヤ、俺はホラ、卒業したらすぐ親父んトコで働くし。勉強でしんどい思いする必要もないねん」

「お前の学校つて、ヤザ予備軍なんやろ？」

「アホウ、そんなモン噂や。そんなワケないやろ。ヤザ専門学校なんて聞いたことないやろ。嘘じゃ、そんなモン」

そして、会ったら確実にしなければいけないことがあった。

中学生時分に借りていた学生服を、パクに返すこと。

その際、パクは

「えー、返してもらってエエんか？」  
と言った。

とても大事なものだろうということは分かっていたし、クリーニングに出していいかすら迷った。

「当然やろ、借りとつたんやから」

そう言おうとも思ったが、何かに反するようで言うのは止めておいた。

ようやく会えてから3週間。

いまだにタケシとは会えていない。

彼の勤め先は2交代制になっているらしい。

「何かなー、日曜休みつちゅーのも月に1回あるかないかくらいなんやなあ」

パクは、相手が社会人だと気を遣うとも言っていた。

高校くらい出とかねえと。

そんな風に考えていたが、今はそんなこと思わない。

詳しいことは聞いてないが、タケシは今や家族の柱になっているのだ。

タケシは高校に行っていないかと思っていたのでずっとパクを探していたが、もちろんタケシもそれに等しい。

あと2週間しかないから、やっぱり会いに行かないとな、と考える。

正彦たちのグループに関しては……

直樹はわざと、もう解放したるよ、という言い方をした。

どういう風に回り回っているのか、直樹は何とも思っていないのに、

パクはいまだに正彦たちのことをブツブツ言っている。

直樹は本当に、もう別に構わないと思っている。

工業の連中とやり合ったときの怪我は、足首の骨折と尾てい骨のケム。

尾てい骨に関してはどうすることもできないので、薬を塗っている。

足首は、しばらくは松葉杖だ。

この怪我を見てパクは謝りもしなかったが、別に謝ってもらわなくても良いのだ。

パクに、2週間後には俺、東京に引越すんや、と告げた。

彼はその日、黙ったまま家に帰り、次の日直樹にこう言った。

「月 日土曜の夕方から旅行に行くぞ。タケシも来るからな」

「3人で行くんか？」

「当然やろ。お前もフラれとるんやろ？」

……パクも2カ月前、彼女にフラれていた。

3人で行く温泉旅行。

当然3人やと、言われた。

楽しみで楽しみで

タケシに会えるのが。

2人と旅行に行くというのが。

とにかく楽しみだ。

俺はたまに間違える。

俺は頭の中で言葉を発することを頻繁にする。

これが勘違いをして口から出てしまうことが、多々あるんだ。

確認すると、深いなあ、という答えと、

そつえば頭の中で言葉にはせんかもなあ、という答えが返ってくる。

自己分析なんて面倒だから、これはこれでいいと思う。

ただ、人と違うということが一周して自分に返ったとき、俺はまた、人にナニを贈呈することやら。

『コレが醜聞となりました』

……また、身の毛がよだつんだよ。

早いのはいいが、拙速では話にならず……

鍛錬しなければ。

単比例して、自分だけ置いていかれるのは怖いと見た。

……さて、どんな顔で会おう。

まだまだ下手クソな自分を見つめ、微弱ではあるが、振舞おう。

いつまでも非常数でいられると思っては、ダメなんだ。

びしょ濡れになるというよりは、浸す感じ。

並んで翩翩へんぱんするのが、今の俺の好みなんだ。

久しぶりに書いているなあ。

『お父さん』

『お母さん』

お元気でしょうか。

温泉なんていうのは、オッサンが行くものだろう。

直樹は今もそう思っている。

ただ、そう思っているだけで、温泉に行くなんて生まれて初めての  
こと。



張り切って用意した直樹。  
カバンもパンパンだ。

行き先は、あの動物園のある場所。  
直樹はどうしても、と言い、以前行ったあの動物園の近くのホテルに泊まることにしてもらった。

予定していた安旅館よりもかかる費用は、自分が負担するという条件の下で。

あの動物園を、長い時間使って回りたい。

そう思ったのは俺の我俣。

でもあの2人は気にすることはないと思うよ。

足のギプスにも慣れてきて、松葉杖なしでも歩けるようになった。

……が、一応杖も持って行こう。

当然医者にはアカンと言われたが、そんなことは関係ない。

タケシが有給休暇を取ってこの土曜を休みにし、2連休にしたという話を聞いて、直樹とパクも学校を休むことにした。

朝早くの待ち合わせ。

何年か振りの、だ。

また、早く来すぎてしまった。

人気もなく、まだ真つ暗な駅の前で、揚々すると共に、少し緊張している直樹。

……やっと、タケシに会える。

しばらくすると、駅前のロータリーに車が1台入ってきた。

その車から降りてきたのは、パク。

「何やねん。メツチャ早いやんけ！」

「おう、まあな」

と答えると同時に、パクを乗せてきた車が小さくファンツ！とクラクションを鳴らした。

直樹の前をゆっくりと通過する車を運転しているのは、先日 工業と揉めたときの連中の一人。

彼は直樹をじーっと見つめながら、通過する際にスツと直樹に向かって手を挙げた。

手を挙げ返す直樹。

パクウにはパクウの、ツレがいる。

こうやって広がるのか。

友達100人何たらかんたら〜っていう歌があったな。

……こないだ俺を監禁しやがったヤツが。

手エ挙げてしもうたやんけ。

まあ、悪くない。

「タケシはまだか。アイツ、寝とんとちゃうやるな？一発電話しとこかー？」

「イヤ、エエやる。家族起こしてもうたらアカンしな。ちゃんと来るって」

「そうか？アイツ、変わってもうたぞー？見たらビックリするんちやうかなあ。

……ああ、それとな直樹」

そう言つて、パクはタケシと会う前に教えてくれた。

今から1年くらい前、タケシの母親が蒸発してしまったことを。

今はあの家を引越し、マンションを借りて妹と2人で暮らしているということを。

俺が『母ちゃんも元気か?』って言うかもしれないと思ったんだろ  
う。

……恐らく俺は聞いていた。  
挨拶がてらに。

タケシのお母さんは、男と一緒にいなくなったらしい。  
でも、直樹にとってはそんなこと、どうでもいいのだ。  
ただただ、すごいと思った。

自立し、自分の稼ぎで城を持っているんだ。タケシは。  
すごい事実だ。

17歳の直樹はそう思う。

考え事のスイッチが入ってしまった直樹。

パクがいるにも関わらず、ボーツとしている。

ハツと我に返ったのは、パクに肩を叩かれてから。

道路の先の暗闇の中、こちらに歩いてくる人が、1人。

……おいおい。

教えてもらわなんだら、誰か分からへんやんけ。

彼はあのトウモロコシのような頭を止め、前髪を下ろしていた。

何だか少し、痩せたというよりはやつれたように見える。

ただ、顔つきが自分と同級生の人間の顔とは思えないような、締ま  
ったというか何というか……

タケシ。

最初に俺から声を掛けようと思っていたんだが、

……失敗した。

彼はもう、自分の目の前にいる。

タケシは直樹の抱えているパンパンのカバンをパンツ！と叩き、

「何や、お前。コレ、何が入っとるんや？一泊でエエんやろ？俺、明後日仕事やで？」

秋月、久しぶりやな」

と、言った。

久しぶりやなあと声を掛けようと思っていたのは、俺の方なんやで？  
出鼻を挫かれた。

「……お、おう」

とだけ返事をし、何かないかと模索する。

「おいタケシ、虫歯治ってるやん。その、ホラ前歯、前なかったやんか。」

何や、異性の目を意識して、歯アくらい治さな思ってたんか」

「ア、アホウ！変なこと言うな！アレは虫歯やったんちゃうわ！ドツかれて折れとったんや！ハハッ！」

試してみたら、社会人といってもそんなに変わらない。

楽しくなりそうだと、確信した。

パクの「朝飯食ったか？」の問いに誰も済ませていないことが分かり、駅内の喫茶店で食事をする3人。

ああだこうだ、ああだったこうだったと朝早くから盛り上がる。

温泉はオツサンの行く所だと言った直樹に、2人が怒鳴った。

……行ってみて確認すればいいんだろ？

とにかく楽しくなりそうだ。

3人は電車に乗り、一泊二日の温泉旅行へと出発した。

時間の電車の旅。

こんなところでどうかとも思ったが、直樹は当然タケシにも話をする。

そして、謝罪の言葉。

タケシは少し黙って、

「いつの話しとんねん。そんなのお前、1時間後には忘れとったわ。うーん……何ちゅーか……」

タケシはそこで一旦言葉を切り、言った。

「この間、俺も済まなんだ」

彼は、怒ってたらこんなトコ一緒に来おへんやろー、とも言った。

直樹はやっと、ホッとできた。

あの時やってしまったことは取り返しがつかないが、話してやっとホッとできた。

そしてもう一つ、気になっていたのはタケシの妹のこと。

聞くと、病院へは通わせている。でも手術しなければならぬ、と今日は一人になるから、パクのお母さんが家へ泊まりにきてくれているらしい。

更にホッとした。

きつと楽しいだろう。

いや楽しむべきだ。

そう思っていたこの旅行。

あとは存分にソレを遂行するだけ。

3人は目的地に到着すると、まずホテルへと向かった。

部屋でゆっくりしてから出掛けよう、そう思っていたが、  
「まだチェックインのお時間ではございませんので…」  
と断られてしまった。

こんなとき、タケシなら必ず「エエやんけ!!」と言っていたハズ  
だ。

しかし言わない社会人……。

見た目と正比例して行ったんだな。  
と、そう思う。

しょうがないので3人は荷物だけを預け、直樹がどうしても行きた  
かったあの動物園へと向かう。

しかし、直樹は入場のゲートをくぐったと同時に後悔をした。

走馬灯のように、思い出す。

走馬灯のように ……

俺が死ぬとき、本当にこの映像を思い出すんじゃないか。  
そう思えるくらい。

2人に合わせてテンションを上げながら、  
以前、2人を裏切つて来た場所だとは絶対に言えねえ…  
そう考える。

「直樹は一回ここに来たことあるって言うってたな」  
パクのその言葉にギクツとした。

「おう、あるで。任せてくれよ」

… 一体何を?  
任されても困るな。

「おいタケシ、パンダやって。お前、パンダなんか見たことないや

る」

「おう、テレビでしか見たことない……っていつか、お前もないやろ！」

久しぶりのこの遣り取りだから、いろいろ考えるのは止めにしよう。

シヤチのシヨールを見てテンションMAXの2人。

「スゲエな、オイ!!!」

「おお、スゴすぎる!こんなテレビでも見たことないわ!」

直樹は一度見ているので、違う部分に着目していた。

そしてホツとする。

……良かった。

前のときと同じお姉さんだ……。

3人は次は何を見ようかと相談しながら、構内を歩き回る。

「しかしアレやなー、パンダは可愛かったなあ!連れて帰りたいなあ」

そう言ったパク。

それに対し、タケシは

「パンダなあ……俺はせやけど、見た感じの倍は可愛いと思うとったよ。想像でな。」

実際見てみると50%減や。

お前も見たいやろ? あの竹をバキバキいわしてるあのツメ!

ほんで、何であんなにケツが汚いんや!

所詮クマやな」

……タケシと同意見、同じ感想を持った、俺……。

でもそのことは言わないでおこう。

「そうかー?」

と言うパクが、歩く足を速めた。

2人もそのパクの後をついて行く。

「……オイオイ、フラミンゴって、コイツのこと言うんか」  
そこには池のようなものが広がっており、囲いがしてある中には、  
たくさんのピンク色の鳥。

「へえ！フラミンゴなんかおったんやなあ。知らなんだ」

キレイな、とても変わった鳥。

パクがそれを見ながらブツブツと言いだす。

「コイツのアレやな、ほんまに1本足で立ってんな。まったくよう  
！」

「何やお前、フラミンゴの立ち方に文句があるんか」

「アホか！お前アレ見て思ひ出さへんのか！王よ、王！我々の敵・

巨人の王やないか！

フラミンゴ打法、1本足打法ってこつから来とんやろ！？」

「あー、ナルホドねえ。でもよう、お前も俺も王貞治の活躍、知ら  
んやろ。世代が違うやろ。」

俺らが知つとる巨人に王はおらんかったやろ」

「……チビン時に見とるわ。覚えてへんけど」

「ほんなら言うなや！」

何か、違和感を覚えていた直樹。

この会話で気づいた。

「なあ、お前ら2人な、前と立場が逆になってるんちゃうか。」

前までタケシがバカ言うて、パクウが注意してたやないか。しばらく  
く見てなかったら逆になってるんやな」

それを聞いたパク、

「直樹、お前もコツチ長いんやから、それを言うならポケとツッコ  
ミって言え。」

別に前と変わってないよ。今も昔もコイツがヤツさんで俺がキー坊  
や」

するとタケシ、

「アホウ！何でお前がキー坊や！キー坊は俺やろ！」

2人は何故かそこで、ヤツさんのなすりつけ合いを始める。



やすしきよしの話だろう。  
それくらい俺だって知ってる。

「……ちょっと待て」

争いをそう制したのは直樹。

「この中できよしさんは俺しかいねえだろ。やすしさんはお前ら2人だよ。Wやすしや」

「……ッ!!」

その言葉は火に油を注いだのか、3人の小さな小さな、とても小さな口論が始まった。

……そして、口論とジャンケンの結果。

キー坊はパク

ヤツさんはタケシ

そして直樹はヘレンさんということで、話が落ち着いた……。

3人はワイワイと昼食を済ませ、

再びワイワイと回る。

ジェットコースターは直樹が断った。

この日は土曜なので、午前中ハイスピードで回り回った3人は、昼過ぎには全て見終えていた。

2人は早く温泉に入りたいと、うるさいほどに言う。

オッサン臭いなーという意見は通用しない。

この動物園の従業員に聞いてみると、この近くに何時でも入れる温泉があるらしい。

チエックインにはもう少し早いので、3人はそこへ行くことにした。

途中、地元の学生らしき連中とパクが一触即発の場面があったが、

直樹は

「ほらほら、俺、足痛いんやって」

と断りを入れた。

以前なら真つ先にタケシが出ていたのに。

そのことをタケシに言つと、

「まあな」

という答えだった。

しかしそんなことよりも。

2人があれほど言う温泉というのが、ナンボのものなのか。

教えられた場所はホテル。

温泉だけはいつでも入れるように開放されているらしい。

ホテルの従業員が3人を脱衣所へと案内してくれる。

ギプスを濡らしたらアカンよな、やっぱり…。

俺も鍛えてるからな、もう人前で裸になっても恥ずかしくないぞ。

そんなことを考え、服を脱ぎ始める。

「直樹、早よ来いよー」

2人は早々に温泉の方へ行ってしまった。

直樹も急いで服を脱ぎ、2人の後を追いかける。

引き戸を開け中を覗くと、庭にある池のような形の温泉が広がっていた。

このデカさだけでもエエかもしれんなー…。

2人はすでに湯に浸かっている。

そして何故か、直樹の一点をじ〜〜〜〜と見つめているのだ。

不思議に思う直樹に構わず、パクが口を開いた。

「……………体積で言つたら、オトナの猫一匹はあるんちゃうか？」  
タケシも言つ。

「俺はセントバーナードのしっぽを挟んどるんやと思ったぞ」

直樹は2人の言葉に、

「ハア？何の話や？」

「何の話ややないやろ、直樹！隠せ隠せ！お前のソコから出とる熱気でガラスが全部曇ってもうとるやないか！」

そこまで聞いて、直樹は2人がナニを言っているのかようやく気づいた。

「アホッ！じつと見るな！！」

そう言つて、直樹も温泉に飛び込む。

ギプスに気を遣おうと思つていたけど、飛び込んでしまった。

「……………」

そして、何故か無口な2人……。

パクがぼそぼそと呟く。

「……………」しかし直樹が、あんな武器を持ち合わせてるとはな……………。

秋月直樹という商品があるとしたら、アレは確実に取っ手やんなあ。

一番丈夫そうや」

「そうや、そうや」

そう答えるタケシ。

もう恥ずかしくないだろうと思つていたのに、こんな話になるとは……………。

結構ハズカシイ。

でも、温泉というのはとても気持ちがいい。

パクが言っていた。

「たまには心臓を洗うとかんと」

その意味がよく分かった。

このまま寝てしまいたいと思つほど、気持ちがいい……………。

## 再び 2

3人はお風呂から上がると、そのホテルがやっているレンタル自転車に乗って、観光地を巡ることにした。

土曜日の昼からともなると、連休でもないのにやたらと人が多い。

前も思ったけど、めっちゃくちゃいい所だ、ここは。何よりも、海がいい。

直樹が特に気に入ったのは、何枚もの皿のような形をした岩とも砂とも言えないものが広がったところへ、激しい波が打ちつけられる光景。

それを見ながら、少し黄昏る。

一週間後には、更に離れたところに引つ越さなきゃダメなんやなあ…。  
焼きつけとこつ。

パクが言った。

「ココ……夜来た方が面白いかもしれんなー。波ザッパーンなってるし」

「そやな。もつかい来ようや」

3人は岩場に立ち、潮混じりの風を浴びている。

そこに、見透かしたようにタケシに言われた。

「秋月、お前ほんまに向こうへ帰るんか」

「…そういうことになるなあ。俺は自力がないし」  
「そうか」

黙ったまま、しばらく海の方を眺めている。

その後、もう2〜3箇所ほど観光地を回り、3人は本来泊まるホテ

ルに戻った。

もう一度温泉に入ろう。

そう言ったのは直樹。

自分の意見を曲げるつもりはないが、オヤジ臭くても結構！  
そう思っていた。

お風呂から出る頃には、外はもう随分と暗くなっている。  
さつき見たあの景色をもう一度見に行こう。

直樹はそう提案した。

……思い出したけど、今回のこの旅行は、俺の送別旅行ってことな  
んやなあ。

2人は俺が言うままに付き合ってくれる。

日も暮れかかった頃にそう思い、そして気づいた。

直樹がこうしようと言ったことに対し「よっしゃ、そうしよう！」  
という返事を、今日は何回も聞いたことに。

昼間のあの場所は風が強く、この季節だとかなり寒い。

「ほら見てみる、上着がいるだろ！俺のカバンにはコレが入ってっ  
たんや！」

そう言つてカバンの中からジャンパーを2枚出す直樹。

「用意いいねえ！さすがボンボンや！」

2人は直樹が取り出したジャンパーを着込む。

また3人で、並んであの景色を見た。

3人で、まだ昔とも言えない昔話に花を咲かせる。

「せやけど直樹は、あの時初めて人ドツいたんやろ？」

「おう、そうやで」

「アレびっくりしたなあ、ほんまに！ずーっとタイガーマスク被っ  
てるし！ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！」

「あ！そついや思い出した！あん時よう、ほんまお前ら2人先々帰つてくし！」

片っぽはオヤジがオヤジでボンボンや〜言つて、片っぽは在日や〜言つて！結局朝までおつたの俺だけやつたんや！」

「ハア？あん時パクウも先帰つたんか？」

「おう、コイツー人置いて帰つたでー。」

ありやお前が悪いんやろ。ポリに『死ね！』言つたら、そりやお前……」

「イヤ、ちよつと待つて。在日で早く帰れるつて何やねん」

「まーまーまー、いろいろあんねん。変に氣イ遣われたりするんやなー。俺、日本人なんやけどなー」

パクはああ見えて、結構ナイーブだった。

高校では日本の名前を名乗っている。

「俺はイジメられるタイプちゃうから、氣イ遣われんねん」

やっぱり誰にだつて悩みがある。

望まなくても、周りが与えたりするんだ。

「ところでな」

と違う話を始めたのはタケシ。  
女の話だ。

「ああ、俺はついこないだフラれるまでずーつと女がおつたで。直樹もそうやんなあ？」

「あ、ああ。俺もおつた」

「……………」

タケシは黙つたまま聞いている。

「こないだフラれた彼女つていうの、高校生か？」

「イヤ、社会人やで」

そこまで言つたところで、タケシのいつもの大騒ぎが始まった。

「お前ら、アホウ！！ちょっとは氣イ遣え！！誰がソコまで俺に説明せえ言つた！？」

一人だけ立ち上がっているタケシ。

「ハハツ！直樹、コイツはいまだに童貞である！ロンリー童貞、頑なに守ってんで！」

「おいちよつと待てエパクウ！秋月は女がおつたつていう事実があるだけでな、童貞じゃないつていう保証はないんちゃうか。ひとつ聞いてみようやないか」

その問いに直樹、

「イヤ……とづくに済ませたよ」

途端、タケシはキャ

ッ！！と発狂した。

「くっそう！おまいら、ちつとばかりツラがエエと思つて！裏切りモン！裏切りモン！アホウ！肥溜め！！」

「…肥溜めつて何やねん」

辺りを見渡すパク。

観光地だけあつて、この時間になつてもまだ人がチラホラいる。

「タケシ、あそこに女子2人発見。声掛けて来いや」

「エエツ！？」

「ホラ見てみい。な？コイツは目の前にしたら途端にこうなんねん。お前、人のこと肥溜め呼ばわりしてる場合とちゃうぞ？」

…この年頃は、こういう話題に熱くなるモンなのだ。

「コワイもんしゃーないやんけ！そうや！こん中で一番男前は秋月、お前や！お前、声掛けて来い！」

俺は待つといてやるから！お前が声掛けて来い！！」

「えー、ナンパか？やったことないぞ」

大騒ぎの3人の声は、その静かな場所に響き渡る。  
2人は

「エエから行け！！」

「イヤじゃッ!!」  
を繰り返している。

その観光地の駐車場のすぐ傍の岩場で喋っていた3人。  
何かあったのか、それまでチラホラいた人たちが大慌てで車に乗り込み、出て行くのを見た。

「あーあーあーあー、ホラ！チンタラしてるから帰ってまうやないか！

秋月、まだ間に合う！追いかけて来いッ！」

「……………」

………… タケシはマジだと、悟った。

まあこれも勉強か。

そう思った直樹、

「しょうがないな！一体何て声かけりやエエんだ……」

ぶつぶつ言いながら一人その岩場から飛び降り、駐車場に停まっている車に向かって歩き出す。

しかしその車は、直樹を待つことなく出て行ってしまった。

振り返ると、頂垂れるタケシの姿。

そんツなに女に飢えとるんか、アイツは……。

直樹がそう思っていると、またその駐車場に車が入ってきた。

お。女だけの車だったらしいなあ。

が、その車は直樹が声を掛けるにはたじろぐ、というより掛ける必要もない車種。

ベンツだ。

女の子がベンツに乗って来おへんわなあ。

直樹は2人のところに帰ろうと歩き出す。

その背中を車のライトが煌々と照らした。



振り返ると、何台ものベンツが連なって入って来る。

何や一体……？

何でベンツばかりやねん。

直樹は不思議に思いながら、しかし気にすることもなく元の岩場へと足を向けた。

その時、直樹の後ろから、

「オイ！ワレじゃ！オイツ！！」

その声に先に気づいたのは、パクとタケシ。

こちらに視線を向け、すぐに岩場から飛び降りて直樹の元へと近づいて来た。

そこでようやく、声を掛けられたのが自分だということに気づいた直樹。

振り返る。

1台のベンツから降りてきたのは『いかにも』な人。

夜にも関わらずサングラスを掛け、短いクルックルの頭。

……ヤバイ。暴 団だ。

その男はこちらへ歩いてくる。

「オイ、ワレら、こがいな時間にこがいな所で何しよんや。

今からワシらの会議があるからのう、早よ家へ帰らんと見たないモン見ることになるぞ」

辺りを見回してみると、さっき急いで帰って行った女性たちはおるか、人っ子一人いなくなっている。

その場所にいるのはベンツから降りてきた連中のみ。

「何ボサツとしとんじゃコラ！！足痛いんやつたら早よ帰らんかいッ！」

そう言っつて、そのパンチパーマは直樹の足をギュツ！と踏みつけた。さっき、調子に乗って岩場から飛び降りたとき少し響いた左足。

「イタツ!!」

思わず声を上げてしまうほどの痛み。それを見てパクがズイツと前へ出た。

「オイコラ、何するんじゃッ！公共の場で俺らが何しようとして勝手やる！知ったげな顔でピーチクパーチク言うとなんやないぞコラ!!」その言葉に、パンチパーマは「ハアッ!？」と言いながら、更に歩み寄ってくる。

足を踏まれてイラツとしたが、いくら何でもこれは止めなきゃいけない。

相手が悪い。

そう考え、直樹は手を伸ばそうとしたが、それより先に動いたのはタケシだった。

「やめエ、パクウ!」

その声に直樹は伸ばしかけた手を引つ込め、タケシを見遣る。

「イヤ、ほんますいません！僕ら観光客で、事情も何も知らなんだんですわ。ほんとに申し訳ないです」

タケシはそう言って、深々と頭を下げた。それを見て、パクは少し温度が下がったのか、握っていた拳の力を抜く。

だが、相手が相手。

ボクッ!

頭を下げたままのタケシの腹を、パンチパーマはいきなり蹴り上げた。

タケシはその勢いで尻餅をつく。

「こつちゃああのう！売った買ったで生きとんじゃ！冷とうならんうちに帰れ言つたのドツチャ!？」

クソガキが！調子に乗っとんちゃうぞ!!」

タケシが蹴り上げられたことで、パクの体にまた力が入る。

直樹も同じように拳に力を込める。

「ハハハツ！エエ大人が上等やんけ！ハ、カツペヤ ザが田舎でひっそり暮らしとつてから、社会の常識知らんみたいやのう！都会のガキがいつちよ揉んだるか！！」

パクはそう言うと同時に、パンチパーマの胸倉を掴み寄せた。

こちらの騒ぎに気づき、何人かが歩み寄ってくるのを目の端で捉えながら、しかし直樹は危ないと思う以上に、頭に血が上っていた。

「おーい！何しとんじゃ！？」

少し離れたところから声がする。

直樹はパクのすぐ後ろで身構えながら、冷静な頭の隅で、この後どうなるんだろうかと考える。

しかし、そんな直樹を遮ったのもまた、タケシ。

タケシはパクとパンチパーマの間に体を振り込み、その体勢からパクの横っ面を思いつき殴り飛ばした。

バキッ！！

横に吹っ飛び、倒れ込むパク。

「ほんまにすいません！」

そう言つてタケシはまた深々と、そのパンチパーマに頭を下げる。

「オイオイ、服シワツシワやないか。コレ、どないするんや」

それを聞き、タケシはすぐにポケットから財布を取り出し、中にある札を全て差し出した。

「これで何とか堪えたつてください！」

札を受け取ったパンチパーマを確認して、タケシは今度はその場に膝を付き、額を地面に擦り付ける。

「この2人は普段からアホでもならんです！よう言つときます！鎖付けて地元へ帰ります！だから勘弁してください！」

その光景に、直樹とパクは言葉も出ない。

パチパチと音をさせながら、パンチパーマは札の数を数えている。

「……まあエエやる。コツチも忙しいからな。分かったんなら、早よこつから去ね。今度見つけたら、確実に埋めるぞ」

そう言つて背を向け、歩いて行つてしまった。

タケシはそれを見てすぐに立ち上がり、2人の腕を引っ張る。

「オイ何しとんねん、早う来い！ホテルに帰るぞ！」

「……」

2人は声を出すこともできない。

タケシに腕を引っ張られ、その場を後にする。

3人は並んでゆっくりゆっくり歩きながら、ホテルへと向かった。誰も何も喋らない。

15分ほど歩いたところで、ようやくパクが口を開いた。

「あー、痛いわあ！おいタケシ、本気でシバかんでもエエやるお前！」

そうにこやかに言いながら、タケシの肩を突つつく。

タケシの顔はまだ、沈んだまま。

「そ、そうやな、見事に入ったな。パクウ、齒ア折れてへんやるな？タケシやるなあ、まだまだ現役やんけ！」

そこでタケシは俯いたまま、少し声を張った。

「あのな！……ワリイ。俺、何か問題起こすワケにはイカンねん。今の職場も無理やり擦じ込んでもろうたし、クビになったらアカンねん。」

母ちゃんおらんし……美奈子がよう……俺が稼がなアカンからよう……。

こがいなこと言つて、セコイか……？ハハハッ！」  
俯いたまま。

直樹は何か声を掛けようとした。

が、先に大声を張り上げたのはパク。

「セコないよ!!!!」

3人はその場に足を止める。

「タケシ、ワリイ。ありや俺がドアホ通り越えてドマヌケやったわ。お前のこと考えんでな。悪りかった。スマン。

ヤ　　ザと揉めてどないするんやってなあ。なあ直樹!」

「お、おう! そうだよな。ごめんな、タケシ」

……俯くなよ。

「イヤ、そんなにして謝られたら、俺も困んねんけど……」

「ハア? 何やソレ! じゃあ3人も気にするなっちゅー話やな。

そういえばホテルの2階にゲーセンがあったな。ホテル戻ったら遊ばや。

あがいなカツペパンチパーマにゼニ全部くれやがってほんま! 俺が奢ったるからよ」

さっきまでの雰囲気に戻った。

……良かった。

直樹も何か言おうと思い、

「なあ、ホテル戻ったらもう一回温泉入ろうや」

その言葉にタケシとパクは振り返る。

「……俺はもう、お前とは風呂には入らん。なあタケシ! 所詮俺らはスズメとツバメ。」

ン　　が独立して『一人でできるモン!』って言ってるヤツと一緒に居れません!」

そう言つて、2人は駆け足を始める。

「何じゃそら!! 喋るワケないやろ!!」

走れない直樹、早歩きで追いかける。

……一週間後にはこの2人と、遠く離れて暮らさなきゃいけないこととなる。

そう思うと、いろいろ言わなきゃいけないことがあったような気がする。

パクウもタケシも、何かにまみれて生きてるんや。

体に良いこと全て試してみるのもいいかもしれないが、あの頃の俺は生きているのやら死んでいるのやら。

……一週間後には、2人と離れなきゃいけない。

それ以後、誰も昨夜の出来事に触れることはなかった。楽しい出来事ではなかったからな……。

次の日の昼過ぎにはその地を離れ、地元へと戻った3人。

前回はそうだった。

逸る気持ちといきり立った心境の中で移動した行きはとても長く感じたのに、帰り道の何と早いこと。

昨日待ち合わせたあの駅に、もう着いてしまった。

「あんよう、有給休暇取ってしもうたから、また日曜になってワケにはいかへんねん」

当初は、余分にかかった金額は直樹が負担するという話だったのだが、その分はタケシが全て出してくれた。

奪られてしまったお金とは別に、カバンに忍ばせていたお金のまぎれもないタケシのお金で払ってくれた。

「あー、構へんよ。お前は将来おエライさんになるんやろうから、そんな時また奢ってくれや」

俺がエライさんになるかどうかは知らないが、タケシの言う通りなんだ。

負担しようとしていたあのお金は、俺が稼いだものではねえんだよな。

自分の限界に、身をつまされる思い。

それと等しく感謝し、感心し、……寂しかった。

俺も向こうに行ったら、アルバイトをしよう。

「多分、見送りには来れへんねん。悪いな。

今回の家にはよう、電話もあるからよ。向こう着いたら電話番号教えてくれよ」

そう言つて、タケシは小さな紙に自宅の電話番号を書き、渡してくれた。

「じゃあな！バイバイ！」

そして去って行くタケシ。

『さようなら』ではなく『バイバイ』で良かったと、いまだに思つてしまう。

この場で『家まで送るよ』はおかしいんだろう。

そういえば、俺はタケシの言葉に返事もせなんだなあ……。

「俺はお前、メツチャ暇やからよ。直樹、明日何するー？」

パクはそう言う。

あと一週間、付き合ってくれるんだ。

ホテルでタケシの支払いをする姿を見て、確信した。

ここから東京までの新幹線の往復代。

これは今の俺にとって脅威的な数字なんや。

毎週末こっちに遊びに来るよ、なんて言つたら、タケシに怒られそうやな。

そのあと一週間の放課後を、直樹とパクは何をするでもなく共に過ごした。

これはこれでちゃんと意味がある。

そんな風に思う。

数年の我慢と、当初は思っていましたか……

いざこの地を後にするととなると、今度は違う我慢が身を包む。108つのいくつかが、俺の神経を邪魔しているんだろう。

土井さんは元々こっちの人なので、あっちには一緒に行かないらしいです。

こっちに残るそうですよ。

向こうに帰ると、今度は新しいお手伝いさんです。

土井さんがいいんだけど。

そう思うのと、

土井さんが羨ましい。

そう思う。

逆算なのか何なのか、俺がもう少し早く生まれていれば、今この瞬間、もう稼ぎがあって引越ししなくて済んだんじゃないかと思ってしまう。

身も蓋もなく、あっちが立たないのは分かっていますが、そう思っていますよ。

『お父さん』

『お母さん』

最低でも一月11万丸々必要な感じで、今の俺には到底追いつけない金額です。

だったらこうしようと思ったこと。

気丈に振舞おうと思います。

独活という木の太木で、握り拳も柔らかく……



ですが、自分を呪うにはまだ早いような気もしています。  
違いますか……？

その日、時の新幹線に乗るといのはパクに教えていたが、気がかりばかりの直樹。

朝から母親を質問攻めに行っている。

向こうで住むのは以前住んでいた家なのか。

向こうで通う高校は何て高校なのか。

こっちの高校の手続きはもう済ませているのか。

すると、編入手続きは向こうに着いてから、という答えが返ってきた。

俺は別に、そんなことはどうでも良かった。

未練があるから聞いていただけ。

会話というには少しレベルの低いもので、直樹は珍しく母と新幹線のホームに来るまで喋り続けている。

「僕はもうコツチに慣れちゃったからさあ。言葉遣いも変になってもうたし。ほんまは引越したくないなあ」

はつきりと言った慶也のその言葉に、直樹は心の中で肯きはするが、俺もお前も……と考える。

新幹線に乗り込もうとしたその時、パクが見送りに来てくれた。

その後ろには、タケシの姿も。

「悪い！遅なつた！」

パクが言う。

「何やタケシ。仕事は？」

直樹のその問いに、

「イヤ、ちよつと時間もろつたんよ。やっぱりな、見送りくらい来んとな」

タケシはそう言ってくれた。

少しは社会人のルールを知っているつもりだ。

有給休暇を取った翌週に抜け出す時間をもらうなんて、どれだけ難しいことだったか。

俺だって知ってるつもりや。

直樹は何と言っていていいか分からずにいた。

言葉が出ない。

新幹線の開いたドア越しに、2人の顔を見つめながら。

やがてタケシが、何かの包み紙を直樹に差し出した。

「これなあ、餃子やねん。こんな小っちゃいやツ。お前の家がこんなん食べるか分からんけど、一応な」

「マジかよタケシ。ありがとう、頂くわ」

直樹はそれを受け取る。

そのタケシの隣で何やらモジモジしているパクも、後ろ手に風呂敷の包みを持っている。

…もうエエ加減、諦めろよ。

「ひよつとしてパクウ、ソレも土産？俺にくれるヤツちゃうん？ちよつだいや」

するとパクは、その風呂敷を前に持ってきて言った。

「イヤ、何ちゅーか…コイツの後に出しにくいんやがなあ。コレも一応食いモンやねん。

ウチのババアがよう、直樹が今日引つ越す言ったら、新幹線の中で食べてもらえ！言つて。焼肉の弁当やねん。

お前の母ちゃん、こんな食わへんよなあ。まあでも、もろうたつてや」

そう言つて、直樹の前に風呂敷包みを差し出した。

…ヤバイ、と思った。

いろんなことを思い出してしまう。

もう少し大人になれば、これくらいのこと難なくクリアできるようになるんだろう。

直樹はその風呂敷を受け取るために、一步前へ出た。

体が半分、新幹線からはみ出す。

そして受け取り、もう一步前へ出る。

タケシからもらった紙包みと、自分の荷物を脇に抱え、新幹線から外へ出る。

それほど時間はなかったが、……悩みに悩みに悩み抜いてみた。

「……なあパクウ、これはよう、持って帰ってくれよ」

「え？何で？」

「お前んトコの焼肉つて、あのゴムやる？前から言おう思つてたんやけど、アレつてめっちゃマズイやん」

「……………」

パクは結構な秒数黙り、そして、

「……え……な……え・え……?!」

ちよ、ちよっと待ってくれや。お前、てっちゃんキライ……キライやった？コレ、イヤ、コレはな、てっちゃんとちやうぞ？

ええ……いらんのか？」

この遣り取り。

「ブ                    ツ!!!」

まず嘔き出したのはタケシ。

それにつられるように、パクも直樹も笑い出す。

「アツハツハツハツハッハッ！お前、どういうつもりやねん！ココで言うかー！？」

「氣イ遣わせたら悪いけど、氣イ遣え！！」

「ハアツハアツ……ほんま、腹痛いわ！笑わしやがる！」

「ウチのオカンもビツクリするぞ！」

「秋月、お前のボンボン体質、もうちょっと揉んだりたかったけどなー」

トウルルルルルルルッ！

新幹線の発車を知らせる合図が聞こえてきた。

3人は同時にホームの天井を見上げる。

そこで、直樹は思ったことを口にした。

「決めた！！何とかなるよ！！」

「おい直樹、お前何やっとなねん。早よ乗らんかい。ドア閉まるぞ？」

「パクの声もちろん、アナウンスも聞こえはしたが、直樹は動くのを止めた。」

……これまで一度も、我俣なんか言ったことなかったな。

「絶対ツツ対にアカン！！っていう答えが返ってきたとしても、粘らせてくれよ。」

「コレに乗ったら、従うしかないやろ？」

「プシュウウウウッ！」

「新幹線のドアが閉まっていく。」

「……あ　　ッ……！！」

大声を上げる2人。  
それに対して余裕の直樹。

新幹線は走り出す。  
直樹をその場に残して。

呆気にとられているパクとタケシ。

「……おいお前、何やっとなねん……」  
「……エエ~~~~ツ……!？」

別にびっくりさせてやるうとは思ってなかった。  
だけど、びっくりしている2人の顔が心地いい。  
相談は後からだ。

あと1年、別にいいだろ…？

直樹は2人の肩を抱きかかえ、歩き出す。

「パクウ、その弁当、何人前あるの？」

「……あ、イヤ、……3人分。お前の母ちゃんと慶也と、お前の分」

「だったら今から3人でソレ食おうや。なあタケシ、マズイ弁当皆で食べようや」

「イヤ、だからコレはマズないって……!」

直樹はそれから高校を卒業するまで、こっちで一人暮らしをするこ  
とになる。

誰の意見も聞いていないが、賛成してくれるであろうこの2人が7  
0%。

反対してくれるであろう母と慶也が20%。

その方が都合がいいんだろ?と思う、直樹の中の父が、10%。

これは俺の、他人を巻き込まない我俣だろう。  
だからいいんだろ？

『お父さん』

『お母さん』

## 剥離 1

俺の悩みは折り良く今日も、俺の足を行き過ぎないように止めてくれる。

顔色を窺いながら、少しずつ少しずつ進めてくれる。

やっぱり俺は強運の持ち主なのだろう。

何とかなりそうですよ。

帆を張れば進むしかないご時世を、満遍なく往ければ良い。

翩翩へんぽんが理想だつて言っただろう。

それはそれで、難しいんだぜ？

直樹は高校卒業までのあと1年ちよつとを、一人で過ごすことになった。

高校の編入手続きがまだ受理されていなかったこと。

土井さんのためのアパートの契約を切っていなかったこと。

それらがこの時の直樹を助ける。

土井さんの住んでいたアパートは直樹の家が借りていたものだったので、そのまま直樹が使うことになった。

慶也は泣いていた。

一緒に暮らさないのはおかしい、と。

1年が長く、重要だということは重々承知の上で、直樹は

「たった1年だろ？」

と、慶也を宥めた。

母は

「そんな無茶な話はありません！」

と直樹を叱った。

「無茶は承知です。お金も余分にかかることも知っています。だから食べる分くらいは、アルバイトで稼ぎますよ」

と言ったら、更に叱られた。

「余計な苦勞です」と。

母に怒られたのはこれが初めてで、多少の驚きはあったが、直樹は少し、ほんの少し、それに喜びを感じる。

「ちよつとお母さん。アルバイトで稼いで自炊をするっていうのは、余計なことじゃないですよ。大丈夫ですから」

そう言ったら、母も泣いてくれた。

電話での遣り取りだったので確信はないのだが、自分のために泣いてくれていたような気がしたのだ。

一人暮らしというのは、直樹にとって結構快適なものだった。

もう以前のようなバカをする必要はないのだから。

パクも3年になると同時に「俺はもう引退やねん」と言って、ケンカなどは一切しなくなった。

「引退って何や？」

直樹の問いに、パクは教えてくれた。

工業は代々ケンカの強いヤツのNo.1を決めていくらしい。そのNo.1は3年になると同時に1、2年のNo.1と勝負をする。

それに勝とうが負けようが、その称号は下級生へと受け継がれて行く。

「何じゃそら」

という直樹の感想に、パクは、



「俺もそう思う」

と答え、下らないがルールなんだ、とも言った。直樹にとって理解しがたいものではあったが、一つ心配事が消えるのは良いことだと思う。

一人暮らしのこのアパートを、溜まり場だけにはしないようにしている直樹。

たまにパクが泊まりに来る。

タケシも休日の前夜には泊まりに来て、程よい空間を過ごしていた。

1日といえばそれほど早くは感じないが、アレ、もう金曜日？と思うほど一週間は早く、1年ともなると振り返る間もなかったほど、見事な速さで過ぎ去って行く。

この1年は程よく遊び、必死に勉強した。

環境が助け、ある程度の悩みで済まされているこの期間は確実に直樹に味方し、直樹は 大学法学部の受験に成功する。

春を待つ前に、直樹は家族の待つ東京へと帰った。

その際の別れは、前回のようには踏ん切りがつかないものではない。

「俺、バイトも向こうで続けるし、コッチに遊びに来るよ。だからたまには遊びに来てくれな」

その挨拶で十分通い合えたと思う。

1年間の一人暮らしを始めるとき、父の言葉は一言も聞かなかった。終えてしまったその時になり、あの時父はどう思ったのだろうと考えてみるが、それは取り合えず隣に置いておこうと思う。

そしてまた、家族4人で過ごす時間が流れ始める。

2年後、秋。

直樹は20歳になっていた。

こちらの生活も慣れたというよりは、思い出したという感じ。大学の進級も難なくクリアしている。

土井さんの代わりに来たお手伝いさんはとても良い人ではあるが、直樹は以前のようにお手伝いさんにあまり手を掛けさせないように気をつけている。

1年間の一人暮らしはこういう部分でも無駄ではなかったと、自分に言い聞かせるための意味もあった。

更に乗せした形で、できることはなるべくやろう、そう考え、大学関係者の紹介とある弁護士事務所でもアルバイトをしている。

別に弁護士になろうというわけではないのだが、誰かの真似をしたわけでもない。

興味がないよりも、興味があることの方が良いと思ったから。

弁護士事務所に通うに当たって直樹がほのかに期待していたことは、テレビドラマでよく見る金銭トラブルなどを抱えた人を助ける正義の味方の図。

こういうことができるんだと期待していたのだが、現実随分と違っており、仕事といえばほとんどが書類関係。

机の上で済ますもの。

会社間の仲介人、株、そういったものがほとんどだった。

更に直樹は、仕事に関して驚愕の事実を目の当たりにしていた。

小さな個人店から大きな会社までの、破産手続きの多さ。

どこの誰かも知らない、そんな人たちが、構えた城を崩壊させて行く。

それが、この紙の上で行われている。

そして当然のように思い出し、忘れてはならないこと。

紀子。

直樹は高3の夏、ようやくと言っていいのだろう。紀子の家族が何故あの地を離れなければならなかったのか、その全てを知った。大きいものが小さいものを、強が中込みの小を呑み込む様。これが自然の摂理であると学んでいた自分がもどかしく、腹立たしい。

紀子さんの家が中や小だったのか。

そんなワケがない。

たとえそれは鼻唄だと言われても、覆すつもりはない。

そして、アンタは本当に強なのか？

一緒に暮らしている俺には、そうは見えねえが。

そんな風に思う。

父とは一人暮らしをしていた1年なども含め、一体何年話をしていないんだろう。

許すとか許さないとか、許してくれだとか許してくれなくていいだとか、そういうことではなく。

本当にもう覚えていない年月、疎通の何たるかということがない。

直樹は、紀子の姿を思い出せば噛み締めるものがあり、そしてあの頃思い描いていた将来を思い浮かべる。

到底取り返しなどつかない、彼女にとっての自分の存在。

考えれば考えるほどに血迷いそうになり、痛感するのだ。

こちらに越してからの2年間、あの2人とは何度か会った。

こっちにも招待したし、向こうにも何度も行った。

電話で話をするのは、2人合わせて月4、5回というところだろうか。

年月を重ねると、付き合い方というのもそれに見合ったものに変わっていく。

あの2人はもうすでに就職していて、こちらは学生。ある程度気を遣い、同じように気も遣われているのだろう。

18を越えて高校を卒業してから、お金を使う遊び方でないと楽しくなくなっているように思う。

以前のように部屋に集まり、ダベツているのもいいんだが、それだけじゃ済まないようになっていく。

確実に変わるんだろう。

俺の眉間のシワと一緒になのさ。

全く気づかなかったが、俺の眉間には顔の力を抜いても消えない、縦の溝ができていく。

寝ているときまで力んでいるのか、どうなのか。

覚えていないということは、もうこの溝は形状記憶されて、元に戻ることはないんだろう。

まあ、それでいい。

年輪ってやつがあるからな。

俺はあと2年で確実に学校を卒業し、あっちで就職する。そう決めている。

この日、直樹は大学の講義を昼までで終え、アルバイトに行っていた。

家に帰るとすぐに、新しいお手伝いさんの島尾さんに言われた。

「直樹さん、大林さんて方からお電話がありましたよ。帰ったらすぐに電話してくださいとのことですよ。」

いつも電話がかかってくるのは夜遅くなのに、どうしたんだろう。

「分かりました。後でかけます。ありがとうございます」  
それほど気にすることもなく、直樹は食事を済ませる。

島尾さんは気を利かせてくれているのか、父が帰宅し食事をする時間とズラして、直樹の食事の用意をしてくれる。

何だか逃げているようで微妙ではあるが、あの人なりの気遣いなのだろうと何も言っていない。

…が、もしかしたら、父の命なのかもしれない。

食事を終え、自室に戻る。

アルバイトの関係で、株式について少し勉強しなくてはいけなかった。

机に着き、買ってきた本に没頭する。

必要な箇所をノートにまとめ、暗記するために何度も何度も、繰り返しその部分を書いていく。

と、廊下で電話の音が鳴り始めた。

時計を見ると、23時を過ぎている。

ああ、島尾さんはもう帰ってるな。

直樹が腰を上げて部屋を出ると、それとほぼ同時に慶也の部屋のドアが開いた。

電話に近い慶也が受話器を取り、

「……あー、パクさんですか。こんばんは」

部屋に戻ろうとしていた直樹だが、再び向き直り、電話に近づく。

「ハイ、元気です。……はい、……あ、すぐソコにいますよ。ちょっと待ってください」

と、慶也は受話器を押さえながら、

「パクさんから」

そう言っただけで直樹にそれを渡した。

そしてすぐに自室へと入って行く。

慶也もよく頑張った。

今は有名な進学校に通っている。

あの頃の明るい性格そのままに、父に言われるまま勉強に勤しんでいる。

あの時2人で話したことは、今でもたまに思い出す。

アイツはとても立派だ。

直樹は、今となっては両手を広げてそう思えるのだ。

「あ、もしもし、パクウ？」

『おい直樹！お前何やねん！帰ったら電話してくれ言つたやんけ！』

「あー、悪イ悪イ。ちよつとバイトのね、ことでね…」

忘れていたのに言い訳をしようとする直樹の言葉を、パクは待たない。

『そんなんエエねん！お前、今週末ヒマか！？』

「イヤ、ヒマじゃないよ。バイトがある」

『休め！ゴツツイ大事な用事がある！』というより相談や！』

「相談？」

結構長い付き合いだが、相談があると言われたことは多分……初めてやな。

パクの剣幕とそのセリフで、何となくだが大ごとなんだろうと悟った。

「おう、分かったよ。じゃあ俺、今週末そっちに行こうか？」

つていうか何や？何か問題が起こったんか？まさか美奈子ちゃんか？」

『イヤ、まあ、美奈子の関係したら関係なんやけど……ちよつとな、アホを説得してほしいんじや』

「アホを説得………」

よく分からない。

『タケシも休まずし、俺も仕事休むから、土曜にこっちに来てくれ。電話代かかるから切るで！会ったとき話す！』  
そう言つて、パクは一方的に電話を切ってしまった。

……アホ？

タケシも、つて言つてたからタケシのことか？

中途半端に聞いてしまったおかげで、不安が募る。

この日は水曜日。

直樹は次の日、バイト先の弁護士事務所に電話をして休みをもらい、その日のうちに新幹線に乗り込んだ。

内腿のムズムズが治まらないのだ。

しょうがないのだ。

目的地の駅に着いたのは、予定より二日早い夕方。

何度か行ったことがあるのでパクの勤め先は知っているが、突然訪ねて迷惑を掛けるわけにはいかない。

直樹はそのまま駅を出てタクシーに乗り、パクの家へと向かう。

途中、タクシーの中で財布を広げてみた。

ヤベー……帰りの新幹線代しかないやんけ。

そう思うが、それよりもこの心配事の方が先に立つ。

やがて、タクシーはパクの家の前に着いた。

まだ家には帰っていないことは分かっているので、パクのお母さんのやっている焼肉屋の方に入ってみる。

「こんにちはー」

店の中を覗いた直樹に間髪入れず、

「アラッ！！」

という、いつもの声。

「秋月くん、久しぶりやんか！東京で工工大学行つとるんやろー？  
やっぱりアンタ偉いなあ！」

初めて会ったときからな、顔つきがちゃう思うとったんや、おばちゃん！

まー、久しぶりに見ても相変わらずハンサムで、おばちゃん口から心臓出そうやよー！」

俺はまだ「こんにちは」しか言ってるねえのに。

思わず口元から笑みが零れた。

「お久しぶりです」

その直樹の声を遮るように、

「何してんの秋月くん！早よ入っておいで！まだお客さんも来んから、おばちゃん暇やねん。話相手して！」

そう言つて、直樹を店に招き入れる。

直樹とパクのお母さんは、テーブルに向かい合つて座つた。

聞いていいのかわからないが、この内腿のムズムズ感を何とかしてしまいたい。

そう思い、直樹は尋ねてみる。

「健くん呼び出されて来たんですよ。何か用事がある言つて。健くん、何かありました？」

それに対してのお母さんの答え。

「健はねえ、秋月くんのおかげでホンマに性格柔らこおなつて！おばちゃん全部、秋月くんのおかげや思うとるんよ！」

ん ……話が逸れる。

だがこの時、パクのお母さんが話したことは、以前から直樹がパクに聞いたかつたことが多く含まれていた。

「あの子にはなあ、お兄ちゃんがあつたんやわ。3つ上のな。それがなあ秋月くん、勉強もするんやけどゴンタクレいうヤツでなあ。

秋月くんと同じ中学校行つとったんやで。  
せやけどケンカもようやつて、いつもケガして帰つて来よつたわ。



健はな、そがいなん見てずっとおつたから『俺は兄貴みたいにはな  
らへーん!』言うて、勉強ばかりしててんやけど。

中学の2年のときにな、交通事故でな……。  
これが轢き逃げで、まだ轢いたヤツも捕まってるやないっていう状態な  
んやわ。

その車に轢かれる前の晩に、健はなあ、お兄ちゃんと大ゲンカして  
から。その後には交通事故で死んでもうたやろ。

その後あの子、変わってもうてな。  
自分の生んだ子おに、何でこんなに恐れ慄かなアカンのやって、ず  
っと思うとつたわ。

秋月くんと会うたくらいから、ちよつとずつな、柔らかおなりだし  
て、店も手伝うてくれるようになって。

おばちゃんホンマ、秋月くん尊敬しとるんやよ。ありがとうな」

……本当は、目を閉じながら聞いていたかった。  
でも失礼なので、お母さんの目をちゃんと見ながら聞いた。

誰にだつて、大きかろうが小さかろうが、やっぱり何かある。  
そう確信した。

俺なんか、気楽なモンや。

「あの、おばさん、」  
ここまで言った直樹。

本当は、  
『パクウのお兄さんが亡くなったとき、悲しかったですか』  
そう聞きたかった。

しかし、聞けない。

「イヤ、僕は何もやってないですよ。健くんは僕が会ったときから、  
同級生と思えんくらいオトナやったし」

そう答えてはみるが、直樹はこの時とても嬉しかった。

優等生の期間が長かったわりには、人に褒めてもらったことなどなかったから。

本当のところは、俺の影響なんかないんだろっけど。あつたとしても微々たるものなんだろうけど。

これは素直に受け取って、折に詰めて自分の中に仕舞っておこうと思つた。

「えーっと、秋月くんは健と同級生やから、もう二十歳超えとるわな。ビール飲むか？ビール」

「イヤ、僕、お酒飲めないんですよ」

「じゃあお腹空いてるやる。用意するからちよっと待ってな」

「イー？」

思わず声が出てしまった。

「イヤ！氣イ遣わないください！僕、どっかで済ませますから！」

「何言うてんねん。焼肉屋に来て何も食わんってないやろー、アンタ！」

おばちゃんも仕事の前にごはん済ませるんやわ。おばちゃんの手相手してやー」

…ダメか…！

遠慮じゃないのが通じない！

パクのお母さんは、テーブルにどんどん肉を運んでくる。

従うしかねえか……。

時計を見てみると、17時を回ったところ。

パクの仕事が終わるのは18時。

直樹はパクのお母さんの話を聞きながら、食事を始めた。

あの、変なゴムみたいなアレを除けば、おいしいなあ。

…そういえば、あの時の弁当もおいしかったな。

パクのお母さんはよく笑うので、つられて自分も笑ってしまう。知らないうちに、直樹の内腿のムズムズは消えていた。

最初はどのようなかと思っていたこの場の空気だったが、だんだんと慣れてきた。

直樹はパクのお母さんと同じ網に向かい、肉を焼きながら談笑している。

やがて外から、車が砂利を踏む音が聞こえてきた。

「ああ秋月くん、健が帰ってきたで」

それを聞き、店の入口を振り向く直樹。

出迎えようとも思ったが、あとこれだけ食べちゃおうと、網の上に置かれた肉と野菜を一気に頬張る。

そここうしているうちに、入口が開くガラガラという音がした。

直樹はもう一度、振り返る。

肉を箸で掴んだまま。

入ってきたのは、作業着姿のパク。

彼は直樹に気づかない。

「ちょっとアンタ、秋月くん遊びに来とるんやで」

冷蔵庫からビールを取り出そうとしていたパク、その声に顔を上げて直樹を見た。

「ありや！お前何やっとなねん。土曜日言ったやんけ！ビックリしたわ！」

ナニ仲良う顔合わせてメシ食うとんや。お前ら付き合ってるのか？まだ必死で肉と野菜を口の中に放り込んでいた直樹、

「ほふう、はんはいいははえはは、ひーはふはほ！？ほっほーへひははいは！！」（パクウ！あんな言い方されたら気になるやる！

？速攻で来たわいや！！）

「……ちゃんと飲み込んでから喋ってくれるか。何言ってるのか分からへんよ」

パクは出しかけていたビールをまた仕舞い、直樹と向かい合ってテーブルに着く。

口の中のものを急いで飲み込み、直樹はヒソヒソと囁くように言った。

「ハ ……ッ今日はコレ、めっちゃうまいわ、パクウ」

「イヤ、そんなんでもエエねん。土曜日言うたのに、速攻やなお前」

「電話じゃ何やからってことやる？何があつたんや？」

「まあ、話しながら行くか」

手招きされ、直樹はパクについて行く。

「おばさん、ごちそうさまでした。すみません、片付けもせんと」

「ああ、エエよエエよ。また来てな！」

2人は店を出て、パクの父の車である軽トラに乗り込む。

「行くところがあんねん。ついて来てくれや」

車の中で、今回の経緯の大体を聞いた直樹。

そんなことで呼び出されたのか、とは思わないが、パクの剣幕から察して自分はパクの方に乗るべきなんだろうと思った。

しかし自分の意見としては、別に……タケシの勝手だろうと。

話の内容は、タケシが勤めていた印刷会社を辞めたということ。

そして再就職を決めたということ。

が、その再就職先というのが、極

いわゆるヤ

直樹は頭を捻らせる。

わざわざあっちから呼び出されて、……俺に何か話すことがあるの

か？

そんなことをいろいろと考えているうちに、パクは車を停めた。

現在タケシが住んでいるマンション。

以前住んでいたマンションには何度か行ったことがあるが、これはまた。

直樹は

「へ〜〜〜〜〜」

と言いながら、そのマンションを見上げる。

随分と立派なマンションだ。

ヤ　ザってというのは、そがいに儲かるんかいな。

「アイツ、今日は家おるハズやねん。来いや！」

カリカリしているパク。

言われるがまま、後をついていく。

「なあパクウ、そんなにイライラすんなよ。怒っとつたら話にならんやろ？」

「アホ言え！！イライラせずにおれるかコレが！！」

まったく！ドカーンって儲かる話とその辺に転がってるワケないやろ！

まったくアイツは！どこまでもどこまでもアホで！！」

……この温度差といたららない。

タケシが決めたことやろ？

そう思いながら、そう言い出せずにいる。

2人はエレベーターに乗り、10階で降りた。

逸る気持ちを抑えられない様子のパク。

早歩きでタケシの部屋の前に向かう。

そして、

ピンポーン、  
ピンポッピンポッピンポッピンポッピンポッピンポッピンポッ  
「止める、パクウ！」  
制する直樹だが、パクは聞いてない。

玄関のドアはすぐに開いた。

出てきたのは、妹の美奈子。

「あー、パツちゃんと秋月くん！」

「おい、兄貴おるか」

「いや、今出掛けてるんやけど」

「上がらせてもらうで！」

そうして、パクはズカズカと部屋に上がりこむ。

直樹はその調子に合わせられないでいる。

「美奈子ちゃん、体調どう？」

「今はちよつといい感じなんやけど、これから寒なったらしんどなんねん」

美奈子は直樹が最初に会った頃より、随分と顔色も良くなっていた。年を重ね、体が大きくなることで以前のように寝たきりの生活は送らなくて良くなっているようだ、この病気は手術をしない限り、完治することはない……

直樹は美奈子の顔を見るたび、

頼むから、死ぬなよ。

兄ちゃんが何とかしてくれろぞ。

そう思っている。

「美奈子ちゃん、寝とかなくていいんか？」

「うん。ちよつとくらい動いてる方が調子いいから」

「そっか」

できることはしてあげたいと思うが、今の自分は無力である。

「おい、美奈子！兄貴、何時ごろ帰って来るんや！？」  
お構いなしのパクの声。

「えー…予定全部聞いているわけじゃないから、分からへんよ。  
今お茶入れるから、ちよつと待つといて」  
そう言つて、美奈子は台所に行つてしまった。

部屋に入つて、キョロキョロする直樹。

随分と立派なマンションだ。

直樹はテーブルを挟み、パクと向かい合わせに座つた。

「なあパクウ、極 の人つてそんなに儲かるんかな」

その問いに間髪入れず、

「知るかッ！！」

部屋には立派なテレビやビデオも置いてある。

聞いた話では、パクもタケシの転職を知らなかつたらしい。

タケシはもうかれこれ3ヶ月、あの世界で生きているらしい。

うーん……スゴイな。

直樹はそう感じる。

どうやら埋まりそうもないパクとの温度差を無視するように、直樹は部屋の中をキョロキョロ見回していた。

部屋を見回し、やっぱり大したもんだと思った。

以前住んでいたあのボロ家を考えると、あの殺風景だった家を思い出すと。

家具の立派さが今のタケシの生活を映しているとは限らないが、住む環境が良いに越したことはない。

直樹はパクに向き直り、

「なあ、今からタケシに文句言つつもりやる？そんなん言つてエエんかなあ」

「……………」

美奈子がお茶を持って部屋に入ってきた。

「パツくん、何怒つとるん？」

「……………」

「どうやらタケシもパクも、今回のこの件を美奈子には話していないようだ。」

それはパクの顔色と、口元を見て察した。

「おい美奈子、俺は今から直樹と話があるから、お前は部屋に行つときなさい」

「ちよつとー、パツくん。ココ、誰の家やと思うとるんよ？何でパツくんにそんなこと言われなアカンの」

「エエから！部屋へ行つときな！」

「コイツ、やってること・言ってることがメチャクチャやな。そう思った直樹、

「美奈子ちゃん、ほんまにごめんなんやけど、部屋借りといてな。」

ちよつとパクウと話があるんやわ。2人じゃないと話しくくつてね」

「ん…………じゃあ分かった。宿題があるから、それやつとくわ美奈子はそう言つて席を立った。

彼女は今、高校の通信教育を受けている。

通信教育だつて立派な学校だと言つて、直樹が勧めたのだ。

「とにかくな、パクウ。頭ごなしに言うのはエエことないつて」

「おいお前！一体どういふつもりや！？なあお前！ドツチの味方なんや！？」

「……………っていう考えやないんや、俺もな。せやけどな、こんなんエエわけないやろ」

それから、パクは自分がどれだけ暴団、極、ヤザなどが嫌いかを語り始めた。

その中で最も大きな要因として、彼の父が経営している工場、パクも勤めているあの工場が、今現在地上げに遭っているということ



聞いた。

この場で「そっかあ…」と言うしかなかった直樹。言いたいことは結構ある。

その地上げ屋はタケシがやってるワケじゃねえだろ、を含めてでも取り合えず、何も言わずにパクの話聞いておく。パクに言いたいだけ言わせようと、そう思った。

声が枯れるほどに長く、大きめの声で喋ったパクはいったん息を吐いた。

「…なあパクウ。お前、腹減ってるやる。ごはんも食べてないしな。何か買って来てやるよ」

そのタイミングで、直樹は口を挟んだ。

「お、おう。…あ、そっか。俺も行こうか？」

「イヤ、一人で行くよ」

そう言って、直樹はパクの前に右手を差し出す。

「お金。お金ちょうだい。俺、帰りの新幹線代しかないから」

「えー？何や、奢りとちゃうんか」

パクは財布を出し、千円札を何枚か直樹に渡した。それを受け取り、玄関に向かう直樹。

喋るだけ喋ったら、ちよつと落ち着いたみたいやな。

次は腹いっぱいにしてやろう。

腹減つてるとロクなこと考えねえからな。

そう思い、玄関で靴を履こうとした、その時。

ピンポン、というインターホンの音と同時にドアがガチャッと開いた。

次の瞬間、顔を突き合わせた、直樹とタケシ。

「うわッ！秋月！？どうしたんやお前！」

「あ、ああ。おかえり。ちよつとコッチへ遊びに来たんやわ」

「ふーん、そうか…」

返事をしながら、タケシの視線は直樹の背後へと向けられる。直後、タケシは慌てた顔をして、何故か再びドアを開け、外に出ようとした。

何だ？と不思議に思い、振り返ろうとした直樹だが、それが及ばないほどの速さでパクがタケシに飛びかかる。

「オイコラ、タケシ！！とうとう捕まえたぞお前！！散々逃げやがって！！」

背後から腕を回し、タケシの首を絞めるパク。

その体勢のまま何も言わず、ただ外へ逃げ出そうとするタケシ。

「コラ！！逃げんなや！！」

「に、逃げる！！」

この2人の遣り取りを美奈子が気づかないか、直樹は心配だ。

「おい、ちよつと待てつて。ケンカすんなよ」

そう言つて、2人を眺める。

パクもタケシを引つ掴むのをやめ、タケシも逃げるのをやめた。

「今日はな、話を聞きに来たんやつて。だからパクウも熱うなるなよ。なあ？タケシ。奥で話しようや、な？」

「ほんまじゃ！！タケシ！聞きたいことが山ほどあるんや！こつちへ来いッ！！」

そしてパクは先々と部屋の中へ戻って行く。

「……………」

俯いたままのタケシ。

まったく。

このタケシを見れば、何か考える部分があるのは分かるやろうに…

「ほらタケシ、早く上がってくれよ。な？奥にお茶用意してるから。遠慮せずに入ってくれよ！」

「あ、……………うん」

ココ、俺の家やる！？っていうツッコミが入ると思ったのに。  
タイミングが悪かったのか、タケシに冗談は通じなかった……。

3人はリビングのテーブルで向かい合っている。直樹とタケシ、その向こうにパク。

しばらく沈黙が続いた後、直樹が口を開いた。

「それにしてもタケシ、このマンションすごいやんか。テレビとかも大きいし、部屋も何個あんな。

「ヤ、ザってそんなに儲かるんか？」

するとタケシは即座に

「シッ！！秋月、美奈子は知らんのや！」

そう言つて、辺りをキョロキョロと見回し、美奈子を探す。

そこへ、相変わらず不機嫌そうなパクが言った。

「美奈子には部屋に入るとき言うとするよ。聞いてへん」

「あ、そ、そうか……え、えーっと……ここな、まあ先輩つていうか兄貴つていうか、その人のマンションやねん。

このテレビとかも全部、その人のヤツやねん。貸してもらつてる」

タケシは少し斜めに体の向きを変え、直樹に向かって続ける。

「実はな……恥ずかしい話なんやけど、金が貯まらんでな。

前の印刷会社、アソコに文句があつたワケやないねん。

せやけど、金が貯まらへんのよ。

梶さんつて言うんやけどな、あ、このマンションの持ち主。

前からちよつと知り合いでよう、何となく話したら、今の仕事をな、紹介してくれたつちゅーか……」

タケシはとても話し辛そうに、現状を直樹に説明している。だが、ここで声を荒げたのはパク。

「テーブルをバンッ！！と叩き、

「だからよう！！俺もゼニ貯めてる言うたやんけ！！ほんでソレはあげるんやなくて貸す言うとなねん！！」

「だから、そういうワケにはいかん言ってるやんけ。何回言わすんや」

……美奈子の手術代のことだと、確信した。

パクは腰を上げ、タケシの胸倉を引つ掴む。

「美奈子の手術がどうでもエエ言うとんちゃうねん！急がなアカンのも知っとる！」

せやけどなあ！ヤ ザみたいなモンになってゼニこしらえたとして  
もや、お金貯まりました、じゃあつて抜かれるモンちゃうやろ！！  
お前がやってることはごっつい安易な、軽率な行為やぞ！！

ちよつと頭使えや、タケシ！！」

「……………」

しかし、ああ言われてもこう言われても、タケシは一切攻撃的な面を見せない。

……タケシだつて、そんなこと分かってると思うよ。

直樹はようやく、言っておくべきことを言うことにした。

「パクウ、そう頭ごなしに決め付けるなよ」

そう言つてパクを制し、少し考える。

本当は、あまり言いたくない。

「2人とも、俺の親父と親父の会社、知ってるやろ？」

直樹の言葉にパクも直樹に向き直り、腰を下ろす。

直樹が家のことを話し出すのが珍しいからだ。

「ウチの親父の会社もな、表に出てるクリーンな部分と、外には出せれんブラックな部分があるんや。

俺、子供のときからヤ ザモンの人らに、結構知り合いがあるんよ。

…あー、知り合いつていうか、まあ、お小遣いもらつたりね、遊んでもろうたりしたことがあるんや」

2人は少し驚いた様子で、直樹の話を聞いている。

直樹は2人に説明した。

ああいう人たちの中には本当に悪い人もいるが、そうでもない人も

いる。  
「必要悪っていうワケじゃないんやけど、あの人たちがおること

で、うまく社会が回ってるっていう部分も少なからずあんな。

パクウな、の駅前にゴツツイでかいホテルあるやん」

「おう。ホテル やろ？」

「そう。アソコの経営者ってヤ ザやぞ」

「……………」

2人は一瞬絶句する。  
「…嘘吐け直樹！お前、エエ加減なこと言っな！俺らが知らん思っ

て！ヤ ザがそがいなフツウの商売しとらへんやろ！」

こんなに頑固なパクも珍しいと思った。

直樹は続ける。

「ほんまやって。何やったら って全国チェーンの飲食

屋あるやろ。アレもそうやぞ。

嘘やと思うんやったら、調べてみたらエエよ。 って名前の

人やから。あの人は 代目 会の会長なんや」

直樹の話は10分ほど続いた。

パクもタケシも半信半疑の表情だったが、途中からは呆気に取られ  
たような顔をして聞いていた。

「タケシが何か悪いことをしでかすなんて、決まったワケやないや  
ないか。そやろ？タケシ」

「イヤ、先のことは分からへんねんけど……………」

「俺はまだ学生やから……………バイトやってるけど高が知れてるし。

あんまり力になれんかもしれんけど、美奈子ちゃんの手術は確かに  
急ぐもんやからな」

ここでいったん俯いたパク。

「あ　　ッ！！直樹！お前に理詰めで来られたら勝てるワケないやんけ！！お前、東京くん dari から一体何しに来たんや！！  
くそーッ！！こつなつたらタケシ！将棋盤出せエ！いつものヤツで決めるぞー！！」

将棋盤……？

「何やパクウ、将棋すんのか？」

「そうか、直樹は知らんのやな。俺らはいつも、意見が分かれたときは将棋のへこまわしじゃ！」

「へこまわし？」

その直樹の問いにパクは、

「知らんで結構！」

「……おいパクウ。お前、俺の人生、何や思うとんや。何や、俺はへこまわしで負けたら、足洗わなアカンいうことか？」

「おう、そうや！今から賭け事決めるぞ！」

もし俺が勝つたら、お前はその後すぐに直樹と東京に行ってもらう。しばらく東京暮らししてもらうぞ。そうでもせんと逃げられへんからな！

美奈子はウチで預かる。

ほんで俺が負けたら、今後一切お前のやることに文句は言わん。これまで同様の付き合いで行く。

どうや！乗らんって言わさんぞー！！」

タケシは

「よし、分かった」

と静かに答えた。

そして将棋の駒と盤を用意する。

「直樹、お前は中立で頼むぞ。コイツがイカサマせんか見とつてくれや」

パクにそう言われたが、

イカサマも何も、本将棋のルールもよく知らないが、このへこまわ

しってヤツ、何だ？  
スゴクみたいなものか？  
どうなったら終わりなのかもよく分からない。

その、子供がするような将棋遊びに、2人は真剣そのもの。  
直樹もつられて手に汗握る。

一体何時間やったのか分からないが、そのへこまわしで勝負はついた。

タケシが勝ったのだ。

「よっしゃーッ！」

や、

「俺の勝ちやー！！」

そんな勝ち名乗りはなかった。

スムーズにそのへこまわしは終わり、それと同時にパクはスッと立ち上がった。

「せやけど腹減ったな。タケシ、お前この後仕事か？」

「イヤ、今日は休みや」

「そうか。直樹は今日、コッチへ泊まってくんやる？」

「う、うん。……でもホテル代がないんよな……どうしようかな」

「じゃあ俺んトコへ泊まれ。」

メシ行くぞ。帰りに美奈子に何か買って来よう」

そう言っつて、パクは足早に部屋を出る。

「何しとんねん。早よ行こうや」

「お、おう……」

2人は返事をして、パクの後について行く。

その後も随分夜遅くまで2人とは話をしたが、パクは一切今回のことについて話をしなかった。



……納得なんかしてへんよな。  
分かるよ、パクウ。  
心配なんやな……。

どっち付かずで宙ぶらりん、そんな自分の立場で、今回何かの役に立ったのか。

タケシの選択ってどうなん？

そう言われても、分からない。

分からない、で正解だと思う。

パクの笑顔でのお喋りを聞きながら、そんな風に思った。

直樹は次の朝、一番早い新幹線に乗り込んだ。

この日も夕方からバイトが入っている。

今回の件で、更に働かなければならないと思った。

パクは納得していないだろうし、タケシも納得の上のことではないのだろう。

考えることが多すぎた。

考え事をやめないクセのおかげで、新幹線での移動は随分と早く感じた。

駅に着くと、直樹は家方面ではなく、病院へと足を向ける。

母は約1年前から、入退院を繰り返している。

病名は胃ガン。

一度手術をしたのだが、転移があり、もう手遅れの状態だった。

一月前、あと1年持てば……と宣告されていた。

このことは母には伝えていない。

おそらく父も、伝えていないだろう。

慶也と直樹は照らし合わせるでもなく、可能な限り病院へ行っている。

父がどうしているのかは、知らない。

直樹は病院への道すがら、花を買った。  
白やピンクが入った、清楚な花束。

エレベーターに乗り、慣れた匂いの廊下を進む。  
そして、病室へ入る前に直樹が必ずすること。  
顔の筋肉を上下左右に動かし、解すこと。

カチャリ。

「お母さん、どうですか？調子は」  
言いながら部屋に入った。

母は直樹が訪れるといつもベッドの上に座ってぼんやりと外を眺めている。

「ああ直樹さん。さっき慶也さんが来てたんだけど、会わなかった？」

「いや、会いませんでしたよ？いいんですか、寝てなくて。お加減は？」

「体調は悪くはないんだけど、やっぱり退屈でしょうがないわ。  
直樹さん、今度来るときウォークマンとテープを何本か持ってきて  
くださる？」

「いや、そのことなんですけど、今日は良い知らせですよ」

先日、医師と話をした直樹。

これからしばらくは自宅療養という形で、調子の悪いときだけ来て  
くださいと言われていた。

「この水曜から家へ帰れますよ、お母さん。随分良くなったみたい  
ですからね」

「え？それは退院していいってことなの？」

「そう。そういうことです。良かったですね、お母さん」

直樹はここで、ニコツとした笑顔を母に見せる。

「僕、この後バイトがあるんで帰りますけど、この花だけ花瓶に入れますから。」

また明日来ますよ」

そうして花瓶を手に取り、部屋を出た。

……今の母、俺にとっては、嘘が最大の味方。

告知に関してはいろいろなことが言われているようだが、言わずに済むならそうしていたい。

直樹は花瓶に花を生けて戻り、サイドテーブルの上に置いてもう一度

「また明日来ますからね」

そう言っつて、病室を出た。

エレベーターで降り、エントランスを抜けて病院の前のタクシー乗り場に行くと、そこには慶也の姿があった。

「おい、慶也」

「アレ、兄さんも来てたのかい？今から家に帰るの？」

「うん。いったん家に帰るよ」

「じゃあ一緒に帰ろうよ。兄さん、昨日どこ行ってたんだ？」

慶也に、タケシのことを話すことはないと思った。

だから、遊びに行っていたわけじゃないんだけど、と向こうに行っていたことを説明する。

「兄さん、アッチの人とまだ付き合いあるんだもんな。スゴイよな。僕なんか、もう連絡も取ってないよ」

「お前はほら、社交性がさ、あるから、どこに行っても馴染めるしな。それはそれでエエんちゃうか？」

「えー、僕は広く浅くより、狭く深くの方がいいと思うけどな」

慶也は高校での成績も上位に食い込むほどの頑張りを見せていた。いつもニューヨークに置いて、いざとなったらどこにでもギアを入れられる状態。

お前の方が良いに決まってるよ。

直樹は他意なく、そう思う。

この時、母の退院の日には何時にここに迎えに来ようと、2人は約束した。

お互い、母のその後については一度も話をしていない。

彼は俺たちの前で愚痴を言わない。

両親のことを、悪く言わないのです。

一度捨てられ、二度までも……

それに関しては五感を失っているかのように、本当に、まるでなかったかのように振舞います。

今回のことも確実にそれに付随し、延長線上に起こったことなのに。

俺が言い、思うまでもなく、あの2人はお互いの言い分を理解しながら断じていたんです。

俺だって3歩離れているつもりはない。

少しは理解しているはずだ。

だが彼らの思想を見ると、俺の中枢は何と段だら縞なんだと、恥じて思う。

色に合わせてガタガタで、断層すらできているんだ。

茶渋のようにこびりつき、色づいている俺の部分。沖積されて出来上がってしまった俺のその部分は、もう方法を厭わなくてもこびりついたままなんだろう。

だって、聞いてください。

俺はずっと、母を暢気でどこか間の抜けた人だと思っていました。いつも椅子に座っているこの人は、そのうち歩き方すら忘れるんだろうと思っていました。

でも、やさしい母さんなんです。

俺が贅沢三昧し、学び、居座り、ああしてこうして、こうやって来れたのは、母のお蔭。

そして、父のお蔭なんです。

『お父さん』

『お母さん』

俺のお母さんが、もうすぐ死にます。

俺は何をすればいいのでしょうか。

どんな刃物を使おうと、どんな角度から切ってみようと、俺はこの世は生きるものの物だと考えるんです。

どの角度から見てもらっても結構です。

それは最果てまで行っても、変わらない。

そして、俺もその生き物の一点です。

それと同時に思うこと。

もしかすると、あんな風に悲しみ事を考える俺を、俺が愛おしいのではないのだろうか。

どうですか。

俺は、そのようにできていますか。

こう見えても、人に死んでほしくないと考えているんですよ。母なら尚のことなんです。

丁重に、丁重に、時間が過ぎて行く。

このまま何も変わらずなのか、そして、いつまでなのか

下劣な自分が愛おしいのではない。  
疎ましいのです。

どんな刃物を用いて、どんな角度から切ったところで、今の俺は何も持ち合わせてはいない。

こういうのはどうでしょうか。

いっそ蓋を開けてみれば、

「俺は煮え湯を飲まされた」

過ぎてみれば何もなく、こんなことを俺は笑って言わないですか。

「心配して損したで、まったく」

続けて笑って言いませんか。

お父さんの話は聞いていないんです。  
意見もです。

ただ俺は、生きていてほしい。

そう願っている。

宣告されたその時期まで、もうそれほど時間は残っていません。彼らのことも心配ですが、こっちの方も心配です。

……もうすぐ、お母さんが死んでしまいます。

母は家に戻り、以前のような生活を送っている。

「お母さん、痛いですか？」

そう聞きたいが、聞いていない。

変に気を遣うのも、少し違うような気がした。

父は以前と変わらぬ対応を、母にしている。

意図する部分

本当の箇所

そういったものは俺には分からないが、俺もそうしよう。なるべく普通に、だ。

慶也にもそう伝えよう。

俺だってここの一員なんだ。

間違っちゃいない。

いつも母が座っている椅子は今、母が座ることによって以前よりも大きく見える。

いつもの体勢なのに。

母は週に一度通院することになっている。

いよいよ悪くなったときは、また入院してもらおうということを経験から言われていた。

通院は慶也と直樹が順番で付き添うことになっている。

それ以外は、何も変わらない日々。

学校が終わればバイトに行く。  
帰って勉強する。

そんな日々が淡々と続いていくものだと思っていた。  
…… 一月後を迎えるまでは。

その日、直樹は徹夜明けでアルバイトに来ていた。  
眠い目をこすりながら、デスクワークをこなしている。

最初の頃は何が書かれているのかすら分からなかったこの書類も、  
大分理解できるようになってきた。

書類を繰りながら、直樹はふと昨日・一昨日のことを思い出す。

先日の三連休を利用して、直樹はパクとタケシに会いに行っていた。  
その際、タケシのマンションに泊めてもらう代わりに、仕事を手伝  
わされたのだ。

仕事といっても単純明快なもので、商品の箱詰め梱包。

「おい秋月、頑張ってくれよ。ここにあるの全部、朝までに詰め  
込んでしまわなアカンからな」

「これを朝までかよ！？こりゃ寝ずにせなアカンな…。せやけどタ  
ケシ、こんな商売になるんか？」

「アホやなお前。何も分かってへん。

コレ、ついこないだ発売されたスーパーファミコン、知らんのか？  
みんな、欲しても手に入らへんのやんけ。転売したらウハウハや」

「転売？ああ、価格操作してんねや。付加価値つけてるワケ？」

「そうそう！コレ1個売るだけで 千円の儲けや」



「へえ…ファミコンがねえ…」

「ファミコンちゃう！スーパーファミコンや！」

世の中には、いろんな商売があるということを知った。

「……あれ？」

そこまで思い出した直樹の手が止まる。

おいおい、アレは違法じゃねえだろうな！？

そう思い、調べようとしたその時、後ろから声を掛けられた。

「秋月くん、この案件、先生のところへ通しといて」

その男性は向井さんといって、ここの社員。

直樹の先輩に当たる人だ。

彼はもう、この事務所に勤めて4年ほどになる。

「あ、はい、分かりました」

返事をして立ち上がろうとした直樹の肩を、向井はガツと押さえ、

もう一度椅子に座らせた。

「秋月くん、今日残業OK？どう？手伝ってほしいことがあるんだ

よ。ダメかな？」

別に予定もない直樹、OKを出そうとしたそのタイミングで、また

横から口を挟む人がいる。

「ダメダメ！」

そう言っただけで会話に入ってきたのは、弁護士資格を持っている洋子さん。

「アルバイトの一月の勤務時間って決まってるんだから。残業はさせ

ちゃダメだよ！」

それに今日は秋月くん、私と飲みに行くんだから！ねえ秋月くん？」

「え？」

そんな話は初耳だ。

直樹はちらりと向井の顔を見る。

……今にも舌打ちしそうな顔。

直樹は知っている。

向井が洋子に想いを寄せていることを。  
そんなのは見ていれば分かる。

「あ、イヤ……そんな約束、してないツスよね？」

「いいじゃん、行こうよ！それとも先約がある？秋月くん、モテそうだもんね」

「イヤ、そんなことはありえないツスよ」

直樹は、洋子よりも向井を立てる必要があった。

変なトラブルはご免だ。

それに、飲みに行くくらいなら寝てしまいたい。

そして寝てしまうより、残業でお金を稼ぎたい。

「イヤ、向井さん大変そうなんで、今日は残業させてもらいます」

そう言っつて、何とか洋子の誘いをかわす。

と同時に、にこやかになる向井。

……とても分かりやすい。

直樹はこの事務所にバイトに来るようになり、自分の中で約束したことがあった。

司法試験を受けること。

タケシが何かヤバイことになったときに、助けられるように。

それとタケシのように自分で部屋を借りて、一人暮らしをしたかったから。

母があの家にいるまでは、というよりも、母がいなくなってしまうたら……

とにかく早くお金を貯めて、一人暮らしをしたかった。

この日、直樹は珍しく9時すぎまで残業した。

…今日の徹夜を含めて、新幹線の時間を除けば、何時間ブツ続けで仕事したんや？

さすがに疲れている直樹だが、向井はお構いなしに

「よし！俺も終わった！秋月くん、今から飲みに行くよ！」

「え！マジっスか…」

「何だよ、イヤなのかよ？もちろん俺が奢るよ？」

「…あ、ハア…」

当然、こういう付き合いも必要だと思う。

こんな機会の時はなるべく参加するようにはしている。

だけど今日は……

「……じゃあ1時間だけ」

「よし！そう来ないと！じゃあ行こうか」

2人はそうして事務所を出た。

向井と一緒に飲みに行くのは、これが初めてではない。

何度か経験があるので、大体のパターンは読める。

この人は時間を決めてやらないと、最後まで行くタイプなんだ。

そしてお酒も強くない。

30分もあれば、グデングデンになっている。

直樹は相変わらずお酒が飲めないため、素面のままそれに付き合い合っている。

「ところで秋月くん、仕事は慣れた？」

このセリフが、酔い始めた合図。

「もう随分慣れましたよ。でもやっぱり難しいですね。

知識があつてから、それを応用する仕事ですからね。とても難しいです」

「秋月くん、それはね、この仕事だけじゃないよ。全部そうだよ。

人付き合いだってそうだろう？君は学校に友達がたくさんいるのか？」

「まあまあ、ぼちぼちというか…。あんまり時間がないんで、付き合いができないんですけど。」

僕、ちょっと前まで関西の方に住んでたんですよ。ツレっというんなら、向こうに2人いますかねえ」

「関西？それで変な関西弁使ってるんだな。言葉遣いがおかしいと思っただよ」

この会話も、もう何度したか分からない。  
そして次に必ずこう来る。

「秋月くんは学校で随分とモテるんだろうねえ」

この質問に対しては、どう返事をして向井さんは声を荒げるのだ。

「イヤ、そんなことないツスよ」

「嘘吐け！！君イ！背が高くてその顔で！モテないわけないだろう！俺なんかね！俺なんか…：フラれた回数で地球一周できそうだよ！」

「まあまあ、向井さん。ところで、洋子さんってイカしますよねえ。」

資格持つてるし、見た目もキレイだし、最高ですよね」  
これが合図で、いつも2人の飲み会は終わるのだ。

「だろ？だろう、秋月くん！彼女はいいよ、本当に！」

「明日も仕事ですよ。二日酔いで洋子さんに会っちゃっていいんですか？」

「あ、そ、そうだな。じゃあそろそろ帰ろうか」  
ここまでで、ざっと1時間。

直樹にとつての向井。

こういう人は嫌いじゃない。

というより初めてだろう、慕える先輩というのは。

ほどほどの先輩の威厳、力というものを振りかざし、その3倍ほど直樹に優しくしてくれる。

いつものように、直樹は向井に肩を貸し、店を出た。

向井も司法試験目指して頑張っている。

いつも奢ってくれて、いろんな話を聞かせてくれる。  
直樹にとって、初めての先輩。

……それにしても重たいな。

向井は隣で何かブツブツ言っているのだが、よく分からない。  
こういう形も、愛おしく思う。  
とても良い環境なのだと思う。  
テレビで見たことのあるような、こんなシーン。  
自分も社会に参加できているような気がして、とても心地いい。

「向井さん、もう今から家に帰るんですよね？」

「おー、帰るよ」

「じゃあタクシー拾いますよ？」

「あー、ヨロシク」

直樹はタクシーを止め、向井を後部座席に乗せる。

屈んで挨拶をしようとしたその時、向井の手が直樹の頭をポンポンと叩いた。

「お互い頑張ろうな。僕も君には負けてられないからなあ。

司法試験、どっちが先に取るか競争だぞ。お互い頑張ろうな」

「…はい」

直樹はそう返事をする。

走り出したタクシーの窓から顔と腕を出し、笑ってこちらに手を振る向井。

お辞儀をして、手を振り返す直樹。

……これが、向井との最後の遣り取り。

直樹が尊重し、気を遣い、立ててきた、向井との最後の遣り取り。

直樹はもう二度と、あの事務所に行くことはない。

やって来たタクシーを拾い、直樹も帰途に就く。  
この時間になると、もうバスがなあ……。  
そんなに遠くでもないし、自転車で来ることにしようか。  
今からお金を貯める練習をしておかないと。  
いろいろ必要だからな。

運転手が何かと話しかけてくるが、それに軽く返事をしながら考える。

向井のクダの巻き方を思い出し、噴き出してしまふ。  
遣り取りは目を見張るほどに、驚くほどに順調だった。

窓の外、寒さで澄んだ空気と合わさった街灯の流れは賑やかで綺麗だ。

メーターを気にして、直樹は少し家の手前でタクシーを降り、そこから歩いて帰ることにした。

……そういえば、しばらく走ってへんなあ。

ズボンのポケットに両手をつっ込んだまま、歩く速度を少しずつ速め、駆け足に変えて行く。

白い息を早らせ、急ぐ必要のなかった帰宅を済ませようとする。

その角を曲がればすぐに家というところで、直樹はふと足を止めた。  
夜道に赤い光がくるくると回っているのが見える。  
パトカーだ。

「……………」

何台も停まり、周りに人がたくさん集まっている。  
直樹は何気なく首を伸ばし、その光景を見遣った。  
そしてまた、駆け足を再開する。

頭を過ぎったのは、何かあったのかな…程度。

家の門に差し掛かったところで、玄関の前に誰かが立ち、うろろろしているのが見えた。

そのシルエツトは、お手伝いの島尾さんのもの。

直樹は慌てることもなく、駆け足しながら近づいて行く。

足音に気づいたのか、こちらを凝視する島尾さん、直樹だと気づいた途端にすごい勢いで駆け寄ってきた。

「お兄さん！直樹お兄さん！」

その時の彼女の顔は、尋常ではなく目を見開いていた。

ここで、何かあったと直樹も悟る。

…お母さん!?

「ど、どうしたんですか!？」

事態は飲み込めていないが、直樹は慌てる。

そして彼女が言った言葉は、

「け、慶也さんが…ッ!!」

まず、頭の中の収集はつかなかった。

島尾さんが言い間違えた、とも思わない。

直樹は母のことだと決めつけ、家の中へ駆け込む。

そのままリビングへと飛び込んだ。

「お母さん!!」

だが、その光景は母云々のものではなかった。

慶也がソファに横になり、毛布を被せられている。

頭にはタオルが巻かれており、その白いタオルは鮮血で真っ赤。腕にも巻かれている、大袈裟な包帯。

「!?!」

直樹は一瞬でそれを確認し、落ち着くことなく少し視線を変えてみた。

隣には父が座り、向い合うように母が座っている。

震えている母。

おろおろ、おろおると、何故か手に持ったティッシュを千切っては丸め、千切っては丸めている。

2人ともこちらを向かない。  
考えるのは後にした。

「慶也!?!」

慶也の元へ駆け寄る直樹。

毛布を剥がすと彼はほぼ裸で、至る箇所に包帯が巻かれている。

「…ちよつ…ちよつと!何ですかこれ!?!お母さん!何ですかこれ!?!」

ひどい怪我だ。

包帯に血が滲み出している。

直樹は怒鳴った。

「お母さん!?!こういうときは救急車を呼ぶんですよ!?!」

急いで電話に駆け寄ろうとした直樹を、そこで制したのは父。

「直樹!」

と、久しぶりに名前を呼ばれた。

「何ですか!?!」



直樹はそう振り返る。

「慶也はバイク事故を起こしたよ  
父はそこから始めた。」

何を思ったか、慶也はキイの付いた原付を見つけ、それを盗み、乗り回したということ。

先ほど何台も停まっていたパトカー！。

慶也はそこで、人をはねた。

その拍子に自分も塀に激突し、体を引き摺りながら家まで帰ってきたと言っ。

それが、つい先ほどの出来事。

「慶也！お前何やっとなねんツ！？」

直樹はそう叫びながら、電話の受話器を取った。

もう唸り声しか上げていない慶也、こちらの声が届いているかも定かではない。

「えっと、救急車は…」

まず頭に浮かんだのは110だったが、気を持ち直し119を押そ  
うとしたそこで、また父が直樹を制した。

「待ちなさい」

その言葉に、直樹の手が止まる。

何を待ってって言うんだ！？

そしてもう一度、振り返る。

直後、父が直樹に向けた言葉。

それは直樹が取り合えずと表し、培ってきた骨組・骨格を確実に  
ねらせるものだった。

「お前はこれまで、誰のお蔭で育って来れた」  
「……………」

誰のお蔭で育って来れたのか。

そんなことをしている場合ではない、それしか頭になかった直樹、

「生んでくれた父母のお蔭だと思っています」

そして続けて、お二人の、と言おうとしたその言葉を、父は遮った。

「誰がそんなことを聞いた！誰のお蔭でこれまで順風満帆に来れた  
と知っている！」

「……………」

…………それを 深く 考える必要がないと、 思っ

お父さん

お母さん

慶也と

接してきました

だから、深くは…………

「…………それは、深く考える必要がないと、これまで考えてきました」  
その答えに、父が自分の考えと照らし合わせたかどうかは分からない。  
い。

大きく息を吸い、鼻から出し、次に続く。

「じゃあまず考えなさい。お前がここで何をすればいいか」  
いつもなら、ここで思うこともあるだろう。

だが直樹は一刻も早く、救急車を呼びたかった。

「救急車を呼んで、慶也の手当てをしてもらうことだと思えますよ」  
急ぎ、面倒臭いように直樹はそう答える。

しかし、父は受話器を持ってしている直樹の腕を掴み、それを下ろさせ  
た。

「そんなことをしたら、慶也が事故を起こしたことがバレしてしまう  
だろう！」

この人は……！！！！

「何言うとんねんツ！！あの頭見てみい！あの出血、尋常やないや  
ろ！！見て分からへんのか！！」

お父さんの面子は、取り合えずどっかに置いて下さい……！！」  
そう言うのと同時に、直樹は母の顔をちらりと見てみた。

相変わらずおろおろと手を震わせている。

状況を読みきれしていない直樹、それを確認して舌打ちが出てしまう。

その直樹に、父はいつもと変わらず静かに言った。

「直樹、慶也の代わりにお前が出頭しなさい」

直樹はいったん、その言葉を聞き間違えたと思った。

強張らせていた血液が、下へ下へと流れていくのを感じる。

笑って誤魔化せ。

直樹はそうしてみようとするが、笑えない。

父の目を直視しながら、今の言葉を聞こえなかったことにすること  
もできない。

「直樹、お前がバイクを盗み、乗り回し、人を撥ね、慶也も撥ねた  
ことにしなさい。」

これは命令だ」

下に流れていったはずの血液が、また逆流する。  
すすくと肥大するものにつられ、頭をもたげ始める。

「……………」

「これは取引ではない。これまでの分を私に返しなさい。  
お前が誰のお蔭で生きて来れたか、考えなくても分かるはずだ」

体の中で熱いものを感じながら、直樹は力むことができないでいる。  
頭を垂れ、父の胸に手を置き、寄りかかるように。

「貴方、一体何を言ってるんですか…………？」

この時のために、俺はここにいたんですか。貴方の先見の明は、こ  
こに届いていたって、…………そう言うんですか」

膝が折れ曲がって、どうしようもない。

貴方、と言った直樹に対し、父は君、と返す。

「君の自由にさせた覚えはない。

君の全ては以前からずっと、私が握っているんだよ。  
認めなさい」

膝をついてしまった直樹は、もう何も言い返せない。  
何も言えないが、そこで振り絞る。

「……………だったら、今ここで、殺してくれませんか、……………お父さん」

その瞬間、父は顔を硬直させ、テーブルの上の急須を鷲掴んだ。  
それを、膝をつき自分を見上げる直樹に、思いつきり投げつける。

ガシャンッ！という音と共に、急須は直樹の額に当たる。直樹は避けなかった。

息を切らせながら、その場を去る父。

直樹は額を庇おうともせず、父の方を見つめたまま。

半永久的に続くとは、決して思っていなかった、あれら。

確信した。

俺は、拾われたんだ、と。

もう、慶也のことは考えられないでいた。

母の横に座り込み、顔を見ることもなく、話をするでもなく、時間が流れる。

そこに、父専属の弁護士がやってきた。

入念な打ち合わせ。

あくまで、あくまで冷静に、弁護士は直樹に言った。

「明日の朝には帰って来れるようにしますからね」

打ち合わせの内容も、その言葉も、直樹はこれ見よがしに自分の中に刻み込む。

そして一言も発することなく、直樹はその弁護士に連れられ、警察署へと向かった。

どんな気持ちかなんて、形容し難い。

幾千万と交わしてきたであろう、いろんな事柄の中で……

その弁護士と2人、車で移動する中、

誰のお蔭で生きて来れた

これについて、深く深く考えてみた。

自首する形になった直樹。

警官の尋問、質疑応答。

それらを打ち合わせ通りに済ませていく。

おそらく多額のお金を積み、慶也が轢いたその人に支払うのだろう。幸いその人は生きているということだから。

これが夢なら……などとは思わない。

違和感なぞを通り越したその空間を、直樹は紛れもなく肌で感じている。

1時間前まで、自分の旗を夢見ていた。

直樹はそのまま留置されながら、自分の旗の柄・色・形などを破り捨てる。

……言われた通り、全てこなした。

直樹は次の朝一番で、釈放された。

迎えに来た弁護士を素通りし、走って家へと向かう。

「あれ、直樹くん！家まで送るよ。

お父さんにそのように言われてるから、乗ってくれなきゃ困るよ」直樹はそれを無視した。

よく晴れたその日、直樹はまた白い息を吐きながら、以前ジムに通

つっていた頃の、あの走りを思い出す。

「ハア、ハア、……ハア」

息をすることだけに努め、あと100mくらいかな、  
そう思ったところで、全力疾走を始めた。

そして迷いなく玄関のドアを力強く開け、階段を駆け上がり、自分の部屋へ飛び込む。

昨夜考えた、必要最低限のものをまとめながら、

多勢と無勢

人選

間引き

……最初から間違っていたのは俺なんかもしれんな。

それは、生まれたときから……

大きめのカバンに全てを詰め込み、一度部屋を見回してみる。

そしてバンツ！と力強くドアを閉めた。

階段を下りようとしたところで、その下に母が立ってこちらを見上げて  
げていることに気づいた。

直樹は一段飛ばしで階段を駆け下り、母とすれ違い様ニコツと笑って  
見せる。

そしてそのまま通り過ぎ、玄関で靴を履く。

「直樹さん……直樹さん……」

か細い母の声は、確かに直樹の耳に入ってきている。

「どこ行くんです、直樹さん」

靴を履き終え、頭を上げた直樹、

答えた。

「どこかへ行きます」

家の雰囲気から、父が会社に行っているということが伺い知れた。

「どこかって……どこへ？」

その問いに答える必要はないと思った。

なるべく笑顔だと努めている直樹。

それに対し、母は言った。

「行き先が分かったら、教えてちょうだいね」

……涙が出そうになったが、直樹はそれをしない。

明るく笑いながら、

「ちょっとお母さん、止めてくれないんですか？これって家出ですよ？」

手を前で組む、見慣れた母の姿勢。

直樹は笑顔をやめ、口を閉じた。

クツと唇を噛み締める。

これが、育ての親 母との、今生の別れ。

最後の言葉は、先ほどのそれ。

慶也の姿は、あの時が最後。

直樹はそのまま家を出て、歩き出す。

一瞬タクシーで駅まで行くつもりとして、やめた。

よく晴れたその日。



直樹は目を閉じて、天を見上げる。  
目を閉じたまま、太陽を探す。  
そして、自分の赤を凝視する。

ヤバイな、俺……

俺は目的の、どの辺りから……

もう一度振り返り、我が家だった家を見つめ、

……そうして、歩き出す。

## 試 1

新幹線代が高額であるということを、また改めて認識した。もつと安い移動手段があるのは知っていたが、一刻も早くあのじゆうたんやスリッパやカーテンや

あの窓から見る邪魔な電柱や

それらのものを、とにかく早く払拭したかった。

自由席に座り込み「会いに行くよ」と一人呟く。

……そういえば、一昨日も昨夜も寝てないだった。

忘れてたよ。

あつちに着くまでの数時間眠ろうと思ったが、案外人が多く、発車して1時間もしないうちに直樹の隣には見ず知らずのおじさんが座っていた。

眠れない。

この眠れないのは、このおじさんのせいにするのが都合がいい。

そう思い、窓から外を眺めることにする。

「あの時」とか「その日」とか「明日」とか。

「もし」とか「たら」とか「れば」とか。

「しかし」とか「それじゃあ」とか「違う」とか。

……思い起こせば、言うことがたくさんあったよな。

そんな気がする。

そうやって頭の中で揉みくちやし、ぎゅっと握り締め、一箇所に寄せて……。

……いや、特別やない。

心配するなつて。

俺はそこまで愚かじゃない。

誰のせいでもない。

「もし」と言い、「たら」と言い、「れば」と言い、握っては広げ、握っては広げ……

直樹はこの移動中、そんなことばかりをしている。

……現実のものとし、今後一体俺は、

それを乗り越え、更にその先にあるもの……

父に急須をぶつけられた額がずっと痛む。

風景を凝視していたはずの視線は、いつのまにか窓枠に固定される。自分の今後についてはまだ考えられないでいたが、ようやく慶也のことを考えるタイミングを見つけた。

一週間ほど前、慶也は話していた。

何だか疲れてきた、と。

頑張れば頑張るほど、成績で上位へ行けば行くほど、周りの人間が離れて行く、と。

「テストなんて、勉強すればするだけ点数に表れるだろ？何で、頑張つて嫌味を言われなきゃいけないんだ。

妬みつちゅーか嫉みつちゅーか……みんなスゲエよ、そういうのが」直樹は、それは無視するしかないと考えていた。

だが慶也の性格を考えると、無視することはできないだろうとも思った。

「勉強のできるヤツが集まった学校でも、1位から最下位がおるからな」

それは永遠のテーマだとも言えず、慶也のことを考えてそう言ったのだ。

「なあ慶也、しばらくグローブとボール、触ってないんじゃないかねえか？キャッチボールでもするか？俺に教えてくれよ」

一週間前の遣り取り。

たった、一週間前。

……そうやねん。

誰も彼も、みんな必死なんや。

直樹が向かうのは、当然パクとタケシの住むあの街。

行っ方がいいのかどうなのかは分からないが、もうあそこしか行くところがない。

直樹はパンパンになったカバンを抱いたまま席に座り、

まだ着かないか

まだ着かないか

そう思いながら、目で追えない景色を見つめている。

寝不足が祟ったのか。

乗り物酔いした、そんな気分だ。

やがて新幹線が停まった。

ようやく着いた。

取り合えず、タケシの勤め先を直樹は知らない。

直樹は電車を乗り継ぎ、パクの元へと向かう。

なるべくお金を遣わないようにとそう思い、駅からは見慣れた街を歩いてパクの職場へと向かう。

そう。

俺はもう、こっちの街の方が詳しいんや。

迷わないんや。

ちょうど良いと思えばいい。

直樹はこの時、自分を勇気付ける必要があった。

向こうの天気も良かったが、今日はこっちも良い天気だ。

フットワークを軽めにし、パクの元へと急ぐ。

徒歩でも20分。

急いなので15分。

その間、考え事はせずに向かった。

その場所を、直樹はまずいろんな角度から眺めてみた。

それから開きつ放しのシャッターの中を覗きこみ、作業をしている

おじさんに声を掛ける。

「お仕事すみません。健さんお見えになりますか」

騒音の中、それは一発でそのおじさんの耳に届いた。

おじさんは振り返り、

「けん？けん……坊か！ちょっと待つとれよ」

そう言つて、パクを呼びに行つてくれた。

実は、とても居た堪れない気分なのだ。

仕事中に仕事の邪魔をする。

そして続けて思う。

今日は勘弁してほしいな……。

5分ほど待つただろうか。

向こうから駆け足で作業着姿のパクが近づいてきた。  
直樹は、堪える、と噛み締める。

「おい、何や直樹。忙しいやつちゃんー！すぐ来るんやつたらお前、こないだ帰らんで良かったんちゃうんか？何や、学校休みか」

学校…！？

学校のことなどすっかり忘れていた。

学校は一体どうなるんだろう。

……どうもこうも、……もう行けない。

「おい、ほいでお前、何やねん、そのでっかいカバン！何企んどんじゃ……」

そこまで言っつて、パクは直樹の顔色に気づいたようだった。

そして、

「よっしゃ！折角なあ、遊びに来たんや。俺も上がるわ！」

そう言った。

「え、何言つとんねん、そういうわけにはいかんやろ。……ごめんな、仕事中に」

「せやから謝るなつて。待つとれ、親父に言うて来る」

パクが感じたもの、それは直樹の顔色に加えたものなのだろう。

そんな馬鹿な話はない。仕事が終わるまで待つよ。

そう思いながらも、しかし直樹は止めるのをやめた。

次にパクが姿を見せるまで、10分ほどしか待たなかった。

「タケシに電話したら、あいつも来るつてよ。ドコ行くかー？サボツてドコ行くー？」

笑いながらそう言うパクに、直樹は素直に従う。

説明をしなきゃいけない。

そう思うが、まだまだ腰は重い。

2人はいつもの軽トラに乗り、タケシとの待ち合わせ場所へと向かう。

タケシはすでにその場所に立っていた。

「何や秋月、学校休みかいな。こんなにすぐ来るんやったら、いっそおりやあ良かったやないか、コツチに」

タケシにはちゃんと説明しないと。

パクは何かを察してくれている。

タケシにはちゃんと言わないと……。

……頃合を見計らおう。

「まあ、休みみたいなモンやな。タケシも仕事中心やったんと違うの？」

「イヤ、今日は夜からやねん。取り合えず何か食いに行かんか？腹減つとんねん」

……そこで話そうと決めた。

「待てエ、タケシ」

そう言ったのはパク。

「腹減つとんやったら買い食いするぞ。今日はよ、今から行くんはバッテリーセンターじゃ！」

なあ直樹、思いつきり思いつきり、イテこますでエ！」

パクの意図するところは、完全には分からない。

でも完全には腹が決まっていなかったもので、とてもありがたかった。バッテリーセンターで打つのは初めてだし、俺は下手クソだろうし、絶対に持て余す。

考える時間はあるだろう。

「よっしゃ！タケシ、お前は荷台へ寝っ転がれ！こりゃあ2人乗りやからな。ポリに見つかんなよー？それと立ち上がるな」

「な！何で俺が荷台や！？」

「当ッたり前やろ。お前はついでや」

「この場合、運転手・助手席・荷台決めるジャンケンやる！」  
「全くグダグダうるさいのう！しゃあないな、ほんならジャンケンじゃ」

……結果、助手席がパク、荷台はタケシ、運転手は直樹に決まった。直樹は大学合格後、すぐに普通免許を取っていたが、完全なペーパードライバー！  
すっきりと、2人の空気。

「……よし！じゃあ走るからな！パクウ！見といてよ！？ちやんと見といてよ！？」

「うわッ！！めっちゃ怖いやんけ！お前、大丈夫か！？」  
後方からは何やらタケシの声もするが、よく聞こえない。

軽トラは、ユラユラと蛇行しながら走って行く。

運転中、何度もゴツン！ゴツン！という音が聞こえてきた。  
おそらく荷台で横になっているタケシが、どこかにぶつかっている音だろう……。

車を運転するのは教習所以来。  
まっしぐらに、ただただ運転に集中できる。

パクの言う通りに進み、バッテリーングセンターに着いた。

集中は解けるが、憂鬱は消えない。

タケシは車を降りた途端、

「お前、何回ノッキングすんねんッ！何回も頭打ったわ！帰りはまたジャンケンやからな！」

と言ったが、

……謝るのを忘れた。

話すタイミングを見計らっていた俺は、それを話して一体どうしょ



うってんだ。

2人にだって生活があるんだ。

「よっしゃー！ほな行くで！110キロの真っ直ぐのヤツや！」

パクは明るく振る舞い、やはり直樹に気を遣ってくれている。

タケシはいつも変わらず。

表立って何か窺える、そんな様子はない。

俺も明るくしないとな。

そう思うのだが、すぐに椅子に腰を掛け、膝に肘を置く体勢。

そして、俯いてしまう。

アピールではないのだが、そうなってしまう。

「おいパクウ！早よ代われ！」

カーン！カーン！と、いい音をさせているパクの姿を見る。

平日の真昼間ということもあり、このバッティングセンターはガラガラ。

パクだけがいい音をさせていた。

……間違い探しを試みよう。

そう考えると、

追って 追って 追いかけて、戻って行くとどうしても

生まれた

と、そこに辿り着いてしまう。

降り立ち、思案と銘打ち、悩んでみるのだが、何も覚えていない。

忘れたのが罪なのか

無知であることが罪なのか

それに対する罰だと考えたら、  
俺の責任というのは、一体 ……

そりゃあ思い出せば、顔が青くなったり、身の毛がよだったりする  
ような恥ずかしい失敗は何度もあるよ。

だけど、これに関しては俺は悪くないでしょう？という問いに対し  
て、誰かに、

お前は悪くないよ、と

……言ってもらいたい。

「やっぱりカレーは、母ちゃんのが一番美味い思ってるねん」  
と、パクが言っていたのを思い出した。

俺にも、そういう、……なあ、似てて等しいものが、1個か2個か  
3個か、あってもいいやないか……。

「おい、直樹」

パクが呼ぶ。

ネットを上げて、手招きをする。

「タケシは後、後！お前もやってみ。スカーン！と何発かなあ！」  
よし、と重くて重くてしょうがない腰を上げる。

まず、早速バットの持ち手を注意された。

……なるほど、左手が下で、右手が上ね。

「おいおい直樹、手と手の間に隙間があったら振りにくいやる。そ  
れも引っ付けんねん」

「ああ、なるほどな」

時速110キロ・ストレートのみのバッティングマシン。

これがなかなか、うまくバットに当たらない。  
バットをブンブン振り回す直樹。

……無心で挑戦したはずなのだ。

20球ほど経過した頃には、手のひらが痛くなった。  
左手の親指の第一関節当たりが擦り切れたした。

「おい秋月！早よ代われや！」  
そのタケシの声に、

「ちよつと待つてくれよ。まだ1球も当ててねえ！っていうか、隣  
空いてるじゃん！っていうか、ガラガラやん！別のヤツで打てばエ  
イヤん。」

悔しいねん、俺は」

バットを振るといふ行為が、こんなに体力を消耗するといふことを  
知らなかった。

40球くらいになると、息が切れ始める。

親指の皮がめくれ、とても痛いのがまた悔しい。

「くそつッ！！」

思わずそう叫んでしまい、バットを地面に打ち付けた。

……悔しくて、しょうがない。

タケシの催促がなくなったことにも、パクのコーチがなくなっている  
ことにも気づかず、ひたすらボール目掛けてバットを振り続ける。  
一度、球切れになってしまった。

無駄遣いはやめよう、そう心に誓ったのも忘れ、財布の中をまさぐ  
り小銭を探す。

「おー、エエでエエで！俺が用意する。好きなだけやれや！」

パクのその声に返事をするのもなく、身構えた。  
大きくバットを振る。

そのバットがボールを掠めた。

パクのような、カーン！とかキーン！とか、そういう音ではなく、パスツという音。

「おー！ 当たった当たった！！」  
後ろから2人の声がする。

……何球目からだっただろう。

悔しいのは最初からだっただ。

涙腺ってというのは、とても厄介だ。

「……やったでー…当たったで！見た？2人ともちゃんと見とった！？当たったぞー！！」

流れる涙を制御することができず、ボロボロボロボロと泣きながら、直樹は2人を振り返る。

あの時と同じで、止めることができない。

……だっただら、喜んでるように見せよう。

「次振つたらホームランちゃうかなあ！？なあ！？なあ！」

そんな直樹を、パクとタケシはじっと見つめている。

この空気、固まってしまっではない。

2人の目線も、悲壮に満ちたものではない。

ネットを潜って2人が入ってきた。

「直樹、危ないからちよつとこっちへ寄れ」

パクの言葉を最後に、しばらくバシユン！バシユン！というボールの音だけがそこに流れた。

止まらない涙と、何も言わない2人に戸惑ってはいるが、近づいて来てくれるだけで嬉しい、そんな気がする。

「……悪イ。俺、オトナやのにな、……また捨てられた」

顔をごしごし擦りながら、直樹は2人にそう言った。

3人はそこから場所を移し、ファミレスに入った。  
そこで直樹は話し出す。

自分は捨て子である、と。

3歳のときに、あの両親に引き取られた、と。

直樹はそこから事細かに約30分間、覚えている限り、思いつく限り、自分のことを話した。

それを聞いて、まず最初に答えたのはパク。

「うーん……あの慶也がなあ……」

タケシは直樹の話を聞いて明らかに不機嫌になり、まだ手を付けていなかった目の前の料理をガツガツと食べ始める。

まずは何も言わなかった。

「せやけどよう直樹。お前、ほんならこれからどうすんねん」

実を言うと、まだそこまで考えは至っていない。

少しの間、沈黙が流れた。

タケシの鳴らす、食器の音だけが響く。

「俺、どうしたらいいと思う？」

そう聞きたかった。

決めてくれ、というのではなく、あくまで参考に……

……イヤ、ちやうな。

直撃してほしいと思ったんだ。

こっちにいろ、と。

そう言ってもらいたかった。

しかし、パクの意見はそれとは真逆のもの。

「……直樹、お前やっぱり向こう帰れ」

それを聞いたタケシの、ナイフとフォークの音が止まったのに気づいた。

「だってお前、あと2年やる？ 大学。アッコ出てんのと辞め

てんのとじゃ、雲泥の差やぞ？

手足首引つ込めとつてもエエやんけ。

まあ、オヤジさんはよう分からんけど、母ちゃんと慶也は心配してるぞ？」

……帰れねえ。

あそこにはもう、俺の居つく場所はない。

あの冷たい夜に、俺はそう決めたんや。

そう考え、直樹は俯く。

期待していたものと違う答えに空かされた気がするのと同時に、パクの言い分ももっともだと思った。

パクは続けて言う。

「何するにしても金いるやん。お前が援助を受けるっていう名目でこっちにおる言うんやったら分かんぞ。

でもちやうやん、お前……」

と、そこで

ガチャガチャンツ！！

タケシが皿にナイフとフォークを叩き付けたのだ。

同時に、

「パクウツ！！！！」

怒鳴るようにタケシが言う。

「秋月のよう！今の状況でなあ！こうなったら、今一番ボンボンなんはお前じゃツ！！捨てられて！見捨てられて！お前に分かるワケ

ないやんけ！

秋月が今、何言ってるか、お前には分からへんよ！！」

「ハアツ！？今そんな話してへんやろ！俺を持ち出してくるってのは次元が違うやろがツ！！」

ここで2人の小競り合いが始まった。

2人は俺の両親のことも……あの2人のことも悪く言わないんやな……。

確かに、そんな気分じゃない。

直樹は伏し目がちなのをやめ、顔を上げる。

デカ過ぎる怒声で、2人が何を喋っているのかよく分からなくなってきた。

直樹はそれを止めるように、

「決めた！……悪イ、2人とも。俺、あっちへ帰るわ。悪イ、ほんまに」

「……………」

それを聞いて2人は言い争いをやめ、同時に直樹を見る。

タケシが唇を噛み締めた。

そしてはつきりと分かるほどに怒りながら立ち上がる。

「秋月！ソレ本気か！？もしコツチにおるんが、コイツが言うみたいは何ぞ問題があるつちゅーんやったらその問題、俺に言え！！

ゼニ金の問題やったらなあ！俺がお前の面倒見る！！住むトコないんやったら、俺んトコで一緒に住めばエエ！！

2回捨てられたんやったらなあ！3回目には捨てるヤツがおったらエエんじゃ！！今度は俺がお前を捨てる！！

学校なんか休んどきやエエやないか！よう知らんけど、休学ってあるんやろ？

気が済むまでこっちにおればエエやないか！俺がお前を捨てる！何か問題があるか！？」

滲む目でタケシを見上げた。

直樹は思わず、思ったことを口に出してしまっ。

「……もんだい、ない」

しかし、それは直樹の望むもの。

あの話の後、直樹はタケシのマンションに厄介になることになった。

自分が思ったところ、考えたところで、

……家には帰りにくい

果たしてそんなレベルなんだろうか。

パクウが俺に「帰れ」と言ったのは、そのレベルで考慮し、考えてのものだったと思う。

タケシはというと、そのもっと先にあるレベルでの、今回の対応。俺はというと、……よく分からない。

それが正直なところ。

敢えて、

敢えて言うのであれば、俺の中で30%くらいだろうか。

捜しに来てくれないか、という部分。

母と慶也が俺を心配し、考えた結果「あそこじゃないか？」と、連れ戻しに来てくれないだろうか。

……でもあの人は、そんなものは必要ないと言うのだろうか。だから敢えて、

敢えて言うなら30%。

この頃はまだ、学校を辞めたという意識は皆無に等しい。

しばらく厄介になるよ、そんなつもりで居座っている。

これは真意であり、そうするというよりは、そうなると考えていた。



直樹も一週間ほどは、ものの見事に呆けていた。タケシが自宅に持ち帰る仕事を手伝う程度。

あとは美奈子がやっていた掃除・洗濯・食事の用意などを取り上げて、やっていった程度だった。

いくらか貯金はあったが、これでは心配だと考え始めたのは、この暮らしを始めてから一週間ほど経ったその日。

経緯から考えてパクには相談しにくかったが、タケシは朝から晩までどころか夜中もない日が多い。

直樹は仕事の面での相談を、パクに持ちかけた。

パクがあの時言った「帰れ」という言葉は、少なからず自分の中で理解できている。

直樹の相談に対して、パクの返事は投げやりなものではなかったが、

「お前なあ、この期に及んで仕事選ばうって考えとんちゃうんか。

やろう思つたら何でもあるやろ、お前。

ほら、アソコのコンビニ見てみい。アルバイト募集いうて貼っとるやないか」

……どこかで甘い考えがあったのかもしれない。

というよりは、満々だった。

ウチで働くか？

そう言ってくれるんじゃないかと、パクの顔を見ながら思っていた。

俺のこの、染み付いた体質。

この際、体臭も含めておこつ。

根絶やしにしないと。

そう思う。

直樹はまず、コンビニのバイトから始めることにした。

夜の方が時給が高いのだが、直樹は昼間の勤務時間に決めた。

なるべく美奈子を家で一人にしないように。

夜、留守にしないように。

そのコンビニのバイトを一週間も続けていると、考え出す。

俺は一体……

時給何百何十円 × 時間

1時間おきに、そんな計算をしてしまう。

体質や思考の改善と銘打ったにも関わらず。

この俺の性根の腐り具合。

なのに

俺は一体何をやってるんや。

そう考えてしまうのだ。

職業差別をするつもりはない。

そう思いながら、はっきりとそうしている自分。

弁護士事務所に勤めているのがこうで、アルバイトはああで……

そんなことを言っている場合ではないのが今の俺なのに、俺はまだ  
まだ以前の生活が諦めきれないでいるんだろう。

捨てるのではなく、捨てるしかなかった。

いや、……捨てられた

捨てるしかなかったにも関わらず

……

この日、直樹は美奈子と2人で夕飯を済ませ、後片付けをしていた。  
美奈子の食器をシンクに運ぶ際、彼女が随分と料理を残しているこ  
とに気づいた。

彼女の場合、好き嫌い云々以前の問題なのだ。

食べてはいけないものがたくさんあり、自分はコレが食べたいとい  
う欲が通らないことが多い。

当然それらを考慮して、美奈子の食べられないものを作っではないな

いのだが。

皿を見ると、ほとんど手の付けられていない料理もあり、少し心配になる。

直樹がこの部屋に来てまだそれほど日にちは経ってはいないが、その間だけでも日を追うことに彼女が部屋に閉じこもっていることが多くなった。

この日も食事を済ませると、美奈子はすぐに自室に入り、ベッドに横になっっている。

洗い物を済ませ、リビングでテレビを見ていた直樹。

美奈子の部屋からガタンツ！！という大きな音に、考えることなく駆け出す。

部屋のドアをノックしながら、

「どうした！？何かあった？美奈子ちゃん！？」

……返事がない。

直樹は勢い良くドアを開け、部屋の中へ飛び込んだ。

床にうつ伏せになって倒れている美奈子の姿。

「おい、大丈夫か！？どうした？調子悪い？」

美奈子は左胸を押さえていた手を離し、少し笑いながら、

「……えー、何も無いよ。寝てただけ」

そんな嘘を吐く。

「あのなあ、君の場合、気イ遣って体調が良いフリしたら、逆に周りに迷惑掛けるんやぞ？どうした、心臓痛いん？」

「……痛いっていうか、ちょっとひきつけみたいになっただけ」

そう言っで自分で立ち上がり、布団の中に潜り込む。

初めて会ったときの、吐血した美奈子の姿を思い出した。

それ以来目の当たりにしてきた、彼女の体調の悪さ。

……手術すれば、良くなるはずなんだよ。

丸くなってベッドに潜り込んでいる彼女を見つめながら、直樹は考  
える。

俺には何ができる……？

## 試 2

もやもや、イライラというものが、時間が経つにつれて蓄積していく。

これは、自分に向けたもの。

このままでいいのかという話になったとき、

……良いわけがない。

削ぎ落とした、落とされたものの大きさを感じながら、

……そのうち慣れていくのだろうか。

そう考え、イライラとしている。

その一環として、少し甘えたことをしてみよう。

直樹はそう思った。

随分日にちが経ってしまったが、アルバイトに行っていた弁護士事務所への電話を思い立ったのだ。

内容は「急に行かなくなってますいません」がいいのか、「申し訳ございません。しばらく行けません」でいいのか。

まず電話に誰が出るのか、出る人によって違ってくるな。

少し楽しい時間とも思えるようなシチュエーションを妄想して電話を掛ける。

『はい、法律事務所です』

その声は間違いなく洋子だった。

「あ、もしもし」

『はい』

「あのう…秋月ですけど」

『……………』

ここで一呼吸置いたような間が空いたことを、今の直樹は見逃すこ

とができない。

「あれ？もしもし？秋月ですけど」

『あー……はいはい。秋月くん、はい。……何でしょう？』

……親しく話してくれていた人が、こうやって離れて行く。

無断欠勤、何の連絡もなし。

それとも俺の、窃盗と人身事故。

どちらかであることは明白だ。

「あー、すみません。急にバイト、休んでしまっ

『あ……いや、何も聞いてないんですよ。ただ一つ、今月分の途

中までの給料は、いつも通りの日付で振り込まれてるそうなので、

確認だけしておいて下さい。

他に何かございますでしょうか？』

これでもかというほど、他人行儀の洋子さん。

間違いない、家から連絡が行っていると思った。

大きく軌道を修正する必要があった。

「あ、はい。それを確認したかったです。はい、すみません。失

礼します」

そう言っ、直樹は途中から早々に切りたいと思っていた電話を切る。

何が目的だったのか、自分の中でもまとまりがつかないまま、いたずらに自分を捏ね回してしまった。

更にイライラが募る。

直樹は再び受話器を取り上げると、今度はパクに電話をかけ、彼と

明日会う約束をした。

別に何か愚痴を言おうってわけじゃない。

だが、会う約束をした。

その日はイライラと、一体何に対して怒っているのか向かう方向が分からないまま。

布団に入ったら何も考えてはいけないのに、ただひたすらに考え事

をしてみよう。

その間、気が散ったのは一度だけ。

外から聞こえてきた、ザーツという激しい雨音。

これに一度気が行っただけで、後はただただ考え事に没頭していた。

朝からバイトがあるのに。

寝なアカンのに。

そう考えると、いつも通りまた眠りに就けなくなる。

結局明るくなるまで寝付けず、1時間ほどうつらうつらして、その日はアルバイトに出掛けた。

19時にいつもの場所でパクと待ち合わせ。

それを目指して、ただそこに立ち、レジを打って過ごす。

バイトが終わるといったん部屋に戻り、美奈子に「いつもの居酒屋にいるから体調が悪かったらすぐに呼んでくれ」とだけ伝えて再び部屋を出た。

待ち合わせ場所には、まだパクの姿はない。

店々の明かりがほのかに漂うその場所で、直樹は突っ立ったままパクが来るであろう方向を凝視する。

19時の約束だったのに、10分、20分経っても、パクは現われない。

イライラが募る。

時計と人の波を交互に見ていると、また雨が降り始めた。

小さく、何度も何度も「くそう、くそう」と呟いている。

頭を過ぎるのは、待たされているという目の前の事実よりも、昨日の洋子の電話での応対。

でもそれは忘れたかったので、一体何分待たせるんや、とボソリと呟いてみた。

やがて、しとしとと雨の降る中、

「悪い！すまん！！」

その声が聞こえた。

振り向くと、小走りでこちらに近づいてくるパクの姿。

「遅いやんけ！！」

と、つい声大きく、怒鳴るように言ってしまった。

「ワリワリ！急な仕事でな、残業になってもうた。怒んなや。今日は俺が奢ったるから……」

直樹は返事もせず歩き出し、そこへ慌てて並ぶようにパクも歩き出す。

そしていつもの居酒屋へと向かった。

「……直樹、お前最近ずっと顔色悪いぞ。アルバイト、うまいこと行つとるんか？」

「うまいことって言われても……。レジ打ちながら、終業時間が来るまで過ごしてるよ、ちゃんと」

「今日はな、俺もお前に用事があったんや。ちょうど良かったん」

そんなことを話しながら、いつもの店のいつもの席に座る2人。

そしていつものように、下らない話をした。

ただいつもと違うのは、直樹がこの日、飲めないお酒を飲んでいただけ。

「お前、いつから酒飲めるようになったんや」

そのパクの問いには

「まあエエやないか」

とだけ答えておいた。

ビール、日本酒、焼酎。

おいしいとも思わないそれらを次々と飲んでいく。

パクが直樹のその姿を見て、何も思わないわけもない。

「……まあ、様子がおかしいのは最近ずっとやわなあ。そりゃ普通じ



「やおられんよ」

酔っては来ているが、まだ頭はしっかりしている直樹。

今の頭の状態とは裏腹に、饒舌になり始める。

次から次へスルスルと言葉が出てくる。

昨夜した弁護士事務所への電話の内容も事細かに話して聞かせた。

自分の感想を交えながら。

……話すつもりはなかったそのことを。

それを聞き、黙ったパク。

ザーツという一層強い雨音が外から聞こえてきた。

「……ありや、本降りになつてきたな。」

直樹な、そのアルバイト先の人な、そんなん当然やろ。罪人とまでは言わんけどな、法律扱つてる職場の人間がやな、轢き逃げしたとされている人間、しかもそれが元同僚やつていうんやったら、態度も変わつて当然ちゃうか」

イライラを払拭させようとして話したであろう、この状況。

酔っていないければそうだろうなと、俺のワガママ体質だと、考えるところがあつただろう直樹。

しかしこの時は酒の力を借りている。

「何やねんパクウ！お前よう、お前、一体誰の味方や？こないだからバチバチバチバチ、エエように言つてくれるやないか」

パクは黙つて、その直樹の文句を聞いていた。

「なあ、なあパクウ。お前、誰の味方？なあ、俺つてそんーつなに悪いことしたか？」

そこでパクは口を開いた。

「俺はな、一般論を言うとするんよ。どうもな、ワレのことやのに今現実起こつてることやつて、受け止められてないお前に見えるねん。」

誰の味方つてお前。俺はお前の味方に決まつとるやろ」

パクは続ける。

「このままな、宙ぶらりんやとしゃんとできんやろ。それはよう分

かんねん。

お前、落ち着くまでコツチおる言うて、いつまでコツチにおるんや？ちゅーか、お前は酒飲まんと思うとったから、大事な話しようと思つてたんやけど、今話して大丈夫か？」

さつきからパクの言っている『大事な話』というのが、ここでようやく気になった。

酔ってはいるが、まだ頭はしっかりしている。

直樹は大きく頷く。

「何回も言うが、そのお前の宙ぶらりんの状態。それじゃ何やつてもどもならんやろ。俺が適当にコンビニのアルバイトでもエエやないか言うたら、ほんまにコンビニでバイトしやがるし」

「……………」

イライラとしていたはずが、少し沈み始める。

「俺なあ、昨夜の話やけどな。お前の実家に電話してん。お前のと調べるためにな」

「……………」

瞬間、酔いが覚めたような気がして、直樹はもう一度パクに向き直った。

「お前んトコのおばちゃんが出たよ。『直樹くん、どうしてます？』て聞こう思つたんやけどな、話してるうちに、直樹くんコツチにいますよっていう話になったよ。家出した手前、帰りにくいみたいやから、迎えに来てくれませんかね、言った」

直樹はそれを聞き、驚きとも言えない、何か微妙な体勢に入る。

で、こたえは？

そう聞きたいところではあったが、何だか情けなく、一気に自分が落ちぶれたように感じた。

……………さつきパクに言われた、一般論も含め。

黙っている直樹に対し、黙るパク。

続きをなかなか話してくれない。

……俺の番なのか？

重たい空気に耐え切れず、やはり言ってしまった。

「……で？何て言うてた？」

パクは大きくフーツと鼻から息を吐いた。

「……お前の母ちゃんなあ、『お父さんに聞いてみます』って言いよったわ」

「やっぱりか!!」

全てを追い払うように、怒りというものが満ち溢れてくる。

直樹はバンツ！とテーブルを叩き、立ち上がった。

その大きな音と後ろに倒れた椅子の音で、一瞬店内の空気が止まる。「それが昨日で、今日のこの時間か！パクウ、お前、何いらんことしてくれとんじゃ！おいッ!!」

直樹はそう言いながら、パクの胸倉を掴み上げる。

「お前、何かな、俺を陥れて楽しんでんどんちゃうん？なあ!？」

直樹の激高に一瞬驚いた顔をしたパクだが、彼もすぐに立ち上がる。

「誰が遊んどるかッ!!俺は最初から言うてるやる!お前は帰った方がエエって!」

「帰れん言うてるやないか!だからこっちでバイトまでして過ごしよるんやる!」

「帰れん言うてるのお前やないか!シレッと帰ったれって言うてんねん!

勝手なことしたかもしれんけどな、俺はお前見とってそれが一番エエと思うとんねん!それは変わらへん!!」

店内に2人の怒声が響き渡る。

近づいてきた店員が、

「暴れるんやったら出てってくれるか」

その店員を、2人同時に睨みつける。

パクは直樹に胸倉を掴まれたまま財布を取り出し、1万円札をテーブルに叩きつけた。

「お前、いつまでコレ、掴んどんじや。酔っ払って調子に乗っとんか知らんが、ここらで一発キャン言わしたるか。来いッ!!」  
そう怒鳴りながら、パクは胸倉を掴み返し、直樹を表に引っ張り出した。

本降りの雨の中、まずはパクが直樹を突き飛ばす。

直樹は背中から電柱にぶつかり、後頭部を打ち付けた。

…イライラする。

自分の中で、収集がつかなくなった。

何に怒っているのか。

もちろん、パクに何か非があるなんて思っていない。

だが、直樹が次に出た行動。

「ああ　　ッ!!」

という雄叫びと共に、パクに掴みかかる。

持ち上げるほどにパクに顔を近づけ、

「お前に！お前に！分かるワケないやろ!？」

パクの意図するところは理解できているはずなのに。

「おお！俺には分からへんよ!!俺は親に捨てられたことはいっぺんもないからな!!」

パクはジャンプするように、直樹の額に頭突きを食らわす。

ガチンッ!!

直樹は思わずパクから手を離し、仰け反った。

2人の勢いは止まらなくなり、そこから殴り合いが始まる。

お互い、何を言っているのか分からない。

怒声を発しながら、雨の中、

殴っては殴られ、

殴っては殴られ

ギャラリーのいる中、2人はそれを気にすることもなく、殴り合っ

ている。

……途中、思った。

大人になってから、まさか殴り合いのケンカをすることになるなんてな。

顔面にパンチを食らいながら、

前もそうやったけど、……どうもパクウには勝てる気がせえへん。そんなことを考えている。

酔っているせいか、うまく体が動かない。

……俺も何発か当てたけど、効いてないみたいやな。

俺もあんまり効いてない。

加減してくれとるんか。

舌っ足らずの中、自我の流れに戸惑う。

……もう、慣れていくしかないんだ。

パクウが聞こうが俺が聞こうが、あそこにいる絶対神の行動は揺るがない。

あの、見下ろす視線は何も変わらないのだろう。

……パクウに八つ当たりしてしまったな。

後で謝ろう。

思考とは裏腹に、歯軋りをしながらパクウに殴りかかる。

これをパクウは避けることもなく、当てさせてくれるのだ。

「高校以来やな！」

そう言う直樹に対して、パクウは無表情で返事もせず、五分に届かないくらいの力で殴り返してくる。

暴れて発散？

自分がそんな下品な部分を持ち合わせているとは思っていないが、付き合ってくれてるんだ。甘えよう。

ガチンツ！という音と共に、パクのパンチが直樹のアゴを捉えた。その勢いで上体がよろめき、電柱を背もたれにしてそのままその場に座り込む。

「ハアハア、……ハア、ハア……ッ」  
息切ればかりが喉を通り過ぎ、言葉が出て来ない。

座り込んだまま、直樹はパクを見上げる。

パクもしばらく荒い呼吸を繰り返していたが、やがて口を開いた。

「……直樹、今回俺もな、電話したのでよう分かった。お前の言うてることがな。

勝手なこととして悪いとも思うとんねん。せやけどな、あれは今、俺のできることを全てやったんや。

あの母ちゃんの受け答えでな、お前がどういう風に過ごしてきたか、ちったあ分かったつもりや。言い訳してんのとちゃうぞ。

ただなあ、……あんな言うなや。面白がつとるワケないやろ。間違えんといってくれよ。俺もお前の味方や。

今日びんトコ、お前も帰った方がエエって思うとるやろ。俺は俺なりに、お前側で動いたつもりや。

母ちゃんの返事も、言うか言うまいか悩んだよ。せやけど、その辺聞いとつたらお前も考えるコトあるやろ。

間違わんといってくれ。俺は完全にお前の味方や」

パクはそう言うと、座り込んだままの直樹を抱え上げた。

「タケシントコ行って飲み直そうや。……ビシャビシャになってしまったな」

そんなことはどうでもいいと思ってしまっ。

「……パクウ、俺も悪かった。ごめん」

2人でタケシの部屋に向かいながら、直樹は考える。自分の中で、少し持ち直した部分はある。だけど収まりきらないでいる、この部分。方向がどうあれ、このままではいけないんだ。直樹はこの時、自分を取り囲む今の状況を確認にした。

「エエか、遠慮せんと何でも言うたらエエからな。おりただけココにおったらエエんや。ってか、ずっとおってエエよ。俺もココの家賃なんか払うてへんのやし。住み着いてるって言うんじゃ、立場はお前と一緒にやからな」と、タケシは毎日のように言ってくれる。

「まあ…最初からな、しんどいことやなーってのは分かつとってんけどな。俺は俺で、こうするのがベストやろってのがあったからよう」

これが、会うたびに言うパクのセリフ。

自分でも分かつている。

宙ぶらりんであること。

前進などとはとんでもない。

日々、少しずつ後ろへ退がっている。

言うなればそんな気分。

考えてもキリがないので、最後には自分の中で砂嵐に襲わせる。

テレビの放送が終わると画面に出てくる、アレ。

そうやって後退しながら、日々を過ごす。

直樹がタケシの部屋に住み始めて1月くらい経った頃だろうか。

その日もいつものように、美奈子と2人で夕食を摂っていた。

美奈子に外界のことを話すべきか否かというのは迷うところではあ

つたが、せめて情報だけでもと、直樹は考えていた。だからいつもこの時間、自分が外で過ごしてきた日常を美奈子に話して聞かせるようにしていたのだ。

「そしたらな、その一緒の時間帯に働いてるおばちゃん、每晚のこと夕飯に誘うて来るんやよな。八八ハッ！ちよつと無理やなあ」その話に合わせて、美奈子も楽しそうに笑っている。

しかし彼女は急に、持っていた箸をギュツと握り締め、その手で左胸を押さえ込んだ。

「アレ？つつかえたか？え？苦しいの？水は？」

水の入ったコップを手渡そうとする直樹。

だが、彼女は直樹に目を向けることなく、ガタンツ！！

何をも庇う素振りも見せず、いきなり後頭部から後ろに倒れ込んだ。

「おいッ！！！」

短く叫び、直樹は急いで彼女を抱きかかえる。

美奈子の顔はあっという間に青白く変化していく。

直樹が閉じられた彼女の目蓋を押し上げると、白目を剥いたまま。

美奈子は目を開けない。

「美奈子ちゃん！！！」

一瞬先日の慶也の姿が、大画面で頭を過ぎった。

頭はパニックになっているが、体は素直に動き行動に移る。

直樹はすぐに救急車を呼んだ。

救急車が到着するまでのこの間、どうしていればいいのか分からな  
い。

直樹は気絶している美奈子の頭を持ち上げ、膝の上へと抱き寄せる。  
「……ベロが喉の奥に行ってしまったらマズイって聞いたことある



ぞ……」

イライラと、ソワソワと、忙しく視線を飛ばしながら。冬にも関わらず、じつとりと汗が滲み出してくる。

「もうすぐ救急車来るからな。もうちょっと待ってくれよ」  
直樹は美奈子に話しかけ続け、救急車が到着するのを待つ。

動悸が治まらなかった。

誰にも死んでもらいたくない。

じゅうたんを爪先でガリガリと擦り上げる。

早う来い

早う来い！

早う！！

とても長い時間に感じた救急車は、15分ほどで部屋に到着した。

当然、直樹も同乗する。

もしもの時のために、いつも美奈子が通う病院の名前は聞いていた。  
直樹はその病院を、救急隊員に荒々しく伝える。

自分が慌ててはいけない。

何度かシミュレーションをし、この事態を踏まえてそう決めていたのに、逸る気持ちを抑えるのは無理だった。

「早く！早うせえやッ！！」  
運転席に向かってそう叫ぶ。

隊員の一人が直樹に向かって、

「こつこつ時ほど落ち着いて下さい」  
最近口癖になりつつある「くそッ！」という独り言。

落ち着いてなんかおれるワケないやろ！

俺は、こんなことの名手になるつもりはない！  
直樹は頭を抱え込む。

目の前で美奈子は酸素吸入器を付けられ、苦しんでいる。

いざという時の自分の振る舞い。

それはどこまで行っても納得の行くものではなく、後から後からこ  
うしておけば、ああしておけば、そういう思いが満ち溢れてくる。  
頭を抱え込み、膝に肘をつき、ここ最近の自分や周りも含め、見つ  
め直した。

やがて救急車が病院に着いた。

美奈子はストレッツチャーで院内へと運ばれて行く。

「おい！俺やぞ！俺俺！秋月！秋月や！分かる！？」

直樹は彼女が処置室に運ばれて行くまで、ずっとずっと話しかけ続  
けた。

「ここから先は入って来ないでください！」

そう言われて、直樹は口を閉じ、その場に立ち尽くす。

救急車を呼んだのも、乗ったのも初めてのことに。

…子供の頃、骨を折ったときは駅員の車で病院に運ばれたからな。  
あんなものには一生乗らないで済めば、と思う。

赤と緑のほのかな明かりが廊下の床をぼんやりと照らす、その先に  
ある真つ暗なロビーに向かって直樹は歩き出した。

タケシのいる組事務所に電話をかけるために。

直樹が電話口でタケシの名前を告げると、彼はちょうどその場にい  
た。

事情を話すと、返事もなく電話を切られた。

直樹は次に、パクにも電話を入れる。

「すぐに行く！」

という一方的な返事で、また電話を切られた。

直樹は薄暗い廊下の中、処置室の前のソファに座り込む。

……何か、マズイものを食べさせてしまったんかな……。

俺のせいでいいから。

俺が悪いことにして、

頼むから、無事でおつてくれ。

そう思いながら、直樹は一人で頭を抱え込む。

やがて暗い廊下の向こう側から、リノリウムをスリッパがはじく音が聞こえてきた。

先に現われたのはパク。

駆け足でこちらに近づいてくる。

「おい！どんなや！？」

どんなや、と聞かれても分からない。

中で何をされているのかすら、分からない。

「手術とか、そういうんじゃないみたいなんやけど……」

伏し目がちにならざるを得ず、直樹はそう答えるにとどまる。

「俺が知ってる限りじゃ、ブツ倒れて運ばれるっていうんは、これまでなかったんけどな……」

息を切らせてそう言うパクに、直樹は縋りついた。

「なあ！大丈夫よな！？大丈夫やんなあ！？」

そんな直樹に対し、パクも何も言えないでいる。

その時、またスリッパの駆ける音が聞こえてきた。

タケシだ。

直樹はタケシに近づこうとするパクを制し、タケシに駆け寄る。

「なあ！タケシ、これって大丈夫なんか！？あのな、ごはん食べとつてん。ほしたら急に……」。

俺もちゃんとメニューとか考えてやってんけどな……」

薄暗い中、全面ガラスの外から入り込む街灯に照らされたタケシの顔は、明らかに直樹よりも落ち着いていた。

タケシは直樹の肩にポンと手をやり、

「まあ落ち着け」

そう言つて、直樹をソファに座らせる。

そして自分も直樹の横に座った。

「実際のところ、もう大分ヤバイねん。」

聞いても難しいいて、……理解しよう思うても、難しいてな。

まあ要するに他の器官とかもな、耐えれんようになってきとるんやつて。心臓が悪いとな、そんなことになるらしゅうてな」

それを聞き、3人で黙り込む。

医者と看護婦が、室内で何かをしている音だけが聞こえてくる。

次に口を開いたのはパク。

「……なあタケシ。お前ナンボ貯まったんや」

「え？……ああ、300万ちょい」

以前、直樹はタケシの給料を聞いたことがある。

この間で300万円。

贅沢を一切せず過ごしてきたのが、よく分かる。

……身を詰まされる思いがした。

「そうか……。お前がOKとかな、そんなん関係なしに、俺もゼニ溜めとんねん。せやけどウチは儲かってへんから……。俺も300くらいや」

「だから何回言わすんや。お前の金は受け取れん言つとるやろ」

病院ということもあり、少し声のトーンを遠慮しながら、そこでまた言い合いが始まった。

「そんなん言つとる場合か!？」

そう言うパクに対して、譲ろうとしないタケシ。

直樹は考えてみる。

俺の貯金なんて、ないに等しい。

以前聞いたことがある。

美奈子が手術を受けるには、1000万以上の費用が要ると。

3人合わせても、到底足りない。

「お前なあ、その何チャラ言う先輩おるやないか。ヤー　のよう。

あの人に借りれんのか」

「梶さんもそんなにお金持ってへんよ。俺のちょっと先輩ってだけやからな」

2人の会話を聞きながら、直樹には思うところばかり。

家族でもないパクが自分の車を買うこともなく、ただひたすら貯金をしている。

タケシは覚悟を決め、あの仕事を始めた。

さっきの美奈子の件でも、俺は自分を思いやってなかったか？

タケシにまず、俺は悪くないって言いたかったんじゃないのか？

するべき覚悟と、しなくていい覚悟。

それらを弁え、その場にいたつもりではある。

「……………」

直樹はまずたった今、自分にできることを考え、思い立つ。

ソファから立ち上がり、直樹は2人に告げた。

「……………お金、借りられるか聞いてくるわ」

そう言っつて、再びロビーの公衆電話へと向かう。

この上、あの両親に甘えるつもりはない。

だが、まず自分ができることを考えたとき、どうしてもこれが先に立つ。

自分を思いやるのは後回しだよ。

「借りるって、誰にやねんツ!？」

タケシの声を背中で聞きながら、直樹はロビーへと向かった。

直樹は静かに電話の受話器を取り上げた。

誰に見られているわけでもないのに、一度バレないように深呼吸をする。

「……………フー……………」

そしてゆっくりと、あの家の電話番号を押した。

この電話は、何回コールしてでも出るまで鳴らし続けてやると決めて、かけた電話。

『はい、もしもし。秋月でございます』

直樹が、あの家に住む人の声を聞き間違っわけもない。

電話に出たのは、お手伝いの島尾さんだった。

「直樹です」

『あ！直樹さん！？今どこにいらっしやるの！？』

その言葉に、考えるところはあった。

パクウが電話をしているから聞いているんじゃないの？

…………… だけど、今はそんなことはどうでもいい。

「それよりも、島尾さん……………」

ここで悩んだのは、

…………… 父のことを何と呼んでいいのか分からない、  
そこだ。

だがこの会話を父が聞いているわけでもない。

そう思ったので、一番分かりやすい方法を選んだ。

「お父さん、いますか？」

『あ、いらっしやいますよ。ちょっと待ってくださいね』

受話器から『エリーゼのために』の電子音が流れてくる。

音楽の向こう側の光景が、俄かに想像できる自分を齒痒く思っ。

確率としてはミクロの領域であり、何かを得られるとは思えない。直樹は自分のことを試すのではなく、何の他意もなくお金を借りられないかと相談を持ちかけようとしたのだ。

やがて、流れる保留音が止まった。

8割方電話には出ないと思っていた父が、受話器を取った。

『……………』

しかしその向こうから聞こえてくるのは、吐く息の音だけ。

……………自分から話そう。

『……………』

『……………』

秒数で表せるほどの間ではあるが、直樹には長く感じられる。

『……………何の用だね』

父が一言、そう言った。

「実は、僕の友人の妹が病気なんです。手術をするのに保険がききません。お金が要るんです」

それから、直樹は自分の中でのとっておきを蔵出しする。

「お金を貸していただけたら、もう二度とそちらに帰ることもありませんし、連絡を入れることもありません。どうですか」

『……………』

いくらの話だ、と切り出してくるかと思ったが、父は黙っている。

この流れが止まらないので、また直樹は話し出す。

「1000万以上要るんです。どうでしょうか」

……………フン、という吐息が受話器にかかるのが分かり、あのほくそ笑む顔が頭を過ぎった。

『何の話かと思えば……………。お前は逃げたから知らんだろうが、あの後の処理は全て済ませている。全て弁護士にやらせたよ』

話がズレているのか、この後の流れで今回の件について話し出すのか分からない。

胸糞の悪い中、直樹は話を聞くことにした。



『君は今、外国留学していることになっている。まあ世間体のいいものかな、あるからな。で？何に対するどんな条件だった？』

意地を見せる！

「ですから、1000万ほどお借りできませんか」

『誰にだ』

「僕にです」

『何のために』

「……人のためです」

軋む心に、持つてくれと願いを込め、直樹は10円玉を追加する。

『君と私たちは、もうなあ、関係ないはずなんだが？留学して帰って来ないと、そう言おうと思つとるんだが？』

これが私の答えである。

そう言わんばかりの父の返事だが、直樹は粘る。

真つ暗な、その向こう。

ほのかな灯りが照らす先にいるあの2人に聞こえないように、声のトーンを落として。

「だから迷惑を掛けないように、ひっそりとやります。貴方の家で暮らしていたということも、絶対に口にはしません」

そして、言いたくはなかったが、付け足してしまった。

「悪い条件ではないと思いますよ」

『……………』

父はしばらく黙り、

『取引かね』

そして続けた。

『あの時、君を拾ったのは余計なことだったねえ。君がいなければ慶也も事故になんか遭わなかったのかもしれないねえ。』

ズレだろう、これは。君が家にいたからね』

……直樹はここで、何故か病気の母のことを思い出した。容態を聞きたい衝動に駆られたが、それをグツと堪える。そして、本来の思考を引き寄せた。

「アンタが勝手に拾ったものだろう、とは言えないし、何故そのもののせいにする、とも言えない。」

「いつアンタに拾ってくれと頼んだ？と言いたい。」

直樹は痛烈に思うのだ。

「コレなしでは生きていけないと、そう決め付けていたんだよな……。」

本題から大きく逸れたが、要するに父からお金を借りるのは無理であることを確認した。

軋む目・肩・腰に、遂行しろとお願いする。

重々承知の上であり、俺の意地だった今回の条件。

それは、反故になった。

「私は逃げた者には興味がない。追ってくる者にしか目を向けないんだよ。」

ここに来て、父が下手糞な嘘を吐く必要はないと考える。

ただ、今言った言葉の意味は、俺が今、思ったものとは次元が違うのだろう。

あのまま、あの家に居れば……

そんな風には考えない。

「死にたいんなら、自分で死になさい。誰も止めはせんよ。」

「……………」

親と思い、過ごしてきた人に浴びせられたその言葉に、とてもシユールだとすら思ってしまう。

終わった。

これが最後か。

これは本当の意味での、父からの餞別なのだろう。そんなことは誰も聞いていないなんて、あまりレベルのかけ離れた言葉はもう発さない。

これが最後の会話だろうと、直樹は決め付ける。激怒を通り越した先にあつたのは、なかなかの平常心だった。それは舐めるように、直樹の全身を包み込む。まだらにぼやけた薄皮のように。

直樹は張り付いた唇を剥がし、口を開く。以前から聞きたかったことがあつたのだ。

「前から聞きたかったのですが、僕のこの直樹という名前、自分ではよく覚えていません。」

この名前は、拾われる前から付いていたんですか。それともお父さんかお母さんが付けて下さったんですか」  
聞いていたのかいなかったのか。

父はそこで一言も発さずに、ガチャン！と電話を切った。

逆鱗の線が切断された気分であり、行ったことのない境界線を踏み越えた、そんな形と言ったら良いのか。

頭を失くした皮膚の表面が、考える素振りをする。空気の嚙下すら億劫だ。

峠を越えた先で待っていたものは、笑えてしまいそうな頓珍漢な間延びした空白。

直樹も受話器を置き、再び2人の元へと戻る。

足音が近づくにつれ、こちらの方を向き、じつと直樹を見つめる2人。

彼らにゆっくりと歩み寄る直樹。

「……すまん、タケシ。アカンかったわ」

「……お前、ひよっとして家に電話した？だから何回も言うてるけ

ど、ツレから金は借りれんって。でも、ありがとくな」  
タケシのその言葉は、直樹の中には響かない。

父の言葉に放心する間もなく、飛び降りる場を失った今、これまでのものを最大限に使い、歩いて行こうと考える。

今回の電話に対し、本心から美奈子のために動けたと自分で自分を褒め、次にそのためにできることはと、頭を巡らせた。

そして、直樹はある決心をする。

美奈子が倒れたあの日から、約1ヶ月経ったこの日。

直樹は女性と2人で、カラオケボックスにいた。

相手はいつも一緒にバイトをしていた、直樹を食事に誘うあの女性。彼女の歌う『川の流れのように』を、考え事をしながらポーツと聞いている。

幸い、美奈子の病状は命に別状なかった。

2週間ほど入院して、今は部屋に戻っている。

あの日覚悟を決めた直樹は、次の日にはバイト先の店長に、あと1ヶ月で辞めるといふ話をした。

今の稼ぎではどうにもこうにも、という直樹の本気。

この日がアルバイト最後の日だったので、直樹は彼女の誘いを受け、ここにいる。

彼女の歌う姿をポーツと見つめている直樹。

随分やさしくしてもらってたな……。

そして、こんな考えを巡らせる。

3万でどう？って言って来んかな……。

この場合、買ってくれではなく、俺を買ってあげるといふ意味で。即OKなんやけど。

言つて来おへんかな……。

こういう思考は本来、直樹の好みではない。だが、あの日を境に直樹の中で削られてしまったものが確実にあった。

まだ鋭利ではなく先端箇所も少ないのだが、確かに磨かれ、尖り気味になったところが何箇所もある。

考えても仕方のないことなのに、誰のお蔭で生きて来れた死にたいんなら、自分で死になさい。誰も止めはせんよ

あの言葉が、頭の中で連なる。

この期に及んでまだ、『父の言うことは全て正である』という呪縛から解放されずにいる。

……早いとこ離脱しないと。

川の流れのように、か。

この歌は俺でも知ってる。いい歌やな……。

行つては戻り、飛ばしては先を急ぐ思考をもて遊びながら、いろんな妄想に耽っている。

そうして、ある一点で思い出した。2週間ほど前の話だ。

直樹は初めて、タケシの先輩である梶という男に会った。

「おいおい、何や何や〜？住人が増えとるやないか。聞いてへんぞ〜」

そうにこやかに言い、ズカズカと部屋に上がりこんできたその男。

ヤザ者というからには、どれほどイカつい人なんだろうと想像していたが、彼の風体はその想像とはかけ離れたものだった。

随分と普通で、随分と柔らかい。

でも本当は、こういう人を怒らせると一番夕チが悪いんだということも、直樹は知っていた。

以前、タケシとお金云々の話をしたとき、「梶さんもそんなにお金を持っていない」と言っていた。

でもいくら何でも、お金のない人がこんなマンションを所有しているというのはおかしいだろうと怪しんでいた直樹。

その梶と会った際、直樹は話の流れでその辺にも踏み込んでみたのだ。

「あの、タケシとは以前から交流のあった者なんですけど、ご報告もなく勝手に居候しまして本当に申し訳ありません」

「あー、かめへんかめへん。2人で住んだあるには広いしな。ワシも昼寝しに來たりするし、仕事場に使うたりするしな。」

「そんなん全然かめへんねん」

「あ、そうですね。ありがとうございます。ですが勝手に居候した身として、少しくらいは家賃を負担しなきゃと考えてるんですけど……」

「あーあーあーあー、それもかめへんつて。今日びんトコ、このマンションもな、ワシも借りとるモンなんや。ワシの兄さんのモンでな。」

「まあ要するに、又貸しや。せやから気にせんと伸び伸びせえ」

この場合の『兄さん』が、血の繋がった兄という意味ではないことは、直樹にも容易に理解できる。

要するに先輩か……。

この梶という男の先輩に当たる彼は、このマンションを即金で購入したらしい。

俺が20歳。

梶は22。

そしてその梶の先輩の年齢は、梶と同じ22歳だという。あの世界が、タテの繋がりというもので成立しているのは知っている。

だがここで、その繋がりが微妙な形で入り組んでいるということを、直樹は確信した。

梶とその先輩の年は同じ。

更に言うと、あの世界に入った年数もさして変わらない。

なのに、片方は『兄さん』と呼び、そう呼ばれるもう片方は即金でこんなマンションを購入している。

要するに全部全部がイコールでは繋がらず、ソイツがどんな力を持っているか、それが年功序列に関わらず、ゼニ金で表れるんだろう。その考えに至る。

直樹の思考の中で、意外と簡単で分かりやすい、そんな世界。

ポーツと考え事をしていると、部屋のインターフォンが鳴った。

彼女がその受話器を取ると、

『あと10分でお時間です』

その声がちちらにも聞こえてきた。

「はい、分かりましたー」

と返事をする彼女。

「秋月くん、私夕飯の用意せなアカンから、もう帰らなアカンのやわ。どうする?」

それに合わせ、腰を上げる直樹。

「あ、じゃあ出ましょうか」

そうして揃ってその店から出たところで、彼女は直樹の手をギュッと握った。

「秋月くん、元気にしてな。一緒に仕事できて、ほんまに楽しかったわ。たまには遊びに来るんやで」

「あ、はい。顔出します。今日、ほんとに奢っていただいていたいいん

ですか？」

「ああ、エエよエエよ。饞別やと思つて。ありがとうな。こんなおばちゃん誘いに乗ってくれて」

「いえ、とんでもないです。こつちこそありがとうございました」  
自転車に乗り、こちらを何度も振り返り手を振る彼女に、直樹も手を振り返す。

結局、何も言つて来なんだな……。

まあ、そんなうまい話はないよな。

多少残念に思いながら、直樹もその場を後にする。

電車に乗り、バスに乗り、直樹が向かった先はとある街の小さな印刷所。

1週間前に依頼したものが、今日出来上がっているはずなのだ。

印刷機の回る騒音の中、直樹はその工場の中に入っていく。

「こんにちは。すみません」

その声に振り返ったのは、この工場を一人で切り盛りしている社長。

「おう、兄ちゃんか」

「出来上がってますか？」

「おー、出来とるで！ちよつと待ってな」

そう言つて奥へと入っていく。

やがて社長が手に持ってきたのは、名刺の束。

「どうや？兄ちゃんが書いた感じにやつたんやけどな。こんな感じでエエかのう？」

その名刺には『グループ 部 専務 秋月直樹』と書かれている。

直樹の父が経営する会社の名刺と瓜二つに刷り上げられた、その名刺。

それはもちろん、架空のものだ。

「ああ、バッチリですよ！ありがとうございます」



この小さな印刷所が100枚から名刺を作っているという話を聞いた直樹は、自分には必要不可欠であると考え、偽装名刺の製作をお願いした。

その場で用意していたお金を支払い、

「またお願いしますね」

と挨拶を残し、名刺を握り締めて足早にバス停へと向かう。

100枚とはいえ当然痛い出費ではあるが、直樹のしようとしていることを考えたとき、コレは必要不可欠なもの。

……繰り返し繰り返し巡っては消え、巡っては消えるものならば、ここにあっても良いではないか。

とめどなく考え事を走らせながら、名刺を抱え、電車に揺られ、タケシの部屋へと帰る。

部屋のリビングには、タケシが「お前の必要なものを入れる」と用意してくれたタンスがある。

その引き出しの中には、たくさんの名刺が入っている。

これは直樹が家を出たときに、持ってきたもの。

父がこれまで仕事に関わってきた、たくさんの人たちの名刺。

父はあまり、人からもらう名刺を大事にしていなかった。

家のテーブルの上に置いてあったり、洗面所に置いてあったり、中にはトイレの棚の上に置かれているものもあった。

直樹は小学生の頃から、これは将来何かの役に立つかもしれないと思い、密かにそれらを掻き集めていたのだ。

直樹はその中から1枚を取り出し、じっと見つめる。

随分と余裕の表情。

感情の乱れもなく、その名刺に書かれている住所をもう一度確認する。

タケシとパクには、アルバイトを辞めたことはまだ伝えていない。

伝えるつもりもなく、続けているフリをするつもりでいる。

漢字と数字の羅列を遠くから眺めるでもなく、間近にして見つめるでもなく。

今後の方が長いであろう自分の人生を思い、

「明日、朝イチで行ってみるか」

一人で思い、一人でそう誓った。

次の朝、直樹はあるビルの前に立っていた。

朝イチで来ようと思っていたのだが、早すぎて誰もいないのもいけないと、午前10時にその場所に来た。

もう迷いはないし、

迷いがなければと言って、うまく行くとも限らないけど……

直樹は淡々と決心をして、この場にいる。

1枚の名刺を手に持ち、見上げたそのビルはかなり立派なもの。

登記簿を見て調べた。

このビルは個人所有のビル。

この人のもので、間違いない。

…どんな方法であれ、形として現われているのは立派だと思う。

俺も、そうなるべきなんだ。

これまで囚われていたものを呪縛と表し、それを解こうと決めた。

必要かどうか分からないが、もう片方の手には自分の履歴書の入った封筒。

会社の面接じゃないから、多分いらんやろっけどな…。

あの2人に今回の転職がバレンようについて思うてるけど、そんなの可能なんかな。

気掛かりは1つ。それのみ。

もういつ死んでも構わないとは思っていないが、それに近いものを握り込んでしまった。

直樹は何の躊躇もなく、というよりはズカズカとそのビルに入っていく。

ビルの中に入り、エレベーターを使おうとしたその時、直樹は早速内部にいるある男に捕まった。

「おいおい兄ちゃん、勝手に入ったらアカンがな。アソコで手続きしてくれんと。」

いつものダ キンの兄ちゃんとはちゃうなあ。…アンタ、誰や?」  
受付で何が必要なのかも知っていたし、捕まるだろうなとも思っていた。

直樹は慣れない作り笑顔を拵え、ニツと笑いながら振り返る。

「ああ、失礼致しました。私、こういう者なのですが」

言いながらその男に手渡したのは、先日作った偽装名刺。

これ見よがしに、あの父の会社名が書かれている、あの名刺。緊張というよりは、作り笑顔の持続が辛い。

顔が強張っている気がする。

それを誤魔化すため、直樹は話を続けた。

「実は今回、父からの命ですね、東様に用がございました。

アポイントは取っていないんですが、東京から参りました。本日、東様はお見えになりますかね?」

その男は、直樹の顔と名刺を見比べ、やがてその視線は直樹に固定される。

「あー、こりやまたご丁寧に。せやけどアンタ、アポもなしにこのビルに入ってくるっちゅーのはおかしくないか。

見たところエライ若いけど。アンタ、ワシらが何モンか分かっつる?」

「……………」

出鼻で困ると言われてしまった。

だが、直樹はここで逃げ帰る覚悟などしていない。

なるべく小さく見せようとしていた猫背をしゃんと伸ばし、作り笑顔をやめて唇を締め……

しかし、直樹は息を呑むに留まる。

「……………」

挙動不審でしかないその態度に、男は直樹の肩をグツと掴んだ。

「へッ！ なんぼ何でも怪しいですよコレは。」

秋月さん、アンタが秋月さんかどうかも分かりませんしねえ。ウチが今、グループさんと付き合いがあるっちゅーのは聞いてへんのですわ」

直樹の肩を掴む手に一層力が入る。

「まあ、旨みのある話があるんやったら、ちゃんとアポ取って社長さん直々に来てもらうってください」

男は直樹をグイグイと引つ張りながら、ビルの入口の方へと移動する。

直樹も踏ん張りながら答える。

「イヤ、私、怪しい者ではないです。事実、社長の長男なんです。」

調べてもらったら分かります」

「じゃあかしいわッ！！ 野面かましてのうのうと入って来やがって！！」

ズルズルと引き摺られていく直樹。

直樹が決めたこと。

それはタケシと同じく、極の道に進むということ。

美奈子のためにお金が必要。

どこをどう探しても、他意はない。

今、自分の置かれている現状を考え、即効性のある稼ぎ口を確保するにはこれしかない。

そこに辿り着いた。

こんなところで腕力にモノを言わせたら、先が思いやられる。今回はいったん帰るか……

ビルの入口まで来たところで、直樹は今日ここに乗り込むことを半分諦めた。

「全く！オノレ、どこぞの組のカチコミやったらタダじゃおかんぞ！ワシやあオノレの顔、覚えたからのう！」

男は直樹をドンツ！と突き飛ばし、ビルの外へ追い出した。

直樹は頭を下げ、

「大変失礼致しました。また来ます」

と、その男に挨拶する。

そのまま向きを変え、立ち去ろうとした背に、

「二度と来んな！ボケエツ！！」

直樹はその怒声を受け止め、出口へと向かってとぼとぼと歩き出した。

収穫なし……そんな言葉が頭を過ぎる。

自動ドアを抜け、表へ出たところで、黒塗りの車がやってきたのが見えた。

車種は分からないが、父が乗っていたような大きな車。

それは、ビルの正面に滑らかに停車した。

直樹は立ち止まり、その車を見つめる。

助手席からスーツの男が降り、後部座席のドアを開ける。

そこから悠々と降りてきたのは、えらく迫力のある男。

……幼い頃、一度だけ見たことがある。

直樹はあの男の額にある、真一文字の傷を忘れていない。

「あ、東……東さん！！」

大きな声で、その男の名を呼んだ。

ゆっくりとこちらに首を向け、睨むようにして直樹を見る、その男。直樹の探していた、この組の会長。

幼い頃に一度会った、東という男だ。

その直樹と東の視線の間に、付き添っていた男が割って入った。直樹を遠のけるように、威嚇するように、

「お宅、どちらさん？」

ここで直樹は、先ほど弱気になりかけた自分をどこかに捨て、覚悟を取り戻そうとする。

昨夜シミュレーションした、あの辺を。

「東様に用がありました。突然で申し訳ありませんが、東京から参りました」

それを聞き、その男は更に威嚇の声を強めた。

「ハア！？だからドコのどちらさんて聞いとんねん！！」

昨夜決めた、覚悟の色を思い出す。

鉄

褐色

鉛

ガンメタ

物怖じしないのが、俺の唯一の長所じゃないのか。置き去りにはしない。

もう、俺の面倒は俺が見るしかないんだ。

その遣り取りを、足を止めて見ていた東が「まあまあ」と抑えるように2人の間に入ってきた。

そして直樹に視線を向ける。

「おかしいのう。私や、人の顔いっぺん見たら忘れへんねん。アンタの顔、どっかで見た気がするんやが、何モンかが思い出せん。おかしいのう……」

そう言う東に、直樹はとても迅速に名刺を差し出した。

「父の命がございまして、東様の元、企業ノウハウを勉強して来いと言われました」

直樹は真っ赤な嘘をつらつらと並べ立てる。

「御社のビジネスノウハウを習得するには、中で揉まれるのが一番だということになり、大変厚かましいのですが、どうか私を雇っていただきたく思い、今回お伺い致しました」

先ほどビルの中で会った男と同じように、東は名刺を手に、直樹の顔と見比べる。

「……父ってことは、アンタ、秋月さんの子？」

「はい。私がまだ小学生の頃ですが、東様とは一度お会いしたことがあります」

背筋を伸ばしての直樹のその応答に、「ふーん」といった感じの東。そして彼はもう一つ、直樹に問うた。

「ウチで雇うてくれ言うて、直樹さんは私らが何モンか分かっとなるんか？」

小さく見せるためにしていた猫背、それを一段階伸ばし、先ほどした答え。

今回の問いに対し、直樹は更にもう一度背筋を伸ばす。

そして東に一步近づき、言った。

「重々承知しております。極 です」

そんなものが必要なのかどうなのか、それすら分からない直樹の覚悟は、高く聳え立っている。

その直樹の言葉に、やはりこの東という男も一瞬驚きを隠せない。

だが、すぐにフツと洩らすような笑いを返し、

「えーっと、秋月直樹くんやな。寒いしなあ、私の部屋まで一緒に来てくれるか。話、聞こうやんか」

まだ直樹は何一つ頑張っていないのだが、何かが開けたように思い、思わず喜びを露にしまった。

「あもう、必要かどうか分からなかったんですが、履歴書も一応持

つてきました」

「ハハハッ！履歴書！？ハハハハハッ！私やそんなん渡されるの初めてだよ。おーおー、見せてえな。ゆつくり拝見するわ」

早歩きでビルの中に入っていく東の後を、置いて行かれないように歩調を合わせ、直樹もついて行く。

エレベーターの前で、先ほど自分を追い出したあの男とすれ違った。彼は東を見ると姿勢を正し、お辞儀をした体勢のまま動かない。

頭を下げる直前、直樹を見て少し驚いた顔をしたが、今度は止められることなく、直樹は東と一緒にエレベーターへ乗り込む。

お付の男がエレベーターのドアを閉め、階数ボタンを押した。

その男の体に隠れ、何階を押したのかは分からない。

エレベーターはどんと昇っていく。

何となく重たい空気の中、ここに来て直樹はようやく自分の中の緊張を始めた。

左右の腰の辺りで、ゾワゾワと百足が這いずる感覚。

小刻みに揺れる鼓動を感じながら、自分はまだ幼い。そう思う。

あれほど覚悟を決めて乗り込んだにも関わらず、まだ緊張している自分に少しホツとしたような、少し呆れたような……。

直樹は深い息をこらえ、腹に小さく力を入れてみる。

東の、鯖の腹のようなスーツ。

白髪交じりのオールバック。

お付の男の黒々とした、これまたオールバックに、不詳の口ヒゲ。

何を考えているのか、どこを見ているのか分からないサングラス。

忙しくならない程度に視線を動かしながら、直樹は粒子が見えそうな空気に自身の緩急をない交ぜにしようと試みる。

やがてエレベーターのドアが開いた。

じゆうたん敷きの廊下の突き当たりに、観音開きの立派なドアが見える。



2人についてそのドアをくぐり、中へ踏み込んだ瞬間、体が沈みこむような感覚を覚えた。靴を包み込むそのワインレッドのじゅうたんには、大きな花の絵が浮き出ている。

中央からぶら下がるシャンデリアや、壁に掛けられたポツティエリが描いたような女性の絵画。

以前、映画で見たヤザ事務所の光景とはえらく違うその部屋を、直樹はキョロキョロと見回してみる。

そして気づいた。

あの、よく見る小さい神棚みたいなもの、……ああいうのはないんやなあ。

東は自分専用と思われるデスクの大きな椅子にドカッと座り、

「秋月くん、さっき言うつった履歴書つての、私に見せてえな。嬉しいわあ。そんなん用意してくれて」

「あ、はい」

直樹は返事をして、駆け足で東の傍に近寄る。

東は直樹が渡した封筒を開けながら、指で目の前にあるソファを何度も何度も指差した。

……座れ、という意味だろうか。

直樹はコの字型に並べられたソファの端に腰をかけ、履歴書をじつと見つめる東の姿を眺めた。

部屋には東が指で硬いデスクを叩く音のみが響いている。

そのコツコツ、コツコツという尖った音が、直樹の緊張を更に煽る。

「……スゴイヤんかいさあ」

東はそう言いながら、後ろに立つ男に履歴書を見せた。

「秋月くん、中学、高校、大学。エリートコースまつしぐらやねえ」

その言葉に、直樹は短く「はい」とだけ返事をする。

……そのコースはいつたん曲がり、へし折れ、もうこの世に存在し

ない。

しかし、それを言うわけにもいかない。

東と男が、直樹の履歴書を見ながら談笑を始めた。

「アンタとは大違いやでコレ。見てみる？」

名刺が嘘ならば、その履歴書に書かれているものにも嘘の部分がある。

だが、直樹はその辺の嘘はバレるものとして書いている。

俺の力さえ示せば、そんな嘘は何かのカスでしかない。

そう信じ、2人の遣り取りをじっと見つめていた。

しばらくして、東は手に持っていた履歴書をデスクの上に置いた。

「…まあ今日びの話、私らに履歴書なんか不要でね。君も分かっていると思うけど、普通の会社とは違うんだわ」

デスクに肘をつき、顔の前で両手を組む。

その親指の腹で口元を押さえながら、東は直樹に問うた。

「秋月くん、この世で一番大事なモンって、何やと思う？」

直樹はこれを面接だと思い、信じ、答えを探す。

一瞬でこれまでを巻き戻し、

固執したもの。

比重の違ったもの。

小さな爆発音とともに、それらを思い浮かべる。加えて、東が好むであろう答えも模索してみる。

……しかし、それは分からない。

直樹はスツとソファを立ち、

「命だと思えます」

そう答えた。

東は姿勢を変えないまま、

「うーん、そうやねえ。命やねえ。君にとってそれに代わるものって、ほんまにない？」

「……………」

命に代わるもの。

……他にないと思う。

ただ、ここで頭を巡ったのは、この場合の命は大事な人間の命。昨日出会い頭で見かけた命。

出会って数時間の命。

これら自分の知らない命に対しては重量など量るまでもなく、当然無頓着である。

そして、自分の命。

大事な人の命。

これを考えたとき、実に答えにくい。

意を決したつもりで、ここまで来たこの覚悟。

自分に対する可愛げというのは、本当にゼロだったのか。

全て美奈子のため？

……自分ではその気でいた。

死ぬ直前でもないのに、いろんな映像が頭の中を巡って行く。

伸ばして広げて折りたたんでも、構成する成分が同じならば、持つ

性質は変わりようもない。

水でも加えて薄めるか。

それとも、他を殺して1の%を上げてみるか。

直樹はもう一度答える。

「すみません。命と等しく、お金ですね」

直樹は、東の好みそうな答えを模索するのはもう止めていた。

「お金がないと生きて行けません」

美奈子の命も、表し方を変えればお金で買える。

「僕は自分でちゃんと稼げるように……お金が必要なのでここに来ました」

本音とも言える、その答え。

父の命により、と言った今回の件ではあるが、直樹は夢中でそう答えた。

東が口角を上げ、直樹を見つめる。

「そうだろう、お金やと思うだろう？私もそう思うよ」

組んでいた手を解き、椅子の背もたれに寄りかかる東。

じつとこちらを見ているその目がじろじろと、湿ったもののようにも感じられた。

「秋月くん、お金は工工よ？人の命まで、意思まで買ってしまうんや。更に、変えてもしまうんや。」

君は義理とか人情とか友達とか付き合いとか、そういうことは言わんのかいな」

お金は工工よ、という東の言葉を十分に理解できているわけでもなく、義理や友情やそういったもので自分が行動を起こしていることに気づかず。

直樹は自分の答えを待っている。

何と答えようかと、何と答えるんだらうと、待っている。

その間を縫って、直樹の順番を飛び越えた東が話し始めた。

「まあ、お父さんのね、命令とはいえ単身こんなところに乗り込んでくるってのはねえ…。私や頭が悪いヤツは大嫌いだね。」

まあ今回はご丁寧なこの履歴書に免じて、許してあげようかな」

東はデスクの履歴書を直樹にチラと向ける。

「君のこの経歴、算数は十分にできそうだねえ。いいと思うよ。で、ウチの組員になる覚悟はあるんかい？」

この東の言い分では、自分がアホなのか、算数ができるヤツなのかがよく理解できない。

ただ自分は、自分の覚悟は本物であると確信を持っている。

「もちろん。何だってやりますよ。俺は駆け足で稼がなきゃいけない。必要なら腕っ節にも自信があります」

「…まあ、腕っ節って言われてもね。利き腕の人差し指が動いてくれりゃそれでいいんやけどね」

そう言って、東はデスクの引き出しを開け、何やらゴソゴソとし始めた。

「何かいいのなかな？…何かいいのなかな？…」  
小声でブツブツ言いながら。

そしてお付の男に話しかける。

「アンタ、何かいいモン持ってないか？」  
すると男は

「少々お待ちいただけますか」  
そう言つて、部屋を出て行つた。

2人きりのこの空間で、直樹が考えることはもうない。

高温に触れた皮膚が冷と感じるこの空間で、ただただ答えを待つのみ。

数分後、戻つてきた男の手には小さな茶封筒。

「オヤツさん、これなんかどうです？」

中身を取り出し、東はその紙切れをじつと見つめる。

そうして席を立ち、直樹の前にその紙を突き出した。

「そつやねえ、1週間やねえ。1週間待つてあげる。私や気が短くてねえ。」

この手形、額面通り現金で回収してきてくれるかなあ。秋月くん、エリートの子ならできるやろ？」

まだ何の紙切れなのか分からない直樹。

3歩前へ出て、それを受け取る。

サツと目を通すと、それは期限の切れてしまった500万円の不渡手形だつた。

「エエか、秋月くん。1円もまからんで。額面通りや」

先ほどからの湿つたようなその視線。

全て、見透かされていると感じた。

しかし直樹は自分からそれを言うわけでもなく、2、3質問する。そのうちの一つ。

この手形に書かれているこの人のところに、請求に行けばいいのか。その問いに対し、

「彼はもう死んで、いないんだよ」

東はいやに簡単にそう返してきた。

「こんな小っちゃい日本でもね、1日のうちに何人死んでるんだらうねえ。表沙汰にならんとやで？」

あ、この彼はね、私が殺したんじゃないよ？勝手に死によったんや」

まるで、昨日の夕飯が何だったかのように淡々と話す東。

それをそれほど心を揺り動かすこともなく、淡々と耳にし、記憶する直樹。

一種成立したような形になっている。

「いいかい秋月くん。私らの名前をちよつとでも出してしもうたらアウト。ボーンやで？何だったら、君のお父さんに買い取ってもらうのも一つなんやけどなあ」

そのセリフに何種類かの苛立ちを覚えはしたが、ここで何かを言うほど愚鈍でもなければ、思い余ってもいない。

直樹はただ、この部屋で発したどの言葉よりも大きく「はい」と返事をする。

こんなこと、もちろんやったことはない。

だが、力強くそう返事をした。

もっと詳しく話を聞くべきなんだろうとも思った。

しかし、そのまま直樹は部屋を出る。

じゅうたん敷きの廊下を渡り、エレベーターに乗り、ビルの玄関を出るまで、東に付いていた男が見張るようになってきた。

男はどこまでも、私的に考える俊敏な木偶の坊の佇まい。

ビルを出る間際、彼に挨拶をして、直樹は部屋へと向かう。

バスに揺られながら、封筒から先ほどの手形を取り出した。

えつと……債務者は死亡……

債権者は……そっか、債権は東さんのトコにあるんだな。

まあ、弁護士事務所のアルバイトで、全く知らないわけじゃない。

その手形には裏書人が存在する。（裏書人〃この場合連帯保証人の意）  
その人の住所は、直樹が今お世話になっているあのマンションから結構近い。

パツと見、簡単な仕事だな。

連帯保証人がいるなら話は早い。

手形の裏書人になるなんて、相当頭の悪いヤツなんだろう。  
きつと簡単に済む。

想像というよりは、シミュレーション。

ああやって、こうやって……

それを繰り返しながらバスに揺られ、他のことも考えてみる。

何だか、まだあのビルから背中を引っ張られているような、そんな思いがした。

そして東の顔を思い出す。

こんな手形は、あの人にとってはどうでもいいんだよ。きつと。

もちろんこの500万もどうだっていいんだ。

あの人は、俺になんか興味はない。

…俺の背後にいる、父の姿を見ていたんや。

俺の臓器まで見透かしたようなあの目は、悪党の証拠。

気味が悪いほどに静かなあの瞳孔は、悪党の証。

……俺を内部に取り込んで、父を揺する気が。

今の俺に、そんな価値はない。

それはきつとバレルこと。

500万を手にあそこに戻ろうが、1円も持たずにあそこに戻ろうが、待っているものはきつとそれなりの問題。

だったら、この手形を俺の稼ぎにするべきだろう。



臆することはないと思うよ。  
金さえ貯まれば、俺は……

マンションに戻ると、直樹はまず日課である部屋の掃除に取り掛かった。

与えられた課題に対するそれなりの策略を思案しながら、手慰みとも言える形で掃除機をかける。

……まずこの人の所へ行つて、「額面通りの金額を支払ってくれ」

……  
でも支払えるんなら、手形があんなトコに流れるワケないんやな……  
何から手を付けたら……

考え事をしながら掃除をする直樹。

テレビの置いてある棚に、掃除機を強くぶつけてしまった。

その時衝撃音とともに、テレビの後ろからゴトン！という重い音がした。

「あ、しまった！」

テレビが壊れたか！？

急いでテレビの裏側を覗き込む。

するとその狭い隙間に、コンタクトレンズのケースが落ちているのを見つけた。

先日直樹がいくら探しても見つからず、外で落としたんだと諦めていた予備のコンタクトレンズ。

こんなところにあつたのか。

手を伸ばし、それを拾おうとするが、なかなか手が届かない。

テレビを少しずらし、できた隙間に上半身を入れ込むように手を突っ込む。

と、コンタクトレンズのケースの傍に、タオルに包まれた何かが置

いてあるのに気付いた。

「……………何だ？」

ケースと一緒に、直樹はそれを取り上げる。かなり重量のあるものだ。

さっきの重たい音は、これが落ちた音か。

掃除機が当たったはずみで、狭い棚から落ちてしまったのだらう。

直樹は誰かが隠しているもの、そんな風に思うこともなく、躊躇なくタオルを剥がしてみた。

やがて、中から出てきたのは、拳銃。

「……………」

これは間違いなく、タケシのもの。

こんなものまで渡されているのか。

その、目の当たりにした黒い物体を眺めながら、しかし直樹はさほど驚かない。

アソコでの日々を過ごすようになれば、俺もこういうものを所有するようになるのか。

直樹は少しの間、その拳銃をじっと見つめ、考える。

知らないフリをして、また仕舞っておくのが正解なのか。

それとも、テレビの裏のアレ、どうということやねん！？とツッコミを入れた方が俺らしいのか。

少しの間考えたが、今自分がしようとしていることをタケシに報告するつもりのない直樹は、またその拳銃をタオルで包み直し、元に戻した。

掃除を終え、食事を作り、洗面所に行つて髪を整える。

「美奈子ちゃん、お昼用意してるからね。アルバイト行ってくるわ」  
ドアも開けず、そう伝え、

「うん、ありがとう」  
という美奈子の声を聞いてから、直樹は部屋を出た。

ポケットに入っている手形を取り出し、この裏書人になっている者を『このポケ』と呼ぶ。

これからしなければいけないことを考えたら、対『人』として接すると、とてもやりにくい。

まずはこのポケの所へ行こうか。  
そう考え、自転車で移動する。

昨夜シミュレーションし、理想通りになったこの日。  
本来ならば、こうは行かなかつた状況。

直樹はこの時、感謝した。

自分がこれまで生きてきた環境に。

理想通りになった要因は、両親にある、と。

自転車を漕ぎながら、直樹の感情は一周し、あの両親に感謝をしていた。

15分ほど走った場所に、それはあつた。

『ムラタ製版印刷所』

そう掲げられたそのビルは、結構立派な3階建て。

ビルを見上げ、ひよっとしたらお金持つてるかも…など考えるが、中を覗きこみ様子を窺った瞬間、その考えは払拭される。

全面ガラス張りの玄関の向こうは、明かりもなくいろんな紙切れが散らばり、妙に殺風景。

生きている会社の姿ではない。

それに加え見えたのは、土下座をして平謝りをしている男と女。

彼らの前には、仁王立ちしている6〜7人のスーツの男が構えてい

る。

そんな、分かりやすい光景。

……まあ、当然やわな。

まず話を聞かないと何も始まらない。

そう思い自動ドアの前に立つが、扉が開かない。

電源を落としているようだ。

直樹は自動ドアを手動で開けて、中に入る。

「社長、アンタそればっかりやないか！ナイナイ言うてなあ！手形取引飛ばしたら、恐ろしいんでっせ！！」

そう罵倒され、額を地べたに擦りつけ、

「もつともでございます。せやけど、ない袖は振れませんのや」  
震える声で男はそう答える。

この手形の期限が過ぎて、2日経っている。

2日目にして、この光景。

土下座をするその男を見つめながら、直樹は考える。

ここに来て、この債権者らをまだこんなに怒らせとるんか。  
のらりくらりやつとるんやな。

その時、そのスーツのグループが直樹の姿に気づいた。

「おいおい、ちょっと待てよ。また増えたんかい！兄ちゃん！アンタは何売ってイテこまされとんや？」

一人の男が直樹にそう問うた。

これは、死んだというこの手形の元の主、その人が会社運営のために半金半手で車を購入した際の手形だと東から聞いている。（半金半手＝半分現金、半分手形で支払うこと）

おそらくこの場に集まっている債権者と自分は、少し立場が違うと

ここで察した。

この人たちは、この土下座をしている2人に直で何かを売って、飛ばされた人たちなんだろう。

自分とは少し違う。

「あー、ウチですか。ウチは……車ですわ。ですよ、社長」  
頭を下げたままの男に向かって、直樹はそう声を掛ける。

ここで今、直樹の持っている手形が流れてきた手形だとバレルのは賢明ではない。

まるで自分がこの社長に車を売ったかのように振舞うことにする。  
ただ嘘を吐くと、何かしら後手に回ってしまうもの。直樹はその考えを握り締めている。

「ほんまかいな！ウチもトラック売ったんや。5台もやで！？ゼニはまだ3分の1しか受け取ってへんのや。」

トラックは売ってもうて、もうない言うしなあ」

「えー、そうなんツスカ？他の皆さんは何ですか？」

聞いてみたところ、他にも車を売った債権者がいた。

その他印刷機・コピー機・上質紙など、会社で使っただろう物の支払いを全て反故にしている様子。

土下座をしたままの2人の前にしゃがみ、直樹は言った。

「社長、コレどないしますのや。ウチも払ってもらわな困るんですわ」

その言葉に、2人は平伏したまま、

「申し訳ございません！申し訳ございません！！」  
としか答えない。

直樹は立ち上がり、確信する。

随分マヌケなこの2人。

俺の顔を見てないにしても、自分が何の債務を負っているのかすら

理解できていないようだ。

このまま進んで行こうと思った。

自分が今持っている手形は、この2人発のものではない。

流れ手形だとバテてしまつては、一気に俺の胡散臭さが増す。

直樹は続けた。

ゆつくりと、その散らかったフロアを歩きながら。

「申し訳ありません言われてもねえ。ウチもピーピーなんですわ。

社長、今この会社、ナンボほど持ってますんや？」

直樹はその辺に散らかっている紙くずを拾い上げ、広げ、何か手立  
てはないかと書類の中を見て回る。

今、この2人が無防備に土下座をしている、そのうちに。

直樹のそのセリフに反応したのは、債権者の1人。

「何や兄ちゃん。手形飛んで、今日初めて来たんか？エライゆつくりやな。コイツら200万ほどしか持ってないらしいぞ」

その金額を耳にして、

ふーん……まあ、そんなモンでしょうね。

と直樹は考える。

変わらずフロアを歩きながら、目に留まったスチール製の引き出し  
を開けた。

「社長さん、このビル、誰のモンなんですか？」

その直樹の問いに対して返事をしたのはまた、社長ではなく債権者  
の1人。

「そんなモン、コッチは当に目エ付けとるがな。このビルは抵当権  
だらけで、売ったところでコイツらには一文も入って来んわ」

そこで社長が大きな声で、

「申し訳ありません！！」

ふーん……と、直樹はその引き出しの中をゴソゴソしている。

直樹のその問いが、再び債権者たちに火をつけてしまったのだろう。

そこにいる7人が全員声を荒げ始めた。

社長の肩を引つ掴み、グイッと持ち上げるようにして、

「頭下げてもろうても1円にもならへんのだ！おいオッサン！！コレ3階やったな！飛び降りたらプチツと行けるんちゃうんかい！！生命保険くらい入つとるやる！それくらいの気合見せてくれへんかなアツ！！」

直樹はそれを聞き、思わずプツと噴き出してしまった。

人間追い込まれたら、サラリーマンもヤザ者もあつたモンじゃない。

そう思いながら、直樹はもう一つの引き出しを開ける。

そこに入っていたのは、履歴書。

「ほんで社長さん、お2人でこの会社やとつたんちゃいますやろ？社員さんどうしましたん？」

その引き出しにある何枚かの履歴書のうち、一番上にあつた1枚を手に取り、直樹はもう一度社長に問うた。

「…あ、はい、社員にはみんな辞めてもろつたんですわ。一応退職金だけもろうてもらつてね……」

退職金？！

……まあ、一応ルールが。

払つたんやなあ……。

この場に元社員らしき人間がおらへんつてことは、退職金はちゃんと払つたということか……。

社長の言葉を聞いて、債権者たちはまた暴れ始める。

「ハアツ！？退職金やと！？オノレどのツラ下げてそがいなこと抜かしとるんじゃ！？退職金払う前に、ワシらにゼニ返さんかいツ！！」

そう騒いだ債権者の声に紛らわせるように、直樹は先ほど手に取つた履歴書をポケットの中に忍ばせた。

そして口を開く。

「まーまーまーまー。ここでドツと騒いでもどうもなりませんよ。退職金はもう払うてもうたんやったら、そのお金はもう元社員さんの所有するモンですわ。」

ほんでこのビルが抵当権でベタベタいうんやったら、このまま行くと……さっき言うつとった200万を、ここに居る方の負債の額でパーセンテージを出して割るしかないですわ。でしよう?」

それを聞き、1人の債権者が頭を抱えてその場に座り込んだ。

「ワシントコは額面通りのゼニが入って来なんたら、コイツントコと共倒れやないか!」

「……ウチもそうじゃ」

そう呟く他の債権者もいる。

直樹はその債権者たちを、じっと見下ろしている。

土下座をしっぱなしのこの2人、もちろんこんな事態は初めてだろう。

そしてこの債権者たち、コイツらもこんな事態は初めてなんだろう。もちろん俺も、初めて。

その段階では皆イーブン。

ある程度、情報は集めさせてもらった。

これといった手段・方法・案があるわけでもない直樹。

すでにこの債権者たちは、直樹にとつて邪魔以外の何者でもない。

恐れもなく、ここに平伏す者、頭を抱える者たちの人生も考えることもない。

だが、続けて言った。

「まあ、ほんまに騒いでもしようがないですよ。今後について一回ちゃんとした債権者会を開いた方がよろしいですよ?ですよね、社長」

火をつけたのが直樹なら、鎮火させたのも直樹。

債権者たちは一様に



「まあ、そうかもしれんな」と、直樹の意見に賛成する。

しかし、すぐにそれが行われては、直樹にとっては時間が足りない。この中で、本来ならば自分は弱い立場。

「4日後。4日後でどうです？社長さん。それまで社長さんはできる限りのことをする。皆さんも、それぞれいろんな考えを持ち寄る。これでどうですか？

まあ、銀行の関係もありますからね。朝早い方がいいでしょう。4日後の朝10時からここで。どうですか」

そう提案した直樹に、皆が賛同した。一つ決まったところで、そろそろと債権者たちがその場を後にする中、直樹もそれに紛れて外に出る。

……今日は一体、何個嘘を吐いただろう。

方法もまとまっていなけりや、手段なんかあったもんじゃない。直樹はそれらを考える前に、考える。

今日、俺はあと何個、嘘を吐くんやろな……。

皆が車に乗り、去って行くのを待ち、乗ってきた自転車に跨る直樹。先ほどポケットに忍ばせた履歴書を取り出す。

あの会社に勤めていただろう、ある男の履歴書。もちろん名前も住所も書かれている。

まずはここへ行ってみよう。

……あー、くそ。やっぱり債権者会は一週間後言った方が良かったかなあ。

でも一週間って長いよな。

怪しまれるよな……。

会社の名前が、ムラタ製版印刷所

裏書人の名前も村田……

あの土下座しとったのが村田でエエんよな？

俺、顔すらちゃんと見なんだわ。

……つい焦ってもうて、この会社2人でやっとったんちゃうでしょ？  
言うてもうたな。

アレはマズかったなあ。

初対面なのバレてまうやん。

氣イ付けなな……。

そんなことをぼんやり考えながら、直樹はここからそれほど離れていない、先ほどの履歴書の男の元へと向かった。

この履歴書の男。

名前は納谷という。

直樹は先ほどから何度も何度も作戦を立てようとするが、良い案も浮かばず、目的も定まらない。

そんな状態のまま、納谷のマンションまで来てしまった。

計画性のないこの行動は、直樹の意に反しているもの。

取りあえずは情報収集だと自分に言い聞かせ、玄関の前に立つ。

平日のこんな時間にいるわけないよな。

そう考えながらどこかで、

計画を立てたいから、少し時間をくれないか。

留守の方がいい。

そんな曖昧な考えで期待をしている。

ピンポンというチャイムの音は、一度だけ。

するとインターフォンから『はい』とすぐに返事が返ってきた。

うわ〜……居ったで。

……マジかよ。

などと思ってしまう。

「あ、失礼します。納谷さんのお宅でしょうか」

「……………」  
「突然申し訳ございません。ムラタ製版印刷所さんのことでお伺いしたいことがございまして、少しお時間いただけませんか？」  
「……………」  
相手は無言。

……………アレ？ちよつと待てよ。

ここに来たのはいいけど、俺が何者で、何の用事でここに来たのかすら決めてねえよ……………。

ヤバイ。このまま帰るか…？

そう思つた瞬間、ガチャリと音がして玄関が少し開いた。

自分から訪れたにも関わらず、驚いてしまう。

中から顔を出したのは、40過ぎくらいの男。

ジャージ姿にボサボサの頭で、いかにも「何もしてません」的な風貌をしている。

「突然失礼します。ちよつとお時間いただけますか？えーつと……………納谷誠二さまでよろしいでしょうか？」

つんのめることもない舌が、スラスラと言葉を押し出す。

「……………」

何とも重く、憎らしい空気だ。

作り笑顔が引き攣り始める。

少しの間の後、納谷が口を開いた。

「……………何の用事やねん」

「あゝ、あのですね、ムラタ製版印刷所さんがですね、倒産したことに当たりました、今いろいろ調べさせてもらってるんですよ。

あまりお時間取らせませんので……………」

……………納谷の、自分を見る目が明らかに疑いに満ちた上目遣いであることは、初見で分かった。

さあ、どう出る？

何か話せ。

そう願う直樹。

「……………」

嘘すら思いついていない直樹は、この間が何とも耐え難い。返答次第ではこの場からすぐ逃げ出さなければならぬと、その用意だけはしている。

そんな、直樹にとつては進退の危うい空気の中、納谷が口を開いた。「アンタ、ひよっとして警察の人？」

その納谷の言葉は、直樹にとってお逃え向きだった。警察！？

…………… あ、そつか。そうすればエエな。うん、そうそう。

直樹の最初の嘘は、この相手に誘導してもらったもの。

「あー… 申し訳ありません。騒ぎになっちゃいけないと思ひましたね。一応内密に話を聞いて回ってるんですよ」

そう言うと、納谷の疑いの眼差しが少しニヤけたもの変わった。

「汚いですけど中で話しますか？内密捜査なんですよ？」

ここで直樹もそれに合わせ、小声に変換する。

「じゃあ、ちよっとよろしいですか」

そう答え、招かれるまま納谷の部屋へ上がりこんだ。

リビングに入るまでの間、直樹は考える。

この人、何で俺を警察の者やと思うたんやろ……………？

「まあ、ソコに座つててください」

直樹は言われるまま、小さなテーブルの前に正座した。

しばらくして納谷が2人分のお茶を持って、直樹の正面に座る。

直樹は用意していたメモ帳とペンを取り出し、話を切り出そうとした。

が、その前に喋り始めたのは納谷の方。

「あのオッサン、やつぱり何かしてましたん？」

『やつぱり何かしてましたん？』……………？

誘導するまでもなく、自ら話し出す納谷を目の前に、肩の力が抜けるのを感じた。

随分チヨロイ奴ばっかりやな。

そう考え、歩を進める。

何も掴んでいない直樹の言葉は実に曖昧なもので、

「イヤ、実はそうなんですよね。今まだ捜査の段階なんで、事情だけ聞かせてもらって回ってるっていうか……」。

納谷さんも何か知ってることがあったら、よろしかったら捜査協力だと思つて全部話してもらえますか？」

それを聞いて、納谷が身を乗り出した。

「ワシはあの会社で、営業やってましたんやけどな……」  
聞かずとも、先々と話し始める納谷。

直樹は記憶できるところは記憶し、細かい部分はメモを取っていく。「何か怪しい思つてましたんや。ほんでな、まあ辞める一ヶ月前ですかなあ……。忘れモンしましたん。せやさかいな、会社に戻りましてん。」

あの会社、一応社長夫婦で経営してるんやけどなあ。暗い事務所の  
中で、夫婦が喋つとるんですわ。

『もう、来月会社転がす金がない』言つてなあ。

ワシ、それ隠れて聞いてましてん。こらあもう、退職金出るうちに辞めなアカンやんけいうてね」

はい、はい、と相槌を打ちながら、直樹は話を聞いている。

「ほんでゼニない言つとるさかい、ワシなあ、腹決めて集金してきた金握つたまま、言いましたんや。」

『こないだ社長ら、会社潰れるや何や言つてましたやろ。私、辞めさしてもらおうか思つとるんですわ』いうてな。

ほんなら、そんな時は『そんな言わんと待つてくれ、どうにかなるさかい』いうて言つもんやから、渋々やけど会社に残つてましてん。ほんなら案の定、倒産ですわ。まあ、退職金もちゃんと出たからねえ、エエのんはエエんやけど……」

納谷が言葉を切った。

ここで、直樹はようやく質問する。

「退職金は皆さん、ちゃんと出たんですかね？」

「うーん…どうやるのう…。ワシが聞いたヤツらは皆もろうつたのう」

「ああ、そうですね」

手形まで飛ばしてパンクするような会社が、社員にだけしつかり金を握らせている。

俺の知る限りじゃ、あまりないパターンやな。

先ほど見た債権者たちの顔を思い出しながら、直樹はそう考える。

「ところで納谷さん、あのムラタの社長さん、カラーコピー機やら車やら、よけえ買ったんですねえ。会社が倒産しそうやっちゅーのに。」

あの辺の物品というのはドコに行ったか、知りませんか？」

すると、納谷はガタツとテーブルを鳴らしながらその場に立ち上がり、目を見開いて大声を上げた。

「ソコですねん！刑事さん！！」

け、刑事さんって！

直樹は思わず心の中で仰け反る。

「そうやねん！ソコですねん！！ワシねえ、アレ、社長が取り込み詐欺したんちゃうか思うてるんですわ」

チクるようで本当に申し訳ない気がするんやが、と言いながら、喋る気満々の納谷は話を止めようとはしない。

「あの会社の隣に『田辺不動産』っちゅーのがありますやろ。」

ウチの社長はアソコの社長と昔からごっつー仲が悪かったのに、最近仲良うてなあ。前は、兄弟やのに仲悪うてホンマ…って話しよったんですわ」

「…ん？兄弟？」

「そうですね。ウチの社長は奥さんトコへ婿養子で入っとるんですわ。村田は奥さんの姓ですねん。ほんで、隣で不動産業やっとなる

のが、弟の田辺。

何やアンタ、刑事のくせにそんな調べも付いとらんのかいな。アカンのう」

「あ、ハイ、申し訳ございません…」

直樹は言いながら、話の続きを引き出そうとする。

「まあ、さつきも言っただけど、ごっつー仲悪かったんが、この一月初くらいエライ仲良うなって。

会社内ではな、ウチの社長、隣の社長と一緒に悪いことしとるんちやうかー言ってましたんや」

「……………」

これだけ聞いていれば、十分な情報だった。

恐ろしいほどにツイている。

直樹はこの場で、思わずニヤけてしまう。

これは絶対に、計画倒産だ。

まずはこのセンで先に進み、もし違っていてもまたやり直せばいい。そう簡単に思えるほど、確信の持てる話だった。

「じゃあ、あのカラーコピー機とか、あの辺がどうなったかっつのは知らないんですね？」

「そら申し訳ない。知らへんのですわ…」

そう答えた納谷は、直樹にとってはもう用済みの男。

直樹は立ち上がりながら、

「そうですか。ご協力ありがとうございました」と挨拶をする。

「協力しましたんや。金一封とか出ませんのか」

その納谷の言葉を笑って誤魔化し、玄関へと急ぐ。

いろんなことがバレないうちに、この場を切り上げたかった。

靴を履き、玄関を出てもう一度、

「ありがとうございました」

と挨拶したところで、

「ちよっとアンタ」

納屋に呼び止められた。

ギクリと肩が動いたのがバレたんじゃないかと思うくらい、反応してしまった。

「一つお願いがありますんや。ワシ、いっぺんでエエから警察手帳いうのを見せてもらいたかつたんですわあ。見せてもらえませんか？」  
それにもう一度ギクツとするが、今度はきつとうまく誤魔化せたと  
思う。

ゆっくりと振り返りながら、「えー、…えっとー」という答えを飲み込み、

「今日私、非番なんですよ、実は。プライベートで捜査してるんで、家へ置いてるんですよ、手帳とか」  
にこやかに、更に続けて言う。

「何やったら手錠も見せましょか」

その返事に、納谷は何の疑いもなく、

「ほんまかいな！是非頼みますわ！拳銃見せてくれ言ったら、怒られますんやろうな。ハハハハハッ！」

それに合わせて、直樹も笑って見せる。

直樹はもう一度頭を下げ、もう会うこともないだろうこの男に、  
「それではまた」

と言って、マンションを出た。



## 試 5

今日はこれまで、あつちでもこつちでも嘔を吐きすぎて……  
まるで船に乗った後かのように体が揺れ、宙に浮いているような気がする。

三半規管への衝撃なんかなかったのにな。

……誰のためや？

我慢できるやろ？

ブツブツとそう唱え、自転車に乗って移動する。

役所、法務局などを回り、今日できることを全て済ませた頃には、もう夕日が差す時間になっていた。

コンビニで買ったサンドイッチを公園で食べながら、薄紫に照らされた町並みを眺めている。

616

……誰にだっているんな種類の、自分のための優先順位がある。

道行く人を見遣り、

昨日はあの人が踏み台だったかもしれない。

今日これから、あの人は踏み潰されるかもしれない。

……俺も明日、そうなるかもしれない。

ぼんやりと、そんなことを考えている。

……今日1日。

出来すぎやろ。

何か、メチャクチャ怖いな……。

まあ、差し引きゼロで計算するんやったら、こんなにツイてる日があってもエエんかな……。

万事がうまく行った先の落とし穴。

……飛び越えなアカンねん。

今日の俺の1日。

1円にもなつてへんなあ…。

明日はがんばる。

直樹の構想の中で、もう明日できることしか残っていない今日。まだ夕方ではあるが、コートの襟を立て、手袋をはめ、自転車に乗り、マンションの部屋へと向かう。

誰に見せるわけでも見られているわけでもないのに、規制を張り、しれっと過ごしたかのように見せたこの日。

直樹は少し疲れていた。

まだ4時過ぎだというのに、眠くて仕方がない。

夕飯の用意だけして寝ちまうか。

そんな気分で、着いた部屋の玄関を開ける。

「ただいまー」

言いながら廊下を歩いてみると、美奈子の部屋のドアが開いた。

「秋月くん、さっきね、パツくんから電話があったよ。7時にいつもの店へ来いって言うってたで」

「あー、ほんま。ありがとう」

軽く返事をして、リビングに座り込んだ直樹。

着替えもせずに、そのまま眠ってしまった。

「……ちよつと、秋月くん！秋月くん！」

体が揺すられて、うつすらと声が聞こえる。

目を開けると、目の前に美奈子の顔。

「風邪ひくやんか、ほんま。パツくんからまた電話がかかってきたよ」

ポーツとする頭を掻きながら、そういえばそんなことを言ってたな、

と思ひ出す。

……本当は今日、このタイミングで、直樹はパクに会いたくなかった。

「もう6時半やで。行かな遅刻するよ」

美奈子の言葉に「うん」と面倒臭そうに立ち上がる。

「……いいなあ、みんな外へ出て。私も出掛けたいわ」

「イヤ、パクウに会いに行っても、下らん話でダベツてるだけやで？」

「ねえ、私も一緒に行ってもいい？最近すごく体調いいし」

「でも、外メツチャ寒いよ？」

「大丈夫、大丈夫！ちゃんと着込んで行くから！たまには外の空気吸いたいんやわ」

そう言つて、美奈子は部屋に入つて行つた。

医者からは、極力運動は避けるようにと言われている。

だが美奈子も、年がら年中部屋の中に閉じこもりつきりというわけでもない。

少し心配ではあつたが、今日は付き合ってもらおうかな、と考えた。直樹はリビングに置いてあつたカイロを何個か擦り、それをタオルで巻く。

「もう着替えてしもうたから、アカン言つても止まらんよ？」

そう言つて部屋から飛び出してきた美奈子に、

「まあ、じゃあ今日は特別やで？お腹冷えたらアカンから、コレ巻いとかなアカンよ」

と、タオルで巻いたカイロを渡した。

……今日は特別か。

一体誰の特別やねん。

美奈子はこたつの上に、タケシ宛の置手紙を書いている。

そして2人は、パクの待ついつもの居酒屋へと出掛けた。

なるべく美奈子を歩かせないように自転車で行くことにし、後ろの荷台に美奈子を乗せて走る。

「寒くないか？大丈夫？」

「うん、大丈夫」

赤信号で自転車を止め、直樹は自分のはめていた手袋を美奈子に渡した。

「こんな寒い日に外へ連れ出したら、タケシに怒られるんちゃうるか」

「大丈夫やって。最近調子いいし」

信号が青に変わったのを確認し、また自転車で走り出す。

不意に美奈子が倒れた、先日あの光景を思い出した。

全身の血管が縮む感覚。

背中に汗を掻く思い。

タケシはあんな思いをクリアできずに、何度も経験していたのか。

話しかけてくる美奈子の声を半分だけ聞きながら、いろいろと振り返り、考える。

後のことは後で考えようなんてのはあまりタイプやないけど、今はとにかく金やよな。

……あのムラタのビル、聞いた通り抵当権でベタベタやった。

これ見よがしにブツ建てとるが、まだまだ全然支払いの途中か。

よく銀行が金を貸したな。

あんな、パンクするような会社に。

……上半身辺りで集まっているかのようなこの血液を、早く爪先の方まで巡らせてやりたい。

「よっしゃ、急ぐで！」

「おー！行けー！！」

直樹は立ち漕ぎをして、スピードを上げる。

店に着き、入口を開けると、パクはいつもの席に座っていた。

「ハアツ！？美奈子お前、何でこんなトコに来とんじゃ！？」

入口ののれんを潜りながら、

「たまにはエエやんか」

と美奈子が答える。

「マジかよ……。お前が食うてエエもんなんか置いてんのかな……。ま

あエエわ、早よ座れや」

メニュー片手に手招きをするパク。

彼と向き合うようにして、直樹と美奈子は席に着く。

その直樹を見て、パクが言った。

「直樹、お前何でスーツなんか着とんねん。ひよっとして就職活動か？」

「……………あ、んー……………まあ、そんな感じやけど……………」

どう答えて良いのやら。

直樹は曖昧に返事をする。

幸いパクはそれ以上触れて来ようとはしない。

店員を呼び、メニューを見せながら、

「コレとコレとコレ。それと、コレ」

直樹と美奈子の分も注文してくれた。

パクもまた、美奈子の食べられるものは全て把握しているのだ。

「それでパクウ、急に呼び出して何の用事だ？」

「ま、追々話すよ。それより寒かったやろ。直樹、お前も熱燗でもどうや？」

「俺は自転車で来てるからな、飲んだらアカンよ」

……………これからヤザ者になろうとしている人間が言うセリフか？とも思い、酒くらい飲めないとやっていけないんじゃないか、とも思う。

目の前に料理が並び、いつものように下らない会話を3人で交わし

ている。

大声で笑っている美奈子は、今日は本当に調子が良さそうでした。

その内、彼女が自分の話をし始めた。

「パツくん、今秋月くんおるから、私めっちゃ勉強してもらってるんやで」

「おう、そうか。まー、そういう意味じゃ便利なんがおるわな」

「そうそう。秋月くん、まるでお母さんみたいやわ。ごはん作ってくれて、いろいろやってくれて……」

美奈子の前では、なるべく親・親族の話はしないようにしている。照らし合わせたわけではないが、やはり酷なような気がして、それが自分たちの暗黙のルールになっていた。

そして今の直樹は美奈子のその辺を思い、自分もまた胸が焦げるような感覚を覚えている。

「私ねえ、ちゃんと勉強して、看護婦になろう思ってるねんで。パツくん、すごい？」

「おーおー！ゴツツイ家庭教師がおるからな。全然イケるやろ」

「それでな、お兄ちゃんもそうなんやけど、パツくんとな、秋月くん、いつもありがとうね。」

お兄ちゃんがお父さんで、秋月くんがお母さんで、パツくんがお兄ちゃん……、ほんまにありがとう。

私、友達もおらんから、ほんまにありがとう」

「……アホか。礼なんか言わんでエエねん。そんなモン、子供はな、そんな氣イ遣わんでエエんじや」

パクは照れくさそうにそう言う。

「コイツがお母さんというのは、ほんまにそうやろな。俺らの中でもヘレンさんやって決まっとるからな」

「ヘレンさん？っていうかパツくん、子供って！一体私、何歳やと思ってるんよ？」

「やかましい。ガキはガキなんじゃ。変な氣イ遣うな!」  
その会話を黙って聞きながら、俺なんかまだまだ、何の役にも立ててねえよ、と直樹は思う。

1時間ほど経った頃、少し酔い始めたパクが心持ち姿勢を正して直樹に向かって話し始めた。

「直樹な、完全に酔うてしまっ前にちよつとな、話があるつちゅーか……」

「うん?」

「直樹な、お前、もう学校戻る氣はないんか」

パクに言われて、いつも思い出す。

氣にしていないフリではないのだ。

自分のことながら、今休学中であるということが念頭にない。

だから答えに困ってしまう。

「うーん……のらりくらりって考えてるわけでもないんやけどな。

まだ行けへんよ」

そう答えるしかない。

「……あのな、直樹。お前アルバイトやってるやんか。ほんでな、保険とかいるいるあるやん。

ごつついデリケートな部分やからよう、俺もコレはおすすめや言うわけやないんやけど。

ウチの工場、一人辞めるんやんか。お前がその氣やったら、ウチで一緒に……どうや?」

以前待ち焦がれていた、パクからの申し分のない言葉だった。

直樹は身を乗り出し、

「マジか!?」

そう言ってしまうが、すぐに思い出す。

まだスタートすら切っていない、自分で決めた自分の部分。

それが一瞬で頭の全てを覆う。

……さつき、美奈子が語った自分の目標。

そんなの聞いたこともなかった。

将来看護婦になるうだなんて、聞いたこともなかった。

それを聞いた今、こうやって食事をしながらダベツていることすら、時間のロスだと感じてしまう。

金が必要だ。

急がなきゃならない。

「……パクウ、せつかくやけどな、今俺がこうやってるのは、俺の問題やし。

俺は職場にパクウがおると、馴れ合ってしまいそうだな。自分で決めなアカンて思ってんねん。

ほんまにありがとうやけど」

パクは少し黙った後、

「おう、そつかそつか。うん、うん。そうやな。

ま、休学もな、いつまでか分からんし、一応な、こういう話があるつちゅーことで言うてみてん。よっしゃ、分かった。

まあ直樹、何かあったら言うてくれよ？俺ができることがあるかもしれんからな」

そう言うて、パクはまた酒を飲み始める。

……とても幸せだと思った。

自分のことを考えてくれる人間が、少なくとも3人いる。

俺も役に立たなければ。

自分のキャパシティを計り切れていない俺の広さは、まだ随分と余裕があるはず。

こう考えて、厚かましくはないだろう？

……心配をかけちゃいけない。

だから今回、俺がしようとしていることは、何があっても言うてはいけない。



「よっしや、ぼちぼち美奈子も寝る時間やしな。お前らの部屋行って飲み直しや」

席を立つパク。

「な！？まだ8時すぎやん！まだ寝る時間とちゃうで！あんまり子供扱いせんとなつて！」

「だからガキや言うところやないか。家へ帰るぞ」

それを聞き、直樹と渋々の美奈子も席を立つ。

会計の前に来たところで、美奈子が

「ちよつと待ってて」

そう言つて、お手洗いの方へ小走りに行つてしまった。

それと同時に酔っていたと思つていたパクが、少し顔を戻して直樹を見る。

「……直樹、お前無茶するなよ？お前もいっぱいはいしんどいんやからな。

俺も仕事終わつてから夜中、ドカチンやってんねん。まあ毎日ちゃうけどな。

美奈子のことは俺らが考えてるから。お前は自分のことをじっくり考えろ」

「……………」

声が耳に入ってきているその間、息を吸い込むのを忘れた。

ただ単に勘のみで、今ソレを言ったのか。

それとも俺から何かが滲み出ているのか。

咄嗟に怪しい今の自分の姿を想像し、

「へハツ！何や、ソレ……………」

一応答えと呼ばれるものを返しておく。

その時、美奈子がお手洗いから戻ってきた。

「エライ混んでるから、家帰ってからにするわ」

「おいおい大丈夫かよ？漏らすんちゃうやろな？」

「だから、子供扱いはエエ言つてんねん、オッサン！」

……パクが睡眠時間を削り、お金を貯めていることを今初めて知った。  
しかし  
それでも

自分の中にあるこの意欲を、直樹は表にするわけにはいかないのだ。  
夕方帰ったときは、あれほど眠くてしようがなかったのに。

直樹はなかなか眠ることができず、真つ暗な部屋の中で布団に潜り込み、考え事をしている。

美奈子ちゃんの目標……

何が何でも叶えてやらないと。

……パクウが夜中バイトをしてるなんて、全然知らなかった。  
タケシはそのことを知ってるんやろか。

以前タケシが言っていた言葉を、自分の頭の中で何度も繰り返す。

『そらあ、俺かってこんな仕事したないよ。せやけどあの印刷会社に比べたら給料も倍以上やし。』

そやけど、しんどいのはしんどいで。普通の仕事ちゃうしな。

まあ、しんどいのはドコ行っても一緒やろ。今んトコ、命の懸かるような仕事もないしな。

は〜あ……宝くじでも当たってくれたらなあ。俺もソツコーでな……。

とにかく美奈子をな、人並にな……。兄妹やからっていうんちゃうんやけどな、俺も母ちゃんもこんな顔ブラ下げてるのに、アイツだけは顔がシュツとしとるやろ？

男とかもできてな、結婚とかもな、……させてやりたいんや『

今どこで何をしているのやら、生きているのか死んでいるのかすら分からない家族の妄想をいったん止めたタケシにとって今、美奈子が全てなんだろう。

……給料が倍。

それじゃ間に合わんかもしれん。

ようやく俺にも覚悟ができたからな。

まだ帰宅していないタケシを思い、

お金ができたなら、一緒にどっか逃げような。

そう考える。

踏み込んだ場を秘密にしている限り、パクとタケシにもこれから嘘を吐いていかなきゃいけないんだろう。

そんな状況が、どんどん増えていくんだろう。

過程がどうであれ、終わり良ければ。

こう考える現状を、感情を20%弱にして肯定し、突き進む怖いもの知らず。

これでいい。

この思いは、決して誰にも届かせはしない。

次の朝。

昨夜なかなか寝付けなかったにも関わらず、直樹は随分と早い時間に目を覚ました。

美奈子を起こしてはいけないので、ほうきで掃除を始める。

それが終わると朝食・昼食・夕食と3食分の美奈子の食事を用意し、洗濯物も片付け、一通りの家事を済ませた。

時計を見ると、9時を回ったところ。

直樹はよし！と一発顔を叩いてみる。

ちようどいい。今から出れば10時頃になる。

いろんな店はもう開いているだろう。

直樹は家出した際に持ってきた大きめのカバンに、いろんなものを詰め込んだ。

私服を上下で2パターン

靴

整髪料

スーツ

コンタクトに変える前にかけていたメガネ

帽子は出てから買おう。

それと、えーっと……えーっと……

指を折りながら一つ一つ確認する。

目を覚まし、自室から出てきた美奈子に、

「ごはんは3食分冷蔵庫に入ってるからね。チンして食べてよ」と、慌てて話しかける。

美奈子は直樹のスーツ姿と、手に持ったカバンに目を遣り、眉を下げた。

「えー……秋月くん、大きいカバン持ってどこ行くん？まさか出て行くんちゃうよね？」

……もう家出はしないよ。

「うん、ちよっとね。今日は遅くなるかもしれないから、夜までこはん作ってるから。」

「いい？もし万が一調子が悪くなったら、いつも言ってる通りにするんやで？」

救急車呼んで、ここの住所言っつて、パクウの家か会社に電話。ね？」

「……うん、分かった」

美奈子の返事を聞いて、直樹は部屋の玄関を出た。

これからすべきこと。  
昨夜はたっぷり時間があつた。

考える時間が。

ダテに弁護士事務所でアルバイトなんかしてねえ。

ダテに勉強ばかりしてなかった。

そう思いながら、本当に自分の何たるかがダテでないことを願う。

この500万の紙ツキレの向こう側に見出すものがあると信じ、直樹は自転車に跨る。

外は快晴。

自転車で通り過ぎる景色を流しながら、直樹は考える。

昨日のアレは、警察手帳の提示を要求されたというものでもなかった。

今日俺は、その条件になれば、警察にでも何にでもなってやる。

直樹は自転車を商店街の方へと向ける。

途中、ムラタのビルを通り過ぎた。

……昨日よりも債権者が増えている。

昨夜練った計画書、あの債権者たちの存在は重要。

俺が行くまで騒いでいてくれ。

そう願う。

商店街に着くと文房具店を探し、黒い手帳と金色のマーカーを購入した。

サイズはこれくらいでいいと思うんやけど……。

見たことないしな。

表紙に金色の文字で『警察』と書き、息を吹きかけ乾かす。

大体、警察手帳の表紙に何て書いてあるかも知らんのよなあ。

映画やドラマじゃないんやから、提示を要求されることもないやろうけど、ミスするわけにはいかない。

その二七警察手帳をポケットに突っ込み、次はサングラス、そしてキャップも買う。

……出費がかさむ。  
でも俺がやるうとすることは、エビでタイを釣ることではなく、エビでマグロを釣り上げること。  
何十歩も先を見据え、そのままゴールまで走り抜けてやるという計画。

直樹は昨夜のパクと美奈子の遣り取りを思い出し、溜息ではない息を洩らす。

そうしていざ出発しようとした、その時。

目の前の町並みが意識に触れ、ふと思い出した。

この一本向こうの大きな通り。

急がなければ、と焦る心中を置き去りに、直樹はその通りへと自転車を向ける。

……すっかり様変わりした、紀子の住む家のあった通り。

久保スポーツの場所がどこだったかすら分からないほど変貌したその景色は、紀子の面影を微塵も感じさせない。

直樹はしばらくの間、その風景をスポーツと見つめ、ごめんなさいと思考で唱える。

そして今度こそ、本来の目的地へと走り出した。

昨日の経験を踏まえ、自分より随分と年上の人たちが、随分と物事を曖昧に見ていると、そう感じていた。

昨夜眠れずに自分の中で立てた計画。

おそらくあの債権者たちは、隣にある不動産会社の社長とムラタが繋がっているとは思っていない。

きつと調べてすらいない。

直樹はもうすでに確認している。

田辺不動産が、新たに運送の会社を興していることを。

これまでの田辺不動産の資金力、それを考えると新しい会社を興すなんてのはまずあり得ない。

そんな資金があるのなら、不動産の方をもっと手広くやっているはず。

詐欺の常套法。

あれしかない。

本来存在しない金銭の取引を兄弟間で成立させ、証拠として書類のみをこしらえて、その返済を車などの物品で済ませている。

代物弁済予約とでも言おうか。

恐らくそういう形にしているはず。

ムラタ製版印刷所は自立できなくなり、何か良い方法はないかと弟に持ちかけたのだろう。

それで弟の田辺がうまく立ち回った。

資金力がなく、倒産目前のムラタの会社の現状が表沙汰になる前にいろんなものを購入させ、それらを横流しさせる。

トラックを買わせているのが何よりの証拠だ。

その見返りとして、田辺からムラタへいくらかのキャッシュバックがある。

所持金がゼロになるよりはマシと、兄のムラタはその取り込み詐欺に賛同し、今回の件に至っている。

……という推測。

ありえへんやろ。

最近購入したものが何一つ手元にないっちゅーのは。

流すルートを確認してるとしか思えん。

もし俺の考え通りでなかったとしても、それに近いものであることに間違いない。

曖昧すぎんねん。

素人が聞き込みしただけなのに、情報が集まりすぎる。

計画倒産

詐欺

アルバイトの経験が生きている。  
自分で取り扱ったわけではないが、こういう取り込み詐欺は間近で見ていた。

まったく。

やることがブサイクすぎんねん。

計画がメチャクチャで、頭が悪すぎる。

穴だらけじゃ。

これに気づかんアイツらも頭が悪すぎる。

物返せ、物売った、ハイそうですか、やないやろ。

ここで直樹の考えていた計画は、

まずあの債権者たちに「お宅から受け取った品を、この社長は隣に流しとるで」とバラす。

昨日のあの債権者たちの形相を見た限り、警察へ突き出す奴はいないだろう。

一文にもならないからな。

そして隣の田辺不動産に乗り込み、取り込み詐欺の片棒を担いでいることを問い詰める。

あの会社は儲かっているようだし。

運送会社をたたんでしまえば、支払えない額ではないだろう。

詐欺罪の片棒だ。俺の持っているこの胡散臭い不渡手形も買い取るはず。

元々仲の悪い兄のせいで自分が実刑を食らうなんて、そんな選択はしないだろう。

きつと、買い取るはず……。

直樹は自分の考えを確信にするため、ムラタの会社に乗り込む前に田辺不動産の敷地を覗き込んでみた。

しかし、確信にするためにしたこの行為は、直樹が確立させていた



光景とはほど遠いもの。

……何でや？

運送会社も同じ敷地内のはずやったのに。

そこには『田辺不動産』の看板を掲げた建物しか建っておらず、どこをどう見ても運送会社を運営している様子がない。

おかしいな……。

トラックが出払ってしまっている、そんな様子もない。建物を建てた。壊した。そんな形跡もない。

目の前にはそれなりの広さを持った、更地があるのみ。

試練とでもいうのだろうか。

自分を買ってこられすぎてしまったような気がする。

十人十色と言うが、以前アルバイトで見た、同じような案件。

『同じような案件』と言っている段階で、想定範囲が広すぎた。直樹の目の前には、あるはずの会社が、ない。

眉間に皺を寄せ、まるで西日に当てられているかのような苦い顔で、直樹はその場に立ち尽くす。

折れ曲がりそうになる膝に手をつき、持ちこたえた。

経験を数値に表すのであれば、ほぼゼロでしかない俺。

こんなもんだらう。

更に頭を使え。

と、そこで先ほどの光景が頭を過ぎってしまった。

たっぷりと人の気配のする、様変わりしたあの商店街。

とても無機質な、見慣れない、丈夫そうなものに加工されていた。

黒目が瞼の裏に隠れる錯覚。

まるで電源が今にも切れそうな自分の姿を思い、頭を振って目を覚まそうとする。

……違う。

お父さんは今後も、借りを作った人たちに対して何かを返そうなんて気は、毛頭ない。

俺はゴールの後、どんな目に遭っても構わない。

人がどうにかなってしまった時、そのどうにかなってしまったことに対して、何人が悲しんでくれるか。

それは人の価値の一部であることに他ならないと、そう思う。

多ければ多いほど、いいのかもしれない。

俺には3人もいる。

見据えた部分は、底まで水分の混じった薄い色ではなかったはずや。折れ曲がった膝も、猫背も、そう考えることだったん治めることができた。

取りあえず、やらなければならぬことをしなければ。

どう転ぼうが、それは変わらない。

証拠を掴むんだ。

昨日、流れた車のナンバーやその他債権者たちから聞いた物品のことを調べておいた。

それらを満々に生かすつもりではあったが、ソコにないものはしょうがない。

直樹は調査事項をメモした紙をポケットに押し込み、田辺不動産の敷地をぐるっと一周して見て回る。

この田辺不動産もまた、夫婦で会社を経営している。

そして19歳になる息子が1人。

運送会社はその長男が社長として登録されていた。

直樹が歩いて不動産会社の裏手に回ると、そこには背中合わせに一軒の民家が建っていた。

登記簿通り。

この家には、家族が3人で暮らしている。

玄関には丁寧な表札が掛けられており、名前が記されていた。  
直樹は2階建ての家を見上げ、考える。

まず、不動産会社。

そして、自分たちの家。

…運送会社。

調べた限りでは、その全てが間違いなく、この敷地内にギョウギョウウ詰めが入っていた。

なのに、何で運送の設備がない…？

紙面上では間違いなく、会社ができ上がってここにあるはずなのに。

直樹はいつものペースを持ち直し、駆け足で頭を巡らせる。

## 試 6

直樹は公衆トイレに走り、着替え始めた。

一度田辺不動産に潜り込んで、下調べをした方がいいのか？

……潜り込むって、就職？

そんな時間、ない。

考える。

まだ考えが定まらない直樹、取りあえず持ってきたからという曖昧な考えで、私服に着替える。

サングラスをかけ、キャップを被り、その姿を鏡でじっと見つめて思った。

俺の中にやましいモノがあるからか。

それとも、そんなモノなくても……。

何やコレ。

胡散臭すぎる。

……イチかバチかの作戦に出るのはまだ早い気がするし、でも、あと5日しかない。

この一週間の猶予というのはおそらく、俺がいったん東京に戻り、ゆっくりしてからまたこちらへ来る時間を、東さんが見越しての日数だと思う。

500万を父が捻出するんだと。

俺がそうするもんだと思っっているんだろう。

……ナメられている。

今の俺に、そんな便利な手段はない。

持っていた不渡手形を、太陽に透かして眺めてみた。しかし、何か良い案が浮かぶわけもない。

直樹はカバンに放り込んだスーツのポケットから、自分の作った二七警察手帳だけを取り出し、あとはカバンごと公衆トイレの高い棚に押し込んだ。

そして次に飛び込んだのは、公衆電話。

俺をナメてるアイツに、目にモノを……

直樹がかける電話番号は田辺不動産ではなく、田辺家のもの。

おそらくこの時間は仕事で、誰も出ないだろう。

でも、……誰か出てくれ！

田辺不動産の社員として集団の中に飛び込むのは、賢明ではない。一人ひとり、バラして話したい。

電話のコール音が何度も鳴る。

出てくれ。

出てくれ！

誰でもいいから、出てくれ！！

何十回コールしたのか。

一度切つて、かけ直すか……？

そう思ったとき、チン！と受話器を取り上げる音がした。

「……………」

「あ！もしもし？」

「……………」

「もしもし？田辺さんのお宅でしょうか？」

「……………はい」

直樹はポケットに押し込んでいた警察手帳を取り出す。

そこには田辺一家の名前が記されている。

「えっと、僕ですね、山崎といいます、幸雄くんお見えになりますでしょうか？」

幸雄というのは、田辺家の長男。

19歳の一人息子。

「アレ？もしもし？」

「……幸雄は僕ですが。……誰ですか」

「あ、田辺くん？俺俺！高校の同級生の山崎！覚えてるかなー？」  
幸雄が覚えているはずもない真つ赤な嘘を、直樹は捲くし立てる。

「ほら、クラス違うんだけど、覚えてへんかなー？」

今ね、仕事辞めてしもつて、就職活動やっとなねん。コツチに帰ってきたもんやから。

田辺くんの家つて不動産会社やってたよね？俺、前から不動産会社つて興味あつたんよ。

それでね、同級生のヨシミっつーか、な、ちよつと一回会つて話聞いてくれんかなー？」

今日もまた、俺つてこんなヤツだっただろつかと思うほど滑らかに流れるように口からデマカセが次々と溢れ出す。

「どうかなー、田辺くん。今、時間ない？」

「……今ドコにおるん？」

「あー、田辺くんの家の近くやで？公衆電話から電話してんねん。

ちよつと出てきてくれんかなー？無理かなー？」

「……うん、いいよ」

「……まさかの返事だった。

やけっぱちで出た強硬。

直樹が思い描いた理想に準じるように、幸雄が直樹の誘いに乗った。

2人は近くのバス停で待ち合わせをすることになった。

直樹はそのベンチに座り、幸雄が来るのを待つ。

「……ああ言ってきたら、こつこつ。

こつこつ言ってきたら、ああ返す。

そんなシミュレーションをしながら、少し腰を浮かすように座り、逃げる準備も万端だ。

もしも嘘がバレていて警察官なんかを連れて来られたら、身も蓋も

ない。

よくある名前の山崎ってのを選んだけど、彼の同級生に山崎ってのがおったんかな……。

サングラスとキャップ。

これを外すことはできない。

そしてなるべく立つてはいけない。

俺はほら、身長がな……。

周りをキョロキョロしながら、そんなことを考えている。

道路の左右共、まだこちらに向かつてくる者はいない。

直樹は逸る心を押さえつけようと大きく息を吸い、吐いた、

その時。

突然背後から、

「あのう……」

「ッ！」

直樹はまた、ビクツと体を戦慄かせる。

やましいことがアリアリのリアクション。

「……山崎さんですか」

そう話しかけてきたのは、多分きつと田辺幸雄。

当然直樹は幸雄の容姿を知らない。

「あ、田辺くん？久しぶり！」

背後に立たれてしまつては逃げる準備も無駄になり、直樹の顔は引き攣つてしまう。

それを隠すように笑顔で振り向いた先には、

ボサボサの長髪に、うっすらと生えた無精ヒゲ。

ジャージの上に半纏を羽織っている、彼。

「……………」

のそつと動きながら、直樹の隣に腰を掛ける。

直樹は気を持ち直し、いつでもダッシュで逃げられるように体勢を整える。

「田辺くん、久しぶりやね。僕のこと覚えてるかなあ」

そう話しかける直樹に、しかしこちらを見ようとしない幸雄。

「……………」

「……イヤ、久しぶりに帰って来たんやけどね、」

と話を続ける直樹を遮るように、幸雄が言った。

「……アンタ、誰？」

「……エエ？嘘や、覚えてへん？高校一緒やった山崎やんか」

クソツ！

限界か！？

トボけてやり過ぎせるほど甘くない。

最初から分かっつつたけど。

やっぱりこんな手に出るのは早すぎたか。

直樹は更に腰を浮かす。

「嘘やるー？殺生やなー。マジで覚えてへんの？」

そう言う直樹の言葉を、沈黙のまま聞いている幸雄。

直樹は彼が口を開くのを待つ。

「……山崎さん。俺、高校って行ったことないんですよ」

「……………え？」

「俺、高校行ってないんですよ。アンタ、誰？」

車の行き交う道路をじっと見つめながら、幸雄は決して直樹の方を

見なかった。

……曖昧で不様。

作り話やないんやから、こんなモンが通用するはずがない。

高校には行っていない。

そんなことだつて想定できただろうに。

……誤魔化しきれない。

逃げるか？

そう考えを巡らせ、すぐ後にこつも考える。

だったらコイツは何故、ここに来た？

臀部がベンチから離れるほどに腰を浮かせていた直樹。



もう一度座り直し、体勢を戻した。

「……えーっと、何て言ったらいいんでしょうね……」

そう話し始めたとき、幸雄はようやくこちらを向いた。

そして、直樹はまた言われる。

「あー……、やっぱり警察の人ですか？」

またかー！

そう思ったが、そう来てくれるのは大変に都合が良く、何よりだ。

「……騙すような形で申し訳なかったんやけどね……」

直樹はポケットから、あの手作りの警察手帳をちらりと幸雄に見せる。

何分ほどだったのか。目の前を車が騒々しく行き来する中、何も話さず時間が過ぎていく。

やがて幸雄が口を開いた。

「……そらあバレますよね。あんなことしたら。俺の話聞いてもらって、捕まえるんやったら俺にしてほしいんですよ。全部話しますから」

電話の段階で、直樹のことを警察の者だと思い込んでいた幸雄。

自分からこの場に来たのだから逃げるわけもなく、隠れるわけもなく。

直樹にこれまでの経緯を話し始める。

幸雄の父はどうしても、幸雄に会社の社長になってもらいたかったらしい。

だが、田辺不動産は世の中の好景気の中、うまく運営できずにいた。このまま行けば倒産という切羽詰ったものではなかったが、自分の代でこの会社を太く大きくして、一人息子の幸雄に譲りたかったのだと言っ。

もっと儲けられるはず。

しかしその考えは空回りし、新しいことを始めるたびにそれは失敗に終わってしまう。

そんな時、隣にあるムラタ製版印刷所から依頼があった。  
金を貸してくれ、という依頼。

それに対して、幸雄の父・田辺が出した答えは直樹が思った通りのもの。

……取り込み詐欺。

ムラタから田辺へ数千万もの借金をあつたものとし、その返済にムラタが手形での取引・ローン・半金半手などで購入した物品を当てるといふ打算。

それを『あるルート』で金に換える。

取り分はムラタ7：田辺3。

……やっぱり俺の思つた通りや。

この世の中で言われる、今の好景気。

役所仕事つていうのもいい加減で、大概にしると思う。

建つてもいない会社を、確認もせず許可するなんて……。

……でも、おかしい部分がある。

そう思つた直樹は幸雄に問うた。

「7：3でよくムラタさんの方がOK出したね。調べたところ、モノによるみたいやけど、半金にしてる分はマイナスになつてまうやろ。いくら足の早い商品やいつても、買取が10割になるワケないやん。良くて6割。それじゃ儲けにならへんやん」

【注：

例えばムラタが100万の物品を半金半手（50万を現金・50万を手形）で購入した場合。

横流しをしても、良くて60万の買取となる。

7：3ということは、ムラタの取り分が42万。田辺が18万。

ムラタは50万を現金で支払つているので、マイナス8万ということになり、儲けにはならないという意味】

それに対しては、いろんな答えが待っていた。  
ムラタから田辺に返済として動いていた物品。

それらを金に換えるため『闇のルート』で流したのは、この後直樹が500万を持って帰らなければならぬ東の事務所だったのだ。

車、印刷機、カラーコピー機その他もろもろ、一つひとつの商品がマイナスになってしまっても、物品総合の金額で割り出せば、ムラタにもちゃんとプラスになるように計算されていた。

「……………」

直樹は拳を握り締める。

今回のこの件、全ては東の計画だったと確信した。

俺を利用して、更に500万搾り取るつもりか。

ナメやがって……………！

目を細めながら、しかし直樹の思考は次へ飛ぶ。

足の早い品物なら、まだ分かる。

その中に、どうして中古のトラックなどが入っているのか。

「中古のトラックなんか横流しできんやろうに。あんなモン売れんやろ」

その直樹の疑問の答えが、あの運送会社設立だった。

田辺は考えた。

自分も東の指示とは別途で稼げないか、と。

そこで思いついた。

『田辺不動産』の前で遊んでいるあの更地を使って、書類上のみ会社を建てよう。

それには運送会社が都合がいい。

大量のトラックを車検に通しても、違和感がないだろう。

そう考え、ムラタにトラックを購入させ、自分のところへ流させた。そうして手に入れたトラックの使い道は、直樹を少なからず驚かせた。

車検から車が返ってきた際に、エンジンや に を混入し、

エンジンをかける。  
その状態で走ると、車は何mも走らないうちにピクリとも動かなくなる。  
そうやってトラックを全て潰し、保険会社から金を受け取っていたのだ。  
中古の車をまた売りするより、よっぽど金になったらしい。

……コイツらほんま、何でもアリか。  
保険金詐欺やんけ。

東も東で、どこまでもナメやがって。  
この手形はあいつにとって、はした金よりも更に下を行っているもの。

端数でしかないんや。

直樹は奥歯をギリツと噛み締める。

こういうクサレらに、遠慮はいらん。

そう心の中で呟く。

直樹はジャンパーの内ポケットに忍ばせていたテープレコーダーの録音ボタンを切った。

「田辺さん、エエ話が聞けたよ。後で家の方へ伺うことになると思うけど……」

そこまで言った直樹に、幸雄はまだ続きがあると言う。

「あのう、山崎さん。最初に言いましたけど、今回の罪は全部俺が被りますんで」

「それはどうなるか分からないよ」

幸雄はまた、直樹を見ずに話し出す。

「俺ねえ、小学校の4年から学校っていうのに1回も行っていないですよ」

「……………」

「授業で使う絵の具セットを忘れたんですね。ほんで、隣のクラスのヤツに借りたんですわ。」

ほしたら、間違つてパレットを割ってしまったね。ちゃんと謝ったんやけど、許してもらえんでね……。

そつから、隣のクラスのヤツからイジメられるようになりましてん。ほんならそれがどどん飛び火して、自分のクラスの間まで俺のことをイジめるようになりましてね。

何かちようど面倒臭かつたし、もうエエかなーって思つてしもつて……。そつから1回も学校へ行つてへんのですわ。だから高校のクラスメイトなんておらへんのですよ」

幸雄はそう言い、少し笑つて直樹を見た。

今の直樹にとつて、そんな話はどうでもいいはず。

しかし、右耳を塞いでも左耳が聞いてしまつても言おうか。

この後『学歴のない俺のために、親父があんなことをした』

そう言い出すつもりか？

そうは思つたが、直樹は幸雄の話に聞き入つてしまつた。

「そつからはずーっと、家におるんですよね。

今回外へ出たのも、去年の11月以来かな……。そん時1回、タバコ買いに出た……。かな。うん、あん時以来ですわ」

……。イラツとした。

これが俺ら家族の形、つてか。

「なあアンタ、それつて誰にも相談せなんだんか？

義務教育つてのはな、子供に義務を課しとるんちゃうで。周りの大人がアンタを学校に行かす義務があるつていう制度や」

苛立ちのまま、幸雄の話に対する返事をしてしまった。

俺には関係ねえ。

そう思いつつ。

「……。あー、そうなんですわ。義務教育のほんまの意味なんてのは知らないんですけどね。

父さんは何も悪くないんですわ。母さんも、何も悪くない。

3日だけと思つて休んだ学校が1週間になり、1ヶ月になり……。もうエエやつて決めたのは俺なんですよね」

幸雄の声を聞きながら、奥歯を食いしばるのを止めることができない直樹。

やっぱり、これがコイツらの家族の形か。

病気で行きたくても行けなかった、そういう人間がいる中でこいつらは……！

「父さんは俺の将来を心配して、余裕で経営できるように、余裕のある会社を俺に渡したかっただけなんですわ。」

だから、捕まえるのは俺だけにして下さい。もう親父に悪いことしてもらいたくないんですわ。」

俺みたいなゴミ、あの家におらん方がエエんですわ」

だったら、あの債権者たちはどうなるんや？

考えて言うとするんやるな？

父さん母さんって。

そんな考えが頭を右から左へと過ぎつつが、今の自分に説教をしていいようなメツキは施されていない。

直樹はその場に立ち上がる。

サングラスを取り、キャップを外す。

「あんな、そんなモン俺には関係ない。親父は悪ないやあ？ あんまり世の中ナメんなよ？」

パクられるのはオノレら3人じゃ！ お前も親父もオカンも悪いんじや！

3人で雁首揃えて、余所で1回頭冷やして来た方がエエんちゃうか！

こちらを向かない幸雄に対して直樹はそう言い捨て、その場から早足に立ち去った。

…… ああ思った矢先に、結局説教か。

つくづくやな。

計画通りではなかった。

だが、ほぼ計画通り。

俺はブサイクな仕事はしたくない。  
納得の行く、まとまりのある形で済ませたい。

直樹は完結させたい頭で、知らず飛び石の思惑を渡り歩く。

この後はムラタのところへ行つて……

……そうそう、証拠はあんな。

アイツの言ったことはバツチリ録れてるはず……

……債権者に……

自分の荷物を突っ込んでいた公衆トイレの前まで来て、直樹は立ち止まった。

「……………」

光が当たっていれば、必ず影が存在する。

これって、必ずや。

この世に何も無い世界なんて、ないんやからな。

直樹はまだ会つてもいない田辺の顔を思い浮かべ、空想の中で「しようがなかったんや」と言い訳する姿を想像する。

悪いヤツは、自分の悪事を反故にできると思って生きている。

悪事にはそれなりに、伴うものがあるんや。

なのに、決して自分には回つて来ない、そう思っているから悪事を続けられる。

そしていざ自分に回ってきたとき、それが想定にないから人一倍驚いた顔をするんや。

とんでもない、滑稽な顔で。

俺は醜く生きてやる。

そう決めた。

先ほどの、髪が肩まで伸び、無精ヒゲが生え、こちらを見ない幸雄

の姿が頭に浮かんだ。

イジメで学校に行けなかった。

あいつの、そんな話……。

自分のことをゴミと表するヤツに、初めて出会った。

皆が皆に言い訳、語りがあるのかもしれない。

せやけど、あの債権者たちはどうなるんや？

あの金が返って来ないことで、首を括らなアカン奴が中にはおるんと違うか。

守るべき家族を守れずに、迷宮に入る奴がおるんじゃないか……？

…… 田辺家族は……

直樹は再び、公衆トイレでスーツに着替える。

整髪料で自分がるべくイカつく見えるよう、髪型を整えた。

そして自転車に乗り、  
(二者択一ならば。)

猛ダツシユで向かう先は、  
(手を差し伸べたのは。)

…… 田辺不動産。

きつくきつく口止めされていたんだろう。彼は。

何があっても言っではいけない、と。

そう言われていたんだろう。

父親の言い分は、押し付けがましかったか？

俺の前でベラベラ喋ったお前は、父親の考えをどう受け止めとったんや？

直樹の頭の中で響く、聞き慣れたあの重厚な音。繰り返された言葉。

今のは見なかったことにしなさい。

言われた通り見なかったことにし、いまだに自分の奥底に仕舞ったままにしている数々の場面。

父

母

家族というもの



今のは見なかったことに……

田辺幸雄。

待つとけよ。

今、ラクにしたる。

直樹は田辺不動産の前に自転車を止め、大股でズカズカと建物の中に入っていく。

ドアがバチンツ！と音を上げ、開いたと同時に、

「邪魔するぞツ！！」

と怒鳴りつけた。

呆気にとられ、こちらを見る従業員が3人。

「おいツ！田辺清一くんはドレや！？」

女2人に男1人の従業員。

見れば、誰が田辺かは分かる。

直樹がこう言い放ったのは、威嚇の意。

「……は、はい、田辺は私ですけど……何でっしやるか」

メガネを外し、怯えたように席を立つ父親・田辺。

「まあ、まずはコレ聞いてもらおうかいな」

直樹はポケットから小型レコーダーを取り出し、再生ボタンを押す。

そこから流れてくるのは、先ほど幸雄と直樹が交わした会話。

3人のうち、2人の血の気が勢い良く引いていくのを見て取れた。

「おいオッサン！えらい派手にやっとなるやんけ！」

「……ッ」

言葉も出ない田辺。

「どうすんのや？お前の兄貴んトコに債権者がウジャウジャおるぞ。そこへお前ら2人、放り込んでやっても工エんやけどな！」

カタカタと、震えの止まらない母親の姿が目に入った。

ここでこう言い放つことで、大抵の調べはついているということは

伝わっただろう。

田辺が言う。

「…………お宅はどちらさんで？」

それを聞き、直樹は一度唇を噛む。

内部のプライベートが言葉を発しようとする。

…………こんなモノは置き去りにしなければ。

コイツらにも、俺にも、関係ない。

「俺が何モンか知ったら、アンタら更にやりにくくなるんちゃうか。聞かん方がエエと思うで」

直樹はそうとだけ答えた。

田辺夫婦はまるぶように直樹に近寄り、哀願し始める。

「勘弁してもらえませんか。私らにも事情がありますんや。警察へは…………警察へは言わんといて下さい！ほんまに、ほんまに申し訳ございません！」

初対面の2人から土下座をされる直樹。

見下ろしたその2つの背中を、奥歯を噛み締めながらでないと思えていられない。

俺みたいな若造に、一握りの躊躇もなく土下座ができるのもまた、一人息子への思いか。

…………涙が出そうになる。

こういう時は、「堪えろ」と3回唱えることにしているんだ。

直樹は斜め上を見上げた状態で、

「警察行った方が楽になるんちゃいますの。あの債権者たちのトコ行ったら、どんな目に遭うか分かりませんよ」

「……………」

その言葉には沈黙のまま、ただ直樹に対して土下座を続ける2人。どっちも選べないってことか。

直樹は2人の背中を見ないでいることができない。

汗ばんだ手でおもむろに2人の首根っこを掴み、持ち上げるように

引つ張った。

『息子が見とつたらどうすんねんッ！』  
そう言いたかった。

「地面ばかり見つめてもろうとつても、何も始まらへんねん」  
同時に2人を勢い良く放り出すと、直樹はポケットから茶封筒を取り出し、例の手形を突き出した。

「お前の兄貴が焦げ付かせた手形や。まあ連帯保証人やけどな。  
おいオツサン！この手形をお前が700万で買い取れ。500万と  
ちやうぞ。700万や。手数料が発生しとんねん」

え？という顔をして、田辺は直樹を見上げる。

「……ほ、ほんまに……700万で？700万でよろしいんですか  
……？」

……こいつらは、息子をイジメから救い出さなかつたくせに、今更  
詐欺まで働いて。

「すぐソコに銀行あるやんけ。キャッシュで700万で買い取れ言  
うとんねん。1円もまからんで。まだ3時になってへんぞ」

それを聞いた田辺は、

「ほんまに……？ほんまに700万でよろしいんですか……？」

「やかましいッ！早う行けッ！」

直樹の怒声と共に、田辺はドアを飛び出し、銀行へと走る。

静寂の事務所の中、直樹は傍にあつた椅子に座り込んだ。

従業員の1人は何も言うことができず、放心状態。

母親・田辺は震えが止まらない様子。

それを、これでもかというほどに作り上げたしかめっ面でじっと見  
つめている。

どれほど時間が経ったかは分からない。

やがて父親・田辺が息せき切って戻ってきた。

……こんなところには、1秒も多く居たくない。

田辺の顔を見て、直樹はその場に立ち上がる。

「……その辺のよう、道歩いてる全く知らん人ら。あの人も、行き先で何かが待ってるのかもしれんよな。人は皆、そういう風には考えないよな」

「……………」

2人は直樹が何を言っているのか分からない顔をしていた。当然だろう。

俺も何を言っているのか分からん。

「おい田辺2人！その手形買い取るんやな！？ちゃんと念書も書いてもらうぞ。快くこの手形は買い取らせてもらいました、そうやって念書書いてもらうからな」

「……ほんまに700万でよろしいんやな！？後から言われても、もう余分なゼニはありませんで」

あんなだけの詐欺を働いとして、もうゼニがない？

この場でもまだカマすか！

直樹は鋭い眼光そのままに、睨みつける。

田辺は怯えつつも、自分のテンションを保ち、話を続ける。

「……………これを、700万で買い取らせてもらうたら……………今回のことは黙つてもらえますんやろか……………」

「……………」

プライド？

悪党のそんなモノを考慮してやる必要はない。

父親の責任？

それは、間違いなくあるだろう。

何を思い、どう結論付けるか。

直樹は悩みながらも口を開く。

「……………エエやろう。墓まで持ってつたる」

それを聞いて、田辺は直樹の言う通りに念書を書き、現金700万を手渡した。

直樹もまた、手元にあつた不渡手形を彼に突き出す。

「申し訳ございません」と頭を下げる田辺を見ることもなく、勢い良くドアを閉め、外へ出た。

……今回のことで、一番ブサイクな俺は俺や。

最後は恐喝かい。

寒い。

何て寒い仕事や。

こんなのは俺じゃないし、あんなのも目指す俺じゃない。

ムラタの方に目を遣ると、債権者たちが騒ぎ立てている様子が伺える。

……あの中に、ヒマなヤツなんかおらんのやろうな。

あの債権者たちの泣き顔が見える。

田辺3人は泣かなかつた。

俺もまた、泣かなかつた。

何を根拠にあの債権者たちが泣くと言い、田辺たちが泣かないと言う？

ただ一つ言えることは、俺は泣かなかつたということ。

直樹はムラタから目を逸らし、自転車に跨る。

思っていたよりも、随分と早くコトが進んだ。

週末を除いて4日。

計画ではそれくらいの時間を要すると踏んでいたが、あり得ないほどに順調で滑らかに終わってしまった。

しかし直樹は、そんなことは考えていない。

……お前の親父はこれで、もう悪さはせんやろ。

初めて会った人間で、会話はほんの数分。

そんな幸雄に対して、直樹は届かないその言葉を胸にする。

そしてその足で、東の事務所へと向かった。

相変わらずの高さで聳え立つビル。

先日とは違い、見上げることもせずに内部に入り込んだ直樹は、こ  
れまた先日とは違い、すんなりと東の元へ辿り着けた。

あの、全てを吸い込むような豪華な部屋で、東は大きく幅を取り、  
腰掛けている。

そうして最初と変わらずわざとらしい、しかし芯の通った声で直樹  
に話しかけてきた。

「アレアレ、秋月くん。今日は何の用事やるね？」

直樹は東に詰め寄るように近づき、デスクの上に札束を5つ置いた。

「言われた通り、500万用意しました」

残りの200万はここに来る途中、自分の口座へ納めておいた。

余分に取ったそれに対する罪の意識は持ち合わせていない。

誰よりも急がなきゃいけないのは、俺たちだ！

「……………」

呆気に取られた顔の東。

ポカンとした顔で直樹を見つめ、直後にブツツ！と噴き出す。

「ハッハッハッハッハ！秋月くん、やつぱりモノが違うねえ。まだ

2日しか経ってへんやんか。やつぱりエリートは違うねえ」

この2日で東が自分の身边をどんな風にどこまで探ったのか気には  
なるが、今はそれには触れられない。

「いやいや、見事だよ。1円もまからんって言ったね。…………おい」

そう言つて、東はお付の男に札束を数えさせる。

横から札勘のパチパチパチツという音が聞こえる中、東は直樹に言  
った。

「実はねえ、こんな500万、どっちでも良かったんやよ。

最初からねえ、秋月くんみたいな有能なんがウチに来てくれる言う  
んやったら、こうするつもりやった。

両手広げて迎えるやんかいさあつちゅーてねえ」

……よく言う。

直樹はそう思いながら、東の目をじっと見つめる。

「こないだ言うとなつたよねえ。学生時分はボクシングやっとなんやろ？腕っ節があるのも、またいいねえ」

俺はそんなこと、言っていない。

ボクシングやっとなんて、言っただけ。

……どこまで調べた？

また試してるんか……？

そんな話をしてるうちに、男が数え終えた。

「確かに、500万あります」

「おー、そうかそうか。秋月くん、良かったねえ。合格だよ」

そう言うと、東は笑顔だったその顔を止め、口元を引き締めた。

「あの手形はお父さんが買ったんかい？」

直樹は目を逸らさない。

「まあ、そんなところですかね」

すると東はまた笑顔に戻り、

「まあまあ、いいよいいよ。お札に出どころなんか関係ないからね」

そして男に言った。

「おい、片桐を呼びなさい」

2〜3分待つただらうか。

1人の男が部屋に入ってきた。

直樹ほどではないが、スラッとした背の高い、オールバックの男。

「秋月くん、紹介するよ。彼はね、ウチで働いてる片桐くんや。今日から君の直の先輩になるからね。」

おい片桐、彼はな、あの　グループの御曹司さんや。無茶させたらアカンのやで。面倒見てあげなさい」

片桐と呼ばれた男は、その東の言葉に中腰になり「はい」と返事を

する。

一瞬、視線が交錯した。

これが、直樹と片桐との最初の出会い。

この片桐という男が今後直樹に強く影響を及ぼし、生涯最大の障壁となるだろうことを、この時直樹はまだ知らない。

自転車で部屋へと向かいながら、今日あったことを振り返ってみる。いろいろあったな…。

もちろん明日からは、以前のアルバイトのようにのんびり構えてな  
どいられない。

想定もしないことが起こるんだろう。

3食分の用意をして部屋を出たが、まだ時刻は夕方5時を回ったところ。

今日あったことを話せるわけでもないが、何となくパクウでも呼ぼうかな、とそう考える。

部屋の前に着き、鍵を取り出して玄関を開けると、部屋の中からとてもいい匂いがしてきた。

アレ？

不思議に思いながらリビングまで進むと、食事の用意をしているタケシの姿。

「おう、帰ったか」

いつも朝方帰宅し、直樹が出掛ける頃にはまだ寝ているタケシが、今日はえらく早く帰っている。

「随分早いな。どうした？」

「イヤ〜……まあな」

タケシの、そのあやふやな返事を訝しく思う。

彼は直樹の持っているカバンに目を遣り、



「イヤまあ、何ちゅーか……美奈子からな、電話があつてん。『秋月くんがスーツ着て、でかいカバン持って出掛けよつた』言うて」  
「……………」

直樹は少し間を置き、すまない、と思った。

俺がどういう段階を経てここに居り、何を思っているか。

それらを測り、それぞれが心配をしてくれる。

「大袈裟なモンとちゃうで。ほら、いつまでもアルバイトじゃな……」

……今日あったことを話せるわけもなく。

「お、そうか。それやったらエエねん。」

今日な、めっちゃ上等な肉もらったんよ。それでこのすき焼きの用意や。あんまり肉の量がないから、パクウは呼ばへんで。2人で食つてしまおうや」

「美奈子ちゃんは？」

「調子が悪いわけじゃないみたいやけど。今寝とるよ」

「……………そうか」

その日はタケシと久しぶりにゆっくり話した。

『なあ、極の世界ってどういう風になってんだ？』

予備知識としてそう聞きたいと思ったが、その行動はえらく滑稽・

軽率で、やかましいものと感じ、やはり聞けなかった。

ただただ、違う組事務所になるということで、俺らがバッティングしないことを祈る。

タケシと俺の目標は同じ方向で、同じ位置にあるのだから。

## 飛沫 1

思っていたものと随分違つてあるうことは、想定していませんでした。

ただ、俺がイメージしていたものとは随分とかけ離れており、簡単などころから書いてしまうと、皆スーツなんか着ない。

初日にスーツを着て行った俺に対して、「着替えて来い」と帰らされたくらいです。

ベンツに乗っている人も、ほとんどいない。

これに関して問うてみると、「エエエ？イヤよ、オッサン臭い！」という返事が返ってきたくらいです。

俺のものではないのですが、与えられている車が4WD。

結構、イヤかなり立派な車ですよ。

車の運転にも随分慣れましたね。

いろんなところへ、一人で行かされますから。

もう3ヶ月も経つので、いろんなことに慣れていい筈なんですけど……仕事にはもう慣れてしまいましたよ。

先ほど書いた、車の運転にも。

俺が今言っているのは、

俺が今、慣れないと言っているのは、人のことです。

もう書くことはないと思っていたこれを、今こうやって書いているのは、悪口を書きたいから。

悪口を言いたいからです。

あの片桐に、俺は慣れることはないのでしょうか。

あいつはゲスです。

この3ヶ月の間に、俺が見ただけで5回命を狙われた。人の恨みをナメている奴は得てしてああいう形に形成され、奥ゆかしいまでの外道な何たるかを得るのでしょうか。

俺のいる組が、片桐も含め全部で7人。

人数は少ないのですが、強烈なまでの東の恩恵に与り、あの男はのさばるのです。

ただ一つ。

ここで加えることがあります。

俺は、その片桐のひとかけら。

片桐を取り巻く1つなのです。

いわば、プチゲスです。

日を改めようと、振り返ろうと、俺はその2段階下の片桐の恩恵を受けないと、何もできません。

何度も書きますが、片桐はゲスです。

蛙の子は蛙と言いますよね。

俺は一体、何の子ですか。

これから先、自分で決めていいのですか。

この日も直樹は、片桐のお付のような形でその場所にいた。

そしてこの日も片桐はニタニタとニヤケ顔で、大の大人を見下ろしていた。

ソファに深く座った片桐の目の前には、後ろ手に拘束され、足首も縛られた男が1人、呻き声を上げて横たわっている。

直樹はその光景を、他の3人と共に片桐の後ろで眺めているのだ。

「おいおい社長さん。嘘ばかり言うて、吼たえてもろたら困りま

すやんか。期限はもう過ぎてますんやで〜」

「……せ、せやけど、片桐さん。約束の分はちゃんと返しましたやろうが！」

床にうつ伏せになり、搾り出すようにそう答えるその男。

「ナニ言ってますの。あれじゃあ足らん言ってますやんか。利息が発生しますからなあ」

そう言いながら、片桐はタバコに火を点ける。

「そ、そがいなこと言われたって、そがいな書類目エ通していまへんで！とんでもない暴利やないか！」

その言葉を聞いて、片桐は男の髪の毛を引っ張り上げ、顔を持ち上げた。

「借りといて返せん人は、み〜んなそう言いますねん。社長さん、そがいなネタ全然おもしろくないですわ」

片桐はそう言い、片手に持っていた火の点いたタバコを男の鼻の穴に押し込んだ。

「アツツ！！」

タバコが折れる音なのか、火が消える音なのか。

ギョツという音を鳴らしながら、じんわりと不快なニオイが立ち込める。

男は頭を左右に振り、押し込まれたタバコを振り払おうとする。

それを眺めながら、片桐はもう一度別のタバコに火を点け、今度は男の耳の穴に押し込んだ。

途端ギ、とかが、などの声を上げつつ、男は床に耳を擦りつけ、タバコから逃れようとのた打ち回る。

散々リンチを加えた後、精神力まで奪ってしまおうという、こんなやり方。

もつとエグイ光景も目の当たりにしたことがある直樹は、頭の隅で考える。

……どうやら今日の片桐は機嫌が良いようだ、と。

直樹は、目の前で繰り広げられる風景に近い光景に、もう舌打ちも出ないほどに慣れてしまっていた。

俺は今、このゲスと表する片桐の真似をしながら生きている。

……あとちよつと、

あとちよつとなんや。

俺らには、金が必要。

自製のタガはその信念。

直樹は顔色一つ変えず、その風景を見つめている。

「おいオッサン。嘘ばかり吐いとつたらアカンぞ。売るモンも何も無い言うてから、ちゃんと隠し玉があるやないか。知つとんねんぞ。まったく、勿体つけますなあ」

「はあ？という声を洩らした男はまた、片桐によって地べたに顔をこすり付ける羽目になる。」

「まあ、もうちよつと待つときなはれ。もうすぐ来ますさかいな」

しばらくの沈黙の後、外から階段を駆け上がる音が聞こえてきた。

強めに2回、ノックされたドアが勢い良く開く。

息を切らせ、部屋に飛び込んできたのは、茶封筒を握った一人の女性。

今、この目の前で横たわっている男の娘。

「おーおーおーおー、ごくろーさんごくろーさん。さすが公務員。ちゃんと時間守りますなあ」

ゼイゼイと息を吐きながら、娘は片桐へと近づいていく。

直樹たちその他は無言のまま、一步も動かない。

慣れているのだ。

「お父さん！大丈夫！？」

泣き出す寸前のように叫び、その娘はうつ伏せになった父の背中を擦る。

そして、大事に持っていた茶封筒を片桐に向かって突き出した。

「退職金です。300万あります。これでエエですか」

「……………」  
無言のまま片桐はその封筒を受け取り、振り返ることもなく背後の直樹たちに渡す。

直樹たち3人はそれを開け、札束を取り出し、間違いなく300万あるか数え始める。

「しかしまー、アレですなあ。この小汚いオッサンから生まれたとは思えんべっピンさんですなあ」

這い蹲ったまま、そこまでの遣り取りを聞いていた男が嗚咽を漏らし始めた。

……………こんな光景は、もう慣れた。

直樹は前方に視線を送ることなく、札を数え続ける。

「お父さん、仕事辞めてしもうたけど、これからまた私、頑張るからね。もう大丈夫やで」

言いながら父の背を擦り続ける娘に、片桐が口を開く。

「申し訳ないんですけどな、今数えとるコレが300枚あったとしてもや。まだまだ足りませんねん、コレが。あとお札さん、500枚要りますんやわ」

片桐は娘に、先ほどの書類を突き出した。

「……………」  
「破いたらあきまへんでー。まあ、ソレ破いても原紙はコッチにありますけどな」

娘はその書類に、頭を冷やすように、この状況を飲み込むように、目を通して行く。

10分ほどをかけ、彼女は手渡された書類を熟読する。

やがておもむろに顔を上げ、片桐へと向き直った。

その顔は息を切らせ、部屋に飛び込んできたあの慌てた表情とは別人のもので、すっかり落ち着きを取り戻している。

「で、どうすればよろしいですか？」

こういう窮地に陥ったとき、腹をくくるのは女性の方が早い。直樹の中で、これは確信になっていた。

女性が相手だと、ここから先はとて話早いのだ。

「お。お嬢さん、話が早いなあ。ほんまに助かりますわ。そうやないと、なあ社長」

しかし、泣いていた父親は黙ってはいない。

「千春！そんな話、聞かんでエエ！！今すぐ警察へ行け！お父さんに氣イ遣うな！！」

「おいおい社長。今回の場合、ヨゴレは一体どっちなんや。コツチはちゃんと書類揃ったあるぞ。警察に調べられて困るのは、アンタら家族ぢやいまずんか。アア？」

その遣り取りを、娘はまるで無視するかのように声を上げた。

「……私が500万返します」

「やっぱりそうやわなあ。オヤジがこんなことになつとるんや。一刻も早く助けたりたいわなあ。心配せんでエエ。ワシが何とかしたるさかいな」

……ここからはお決まりのコース。

片桐は背後に向かって声を掛ける。

「おい田中、505用意せえ。秋月、車回して来い」

505というのは、いつも使うホテルの部屋番号。

命令された2人は即座に返事をし、田中と呼ばれた男が電話を掛け始める。

手足を縛られたまま床の上でのたうち回りながら、泣き叫ばんばかりに声を張り上げる父親を尻目に、片桐と娘、そして直樹はその部屋を出た。

ドアの向こうから、いつまでもいつまでも聞こえてくる、耳をつんざくような悲鳴や嘆きや嗚咽や怒号。

その交じり合った慟哭たちは、ただただ空気を震わせるだけのもの。

直樹の運転する車の後部座席で、片桐は娘に説明を始めた。

「エエか。アンタはな、今から個人営業のコンパニオンや」

「……………」

「今からなあ、 県へ行ってもろつて、旅館で働いてもらうことになるわ。人身売買じゃー何じゃームニヤムニヤ言われたらかなわんさかいな、書類にきっちり書いてもらうで」

「…………… コンパニオンというのは……………」

「まあ、そりゃ行ったら分かる。せやけどな、前金で500万払ってもらわうけよ。プロ野球選手がもらう契約金とは違つぞ。給料を前払いでもらうんや。一生懸命働いて、早う帰っておいでや」  
彼女が今から行かされるのは、とある観光地の旅館。

そこで観光客を相手に、一晩3万円で仕事をすることになる。

俗に言う枕芸者だ。

これから彼女を待っているのは、いつ終わるとも知れない娼婦のよ  
うな仕事。

人身売買にならないように、あらかじめ個人営業のコンパニオンと  
いう形を取らせる。これはいつもの片桐の手。

そうやって送り込んだ彼女たちに外へ出られては困る片桐は、その  
手段として、また更にお金をせしめるために、半年に一度高級ブラ  
ンド品を売りに旅館へと赴く。

シャネルのバッグや指輪などの宝石類、時計…………

他に楽しみのない彼女たちは、それらを買ってしまつ。

そしてまた、借金が増える。

ローンで購入するために、今一体自分がどれだけの借金を背負って  
いるのか、彼女たちには把握できない。

そうやって、自分がどうしてここへ来たのかすら分からないほどの  
長期間、彼女たちはその地に閉じ込められるのだ。

何年も、何年も。

よくあるそんな形を、片桐も取っていた。



「まあ、今から旅館に行く前にな、ワシと1回付き合ってもらおうで、背中にモンモン（刺青）がありました〜じゃあ、お客さんに可愛がつてもらえんからなあ」

「……はい」

直樹はミラーをちらりと見て、思う。

返事をしてしまった……。

これから先は地獄やのに。

ホテルに着き、片桐と彼女は中へと入って行く。

505へ行った2人は、毎回大体1時間ほどで戻ってくる。

与えられたこの1時間、直樹はいつもと同じように車を駐車場に停め、何も考えずに過ごす。

やがて、車内の電話が鳴った。

『よつしや、今から行ってくれ。車回して来い』

直樹は指示通り、ホテルのエントランスに車を着け、再び2人を乗せて走り出す。

途中、片桐は事務所の前で車を降り、彼女に声を掛けた。

「ほんなら頼みますよ。辛いこともあるやろうけどな」

それに、彼女は俯いたまま、

「……はい」

と返事をする。

……返事なんかしなくていいのに。

直樹はいつもそう思うのだ。

「秋月、ちよつと出て来い」

その呼びかけに、直樹は車を降りて片桐に近づいた。

「エエか、最低でも600で売って来い。分かっとなるな？どこに売ってくるかはお前に任す。お前はその後、売ってきたら直帰でエエぞ」

「……はい」

直樹はまた車に乗り込み、彼女と共に次の目的地へと走る。

片桐がこういう形で契約を済ませている旅館は、3ヶ所。  
直樹はその3つの旅館を、キツネ・タヌキ・カエルと名前をつけて呼んでいた。

それらは、その旅館の女将の顔を見て直樹がつけたあだ名。  
名前で呼ぶよりこの方が何も感じないで済む。

そう考えた、直樹の手段。

「……今回はキツネにするか」  
口の中で小さく呟く。

2人きりの車内は当然、静まり返っていた。

密度が濃いのか薄いのか。澱んだまま流れもしない空気の重さも、  
はかることを諦めて久しい。

そして正直言えば、それすら頭を過ぎらない。

車は数十分で、一般道から高速に入った。

その頃には、大抵の女性は俯くのをやめ、周りの景色を眺め始める。  
今回の彼女も漏れなく、そう。

スピードを上げて30分も経った頃には、外を眺め出していた。

直樹はミラーを見遣り、後ろの様子を窺う。

あわよくば……とも考えてなさそうその表情を見て、もちろん考えるところはあるが……

「……イヤ、違う。」

これはずっと、俺がやりたかった仕事なんだ。

そう自分に言い聞かせ、思考の巡りをストップさせる。

どんどん視界に入ってくる前方の景色にも、後ろへ後ろへ遠ざかつて行く両隣の風景にも、直樹の目を引く真新しいものなど何も無い。  
……手のひらで繰り返し揉み消した、思考の種類と同じ。

「あのう、お腹空きませんか？もうちょっと行ったところで食事が

できますけど」

直樹の言葉に、しかし彼女は即座に

「いいません」

と返す。

彼女からしてみれば、俺なんかは人ではない。

このまま事故って死んでくれ、とでも思っているんだろう。

フィルターをかけ、濾過しながらこんなことを何度もやっている直樹。

途中、車内の電話でキツネに連絡を入れておいた。

「今から行きます」とだけ。

高速に乗って2時間。

目的の旅館はそこにある。

直樹の車が旅館の敷地内に入ると、即座に迎えのために飛び出してくる女将と旦那。

……キツネ。

彼女は髪を、これでもかというほど引つ張り上げたアップにしているせいで、目がきゅっと釣り上がっている。

ガリガリに痩せた体。

面長の、厚化粧で化粧した、その姿。

キツネは直樹を見て、

「あらあら秋月さん。ご苦労さん」

「あ、どうも。お久しぶりです」

挨拶もそこそこに、女将と旦那は手続きのために彼女を中に連れて行く。

二度と会うことのない彼女たちの姿が建物の中に入り、見えなくなるまで見届ける。

こんな行為が全く何の意味も為さないことは分かっているが、直樹は必ずそうすることに決めていた。

……微妙確信諦念無駄慣習義務觀念達觀思案、目的、才力ネ

……それでも、直樹にとつて、女性たちをここまで連れてくるのが仕事だと思える日は来ない。

玄関の、直樹の定位置で待つこと10分。キツネの女将が直樹に駆け寄ってきた。

「片桐さん、今回なんぼや言つてました？」

「600です。最低でも600。そう言つてました」

「600かいな……うーん……500にらん？」

「なりません。600です」

「そつか……。ベッピンさん連れてきてもらうたからな。じゃあ600万振り込ませてもらいますわ」

「お願いします」

交渉成立。

ここまでで、直樹の仕事はいったん終わる。

直樹は旅館を出て駐車場へと向かったが、すぐには帰らない。

この後もう一つ、直樹個人の仕事が待っているのだ。

直樹は車に乗り込むと、この地でいつも行く定食屋に向かった。

そこで食事を済ませ、本屋などに寄り、1時間ほど過ごした後、もう一つの職場へと走る。

これはあくまで組には内緒。

直樹が個人でやっていること。

やって来たのは、山道にある一軒のラブホテル。

車は何の戸惑いも見せず、黄色の細く連なったカーテンを潜る。

フロントで手続きをするでもなく、直樹はズカズカとホテルの薄暗い廊下を歩いて行く。

直樹の、いつものペース。

ホテル内を熟知しているその足取りは迷うことなく、ある一室の前で止まった。

二度ノックして、ドアノブを回す。

鍵のかかかっていないその部屋にいたのは、先ほどのキツネ。

「すみませんね。待ちましたか」

「ううん。待つてへん、待つてへん」

齢50を過ぎたキツネは結っていた髪を下ろし、そのギスギスに痩せた体にバスローブを羽織ってベッドに腰掛けている。

その光景も、もうとくに見慣れたもの。

直樹は挨拶だけすると早々にバスルームに入り、シャワーを浴びる。一応礼儀なので、と浴びるシャワーは行水程度。

ざつと体を洗い流してバスローブを纏い、自分もベッドへと向かった。

電気を点けない薄暗い部屋は、直樹の希望。

これも今後のためと、この空間を我慢だと自分に言い聞かせたのは最初の3回だけだった。

「えーっと、いつも言いますけど、これは買春・売春の類ではないツスから。これは女将さんと俺の、愛の形ツスから。いいツスね？」

「アハハハハ！秋月くんはほんまにいつもマジメやねえ。そうやったね。前払制やったね。ハイハイ」

そう言い、キツネは財布から10万円を取り出して直樹に渡す。

「これは、えー、高速代含めた運転手数料金ツスから。OKツスよね？」

「ハイハイ。OKOK」

ここまでを、お決まりの文句・お決まりのコースとし、直樹はこの後キツネとベッドを共にするのだ。

……俺ら人間から見れば、サルとチンパンジーはさほど変わらないよ

うに思える。

でもアイツらが交尾をするのはあり得ないらしい。

人間とサルが交尾をすることくらい、あり得ないことらしい。

俺はキツネとタヌキとカエルを、コンスタントに相手にしてるぞ。

生物学的に、コレってどうよ？

そんなことも、たまに考えてみる。

それから30分ほどの時間が過ぎ、直樹は再び服を着て帰り支度を始めた。

枕元に置いてあった10万円をそつと取り上げ、そつと2つ折にし、そつとポケットに入れる。

「秋月くんは、次はいつ来れそうなん？」

「……分かりませんが、まあまた会いに来ますよ。いつものように、バレないように裏から出て行ってくださいね」

「ハイハイ」

キツネのその返事を背中中で聞きながら、直樹は部屋を出る。

廊下に出てドアを閉めると、ポケットからお札を取り出し、間違いなく10枚あるかを数えた。

「……よし、10枚ある」

そしてまた、先ほどの廊下を間違いなく戻って行く。

ここまでが、直樹のもう一つの仕事。

時給10万円の、こんな仕事。

……今日は直帰でいいって言ってたよな。

夕日を浴びながら、車は順調に高速を走って行く。

対面していかないのならば、少しは有心も許される。

直樹は行きとは逆の景色を眺めつつ、そんな自分ルールに思考を委ねてみる。

摩擦を帯びるってというのは……もっとこう、うまく行かへんもんか

な……。  
熱を帯びてくると、痛くて恐ろしくてかなわん。  
もっとう、限りなく球に近い形。  
凸凹がない、甲乙がない丸いものになれば、全部いなせるんかもし  
れんのかな。

様々な行為を重ねるたび、揉み消したつもりでも燻りをやめない小  
さな棘は、無心を装う脳の表面に深浅の火傷を残す。  
車内で音楽を聞くでもない直樹。

爪を噛みながら考える。

我が身への殺生はな、どうってことないぞ……多分な。

斜に構えている自分が揺らぐ。

グラツと寄りかかりそうになる思考に左を添え、息切れする我を背  
から押す。

そして曇り空を見ながらも、ああ、何ていい天気なんだと言って  
みせる。

これでもな、目標があれば生きて行けるもんやぞ。

売り・買いさせるくらいやったら、自分です。

これは不可抗力です。自分の手腕ではどうにもならないんです。

俺のせいではないんです。

うるたえ、そう言う自分を思い、歯の隙間から漏れる何か……。

今は、言い訳してでも生き長らえる。

責任を問われたら、その時償うよ。

悪党は自分の罪を振り返らないんだろ。

だったら今の俺も、しなくていい。

暮石の白を赤く塗っても、囲碁はできるはずだからな。

車をなるべく急いで走らせ、帰路の中の直樹。

「あ。あのインターに美奈子ちゃん好きなお菓子売ってたな。寄

つて行こうか……」  
わざとそんな独り言を言ってみた。

直樹が借りているこの車は、タケシのマンションから少し離れたところに駐車場を借りて置いてある。

面倒ではあるが、バレないためにはこうするしかない。

直樹はその駐車場から自転車に乗り換えて、マンションへと帰る。自転車で駆ければ数分の距離。

この体に纏わりつくのは、臭気を孕んだ汚泥。

こびり付いたヘドロ。

それでも頬に当たる冷たい風に、ようやく呼吸を自覚する。

直樹はペダルを踏む足に力を入れ、マンションのあの部屋を目指す。

「ただいま」

時刻は午後7時を過ぎたところ。

部屋にはタケシが帰っている気配はない。

台所に行くと、シンクの上に美奈子の食器が洗って置いてあった。

金策として勤めているのはいいんだが、俺がいない間に美奈子ちゃん体が調子を崩したら……。

それが気がかりであるのは確かだが、手術をしてその心配を元から断つことに専念した方がいい。

そう思っている。

直樹は次に、シンクの隣に置いてあるゴミ箱を覗いてみた。

それは直樹が帰宅した時、必ずすること。

美奈子がちゃんと薬を飲んだかどうか、確かめるためだ。

が、今日は薬を飲んだ様子がない。

……あ、忘れとるな。

そう思い、直樹は美奈子のドアをノックする。

「おーい、起きてるか？」

すると部屋の中から



「うーん」

という美奈子の声。

直樹がそっとドアを開けて中を覗くと、美奈子は机に向かって勉強していた。

彼女のその姿を見て、直樹は訝しく思う。

この日の美奈子はどういうわけか、部屋着ではなくまるで出掛けるかのような服を着ている。

「なあ美奈子ちゃん、薬飲んでへんのちゃうん？」

「あ！忘れた」

「まつたく…。熱は？計った？」

「あ、忘れてるわ。でも調子いいよ」

「アカンアカン！」

そう言いながら、直樹は美奈子の部屋に入って行き、小さなテーブルの上に置いてある体温計を取り上げる。

「アカンでエ。ちゃんと計らな。9度以上の熱じゃないと自覚症状で分からんみたいやからね。ちゃんと計ったかなアカンのやで」

直樹が体温計を差し出すと、美奈子はうん、と返事をしてそれを脇に挟んだ。

「夕飯は？何時頃食べた？」

「えつとね……………5時過ぎ」

「2時間くらい経つとるなあ…。薬も忘れたらアカンやんか。

あ、そうや。ちよつと仕事で車で出る用事があったね。美奈子ちゃんが好きなあのお菓子。あの丸いやつ、買って来たで。それ食べてから薬飲もうか」

「うん」

……………1人で食事をさせてしまつて、本当に済まないと思う。

「お茶入れるからテレビの部屋行こうや」

そうして2人は部屋を出た。

テレビを垂れ流しにしながら、特に会話をするでもなくこたつに入

っている二人。

直樹は新聞を読んでいる。

いつもならこの空間は、美奈子が機関銃のようにお喋りをし、直樹がそれをうん、うんと聞いているタイミング。

今日の美奈子は何となく物静か。

それが、気にはなっていた。

「……ねえ」

美奈子が話し始めた。

「秋月くんって今、どんな仕事してんの？」

「え、……うーん、まあ営業みたいなもんかな」

「ふーん」

何となくぎこちない空気だが、直樹はその辺りをあまり気に留めない。

「どうしたんや、美奈子ちゃん？早よ食べんと俺、食ってしまっで？」

直樹が美奈子のために買って来たのは、スポンジにクリームをサンドして砂糖をまぶした、どらやき形のお菓子。

好物に手を付けない美奈子を見て、直樹はひよっとして、と考える。

「……おい、どっか痛いんか？」

腰を上げ、そう問う直樹に、美奈子は首を横に振った。

……顔色も悪くないし、だったらいいんだけど……。

そう思い、直樹はまたその場に腰を落ち着ける。

「……ねえ、秋月くん」

「ん？何？」

「秋月くんって、今付き合ってる人おるん？」

急にどうしたんだ？

その微かな驚きと共に、そんな風に自分の欲であるとか思念であるとか、人にぶつける何かしらの感情というものを久しく持ち合わせていない。

そう自分を振り返る。

「……イヤ、いないよ」

直樹が答えると、美奈子はまたしばらく黙り込んだ。

耳の端でテレビの音声を流しながら、直樹は何か言いたげな美奈子の次の言葉を待つ。

「……あのね、私ねえ、秋月くんのこと、好きみたいでね……。前からずーっと好きやったみたいでね……。どうしようかなあって考えてたんやけど……。最近秋月くん、帰って来るのも遅いし、大きい荷物持って出掛けたりするし、家出て行くんかなあって思って……。私みたいなんに、こんな言われたら迷惑かなあって思ったんやけど……。人並みに生活もできへんのにごめんって思ったんやけど……」

一緒に暮らしてるのに……」

美奈子はそのままで言うと、顔を真っ赤にして口を噤んでしまった。

「……………」

……正直、驚いた。

突然の美奈子のその言葉を聞き、感情を形容するにはあまりに時間がなく……

でも、ただ嬉しいと感じた。

そんな風に思っていてくれたのか。

すぐに何らかの言葉を返さないと……

だが、返事をするのに少し時間がかかってしまう。

直樹は俯いた美奈子の顔をじっと見つめて考える。

……この皮膚の表面から、腐臭が漂っているような気がした。

俺は今、君に見えないようにしてるからな。

獣のような尻尾

コウモリのような羽

裂けば飛び出す、真っ青な血液

騙してしまつて、本当に済まない……

そう思いながら一方で、美奈子と一緒になればタケシとも戸籍上本当の兄弟になれる、とも思う。

しかし、

……いろんな意味で何もかもを邪魔する、俺の研いだような長い爪  
……

「……………そっかぁ。美奈子ちゃん、ほんまに嬉しいわ。そやな、俺ら一緒に暮らしてて、もう同棲してるのと変わりにないしな。ま、邪魔な兄貴がおるけどな」

ここで美奈子は一度顔を上げ、クスツと笑った。

「じゃあアレやな。美奈子ちゃんはちゃんと手術受けて、病気治して、…そやな、一回2人でどっか遠出しよっか？デートしてみなア

カンな。ほんで何回もデートして、それで今度は俺からちゃんと言おうかな」

……うまくかわそうなんて、そんなつもりは毛頭ない。

しかしそれ以上に、直樹の心・情に覆いかぶさるものがある。

「ほんまに?!じゃあね、前3人で行ったって言ってたトコあるやんか、旅行で。動物園あるトコ。アソコへ連れてつてくれる?」

美奈子は赤い顔のまま、弾んだ声で直樹にそう返す。

「おう、そうしよう。アソコに2人で行こう。そのためにもな、ちゃんと熱計って、薬も忘れんようにして、頼むで?一緒に行くんやからな」

「うん、分かった!」

そう言って美奈子は立ち上がり、照れを隠すように急いで自室へと入って行った。

……美奈子の感情や態度、そしてこれまでを思い、直樹は彼女を愛おしくも思う。

ただどな、許してくれよ、美奈子ちゃん。

君の病は治るけど、俺の病みは治せないどころか、取り返しがつかねえんだ。

もう、さっきにすら、戻れない……。

ふと見ると、こたつの上には封の切られていないお菓子と、薬。

「……あ。おーい!まだ薬飲んでへんやんけ!」

美奈子の部屋から「あ、しまった!」という声が聞こえてきた。

「まったく……」

直樹はお菓子と薬、水を持って美奈子の部屋へと向かう。

そうして思う。

自分への殺生をいつか止められる日が来ると、そう信じたい

……と。

この夜も直樹は3通の通帳を並べ、じつと見つめていた。

預金通帳が2通、貯金通帳が1通。

それほど深い意味はないが、直樹は稼ぎ方によって振込みをする通帳を変えていた。

組からもらうお金を振り込む、預金通帳。

直樹が内緒でやっている『ビジネス』のお金は、もう一つの預金通帳へ。

キツネ・タヌキ・カエル相手の収入は、貯金通帳に。

直樹は貯金通帳を手に取り、今日の10万円を挟む。

明日、朝イチで入れに行こう。

そうして、3通の通帳の金額を足して思う。

前にパクウの預金を聞いたとき……

それと、タケシが貯めてるお金……

ほんでコレを足したら……

もう手術できるやん！

スゴいやん！！

思わず笑顔がこぼれた。

……でも、もうちょっと稼がなアカン。

何もせずに、2人の大人が2〜3年籠もって生活ができる分を稼がないと。

手術と同時に、タケシと俺は世を忍ぶんや。

隠れて、まだ想像もできない場所で、息だけをして暮らす。

逃亡生活やからな。

美奈子ちゃんはパクウに預けて……

タケシが嫌がっても、首根っこ掴んで連れて逃げる。

直樹は、普段している自傷とも言える行為も含めてほぼ計画通りだと、毎晩こつやって通帳を眺めているのだ。

今日が昨日を攫い続ける日々。

執拗に、しかしこの上なく諦め良く。

……こうやって小さな地球儀が回るのも、アリなんだろう。

直樹はふと、預金通帳のうちの1つを取り上げ、開いてみた。

……ここにはまだ、あんまり金が貯まってねえな。

これは組にも片桐にも内緒でやっている、直樹の『ビジネス』のた  
めに用意した通帳。

明日からはコツチに集中しようか。

そう思い、3通の通帳を引き出しに仕舞う。

そして、そのまま布団の中に潜り込んだ。

次の日、直樹は朝から片桐のやっているノミヤの集金に回ってから、  
事務所に顔を出した。

事務所に入ると、留守番の男が1人座っている。

「何やねん、秋月。遅いやんけ」

「ああ、はあ……ちよつと集金行ってきたんで」

「みんなもうスカウトに出とるぞ。お前も早よ行けや」

「……今日は片桐さんは？」

「うーん……何か東さんに呼ばれて、東京の方へ行く言っとったで」

「ふーん……」

何気ない返事をした直樹だが、こういう日は都合がいい。

キツネ・タヌキ・カエル相手の仕事と、もう一つの内緒の『ビジネス』  
ス

これが非常にやりやすいからだ。

直樹は早速、今日1日の予定を立て始める。

まずはスカウトで……

このスカウトという仕事。

これは街行く女性に片っ端から声を掛け、クラブやキャバクラなど  
風俗店への仕事を斡旋する行為。

勤める女性たちの稼ぎの何%かが、組に入るといふシステムになっている。

直樹はいつものように、まずはスカウトだと事務所を出た。

ドアを閉めたと同時に、中で電話の鳴る音が聞こえたが、留守番の男がいるので気にもせず、廊下を歩いて行く。

しかし直後、後ろからバタンツ！とドアが勢いよく開き、男が直樹を呼び止めた。

「秋月！ちよつと戻つて来て！」

……何かあつたか。

直樹はピタリと足を止め、事務所へと引き返す。

「何かな、島本さんのところで暴れとるのがおるらしゅうてな。お前、今から行つて来てくれるか。店のモン、いっぱいいっぱい壊しとるらしいから、ここまで連れて来てや」

島本というのは、片桐のたくさんいる女性の中の1人。

片桐の経営するクラブのママをやっている人。

……こんな真昼間に酔っ払いかよ。  
鬱陶しいなあ。

片桐のいない好機を邪魔されて苛立ちを覚えるが、しかしこの命令に背くわけにはいかない。

「……分かりました。行つてきます」

そう返事をし、直樹は再び事務所を出て、車で島本の店へと急いだ。

酔っ払いがどうこうだとか、片桐の女の用心棒的なことだとか、そんなのはこれまでも多々あつた。

これらも含め、直樹は自分が片桐一味の下っ端であることを、とにかく面倒に思う。

下っ端なんかやらずに独自にやらせてもらっていたら、もう1ヶ月前には目標の金額が貯まつてたんじゃねえか？

車を運転しながら、そんなことを考える。

……そういえば、事務所まで連れて来い言つてたな。



俺一人で、大の大人をとつ捕まえて事務所まで連れてくなんて、できるんやろうか…。

つらつらと考えているうちに、車は店へと到着した。

直樹は道路の端に車を止め、裏口にある店への階段を駆け下りる。

地下からガシャンツ！というガラスの割れる音が響いてきた。

何やねん、まだ暴れとるんか？

駆ける足のスピードを上げ、ドアを引き開け店内に飛び込む。

同時に目に入ってきたのは、店の中央で腹這いになり両肘をついた男と、彼を取り囲む3人の男たち。

視線をずらすと、カウンターに座ってタバコを吸っている島本が見えた。

彼らは直樹が入って来たと同時に、一斉にこちらを振り向く。

「島本さん、大丈夫ですか？」

島本はいつもの着物姿ではなく、ジーンズにトレーナーというラフな格好。

そんな普通の姿が、いつもより更に蓮葉に見えてしまう。

「ちよつとアンタ、来るの遅いんちゃう？」

「……すみません。一体何があつたんですかね？」

オレンジのライトだけが点いた薄暗い店内は、そこそこに荒れていた。

グラスが割れ、テーブルがひっくり返り、ソファが2、3倒れている。

「アイツがね」

今、まさに取り押さえられようとしている男を指差して、島本が話し出す。

「ずっと羽振り良うて、仰山お金落としてくれよつたんやけどね。

最近金払いも悪いから、もう切つたるか思うたら逆にキレだして、あたしに襲い掛かってきたんやんか。

アンタが来るの遅いから、この子らに頼んだよ。ほんま、恐ろしい

わあ」

直樹はその3人の男たちのことはよく知らないが、おそらく組内の誰かの下っ端。

もう一度騒々しい店内をぐるりと見回した直樹、ゆっくりと倒れ込んだ男に近づいた。

……あーあ、こんなにしてしもうて。

知らんぞコイツ。

彼はもう観念したかのようにその場にじっとしているが、絶えず視線をあちこちに走らせ、カタカタと震えている。

メガネをかけ、無精ヒゲを生やし、短髪に寝癖をつけたその男。

直樹はその顔を見て、アレ？と思った。

どこかで見た顔……。

中学の頃から住んでいたこの地域。

会話はしないまでも、顔見知りの人間に会うことくらいあるだろうとは思う。

だが、そんな曖昧なものではなく、よく見慣れた顔のような気がした。

……コイツ、誰やったっけ？

そう思いながら、直樹は彼に向かって言う。

「まー、随分派手にやってしもうたなあ。コレ、全部弁償してもらわなアカンわ。なんぼするか分からへんで。自分、ちよっとこれから俺と一緒に来てや」

直樹は彼の腕を引っ張り、起こそうとした。

しかし彼は掴んだ直樹の手を力いっぱい振り払うと、ざりざりと後ずさりし、突き当たった壁際で怯えだす。

上目遣いで震えながらこちらを見る、その姿。

「……………」

あの状況、その状況、この状況でいつも思う。  
もう慣れたやろ？

しつかりせえ。

すると直樹の言動をじっと見ていた3人の男たちが、声を荒げながらその彼を引つ掴もうとした。

それを制し、直樹は続ける。

「ワガママ言うたらアカンやろ。大体何でお前がキレて、ママさんに襲い掛からなアカンのや？金がなかったら、こんなトコ来たらアカンやろ」

……しかしコイツ、どっかで見たことある。

直樹は頭を巡らせながら、彼を見下ろす。

まだ肌寒い季節にも関わらず、彼はTシャツにジーンズのみ。辺りを見回すと、ジャンパーが1枚落ちてている。

きつと彼が脱ぎ捨てたものだろう。

直樹はそれを拾い上げ、彼に向かって手を差し伸べた。

「器物破損言うてな、こういうことがあった場合、我々はな、正當にアンタに損害分の金額を請求することができるんや。そこら辺を理解して、大人しゅうついて来てや。……さあ」

直樹はやさしく彼の腕を掴み、引き起こす。

……しかしその瞬間、直樹はとんでもないものを見つけてしまった。この彼の左腕。

その内側にある赤とも紫とも言える、無数の斑点。穴。

「お前、これ…ッ!!」

短く叫んで、直樹は咄嗟に島本を振り返る。

その反応に頓着する様子もない島本は、こちらに向ける視線を逸らすことはない。

覚醒剤…!!

瞬間、頭を過ぎって行ったのは、中学生の頃一度だけあった、タケシがシンナーを吸ったときのリアクション。

直樹はこの組事務所に入る際、一つだけ確認したことがあった。それは、覚醒剤の取り扱いの有無。

当然、東から返ってきた返事は、

「そんなモノ扱ったら、パクられちゃうじゃないか」

直樹は何故か、その言葉を信じていたのだ。

「……………」

確率として、この男が島本と関係なくシヤブを食っているということともあり得る。

しかし直樹の頭を占めるのは、そんな一昨日見た夢のようなぼやけた可能性ではない。

当然のごとく真っ先に島本を介し、片桐を疑う。

時間にしてほんの数秒。

腕を引っ掴んだまま固まっている直樹を更に驚かせたのは、その彼の言葉だった。

上目遣いで直樹を見つめながら、彼が言う。

「……………アレ？秋月くんやる？間違いないく秋月くんやる。俺、俺俺！」

「……………」

先ほどから考えていた、見覚えのある彼の顔。

しかしそう話しかけられても、まだ分からない。

「ほら、高校の時に隣のクラスにおった毛利やんか。知らんの？」

……………この腕の痕を見た後だからなのかもしれない。

よく見ると、目の下にはクマができ、首の周りには栄養失調でできるような湿疹が見える。

呂律も回っていない。

高校の同級生だと言う彼の顔をじっと見つめる直樹だが、いくら頭を巡らせても思い出せない。

見た顔であることは確かなのだが。

直樹は少しの間頭を探り、すぐに思い出すのをやめた。

それどころじゃない。

彼に対する返事は取りあえず保留にし、直樹は島本に詰め寄る。

「アンタか？アンタが売ったんか！？」

「……………」

直樹はカウンターをバンツ！と叩き、

「どないやねんツ！？片桐の命令か！！？」

そう怒鳴りつける。

「さあねえ…。アンタ、自分で片桐さんに聞いてみたら？あたしはよう知らんよ」

スツ呆ける島本の態度にムカついたところでしょうがないのは分かっているが、

「ウチの組はなあ！シャブ扱ったらアカンのやぞ。知らんのか！」それを聞き、島本はヘツ！と鼻で笑う仕草を一つ見せた。

「アンタね、ヨゴレの分際で誰に言うてんの？あたしは知らん言うてるやろ。女にスゴんごらんで片桐さんに直に言うたらエエやん」ここで騒いだところで埒が明かないことも、知っている。

「くそツ！！！」

直樹はそう吐き捨て、毛利の腕を引き、店を出た。

「……………秋月くん、秋月くん」

継るように直樹の名を呼ぶ毛利。

「うるせエツ！！！」

直樹はそう返事をし、ダンダンと階段を昇って行く。

……………冷静になったところで、コイツとの会話が成立するとは思えない。

車まで毛利を引き摺ってきた直樹。

有無を言わせず、彼をぐいぐいと車内へ押し込む。

そのまま車で走り出したのはいいが、目的地などない。

取りあえず移動しようと思っただけ。

助手席に座っている毛利は、聞き取れないほどの小さな声で何かを

ブツブツ言っている。

……引っ張り出してきたのはいいが、どうしたらいいのかわからない。

「……家は？家どこ？」

直樹の問いに、毛利は間髪入れず、

「家へは帰りませんよ。僕はアレをもらいに行くんですから」  
続けて、彼はヘラヘラと話し出した。

「秋月くん、秋月くんはあの人と知り合いなんやる？めっちゃ薄くてエエんやわあ。うすーいヤツでエエんやあ。ちよつと分けてくれるように頼んでくれんかなあ。俺には冷たいのが必要なんやっってお金は働いて払うって言うてなあ。うすーいのでエエから……」

……困惑を振り払うこともできなければ、掛ける言葉もない。

自分の方をじつと見つめながら、何度も何度もそう繰り返す毛利に、直樹は黙るしかない。

警察に突き出すのが一番なんだろう。

でもそうなったとき、芋ヅル式に……

今、自分にとって何が一番必要なのか。

自分は一体どうするべきなのか。

直樹の中で、その答えはそれほど難しくはなかった。

国道を走る車は、やがて大きな橋に差し掛かる。

直樹はその路肩に車を止め、彼を車から降ろした。

……顔を見たことがあるくらいにしか記憶がない、おそらく元同級生であろうこの男を、直樹は見捨てる。

「ひょつとして、秋月くんも持つてる？少し分けて」

「……」

一言も掛けることなく、直樹は一人で車に乗り込み、その場から走り去った。

バックミラーに映る覚束ない毛利の足取りを見て、奥歯が砕けそう

になる。

東と片桐は今日、東京か……。

絶対許せん。

絶対に！！

直樹は沸々とそう考え、今日やるべき今日の仕事へと向かった。

腹からよじ登ってくる虫唾。

怒りが収まらない。

しかし今日の仕事は、笑顔でないと勤まらない。

これから向かうのは、スカウト。

この仕事を教えられた時に、事務所の人間から言われた。

100人声を掛ければ、その内1人は話を聞いて名刺を持ち帰ってくれる。

そしてその名刺を持ち帰った30人の内の1人は、電話を掛けてくる。

とても確率の低い仕事なので、とにかく片っ端から女性に声を掛ける。

だが直樹の場合、少し話が違う。

声を掛けると、20人に1人は名刺を受け取ってくれる。

彼女たちの内7〜8人に1人は、仕事の斡旋をしてくれと電話を掛けてくる。

他の者と比べて、かなりの高確率なのだ。

直樹はそれに気づいてから、命ぜられたこのスカウトの仕事を利用し、組には内緒で会社を作っていた。

これが、直樹のもう一つのビジネス。

本来こんなナンパのような行為は、自分の中で軽蔑に当たる部類だった。

しかし仕事と思えば何てことなく、自分たちのことを思えばどうってことのない行為。

俺のやっていることは、風俗店で働きたい人間の切欠でしかない。そう自分に言い聞かせる。

直樹はこのビジネスのために、以前からお世話になっているあの印刷所で、新たな名刺を作った。

組が用意したものと別々に、直樹はこの名刺も女性たちに配っている。

その名刺の真ん中に書かれているのは『ライズ』という会社名。代表取締役には、自分の名前。

電話番号は、当然組事務所の番号を記すわけにもいかず、ましてやタケシのマンションの番号にするわけにもいかない。

そこで考えたのが、電話代行業。

電話代行業というのは、電話の受け取りのみを代行してくれる会社だ。

直樹の名刺を受け取った女性は、それに記されている電話代行業の番号に電話をかける。

そのこのテレフォンレディは、直樹が事前に指示した通りの対応をしてくれるのだ。

今回の場合、

「はい、人材派遣会社 ライズでございます」

名刺を見て電話を掛けてきた女性は、直樹を指名してくる。

すると必ず、

「ただいま秋月は留守にしております。折り返しお電話差し上げますので、お名前とお電話番号よろしいでしょうか？」

そうやって女性から聞いた情報は、テレフォンレディがメモしておいてくれる。

直樹はそのメモを毎日取りに行き、自分から女性たちに電話をして、どういった店が良いかなどのお話を詰める。

話がまとまれば、片桐とは全く関係のない店へ個人的に女性たちを



派遣する。

そして、その稼ぎの17%を自分が受け取る。  
そういうシステムにしていた。

今現在、直樹の息の掛かった女性は30名弱。

誰がいくら稼いだかの情報は、店から直樹へ連絡が入る。

彼女たちはその稼ぎを、直接直樹の元へと持って来る。

店から直樹へ流れる仕組みだと足がつく恐れがあるからだ。

日払いで給与を受け取っている女性がほとんどだが、直樹は17%の支払いを月末で構わないとしていた。

しかし直樹がこの仕事を始めてまだ1月も経っておらず、自分がどれだけ稼いでいるのかピンとこない。

その掴みきれていない自分の状況が、心情を焦らせる。

初めの頃は片桐のシマ内で済ませていたこのスカウト行為が、バレやしないだろうと今や限られたエリアの範囲を超えていた。

とにかく、急がなきゃいけない。

直樹は道行く女性たちに、笑顔のつもりで声を掛ける。

頭の中で組み立てられた螺旋階段を昇り、降り、時折眺めながら。

先ほど見たモノ。

うる覚えの元同級生の顔。

中途半端な高さに捻り合った螺旋は、磁気を帯び、浮遊物を引き寄せる。

……笑顔でなければならぬ、このスカウト行為。

この日はとても調子が悪かった。

その夜、直樹はまた眠れずに布団の中でああでもない、こつでもないと体の角度を変えている。

薬物に対して、何故これほどまでに拒絶感を持つのか……。

あんなモン買った、アイツが悪いんや。

卵が先……

鶏が先……

卒業アルバムは東京に置きっ放しだな……。

毛利なんて名前、聞いた覚えもない。

でも顔は覚えている。

アイツは俺のこと、知ってたな……。

……アルバムも持ってきてないことだし、

よし、俺はアイツになんか興味が無いことにしよう。

所詮、片桐がやっている悪事の何万分の1。

「……………」

回る思考はなかなか止められず、全身を布団の中に潜り込ませようと掛布団を頭まで引き寄せるが、そうすると足がはみ出てしまう。

俺は足が出てると、寝られへんのやよな……。

今日、電話代行業に行ったら、女の子から7人も電話がかかってきた。

なのに、喜ばないでいる。

……今日中に、東と片桐はコツチに帰ってきていると聞いている。

眠れないのは、布団から足がはみ出しているせい。

そう決め付け、この日直樹は眠れぬ夜を過ごした。

次の朝、直樹は片桐の事務所に寄り、やってしまわなければならぬ仕事を片付けている。

片桐はまだ事務所には出てきていない。

直樹はデスクワークを終えると、車で東の元へと向かった。

聞いておかなければ、言っておかなければいけないことがある。

そう考え、早く忘れてしまいたい元同級生の顔を思い浮かべる。

東のビルまで、そう時間はかからない。

車を駐車場へ止め、直樹はあの一般企業と変わらない、しかし何気

ない凶々しさを感じさせるビルの玄関を潜る。

同じ組と言っても、ビルに入る際には身分証明やボディチェックを受けなければならぬ。

当然直樹に疚しい部分はないので、その辺に時間は掛からない。

……俺は東に言いたいことがあるだけ。

エレベーターに乗り、あの面接の日以来の東の部屋へと向かう。

廊下を渡り、大きな観音開きの扉をノックすると、中から「はい」という返事があつた。

すかさず直樹はドアを開ける。

入り込んだ部屋には東と、あのお付の男。

東と向かい合うようにして座っているのは片桐だ。

そして、直樹と同じ事務所にいる片桐の腰巾着・佐藤。

4組の目が一斉にこちらを向いた。

……この空間に片桐もいることが、果たして吉なのか凶なのか。今のところは分からない。

ただ、直樹がここに抗議をしにやってきたことに関しては、何一つ変わらない。

直樹を見た東がソファから立ち上がり、

「おー、秋月くん。秋月くんやないか。元気にやっとなるか？」

そう言つて歩み寄つて来た。

「すぐに辞めてしまふんやないかって思つてたんやけどねえ。頑張つてるみたいやんか」

東は直樹の両手を強引に握り締める。

握手をするように。

そんなテンションを持ってきたわけではない。

そう思い、口を開こうとしたとき、片桐の邪魔が入つた。

「おいコラ、秋月。ワレエこがいな所で何しとるんや。仕事はどないしたんじゃ」

「……………」

それには東が返事をした。

「ああ、ああ、片桐。秋月くんはね、私に会いに来たんや。そうやる、秋月くん。まあ、こっちに来て座りなさい」

「……………」

東は再びソファに戻る。

直樹もそれについて行き、腰を下ろした。

直樹は重い口を開くでもなく、早速今日来た理由を話し始める。

「あのですね、東さん。聞きたいことがあるんですけど」

「お、何やるねえ？まさかお給料アップって話じゃないやろね？そういう話やったら、横にいる片桐に言うてもらわな。私に言われてもかなわんわあ」

「……………いえ、違います」

と、そこで腰巾着・佐藤が口を挟んだ。

「おいコラ、秋月！お前一体何のつもりじゃ！？何ぞあるんやったら早よ言わんかい！コツチは忙しいんじゃ！！！」

うるさい佐藤を少し睨む形になった直樹、再び口を開く。

「覚醒剤のことです」

……………この言葉のせいで空気が重くなったのか、それとも自分の肩に力が入ってしまったのか。

どっちなのかは分からない。

だが少し気色の悪い間を、直樹は覚えた。

「東さん、前に自分のところは覚醒剤は取り扱わん言うてましたよね」

「……………」

「昨日、ウチの事務所の関係で、覚醒剤の被害者に会ったんです」

「……………」

黙ったまま、誰も口を開かない。

決定付けるための自分の言葉は持ち合わせていたが、そこまで言うて直樹は東の返事を待つ。

ちらと東の顔を見ると、その顔色は直樹がソレを言うまでと全く変わりがない。眉がハの字になることもない。

動かない表情のまま滑るような仕草でポケットからタバコを取り出した東のそれに、すかさずお付の男が火を点けた。

吐いた大きな煙が空間を一つ、舞う。

「おい、片桐」

呼びかけに、居直るでもない堂々とした態度で、片桐は「はい」と返事をした。

「君はアレか、シャブ転がしてるんか」

「いいえ、知りませんが」

……そういう問いになったとき、こういう答えが返ってくるだろうという想定はできていた。

しかし、それがどうであろうと何であろうと、直樹には関係ない。

ただ事実を報告し、止めさせようとここに来ているのだから。

直樹はその片桐の返事を無視する形で、東に向き直る。

「東さん、あんなモン売りさばかなくても、メチャクチャ儲けてるじゃないですか。クスリ関係はやっぱりダメですよ」

「……………」

「もう一回、皆に覚醒剤は禁止やっていう令を出してもらえませんか。今日はそのお願いに来たんです。

大きい組織やから、末端までの監視が難しいってのも分かってるんですけど。東さんが直に言いに行ったら、ちよっとは違うと思うんですよ。この通りです。お願いします」

そう言って、直樹は東に対し、深々と頭を下げた。

しかしそこで割って入ったのは、またもや佐藤。

「おいコラ、秋月！ワレエ、誰に口きいとんじゃ、オオツ！？」

佐藤はソファから立ち上がり、直樹の肩を掴んで引っ張り上げようとす。

「ワレみたいなサンピンがここへ入ってくること自体、おかしいちやうんけ！！エラツそうにゴタク並べやがって！！イテまうぞ、ワリヤアツ！！」

……この佐藤という男。

直樹は前から気に入らなかった。

何か目を見張るものを持っているわけでもなく、いつも片桐にへこへこしているだけのコイツ。

単に、自分よりも先にこの組事務所に属していたというだけの、この男。

そんな相手だからこそか、直樹は頭を下げている途中で邪魔をされたこの行為に、余計イラツとした。

「おいコラ！分かったんやったら表に出んかいッ！！」

その怒声と共に、直樹の肩を引っ張る佐藤。

直樹はゆっくりと、視線を佐藤に向けた。

「……邪魔せんとしてもらえるかな、オッサン。聞きたないんやったらテメエが耳塞いどけ。何や、この手。腕力でモノ言わすいうんやったら黙るんはお前やぞ。2秒半で呼吸もできんようにしたるか、アア？」

直樹の威圧に少したじろぐ佐藤だが、東・片桐の前で退くわけにもいかない。

「よっしゃ、上等じゃ！表へ出る！！」

そう言い放ち、直樹を掴む手に力を込める。

その時、

「よっしゃ、分かった。静かにせえ」

声を荒げるでもなく、そう言って2人を制したのは東。

「なあ秋月くん、いきり立たずに座りなさい」

「……………」

「それとお前、……………あ……………お前、名前何やったかな」  
指を差され、そう言われる佐藤。

俯いてしまい、咳くように返事をする。

「……………さ、佐藤です……………」

「ああ、佐藤。お前は外へ出てなさい」

「い、いや、せやけど、会長！」

佐藤のその返事に、次の瞬間東の顔は豹変した。

「さつき秋月くんは2秒半って言ったねえ。私なら1秒かからないよ。誰が返事せえ言うたかな。私は出て行け言うたんやが」

「……………ッ」

その静かな東の形相を見、直樹は少し自分の体が寒いように感じた。

「……………あ、はい。失礼します……………」

そう言い、部屋を出る佐藤。

その間片桐は動くこともなく、ただ黙って座っているのみ。直樹を見ることもない。

今の東の態度から、自分がした抗議は受け入れられるものだ、直樹はそう思い自分もソファへと腰を下ろす。

東はお付の男に声を掛け、

「いつものコーヒー、3つ配達させて」

それを聞き、男は部屋を出て行った。

そして、3人だけの時間。

「まあ秋月くん、コーヒー来てからゆっくり話そうやないか」

「はい」

直樹はそう答え、片桐に視線を投げてみる。

だがこの部屋に来て、片桐とはまだ一度も目が合っていない。

元々、他人と目を合わせて話すタイプではないみたいだが、この場においても何を考えているのかとても分かりにくい。

告げ口に来た、そんなレベルではないことはコイツも分かってんだろ。

佐藤を追い出した東の態度を見る限り、この話は良い方向に転ぶ。きつと。

5分も経った頃、喫茶店の従業員らしき人がコーヒーを持って部屋に入ってきた。

3人の前に置かれるコーヒー。

東は砂糖とミルクをたっぷり入れ、飲み始める。

それから直樹に向かって口を開いた。

「秋月くん、金は何々からの回り物って言うやろ？その何々ってところには何が入るんやっただけ？」

「……………」

「ほら、早く答えてみないと」

「……………天……………天下の回り物、ですかね」

「君はどう思う？」

「……………」

面接の時もそうだったが、この東の言い回しと言おうか、質問と言おうか。

それはとても分かりにくく、どう答えていいか分からない。

さっきの佐藤の件も……………コイツが佐藤の名前を知らないわけがない。わざとあんな言い方をする。

直樹はその東の問いに対して、答えが見つからないでいた。

「秋月くん、その辺をヒョコヒョコ走り回つとる小学生も、ポケットにあ100円から500円くらい入つとるんちゃうか。余生を楽しんで、家でのおんびりしよるジイさんバアさんの財布の中には、1万円くらいは入つとるんちゃうか」

「……………」

「ゼニカネっていうのはね、自分を中心に四方八方で蠢いてるモンなんだよ。人はな、ソレを吸収するための手段を選びながら生きて



つてるんだわ。望まん者は紐を強く縛り、望む者は口を大きく開けるとる」

……コイツは一体何を言ってるんだ？

確実に、俺がさっき期待した方向とは逆を向いて歩いて行ってる。

話の途中だな。

……最後まで聞くのか？

「この世の法律というのはね、知る者のために存在し、知らない者のためには一切動かないんだよ。君だつてこの何ヶ月の間に、土下座して無防備に背中見せてるその背中に唾吐いて来ただろう。なあ、ありゃあ負けや。あんなのは負けに決まったある。

君も片桐も、私も含めてやで。この世は全て、需要と供給で成り立ったあるんや。君だつて生まれてここまで、人を食って生きてきたんやで？食うのはエエが、食われなくなつて君はココに来たんやろう？どうなんや、秋月くん」

そう喋っている東の表情。

その目が、どんどん据わつていくのを感じていた。

分かっていたことなのに、どこかで何かを期待していた。

……やはりコイツも、外道。

「……えーっと、秋月くん。何の話やったかなあ。あ、そうかそうか。覚醒剤の話か。

試しにもう一回聞いてみようか。片桐、お前、シャブ売ってるのか？」

片桐は当然のように答える。

「いいえ」

と。

……この展開を、それほど大きく想像していなかった。

自分が甘かった。

直樹は冷めかけのコーヒーに一度手を伸ばし、……引っ込める。それから立ち上がった。

「お忙しいところ、時間取らせてしまって申し訳ございませんでした。帰ります」

そう言い置き、部屋を出ようとした直樹の背に、東の大きめの声が掛かる。

「秋月くん！」  
振り返る直樹。

「車で来てるんやろ？ だったら先輩の片桐を乗せてってあげなさいよ。君らは仲間なんやから。これからも仲良うするんやで」

それを聞き、片桐も席を立ち、東に挨拶をする。

直樹と片桐は扉の片方ずつを同時に開け、東の部屋を出た。

会話もなく廊下を渡り、エレベーターに乗り、駐車場へと歩く。

この状況で明るく話しかけるのもおかしい。

声を掛ける切欠が見つからないが、片桐に行き先を聞かなければならない。

片桐が車の後部座席に乗るのを確認し、運転席に座る直樹。

取りあえず車を走らせる。

「……あの、事務所に行けばいいですか」

「いや、ちやうで。ちよっとドライブするわ。号線へ乗れ」

「……はい」

……ひよつとして、このまま命ぜられるままに走ると、人気のないところに連れて行かれて消されるんじゃないか。

そう思った。

直樹は頭の中で格闘のシミュレーションを始める。

今、殺されるわけにはいかない。

……コイツ、銃持ってんのかな。

裏切りと取れる先ほどの行為を後悔などしないが、俺にはまだまだ時間が必要なんだ。

そんなことを考えている直樹に、片桐が話しかけてきた。

「最近はなあ、産の安いのが仕入れられるようになってな。

品質自体はそがいになんか変わらへんから、エ工銭ツコになると思うとるんよなあ」

「……………」

自分から言い出して、俺を丸め込もうって魂胆か？

結構気の小さいヤツやな。

俺はこれ以上、お前らに何か言うつもりはないよ。

車は赤信号に引っかかり、止まる。

そのタイミングを見計らってか、片桐がセカンドバックの口を開け、何かを取り出して直樹に見せた。

「おい秋月、コレを預かっといってくれるか」

「……………」

ハンカチに包まれているため、それが何かは分からないが、大体の想像はつく。

「ダツシュボードへでも入れとけや」

直樹は言われるまま、そのハンカチを受け取ってボックスの中へ押し込んだ。

……………これで共犯者。

逃げも隠れもできんってか。

心配すんなよ。

俺が逃げるのは、もうちょっと後や。

直樹が間違いなくそのハンカチを納めるのを確認し、片桐が続けて言う。

「秋月、もう一丁でもワシにケンカ売ろう思うておるんやったら、そんなときゃあ一切睡眠取れんちゅー覚悟を決めてやって来いよ。寝てる間に何が起こるか分からんからなあ」

そう言いながら、後頭部で両手を組み踏ん返り返る。

その片桐の言葉に対して、直樹は敢えて「はい」と返事をした。

「お、そういえば佐藤忘れて来とるやないか。もう一回オヤジのトコまで走れ」

「……………」

車はUターンして、来た道を戻る。

道中、直樹は美奈子・タケシ・パクの順番で、彼らの顔を頭いつぱいに思い浮かべた。

それから、

これさえあれば、やっていけるんやって。

そう括り、自分の思考を一度閉じた。

空気が大分あたたかい季節になった。

直樹は以前から、桜の咲く少し前くらいには今の状況を乗り越え、タケシと2人で自分たちのことを誰も知らない土地へ隠れたいと思っていた。

引越しの時期に乗じれば、少しは誤魔化しがきくんじやないか。

そう考えていたのだ。

直樹が『ライズ』と名乗って密かにやっていたビジネスは軌道に乗り、結構な儲けになっていた。

当初は2〜3年のモグラ生活と考えていたが、やはり4〜5年は潜っておかないと。

そう思い直し、必要経費は2人で最低500万は要る、そう計算していた。

シマ外でのスカウト活動で、他の組の人間に追いかけて回されることもあったが、直樹が片桐の下の方・東の傘下であると知れば、特に問題にはならなかった。

以前、パクウが俺に言っていた『虎の皮を被ったキリン』

草食動物。

それが今の俺。

何度も考えては打ち消す、今後起こるであろう事実のことを思えば、自分が虎の毛皮を着ていようが、草しか食わねえヤツだろうが、一向に構わない。

……もう少し、時間がかかる。

幸い、あれ以降美奈子が病院に運び込まれる事態にはなっていない。

この日、直樹は会合があった片桐の送迎をしていた。

その帰り道、片桐が話し出した。

「おい秋月。お前、鉄砲玉って知っとるか」

鉄砲玉とは、行ったきり帰ってこないもの。

自分の命を顧みず、人の命を取りに行く行為。

「はい、分かります」

「ウチの組内で鉄砲玉さす言うたら、誰がエエンやるなあ。オヤジに、お前は大事に扱え言われとるんやけどのう……」

「……………」

俺に行ってくれということか。

覚醒剤のことに關しては、あの件以降何も触れていない。

コイツの機嫌取りに労力を使ったつもりはないが、あれ以降それなりに静かにやってきたつもりではあった。

……冗談じゃない。

何でコイツのために。

直樹が見ただけでも、片桐が襲われて命を落とすそうになったのは5回。

日頃の行いが招く回数だろう。

人に殺されるのがイヤなら、舌でも噛み切れればいいんじゃないか。

直樹はその片桐の話に、これ以上乗るのを止めた。

事務所に到着すると、迎えの者が2人、ビルの入口で待っていた。

車のドアを開けさせ、踏ん返り返って降りる片桐。  
その後姿を見遣り、直樹が車を駐車場へ移動させようとした、その時、

パンッ！！

耳をつんざく、乾いた音。  
続けて3回、

ツパン！！ パンッ！！

パンッ！！

ガシヤ            ンッ！！

ガラスが割れる音。

片桐の叫び声。

直樹も慌てて車を降りる。

真昼間に起こった、発砲。銃声。

「おいコラ！待てエッ！！」

組の1人が逃げる犯人を追いかけ、走り出す。

国道を走る車の騒音である程度音は掻き消され、それほどの大騒ぎにはならなかったが、事務所の窓ガラスが割れ、1人肩を撃たれたよう  
で血を流しながら蹲っている。

その横で、地べたに這い蹲る片桐。

言っているそばから起こった、片桐への銃撃。

彼は地面を這うようにビルのドアを開け、中に入り込む。

それを追うように、直樹も肩を撃たれた彼を抱えるようにして、ビルの中に入る。

直樹はすぐにその彼をソファに寝かせ、シャツをハサミで切り、傷

口を見た。

幸い弾は掠ったようで、肩には小さな溝ができている程度。

片桐は持っていた書類を筒のように丸め、ぎゅっと絞るようにしてウロウロと苛立ちを隠せない様子。

顔が少し青褪めている。

……人にはムチャクチャするお前が、やはり死ぬことに対しては恐怖を覚えるのか。

それから何分も経たない内に、先ほど片桐を襲った相手を追いかけていった男が事務所に駆け込んできた。

片桐はその彼を怒号で迎える。

「ワレエ、何で1人で帰ってきたとんじゃッ!？」

「すみません!逃げられました」

片桐は息をするのも忘れたかのような勢いで、立てかけてあった木刀を手に取り、大きく振りかぶったそれを彼の左肩に打ち下ろした。

ボクッ!!

「逃げられたとちゃうぞボケエッ!!何さらしとんじゃ!!何で戻ってきたとんじゃあッ!!」

亀のように蹲るその彼の背中を、何度も何度も殴打する片桐。

その焦りと引いた血の気は直樹にも向けられる。

「おいコラ、秋月!お前は何しとんや!?そがいなヨゴレは放つといてオノレも追いかけんかいッ!!」

同時に、片桐の右拳が直樹の顔面を痛打した。

「……はい、そうでした。すみません」

「チッ!!」

大きく舌打ちをした片桐、続けて皆に命じる。

「今日はもう仕事はエエ!ここへ全員集める!枝の人間含めて全員じゃッ!ワシのタマ狙うとるヤツを片っ端から探し出せ!!今すぐ

全員狩つて来いッ！！」

「はい！」

返事と共に、そこにいた全員が大急ぎで人数を集めようと電話を掛け始める。

直樹は1人、

馬鹿馬鹿しい。どうやって探すんだよ。

そんなことを考えながら、焦ることもなく皆と同じように受話器を取った。

皆が一堂に会するのは無理だったが、結構な数の人間が集まった。

片桐は皆に号令を出した後、すぐに姿を消した。

確かに、今日の狙われ方は非常に危なかった。

今日、片桐は本当に死に掛けたのだ。

それを経ての今回の命令。

皆が集まり、雁首を揃え、ざわついている。

無理もない。

片桐の命を狙う者を探し出せ、などという命令。

どう探せばいいのかわからない。

「市内・市外全部の組を当たれってことか…？」

「ちよつと待てエ。そんなことになったらお前、大きなケンカになるぞ」

皆いい考えが浮かぶわけでもなく、事務所で騒いでいるのみ。

直樹はそれを尻目に、1人で事務所を出る。

好機という以外ない。

この間、俺は稼がせてもらうよ。

直樹は車に乗り、片桐のシマから二町離れた、まだ行ってない地域へと向かった。

命を狙われて慌てふためく辺り、あんなヤツでもこの世にまだ名残



があるんだろう。

……イヤ、あんなヤツヤから、この世に膨大な楽しみがあるんかもしれん。

あんなヤツヤからこそ、死にたくないんやろう。

死にたいと言うヤツに、俺は掛ける言葉を持ち合わせてはいない。だけど生きたい片桐に、何かしてやろうとは思わない。

…今の俺はうまく行きすぎて、完全に調子に乗ってるからな。今日も稼ぐぞ。

直樹はそのシマから2つ離れた町で、堂々とスカウト活動を始めた。まだ日が高いのでまずはその町にある大学へと行き、そこで女子学生に片っ端から声を掛ける。

このとき、名刺を受け取ったのが12人。

今日も調子がいい。

それが終わると食事を済ませ、車内で残っていた書類関係の仕事を  
する。

そして今度は町に繰り出し、スカウト行為。

目立つ形でこの仕事をしていると必ず他の組の人間に見付かり、追  
い掛け回されていたが、この日はそれさえない。

直樹は一度片桐のシマ内に戻り、組の仕事を済ませ、また他の町へ  
と足を伸ばす。

この日、直樹はいつもにも増して調子に乗っていた。

いつものように女性に声を掛け、立ち止まった人と1分ほど話をし、  
名刺を渡す。

すると前方から、スラツと背の高い女性がやってきた。

白のワンピースに帽子を被った、大変な美人。

人混みの中、容姿の面でも目立つその女性。

直樹が声を掛けないわけもない。

「あの、ちよつといいツスカ」

「……………」

女性は直樹の呼びかけに立ち止まった。

「実は私、こういう会社やってまして。人材の派遣の仕事なんですが、多く稼ぎたいという女性のニーズに応えるべくですね、お昼の仕事が済んだ後、出れるときだけ働けるっていう職場を案内させてもらってるんですよ」

女性は直樹の差し出した名刺にちらりと目を遣った。

「風俗の案内ってことですか」

……………こういう返事が来たとき、その女性は8割方電話をよこしてくる。

それを知っている直樹は、ここから熱が籠もる。

「あの、風俗って言うてもいろいろあるじゃないですか。オッサンの話聞きながら、タダで酒を飲めるっていうのもありますよ。どうですかね、詳しくお話ししたいんですけど」

ここで直樹は初めて、その女性を全体的にぼんやり見るのではなく、顔、その表情をじつと見つめてみた。

……………アレ。

ひよつとして、もう水商売やってる……………？

見た目20歳ちよつと過ぎのその彼女は、年齢の割りに物腰・話し方・身のこなしが妙に落ち着いている。

……………そらそつやわな。

こんな目立った感じの人、声掛けられてないワケないよな。

そう思い、半ば諦めかけていたとき、その彼女が言った。

「名刺だけ預かっててエエですか」

直樹は即座に返事をする。

「あ、もちろんです」

「私の世話してくれてる男が強烈でねえ。どうせ世話してもらっんやったら、あなたみたい綺麗な人の方が私もエエからね。後で聞

違いなく電話させてもらいますよ」

女性はそう言い、名刺を受け取ると去って行った。その背中に、

「よろしくお願いします！」

と頭を下げる直樹。

有頂天になる。

あの立ち振る舞い、間違いなく大口や！

キャバクラでNo.1にでもなつたら、えーっと……

そう考え、頭の中で数字を並べる。

×、

×……

思わず拳を握り締め、その場で

「よっしや ツー！」

と声を上げてしまった。

直樹のこの日の笑顔は本物で、この後も引き続きその場でスカウト活動を続ける。

この日の直樹は大変調子に乗っていた。

先ほど出会った彼女が大口であると確信していた直樹、もうそろそろ帰ろうかとも思うが、ここで踏ん張れるかどうか、怠けるのは簡単なんだと更に名刺を配るのを止めないでいた。

とにかくこの日は調子が良く、その後30分間で8枚の名刺を配ることに成功する。

どのくらい時間が経ったのか、辺りがだんだんと暗くなってきた。キリの良いところで、あと2枚配れたら帰ることにしよう、そう考えていた。

「ちよつとすいません、お話聞いてもらっていいですか？」  
変わらない調子で、道行く女性に声を掛ける。

と、その時、何かが背中をちよんちよんと叩いたような気がした。

しかし直樹は取りあえず気が付かない。

これだけの人混みだ。通行人のカバンが背中に当たったのだからうくらしいの気である。

すると、今度は間違いなく肩をとんとん、と叩かれた。

「ちよつと兄さん。大きいお兄さん」

背後から男性の声。

……いつもならば最初にちよんちよんと触れられたときに、振り向きもせずその場から猛ダツシユで走り去るのだが、この日は一つタイミングが遅れてしまった。

うわぁ、見付かった。

面倒臭エ！

そう思いながら振り向く直樹。

そこには3人の男が立っている。

2人は帽子を被り、イカつい眼差しをこちらに向けている。

もう1人は手の甲まで伸びた刺青を持った男。その男の目つきもまた鋭い。

……間違いなく同業者。

「見イへん顔やけど、この辺の人間？ちゃんと許可取ってる？」

「……………」

直樹は別段焦るわけでもなく、ふとその3人の後方に目を遣った。

少し離れた、その向こう。

先ほどの白いワンピースの彼女が、1人の男とこちらを見ている。

うわぁ……………失敗した！チクられた！

それに気づくのと同時に、直樹はこの状況を正確に把握しようと計算するように頭を巡らせた。

……行き当たりバッタリじゃなく、伝達が回って俺に声をかけてきたと考えるのが妥当だな。

こんなパターンはこれまでも多々あったが、直樹はいつもまずは逃げてみせる。

いきなり組の名前を出して、もし万が一組同士のケンカにでもなっ

たら……

それを危惧しているのだ。

……まずは逃げるタイミング。

直樹は口を開く。

「えっと……何かマズかったですかね？許可とかよく分からないんですけど」

「……………」

3人は物も言わず、直樹を抱えるようにして路地裏へと連れて行つた。

大通りと違い閑散とした感のある路地裏は、この時間にはまだ営業していない店が立ち並んでいる。

それらの閉まったシャッターの一つに、直樹は勢いよく押し付けられた。

ガッシャンッ！！

「お前、一体何や！？寝言か！この辺はな、ワシらのシマやねん。

勝手なことしとつたら、」

そこまでを聞き、直樹は先手必勝とばかりにその3人組の1人、刺青男に向かって大きく頭を振り下ろす。

額でメキッ！という音。

その頭突きは、刺青男の鼻に見事にヒットした。

「ンガ　　ッ！！」

叫び声と共に、地面にくの字に転がる男。

直樹は掴まれていた両腕を思いっきり振り払い、その場から勢いよく駆け出した。

「ごめんね！もう来おへんから！」

そう言い残し、大通りを流れる人混みを掻き分け掻き分け、走り抜ける。

当然、あとの3人は直樹を追いかけてくる。

「待てエ、コラ　　ッ！！」

「誰が待つか！バーカッ！！」

全速力で走りたいのに、人波のせいで突っ走ることができない。ぶつかつた人、ぶつかりそうになつた人が、直樹を次々と振り返る。出来うる限りの最短距離を取つていた直樹の前方からは、無理やり人を押しのけながらこつちに走つてくる男が3人。

……仲間やな。

直樹は体勢を変え、真横の路地へと駆け込む。

今回はいつも逃げているそれとは勝手が違つていた。

この場所は繁華街で、とにかく人が多い。しかも出会い頭で来たものだから、街の構造がよく分からない。

思いつくままに、勘で逃げるしかない。

直樹の足は次第に繁華街の裏手に回る。

そこで目に飛び込んできた高い塀を飛び越えると、その先は民家の庭。

植木が林立しているその庭に、直樹はいったん隠れることにした。木と木の間にしゃがみこみ、息切れする自分を休ませる。

「ハア、ハア、ハア……ハア」

……またジムへでも通うか。

そう思いながら。

直樹は今の状況がそれほどピンチとも思っていない。

この場に隠れて、ヤツらが諦めるのを待とうと考える。

こんな目に遭うのは、しょっちゅうなのだ。

……しかし、あの女逃したんは大きかつたな。

ちよつと考えれば、どつかの組の息がかかつた人間やつて分かつたのに。

こうなるのは分かつたのにな。

……ナメとつたな。

今後に生かすしかないなあ。

これまでも余所の組の息がかかった女性を引き抜いたことは、何度かあった。

しかし、声を掛けた相手にチクられて他組の者に追いかけていられるこの現状に、直樹はがっかりする。

下手に間に人間が入らへんから、俺と組んだ方が稼ぎがいいのに。慌てずにちゃんと説明すれば良かったな…。

暢気なつもりはないが、その場に座り込んでそんなことを考えている。

……その気楽さは、直樹の持った厚かましさ。

直樹はしばらくの間、他人の所有地でブーツと座り込んでいた。少し疲れていたのかもしれない。

本当に、何も考えずにブーツとしていた。自分が今追われている身であるという事実を、7割方忘れられるほどに。

何分経ったのか自分の中で理解はできていないが、結構時間は経つたはず。

直樹は立ち上がり、今度は塀を乗り越えるのではなく、その家の門を普通に出て行く。

これまでも、こういう状況下に置かれたことは何回もある。だからナメていたのかもしれない。

これまでは難なくクリアできていたから。

直樹は駐車場へと、急ぐわけでもなく隠れるわけでもなく、ただ向かう。

車を止めてある立体駐車場の近くまで行き入口を見ると、数人の男がそこに立っているのを見つけた。

……分かりやすい格好をしていてくれれば、何とかなるのだが。さっき自分を追い掛け回したヤツらの仲間なのかどうなのか、見た目からは判断できない。

一応電柱の影に隠れ、入口に立つ彼らの様子を窺う。

直樹は何となく、今のこの有様が面倒臭くなり始めていた。

近づいて行って飛び掛ってきたら、ブツ飛ばしてやればいいか。

そう思い、シミュレーションするわけでもなく、電柱の影から隠れるのをやめて歩き出す。



繁華街からは少し離れたその場所。

人気はあまりない。

近づいて行く直樹に反応しない彼らを見て、少しホツとした。

……良かった。車で帰れそうや。

そう安心し、彼らとすれ違った瞬間。

ボクッ!!

低い打撃音と同時に、背中に激痛が走った。

「はぐッ!!」

吐息混じりの情けない声が口から漏れる。

直後、どこかでカランカランカランツという金属音。

つんのめりながら、しかし倒れ込むのを何とか堪える。

すると今度は、体を折り曲げている直樹の腹部目がけ、確認できない位置から人の足が飛び込んで来た。

もう一つ、

バグッ!!

低い音が体を襲う。

「く…………ツ」

直樹の呻き声に被さるように、何人かの怒声が響く。

「おい!おつたぞ!全員集合させエ!!」

「このボケエ!のうのうと!!」

「車に積み込むからな!ちよつと弱らせエ!!」

そんな声を聞きながら、先ほど入口にいたグループが慌てたように去って行くのを目の端で捉えた。

……しまった。

アイツらにばかり気イ取られてた。

背中がお留守やったか。

全く気づかんかった。

ここに来て、今回のこの状況をナメていた自分を少し振り返るが、もう遅い。

確認できただけで6人いる相手に、直樹は蹴るや殴るやの暴行を受ける。

さつき食らった背中への1発と、胃辺りへの1発、これが効いて呼吸すらうまくできない。

体を丸め、執拗に繰り返される暴力を、ただ耐えるしかなかった。

何分続いたのか、何発食らったのか。

直樹は自分の体のそこら中が腫れ上がっていくのを自覚する。

ようやく

「痛い、痛い、痛い」

その声が出るまでになっただが、その頃には後ろ手に両手首と親指を梱包テープで拘束されていた。

直樹はそのまま、電柱にもたれるように座らされる。

血流を止められた手首から先、親指から先がだんだんと冷たくなっていく。

先ほどの暴行で、蹴りが1発目に入った。

左目は開くのも難しい。

口の中に広がる自分の味。

舌で辿った奥歯の3番目がグラグラしている。

……コイツら、やりすぎやろ。

相手は先ほどの6人から、10人に増えていた。

1人の男が直樹の髪の毛を引っ掴み、電柱に後頭部をガンガン押し付けながら怒鳴る。

「おいコラ！お前、ドコのモンや！？野面かまして人のシマで商売しやがって！言うてみい！ドコのモンじゃ！？」

直樹はここで一拍置き、ニツと笑って見せた。

これまでの経験上、あの2人の名前を出した途端に皆引き下がる。

直樹はここに来ても尚強気だ。

「……この手、離れた方がエエと思うで」

そう言つて、電柱に背中を擦らせながら立ち上がる。

「ウチの組の名前聞いたら後悔するで。俺にこんなんして、後からどうなつても知らんぞ」

これほど痛めつけられたことはないが、この状況には慣れている。ただ一つ気がかりなのは、この直樹の態度に対し、連中の中に引き下がるような様子を見せるヤツが1人もいないこと。

それが気にはなっていた。

「お前ら 会知つとるやろ。俺はソコの東の子じゃ。ソコの枝におる片桐んトコで働いとる秋月いうもんや」

そこまで言つと、直樹を囲んでいた10人の顔色が少し変わる。

ハッ！いつものパターンや。

そう思う直樹だが、彼らの顔色の変化はいつものそれとは違ったものだった。

連中の1人が直樹の目の前に身を乗り出し、直樹を睨みつけながら口を開く。

「ワレエ……片桐んトコのモンか。さんざつぱらワシらの邪魔しくさつてから。こないだウチのオヤジと手打ちしたばかりやないか舌の根エ乾かんウチにコレかい！ナメくさりやがつて！！」（手打ち：ケンカして大事になる恐れがあるため話し合い、その問題を沈静化する行為。和解）

「！！！」

その言葉を聞き、直樹はようやく目が覚める。

一瞬にして頭から血の気が引いた。

組織の末端にいる直樹には、そういった組同士の内情は耳に入ってきて来ない。

この状況がどれほどまずいのか、直樹はここでようやく気が付いたのだ。

幸い縛られているのは両手のみ。

直樹は咄嗟に、輪になって自分を取り囲む10人に全力でタックル

をかました。

ドンッ！！

千切れた輪から飛び出した拍子に前方に倒れ込むが、その反動を利用してすぐさま起き上がり、全速力で走り出す。

「待たんかい、コラ　　ッ！！」

後方でその怒号を聞きながら、頭を端から捲り上げる。

とにかくこの場を逃げ切り、今日の出来事をなかつたことにしなければならぬ！

どうすればいい！？

背中に浴びせられる怒声を気にすることもなく、息切れする間もなく、後ろ手に拘束されたまま全力で走る。

とにかく片桐に、ライズのことがバレちゃいけない。

どの道を行けばいいのかわからない直樹は、ただ走る。

「おーいッ！！ソッチへ行つたぞ！！捕まえエツ！！」

後ろからのその声を、直樹も聞いた。

だが土地勘のない直樹はどうすることもできず、その言葉に反応した5人のグループに気づきながらも、そこに突っ込むことを選ぶ。

5人が両手を広げるようにして、直樹に向かって身構える。

そこへ助走を付け、肩から突っ込んだ。

ドカッ！！

衝撃によるめいた連中の脇を何とか通り抜ける。

しかし、その向こうにいたもう1人に気づかなかつた。

相手は走る直樹の足に向けて、自分の足を伸ばした。

避けることはできなかつた。

障害物に思いつきり躓き、直樹は顔面から地面へと倒れ込んでしま

ザザザッ！

それと同時に馬乗りされ、体を引っ繰り返され、天を仰ぐ。  
……まず見えたのは、通りの天井。アーケード。  
そこにつけられたライト。  
ぶら下がった、何かの広告。

何を諦めとんねん！

まだまだ逃げれる！！

馬乗りになった男が、直樹の首をグツと掴んだ。

何としてでも逃げる！！

直樹は膝を振り上げ、その男の背中を蹴り上げると、そこで声が聞こえた。

「アッ！！」

聞き慣れた声。

しかし直樹はそれを気にすることもなく、

「何じゃーッ！コラ！！どかんかあッ！！どけエッ！！」

そう怒鳴って身を振り、最後の抵抗を試みる。

すると自分の首を掴んでいた手の力が、少し緩んだ。

……何故力を弱めたのか、コイツは。

が、そんなことを考える間もなく、直樹は大勢に囲まれる。

万事休す　　！

……直樹は抵抗を止めた。

「よっしゃ岡崎！よう捕まえた！」

その声を直樹も聞いたが、直樹はまだ気づかない。この後のことを考え、それどころではなかったのも確か。

……だがいくら考えを巡らせようとも、この状況で直樹にできることはもう何も残っていないかった。

直樹はここで落ち着くように、今、自分を囲む事実を目で確認する。もう何人集まっているのか、数えようもない大人数の中、いつまでも自分の腹の上に座っている存在に気づいた。

「フ……………」

と一つ大きな溜息を吐き、

「……………もう逃げへんから、どいてくれるか」

そう言つて、直樹はここで初めて相手の顔を見た。

……全ての環境と状況を考慮し、想定できる範囲の中にその可能性はあったはず。

これだけは、と何度も何度も願った、その事態。

なのに、最近起こったどの出来事よりも恐れていたことが今、我が身を包んでいる。

「……………ッ！！？」

思わず声を上げそうになったが、直樹はそれを寸でのところで堪えた。

腹の上で呆然の体で見下ろしている、男。

最後に馬乗りになって直樹を捕まえたのは、

タケシ。

その場に固まり、2人はしばしじっと見つめ合う。

タケシも同じリアクションなのは、言うまでもない。

タケシに対して何か言わなければいけない。しかし今のこの状況は直樹にそんな猶予を与えない。

「……………」

……全身の力が抜けてしまった。  
直樹はそのまま、数人の男に抱えられて車に押し込まれ、連行される。

状況がマズイ方向へ転がっているのは裏腹に、直樹の内情は毎秒毎秒落ち着いて行く。

身上に受けた電害は、致命的ではない。直樹はそう認識している。

……今の段階では。

自分を挟むように座っているタケシの組の人間が言う。

「ワレエ、この後どがいになるいうて保障は一個もないぞ。覚悟しとけや」

その言葉は直樹の耳には入るが、中心には届かない。

直樹が考えているのはそれ以上。それよりも、先。

……この車の車種を確認できないほど焦ってたな。  
タケシはどの車に乗ってるんやろ。

怒るかなあ……………」。

走る車の中、後ろを振り返り、そんなことを考える。

……まず殺されはせんやろつ。

うん。

そんなことしたら、エライことになる。

シマを荒らしたの、謝ったら許してくれるかな。

……そんなワケないな。

コイツら、片桐の名前出して余計キレたもんな。

目を閉じて俯き、この後まず何をすればいいのか考える。

しかし、どの方向で思案してみても四方八方で行き止まり、良い案は浮かばない。

……もうちょっとや思つて、焦ってしもうた。

直樹は抵抗などできるはずもなく、されるがままに車で運ばれて行く。

やがて着いたのは、町外れにある小さな雑居ビルだった。

直樹が騒ぐと思ったのか、男たちは車の中で直樹の口にタオルを巻き、声を封じた。

車から引つ張り出されると俯くように命令され、後頭部をぐいぐいと押さえつけられる。

2人に両脇を抱えられ、直樹はそのビルの一室へ押し込まれた。

それほど大きくはない部屋には、真正面にデスク。

それと垂直に、3人掛のソファが置いてある。

そこへ直樹は放り出され、両足首も縛られた。

直樹と共に部屋に入って来たのは5人。

先ほど10人ほどいたと思ったが、あとの者は応援だったのだろう。その5人の中に、タケシもいる。

とにかく2人で話をしたい直樹だが、もちろんそんな考えが通るわけもなく、2人はその空間で何度も何度も視線が合う。

「おい、コイツ、どうするや?」

1人がそう言い出した。

それを皮切りに、5人は相談を始める。

力なく俯きながら、直樹はその会話に聞き耳を立てた。

「新宅さんって、いつコツチへ帰ってくるんやっただけ?」

「3日くらい帰らへん言うってたよ」

「梶さんは? 梶さんは今日家におるんちゃうか」

聞き覚えのある名前に、直樹は首を起こした。

……そうや。梶さんや。

あの人なら、話せば何とかしてくれるかもしれん。

直樹は梶の顔を思い出し、少し安心したような、そんな気である。

「おい、誰か梶さんに電話してくれや」



それに返事をしたのはタケシ。

「……あ、じゃあ、俺が電話します」

そのタケシの顔色も、明らかに悪い。

彼も直樹と同様、どうしていいか分からないのだろう。

タケシは直樹を数瞬じっと見つめ、足取り重く電話の方へと歩いて行った。

タケシ、早く早く！

早く梶さん呼んでくれ！

受話器を取ったタケシの目をじっと見つめ、そう念じる直樹。

その時、先ほどの悶着で直樹の頭突きを顔面に食らった男が、直樹に詰め寄ってきた。

「おいコラ、さっきはようもやってくれたのう！」

男は直樹の胸倉を掴み上げ、もう片方の手で頬を鷲掴む。

堪えどころや。

歯ア食いしばれ！

そう覚悟したと同時に、その男の振りかぶった平手が直樹の左頬を殴り飛ばした。

バチイツ！という甲高い音と共に、手足を縛られた直樹は右方向へと倒れ込む。

そこから直樹は4人がかりで、殴る蹴るの暴行を受け始めた。

不穏な音が際限なく鳴り響く中、直樹は体を丸め、暴行の隙間を縫って目を開ける。

4人の隙間から見える、タケシの姿。

両脇で拳を握りながら、今にも泣きそうな顔でこちらを見つめるタケシに、少し救われるような思いもした。

直樹は延々と激しい暴力を受けながら、梶さんが来るまでの辛抱だとひたすら耐える。

殺されはしないだろうとタカを括り、されるがままにここまでつい

て来たが。

これを打破できた後に考えなければならぬことを考えたとき、頭の中が大騒動になる。

思考がこんがらがり、でもその前にこの状況はと思案がループしてどうすることもできない。

梶さんが来るまでの辛抱なのか、それとも梶さんが来たからお終いなのか。

直樹は、もうそこに賭けるしかなかった。

息が切れるほどに、直樹に殴る蹴るを繰り返す4人。

1人が言う。

「何も止めることないんちゃうか、……ハア、ハア、……ハア……ッ！ ブツ殺されてもしやあないやる！」

体中が痛い、まだまだ直樹の意識ははっきりしている。

その言葉は聞こえたが、しかしそれに対する声が出て来ない。代わりに口を挟んだのはタケシ。

少し慌てた様子で、

「まあまあ、ちよつと落ち着いて。お茶でも入れましょうか」

引き攣っているとも言える少し笑ったような顔で、皆を宥めようとす。

「おいコラ、タケシ！ お前、何落ち着いとんじゃ！？ 茶アやないやろ！ 梶さん、何時頃来る言うたんや！？」

その怒声に、タケシは実に言い難そうに答えた。

「あ、……ああ、すぐ行く言うてましたよ」

直樹はとにかく急いでくれ、とだけ思う。

半開きの唇から涎なんだか血なんだかよく分からないものが流れ出し、ソファに垂れ流しになっているが、拭うこともできない。

そんなものに構ってられない。

1人の男がソファに横たわった直樹の髪を引っ掴み、首を持ち上げ

た。

「片桐の命令で動いとるんやろうけどな。お前、この後どうなっても恨むんやったらアイツを恨めよ。こっちゃんやエエ加減ブチキレとんじゃ！あのポケエツ！」

今回のこのことは片桐の命によるものではないと言おうかとも思ったが、どう転んでも結果に結びつきそうになかったので止めた。

歯痒くもないこの事態を、直樹はじつと噛み締める。

しかし、

「いつそ片桐呼び出したらどうや？」

その言葉には、直樹もうるたえた。

咄嗟に口を挟む。

「お前ら何も分かってないな。アイツが俺を助けに来るわけないやろ。電話したって、ご自由に言われんで」

直樹の言い分に、4人は黙り込む。

……ひよつとしてこの方向で押して行けるか？

直樹は続ける。

「散々つばらシバいてくれたな。……まあエエよ、許したる。このまま俺を解放せえ。ほんなら俺も上には何も言わへん。ほんで、俺らは二度とコツチへは来おへん。このままお前らがウチにケンカ売って、エエことなんか一つもないぞ」

……片桐に今回のことがバレたら。

いや、このまま行くと必ずバレる。

そう考えた直樹の口からは、すらすらと詰まることなくハツタリが溢れ出してくる。

「お前らんトコの親玉、梶言うんか？ソイツも俺なんかとっ捕まえで、何て思うとるかな。メンドイことになった思うとんちゃうか。

お前ら、大丈夫か？ウチみたいいな大所帯との火種作って。知らんぞ」直樹は1人の目をじつと見ながら言う。

ソイツの先にいる、困惑が飽和状態のタケシをちらちら見つめながら。

……タケシ、頼むから最後まで黙っててくれよ。  
直樹はタケシを信じ、この状況を何とか突破しようと、4人に向かってそう唱えたのだ。

「……………」  
その直樹の言葉は、4人を確かにうるたえさせた。  
誰も次の言葉を発さない。

動向を促すような切欠も、持ち出さない。  
しかし仮の平穩に過ぎないその沈黙は、長くは続かなかった。  
この後彼らにとって、タケシにとって、そして直樹にとっても、この場が凍りつくような最悪の事態が待っていたのだ。

4人はそれぞれ椅子などに腰を掛けた。  
梶の到着を待つことにしたようだ。

壁掛け時計の秒針の音だけがその空間を支配するほどに、皆が黙り込んでいる。

その間も、直樹はタケシに向けて目配せをする。  
自分の表情から酌みとってもらえるように。

ごめんよ……ほんまにごめん。

他の4人にバレないように、口だけでごめん、と繰り返す。

タケシはそれに僅かに首を横に振り、応えて見せた。  
行き先、方向の定まらない直樹とタケシ。

その静かな部屋で、誰も口を開かない。

誰も動かない。

ただ、タケシだけがソワソワしている様子が伺えた。  
それから10分ほど経っただろうか。

タケシが不意に、意を決したように声を上げた。

「やっぱりコイツ、捕まえてるのヤバイんちゃいますかね？解放した方がエエんとちゃいますか。コイツも上にはチクらん言うとするし、コッチへも足伸ばさん言うとするし……………」

「……………」  
タケシの提案に、誰も何も言わない。  
が、その時。

事務所の入口から、コンコンコンと3回ノックの音が聞こえてきた。  
直樹は身動きしづらい体を捻り、入口へと目を遣る。

梶さんが来たと言んだのだ。

しかし他の5人の態度は違った。

薄い困惑顔で入口を見つめている。

この事務所の人間ならば、しかも梶であるならばノックなどせずに  
入ってくるはずなのだ。

誰もが動かないでいると、もう一度コンコンコンとノックの音が響  
いた。

それに、タケシが慌ててドアに向かう。

ガチャリ。

瞬間、開いたドアの向こうに現われた人物を見て、直樹は目を見開  
いた。

そこに居たのは、前に一度だけ会ったことのある梶ではない。

毎日毎日、嫌になるほど顔を合わせている、片桐だ。

「何やっとなんじゃコラ！ワシヤ客やる！早よ開けに来んかい！」

片桐は普段から自分でドアを開けようとしなない。

驚愕に思考をスローにしながらも、直樹はそんな片桐の癖とも言え  
ない癖を思い出す。

その怒声に、直樹を除く全員が席を立った。

「キツチャナイ部屋やのう！おい、お前らも入って来い」

片桐は10人以上を引き連れ、その事務所内にズカズカゾロゾロと  
入ってくる。

そうして奥まで進み、おそらくここの親分である新宅のデスクにド

カツと尻を掛け、直樹の転がるソファの背もたれに土足の足を乱暴に置いた。

片桐の位置はちょうど直樹の背中側に当たり、直樹からは彼の姿が見えない。

「ごそごそと、いつものように胸ポケットからタバコを取り出す音が聞こえた。

すぐに、すり寄って行ったお付の男がそれに火を点ける。

「フ……………ッ」

一つ、大きく吐いた煙。

片桐は早速、まるでここが住み慣れた部屋かのように振舞い始めた。

「秋月、ご苦労さんやったな」

「……………」

何故この場に片桐が来たのか。

俺を助けに来るはずもなく、何で俺がここにいることを知っているのか。

……………一つ間違いがないのは、コイツが俺を助けに来たりするはずがないということ。

手足を縛られて横になる直樹は体勢を変えることもできず、自分の背後にいる片桐がどんな顔をし、どんな態度でソレを言ったのか確認することもできない。

「まあ皆さん。今日確認したと思うけど、今日コイツがここに来たのはな、足掛かりっつーか、まあ簡単に言わしてもらおうとやな、本日この時刻をもってこの辺のシマ、ウチがもらうことにしたんや」  
何となく、耳の奥の方でピシッという音がしたような気がした。  
直樹は間違っことなく、このタイミングでタケシの顔を見る。

「まあ、この時刻いうことやからな、お前らも分かるやろ？郷に入れば郷に従え言うやないか。…………アレ、ちょっと違うか。まー、ちよつとの間、おとなしゅうしとってや」

そんな片桐に対し、先ほどまでこの片桐に怒りを露にしていた連中が黙っているはずもない。

「おいコラ片桐！お前、何調子に乗つとんじゃ！？そがいなモン、通用するワケないやろ！お前、こないだウチんトコのオヤジと手打ちしたんちゃうんか！アレ、反故にするつもりか！！」

片桐のフ　　ツと吐く息の音が聞こえ、直樹の目の前をタバコの煙が通過して行く。

「……アンタよう、何でワシの名前知つとるんや？お前、誰や。

こないだやった手打ちねえ……まあその辺は最近の話やから、ワシもよう覚えてますわ。せやけど今回のこりゃあ、ワシも命令で動いとつてのう。

……エエか、お前ら。こつからワシの目の前で一言も発するな。息だけしとけ。一言でも喋つたら、埋めるぞ」

「……クツ！」

そこで片桐の弾いたタバコが直樹の目前を横切り、床に落ちた。

直後、ドンツ！という音と共に、直樹は床に転がり落ちる。

片桐がソファを引つ繰り返したのだ。

直樹は片桐の姿を見上げる形になる。

「ケンカしてでも貰うておいで！言われとるんや。ウチの東にな！」張り詰めた空気の中、タケシを含めた5人は黙るしかない様子でその場に突っ立っている。

直樹が見上げる片桐の顔が、一瞬満面の笑みに変わった。

そうして、足元の直樹を見下ろす。

「おおー、そやったそやった。ウチの秋月くんがおったんやったなあ。何や、手エと足縛られとるんか。おい、ちよつとコレ切つて解放してやってくれるか」

片桐はわざわざ相手の組の人間に指図し、直樹の拘束を解かせた。背中と足元でパチンパチンというハサミの音を聞きながら、直樹はようやく今日の自分の行動について考えることができた。

軽はずみとしか言いようのない自分の行動で、とんでもないことになってしまった。

直樹の頭の中にはもう自分のことを考える余裕はなく、思わず口か

ら美奈子の名前が出そうになる。

立ち上がった直樹を見て、片桐は更に続けた。

「おいおい、秋月くん。アンタ、何でそんなボコボコにされとるんや？アンタ、何か悪いことしたかいな。エエ〜？」

言いながら、片桐は直樹の肩をグツと掴み、自分の方へと引き寄せた。

項垂れるしかない直樹は、ここで再びタケシの姿を確認する。

タケシももちろんこちらを見ており、2人の視線は半瞬、その場で交差した。

……この後、タケシはどうなるんやろ。

タケシの仕事がなくなるんか？

そう考える直樹に、片桐は暇を与えない。

直樹がタケシに送った一瞬にも満たない視線を、片桐は見逃してはいなかったのだ。

「秋月くんはこんなになるまで一体誰に殴られたんや？よっしゃ、誰に殴られたんか、ワシが決めたる」

そして、片桐は迷うことなくタケシを指差した。

「アンタが秋月くんをこんな風にしたんやなあ？」

片桐はそう言い、タケシに向かって手招きをする。

……コイツは一体何をしようとしてるんや？

直樹の困惑を無視し、片桐はどんどん自分のステップを進めて行く。

「秋月くん、ワシらの世界ねえ、ヤラれて泣き寝入ったら終わりなんや。ヤラれたらやり返さな。それくらい知ってるやろ？」

アンタがな、殴られた分、そっくりそのまんまコイツに返しなさい」言葉が終わると同時に振り返り、片桐の表情を確認してみた。

目が腫れているせいで、無表情なのか怒っているのか喜んでいるのか、その辺が掴みきれない。

……この場でコイツを刺し殺してやったらどうなるかな。

一瞬そんな風な考えが頭を過ぎるが、それはあくまで『風』。

直樹は握り拳を固められぬほどに足を震わせ、困惑し、脱力する。



「ほら、早よせんかい。ソレが終わったらいったん帰るんやから、ワシら。早うせえ」

直樹の背中をドンツと押し出す片桐。

直樹はつんのめり、タケシと向かい合う。

……自分の無力と無知を知り、噛み締め、今この場に立っている。竦みたい足は、それ以上前へ出ようとはしない。

タケシはそんな直樹から目を逸らすことなく、歯を食いしばるようにして小さく肯いた。

その肯定は他の者が見たとき、何なのか分からないほどに小さなものの。

しかし直樹はそれのお蔭でこの先ではなく、今自分が何をすべきかを理解する。

思わず「ア ……ッ」と声を出してしまった。

右で拳を作り、タケシの顔を殴りつける。

もちろん力の加減はした。

だが、そのもちろんは直樹のものであり、片桐はそれを認めない。

「おいコラ、秋月！お前が殴られたんはもっと痛かったんちゃうんか！そうやろう！もっとボテ繰り回さんかい！」

……昔、一度だけタケシを殴ってしまったことがある。

何となくではない。今、それを思い出した。

直樹はもう一度右を振り上げ、タケシの頬を殴打する。体勢を返すように左拳で、

また、右拳で。

「そうやそうや、その調子やで！あと30発行かんかい！」

直樹はここから、30数えることにした。

タケシが望めば、帰ってから34発、……イヤ足りねえか。

40でも50でも、殴ってもらおう。

……謝っても許してもらえんかな。

不快であるから、考えるのは止めよう。

今回の俺のした罪に対する罰。  
そして罫。

直樹は拳に満々と、不快と遠慮と謝罪を込め、タケシを殴り続ける。タケシはそれに、鼻口からの流血はすれど無表情に徹し、ところどころで僅かに肯くことで直樹に応える。

自分の目からじわりと涙がこぼれそうになる感覚を覚えるが、ここで泣くのはあまりに卑怯。

直樹はただ命じられるまま、早く30を数え終わることを願う。

せめて俺の手も、折れるなりの怪我をしてくれ。

昨日までを浚った今日。

この日、直樹は振り返り、やらなければならないことがたくさんある。

その後、今回の件に関しての経緯を聞いた直樹は呆然と、思考が自分から離れてしまったかのような体で片桐の事務所へと連行された。

このような事態を引き起こすに至った理由

この日、片桐からの命令を受けたにも関わらず、それを無視するよう事務所を出て行った直樹を怪しむ者が1人いた。

その男に、直樹はずっと尾けられていたのだ。

直樹の行為は、その報告を受けた片桐の逆鱗に触れた。

しかし直樹の立場はというと誰の子分でもなく、破門・絶縁といった形が取れるわけもない。

自らの手では、処分できない。

腹に据えかねた片桐は、東に相談した。

が、その話を聞いた東の答えは「実に頼もしいやないか」という、片桐の期待を裏切るものだった。

客人という身分でこの組織に居た直樹。

今回の件に関しては、片桐の怒りの矛先になることで済まされることになる。

「ワレ、殺したらシヤレにならんことになるらしいのう。せやつたら二度とワシの目エ見れんようにしたる」

ゴルフクラブでもって、頭以外のあらゆる箇所を殴られる。

怒りの余りか、正常に呂律の回っていない片桐の暴言の中で理解するに、東が言った『頼もしいやないか』という一言は、片桐の癪に障った以外の何物でもなかったようだ。

ボクッ！

ガンッ！！

ガキッ！

鈍い打撃音と同時に更に強張る筋肉は、痛みをやり過ぎせない証。それでも、僅かでも衝撃を和らげようと直樹は体中に力を込める。

果てがないと思われるほどに続く暴行を正座で堪えていた直樹だが、その内耐えられなくなり、床へと横転してしまった。

「この期に及んで、何でワシがお前みたいなの飼うとかなアカンのや！」

硬いゴルフクラブのヘッドを食らいながら、直樹はもっと堅かったタケシの顔を思い出す。

……話をしよう。

タケシ。

言い訳とちゃうで。

謝罪も含めて、報告がある。

そう思えば、片桐のこの暴行にも耐えられた。

直樹はただひたすらに体を丸め、奥歯を噛み締めて片桐の気が済むのを待ち続ける。

そうしながら、以前言われた「二度とワシに逆らうな」という言葉をぼんやりと思いつ出した。

どのくらいの時間、殴られ続けたのか。

やがて腕が疲れたのか、それとも自制が効き始めたのか、片桐はようやくゴルフクラブを振り上げる手を下ろし、直樹を解放した。

……どうやら3度目の猶予が与えられるようだ。

今回の件で直樹が失ったものは多大なるもの。

何としてでも直樹が死守したかったお金は、直樹が死ぬ前に片桐に

取り上げられてしまった。

この日、記帳のためにたまたま持ち歩いていたスカウト活動で稼いだお金、第2の預金通帳を片桐に引き渡すことで、今回の話はいったいだ。

……生きていれば、また稼ぐことはできる。

何とかそう自分に言い聞かせ、できない納得を心に押し付けた。

直樹は沈みそうな体を引き摺って、事務所を出る。

全身、あらゆるところが痛い。

腫れ上がった各箇所を見るに、体重まで増えてしまったんじゃないかと思うほどの膨らみ方をしている。

動ける状態ではないが、しかしこの日はどうしても帰らなければならぬ。

車の運転は諦め、タクシーに乗り込み、後部座席で横になってマンションへと向かう。

激痛の走る体を庇い、ポケットから鍵を取り出して玄関に入ると、美奈子が出迎えてくれた。

「アレ、秋月くん。……え、何なんその顔！」

廊下の鏡を覗き込み、今日初めて自分の顔を見た。自分で思うほどに、別人のような顔になっている。

「今日はお兄ちゃんも早いんやで。もう帰って来てるんやで。……」

アレ、ひよっとして2人、ケンカした？お兄ちゃんも顔、こーんなになってるんやけど」

「……………」

何とも答えがたい現状。

タケシの顔をあはしたのは俺なんだけど……

そう考え、白状してしまいたかったが、何とか思い止まる。

壁に手をつきながらリビングへ向かうと、タケシはコタツに入り、

そこに座っていた。

……ちゃんと話をしなければ。

自分がタケシにしてしまったことを考え、自分がこれから言おうとしていることを交えたとき、何が先行するのか。

……アレもコレもソレも、全て、美奈子の体を治すため

俺たちの願いはソコでしかない、と。

タケシも先行する部分はソレでしかない。

そう信じてはいたが、話をするまでタケシからどういうリアクションが返ってくるのか心配でならない。

胡坐をかいて座っているタケシ。

こちらを見ることなく、何も置かれていないコタツの上をじっと凝視している。

膝を曲げるのも辛く、臀部も痛い。

座る体勢すらままならないが、ここで自分が横になるのは余りにも不謹慎。

直樹は何とか痛みを押して、タケシと向かい合うようにコタツに腰を下ろした。

「……………」

もちろんと言わんばかりの沈黙が落ちる。

タケシの表情から、毛が逆立ったような、そんな血色でいるようには見えなかった。

だけど今回の俺の行動は、謝って許してもらえるレベルではないのかもれない。

ここに来て、そんなことを考えてしまう。

しばらく黙々と時間が過ぎて行く中、やがてタケシがリビングの入口に立っていた美奈子に目を遣り言った。

「美奈子、ちよつと俺ら話あんねん。部屋行って音楽でも聞いとつてよ。話聞こえんように。美奈子に聞かれたないねん」

「えー！私、今日見たいテレビあんねんけど」

それを聞き、直樹も口を開くのはこのタイミングしかない、振り返る。

「美奈子ちゃん、ごめんな。スゲエ真面目な話せなアカンねん。ビデオ録つとくから」

「……分かった。じゃあ今日は我慢するわ」

美奈子はそう言って、自室へと入っていく。

部屋のドアが閉まる音が、静かに聞こえてきた。

それを確認し、直樹は口を開く。

「タケシ、……今日はごめんな」

最初に謝罪の言葉が出てきたのは、自分が今から言おうとしていることが何とか言い訳にならないようにと、そう考えていたから。

「実は俺な、あの事務所に入って結構経つねん。コンビニのバイトとか、大分前に辞めとつてん。……あ、嘔吐いとしたのもごめんな」

「……」

じつと動かないタケシ。

言わなければならぬことを加えながら、直樹も合わせるように静止したままでいる。

長い沈黙の後、タケシがようやく口を利いてくれた。

「……お前な、ごめんとちゃうで、マジで。俺はもう、ほんま……何が何やらもう、こんがらがってもうて、ワケ分からへんのやからな」

「うん……ごめんな。俺もな、どっかで大きな路線変更せな思つて

な。短期間にドンと稼ぐんなら、ああいう仕事しかない思ったんよ。

……あの後、大丈夫やった？

「大丈夫なワケないやんけ！梶さんが帰ってきてきて大ごとよ。何があつたんや言うて」

「梶さんってどこにおつたん？なかなか戻って来んかったやん」

「あいな。梶さんに言えるわけないやろ、お前のこと！あん時、電話するフリして誤魔化しとつたんや。なんぼ梶さんやいうても……なんぼお前のこと知ってる言うても、許さへんやろうからよう」

「でも、電話してないならしないで、マズインちゃうん？……マズイよ！」

「まあ、せやけど……その辺はうまくやるよ」

「……そうか。何か、全部ごめんな」

「……」

「……」

そしてまた、沈黙が訪れる。

その内、タケシがおもむろに立ち上がった。

「風呂溜めとつてん。ちょっと待っというて。湯、止めてくる  
そう言うて、リビングを出て行く。」

……思ったよりも怒ってないのか。

先ほど直樹の言った『大きく稼がなければならぬ』という言葉に何の反応もしなかったタケシに、少し苛立ちすら覚える。

いつまでも外様でいるつもりはねえ。

直樹はここで決めた。

包み隠さず、全て話をしよう。

風呂の湯を止め、タケシがリビングに戻ってきた。

無言でコタツに入ろうとしたタケシが座る体勢を整える前に、直樹は口を開く。



「おい、お前一体いくら貯まってるんだよ？」

「ええ？何でや？」

「何でって、理由は一つしかないやろ。トボケンな。別に他意はない。ちよつと計算せなアカンのや」

タケシは座るのをやめ、タンスの中に仕舞ってある自分の通帳を取り出して直樹の前に広げて見せた。

「あんまり貯まってへんのやよな……」

そう言いながらタケシが指し示した通帳の数字を、直樹は身を乗り出して覗き込む。

以前タケシの給料がどれくらいなのか、聞いたことがある。

それを踏まえた上で羅列した数字に、直樹は立派だと思った。

昼間の事務所でのタケシの様子を見て、コイツはペーパーの身分で、その体制に甘んじているらしいことを理解した。

俺のようにしろとは言わないが、お茶なんぞ淹れている暇があるんなら、やれることがあるだろう。

あの状況の中、頭の端々でそんな思考を巡らせていた。

しかしこの通帳の金額に、直樹は思うのだ。

自分のできることをやっているのが、タケシ。

その大半が、買いたいものも買わず、やりたいこともせず、我慢で占められているのだと。

タケシの事情と現状を飲み込んだ上で立派だと思った直樹だが、ここで一つ口を出した。

「少ねえ。何やってんだ、お前」

そう言つて、直樹も立ち上がる。

「はあ？」

というタケシの声を背中で聞きながら。

直樹も自分のタンスの引き出しから、2冊の通帳を取り出した。それを開き、タケシの目の前にズイツと突き出す。

「俺はもうすでに、お前の倍以上を貯めとる」

示されたその数字を見たタケシが、不審そうな顔で直樹に問う。

「……お前、コレどうやって稼いだんや？」

直樹の頭の中で、意に反した数々の罪と、それに対する罰が交錯した。

全て話そうと思ったが、これは言わなくていい部分。

「どう稼ごうが、金は金よ」

直樹はそうとだけ答える。

そして、勝手に話を進め始めた。

「えっと、まずタケシの　万やろ。ほんで俺のコレやろ。ほんでパクウも貯めとんねん。で、パクウが大体　万ある言つとつたから、……タケシ、もう美奈子ちゃんの手術、できるぞ」

直樹の言葉に対してタケシは何の返事も発さず、固まったままただ通帳のみを見つめている。

「今回な、お前んトコにいつぱい迷惑掛けたけど、明日つからタケシや梶さんトコがどういう風になるんか、俺のせいやけど俺も分かんらん」

直樹は指で通帳を指し、何度も数字の上をトントンと叩きながら、「でも俺らの目的って、コレしかないやろ。人なんて、生きてナンボやろ」

そうタケシに投げかけた。

ずっと黙ったままのタケシの様子を見て、直樹はやがて指を引っ込める。

「……まあ、……梶さんには悪かったって思ってるけど……」

沈黙の多い、今日のこの時間帯。

黙り込んでいたタケシも、言葉を選びながらゆっくりと話し出す。

「パクウは……パクウはお前がヤー やってるの、知ってるんか？」

「言えるワケないやろ。怒られるの分かってるやん。俺はパクウに怒られるのが一番嫌なんや。だから黙ってた。ほんでタケシはアホやから、お前に言うたら絶対パクウに言うと思ったから、お前にも言わなんだ」

「……そうやな。アイツは中途半端アホのくせに理屈で来るから、怒られたらごっつムカつくんよな、って、誰がアホで口が軽いんじゃー！」

「……………」

核心を突こうとする直樹と、それを受け流そうとするタケシ。

この話の反りが合わない。

直樹はこれまでの計画を決定事項かのようにタケシに伝える。

「だからよ、あともうちよつと金貯めてやな、ほんで俺とな、タケシはどっかへ逃げるんや。ヤー なんて、辞めます、ハイそうですかってできんやん。だから逃げるんや。2人で4〜5年、ナリを潜めてモグラ生活するには、少なくとも400〜500万は要る思うてんねん」

「……………」

「まあ、実はその金も貯めてたんやけど、今日のことな……アイツに取り上げられてしもうてん。だから、」

タケシはここまでを聞き、直樹の言葉に割って入った。

「お前らに！……お前らに迷惑は掛けたないねん。特にゼニ金なんて、そんな面倒見てもらうワケにいかへんし、これは俺が何とかせなアカンのや」

核心を突こうとしたタイミングで、直樹にとっては戯言でしかない正論をのたまうタケシに苛立ちを隠せない。

「誰が迷惑掛けられてんねん！そんな風に考えないよ！それに、お前にピーチクパーチク言われる筋合いはない！俺は美奈子ちゃんのために金を使おうとしてるんや。お前はオマケや、オマケ！！」  
ここまでしてきた苦労を水の上の泡にされているようで、直樹は今持っている苛立ちをタケシにぶつける。

しかし相変わらず俯き加減のタケシ、まだ折れることをしない。

「……実はな、俺も大きい仕事があんねよ。ソレが終わったらな、手術代全部持つてくれるっていう話やねん。だから……大丈夫やねん。お前らの金使わんでも」

それを聞いた直樹は一度冷静になり、テレビの方へと視線を向けた。  
「……お前、その大きい仕事って、テレビの裏のアレとちゃうよな？」

その言葉には反応せざるを得ないタケシ。

「……隠してんの、知ってた？」

「うん。掃除のときにな」

「……………」

「……………」

直樹は今回のこの沈黙が嫌いだと、自分の中で決定を下す。

その認識と同時に自分の苛立ちに耐え切れず、いささか声のトーンを上げてタケシに言い放った。

「あのなあ！そんなことしないでいいよ！もう金はあるんや！俺が、パクウがエエ言うてるモンをやな、誰が咎める権利を持つとんねん！？お前、寝惚けてるんやったら先に言えよ！お前の妹が生きるか死ぬかの話をしてるんやぞ！？」

「……………」

「俺な、お前がお父さんとお母さんの話、愚痴みたいに言うてるの聞いたことがない。スゴイと思うてんねん。尊敬してんねん。」

このご時世に、何が悲しゅうて16歳で家族のために生きていかなアカンのや！？そんなのってないやろ！お前が言わんから俺が言う

たるよ！お前の父さんと母さんはクスじゃ！！

だけどな、お前は立派や！俺みたいなのには理解できんくらい  
の苦勞をしてる。尊敬してんねん。その人のために何かしよう思  
うてる俺は間違ってるか！？

生きてナンボやぞ！？世の中、生きてナンボやねん！！

死ぬほど辛い乗り越えといて、その後生きんでどうすんねん！  
なほお前がアホや言うてもバカや言うてもマヌケじゃ言うても、  
これくらい本能の中で持ち合わせとるやろ！

いいか！美奈子ちゃんもな、お前も俺も、この後ずっと生きて行  
くねん！変な意地張って、お前ら兄妹で首絞め合うな！！」

大きな声で。

美奈子にも聞こえてしまいかもしれない。

しかし、そんな氣遣いには構っていらぬほど、直樹は本音で話を  
する。

「タケシ！タケシ！！自分が許せんのやったら、全部終わった後に  
パクウと俺にちゃんとお礼を言え！ほんで今すぐ俺にお願いしろ！  
自分を許せるんやったらせんでいい！でも許せんのやったら、ちゃ  
んとお願いしろ！」

完全に俯き、黙り込んでいるタケシ。

その肩は小刻みに、時折大きく震えている。

2人だけのこの空間で、言うべきことは言った。

ここが決め時。

半歩たりとも、引くつもりはない。

直樹は息を詰めて、タケシの動向を待つ。

やがて顔を上げたタケシは、その顔をくしゃくしゃにし、声を押し  
殺し、溢れ続ける涙を拭いもせず直樹に言った。

「……ほんまに、ほんまに、エエんやな？ すぐにも手術できるんやな？……秋月、美奈子を……美奈子を、助けたってくれ……!!」

「……………」

瞬間、直樹は腰が砕けるほどに全身の力が抜けた。

その場にどさつと座り込む。

「……………まあな。エエよ」

直樹はちよつと笑って、そう返事をした。

これでようやく心配事が一つ抹消される。

そう確信した。

自分がかたくり捨てたものが、ようやく実を結ぶ。

そう感じずにいられない。

それから2人は今日あった出来事を笑い話に変換し、夜遅くまで笑いながら話をした。

次の日の朝、タケシ・美奈子・直樹はコタツを囲んで話し合いをしていた。

議題はもちろん、美奈子の手術について。

前置きが済み、本題に入ったときの彼女の表情は、実に微妙ではあった。

ただ感慨深いところから来るものなのか、それとも恐怖からなのか。直樹はそんな美奈子に声を掛ける。

「タケシもパクウも俺も、何があっても駆けつけて一緒にあってあげるから、全然怖くないぞ。寝てる間にちゃっちゃと終わってしまふんやから。そのちゃっちゃで、心配事が一つなくなるんやぞ？ スゲエな。良かったな！」

「……………」  
直樹の言葉の後、しばらく3人は黙り込む。

やがて向かい合わせに座っていた美奈子が、声を震わせながら話し始めた。

「……………」お母さんがな、ごっつーお金掛かるから手術は諦めえ言うてん。だからね、子どもときから毎日毎日、死ぬのを待ってる感じやったよ。……………」これって、ほんまに治るん？ほんまに治してもらってエエん？」

そう言った美奈子の顔は無表情と言っている。

しかしその目からは涙がぼろぼろと、止まることをしない。

「そうやで、美奈子ちゃん。治るんや。治んねん、これが。ほんまに良かったな。あとは美奈子ちゃんが手術のときに、ちよっと頑張るだけでエエねん。なあ、タケシ」

「……………」秋月がな、協力してくれんねん。パクウも協力してくれるらしい。悪かったな、美奈子。えらい遅うなってしもうて」

一見重々しく見える、この光景。

しかしそれは、この場にいないパクを含めた4人の希望の光景だった。

美奈子に手術の話をした後、直樹はすぐにパクに電話をした。

大事な話があると。

『何やねん、朝イチから。怖いなー、大事な話って。それは良い大事か、悪い大事か？……………」まあ、会ったときに聞くよ』

パクは今から出張で出掛けるらしい。

ここまで話が進んだからには一刻も早く行動を起こした方がいいのだが、どうしても直に会い、一から十まで説明したい。

パクが出張から帰るのは、明日の夕方。

明日の夜、いつもの居酒屋で3人で会う約束をして、直樹は電話を

切った。

この俺が、自分で表するのも何なのですが、結構頑張ったと思います。

もうひと頑張りしないといけないのですが、頑張った方だと思っています。

二度捨てられたこの命が役に立てたと思うと、とても嬉しい以外の表し方が見付かりません。

俺が今回、あの2人に対して使おうと必死で貯めたあの紙切れが、血で、涙で、反吐で汚れていようが、何を吸っていようが、俺には関係ありません。

あの紙切れは、俺が随感するがままに邁進した結果なのですから。あの紙切れが何できていようと、2人が笑っているので関係ありません。

世の中から、世間の人たちから見たら、俺が頑張ったと表す今回の経緯は、吸い込んで吐き出しても気づかないような微粒子ではないのかもしれない。

そして、それに関してのこれまでのことを披瀝し、そのときばかりは怒られるのなら甘んじてそれを受け、言われるがままに怒られよう。

その後笑って過ごせるのであれば、俺が怒られるなんてのはそれこそ微粒子と表してやればいい。

彼女の体が心配でしょうがない毎日。

それと、人の生活を無尽蔵に繰り返されると表す、ああいう輩と



『さようなら』できる日が待っている。

ここに来て思ったことなのですが、この後待っている生活をモグラ生活と表するのは如何なものかと思ひ始めた。聞こえが悪いし、気が滅入りそうだ。

……水禽と表しようか。

それなら世間は見えるし、いつでも飛んで行ける。

これがいいと思う。

水禽生活と表しよう。

その先に待っているのは、ふんだんにパステルカラーを用いた生活であるに違いないのだから。

## さよなら 2

この日、直樹はいつものように事務所へと向かった。

昨日の出来事によって今日どういう仕打ちや対応を受けるのかと思っていたが、……やはり皆から常に睨まれているような気がする。

東の口利きから特別待遇のような扱いを受けていた自分は、当然とすべきか煙たがられていたのだろう。

それも含めた上での、今日の自分に向けられるこの雰囲気。

しかし直樹にとって、そんなことはもうどうでも良いことだった。

四六時中顔がほころび、笑顔になりそうになる。

油断するとニヤケた顔になってしまう。

美奈子の手術の話が進む。

それと同時に、水禽生活を送るために自分はまだこの場所に属しておかなければならないという現状。

そのためにも、昨日のことを形だけでも片桐に詫びをしようと思っていたが、この日は朝から片桐の姿が見えない。

当然、今日は にいるなどという情報は、直樹の耳には入って来なかった。

直樹は机に向かい、皆の視線を避けるようにデスクワークをこなしている。

そこに近づいてきたのは佐藤。

「おい秋月、会長が今から来い言うて電話してきたぞ。まあ、昨日のこつちやろうな。お前がドコのどんなヤツか俺は知らんけどな、あんまりハネ回つとるなよ。次、何ぞしでかしたら、俺がお前にとどめ刺したるからもう」

東が呼んでいると聞いて一瞬焦りはしたが、その後の佐藤の言葉は直樹の耳を素通りする。

「あ、すぐですか？本社に行けばいいんですよ」  
素っ気無くも聞こえる直樹の返事に佐藤は激高し、直樹の胸倉を掴み上げた。

「ワレエ、ほんまに調子乗っとなよ！！」

その体勢のまま、直樹は思う。

とどめを刺すとか何とかかかんとか、お前にそんなことできるワケねえだろ。

調子こいてるのはお前じゃないのか。

しかしこの場で事を荒立てるのは賢明ではない。

今後のことを考慮し、

「あ、そうですね。昨夜はすいませんでした」

そう言い、頭を下げる。

笑いながらも詫びはできる。

そう思った。

すぐにということだったので、直樹は車に乗り、東の元へと向かう。東の言う用事の内容が気になりはするが、それよりも勝るのが水禽生活のあと500万。

昨夜、タケシと話をした。

1人250万ずつ用意するとかではなく、とにかく2人合わせて500万用意しよう。

スカウトの金は片桐に取り上げられてしまったので、また新たな何かを模索する必要がある。

できれば、何をしてでも1月で500万は作りたい。

ああでもないこうでもないと考え事をしながら車を走らせる直樹。

昨夜の話し合い、そして美奈子の手術が決まったことで、どこか綻んでいるのだろう。

以前のような鬼気迫る思考の運動を駆け巡らせることができない。

油断しては笑顔になり、信号で止まれば笑顔になり……

そんなことをしているうちに、東のいるあのビルに着いてしまった。

直樹はビルの中に入り、東の部屋へと上がる。  
じゅうたん敷きの廊下を渡りながら、ここに来てようやく少し緊張  
が始まった。

……まさかクビじゃあるまいな。  
そんなことも考えてみる。

東の部屋のドアをノックし、

「失礼します」

と声を掛けて中に入った。

室内には東と、いつものお付きの男がいる。

……どこかで緊張の糸がほつれているのだろう。

直樹がその様子を見て思ったことは、現在自覚する自分の立場とは  
全くかけ離れた感想。

そういえば、このお付きの人の名前を知らないな。

ま、もう覚えんでもエエか。

部屋に入ってすぐその場で立ち止まり、そんなことを考えた。

「おー、秋月くん、早いやないか。さっき電話したとこやで。やつ  
ぱり君は一味違う。世の中なんて早う動けるモンが勝つんや。  
急に呼び出して悪かったね。まあ、こっちに来て座りなさい」  
いつものように、立派な椅子にふんぞり返っている東。

直樹はその東の正面に置かれているソファに腰を掛ける。

「おい、コーヒー出前してもらって、…あ、秋月くん、コーヒーで  
エエんかな？」

その言葉に直樹は、

「できたら紅茶でお願いします」

「ハハハハッ！そうか、秋月くんは紅茶の方が好きか。ええトコ  
の子は紅茶を飲むんかね。じゃあ私もたまには紅茶にしようかね。

おい、紅茶2つ持って来させてくれ」

東の言いつけに、お付きの男は部屋を出て行く。  
その、いつもの光景。

前回のように、紅茶が届くまで待とうじゃないかと言われるかと思  
ったが、この日はそれを待たない東。

今回の用件を話し始めた。

「秋月くん、昨日のこと聞いたで。随分と無茶するやんかいさあ」  
その話題になったとき、こう返そうと決めていた。

直樹は席を立ち、頭を下げ、

「昨夜は本当にご迷惑をお掛けしました。申し訳ございません」

その直樹の返事を見、聞き、東は少し黙って直樹を見つめる。

そして東は、ここから独断を始めた。

「アレエ、何で謝るんだろうねえ？君のそのお詫びの意味がよう分  
からんよ。

昨夜、君がやったことはね、 会（タケシの所属事務所）を潰す  
足掛かりになったから、お礼を言わなきゃねと思って今日呼んだん  
やけど」

「……………」

「片桐にはたくさん怒られたんやろうねえ。男前が台無しになつて  
るやんか」

「……………」

東はそう言うのと腰を上げ、こちらに歩いて来た。

直樹の隣にどかっとなり、親指の爪を擦りながら話を進める。

「私はね、この世で嫌いなものは何かって聞かれたらね、1個しか  
ないんやわ。それはねえ、0・000001ミリでも私にマイナス  
の影響を与える人間なんやわ。大ッ嫌いなんやわ。

ほんで、私が一番好きなものっていうのは、1円でも多く私に利益  
を与えてくれる人なんや」

東はそこまで言うつと自分の爪を弄る手慰みを止め、満面の笑みでも  
つて直樹を見つめた。

笑顔で返すべきかと思ったが、完全にそのタイミングを失った。

……というより、恐ろしかった。

「で、秋月くん、お父さんは元気かい？」

「……………」

父が今、元気にしているのか、元気ではないのか、そんなことは直樹の知るところではなく、正直なところここ何ヶ月、あの両親のことを思い出すことなどなかった。

東の話はここが核心なのではないか。

そう思い、直樹は東の言葉に集中する。

「随分と長い間、連絡取ってないみたいだねえ」

その言葉に、今更ではあるが自分が家を飛び出してきたということがバテしていると確信した。

「私はね、別に君のお父さんに魅力を感じたワケじゃないんやわ。

彼は大物や。私とはレベルが違う。近づこうもんなら、人差し指でピーンツて撥ねられるよ。

昨夜の君のやったことを聞いてね。片桐は怒ってるかもしれないけど、私は嬉しかったんやわ。ウチに集まってる人間なんてのは、ボククラで普通や思うてたんやけどね。

上のモンが頭使つて荒稼ぎしよるのを、指銜えて見てるだけ……私や彼らを見ながらね、死んでもこんなクズにはなりたくないって思っただんや

「……………」

「そこへ来て君はね、聞いたら入って1月もせんうちに1人で隠れて稼いどつたらしいやないか。皆が遊んでるときに勉強して、皆が遊んでるときに体鍛えとつたんやもんなあ、君は。

我慢の袋を叩き割るのは大人になってから、そう決めとつたんやろ？ エライなあ。一味どころか、二味違うよ」

「……………」

いつものことではあるが、東が一体何を言いたいのかはつきりと分からない。

ここに居ろということなのか。

ウチの親のことはもうすでに知っていると思っていたが、それを度外視し、それでもここへ置いてやると、そう言っているのだろうか。頭を巡らせようとすると、東の話は続く。

「秋月くんね、世の中、列っているのは大事なんやわ。それは分かるよな？だから片桐はあんな風に君を怒ったんや。

でもね、ここで一つ言わしてもらっていいかな。誰にも言うたらアカンのやで」

そう言い、直樹に顔を近づける東。

何となく、直樹も顔を東に寄せる。

「正直なところね、私や片桐が死のうが生きようが知ったこつちやない。幸い彼はね、今のところ私に利益をもたらしてくれるんやわ。内緒やで。絶対誰にも言うたらアカンで」

この東の言い分を聞き、直樹はここで目を覚ました。

それは俺にも言えることだろう。

両親ともう関係のない俺が今後どうなるかは、俺如何であると。

そういうことなのだろう。

背筋の辺りで何かを感じ、何かを背負った気がする。

直樹は敢えて無言のまま、返事をしなかった。

とても居づらい雰囲気になっている。

褒められているのか、咎められているのか。

東は更に踏み入った話を始めた。

「秋月くんは、片桐と杯事は交わしてないよね？」

その問いに対する返事は、久しぶりに声を出した、そんな感覚のそれだった。

「いえ、そういうのはやってないです」

そこで東はもう一度、笑顔を直樹に見せた。

「そうかいそうかい。そういうのはね、ちょっと考えてからやって頂戴よ。片桐と交わすんなら、私と交わしてもエエんやからね」

笑顔を留めたまま、笑っていない視線を向ける東。

そんな東が、自分の全てを見透かしているのではないかと勘繰ってしまう。

直樹の思考は先へ先へと走り、自分がその内この組織から逃げる計画をしていることすらバレているんじゃないか。そんなことも考えてしまふ。

何を言うべきか逡巡していたその時、部屋のドアがカチャリと音を立てた。

先ほど東が頼んだ紅茶が届いたのだ。

瞬間、水を差されたかのような顔をする東。

安堵を隠し切れない直樹。

「……あー、秋月くん、お茶が来たよ。まあ、一緒に飲もうやないか」

そう言つて、東は自分のデスクへと戻つて行く。

目の前に置かれた紅茶の静かな表面をじっと見つめ、考えようとするが何も定まらない。

直樹はその紅茶を、ミルクも砂糖も入れず一気に飲み干し、立ち上がった。

「東さん、そういうこみ入った話はまた折を見て……折を見て、お願いするときは僕から伺います。その時にはよろしくお願いします。

……ほんの少しでも東さんの利点になれるようこれからも頑張りますので、よろしくお願いします」

そうして頭を下げた直樹の表情に、押し殺さなければならないほどの笑顔はない。

「うん、うん。利点でも利益でもどっちでもいいよ。まあ、頑張らずに利益になるのが一番なんやけどね。君のためにも、私のためにも、ね……」

静かなのに耳をつんざくような東の言葉一つひとつに、安心していいのか恐怖していいのか。



まるで雲を掴むかのような、形容しがたい東のこの空気に丸呑みされないうちに……。

そう思った直樹は、一刻も早くこの部屋を出るために東に歩み寄る。「それじゃ、今日は失礼します」

挨拶をしてもう一度頭を下げた直樹に対し、東はもう一つ確信的な一言を付け加えた。

「今日話したことは一つも忘れてたらアカンよ。心配せんでも、私は一つも忘れないからね」

その体勢のまま、固まる直樹。

頭を上げることができずに、東の顔を見ることができないでいる。

その体勢のまま、もう一度、

「……失礼します」

そう東に告げ、直樹は駆けるようにその部屋を後にした。

踏み出す爪先が、一歩一歩と重ねて立ち竦む。

エレベーターに乗り、ビルを抜け、駐車場に向かうこの背中に、凍った礫が降りかかってくるような気がした。

……冷たい恐怖とでも言うのか。

東の、あの領域。

今晚夢にまで出てくるんじゃないのか。

東の話が頭の方々にこびりつき、車を運転する直樹は頂垂れるような思いでいる。

結局、

いろいろ考えてもしょうがない。やれることをやって、早いトコロお金を貯めないと。

這いずりながら、どうかかこうとか……。

思考をそこに完結させた頃には、片桐の事務所はもう目の前。

途中で放り出してあった書類関係の仕事を終わらせてしまおう。

直樹は事務所の中へ足早に入って行く。

いつもの調子でドアを開けると、ふと空気が変わっていることに気づいた。

先ほど出掛けたときとは違う雰囲気です。事務所が蠢いている。何やらいつもより人が多く、慌しく皆が動いている。

しかし直樹はそれほど気にすることなく自分のデスクに座り、先ほどの書類を広げた。

そこで、直樹は突然肩を掴まれ、

「おい！何やつとんねん！そんな後でエエからお前も動かんかい

「！」

「？」

いきなりそう怒鳴りつけられても、帰ってきたばかりの直樹には何のことだかさっぱり分からない。

事情を聞いてみると、

……どうやって探し出したのやら、片桐を狙っているヤツらの詳細が分かったということだった。

しかも、先日事務所の前で片桐に向けて発砲したヤツらだけではなく、確認しただけで5つの組が片桐を狙っていると言う。

「この5つの組のうちな、この4つは大したことないねん。こんなモン、こっちから出向いて潰したる。でもなあ、ココが問題なんや」

紙に書かれた5つの組事務所の名前の一つを指差し、彼は直樹に説明する。

「ココはな、組の枝なんやけどな、トップにおるのがヤバイんや。ウチの会長もビビりよるヤツでな。」

片桐さん、電話してもおらんし、どうしたらエエんや、コレ！」  
とりあえず、その話を頭に残すようには聞いていた。

しかし直樹にとっては全く興味のない話。

先ほどの東の話を思い返し、自分と照らし合わせてみる。

……俺は、人としておかしいんだろうか。

本気で片桐がどうなるうが知ったこっちゃない。

というより、全く興味がない。

曲りなりにも今、近くにいる人間の事情であるのに、興味がない。俺もまた、東と同じ部分を持ち合わせているのか。

「とにかくや、お前も来い。まずこの事務所行くぞ」

「行って何するんですか？」

「……いや、片桐さんおらんからな、どうしたらエエんか分からんけど、とりあえず行くんや」

……冗談じゃない。

俺にそんな時間はない。

行って何が起こるのか分からない。

何をするのかも分からない。

そんな状態で、自分から出向くなんてのは……

コイツら、ほんまに頭使ってんのか？

さつき東がボウフラとか何とか言ってたな。

蚊の幼虫……言えてるような気がしてきた。

そんなモノに、俺は乗る気はない。

そんなことより、俺は明日楽しみが待ってるんだ。

そんなことをしている場合じゃない。

「いや、すいません。さつき東さんに呼ばれとったんですけど、この後東さんに言われてる仕事があるんですけど。どっちが優先ですか？」

直樹は咄嗟に出た嘘で、その彼に問う。

「……え、会長から？……うー……ん……」

初めて口を利いた彼の名前すら直樹は知らない。

しかし先ほど少し交わした会話で、こつ問えば返事に困ると即座に判断できた。

東の話聞いて、東のマネをしたかどうかは分からない。

東に影響を受けたのかどうかは、……分からない。

「あー…ヤバイですわ。もう時間や。ちょっと東さんのトコへ行き  
ますんで」

直樹は書類をたたみ、それを小脇に抱えて事務所を出る。

…どこをどう剥いてみても、切ってみても、俺の中には片桐が心配だという心境がない。

直樹はこの日、この後の時間をノミヤの集金に当てることにした。

昨日はそのまま事務所に戻ることなく、部屋に帰った。

事務所に入入りするようになって、まだそれほどの月日を過ごしていない直樹。

それに加え、組内に親しい相手がいなかったため大抵の事情は耳に入  
て来ない。

ただ、理解しきれていない直樹にも推測することはできた。

今回のことはおそらく、大きな抗争になるのだらうと。

昨日は逃れられたが、そのうち必ず巻き込まれる。

2人で500万貯めないといけない。

その課題が大きく押し掛かる。

どうしようか。

どうするべきか。

直樹はいろいろと考えた末、いったん東に取り込んでもらおうという  
方法を思いついた。

今からすぐに東のところへ行つて、しばらく東さんの元で勉強がし  
たいとも言えは、傍に置いてくれるんじゃないか。

…昨日の東との話の内容を思い出す。

口なんてものは右だらうか左だらうかが、いくらでも回せられる。

卑怯だらうか何だらうかが、転がしてみせる。

直樹はこの日の朝、今まさに抗争が始まるうとしている片桐の元で  
はなく、東のところへと向かうことにした。

このビルはいつも何故か緊張することが多い。

早足に入り、早足に出る。  
そんなことが多い。

今日の直樹はいつにも増して、まるで走るようなスピードでビルに入り、東の部屋へと向かっている。

いつものように煙に巻かれるかもしれない。  
それらも想定して、四方八方へ嘘を考える。

東の部屋の扉の前に立ったとき、直樹の思案はこれで行けるだろうというところまでまとまっていた。

ドアを二度ノックすると、中から「はい」という返事。

直樹はまた、ドアも急ぎ乱暴に開ける。

バンツと開いたドアの勢いに、東が少し驚いたような顔でこちらを向いた。

「おー、秋月くん。どうしたんや？」

直樹には周りを見渡す余裕はない。

息を切らせ、

「東さん、あのですね」

そこまで言って、直樹は気づく。

お付きの男以外にもう1人、ソファに座っている人間。

瞬間、固まってしまった。

血の気が引き、顔面から体温がなくなっていくような気がした。

……そこにいたのは、片桐。

彼はゆっくりと直樹の方を振り返る。

他意があるのかないのか、その目は直樹を睨んでいるようにも見え  
た。

まったく頭を掠りもしなかった、この事態。

顎は動くが、声が出ない。

この予想外の展開で、直樹がここに来るまでにしてきたシミュレーションは、全てご破算になる。

立ち尽くす直樹に東が、

「今日は呼んだ覚えはないんやけどね。どうしたんや、慌てて。随分顔色も悪いみたいやし、……私に言うてみるか？」

「あ……イヤ、……あのですね……昨日、聞かせていただいた話が……」

口ごもってしまった。

当然といえば当然、この場で話せることなどゼロに等しい。

そんな直樹を無視するかのようになり、片桐は東に向き直り、話し始める。

「ほんならオヤジ、頼むで。ワシも穂積んトコとはようケンカせん。アンタも困るやろ」

「……まったく、しょうがないね。なんぼ穂積んトコの枝やいうてもお前のところとモメると話に行くだろうからな。」

分かったよ。私から連絡しとくから、今晚接待でも何でもしときなさい。……フッ……」

大きく溜息を吐きながら、椅子の背に凭れ掛かる東。2人が何の話をしているのか、直樹には分からない。

耳に、頭に入れておかなければならない話なのかも分からないでいる。

「ほんなら頼みますわ。ワシ、帰りますんで」  
そう言うと、片桐は席を立った。

そのまま直樹に歩み寄る。

そうして、すれ違うギリギリで、

「お前、何でこんなトコおるんじゃ？大事な仕事あるやろ。今晚8時からな、いつもの料亭に予約入れとけ。帰るぞ」

「……」

放心状態の直樹。

楽しみにしていた今日に、ケチをつけられたところの騒ぎではない。更に、今ここに自分がある。

これが怪しまれるべき行動以外の何物でもないということを、当然理解する。

帰るぞ、という片桐の言葉に「はい」と返事をする直樹。

「アレ？もう帰るんかいな、秋月くん」

東の言葉にも、はいと返事をする。

そうして先に部屋を出た片桐を追うように、直樹も一歩を踏み出した。

ここに来たときの足取りとは違い、とてつもなく自分の足が重く感じる。

そこへ東が近づいてきた。

「言えへんことは私が聞くよ。でもねえ、私らの世界、ビビッたら終わりやで？引いたら終わりなんやで？

更にもう一つ言うところか。……死んだら、終わりやで」

東のその言葉に、返事も忘れる直樹。

挨拶もせずに部屋を出た。

扉を閉めて歩き出そうとしたすぐそこに、片桐が待ち構えていた。

「まあ、ちよつとな。デツカイ所に目エ付けられたんや。ワシも必死やからな。あっちこつちから恨み買うつとる。

ウチのオヤジも、アソコにかかってしもうたら形無しや。ゼ二積んで許してもらうわ。帰るぞ」

虚ろな頭で片桐の言葉を聞いている。

その表情に、片桐はもう一度、

「……帰るぞ。どうする？」

冷たく冷え切った顔をぶら下げ、直樹は片桐の後をついて行く。

……そうするしか、なかった。

事務所に着き、片桐に言われた通り、いつも使う高級料亭に予約を入れた。

今回のことで、事務所にいるのは電話番のみ。

……ここで逃げたら500万……  
そのことしか頭になかった。

いつまで経っても、先ほどの血の気が戻らない。

直樹は駆け込んだトイレで何度も吐き戻す。

足取りも戻らない。

思考も働かない。

そんな直樹の顔を見て、電話番号の男が声を掛けてきた。

「何やお前、その顔。真っ青やないか。どっか悪いんか？」

「……………」

「どうも片桐さん狙ってるヤツら、本気みたいだな。夜に何か用事があるから、それまでどっか隠れとく言うとした。

仕事せんとして怒られるかもしれんけど、お前病院行ってきた方が

エエぞ、ソレ」

…………… 名案だと思った。

「…………… すいません。ちょっとほんまにマズイみたいなんで、病院行つてきます」

直樹はそう言つて、フラ付く足を引き摺り、事務所を出る。

車を走らせながら、直樹は考える。

今日このまま部屋に帰り、事務所へ戻らなかったとして、明日はどうする？

明後日は？

短期間で大金を作ろうと思えば、この仕事をするしかない。

だけどやっところまで来たのに、あんな抗争なんか巻き込まれて万が一命に関わるようなことになれば……………

生きてきた意味がないような気がする。

心の端の方で、お金は残つて美奈子が手術できるのだからそれでも



いいのかな。

そう思うところもあるが、まだまだ生きていたいという欲望、これが大半を占めている。

その辺を考えると、やはり死んでしまっただけでは意味がない。

明日

明後日

明々後日

……この先、どうする？

そう考えながら、直樹はそのまま部屋へと帰る。

……そうだ。

今日は久しぶりに、3人でごはんを食べるんだ。

自己陶醉すれば、これが立派な『今日事務所へ戻らなかった理由』になる。

そう言い聞かせ、明日・明後日・明々後日のことを考えるのは一度止めにした。

その日の夜、直樹とタケシは美奈子に留守番を頼み、2人でいつもの居酒屋へと出掛けた。

タケシも今日は夕方5時には部屋へ戻っていた。

今日は直樹も飲むかもしれないと、2人は歩いて店へと向かう。

移動の最中、タケシは妙に明るかった。

今日パクに話せば、明日にでも美奈子を病院に連れて行ける。

そのテンションから来るものだろう。

そりゃ嬉しいだろう。

ずっと辛かったんだからな。

そう思い、やけにお喋りなタケシの話に付き合っている。

「多分なあ、パクウはまだ来てへんぞ。アイツはいつつも遅いんや。待ち合わせたらな、ちょびっとだけ遅刻しよんねん」

「ああ、そつかそつか。そういえばそうやな。気づかなかつたよ」

「俺、時間守らんヤツ、めっちゃム力つくんやけどなあ」

「そうやな。時間守るっちゅーのは大事やんな」

「ほんまやで」

こんな他愛のない会話。

パクの文句を言いながらも、笑顔のタケシ。

居酒屋に着き、

「先に何か食べとこつや」

そんな話をしながらのれんを潜ると、中から

「遅いッ!!」

……パクだ。

彼はもうすでにいつもの席に座っている。

「アレ！何でおんねん！？いつつも遅れて来るくせに!!」

「イヤ、思ってたより早くな、帰って来れたから……っていうか、大事な話って何やねん！何や、ビビッてもうて仕事どころじゃないぞ、ほんま！」

パクの前にはすでに空になったビール瓶が1本、転がっていた。

「まあ、座れや」

直樹とタケシは並んで席に着く。

神妙な面持ちでもない直樹とタケシを見て、パクは言った。

「何や、様子見たら重たーい話でもないみたいやな。エエ話やったらそれに越したことはないんやけど。」

まあ、まず何か頼めや。食べながら聞くわ」

2人は店員を呼び、適当に料理を注文する。

そして店員が去ったこのタイミングで、直樹はパクに話しかけた。

「パクウ、お前今、いくら貯まつてる？コレ大事なトコロ。いくら貯まつた？」

直樹の突然の問いに、少し驚いた様子のパク、

「お、おう。結構貯まつてんで」

そう言い、タケシをチラチラと見て様子を窺う。

直樹とパクの間では、タケシの前でお金の話をするのはどこかでタブーになっていたところがあった。

「イヤ、パクウな、もう気にせんでエエねん。了解済みや」

「ハア？何やソレ」

とにかく今回の話はタケシの口からは言いにくかろうと、直樹は昨日からパクに伝えなければならぬこと全てを用意していた。

パクの預貯金も合わせ、美奈子の手術代に必要な金額まで到達したこと。

自分がどういう方法でお金を貯めたかということ。

手術後、パクに美奈子を預けなければならぬということ。

自分とタケシは何年か、住所不定の形でどこかに隠れなければならぬこと。

それらを、順を追って説明して行く。

黙ったまま全ての話を聞き終えたパクは、更に沈黙を続けた。

2人は揃って、パクの言葉を待っている。

直樹は自分の所業をどんな風にパクに怒られるのかと、ドキドキしている。

タケシはタケシで、直樹に無茶をさせたことを申し訳なく思っているのだろう、直樹と同じように俯いている。

……何秒かの、何分かの無言が居た堪れない。

沈黙の途中、テーブルに当たったパクの膝がガンツと音を立て、2人はビクツと肩を竦ませた。

「…あ、ごめんごめん」

怒られるのを覚悟で、全て話した。

しかしパクの顔はそれほど怒っているようには見えない。しばらくして、やっとパクが口を開いた。

「……そっか。タケシ、……良かったなあ。そうと決まったら、明

日でも病院行かな。俺、明日仕事休むから、金持って行くことや、病院。……そっか……そっか……」

「……正直な、金貯めよるいうても、このペースやったらいつになんねん思うつったんよ。早よせな、いつかな、美奈子にそんな時が来る思つてな。……良かったわ」

そのパクの言葉を聞きながら、一度顔を上げたタケシも再び下を向く。

何と表現すべきなのか。  
間を漂うこの雰囲気。

喜んだ方が良いに決まっているのだが、2人の中で美奈子のことがどれだけの比重を占めていたのか、この様子で窺い知れた。

良かった、ばかりを繰り返すパク。  
返事に困るタケシ。

直樹もまた、良かったと声を出したい思いで2人を見つめている。

やがてパクがパンツと膝を叩いた。

「ほんならコレ、前祝やな。めっちゃ久しぶりちゃうか、3人で外で会っの」

「そうだな。俺は2人とは会ってるけど、3人同時に会っのはな、久しぶりやな」

「俺に関しちゃ、タケシの顔見るのも久しぶりのような気がするわ。今日はもうこの後何もないんやろ？飲もうや。」

直樹、お前も今日は酒はエエとか言つとらんで、ちよつとでエエから飲め。なあ？」

「よし、分かった。歩けんようになったらアカンから、ちよつとだけな」

「よし！タケシも飲め！」

パクはそう言って、ビールジョッキをタケシに突き出す。

「お、おう」

3人は笑顔で酒を酌み交わす。

とても良い時間だった。

このときばかりは心配事や面倒臭いことは、全て忘れていられたのだ。

### さよなら 3

「何かなー、今日は嬉しすぎて酔えんような気がするな、コレ！」  
パクはどんどんビールを空けて行く。  
タケシも終始笑顔で相手をしている。

直樹は1人で顔を真っ赤にし、2人に合わせて笑っている。

「やっぱり俺、酒ってダメだな。コップ半分しか飲んでないのに。  
体質があんねやるな。飲める飲めないっていう」

いつもなら、酒の1杯や2杯飲めんでどうするんや！？と言うパク。  
それを咎めるタケシ。

そんな図になるのだが、今日はそんな話にはならない。

3人でこの上なく楽しい酒を飲んでいる。

……ただ一つ、直樹の中で引掛かっていたのは、美奈子の手術の成功率。

手術したからといって必ず治るわけではない。

直樹はそれを知っていたが、しかし敢えてそのことは口にすまいと決めた。

「まあ、今日は『良かった』をもう5年分言ったかもしれんなあ。  
ほんまに良かった！！」

……それはエエんや。けどな」

急に機嫌の温度を下げたパクが、直樹を睨むように見ている。

「結果は結果としてやな、ま、金が出来たのは良かった。せやけど  
な直樹！俺は聞いてないぞ！？お前がヤー なんかやってるなんて  
な！！」

ここでパクのスイッチが入り、いつもはタケシと揉めているその先  
が直樹の方に向く。

「……あ、イヤ、……言いにくくてな……ごめん」

「ごめんやないぞお前！！道理で最近、コンビニにおらん思ったんや！転職したんならお前から教えてくれる思ったからな、聞かへんかったけどよう！」

持っていた箸を置き、少し姿勢を正してパクの言い分を聞く直樹。そこへタケシが割って入った。

「あんなあ、秋月な。コイツな、タバコ1個買つんでもわざわざ遠出して、お前のコンビニへ行つとったんや。」

俺はほら、家で会うから、何かな、恥ずかしゅうてたまにしか行かんかったけど。コイツ、お前おらん時でもほぼ毎日あのコンビニへ買物に行つとったんやぞ。何か言うことあるんちゃうん？」

そこでパクは照れくさそうに、タケシの言葉を制した。

「あ　　ッ！そんなんはエエねん！そんなんはエエねんけどな、一応心配しとったワケよ。ほんでお前、俺が知らなんだだけでやな、心配的中とするやないか！無茶しやがって！」

……素直に、一片の濁りもなく嬉しく思った。

冷静になって自分の状況も考えてみたとき、

会話が減ればつまらなく、無視されたら悲しく、忘れられたら自分を消したくなる。

冷静にならなければ至らないその部分で、自分が気にもしていない自分が考えもしなかったところを人に心配してもらえていたと。

ただ、嬉しかった。

「じゃあアレやな。さっきの話からすると俺だけが知らなんだんじやなくて、タケシも知らなんだんやな？……ま、ヒイキなしならエエんやけどよ。」

ただな、もう無茶すんなよ？」

そしてパクは直樹の肩をポンと叩いた。

「……あ、2人も、ほんとにごめんな」

自分のことで「ごめん」と言うのは厚かましいかとも思ったが、2人の言い分に甘えることにした。

涙腺の辺りがじわりとしたが、その辺は我慢しよう。

「ほんなら、もう2人とモヤー　なんて辞めてしもつてエエわけやな」

パクの言葉に、少し黙る2人。

「……何や、まだ続ける気でおるん？」

「だからさつきも説明したようにな、2人で隠れて生活せなアカンねん。ほんとに籠もつとかんと、絶対に見つけられるんや」

「そんなもん、わざわざ探しゃせんやろ。コツコツちよつとずつ働いて生活したらエエやないか。隠れるにしてもよう」

それがままならないことを、2人はよく知っていた。

「……無理なんや」

タケシが言う。

「俺、1個デカイ仕事言われてんやけど、コレやるとな、捕まっつまうからな」

それを聞き、直樹が反応する。

「お前、バカか！ここに来て鉄砲玉なんか…ッ」

声を荒げた直樹に、更にかぶせるようにパクが詰め寄る。

「鉄砲玉ツ！？アホか！お前何考えとんねんツ！？それもアイツに言われたんか！？あの、何や、梶とかいうアイツか！？」

「イヤ、梶さんはそんなん言わんよ。もう1個上におる新宅さんっていうのがな…」

ここで、直樹が聞こうとしたことを先にパクが尋ねた。

「何や、組の抗争で誰か殺つて来い言われてんのか！？どついうヤツや！？どつかの組のエライさんか！？」

「イヤ、それがな、相手は知らんねん」

「……」

そついうものなのか？と思つた。

今まさに、直樹が所属する組で展開されているあの辺は、そついういい加減なこと……

確立されているといえ、金銭・面子つてとこだらう。

あんなものはいくら汚れていたつて構わない。



そう思う俺がおかしいのか？  
そんなことを思ってしまう。

タケシの言葉を聞き、呆れたようにパクが言う。

「あの辺のルールなんて、俺にやよう分からへんけどよう。何が悲しゅうて、見も知らんヤツ殺して刑務所入らなアカンねん。」

刑務所ならまだマシやる。下手すりゃその場で殺されるやないか。

まったく！シラけせんや！やっぱりお前は頭が悪すぎる！」

「イヤイヤイヤ！言うてみただけやねん。なんぼ頑張ってもな、あんまり金が貯まらんからよう。一昨日まで、ほんまにそうせなアカン思うててん。」

せやけど、もうせんよ。あともうちよつと辛抱して、組の仕事して、秋月と2人で金貯めて、……な」

直樹はそれに「うん」と返事をした。

それを聞き、その空気を切るかのようにパクが、

「よつしゃ！ほんならもう頭の悪いことは喋るなよ？今日はとことん楽しいなかつたらアカンねん！」

それに対しても、直樹は返事をする。

「そうだよ。今日は楽しないと！」

その時、不意にタケシが直樹を見た。

「何か、俺よう、美奈子が手術できる思うたら氣イ抜けそうなんやけどな。でも、隠れて乗り切って、その後は今度は秋月やな」

「……え？俺？」

タケシが何のことを言っているのか、直樹には分からない。

するとパクも、当然のことのように話し出した。

「学校やないか、学校！お前の学校や！俺、まあよう分からへんけど学費というのが要るやないか。今度は俺らがお前の学費用意するか。お前はなんぼオツサンになつても学校を卒業しろ。前からタケシと言つとつたんや。あの学校中退するなんて、あっちゃーならんいうてな」

……自分のことは置き去りに

というのはまた、おこがましい。

でもそんなこと、コッチに来てから一度も考えたことがなかった。忘れていたに等しい。

それなのに。

……2人はちゃんと知ってくれていて、覚えてくれて、考えていてくれた。

今度ばかりは、先ほど堪えたものが抑えられない。

直樹はまた、2人の前でぼろぼろと泣き出してしまった。

「何やねん！お前、よう泣くなあ」

その言葉に、直樹は今こみ上げ、抑えられなかったものを隠そうとする。

「な、泣いてへんわッ！酒がやな…ッ」

目元をごしごし擦りながら下を向いている直樹に、タケシが言う。

「ウチのことが先で悪いんやけどな。何年後になるか分からへんけど、ちゃんと学校行こうな」

直樹はそれに、無言で肯く。

「おう、今タケシがエエこと言うとるで。オッサン大学生でも構わんやないか。

だからな、直樹。お前もようけえようけえ黙つとらんで、何かあったらすぐ言えよ？俺は自称『でけへんことはない男』やからな」

パクのその言葉にも声を出すことができず、直樹は肯いた。

うんうん、と、何度も何度も。

今日午前中に起こったあの心配事や怯えや澀んだもの全てが、1年も2年も前だったかのように思えるほど、この時間にいるんなものを得たような気がする。

良いものしか得ることがなかった。

そんな、代えがたい時間。

美奈子も含めた自分たち4人が、今後上々にやっていければという確信を確認したような、そんな時間だった。

ひとしきり楽しんだ後、3人は店を出た。

タケシの部屋で飲み直そうという話になり、彼らはマンションへと歩き出す。

「タケシ、お前、女は？」

「イヤ、おらへんよ」

「直樹は？」

「いない、いない」

楽しいついでなのか、話題は開けっぴろげなものになって行く。

会話の最中、美奈子に告白されたことが口から出そうになったが、飲み込んだ。

タケシの機嫌が悪くなるんじゃないかと、そんな気がしたから。

下らない会話を続けながら、直樹はいつものように聞き役に回る。

先日俺がしたヘマの後、タケシの組がどうなったのか聞くのも忘れていたし……

それと、もっと以前をほじくり出し、実際のところお前はお父さんとお母さんのことをどういう風に考えているのか。

何故かこのタイミングで、そんな質問が頭を巡る。

これまでタブーであった辺り。

できれば参考に、とも考えていたが。

……まあ、その辺は追々ゆっくりと話す機会があるだろう。

3人で喋りながら、そんなことを考えていた。

そのうち街灯も少なく、人通りも少ない裏道に差し掛かったとき、パクが不意に足を止めた。

「……なあ、お前らな、キャバクラって行ったことあるか？」

それに対してまず答えたのは、タケシ。

「何回もあるで。ある言うても遊びとちゃうで。仕事でやで」

直樹も、タケシと同様の答えを返す。

「ハア!? 何やねん、まつたく! ヤー がよ! …… なあ、ああいう  
トコってメツチャ金取るん?」

「まあ、ピンからキリまでやな。高ツけエトコは高エし」

「……俺、一回行ってみたかったんや。こう言うたら何やけど、働  
き出して遊びに行つたーなんてのはほとんどないからなあ。

今日は前祝やし、いつちよ今から行かへんか?」

そのパクの言葉にも、2人は同じ反応をした。

「イヤイヤ、やめとけて」

そう言うタケシの横で直樹も肯く。

「あんなモンな、ボラれるだけやぞ。俺らは裏側から見とるからな。  
アソコでゼニがどうい風回ってるか知ってるからよう。やめと  
いた方がエエで」

それにはパクも言い返す。

「裏か表が知らんけど、お前らは知ってるからエエやないか! 俺は  
知らんのやぞ!? なあー、今日1回だけでエエから連れてってくれ  
やあ。頼むわあ」

ダダを捏ねているような、珍しいパクの姿。

こういついつもと違うパクは初めて見た気がする。

「言うとか、あんなトコ行って金使ってもな、喋ってる内容はお  
前の方がオモロいぞ。もったいないだけや」

そう言うタケシに、直樹は言った。

「……まあ、エエんちゃう? タケシの知ってる店へよう、連れてつ  
てやったら安く済むんじゃないん?」

「うーん……」

首を傾げるタケシだったが、

「……よっしゃ、分かった! じゃあ今日だけ、1回行ってみるか」  
それを聞いたパクは「よっしゃー!」とはしゃぐ。

「それやったらアレやな、美奈子にちよつと遅なるって電話しとか  
なアカンな! この辺に公衆電話あつたっけ?

ほんで俺、タクシー捕まえてくるから、ちよつとココで待つとれよ

！  
「そうしてパクは大通りの方へ走り出した。  
何だか今日のパクウはらしくなかった。  
何でここで待たなきゃいけないんだ？  
タクシーに乗るんやったら、俺らもついて行かなきゃいけないじゃないか。」

直樹とタケシはゆっくりと、パクを追うように歩き出す。  
そして数歩も歩かないうちに、タケシが実々にこやかに直樹に話しかけてきた。

「秋月な、実はな、俺、前から聞かされとったんやけど、美奈子がなあ……お前にホレまくってんねん」  
それを聞き、ドキツとした。

知っていたのかと、あからさまに動揺してしまう。  
「何かスマンな。アイツ、お前に何も言うてない思うけど、そういうことらしいんよ。悪いけど、何か言うてきたらよ、軽うあしらったってくれや」

「何で謝ってんだ？謝ることなんかないよ。嬉しい以外の何モンでもない話やわ」

……怒られると思ったが、そうではなかった。

「な、アレやな。もし……もしかやで？万が一、俺が美奈子ちゃんと一緒になつたりしたら、俺らも兄弟やんなあ？」

意思の疎通とでも言おうか。  
ここで2人きりで話したいことがあるような気がして、2人の歩幅は次第に小さくなる。

なるべくパクに追いつかないように、ゆっくり、  
ゆっくりと。

こんな、美奈子を飛び越えた話をして彼女に失礼かと思つたし、それに対してタケシに怒られるんじゃないかとも思つた。  
しかしタケシの答えは、

「おう！エエね、ソレ。エエな、ソレ！」  
だろ？という思いを込め、直樹は満面の笑みでタケシに肯いて見せる。

「俺もお前も、待つとられんかったわな。

親が帰ってくるのを。親が迎えに来るのを。

しらばっくれてやってきたけど、正直エグかったー…。お前も俺も、な。

そやな。失くなったんやったら、作ればエエねん。……そやな」

つくればいい。

そんな風に考えたことはなかった。

父の教育の賜物で出来上がった俺は、教育というものをアレしか知らない。

きっと俺も、同じようにする。

それしか知らないのだから。

そう考えると、自分が家庭を作るということに、恐れすら覚えていた。

でも、タケシが言うといやに簡単に聞こえる。

そやな。

そう簡単に言うタケシが、やっぱり立派に見えた瞬間だった。

「足し算引き算で言うてんちゃうで。せやけどな、お前には昔っからいっぱいいっぱい借りがあから、近くにおってくれた方がエエねん。ちよつとずつでも返さんとな。これからも世話するし、これからも世話になるで」

これから先

未来のこと

タケシの口から語られるその暗示は、直樹にとって胸が震えるほど

嬉しく、幸せな言葉だった。

14歳だったあの日を思い出した。

目の前に突如として現われた、2人の少年。

直樹を変えた初めての、そして恐らく最後の 友達。

2人が歩いていた道の左手には、公園が見えていた。

直樹に言い終えた後、タケシは両手を上着のポケットに突っ込んだまま、小走りに公園の中へと入って行った。

タケシが走って行く先、直樹の立つ場から対角線の方に公衆トイレが見える。

何だ、トイレか。

タケシは公園を斜めに突っ切って行く。

直樹は立ち止まり、タケシを待つことにした。

……その時。

暗く狭い路地だというのに、直樹の右側を猛スピードで走り去って行った1台の車。

危ねえな…。

そう思うのと同時に、直樹はその車に違和感を覚えた。

この仕事を始めてから、影で隠れるように個人の仕事をしている直樹は、仕事先で会った人の顔・名前、そして車のナンバーを覚える癖がついていた。

そして今、直樹を追い越して行った車のナンバー。

それは、直樹の組に所属する高橋という男の車のナンバーだったのだ。

しかし視界に映ったのは瞬間的なものだったので、直樹はここではアレ？という短い感想のみを持った。

車は直樹を追い抜いた後、猛スピードのまま公園に沿った道路を直角に曲がる。

左側に。

タイヤの音を鳴らしながら。

直樹はただ、高橋の車が走って行くのを目で追いかける。

その視線の先で、車は突然キキキッ！という甲高い音を響かせ、急停車した。

と同時に、

パンッ！！！！

パンッ！！

パンッ！！

パンッ！！！！

以前にも聞いたことのある音が4回、木霊する。

ぼんやりと街灯に照らされた車の窓から、火花が見えた。

数秒も経たぬ間に、車はその場から急発進し、走り去る。

車を、その一部始終をじっと見つめていた直樹。

何が起こったのか考えることもせず、視線を少し左にずらした。

その先に、確認できる人影が、1つ。

走れ、と体に命じる前に、直樹はゆっくりと足を一步前へ出す。

一步

もう一步

横たわるその人影から視線を逸らすことなく、直樹は地を蹴りその場から走り出した。



……そんなわけない  
そんなわけない

ええ？

いや、

違う

タケシじゃない

タケシなわけない

違う

タケシじゃないよな

タケシじゃないよな

全速力で駆けながらそののみを信じ、何度も何度も自分に言い聞かせる。

倒れている人影を間近で確認し、……意とは反する言葉がもう、口から出てしまっていた。

「タケシッ!？」

「タケシ!!!」

飛びつくように、横たわった人影に掴みかかった。

うつ伏せている体を引っ繰り返す。

抱き起こす。

辛うじて届く街灯の暗い光に照らされたその顔は、見間違っこともない、  
タケシ。

「タケシッ!!!タケシィッ!!!」



生温かい液体が自分のジーンズを伝い、足首まで流れて行くのが分かった。

「アア　　ッ！マズイマズイ、マズイ！！」

直樹はそう叫び、血液が噴き出している胸元の2箇所を手で押さえつけるように握り締める。

「痛いかもしれんけど、我慢せえよ！」

そして、自分の視界に入らなかったタケシの左側を覗き込んだ。

暗い陰で気づかなかったが、こめかみの辺りが溝を掘ったように抉れ、そこから音を立てんばかりに血が流れ出している。

「あー！アカン！！タケシ、手が足りん！！お前も手エ出して、自分の頭押さえろ！！」

直樹は、上着のポケットに突っ込まれたままのタケシの左腕を引っ張り出した。

同時にポケットの中から滑り落ちたのは、タバコとジッポイ。

それと同じようにタケシの左手はだらんと、重力に逆らうことなく地面に落ちる。

「おいおいおい！！腕が足りん言うてるやる！？へタばるな！！自分で頭押さえろ！！」

目を開き、口を動かし、こちらに視線を送ってくるタケシを、直樹は信じ続ける。

「……タケシ、タケシ、」

直樹は自分の鼓動と反比例するように、できるだけやさしくタケシの名前を呼んだ。

「タケシ、……タケシ」

闇に紛れ込むように、タケシを抱きかかえている直樹。

応援のレベルではないその呼びかけに逆らうのは、タケシの鼓動。

ゆっくり

ゆっくりと、間違いなく、この世を去ろうとしている、タケシの鼓動。

何か言いたそうに、ずっと口を動かし続けるタケシに対し、ここで

直樹は思考を切り替えた。

声としては聞こえない、そのタケシの言葉に大きく肯きながら、

「うん、…うん、…うん、うん」

繰り返し繰り返し、そう返事をし続けた。

そのうち、タケシの口の動きが止まる。

…直樹は思うのだ。

今日という日が　　、　と。

傷口を押さえるのは、もう止めていた。

タケシを抱えるように抱き締めて、頭を撫で続ける。

人として生まれ、育ったのだから、最期に見るものは笑顔が一番いいに決まっている。

直樹はこの場で、こちらを見つめ続けるタケシに対し、作りではない、今自分が出来うる限りの笑顔で、

肯き、

頭を撫で、

見つめ返す。

…その瞬間がやってきたのは、それから数秒後のことだった。

膝にかかるタケシの重みが一瞬にして増し、辛うじてこちらを見つめていたタケシの視線が1ミリも動かなくなったことに気づいた。

タケシの視線の先に、もう俺はいない。

直樹は笑顔のまま。

もう少し、もう少し、もう少しかと、ずっと笑顔が続いている。

やがて、自分が抱えているこの人物がもう確実にタケシでなくなつたことを確認し、

「クツソ

ツ！！！クツソ

ツ！！！」

ツウガアアああアア

ツ！！！！！」

雄叫びは闇に乗り、闇に紛れて消えて行く。

直樹はそうして、タケシを見送った。

命を止めたタケシを膝に抱えたまま、直樹はその体勢を変えずにいる。

ふと、先ほどタケシのポケットから滑り落ちたタバコとジッポーを拾い上げた。

タバコを1本取り出し、ジッポーで火を点け、煙を吸い込んでみる。

「……………ゲホツ！！ゲホゲホケホツ！！」

……………」

ぼんやりと赤い光が、タケシと直樹を暗闇の中に映し出す。

「……………タケシ。お前、こんなモン吸ってるから早く死んでしまっくんやぞ？」

……………ごめんな。俺はまだ、ソッチへは行けんねん。

1人、……………孤独っていうのは耐え難いものがあるけどな。しばらく我慢しとってくれよ」

直樹はタケシの顔を、食い入るように見つめる。

目を 鼻筋を 唇を

頬の膨らみ

顎の丸み

その顔は、いつまで経っても直樹の視界をぼやけさせはしない。

次第に、公園の周りが騒がしくなり始めた。  
救急車が到着したのだ。

「直樹！！どんなや！？」

こちらに走ってくるパク。

パクに申し訳ないことをしたと思った。

最期を、見届けさせてやれなかった。

パクはタケシに飛びかかり、悲鳴を交えて叫び続ける。

「タケシ！！タケシ！！行けるか！？救急車来たぞ！！タケシ！！

タケシ！！タケシ！！」

「……………」

直樹の中で、パクの絶叫は途中から雑音になった。

この後、自分がやらなければならないことは、もう分かっている。

……タケシとは、もっといろいろと話すべきだったな。

俺の感覚が遮断をし、邪魔をし、話せなかったこと。

諸々。

良きこと。

悪きこと。

普通なこと。

その他、諸々。

あれほど待ち焦がれていた今日が、頼みもしないのに来た、そんな今日になってしまった。

……タケシとは、ここでいったんお別れだ。

叫び続けるパクの姿を、ただじっと見つめている直樹。

タケシの体はタンカに乗せられ、運ばれる。それと並行するように、直樹も歩いてついでに行く。パクは必死にタケシを呼び続ける。公園の周囲では、静かな通りに響き渡った発砲音と救急車の到着で、人だかりが出来始めていた。

直樹の表する『元タケシ』が、救急車に乗せられる。

ここで直樹は救急隊員に問うた。

「この救急車、どこの病院へ行きます？」

「あ、はい、病院です」

それを確認しておきたかった。

タケシが救急車の中に消えるのと同時に、パクも乗り込む。

直樹はその姿を見上げ、呼びかけた。

「パクウ」

返事もなく、こちらを振り返るパク。

その表情とは真逆とも言える涙が、パクの目から溢れ落ちている。

「直樹！何やつとんねん！！早よ乗らんかいッ！！」

直樹はパクから視線を逸らす事なく答える。

「俺は行かない」

「ハアッ！？何言うとんや、お前！！エエから早よ乗れッ！！」

街灯と救急車のランプで、自分の姿に気づいた。

タケシの血が、全身に付着している。

パクの言葉を無視するように、直樹は救急隊員へ早く病院へ向かってくれと指示を出す。

そしてもう一度、パクに向き直った。

「パクウ、ごめん。俺、やることあんねん。

タケシが死……タケシがこんななっただんも、俺のせいかもしれん。だから、俺は行けん」

「ハアツ!? お前、何言うとんや!? お前が何で……ッ」  
自分の言葉に対するパクの返事は求めていなかったし、聞くつもりもなかった。

直樹はパクの隣に横たわるタケシに視線を移す。

もう一つ、ここで言うておきたかったことがある。

「タケシ。ここでいったん、さよならしよう。

さよならだ。

俺、今から行ってくるから。

さよなら

さよなら、タケシ

さよなら!」

「それじゃ、急ぎます!」

救急隊員の声が聞こえた。

「おい直樹ッ!」

パクの声を残し、扉が閉まる。

サイレンを鳴らしながら、救急車は遠ざかって行く。  
その赤いランプを、直樹はじっと見つめ、送り出す。

……いったん、だけどな。

さよならしよう

タケシ



## 咆哮

この人込みの中、直樹に立ち尽くす時間などない。前方からパトランプがこちらに向かってくるのが見える。

直樹は傍で野次馬に乗っていたタクシーを見つけ、すぐさまそれに乗り込んだ。

タクシーの運転手が振り向き、不審そうに直樹の姿を覗き込む。

「……お、お客さん、ソレ……大、大丈夫かいな。血まみれちゃうん?! ちよつと勘弁してほしいんやけど……」

直樹の中で今、このタクシー運転手のための気遣いなど皆無に等しい。

運転席の背中を足でグツと押し、

「タクシー運転手やったら黙って走れ。感じるな。気づくな。アンタは俺に言われた通りに走れ」

その直樹のただならぬ形相と全身血まみれの様子を見て、運転手は慄き、車を発進させる。

直樹はパトカーと擦れ違うようにして、タケシがこの世を去った場所から走り去った。

マンションはすぐそこ。

しかし今、この格好でうろろろするのは致命的。

「次の角、右に曲がって、3つ目の信号で左に曲がったところで停まってや」

運転手にそう告げ、行きにタケシと2人で歩いたその道を眺める。

手のひらに付いたタケシの血が固まり始め、動かすたびにパキパキと割れるような感覚を覚えた。

もうタケシのものではないこの血が固体に変わり、指を擦るとぱらぱらと剥がれ落ちて行く。

……もつたいない気がしていた。  
「……ベートーヴェンの第九か」  
ぼそりと、考え事が口を突く。  
久しぶりに陥るこの感覚。  
送り出すには相応しくないこの曲を、騒音のように頭の中で鳴らし続ける。

……タケシ、聞こえるか。  
人として生まれたものならば、いつ、どのタイミングかは人それぞれであつても、少なくとも一度は死への恐怖を考えることがあるだろう。

実際体験してみて、どうだ？  
そっちはやっぱり暗いのか？  
黒いのか、暗いのか、  
どっちなんだ？

タケシ。  
俺にいい考えがあるんや。  
だから、俺はまだそっちへは行けない。

思い返してみたら、俺は何不自由なく生きてきたんやな。  
どんだけ幸せやったんやろ。

……天国やな。  
天国だったわ、これまで。  
もう十分に体感し、見、味わった。

……今、俺の目の前に黒いものがあるぞ。  
お前の居る場所か？  
敢えて闇と言おうか。

だったら、俺が行かんでどうする。  
隣にも先にも後ろにも、その黒いもの。

……そう。  
闇なんや。

俺が行かねえで、誰が行くよ？

……任せとけ。  
俺に、いい考えがある。

タクシーは目的地へ停まった。  
直樹は1万円を運転手に渡し、お釣りを受け取らずに車から降りる。  
まず向かうのは、美奈子の元。

今、この血まみれの姿を美奈子に見せるわけにはいかない。

直樹はチャイムを鳴らさず合鍵でドアを開け、真っ先に洗面所へと向かった。

手にこびりついたタケシの血を、水で洗い流す。

正面にある鏡で自分の顔を見てみると、首や頬にも固まってしまった血がついている。

それに水を少し付け、溶かすようにして落としていく。

……もう一度、もったいないような気がした。

直樹の今日のいでたちは黒の上着に、黒のジーンズ。

それが幸いした。

血まみれの服も、あまり目立ちはしない。

直樹は肌の血を洗い流すとリビングへ行き、自分のタンスの引き出しから通帳と印鑑を取り出した。

そしてゆっくりと、美奈子の部屋へと向かう。

静かにノックして、先ほどの惨状を声に表さないよう、いつものトーンであるように気をつけた。

「美奈子ちゃん？ちよつといいかな？」

「アレ！？もう帰つとつたん！？」

美奈子は返事をして、自ら部屋のドアを開けた。

……タケシの血が染み込んだ靴下のことを忘れていたが、こちらも幸い色は黒。

直樹はドアが開くのと同時に美奈子の部屋へと入り込み、床の上に正座する。

「美奈子ちゃん、ちよつとここに座って」

「う……うん」

押し殺してはいたが、滲み出るものはある。

これ以上、直樹も自分ではどうすることもできないその雰囲気に、美奈子の戸惑う様子が透けて見えた。

「……秋月くん、どうしたん？」

その問いに、直樹は黙って自分の2冊の通帳と印鑑を差し出す。

美奈子のすぐ目の前に、有無を言わせない圧力でもって。

「美奈子ちゃん……今日な、ちよつと1人でおって。俺ら用事できたんや。

ほんでな、明日必ずパクウが迎えに来るから。ほんでな、暗証番号は表紙の裏に書いてる。そのお金で手術、受けるんやで？」

「……………」

勢いに押されるように、美奈子は直樹が差し出した通帳を手を取った。

「パクウの言うこと、ちゃんと聞いてな。頑張るんやで」

直樹の言葉に、美奈子は顔を上げ、

「……え？手術のとき、一緒におってくれるんちゃうん？秋月くん、言うとつたやん」

やはり、いつもと違う自分がそこに居た。

「あ、そやったな。ごめんごめん。仕事休んでも行くから。でもね、明日は取り合えずパクウが付き添ってくれるから。その通帳、渡しといて」

「う……ん」

「明日、ちよつと出張でね、俺」

直樹の言葉に、美奈子は何も言わず、ゆっくりと肯く。

「じゃあもう遅いから。俺、もう一回ちよつと仕事行って来なアカンから。おやすみね」

美奈子は直樹の雰囲気には押されるように俯いたまま「おやすみ」と返した。

それを聞き、直樹はすぐに美奈子の部屋を出て、再びリビングへと戻る。

そして物音を立てぬよう、テレビの裏に腕を突っ込んだ。

取り出したのは、以前掃除の際に見つけた、あの拳銃。

タオルに包まれたままのそれを上着のポケットに突っ込み、そつとリビングを出る。

玄関に向かい、もう一度自分の靴を履こうとしたとき、直樹は見た。靴の内側が、真っ赤に染まっているのを。

瞬間、全身の至る箇所が逆立つ。

上りかけた血の気のまま、その靴に足を突っ込む。

そうしていざ外に出ようとしたとき、直樹はビクリと体を震わせた。

背中に、人の気配。

振り向くと、そこには俯いたままの美奈子が立っている。

その姿を見た途端、全身の毛から芯が抜ける思いがした。

「……あー、びっくりした！どうしたん、美奈子ちゃん？早く寝ないうと」

「……………」

「ごめんよ。今日は1人なんや。大丈夫やる？鍵、ちゃんとかけていてな？」

そう言った直樹に対し、美奈子が口を開いた。

「……今晚、お兄ちゃんも帰って来んのん？」

「……………うん」

「秋月くんも仕事なん？」

「……………うん」

美奈子は直樹の顔を見ないまま、この場で直樹を問い詰める。

「……………何で？何でさつきみたいない方するん？秋月くん、東京帰るん？私、事情とかよく分からんけど、ちゃんとこつちへ帰って来るんやんねえ？旅行行く約束、したやんねえ？何であんな言い方するん？もう帰って来おへんみたいやんか」

美奈子のその言葉には間髪入れず返事をしなければならぬ。

しかしその嘘は喉元で大きな塊になり、直樹の発声を阻む。

それを無理やり胸まで下げたのと同時に、直樹は全身を振り向かせ、美奈子の前で大きく腕を広げた。

「何言うてんねん、美奈子ちゃん。何や、今日は1人やいうて寂しいのか？何も、……………何にも心配せんでエエよ。怖かったら部屋の全部の電気、点けとつてもエエんやで。」

それとな……………それでも心配なんやったら、ぎゅうしたるからこつちへおいで」

「……………」

美奈子はゆつくりと直樹に歩み寄る。

直樹は広げた両手で、美奈子を包み込むようにその体を抱き締めた。

……………血の匂いがするかもしれねえな。

我慢してくれ。

君の兄貴のモンや。

直樹の腕の中で美奈子は呟く。

「……………ほんまに、どこにも行かへんの？」

そのか細い声に、

「うん。だから、頑張れ」

直樹はそう応えた。

体を治せば社会に出て行ける。

ひよつとすると君が直面し、登ることすらできなかったその城壁以上の問題は、この世界にはないかもしれない。せつかく、せつかく買える命なんだ。

ナメるほど容易くはないから、頑張ってくれ。

幸せになってくれ。

これ以上なく、後ろ髪を引かれる思いがした。

それを断ち切るようにドアを開け、部屋を出る。

居候のまま、見慣れ、住み慣れたこの部屋。

自分を受け入れてくれた、あたたかいその場所。

外に出て、直樹は一つ呟く。

「……ごめんよ。これくらいしか、でけん」

行き先はもう決まっているのだが、その場所に行く前にもう一つ、やらなければならないことがある。

直樹は公衆電話のボックスに入り、先ほど救急隊員から聞いた病院に電話をかけた。

電話に出た病院職員に、救急車に同乗したパクへ繋いでくれるように頼む。

しばらくして電話口に出たパクの声は、衰弱しきっていた。

あの場で、この世にもうタケシがいないことを確信していたのは、直樹だけ。

直樹はその辺りの確認をせず、パクに告げる。

「パクウ、明日な、美奈子ちゃん、ちゃんと迎えに来てくれよ？」

「……………」

「通帳はね、彼女に預けてるから。暗証番号も通帳に書いてるから」

「……………」

パクは黙り込んだまま。

しばらくして、ようやくパクが口を開いた。

『……直樹……、一体どうしたらエエんや。何があって、こうなったんや……。俺は……。俺は、一体どないしたらエエんや……。』

パクの、その憔悴した掠れ声を聞き、直樹はそれに歯向かうように答える。

「……パクウ！パクウ！これまでありがとうな！俺、ちょっと行つて来るよ。だからな、ここでパクウが頑丈じゃないと、皆が困ってしまうんや。美奈子ちゃんのこと、頼むで」

『……お前、行くつてどこへ？』

直樹はその問いに対して返事をせず、話を続ける。

「考えたらな、変わった出会い方やったけど、2人にはほんまに助けてもらうたわ。ありがとう。」

パクウ、俺のこと拾ってくれてありがとう。ちゃんと幸せになつてくれな。それだけが今の俺の願いなんよ。

見つけてくれてありがとう。助けてくれて、ありがとう」

電話の向こうからパクの声が聞こえていたのは分かっていた。

しかし直樹はそれを聞かず、公衆電話の受話器を置く。

聞こえが聞きまいが、もう止まらない。

さつきから聞こえる第九。

こいつももう、止まる必要はない。

直樹はタクシーに乗り込み、行き先を告げ、そこへと向かう。

ヤツの居場所は分かっている。

昼間、俺が電話をしたんだからな。

……たかが紙キレに、タケシは散らされたんか？

片桐、

償ってもらおうぞ……！！



直樹に外の景色を眺める余裕はない。  
俯いたまま。

……人の正義なんてのは、十人十色。  
そいつが持つモノで色・形を変える。  
それは泣きたいくらいに知っている。  
子どもの頃からな。

力のない正義は正義ではない。というよりは、俺から言わせれば、  
いらぬ。

だから、血を流すほど勉強した。

結果が出ないと、泣いて夜を明かした。

この命でな。

思いを噛み締め、それをモノとし、形容、形付けることができるの  
であれば、そこで俺の表する正義というのは完成するぞ。

片桐

お前は今日、この後死んどけ。

建前や何やかんやなんてのは、死んでから考えろ。

俺もそうする。

事由なんて山ほどあるんや。

もう俺は、お前に名乗る名前なんか持ち合わせていない。

愚の骨頂だろうと何だろうと、お前に名乗る名前はもつない。

お前はその後、タケシを追いかけろ。

タクシーは直樹の告げた場所へと到着した。

そこは門構えからしていかにもな、立派な料亭。

昼間、直樹が片桐の指示で予約を取った料亭だ。

奥の店はすでに灯りが落ちており、門の看板だけを小さな電灯が照

らしていた。

この店の営業時間など知らない。

まして、神経が時間を追い越している直樹にとって、現在の時刻など知ったことではない。

直樹は静かにタクシーを降りる。

その目に入ったのは、店の前に停まった1台の高級車。

片桐

片桐

片桐！！！！！

陶醉するかのごとく、直樹は上着の右ポケットに手を突っ込み、一歩一歩車へと近づく。

そこで、その高級車に向かって歩いてくる3つの人影を見つけた。

同時に、先ほど美奈子のお蔭で抑えることのできた、蓄えることのできた血の気が一気に直樹を逆立てる。

直後、全身の力を両の足に込め、走り寄った。

「片桐イイイイイイ ツ！！！！！！」

その怒声に反応し、身構える人影。

……しかし、やはり頭に血が上ると注意力というものが散漫するの  
か。

そついう確率は、少し考えれば十分に、満々とあった筈。

その3つの人影は片桐を含むものではなく、全くの他人だったのだ。

「……ッ！！！！」

彼らが片桐ではないと確認し、つんのめるようにして立ち止まり、  
二呼吸、三呼吸の間、直樹は呆然としてしまった。

その間を見計らい、車の陰に隠れるように伏せていた3つのうちの1つの影が直樹に飛びかかる。

直樹はあっという間にその場で後ろ手に捕らわれ、地面に引き倒された。

更にもう1人が直樹の足を押さえつける。

バ……バカか、俺は……ッ！

どんだけマヌケなんや！

何捕まってるねん！！

呟くにも至らない、直樹のその思考。

「何じゃオノレは！？ウチのオヤジに用か！？アアッ！？ウチの穂積狙うとってタダで済むと思うなよ！！おいコラアッ！ワレエ、どこのモンじゃ！？」

その恫喝は、直樹の脳に届く頃には意味を成さない騒音へと変わっていた。

今、直樹がしているのは、自分への侮辱。

それ以外のことが考えられない。

直樹は地面に押し付けられたまま、もう一つの影を見上げる。

「……アレ？君のこと、どこかで見たことあるなあ。前に一度、会ったことあるよね」

それどころではない直樹だったが、更にその影を凝視する。

……その男、年の頃は40を過ぎたところか。

グレーのスーツに黒縁のメガネ、薄っすら白髪混じりのボサボサ頭。

男は続けて、

「この子はアレやぞ。片桐さんトコの若いモンや。石渡、手エどかしてあげてくれるか」

その遣り取りは、十分に直樹の脳へと届いていた。

「せ、せやけど、オヤジ！このガキッ！」

「イヤイヤイヤ、さつき片桐くって吼えとつたやないか。人違いやろ」

「せやけどなあ！」

「エエから。足もどかしたって」

2人はその男の言う通り、拘束していた手をどけ、直樹を解放した。

「何の用事で来たんや？片桐さんに用事か」

まるで子どもをあやすように、その男は直樹に問う。

返事に詰まる直樹。

今、ここに置かれている滑稽な自分を許せずにいる。

「前に一回会ったことあるやる。覚えてないのかな。ワシ、穂積いんやけどな」

名乗られた人物の顔・名前は忘れないが、一度見かけた程度の顔・名前は覚えていない。

……コイツが穂積？

思考の端に過ぎったその言葉は、しかしすぐに外へと追い出された。直樹はこの場で、9ある片桐への怒りと1ある自分への怒りに蓋をし、ギリギリと押さえつける。

「……片桐は？」

その問いに、穂積はん？と聞き返す。

「片桐、どこ行った？中？店の中？」

ぶつきら棒な直樹の言い方に、穂積以外の2人が怒声を上げた。

「ワレエ！この状況で誰にモノ言つとんじゃッ！？」

「本気でイテまうぞ！！」

その怒声を背中ではりびりと感じてはいるが、直樹は振り向かない。  
「石渡！」

穂積は声のトーンを上げ、そう一喝した。

「少し黙っててくれないか。ワシは今、この彼と喋つとるんや。頼むわ、兄弟」

「……あ、はい。すいません」

一喝と一言でその2人を抑えた穂積。

また直樹に向き直る。

「片桐さんならな、少し前に帰ったで。ん ……何か電話かかってきてな。接待しますー言われてワシ、わざわざ来たんやけどね。」

何や急用できたー言うて、先に帰ってしまったよ

それを聞き、直樹は一気に煮えくり返る。

「ッ何でだッ!?クソオオオオ

ッ!!!」

両手を振り下ろすように、そう叫んだ。

「何でやッ!?

何でやッ!!!

酒飲んどる間にタケシが!!!

お前が酒飲んでる間にタケシが!!!

こつちも酒飲んどつたいうねん!!!

楽しかったんや!!!

ずるい!!!

ずるいじゃねえか!!!

あいつと!!!

あいつらと俺!!!

家族になるんやつたんやぞ!?

そんなことも知らんと!!!

お前のせいで!!!

お前のせいで!!!

直でやったー何だーなんて、関係ないぞ!!!

ブツ殺してやる!!!

片桐イイッ!!!

お前はブツ殺す!!!

お前の幸せって何や!?

奪うことか!?

それ見て笑うことかッ!!!

汚いやろ!!  
やることが!!  
やってることが!!!  
俺を利用したんか!?  
それともたまたまか!!!」  
出せる限りの大声で、直樹は掠じ伏せていた言葉を開放する。  
これまでの葛藤に次ぐ葛藤の末、ここで叫んでも意味のないその言葉を叫び続ける。

「片桐イイイイイイイイ　　ツ!!」  
片桐イイイイイイイ　　ツ!!!」  
直樹の表情は、まるで狂ったようなそれ。  
瞳孔の確認すらままならず、眼球が引つ繰り返るほどの絶叫。  
尋常ならざるその直樹の姿を呆気に取りられて見ている2人と、ただ冷静に見つめている穂積。

ここでこう叫び、吼えてみたところで、自分の中を流れる血液の速度が落ちることはない。  
周りが見えていないわけではない。  
自分を取り巻くこの状況を把握し、自分を囲むこの3人が同業者であることを、鮮明に理解はしている。  
呆気に取りられていた2人のうちの1人が、  
「オヤジ……な、何やコイツ!危ないぞ、車に乗れ!」  
そう言つて、直樹を無視するように車のドアを開けた。  
穂積は首を横に振り、その行為を制して直樹に歩み寄る。  
「……君な、ワシやあ穂積やって名乗ったよな。こういう時は自分の名前も言つもんなんや。分かるやろ?」  
直樹はその言葉を右肩で聞いていた。  
鼓動が治まることをしない。  
自分の意識の中で治めようとしない、とも言う。

胸で、腹で、肩で呼吸をしている直樹に、穂積は続けて言った。

「君んトコの片桐さんがな、ケンカ売つといたくせに勘弁してくれー  
ー言うってお金持って来たよ、さつき。」

ワシヤあ、ソレ見てね、お金やったら自分で稼ぐからよろしいわー  
って返事したんやわ。

ワシらの世界でこんなこと言ったら怒られるんかもしれんけどな、  
ケンカなんかアホらしいなあ。仲良い方が工工に決まったある。

君もそう思うやろ？そう思うんやろ？」

直樹はその言葉を聞き、まだ自制を利かすことのできない今のこの  
体で穂積の顔を見る。

しかし穂積の視線は直樹の視線と合うことなく、何故か自分が今、  
握り締め、隠している上着の右ポケットを見つめていた。

息切れに近い、自分ではこれが何なのか理解できないところにある  
激しい動悸を纏いながら、直樹は穂積の視線を右ポケットからこち  
らに向けようと、じっと睨むようにその顔を見つめ続ける。

……お前も一緒や。

一緒やる？

金！

金！

金！

金！

金！！

きつと世の中、金なんやろな。

アレがあれば、何でも叶うんやろな。

そして、直樹は続けて思う。

俺は、お前らに名乗る名前なんかない、と。

直樹のこの思考が終わると同時に、穂積の視線が直樹の右ポケットから視線へと移った。

「片桐っていうのは危なっかしいねえ。ま、エエンやけどね……」  
それから、穂積はじつと直樹を見つめて言った。

「そんな目エで見んとつてくれるかい？ まったく、ライオンや虎にでもなつたつもりかねえ。捨て犬みたいな顔して」

「……」

この際何にでも噛み付きたいと自分を抑えられないでいる直樹ではあるが、次に出そうとした言葉を咄嗟に飲み込む。

「ワシはね、人にはそれぞれ理由があると思ってるよ。だけどね、それを一々知るうとは思わへん。これくらいなら分かるやる？ 今の君でもね。」

ワシはね、穂積。 会の穂積いうんや。君がもし捨て犬なんやったらな、拾ってやることは可能やと思うよ？ 二度と忘れたらアカンのやで。ワシの顔と名前はな」

穂積は直樹にそう言い終えると、

「石渡、ワシ、お茶漬け食べたい。いつもの店、連れてってくれるか」

「おお、よろしいな」

石渡と呼ばれた男はそう応え、再び車のドアを開けて穂積を招き入れる。

それから、直樹に一言告げた。

「危なっかしいこと考えとらんで、お前も家へ帰れ」  
車は3人を乗せ、その場から去って行く。

…… 向ける矛先のやり場がなかったとは言え、知りもしない人間の方に何%か行ってしまった。

穂積の言葉が、頭の中で螺旋状に繋がる。

捨て犬



父に、肉食で生きるものになれと命じられ、生きてきた。捨て犬だつて肉は食う。

その後、パクにキリンと表された。安全に、健やかに育つた高い部分にある緑を食す、そのための首の長い生き物。

自分で思いつく自分の短所を挙げていくとキリがないが、一つ通り越えたところにあるもので目立つものといえば、無知。

外装に対してぎりぎり許されたのが、内側から触れること。

外に出て、その外装を外側から触れることに許可は得られなかった。そのように、育つた。

だが、そんなものは中学までの話。

その後は、自由に生きたよ。

……今、この状況の中、何故俺が生きていられるかということ、

タケシ。

目標があれば、生きて行けるんだ。

だから少しの間、1人で我慢してくれ。

俺はまだ、死ねない。

片桐の住む家などの詳細は知らない。

片桐の息のかかった者に今、接触するのは賢明ではない。

今日までの経緯。

タケシが金銭を得るために狙えと命じられていたのは、片桐のことだったのだろうか。

今日、俺がタケシと飲んでいることを知って、俺はヤツらに後を尾けられていたのか。

今となつては、そんなことはどうでもいい。

片桐に対する嫌悪感の姿・形を変え、生死を含む憎悪へと変換され

た。

許す許さないを跨ぎ越え、生死の悶着を踏みつける。

片桐

お前の人生、俺が買うてやる。

1円も払えんが、俺が買う。

直樹は静かに、ただ静かに、道路の向こうに事務所を眺めながら待っている。

片桐が事務所にやってくるのを。

事務所の前は物々しい雰囲気になっていた。

タケシを撃った者が自首したのだろう。

抗争の前触れだと、警察官が事務所の前をウロウロしている。

直樹はその様子を道路越しに見つめていた。

自分の身体の労費をただ呼吸のみとし、集中し、留め、電柱の影に隠れながらじっと見つめている。

…… 小学校の…… 1年、2年だったかな……。

月と太陽が同じものだと言っている奴がいた。

同じ星が朝昼は太陽で、夜には月になると。

皆が笑っていたが、俺は笑えなかった。

何て発想をするんだろうと思った。

地球がまだ平面だと思われていた頃、その説を言い張った学者が何人かいた筈だろう。

…… あの時のあの人と同じように、

柔らかく、すり抜けてみせる。

事の後に、元の欠陥だらけのボロい俺に戻っても構わない。

このときばかりは柔軟に、柔らかく

…

……アイツは、パッサパサのモジヤモジヤ頭だった。  
破天荒で、どこまでも無邪気だった。

……あの頃の話だよ。  
『だった』『だった』と、過去の話になってしもたな。

……大丈夫。

随分落ち着いたよ。

さっきはみつともなかったな。  
許してくれよ。

『だった』『だった』じゃなくて、『だよな』と、もう一度言うから。

待っててくれ。

これほどまでに時間の計算をしなかったのは、生まれてこの方なかつただろう。

知らぬ間に時が過ぎ、辺りが明るくなり始めていた。

その頃には、忘れてしまいたいあの光景が、頭の中で何度も何度もリプレイされる。

そして覚えておきたい、思い出したいにも関わらず、タケシが最後に自分に何と言ったのか、思い出せずにいた。

一言一句、間違つことのない形で思い出したいにも関わらず、思い出せずにいた。

やがて、直樹の視界に変化が現われ始める。

警官に警備されたその場に、見慣れた一台の車が横付けされた。その中から降りてくる人物。

片桐。

直樹は隠れていた電柱の影から一歩、前へ出た。  
そしてもう一歩。

怪しまれてはいけない。  
走ることはいらない。

赤信号の横断歩道で立ち止まり、青になるまでの間、考えた。

タケシ、行ってくるわ。

片桐を待ったこの数時間を、直樹は実に有効に使った。

もう叫び声は上げない。

思考の処理も、怒りの向こう側に運ぶことができた。

もうマヌケはしない。

ただあの時から変わっていないのは、目標のみ。

何秒経とうと何分経とうと何時間経とうと、ブレていないのは目的のみ。

直樹はポケットの中の堅い感触を握り締める。

銃弾の確認は済ませた。

撃ったことはないが、撃鉄はもう起こしている。

直樹はそうつとも言わず、いつもと変わらない歩幅と足取りで進み、事務所へと目掛ける。

途中、警察官に混じり事務所を取り囲んでいた組の人間が、何度か直樹に声を掛けてきた。

それを聞くつもりもなかったが、うまい具合に頭に入ってくることもない。

ただ都合が良かったのは、その声が自分をこの組の関係者だと警官に思わせてくれたこと。

直樹は歩く。

片桐から目を逸らすことなく。

そして、片桐から3メートルほど離れた後ろに立ち、この場所がいと心に決めた。

直樹はその背に静かに声を掛ける。

「……片桐さん。」

片桐

その呟くような声に、片桐がふと肩を揺らした。

まだ振り向かない背中に向かって、直樹は続ける。

「タケシ殺したんお前やる？じゃあお前もだろ。……俺も行くから」  
そう言うのと同時に構えたのは、タケシが持っていた拳銃。

もし何かの間違いがあった時、タケシが片桐を撃つはずだった拳銃だ。

「危ないッ！！！」

誰かの声が遠くに聞こえた。

片桐が振り向くのを待つことなく、

ストップモーションに入ったかのように、ゆっくり見えた情景は何故なのか。

俺に向けられている時間が、ゆっくり流れるこの一瞬。

以前、二度ほど体験したことがある。

新幹線に乗ろうとした時、倒れて足を折ったあの時と、車に轢かれ、宙を舞ったときに見た夕日。

直樹は構わず、引き金を引く。

片桐が振り向くのを待つことなく。

そして、その場に響いた音。

それは、カチャンという、直樹にとっては無情でしかない、鉄のぶつかり合う音だった。弾は込められていた。なのにこの拳銃からは、直樹の意志に逆らうように弾が出なかったのだ。

「ッ！！！」

直樹の表情は、ここで一瞬にして崩れていく。歯を食い縛り、水分越しに目に映る片桐の姿が陽炎のように揺れていた。

もう一度撃鉄を起こし、引き金を引く。

……繰り返されたのは、同じ音。

直樹はこの先のことなど、微塵も考えてはいなかったのだ。というより、自分にこの先があるなんて思ってもいなかった。

「おいコラアアアッ！！！」

「取り押さえろッ！！！」  
怒号が飛び交う。

あちこちから発生している喧々囂々を、直樹は遠い耳鳴りの外で聞く。

警察官のいる中、発砲しなかったにしろ、その目の前で銃を出したことが許される筈もない。

その場にいるヤザ、警官が入り乱れ、直樹を背後から押さえつけ、地面に引き倒す。

声が出ぬまま、アスファルトに頬を押し付けられる直樹。

辛うじて首が少し動かせるその視界に、歩み寄ってくる影が見えた。直樹は無理やり首を起こし、それを見上げる。

か た ぎ り

……それを目にした瞬間、直樹は自分の動きの全てを止めた。

片桐は、笑っていた。

この世のものとは思えぬほどの笑顔で。

何も言わない片桐と、ただこの瞬間何も言えない直樹。

そして硬直した視線の端、下卑た笑顔の向こう側に、直樹が見たもの。

まだ蕾の 小さな 桜

毎日この道を通っていたにも関わらず、今まで気づかなかった。

……ずっと、考えていた。

『桜の咲く少し前くらいには今の状況を乗り越え、タケシと2人で

……』

少年の、そして大人びたあの顔が、頭を過ぎった。

逃がしようのない絶叫が体中を駆け巡った。

泣き叫ばんばかりに、血を吐かんばかりにタケシの名を呼ぶ、声に出ない、  
声。

しかし猛り狂うその慟哭は、直樹の表情を僅かも変えることはない。

片桐から目を逸らし、顔を伏せ、直樹は呟く。

「……タケシ、ごめん。… ありがとう」

先ほどまで何度も何度も繰り返した『俺にはこれくらいしかできねえ。ごめんな』

それが、先ほど思い出した俺の最大の欠点、無知が邪魔をし、『俺にはこんなこともできないよ』に変わってしまったよ。

……タケシ。

もうちょっとじゃなく、しばらくの間、待っててくれ。

俺もな、1人が寂しいのは知ってるから。

もうちょっとじゃなく、もうしばらくでごめんやけど、……待っててくれ。

真っ白と真っ黒が、見える筈のない世界として直樹の目の前に現われては消え、現われては消えて行く。

よく晴れたこの日。

鮮やかな青い空に気づくこともなく、直樹はぼんやりと、しかしこれ以上なく鮮明に考える。

あと2週間もすれば、世の中は4月。

新しく始まる季節と表し、やって行けたのに

……

……アア、

タケシガ死ンデシマッ

タ

……

直樹はここで現行犯として逮捕され、その後、法の裁きの下、実刑も加えた罰をその身に背負うことになる。





生きてしまったよ。

例えば俺がそう表したとき、お前ならどう答える？

ミクロな俺は「冗談じゃない」と返事をしてしまつかもしれない。

「あ、そう」

お前はそう返事をするか？

マクロとミクロ。

後者の俺は想像する部分で、そこまでしか至らないんだ。

……拳銃を持って、片桐のところへ行くつもりだったんか？

今となつては真相も分からない。

知ろつとも思わない。

ただ一つ、間違いのないことは、お前が死んでしまったということ。

一度来てみたいと思っていた、この地。

できればお前と、この地で生活をしたいと思っていた。

まさかこういう形で訪れ、観光も自由な食事もできないなんてな。

頭を刈られて、後頭部に大きな傷があることを知ったよ。

あの場所は、何もしなければ褒められる、そんな場所だった。

無事故証なるものがあり、何もしなければそれを受け取る形になる。

そしてそれを繰り返せば、階級のようなものが発生し、身にこびり付く。

あんなものはどっちでも良かったが、俺の素行は良かったらしい。

決して幸いとは言わないが、俺は正式な組員でなかったということ。あの銃は俺のものではなかったことなどを含め、思ったより短い刑期だった。

だがこんな所、居ても何の意味もない。学ぶことなんか一つもなかった。

ただただ昏々と時間が流れて行き、陽気と雰囲気のみで、そうか、正月になったのかと知るような日々とでも言おうか。

俺の癖だった、この記すという行為も、気ままに思い通りには行かない。

何年ぶりだ？と思うと同時に、漢字を忘れている。字が下手になった。

紙とペン、それと以前俺が持っていたであろう権利が備わってさえいれば、忘れもしなかっただろうし、下手にもならなかっただろうし。

……敢えて言うなら、忘れてしまいたいことはたくさんあるというのに。

純粋なものと不純なもの。

これを、何を使ったっていい。掻き混ぜると、いったんは濁るのだから。

時間の経過と共にそれらはまた分かれ、2層になる。

そんな、綺麗に真つ二つになったものにジェラシーを感じないか。

石を投げてみたくはないか。

底に沈殿しているのは、恐らく不純。

石を投げることでその不純が舞い上がり、散々遊んだ後、また棒状のもので掻き混ぜてやる。

不純が舞い上がり、純粋を濁らせて行く。

その様を見て、思い出し笑いのようなものを口に含むんだ。

……お願いだから、お前だけは知っていてくれ。

あの時俺は自分に訊いた。

何か困ることはあるか。

障害は？

その自問に俺は「そんなものはない」と自答した。

そして、お前の隣で眠る俺を鮮明に想像したんだ。

なのに、生きているんだよ……俺は。

何もせずに拘束され、果たすことなく刑期の終了を待った。

お前にだけは話しておかなきゃならないんだ。

「何故生きた？」の自問に俺は、「怖いから」と自答するんだ。

本当の悔しいを知る前に俺は、俺と自答に幻滅した。

お前に言い訳もしようと思う。

この間、俺は何度もアイツの夢を見た。

桜の花びらの舞う中、アイツの顔は屈託のない笑顔だ。

俺はその笑顔に銃を押し付ける。

……だけどな、発砲できない。

しないのではなく、できないんだ。

ここまで話すと間違いなく、お前も俺に幻滅しただろう。

生きている俺に

そう感じている俺に

久しぶりにこうやって記しているが、お前がこれを読むことはないだろう。

読んでいるのは俺だけ。

だからわざわざ知っておいてくれと、言い訳でしかないんだよ。

悪いが、もう少し続けさせてもらおうよ。

中にいると、恐らく外にいるより情報が早い。

アイツはあの後、すぐにこの世を去ったんだ。

お前に切欠を与えた梶さんだ。

司法の裁きを受けることなく、アイツはこの世から消えた。

梶さんが、消した。

お前がこの世を去った時生まれた罪は、いろんな所を回り回って今、梶さんがどこかでその罰を受けている。

俺じゃないんだ。

この期に及んだ俺がこうやって書いてるんだから、間違いない。

俺が受けた罰は、ついででしかなかったよ。

今後、俺はどうすればいい？

お前はと思う？

親からは確実な絶縁を受けたぞ。

俺にはもう、手放してしまつものがない。

売るものがない。

買う力もない。

今のこの俺に「じゃあ心売れるかい？」と言う奴が現われたら、「売る心がありません」と答えるしかない。

……タケシ

俺はもう、『特別』になつてしまった。

もう、戻れないようだ

浮き足立っているような、そんな気分でした。

久しぶりの外の世界というのももちろんなのだが、ここに向かおうという目標がなく、ただふわふわとしているような、そんな足取りと気持ち。

月々何百円という給料で貯めたお金は、この地に来るまでに大分減ってしまっていた。

ここに来たのは、ただ何となく。

以前、自分が所有していた私物を回収するために、今はただ何となくこの地にいる。

『直樹、元気か？病気とかしてへんやろな？』

俺の方は、まあちょっと変わったことがあるって言えばあるし、そんなん人に話さなアカンようなことかって言われたらそうでもないし。

まあ、そんな感じじゃ。

美奈子の方は無事に手術が済んだ。

もう一回、軽めの手術っていうか、何やそんなんがあるらしいけど、それはほんまに検査みたいなもの、大したもんやないらしい。

お前のお蔭で、アイツも順調やぞ。』

直樹はこの手紙に記された住所へと向かっていた。

パクのおばさんに当たる人、その人が自分の荷物を預かってくれていたらしい。

その家を訪れると、年の頃50過ぎくらいの女性が出迎えてくれた。彼女は直樹を家の中へと招き入れ、何かと励ますような言葉を語りかけてくれるが、初対面の人の言葉ということもあってか、それほど直樹の気持ちには触れることはない。

直樹はその言葉に声を出すわけでもなく、ただ頷く。

そして目の前に出された冷たいお茶を一気に飲み干し、荷物を受け取ると逃げるようにその家を後にした。

『手紙なんてもんはチビさんの頃に書いた年賀状以来やから、ヘタ

クソやけど勘弁してくれよ。

お前の荷物やけどな、俺のおばちゃんのところへ預けとる。ついでうのものな、今度俺ら、オヤジの国へ行くことになったんや。

まあ難しいことはアレなんやけどな、会社が生きて行けんでな。

荷物は俺が預かつとくのがエエんやろうけど。

おばちゃんの住所は下へ書いとくから。』

今、季節は夏。

受け取ったカバンを開けると、この時期には必要のない厚手のジャンパーやスーツなどが入っていた。

そして底の方を手で弄ると、キーホルダーとタイガーマスク。

……これについて今、それほど何かを感じることはない。

それから更にその奥に、あの時渡した通帳が2冊、隠れるように入っていた。

あの時自分が願った通り、貯めてあったお金は引き出され、なくなっている。

数字を辿ると、最後に記帳があったのは引き出された日付から約2年後。

パクの名義で12万円振り込まれていた。

カバンの口を閉め、焼け付いた舗装道路の照り返しに目を細めながら、直樹はただ歩く。

……セミの声がうるさい。

中で聞く声と外で聞く声では、また違っているように思えた。

『直樹が今どんな生活をしてるかって考えると、多分俺の想像を絶するもんなんやろうな。

説教臭うなったらアカンから、ちよろつとだけ書いとくよ。

お前が正しいって思ってもな、それはほんまに正しいこととは限らへん。せやけどな、俺は多分文句しか言うてへんと思うねん。決めるのはお前やからな。

お前が頭が工工のはよう知つとるから。  
俺はお前の行動を最終的に決めることなんかできへん。  
ただ文句を言うだけや。だから言えることがあんねん。  
必要ならちゃんと「ゴメン」って言えよ。  
何か感じたら「ありがとう」言えよ。  
この2つ、間違わんとできて人はようやく普通やねん。

何や、回りくどいかもしれんけど、お前んトコの父ちゃん、お前がほんまに必要とすれば応えてくれるような気がすんねん。  
何もお前に、お父ちゃんに謝罪しろ言うてんちゃうねん。  
せやけど、生きるために真実と嘘を使い分けていかなアカン。  
俺は、お前が父ちゃんに謝らなアカンことがあるなんて思うてへんぞ。

ただ、非力でシヨボーもんやが、俺は俺でお前のことを考えよる。』  
直樹はついでを装うわけでもなく、以前パクが住んでいた家のあった場所へ来ていた。

そこにはパクのお母さんがやっていた店もなく、自分が足繁く通っていたあの家もない。  
辺り一面すっかり姿を変え、アスファルトが敷き詰められた駐車場になっていた。

パクが勤めていたパクのお父さんの工場も、小奇麗な白塗りのビルへと様変わりしている。

……よく聞く話だが、あの期間は浦島太郎を育てる期間に思える。  
何か感想を持つわけでもなく、その白いビルをただ見上げてみた。

『それと、俺から言うこつちやないんやろうけど、お前の母さんが亡くなつたらしい。

今回書いた手紙は、これをお前に伝えときたくてな。まあ、俺がせんでもエエんやろうけどな。



人が亡くなるってのは大きなことやな。近ければ、近いほど。ご冥福をお祈りします、って言えばエエんよな？  
ごめんな、アホで。こういうきちとした挨拶みたいなもんがよう分からへんねん。』

……そんなもの……どれだけ遠く、どれだけ近くのことだったのか。永くて短くて、永遠で一瞬。

全てを経た今、ここに立っているのは、空。  
そして、埃。

『それとな、まあついにつちゅーか書いとくけど、俺なあ、美奈子と結婚した。』

今更アイツと結婚ちゅーのはな、ちょっとこっ恥ずかしかつたんやが、1人にするわけにいかんやろ。

アイツのことは俺が一生かけて、不自由のないように何とかしよう思ってる。

まあでも、何やかんやで面倒見てもらってるのは俺のような気もするんやけどな。

……直樹。

俺らはもうその国に住んでないけど、生きとつたらまた会えるよ。俺はそう思ってる。

お前が帰ってくるのを待つべきなのは分かっとなるんやけど、状況がな……。ごめんな。

言うだけやなくて本心で、お前の健康と活躍を心から願ってる。

大林健』

今の直樹にとって、彼らと過ごしたこの地にもう用はない。パクからもらったお金を使い、ここから去ることにした。

先を見据え、割算を繰り返し、急ぐことでもないと判断してできるだけ安値の移動方法を取る。

知っていたことではあった。

分かっていたのだが、目の前に来てようやく目の当たりにしたとでも言おうか。

今、俺には住所がない。

今の自分の立場で、部屋などを借りられるかどうか。

そう思い、試しに不動産屋に聞いてみたのだが、今の自分ではやはり部屋を借りられないということを知り、結果住所のない者に職を与えるようなお気楽な会社も存在しないと思われた。

生きるに当たって、戸籍やら源泉徴収やら住民票やら、自分のそういうものを今まで詳しく見つめたことがなかった。

こんな人間であるというのに、気にしたことともなかった。

考えてみると、俺は1人で何かをやったのけたことなんか一度もなかったんじゃないか。

皆そうなのか？

でも最低限は自分の力で何とかするもんだろ。

俺は手続きの仕方は知っていても、実際に自分で部屋を借りたことすらない。

このハードル、俺の運動神経で何とかなるものなのか？

更に言えば、この先俺の腕力などでは到底破壊できないような屈強な困いが待ち構えているだろうことを思うと、

……嫌になっていた。

あの期間、たくさん読んだ本の中で敢えて選んで読んでいたものは命について書かれた書。

命について書かれている内容であるのに、何故か漠然としてではなく直球で『死』というものが自分の体に覆い被さってくる。

『命』について、『生きる』について書かれているにも関わらず。

何十年後か、はたまた明日なのか。

言ってしまうえば、今日なのか。

その恐怖に向かい合う腕力も、運動神経も、勇気もない俺だから、

……今日も、生きている。

忘れるために、生きている。

そうまで考え、口をついて出た言葉が『嫌になっていた』

俺は一体何をしたいのだろう。

……きつと、何もしたくないのだろう。

長時間の移動を繰り返して到着したのは、以前直樹が父・母・弟と暮らしていた街。

この地に来たからといって、何かができるという確信も考えもなかった。

行く場所がないから、つい。

駅を出て、とある方角へ向かって歩く。

……行く場所がないから、つい。

何を思うわけでもない足取りは、しかしまるで直樹の進む先々に粘着質の何かが付き詰められているのではないかと思えるほど、重い。

やがて着いたのは、以前に自分も住んでいたあの家の前。

外観は変わっていない。

ガレージも変わらない。

ただ外から見ただけでは、この家に今誰が住んでいるのかまでは分からない。

知らないのだから当然だとは自分の中で処理できず、以前自分の部屋であった窓を見上げた。

その眼差しは、自分の中でどの角度から見ても物乞いのように思えた。

背筋だけは伸ばしておくとピンと胸を張ってみるが、自分が送る視

線の形というのは、紛れもなく乞う形。

一体今、何時頃なんだろう。

時計がない。

朝、あの地を出て、ここに着いたのが夜……。  
もう寝る時間なのか。

部屋の灯りが点いて、消えて、……。また点いて。

その回数と同じように、何度も思い出される母の姿。

自分の状況を考慮する前に現われるその姿に一つ、また一つと噛み締めるものが滲み出てくる。

目前の点滅と脳裏の面影、その繰り返される様を数え切れぬほど確認したから、ここに来てもう何時間も経ってしまっているんだろう。直樹はただ当然だと、今から自分のする行為に対し、感想を洩らす。そして、以前自分が住んでいたその家に背を向け、この街を後にした。

……。あの期間、何百回も見たアイツらの夢は、確実に以前のものだった。

アイツは変わらず遅しく、とても大きな声で会話をする。

アイツはとにかく時には大きく、時には小さく、俺に対して説教をする。

知らなければ良かったとは思わないが、知ってさえいなければ、とも思っ。

これまで散々甘えてきたのでこれ以上自分を甘やかすつもりはないのだが、やはりこう辿り着いた以上は今の自分の未熟と、あまりの小ささに当然だと思っ、

……。嫌になったと考える。

有り金が限られていた。

自分のことでありながら全てが億劫になっているような気分ではあるが、その部分は考えていかなければならない。

しかしこの夜、直樹は自分を慰めるように、それなりのホテルに宿泊した。

あれほど求めた自由な時間・生活を、たった2日で持て余している。何もすることのない直樹は部屋に入るとすぐに就寝したが、次の日目が覚めたのはすでにチエックアウトの時間間近。

寝すぎてしまった。

頭が痛エ…。

何年もした規則正しい生活を、俺は忘れようとしているだけなんだ。……きつとそう。

そう言い聞かせ、正午を過ぎた時間に、直樹は自分を癒してくれたであろうそのホテルを出た。

顔も洗ったし歯も磨いたが、髪に櫛を通すのを忘れた。

直樹はそんな姿で人通りの多い道を歩く。

途中コンビニでおにぎりを買い、道端の植え込みのレンガに腰掛け、それを口に入れる。

今の自分の姿を思いながら、おにぎりはやっぱり人が握ったものの方がおいしい、そんな感想しか出て来ない。

やがて、もさもさとただ義務のように食事をしている直樹の目の前に、1台の車が停まった。

黒塗りの4WD。

以前直樹が借りていた車と同じ車種だったので、ひとまず注目する。直樹の視線の先でその車のエンジンが止まり、ドアが開いて5人の男が次々と降りてきた。

おにぎりを頬張りながら、直樹はその様子を何となく、当然のように他人事として眺めている。

そこそこ人の往来がある中、その男たちが

「いたいた。コイツだろ？」

「間違いねえ」

そう話したのが耳に入った。

そして彼らがニヤニヤしながらこちらに向かって歩いてくるのを確認しながらも、直樹はまだその状況を他人事のように、ただ口を動かしながら眺めているだけだった。

「ちよつとお兄さん、いいかなあ？」

そう言い、男たちのうちの1人が直樹の肩を組んで隣に座る。

……この俺の状況で更にこんなことが起こるなんて、などというのは俺しか知らない俺の都合。

この状況を『出くわした』と表しながらも、直樹の頭はまだ呆けている。

敢えて『培った』と表する、以前の感覚は戻っていない。

「お兄さん、今いくら持つてる？正直に言つてよ。俺たち全員金がなくなつてさあ。頼むよー」

「……………」

その男は右腕で直樹の肩を抱きながら、左手で左胸をぐつと押ししてきた。

「何シカトしてんだ？オオツ！？コラ！！」

あとの4人は直樹を囲むように、目の前に立ち塞がっている。

……敢えて視線は逸らしていた。

これだけ人がいる中で、何で俺なんだ？

そう思うのと同時に、

関東弁のこういった威嚇の言葉を初めて聞いたような気がする。

怒気のある言葉というのは、関西弁の方が勢いがあって聞こえるな。直樹は俯いたまま自分の爪先をじつと見つめ、そんなことを考えていた。

「オラ、立てよー！」

直樹は無理やり引き起こされ、5人に連行される。強引に引つ張られながらも、持っていたカバンだけはしっかりと握り締めていた。

通りを抜け、引きずり込まれた路地裏。

そこはいかにも夜の街といった店がたくさん並んでいる通り。

人通りも少ない。

「おいおい、デケエ図体して無抵抗主義か？アーとかウーとか言ったらどうだ？エエツ？！」

突き飛ばされ、閉まったシャッターに衝突して大きな音が響いたが、人通りどころか人の気配すら感じられない。

怒鳴り散らすその男たちの声が、必要以上に大きく聞こえる。

……殴られるなんてのは何年ぶりなのだろう。

あの時以来か。

眠くもなければ腹も減っていない。

それなのに、力が入らない。

直樹はされるがままに、5人がかりで殴打され続けている。

痛みはそこそこ。

大したことない。

アスファルトに寝転がっては引つ張り上げられ、殴られてまた倒れ込む。

この状況に遭遇したのは、きっと俺が持っている何かの原因だろう。だから、何で俺ばっかり、とは決して言わない。

俺ばかりではないことは、十分知ってるからな。

男たちの声が次第に音へと変わって行く。

そして、フツと頭を過ぎった。

このまま終わるのもいいのかもしれない。

どこから流れているのか分からない自分の血液を肌で感じながら、そんなことを思ってみた。

「へえ。荷物つてこれだけか」

1人の男が道端に放られていた直樹のカバンに目を付けた。

「惨めなモンだなあ。こんな小さいカバンで済んでしまう量ってか」  
そう言いながらその場でカバンの口を開け、引っ繰り返して中身を  
地面にばら撒く。

もちろん直樹はその様子を横たわりながら見ていたが、返す言葉が  
思いつかない。

抵抗するための力が出て来ない。

男は散乱した荷物を足で掻き分け、その中から直樹の通帳を見つけ  
出した。

それを手に取り、

「ハハツ！更にゼニもこんだけしか持つてねえよ。ご丁寧に暗証番  
号も書いてるしさあ」

嘲るように言いながら広がった荷物を踏みつけ、こちらに歩み寄っ  
て来る男。

彼は直樹の髪の毛を引っ掴み、顔を引っ張り起こして面白そうに告  
げる。

「また来るからな。アンタが生きてるうちはな」

その言葉を残し、男たちはその場からゾロゾロと立ち去って行った。  
黒い塊が遠ざかっていくのをぼんやりと見つめ、頬でアスファルト  
を感じている直樹はその体勢のまま。

……やる気が出なかった。

アイツら、ヤザなんだろうな。ケンカ慣れしてる。

生きてるうちあって、俺を殺さないように殴ってたな……。

そんなことを考えつつ、散乱した自分の荷物に目を遣る。

と、そこにはいつの間にか1人の女が立っていた。

「大丈夫ですか？」

酒焼けとでも言うんだらうか。少し掠れたような声の、その女。  
直樹を見下ろすように見つめ、こちらに近づいてくる。



「……………」  
更に言葉が出ないでいた直樹。  
言うべき言葉が思いつかない。

その女は倒れている直樹をそのままに、あちこちにばら撒かれた荷物を集め、カバンに詰め込み始めた。

多い量ではない。すぐにその作業を終えると、直樹の傍のシャツタの前にカバンを置いて話しかけてくる。

「救急車呼んだ方がいいですよね？何か触ったら痛そうだし、私はヘタに触らない方がいいですよね。……ごめんなさいね。殴られるの分かってただけけど、怖くて何もできなくて……」

この場で聞くその女の言葉は、直樹の中で雑音にはならなかった。

「イヤ……いいツスよ。こういう場合、近づかない方がいい。警察呼ばれても困るし、病院ももつと困る」

そこまで言つて、直樹は通帳を奪られたことを思い出す。

ポケットの中に入っているお金が、確か2000円ほど。

「…うん。金もないし、病院は困る」

直樹はゆっくりと自分で起き上がると、シャッターに凭れるようにして座り込んだ。

その直樹の姿を見て、女は、

「うわー…！お兄さん何！？スツゴイ男前！ビックリ！！」

感嘆したように声を上げる。

……この状況の俺に対して、何言つてんだコイツは。

そう思つて女を見たが、直樹の内心など知る由もない彼女は更に続ける。

「私、男前には弱くてねえ。ケガの度合いとか分かんないけど、病院行きたくないんでしょ？ウチで手当てしようか。…アソコ。アソコ、私の店」

女の指差した先に、一軒の飲み屋。

声質から年齢の予想がでなかつたが、よく見るとまだ随分と若い。

20代後半…？

自分で店をやったのか。

良し悪しのない感想を思いつつ、直樹は自分の体を確認してみる。  
どこが痛いのか、どこが平気か。

……足首が相当痛い。

折れてはいないが捻挫したようだ。

左手中指の第二関節がかなり深く切れて血が溢れ出している。

あとは、耐えられる程度。

直樹は立ち上がり、その女に向かって、

「イヤ、結構ツスよ。……関わらない方がいい」

そう一言言っただけカバンを持ち、足を引き摺りながらその場から立ち去る。

どんな小さな形でも、俺は良しと思う形で人と接さない方がいい。  
思えば思うほど、後で後悔する。

……いい加減、学習した。

「ちょっとー、お兄さん！私、この店にいるからね！いつでもおい  
でよー！」

背中でのその声を聞きながら、考え事をしている。

しかし、先ほど聞こえてきたはずの男たちの会話。

これについては考えられずにいた。

足は引き摺るほどに痛かった。

左手の指が次第にドクドクと痛みの音を鳴らしだす。

……さっきの人に、早速お礼を言うのを忘れたな。

直樹は行き先のない方向に足を揺らしながら歩く。

いきなり起こったこの出来事に、腹も立たずにいた。

『ありがとう』なんて、難しくも何ともないのに……。

まああの状況なら、あの人も理解してくれるだろ。

……このままこうやって生きて行かなきゃいけないのなら、もう一度刑務所に行った方がいいんじゃないのか。

食べて行けず、軽犯罪を繰り返し、わざと刑務所に入り、一生を刑務所で終える人がいると聞いたことがある。

俺もそうなりたいのか……？

臭いメシとは聞いたことがあるけれど、あのマズイ食事は匂いすらおかしいように思えた。

ないよりマシという程度。

あそこにまた、帰るのか……？

引き摺る足は何のアピールでもない。

痛みの事実。

直樹は目先の方向すら見えないでいる。

やがて、どれだけでも歩かないうちに、直樹の背中にヒールの駆ける足音が聞こえてきた。

続いて、あのしゃがれたような声。

「ちよつとー！お兄さん！お兄さん……！」

金色に近い明るい髪を揺らして走ってきたのは、先ほどの女。

「やっぱりちょっと手当てした方がいいよ。救急箱持ってきたからさ」

「……………」  
振り向いた体勢のまま、直樹はその女の顔をじっと見つめた。さつき難しくないと表した『ありがとう』という言葉が、またなかなか出て来ない。

タイミングの問題なのかそれとも心境なのか、掴めないでいる心地。「さ、あのベンチに座って。早く消毒した方がいいよ」  
女が指差したのは、市営住宅の敷地内にある広場のベンチ。

人の情に触れようという心持ちではなかったが、ここまで走ってきてくれた彼女を見、思い、直樹は促されるまま流されるように彼女の手当てを受ける。

足首に湿布を貼り、その上からサポーターをはめてもらった。左手の指は消毒の後、ガーゼを当て、包帯で大袈裟に巻いてもらった。

「えーっと、湿布と消毒液と包帯、カバンに入れとくからね」

「……………」  
単なる通りすがりの人から受ける親切に、不思議な気分を味わう。一体コイツは何なんだろう。

見ず知らずの俺に。

「……………いいんスカ？ もらっちゃって」

「いいよいいよ、これくらい。こまめに替えなきゃダメよ」

「……………」  
直樹は彼女の顔と全身を見て一つ思うことがあったが、口には出さなかった。

……………彼女のことを微塵も知ろうとは思わない。

「ねえ、ウチどこ？ 1人で帰れる？」

その問いに直樹は少し間を置いて、

「……………イヤ、ないッス。……………家はないです」  
そう応える。

「家ないってどういうこと？行くト」ないの？」  
肯く直樹。

「……………」  
「……………」

しばらく沈黙が流れたが、やがて彼女は立ち上がり、直樹を見て言った。

「ねえ、ウチ来る？」

その言葉に、直樹はまず自分を疑う。

何で今、ウチに来るかと言われたんだ？

こんな状況の俺に。

何で、ウチ来る？なんて言われたんだ……………？

直樹は彼女を見ることなく俯いたまま「何で？」と小さく問うた。  
すると彼女は、そんな直樹の膝に手をぽんと置き、

「惚れた！取りあえず顔にだけどね！中身は知らないからさ」

そう軽く応えて見せる。

「……………」ありがとう

ここでようやく出た、その言葉。

それは「ウチ来る？」という申し出に対してではなく、出会い頭に手を差し伸べてくれたことと、今回の手当てのこと。

「でも家に行くなんて、とんでもないですよ」

そう言つて、直樹はベンチから立ち上がり、歩き出す。

「夜はあの店やってるからさ！いつでもおいでよ！」

その声に直樹は立ち止まり、今度はちゃんと振り返って頭を下げた。

直樹はぼんやりと、ただそこに道があるというのみで歩を進める。

歩幅は妙に狭く、歩く速度も妙にスロウ。

自分に行くところがないことは、十分に知っていた。

手持ちのお金が2000円ほど。

これでは何もできない。

……………寝床の確保。

すでに野宿することは決めていた。

なるべく何をもちええないように、直樹は歩き続ける。

公園や広場を見つけては、ここがいいか？と自分に問うてみる。

しかし問うたところで、野宿などしたことのない自分にベストな寝床など分かるはずもなく、直樹の足は止まる事がない。

その内、陽が沈み始めた。

空腹を感じるが、自分の所持金を考えると、今日はもう食事を取るのはい慢することにした。

……空の模様から、大体7時くらいか。

そう思い、コンビニの前に座って休憩を取る。

歩いていてのもかなりエネルギーを消費するもんだ。かなり汗をかいた。

ベタベタする。

風呂に入りたいな…。

つらつらと思ったり、思わなかったり。

その場でブーツとしてしていると、いつの間にか辺りは真っ暗。

直樹は寝床を決めぬまま、ただポケットとそのコンビニの前に座り込んでいる。

食品を取り扱う店の前で、まるで物を乞うかのごとく座り込んでいる今の自分の姿を思い、まだ野宿をする覚悟のない自分を知る。

踏ん切りをつけないと。

そう考え、立ち上がった。

暗い夜道を5分ほど歩いたところに、広い公園のような場所を見つけた。

そこは、幼稚園の園庭。

直樹はその敷地に入り込み、早く起きて出て行けば平気だろうと滑り台に寝そべる。

……冬だったら凍死だな。

果たして、甘えて生きてきた自分が野宿なんてできるのか。そう思ったが、1時間もしないうちに直樹は眠ってしまった。

それからどのくらい時間が経ったのか。

眠っていた直樹には当然時間など計れない。

直樹は突然、額に何かがぶつかる痛みと衝撃で目を覚ました。起き上がると、まだ辺りは暗い。

隣を走る道路の街灯が零れるこの園庭。

そこに、自分を取り囲むように数人が立っている。

それを認識したと同時に、その影たちは有無を言わず、いきなり直樹に殴りかかってきた。

直樹は滑り台をずり落ち、その先の砂場に転がり落ちる。

「ハハツ！ラクラク！ホントにこんなんでもいいのか？」  
自分を殴る蹴るしている人間の声。

何が起こっているのか理解する前に気づいたのは、その声が昏間聞いたものと同じものだということ。

……アイツらか。

数人から代わる代わる殴打されながらも、直樹は落ち着き、そんな確認を自分の中でしている。

時間にして数十分。

やがて1人の男が声を上げた。

「殺すなって言われてるからな。これくらいでいいんじゃないか？」  
その言葉が号令のようだった。

散々暴力を振るっていた男たちは、その場からあつという間に走り去って行く。

その後姿をまたしてもぼんやりと見つめたまま、見送った直樹。

「……痛て」

自分の体に痛みを残して去って行く男たちが一体何者なのか。

男たちの話し声を聞いているにも関わらず、深く考えることをしな

い。

寄りかかるもののないこの現状、この凸凹。

表し難い、狭いとも広いとも言えぬこの心情。

直樹はここで泣きそうになる。

自分の境遇を8割とし、別れを1割、痛みを1割。

……別れは境遇の中に入ってるか。

だったら、9割。

自暴自棄の極み。

全ては自分のせい。

体に付いた砂を叩き落としながら、直樹はまたその場所から去ろうと立ち上がる。

寢床を変えれば何とかなるだろうという、安易な考えで。

人に関わってはいけない。

そう念じ、自分に言い聞かせたのは先ほど。

しかし、完全に自分の中でへし折れてしまったものがある。

信念や思想を誰かに話したわけではない。

だったら反故にしたって、誰も俺を問い詰めない。

それ以前に、俺に問い詰める人がいない。

俺の歩幅なんて、高が知れてるんだらう。

……釈迦の手の上か、アリンコの大冒険か。

直樹はとぼとぼと暗い道を歩く。

頭に霞がかつたままの直樹にとって、以前過ごした生活や感覚というものはいまだ思い出すことすらできない・しない、随分遠くの存在だった。

暗い中、昼間歩き続けた道を戻る。



そうして辿り着いたのは、自分を手当てしてくれたあの女の店。灯りの漏れる入口で少しの間立ち止まり、入るかどうか悩むフリだけしてみた。

……俺は知っている。

今日1日で、この日本だけで何百、何千という人が行方不明になっていることを。

その内の半数以上の人が、もうこの世にはいないということ。

その中には、人から強く必要とされている人間もいたであろうに。闇に乗じて消されていく命。

1日の内でこの世から何人も人が去っていつていることを、俺は知っている。

見たし、聞いたし、

……近い将来、俺もその闇に乗じた形で消える一点になるんだろう。

嫌だ。

粘りたい。

死ぬのは怖い。

一瞬、あの時のタケシの姿がフラッシュバックした。

もう思い出さないと決めていたあの頃、あの姿。

鮮明なその映像を脳裏へと見送り、直樹は一言、

「俺は生きることには必死だな。夢中だ。他が見えねえ」

ボソツとそう言い放ち、それを合図に扉を開けた。

それは小さなスナックだった。

客の数は一目で数えられるほど。

昼間手当てをしてくれたあの女は、直樹がドアを開けたと同時にこちらに気づいた。

「あれえ、お兄さん、来てくれたの!？」

商売とはいえ、歓迎ムードに縋りつきたくなる。

「あの……2000円くらいしかないんすけど、大丈夫ツスカね？」  
「大丈夫大丈夫！入って入って！！」

彼女は直樹の左腕を引っ張るようにして店内に招き入れた。  
カウンター席の一番端に座る直樹。

彼女はその直樹に向かい合う。

「何か飲むでしょ？何がいい？」

「……あ、俺、お茶でいいです」

「えー、お酒飲めない？」

「あ、ハイ。苦手です」

「じゃあウーロン茶でいいね？」

そう言つて、彼女は直樹の目の前に、グラスに入ったウーロン茶を差し出してくれた。

直樹はそれを受け取り、一気に喉に流し込む。

2人は向かい合いながらもしばらく会話もなく、直樹の耳には自然と他の客たちの話し声が聞こえてきた。

会社の上司の愚痴話。

不倫の話。

店の女の子を必死に口説いているオッサンの猫なで声。

それを何となく耳にしながら、直樹は何となく目の前の女に視線を流す。

確信としてこの店に来たのだが、考えてみればこの人に話せることなど何もない。

この状況は自分の中で、痛々しい以外の何物でもないと自覚している。

黙り込んでいる直樹に、やがて彼女が話しかけてきた。

「ねえお兄さん。お兄さんってハーフ？何か目が緑っぽくない？」

「……………」

「髪も何だか茶色っぽいしさあ。染めてる？」

「……………」

「まあいいけどさ。私ねえ、サトミって呼んで。呼び捨てでいいからさ」  
サトミと名乗った彼女に、直樹も自分の名を言おうと口を開きかける。

しかしその瞬間、いつか届いた絶縁状を思い出し『秋月』と名乗ることに躊躇した。

「……あ、直樹っていいいます。直樹です」

「直樹くんかあ。まだ若いよね。何歳？」

この後、直樹は彼女から質問攻めに遭う。

その最中に勧められた飲めない酒も飲んでしまい、少し酔ったような、全く酔っていないような、そんな不思議な気分になり始めた。

「この店って1人で始めたんですか？」

「まあね。私、早くに親元出たからね。いろいろ仕事して何とかお金貯めて、もう5年目かなあ」

「……何歳で親元出たんですか」

「ハハツ！親元出たっていうか家出というか追い出されたっていうか、そんな感じよ。家出てから一度も親に会ってない。10年……11年会ってないよ」

「あの、しん……心配じゃないですか？親のこと」

「うーん……心配っていえば心配だし。心配してんじゃないかなーって考えるのが心配かな」

この頃にはもう酔ったフリをしていた。

その方が何かと話がしやすい。

そして直樹はこの今日会ったばかりの女に、今までの自分の生い立ちを話し始めた。

そんなつもりなんて、……あつたんだか、なかつたんだか。

どれだけの時間、自分のことを話し続けたのか分からない。でも随分と長かった。

自分でもそう思う。

こんな経験は、これまでの人生数えるほどしかなかった。自分のことを自分で話す。

時間を使ってまで話をする。

そんな価値があるものだなんて、思っていなかった。……これまで。しかし直樹は、今日会ったばかりのこの人に話し続ける。

自分がつい先日まで刑務所に入っていたことすら話をした。

「さつきハーフかって聞かれたけど、分からんっていうのがほんとのところなんすよ。やっぱ自分は特別ですよねえ。……特別だわ。みんなと一緒にいいんですけどねえ。やっぱ特別だな、俺……」  
半分以上が自分に対する愚痴と化している。

酔ったフリをしながら話す一言一言が、自分に向けられる刃のように感じた。

白くなるほどにグラスを握り締める自分の手を、彼女が見つめている。

しばらくして、黙って話を聞いていた彼女は、直樹の愚痴に一つ返事をした。

「ふうん……そう。別にいいじゃん」

その声に直樹は顔を上げ、じつと彼女の目を見つめる。

「特別かあ。だったら私も特別ね。直樹くんさ、別にいいじゃん。五体満足で、働ける体があつて、生きてればさ。

生きてるってことは、それだけで明日、もしかしたらこの後いいことがあるかもしれないんだよ？それとね、この街にもあつちの街にもこつちの街にも、直樹くんの言う『特別』な人っていっぱいいるから、気にすんなよー」

「……………」

その言葉を聞いた瞬間、自分の顔が綻んだ気がした。

説得されるわけでもなく、罵倒されるわけでもなく、実に心地の良いもの。

ただ直樹がその感覚を覚えたのは、彼女の言葉の中の一部。  
五体満足なら稼げる、というその箇所。

五体満足な俺が今、稼ぎがないというのは、確実に俺は今カスであるということ。

いつの間にか、その考えに至っていた。

稼ぎ

お金

綻ぶ顔に反比例するように、以前持っていた感覚に少し近づく直樹。しかしまだそんな自分に気づかずにいるのが、本当のところ。

話はそれ以降、生い立ちなどを除いた方向で盛り上がっていく。

彼女が言う。

「ねえ直樹くん。行くトコないんでしょ？私ねえ、この2階に住んでんの。泊まっていく？」

直樹は彼女と最初に対面してから、一つ気づいたことがあった。その辺りを考慮し、泊めてもらうのに何の問題もないと考える。

問題があるとすれば、さっきまで考えていた『自分は人と関わってはいけない』というところ。

しかし野宿する勇気がない状態でいた直樹は、この引っ掛かりを即座に取り払う。

声を出さずに肯く直樹。

この日、直樹は彼女の部屋に泊まらせてもらうことにした。

案内された2階には部屋が2つあり、手前の部屋はテレビなどが置かれてるリビングになっている。

ふすまで仕切られたその奥は寝室。

「奥の部屋、自由に使っていいよ。私はこっちで寝るから。私は2時まで仕事があるから、先に寝ててくれていいからね」  
そう言い残し、サトミは下の店へと戻って行った。

去っていく足音が消えた後、直樹はベッドに座り一つ大きく息を吐

く。

……さすがにお腹が空いたとは言えなかったな。

十分に眠くはあったが、彼女の仕事が終わるまで待とうと決める。俺は恐らく、他の人に比べてかなりツイている方なんだろう。

捨てられるたびに、拾われる。

サトミさんが俺を拾ってくれたとは限らないが、今日は屋根の下で眠れそうだ。

……ツイている。

あの人の話していたことは一々説得力があった。

聞いていて感じるどころばかり。

俺の方向とは……

考え事の途中でベッドに横になり、直樹はその日、彼女が仕事を終えるのを待つことなく眠ってしまった。

目を覚ますと、もうすでにカーテンを透ける陽の光で部屋はぼんやりと明るかった。

あれ……何時だ？

枕元に置いてあった時計を見ると、時刻はもう昼前。

慌てて起き上がりふすまを開けると、そこにはサトミが座っていた。

「ごはん食べるでしょ？そこ座って」

見ると、小さなテーブルの上に2人分の食事が用意されている。

「……あ、すいません。寝すぎてしまって」

「ああ、いいよいよ。私も夜遅いからさ、起きるのはいつもこの時間。朝昼兼ねた食事よ。食べるでしょ？」

「あ、はい。ありがとう」

そう言っつて、直樹はサトミと向かい合うようにして座り、用意された食事を眺める。

染み渡るといつか、何と言っつか……とても嬉しい気分だった。

食事をしながらも、サトミは作夜と変わらないテンションで直樹に喋り続ける。

それに肯きながら聞いている直樹。

「ねえ直樹くん。このまま取りあえずウチにいたら？履歴書に住所書くんだったら、ここの住所書いていいよ」

それは願ってもない申し出だったが、

「イヤ、そこまで甘えられないですよ」

この返答を押しつけてくれるものとして、直樹は一応そう返事をする。

「いいって。気にしないで。私も一人でいるより楽しいしさ。じゃあ、えーっと……店手伝ってよ」

普段ならばこういう遣り取りがあつたとき2回までは断りを入れるのだが、この時直樹は2回目でサトミの申し出を聞き入れることにした。

そして少しではあるが、道が拓けて見えたような、そんな気がしていた。

食事を済ませると、直樹は自分から進んで食器を洗い始める。

「じゃあ私、下で店の用意してるわ。ゴメンね」

サトミはそう言って階下へと降りて行く。

今日早速就職活動をした方がいいのか、それとも今日はずっと彼女の店の手伝いをしていた方がいいのか、

どちらの方が体がいいのか、そんなことを考えながら、直樹は台所の片付けを済ませた。

就職活動するにも、履歴書が必要だ。

でも今、手元にその書類がない。

直樹は自分の所持金の2000円を思い出し、まずは履歴書を買わなければと思い立つ。

サトミのいる店へと入り、

「ちよつと履歴書を買に行ってください」  
と声を掛けた。

ブラブラと遊びに出ると思われたくない、その思いもあって目的を

告げる。

するとサトミが、

「あ、じゃあ一つお願いがあるんだけど。この前の道を真っ直ぐ行ったら　　っていうスーパーがあるんだけど、みりん買って来てくれるかな」

「あ、はい。分かりました」

直樹はそう返事をしてサトミの差し出す1000円を受け取り、店を出た。

少し歩いてから、直樹は気づく。

この辺の地理がよく分からない。

履歴書を買っにしても、本屋は……。

直樹は辺りをキョロキョロ見渡し、まずはスーパーに行き、サトミに頼まれたみりんを購入した。

そして自分の履歴書を買うために本屋を探す。

彼女の店は商店街から1〜2本裏道に入ったところ。

そこを目印に、直樹はうろろと店を探すが、目的の店は見付からない。

おかしいな……。

これだけ店があったら、本屋の1軒くらいあっても良さそうなのに。ビニール袋に入ったみりんを片手に、キョロキョロうろろ。

並んだ店の看板を見ながら歩く。

その時、直樹の後方から車の走ってくる音が聞こえてきた。

ザ　　ッ！という音。

結構なスピードでこちらに近づいてくる。

直樹は身の危険を感じたとは程遠い仕草で、何となく振り返る。

その瞬間、みりんを持っていた左手がその車と接触した。

パリンッ！！

ピンが割れる音と共に、直樹の体は回転するように道端に投げ出さ



れる。

車はそのままスピードを落とすことなく、遠ざかって行く。

「……………!?!」

痛みの前に呆気に取られ、走り去って行く車を呆然と眺めてしまった。

その車は、昨日自分を襲ったあの連中が乗っていたのと同じ車種。ナンバーまでは分からなかった。

車体が角を曲がり見えなくなった頃、ようやく直樹は左腕の痛みに気づき、腕を抱え込む。

「いつてエ…ッ」

道端にビニール袋からみりんの液体が流れ出しているのを見つめ、それを拾い上げた。

「くっそー…もう一回買わなきゃなあ、コレ…」

とにかく自分の腕よりも、このみりんは自分が弁償しなければならぬことに、まず頭が行った。

サトミに正規のお釣りを渡すために、自分が持っている2000円の中からもう一度みりんを買う。

……腹の奥の方で、火花が散ったような気がした。

さっき俺を轢いたヤツら、アレ絶対昨日のヤツらだよな。

何なんだ、アイツら。

直樹はこの日、面接などの手続きを止め、ずっとサトミの店を手伝っていた。

夜8時を過ぎるとちらほらと客が入り出し、店は賑わい始める。

そんな中、直樹は洗い物をしたりグラスを磨いたり。

以前片桐のところに行った時、こういう店の仕事もしていた。

癖とでも言うのだろうか。

ここはキャバクラじゃねえから、No.1とか、そんなんはねえんだろうな。

直樹は店内を見回し、店の女性たちを眺める。

……でもあの人がこのNo.1なんだろうな。見ればすぐに分かる。

こっちのあの人はサポートに徹してるな。

前から思ってたけど、あんな話が合うはずもねえオッサンと、よくあんなに長時間話してられるな。

ヤな客もいるだろうに。

直樹は手を動かしながら、考え続ける。

でもあの人たちは、一言喋れば金になる。

オッサンの手をそつと触れば、金になる。

引っ付かれるのを我慢して、金にする。

……昼間のみりん、俺が出さねえといけなかったか？

400円無くなっちゃった。

所持金の5分の1。

今後どうするにしても、今の俺には金がねえ。

直樹の心境が、押し固まっていたそれが、スピードを上げて解け始めた。

忘れてしまったかったことをうまく忘れられていたようなつもりでいたが、そこに詰め込んでいた物の中には忘れてはいけないこともいくつか混ざり合っていた。

直樹の思考は少し遡る。

刑務所の中でやたらと直樹に話しかけてくる、50歳くらいの人がいた。

泥棒の現行犯で逮捕され、今回3度目だと言っ彼。

彼は直樹にこう言った。

「私、今回の刑期が終わったら、出家しようかなあと思うとるんですわ。世の中世知辛いでしょ。金に執着するが故に泥棒みたいなモンしてもうて。もうお金みたいなモン、いらんですわ。あんなモンがあるから、私やこんなことになつとるんですよ。」

直樹はそれを聞き、返事に強く怒気を込めて彼に言い放った。

「金がいらない？じゃあ死ねば？」

その直樹の言葉に、彼は黙ったまま肩を震わせるほどに反応していた。

「人間……人間誰でもね、生まれてくるのにも金が必要なんだ。生きて行くに等しく、金っていうのは必要でしょ。我がの命の中に金銭が埋め込まれているって言うっても過言じゃない。

オッサン、金が要らねえんなら死ねよ。お前みたいなカスでもな、仕事すりゃ助かる人間がどこかにいんだよ。その助かった人がいる見返りに、給料って形でお前に返ってくんだよ。

そんなことも知らねえで、そんな年まで生きて来たのか。どれだけ

甘やかされていたんだ？何歳まで親の世話になった？

お前みたいなヤツは死ぬ。お前みたいなボンクラでもな、ここにいるだけで人が血イ汗流して稼いだ税金が使われてんだよ。そんなことも知らねえで言ってるのか。

出家？しなくていいよ。てめエみたいなクソは死ぬ！」

……金銭のお蔭で助かった命と、それがあっても助からなかった命を思い出した。

絶縁されていようが、他言しなければ俺の勝手。

母を、思い出した。

そして、直樹の起伏は更に解け出していく。

……昼間のアイツら、通帳持って行きやがったな。

しかし何なんだ？アイツら。

このまま死なない程度に俺をいたぶって、最後に殺す気か。

このタイミングで開けていく直樹の視界は、次々と以前を取り戻す。人間死ぬにしてもな、金にしないと。

俺の代わりに使ってくれ、そんな人間がいるんならソイツのためにいないんなら、何をしてでも生きてかねえと。

……刑務所で出会った、あの男。

今俺がこれを思い出したのは、たまたまなのか、怒りたいからなのか。

思い出しただけでイライラする。

「……………」

そして、

思い立つ。

呆けていた。

直樹はグラスを磨いていた手を止め、接客をしているサトミに向かって歩み寄る。

「あの、すみません。ちょっと出かけて来るんですけど、何か用事  
ありますか？」

その直樹の問いに、サトミは冷蔵庫から1本のビールを取り出し直  
樹に見せた。

「じゃあちよつと頼まれてくれる？さっきお客さんからね、今から  
行かつて電話があつただけけど、この人このビールしか飲まないの  
よ。ちよつと在庫が少ないからさ、買ってきてくれる？」

サトミはそう言つて自分の財布から2000円を取り出し、直樹に  
渡した。

「コンビニに置いてあるからさ。缶でもいいから」

それに肯き、直樹は店の裏へと回る。

裏口のドアをボタンと閉める音をさせ、直樹は脱いだ靴を手に足を  
忍ばせ2階に上がる。

そして暗い部屋の中、カーテンを閉めたまま窓を開け、じつと店の  
前の道路を見張るように眺め始めた。

直樹は身じろぎしないその体勢のまま、サトミの部屋に置いてある  
目覚まし時計を片手に時間を計る。

カーテンが自分のシルエツトを隠してくれているのを祈りながら、  
前の道路を見つめ続ける。

その道路は、隣接する店から漏れる明かりで人の顔が一つひとつ確  
認できるほどに明るい。

じつと。

ただ、じつと。

暗い部屋の中で、本当に自分の姿が隠れているのか疑いながら、直  
樹はじつと息を潜めている。

時間を計り始めて10分を過ぎた頃。

少し先の道路の端、1人の男が電柱に寄りかかるように、まるで身  
を隠すかのように周りを気にしながら立ち止まった。

……10分。

なるほどな。

様々な店の灯りに照らされたその顔は、昨日自分を襲った5人のうちの1人。

直樹はそれを確認するとすぐさまその場で靴を履き、そつとカーテンを開けて真下を見下ろす。

窓の下にはうまい具合に雨よけの庇が張り出しており、そのすぐ前にはブロック塀。

直樹は足が痛いのも忘れ、その窓から飛び出した。

庇と塀を使い、道路に飛び降りる。

着地したとき少し大きな音がしたが、その男はまだこちらに気づかない。

直樹はその場から一気にダッシュした。

その足音にこちらを振り向いた男。

驚いたときにはもう遅い。

直樹の蹴りがその男の顔面にまともに入った。

ガツッ!!

ブロック塀を背に立っていた男は、その勢いで塀に後頭部を打ち付ける。

ガコツ!という鈍い音と共に、男はその場にへたり込んだ。

しかし直樹はそれを許さない。

男の髪の毛を引っ掴み、

「ちょっと来てくれるか」

そう言つて、すぐ横に伸びていた細い路地裏に引き摺っていく。

一つ思い出し、

二つ思い起こし、

『感覚』を取り戻す。

男の体を道端に投げ捨てると同時に、直樹の声がその細い路地に木霊し始めた。

「もうちょっと我慢しろよー。オラよッ!!--」

ドスッ！！

「オラッ！！」

ドカッ！！

掛け声と共に繰り返す、直樹の蹴り。

横たわったままのその男はされるがまま、腹や顔面などを蹴り上げられ悶絶している。

体を丸め、衝撃に耐える男の髪の毛を掴み、引き摺り起こした。

「情緒不安定いうんやるか。なあ！いろんなモン忘れとった。こういう時はな、関西弁使った方がエエんや。忘れとったわ」

薄っすらと目を開け、直樹と視線を合わせる男。

その視線にすら苛立つ。

直樹の拳が男の鼻目掛けてめり込んだ。

パキンッ！！

同時にくの字になる男の顔をもう一度引っ張り起こし、

「だから思い出したんやつて。関西弁もな。俺、そう言われたらこういう人間になったんやつたわ。お前らと同じ、クズや」

直樹は掴んだ頭を叩き落とすように地面に倒し、その顔面を何度も何度も蹴り上げる。

ガツガツと。

そして男がまだ話せる程度でその暴行をやめ、顔面に向けて唾を吐きかけた。

足で男の体を引っ掛け、仰向けに転がし、更に靴の裏で顔をグイグイと踏みつける。

「お前ら、片桐のところの関係か」

返事のできない男は辛うじて左手を挙げ、その手を横に振った。

「あー、そっか。片桐も死んだんやつたな。ふーん……じゃあ東か。なあ、東やる？」

その問いに、男は反応を見せなかった。

顔面から足をどけ、直樹は身を屈めて男の胸倉を掴み、顔を引っ張り起こす。

「で？東に何て言われたんや」  
口から鼻から血を滴らせた男は恐れ戦き、途切れ途切れに話し始めた。

自分たち5人は東の遠縁に当たる者。

出所したばかりの直樹を精神的に追い詰めるよう、雇われたということ。

一週間続ける。飽きたら殺してもいいと、そう命じられていた、と「ふーん。まあ分かんなくてもいいな。こーんな小っちゃーいアリンコみたいな要素でも、アイツなら摘み取っていくやるな。お前、東と会ったことあるんか」

その直樹の問いに、引っ張り上げられるようにしてやっと立っていた男は「いいえ」と首を横に振る。

「お前から会ったこともない人間の命令で、よう人を殺しに行けるな。完全なクズやな。……ま、俺も一緒やけど」

東の考えは分かっている。

俺なんか殺しても1円にもならない。

コイツらにした命令の真意は『俺に逆らうな』  
そこに注目するべきだということを理解する。

「……心配せんでも、そこまでアホとちゃうよ」

一見落ち着いたかのように見えた直樹に対し、血まみれの男は

「……も、もう、よろしいですか…ッ…喋ってしまったから、俺も早く逃げないといけない…！逃がしてもらえますか…ッ」

直樹はその男の言葉に、自分も身を屈めて応えを返す。

「さつき教えたったやろ？俺も同じやって。お前らと一緒に、クズなんじゃ」

言つと同時にその男の額を鷲掴み、男が凭れ掛かっているブロック塀に何度も何度も後頭部を打ち付ける。

鈍く重い音が、繰り返し辺りに響き渡る。



それから今度は男の体を引つ繰り返し、首根っこを掴んで顔面を打ち付け始めた。

何度も何度も。

何度目かの衝撃で、その男の体は明らかに重くなった。

力を抜き、ズルズルと沈み込むその重みを利用し、直樹は男の顔面を扉に思いつきり擦りつける。

ジャリジャリと湿りと乾きの音をさせ、ブロックに血の帯をなすりつけながら男はその場に倒れ込んだ。

「ハア、ハアッ、ハアッ」

2人しか姿の見えない細い路地に、直樹の荒い吐息だけが響く。

「……俺は、お前が生きようが死のうが、興味ないわ」

力の入らない男の体を無理やり掴み上げ、ズルズルと引き摺って行った先には、ガードレール。

その向こうには小さなドブ川が流れている。

直樹は男を立たせ、ガードレールに向かって突き飛ばした。

フラフラと歩いていくその背に、仕上げとばかりに跳び蹴りを食らわせる。

ドカツ！！

男は身が流されるままにガードレールに詰まって足を止め、前めりによるけると頭から回転するようにドブ川へと捲くれ落ちた。

ガリガリゴリッ！！

バシャンッ！！！！

それを見下ろし、直樹は呟く。

「せやから、生きるか死ぬか、自分で決める」

意外と冷静に動いている。

今、周りで騒がれ邪魔が入るのは、自分にとって大変不都合なこと。殴る蹴るの暴行の最中、冷静に周りを見回し、人が見ていないかを気にしていた。

直樹は先ほどあの男に暴行した場所まで戻る。

細い路地に面した民家のブロック塀。

それは作りかけのもので、まだ積み上げられていないブロックがいくつか高く並べられている。

道端に崩れてしまったそれを元の位置に戻す。

塀の端に置いてあったあんどん仕立ての朝顔の鉢も倒れてしまっていたが、それは土が少々零れた程度で支柱は無事。

それもきちんと元の場所に戻す。

街灯の下、その作業を黙々とやり終えた直樹の目がふとあるものを捉えた。

電柱の足元に落ちている、片方だけの靴下。

何でこんなトコに…？

それから何気なく視線を動かした、その向こうにあったもの。

丸い形に金色の文字の 『四角形』

直樹は小さなそれを拾い上げ、街灯に透かして見た。

この場所は、昨日アイツらにカバンの中身をブチまけられた場所。

俺は一晚、ほぼ1日、このキーホルダーを外に放置していた。

……気づけないでいた。

体の中心で、何かがうねるように蠢いた。

直樹はそれを握り締め、放られていた自分の靴下に目を向けることなくサトミの店へと戻って行く。

そしてそのまま店の方には行かず、裏口から2階へと上がった。

部屋の端に置いてあったカバンの前で背中を丸め、正座する。

覗き込むようにカバンの口を開けて、キーホルダーを奥に仕舞う。

代わりに、同じく奥の方に仕舞い込んでいたタイガーマスクを取り上げた。

その表面には、靴の裏の模様の土がこびりついている。

……この2つが、これまでそれほど大事なものだと思ったことはなかった。

しかし以前の自分を知るたった2つのものだと、この時ばかりは執着してしまっ。

乾いた砂をその場で払い、直樹は思考を巡らせる。

……やっぱり足りんかった。

怒気が

力が

そんな風に自分を振り返った。

トグロを巻いていた直樹のつねりは、待ち焦がれていたようにとどめを受ける。

黒の混じった、それ。

「直樹くん？帰ったの？」

1階からサトミの声がする。

直樹が階段を昇る音を聞き、帰宅を知ったのだろう。

「どうしたの？」

声と共に、足音が近づいてくる。

直樹はそれを聞きながら、忘れていた思考の仕方を順に辿る。

まだまだ足りんのなら、自分で補充するしかない。

技などは覚えている。

忘れていない。

……さーて、と。

直樹はタイガーマスクをカバンに詰め、静かに立ち上がった。

「直樹くん？」

階段を昇る音をさせて近づいてくる、サトミの声。

足音はどんどん、引き戸の入口に向かって大きくなってくる。

直樹は足音を忍ばせ、戸の開閉口の反対側に隠れるように身を潜めた。

「直樹くん？」

引き戸を開けて、サトミが顔だけを部屋の中に覗かせる。

瞬間、直樹は飛びつくようにしてサトミに掴みかかり、その首を脇で抱え込んで絞め上げた。

有無を言わせず、そのままサトミを奥の部屋へと引きずり込み、べ

ツドの上に押し倒す。

勢い良く乗り上げた2人分の体重でベッドのスプリングが悲鳴を上げ、2つの体は僅かにバウンドして止まる。

状況が分からず呆然としたままのサトミは、まだ抵抗を始めない。直樹は自分を見上げるサトミの鼻と口を左手で握り込み、ベッドに押し付けた。

「……まあ、どう考えてもおかしいわな」

低いその声を聞き、明らかにサトミの顔色が変わった。

荒い呼吸が直樹の手の平に当たる。

「規則正しい生活で、必要なことまで忘れて帰ったよ。お前しかおらんわなあ。で？どうする？」

それを聞いたサトミは途端に手足をバタつかせ、暴れ始めた。

直樹は顔面を押さえつける左手に、更に力を込める。

「動くな。このまま首へし折るぞ」

「……ッ！！」

途端にポロポロと涙を流すサトミに、直樹は使う気遣いなどない。

「俺らの世界よう、証拠なんかいらへんやん。知つとるやろ？裏で生きとるんやったらよう」

抵抗を止めたサトミの体から、力が抜ける。

と同時に、直樹は空いていた右手でおもむろにサトミの股間をギュッと鷲掴んだ。

ビクツと体を揺らしたサトミに対し、薄っすら笑みを浮かべて直樹は続ける。

「やつぱり男か。最初に会ったときから気づいっとたよ。工事中つてところか。こっから先、男同士の話で行った方がエエか。男と女の話で行った方が進めやすいか。どっちや」

鼻と口を押さえられ返事も出来ないサトミを、直樹は構わない。

「お前に決めさせてやるよ。今すぐこの場で俺に殺されるか。まあ数秒でラクに逝かしたるよ。もう一つ、今月から毎月俺に100万持ってくる犬になるか。好きな方を選べ」

ここでサトミは一度「んんん　　ッ！」と声を上げた。

「俺な、お前、見込みあると思うてるんよ。経緯はどうであれ、あの状況の俺にまずゼニ金の話したわな。お前の言う通りや。世の中大概のことはゼニで何とかなる。俺はソレを痛感しとったし、ソレに対して夢中だったはずなんや。お前が思い出させてくれた。見込みがあると思うてるんよ。

ただ、お前の命には俺は興味ないからな。この場で死ぬか、俺にゼニ運んでくるか、好きな方を選べ」

その直樹の言葉にサトミは首を縦に振り、肯くように直樹を見つめた。

直樹は馬乗りを解くことなく、顔面を押さえつけている手のみを離す。

サトミは流れた涙を拭うこともせず、時折声を詰まらせながらこれまでの経緯を話し始めた。

今回直樹を襲ったのは、ヤ　ザからの命令であること。

直樹が出所したとき、すでにあの5人のうちの1人が直樹のことを見張っていた。

各駅停車の新幹線や電車での移動も、直樹の後をずっと尾けていた。もしも直樹が東京に姿を見せない場合は、監禁して連れてくる予定だったと言う。

「じゃあ俺はお前らにとっっちゃホンマに都合良く、しかもこの店の近くまで1人で来たっちゅーことか」

直樹の問いに、サトミは「はい」と返事をした。

1から10までマヌケであり、偶然にしてはと思うところまで随分と時間のかかった自分の不様さと、自らがコイツらに与えた良き偶然に舌打ちする。

サトミは東という名は知らないらしい。

ただあの5人に協力する関係になったと。

話を聞き終えた直樹は、静かにサトミを見下ろした。

「まあしょうがないっつーか生き方っつーか。今後のこと考えたらよ、このままではおられへんのよ」

そして、そつとサトミの首に手を掛ける。

「で、さっきの問いやがどつちを選ぶ？死んどくか。俺はかめへんぞ」

瞬間、当然サトミの顔色は変わる。

まだ声を出せる程度でしか力を込めていない今のこのタイミングを見逃すことなく、サトミは即座に返事をした。

「あなたについて行きます」

それを聞き、直樹はサトミの上から体を退ける。

続いてサトミがゆっくりと起き上がった。

「今、ここにある現金を全部出してもらおうか」

「え……そんなにたくさんないよ」

直樹はサトミに顔を近づけ、真正面から見据える。

「お前らみたいな裏の人間が現金持っていないわけないやろ。ひよつとしてお前、まだ俺のことナメてんのか」

その言葉に顔を強張らせながら、サトミは黙って部屋の何箇所かのタンスの引き出しと押入れの中を弄り、お金を集め始めた。

ある程度の札束になったそれを、直樹に手渡す。

「これで全部です」

直樹はその札束を奪い取るように握り締め、ズボンのポケットの中に突っ込んだ。

それから、サトミの腰を強く抱き寄せ、

「エエ仕事や。まずは今月分やな」

そう言い、更にサトミを抱き寄せると、髪をまさぐりながらその唇に自分のそれを押し付けた。

1分ほどの長い口付けの後、直樹は変わらぬ至近距離から、

「お前くらいになると男とか女とか関係ないな。どうする？これから男同士の付き合いにするか、男と女の付き合いにするか。好きな方を選ばせたる」

サトミは触れそうなほどの直樹の目をじっと見つめ、やがて口を開いた。

「……どっちでもいいよ。あなたの言うがままにする」  
そう呟いた瞳には明らかな、色。

サトミの恐怖心と女心に付け込み、直樹は彼女の心情を混乱させ取り込むことに成功する。

その後、サトミからあの5人のアジトを聞き出したが、その頃には彼女はもう何の抵抗もなく直樹の問い全てに素直に答えていた。

#### 現状とその打破。

直樹の頭は以前と同じように間断なく、巡る。

「ちよつと出かけてくるから、お前はそこを一步も動くな。そこへ座つとれ。エエな？次、何かお前が行動するときは俺の命令下の元に分かるな？」

その場で正座し、コクリと肯くサトミ。

「サトミ、1時間もしたら帰って来るから。待ってってな？」

初めて名を呼んだその声に、彼女は今度は直樹の方を向き、一つ肯いた。

直樹は再び部屋を出る。

店の裏口から外に出て、大きな通りの方へと向かって歩き出す。

捕まえたタクシーの運転手の、もちろん初めて会うその彼の「暑いですねえ」というお決まりの挨拶に直樹は応える。

「そうですねえ。タクシーはクーラー効いとして気持ちエエですわ」  
今、自分は何もしてませんよ。

あくまで冷静ですよ。

そんな意味を込めて。

このままアジトに乗り込むほどアホではない。

直樹はその用意のために、まずは行くべき場所があった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2369ba/>

---

正道の系譜

2012年1月14日12時52分発行